

妖怪にまで零落した女神と契約して、異世界へ布教に行く話【完】

ノイラーテム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪にまで零落した女神と契約して異世界に信仰を広めに来たものの、成功よりも失敗の方が多かった。

僕がその過程で学習した事は、自分と成果の両方を守り切れる拠点が無ければ、何も為せない事をようやく悟ったのだ。

「ねえ、僕らでここにお城を建てない？」

能力の成長が頭打ちになった頃に、仲間たちへ提案することにした。

魔物退治は冒険者……というか傭兵にとって飯のタネ。

南領エリアでの何度目かの魔物退治で、僕はかねてからの計画を進めた。

目次

第一部

そうだ、城主になろう！

城主に成りたい理由

小神の使徒

最低限の訓練と備え

被害を出さない為の戦

会见相手の変更

文明開化の音がする

荘園を手に入れ、荘園に手を入れる

洞府を開く為に

洞府

とある洞府の銀天君

オオトカゲの大捕り物

降臨

第二部

やがて金字塔へと至る再点火

成形

今後を見据えて

伯爵家のお家事情

目下の目標

北進

苦い酒宴

一難去って、また一難

避けられない難題

139 132 126 120 114 106 99 93 87 80 72 65 58 51 44 38 31 25 18 13 8 1

奇妙な解決の仕方	145
作戦の確立	150
緋雁原攻略戦：前編	156
緋雁原攻略戦：後編	164
帰還	171
一年目の終わり	179
外伝：転生前後	185
第三部	
裾野か、頂きか	191
技術と知識の精練	196
新しい目標に向けて	202
面倒な問題	209
通行権の為の贈り物	217
アポイントメント	223
蜂対策にもタワーディフェンスを！	229
ちよつとした災難	235
ご長男と中央の料理	240
未来の義兄弟と行く	246
紅来川の街にて	251
紅包の来訪	258
水棲種族との邂逅	265
島へ	271
ジャイアントビー対処計画	277
駆除作戦の開始	284
ジャイアント・ビーの駆逐	291

人虎と社会コミュニティ論

とある些細な公共事業

密室での解決

第四部

新年度の開始

捨捨選択の要

水利の推理

求めるモノ

フェーデ

勝算

予期せぬ仲裁者

私闘の始まりと、私闘の終わりと

決着とその向こう側

まずは治水から

河川協同組合

色々な作戦指導

第五部

北上作戦へと至る前に

参謀旅行

南方鎮台とそのエリア

中央南群と、その歴史

インフラの見積もりと大商人

今後の予定

路線変更

目の前の不満と、最終目的による鎮静作用

442 437 432 427 421 416 411 404 398 393 388 380 370 362 356 348 342 336 329 322 315 307 299

	パラダイムシフト	447
	作戦立案とその始動	454
	勝つよりも先に未来の布石を	461
	魂鎮めの祀り	466
	解放戦の終了	472
	戦後処理	477
第六章		
	やる事と情報のトリアージ	483
	収穫祭に向けて	490
	賑やかな収穫祭	496
	来年度の目標	503
	架橋の実験：前編	509
	架橋の実験：後編	514
	魔女狩り	520
	必要なのは消火方法ではなく、防火対策	525
	嵌め手と対抗策	531
	同行者	537
	策士は策に溺れ、時に泳ぎ切るもの	544
	南商豪という男	552
	西領の公子さま	558
	無難な計画よりも、夢のある計画を	564
	共生と共闘と	569
	来年に向けて	575
第七章		
	新年と戦闘準備の幕開け	582

西よりの使者

587

オーデー

593

偽装情報

599

大公の思惑と、対抗する思惑

605

雨天の進軍

612

上陸作戦は将棋のように

617

魅了する魔物：前編

622

魅了する魔物：後編

629

後方拠点の設営

635

大公の謀略

641

人を呪わば穴二つ

648

来たるべき提携

654

覚悟を決める時

660

出兵計画の終了

665

第八部

西領上陸戦

670

南蜃砂の戦い：前編

676

南蜃砂の戦い：後編

682

速攻か、遅攻か

689

謀略における巴戦

694

そして最終局面へ

701

戦争は終りぬ

706

第九部

訴状のイニシアティブ

711

最期の手札

717

勝負のコール！

大団円

やがて、おとぎ話になる

第一部

そうだ、城主になろう！

「と言う訳で協力してくれないかな？ みんなが協力してくればこの辺の魔物くらいは何とかかなりそうなんだよね」

この世界に転生し、成功と失敗を繰り返して故郷から逃げ出すように傭兵になった。

できれば冒険者がよかったのだけれど、まだないみたいなので仕方がない。

そして腕を磨きつつ、神さまとの契約通り布教するには何が必要かを考えた。

その果てに実感したのが、拠点の重要性だった。

何しろ力が無ければ追い出されたり、成果を奪われることはよくあったからね。

「なんじやい。突然に」

「突然じゃないさ。前から計画してたし、何人かにはその頃から声を掛けてるよ」

前からの計画だが今回決断したのは理由がある。

冒険者ギルドなんかないので大規模な依頼がある時は、口入れ屋の仲介で幾つかのチームが手を組んで魔物退治を行うのが定例だ。目を付けていた場所の一つが依頼に含まれていた事と、何より手を組みたいメンバーが揃っていた事が大きい。

いま疑問の声を上げてるドワーフなどは特にその一人だ。

この地方出身者であり職人でもあるので、彼を味方に出来れば心強い。

「そういうえばそんな話を聞いた覚えもあるわね。てつきり夢の話かと思っただけど」

「夢は酷いな。現実味を帯びた計画さ」

この女エルフも狙っていたメンバーの一人だ。

やはりこちらの出身者で森にとっても詳しい。僕も郷里では山暮ら

しの田舎者であったが、彼女の知識と技術は比較にならない。

現地の知識込みでは是非とも味方にしたかった内の一人だ。

とはいえ都合よく揃うなんてチャンスは今までなく先延ばしにしていた。その為に臨時にパーティを組むことがあっても、今日まで決行の日が長引いたわけである。もし二人とも難色を示すならば次の機会を待つか、まったく別の場所を狙う事になるだろう。

「とりあえず領主からは前々から話を持ち掛けられてるんだ。今みたくに大規模な魔物退治の度に金を払いたくないから、この辺の荘園主にならないかってね」

「呆れた。あの話を信じたの？ それに、ここにどれだけ魔物が流れ込むと思ってるのよ」

貴族の言う事を真に受けるのは間違っているのは確かだ。

実にもっともな話なので、ソレを何とかする為にも目の前の二人に『協力する』と口にしてもらわなければならない。

何気に時間を掛けて候補地を調べた後、ここに絞った理由は幾つかある。

それがこの二人の協力を得られれば何とかかなりそうな事と、何より魔物からの防衛に関して一計を案じられる事が大きかった。

「魔物に関して言えば『だからお城を建てよう』って話さ。この辺に限らず魔物に関しちや僕はかなり詳しいからね」

「そりやあまあ……そうだがな。そこんところはワシらも認めとる。だが、それとこれとは別だぞ？」

この世界では才能に任せて魔物退治をする人間の方が圧倒的に多い。

転生者である僕と違って、一人一人に神の祝福がある。この祝福がそこそこ強い上に、僕では無理な上級魔法なんかも学べば何とか覚えられるのは羨ましい。

それだけに相手の魔物をちゃんと調査し、メタを張って魔物退治する僕のような人間は割りと少なかったのだ。知識だけなら僕より上の連中ですら大抵の敵は上級魔法で片付けられるため、雑魚退治に作戦を組み上げようとはあまり思わないのも影響しているだろう。

「まあまあ話は聞いてよ。損はさせないからさ。僕が嘘を吐いたことではないでしょ？」

「そんな奴ならつるんじゃおらんさ。だが儲け話で釣られると思うなよ。こればかりは酒じや動かんぞ」

僕は神様の信仰を広めなきゃならないので嘘は吐かない。

ついでに言うのと弱いから大言壮語を吐くことも無い。出来ることを増やして、その出来る範囲で誠実に物事を進めるだけだ。

まあ……同じ郷里から出てきた幼馴染が、僕の言う事に大抵賛成してくれるので二票分確保しているというのも大きいのは確かだ。傭兵たちは荒くればかりで気の合う合わないの差は大きいし、その場限りのことを平気で言う奴も多い。要するに僕は嘘を吐かないことで信用を確保していたとも言えるのだが。

「損はさせないって言ってるけど、私たちが領くほどの利益って何よ？」

「仮に僕がこの辺りの城主というか荘園主になったら、それぞれの一族と角付き合わせる事になるでしょ？ その取り分……というかうちの領民が開拓する権利を売るよ」

「なに？」

当たり前と言えば当たり前前の話なので、きちんと説明しておくことにする。

これは将来の禍根を今の内から絶つという事であり、ドワーフとエルフを味方につけるために必要な事だ。

ちなみにこの二人は名うての傭兵だが、それぞれの種族を守るために傭兵になつている。外に出て経験を積み、いろんな視点で魔物から種族を守る為だ。もちろん発言権と名声があるのは確認している。

「このまま魔物から荘園を取り戻したらさ、そしたら絶対に開拓地争いの問題が出るよね？ そこで人間の取り分を『ドワーフに対して、エルフの了承付き』で売る。逆に『エルフに対して、ドワーフの了承付き』で売っても良いと考えてる」

条件を決める事に他の種族が立ち会おうというのがミソだ。

この世界ではドワーフとエルフは別に仲が悪いわけでは無いが、生

活圏が被るとどうしても角突き合わせていがみ合う事がある。

そこで人間が得る筈の取り分を、エルフの領域ではエルフに売り、ドワーフの領域ではドワーフに売る。その取り決めにお互いの種族が意見を出せるという事は、譲歩の仲介を僕が行えるという事である。少し違うかもしれないが大岡裁きの『三方一両損』に似ているだろうか？

「判らん。確かにワシらが口を聞けば族長も領くかもしれない。だが、それで一体おヌシに何の利益が残る？」

「そうよ。貴方の取り分が無いと信用できないわ。これは未来に関わる話だし、今までの信用があるからってのは無しね」

案の定、二人はこの話に喰い付いてきた。

二人は族長でこそないものの、相談役の一人くらいの立場にはある。この辺りの魔物は今の処退治しきれてないが、いつか退治して人間と隣り合わせになるのは自覚していただろう。

そこへ今回の話を、それなりに信用していた僕が持つて来たという訳だ。完全に信用するかは別として、ヨタ話ではなく真面目に検討する余地があると思ったのだろう。

「まず城主に成れるよね？ 前に話したと思うけど、僕らは故郷から逃げ出した身だからね。人に命令する気はないけど、それなりの地位と拠点は欲しい」

「そこは認めてあげるわ。『女を盗られるくらいなら！』って逃げ出して来たんでしょ」

え？ そんな話したっけ？ 半分くらい事実ではあるけれど……。

と思つて幼馴染の方を向くと、ポーカーフェイスを浮かべて口笛を吹いているのが見えた。

あいつ……外堀を固めてきやがった!?

そりゃ嫌いじゃないしむしろ好きだけど、いつの間にかそんな話をしたんだ？

「そ、それはともかくさ。まずはここを拠点にできればひとまず安心できる。次にお互いの寿命の差を考えて欲しいな」

「寿命じゃと？」

この世界のドワーフとエルフは無限でこそないが寿命は長い。

ドワーフで人間の二倍、エルフで三倍以上くらいに見積もってもらえば分かり易いだろうか。出生率の差と幼児の死亡率があるので、種族的には人間の方が栄えているというのはこの世界でも同じであるのだが。

「魔物討伐して開墾初めて、余裕ができるのは何時の話さ？ それこそ僕らの子供か孫のころだよ。でもこの話がまとまれば別だ、できるだけ次世代に禍根を残さない方法で生活を楽にしていけばいい」
ハツキリと言ってしまおう。

この世界の生活環境はよろしくない。転生前の現代社会と比べて酷いし、それはそれとして職人たちの新技術アレルギーは似たようなものだ。

ゆえに自分の領地でも無ければ好き勝手に開発することも出来ない。

そして現代社会めいた生活を目指すならば、余計な開拓とかはすべてではないのだ。先行きが明るい程度、閉塞感がない程度に開拓の余地が残って居れば良いとも言える。そもそも僕の目的は女神さまの信仰なので土地は二の次だと言っても良い。

「どうだい？ 人間の取り分になるはずの薪や鉱石があれば、好きに鍛冶ができるんじゃない？ 何だったら理由を付けて城の一角にあんた専用の工房を設置してもいい」

「……こいつは痛い所を突いてきおった。こいつが居る時を狙ったのはその為か」

前からこのドワーフの愚痴に付き合っただけ話を聞いていたのだ。

エルフとの諍いを起こさないために、必要以上の薪を採ることができない。鉱石も山やら地面を無闇に掘り返すと、やはり土壌が荒れるから限界がある。そして新技術にアレルギーがあるのはドワーフの職人も同じであった。

要するに旅で見た他種族の技術を取り入れ、色々試してみたいこのドワーフには魅力的であるはずなのだ。

「そして何処の木ならいいかって、私たちが決める訳ね？」

「そうそう。ついでに言うと、鉱山から出た汚水の処理とかも僕らが仲介するよ。それと確か……その手の話はエルフでもあったはずだよね?」

真面目な話、エルフが完全に環境的なクリーンであるわけがない。森を大事にしているから分かり易いだけで、似たような問題はエルフにも存在している。もちろんドワーフとの諍いを避けて目に見える形ではやってないだけだ。その事を人間がイメージしてないだけで、エルフとドワーフは互いに監視し合っていた。

そしてだからこそ僕が人間の取り分を渡し、仲介することでお互いの妥協線を利益が出る方向に書き換える事が可能なのだ。

「ちゃんと確認しておかないと何だから、念のために聞いておくわね。口約束じゃ何の意味も無いし、かといってあんたの子供に泣きつかれても困るわよ?」

「そりゃあそうじやのう。信任状を発行するなら、未来の取り分を売ってくれる分はまあ良しとしよう。ソレを返せと言われても困るぞ? 分配に馴れた後で元に戻すのは今よりもよほど難しい」

二人のツツコミも当然だった。

だがこのツツコミは前向きになった証拠でもある。ここでちゃんとした方法を示せば、二人は協力してくれる可能性はかなり高いだろう。

そして、この地を選んだ理由はその辺もあったのだ。

何と言うか、先ほどからドワーフとエルフの諍いの話をしているのに、人間の話をしていないのに気が付いただろうか? そう、今の人間の安全圏はかなり後退しているのである。

「別にこっち側の森や山にだけ開墾する必要はないだろ? もし余裕ができたら反対側の領地を復興させに行くよ。持ち主の一族が文句言ったら精々高く売りつけてやるね」

この辺りの領地は元も数名の領主が居た。

だが魔物の侵攻で周辺が荒らされた時、領主の一族が全滅した所もあれば、王都方面へ逃げ出した貴族も居る。

それらの領地は人が居ない訳でもないが、どこも荒れ放題だ。

だからこそ領主は魔物退治の費用を抑えるために、僕のような傭兵数名に声を掛け、荘園主にならないかとリクルートしていたのである。

そんなわけで、最初から荘園主数枠分を頂くつもりだった。

開拓するのは森側だとばかり思っているだろうが、魔物だらけの場所を僕が回収して復興させても問題ないはずだ。もちろん二人に説明している様に、最終的に利益が出るなら元の持ち主に売っても良い。どうせ欲しいのはより良い生活でしかないのだから。

城主に成りたい理由

● 城主に成りたい理由はより良い生活と言うばかりだけでもない。契約した神様の布教を行う為には守り易い場所と、敵対しない宗教との共存が不可欠であった。

最初は独力で頑張るつもりだったのだが、今回の成功を得るために妥協したとも言える。

「夢としては魅力的な話だったわ。で、最初の質問に戻るんだけど領主が取り上げてご破算ってのはやめて欲しい所ね」

「そうじゃのう。下の者がやりました、上は知りませんと言うのは人間の得意技じゃからの」

エルフやドワーフからみれば信じられない話だった。

外に出る者はある程度の実力と発言力を兼ね備える者が多く、村人ですら意識の共有も行われているので極端な意見の相違はない。

対して人間はその逆であり、意見の相違があるどころか……立場が違うから約束が無効であるとか平然とやってのけるのだ。

「その辺はコネのある保証人を立てるから大丈夫。うちの隊に司祭が居るだろ？ あいつ貴族のボンボンでさ、これが重要なんだけど伝道師なんだよね。まとめて保障の希望者を受け入れるって」

本当は現地宗教の関係者は引つ張り込みたくなかった。

しかし貴族に物を聞かせるには、現地宗教以上の権力集団はない。その中でも他宗教に寛容だった事と、今回の保証をさせる意味で妥協することになったのだ。土地の方は時間を掛けて複数の候補を探せたが、コネばかりはどうしようもないのだから。

それだけに信用力は抜群だ。何しろその保証の元に契約書を作ったのに、約束を反故することは宗教全体を敵に回すことを意味する。もちろん上層部と取引することもできるだろうが、宗教にも派閥があるから多重の保証になるのだ。

「ふむ。そういう事ならまあええじゃろ。精々証書をばらまいといってくれ。……最後の質問じゃが魔物にどうやって対処する？」

証書という物は偽物だと言われたら意味がない。

その為に印章だとか花押という物があるのだが、それだって誤魔化しようはある。だからこそ同じ物を複数用意して、多方で分散保管するという手法があった。

そういった手段を教えると同時に、もつとも重要な質問が来る。

今の計画はあくまでこの地を発展させるのが大前提なのだ。溢れる魔物に住民も城主も討ち取られたでは笑い話にしかならなかった。そうでなくとも数年どころか数十年掛かって魔物を退治するのでは約束した人物が死んでしまう可能性もあるのだから。

「んー。こいつは計画の肝だから領主に持ち込まれても困るんだけど……まあ二人だから大丈夫か。他所で話をしないでよね」

「当たり前でしょ。あんたならまだしも良く分からない連中を信用する気にはなれないわ」

二人ともツツコミは辛辣だが話を本気で聞いているのは判る。

悪い話ではないと納得し、乗る意味があると理解しているからこそ手が抜けないのだ。

そしてこんな二人だからこそ、仲間として引き込む意味があるのだろう。

「いいかい？ この地方に入り込んでる無数の魔物って実はパターンがあるんだ。僕より年上にいう事じゃないけどね」

「年上は余計よ。……穀倉地帯から流れて来るアンデッドが何種類かよね」

中央から西側に広がる穀倉地帯がアンデッドによつて分断されている。

この話を聞いた時点で国が傾いている理由もお察しであろう。そんな状態で食事情が良いはずもなく、山から都会に出た後はむしろ食事が貧しくなったほどだ。

ちなみに魔物はもう一種、獣タイプも居るのだがエルフはまるで数に入れていない。普通の獣よりも強い程度であることもあり、恐ろしいとも思っていないのだろう。

「うん。他にも居るには居るけど害と言えるのはアンデッドだよ。で

もこいつらは数が問題であって、一部を除けばそれほど強くは無いんだよね」

「その数が問題なんじゃろ？ 幾らでも古戦場から湧いて出よる」
かつてこの国では穀倉地帯を巡って何度も戦いが起きた。

魔王に率いられた魔物たちの侵攻があった後、その古戦場を放置するはずがない。かくして邪悪な儀式が実行され、古戦場からはアンデッドがワラワラと湧き出て来る羽目になったという事である。

そして魔王を周辺諸国と共に排除したもののこの国はそれ以来、衰退の一途を辿っている。その一端が無限湧きするアンデッドのせいなのは間違いないだろう。

「だからさ、全部いっぺんに対処するんじゃないんだよ。頭が悪いんだから流れを誘導してそいつらは食い止める。一足先に壁を抜けて来る連中を片付ける。それだけの事だね」

「あ……」

考え方の差だが、無限湧きする敵と正面から戦えと言う方が無理だ。

領主たちが穀倉地帯のアンデッドを掃討しようとしても、途中からまた出て来るのだからどうしようもない。なので自分の領土にやって来る大部分だけを討伐して、あとは僕らのような傭兵が対処することになっているという訳だ。

そんな感じで分類しているのである。

歩いてくるゾンビやスケルトンの流れを障害物で誘導し、先にゴーストやレイスを始末してしまえば楽なのだ。残った歩兵組は壁にも籠ってゆつくりと片付ければ済むのだから。

「実際に中央の城塞都市はそんな感じで守ってるでしょ？ どうしてもっと守り易いこの辺でやったら駄目なのさ」

「そりゃあ……」

「……そうなんだけどね」

コロンブスの卵と言う奴だろうか？

この辺は森や山々で平地は寸断されており、一部が盆地として耕作地になってる程度だ。エルフやドワーフだけに森や木々を壁や掘で

閉鎖するという考えが成立し難いのかも。異世界ファンタジーの小説では躊躇しない種族も居るが、それはそのストーリーが人間並みに追い詰められているから、逆にこの世界では人間ほどに追い詰められていない事が影響しているのだろう。

という訳で魔物の種別ごとに各個撃破。

全体方針としては敵軍を誘導して待ち構える和風の城建築になるだろうか？ 平和に成ったら外苑に向けて、アンデッドの進軍ルートを逆様に辿って壁やら堀を設置しければいい。

(そこまでやってようやく神様の布教を再開できるのかもね。特殊能力どころか助言もいただけない日々は早く卒業したいよ)

だいたい僕が祝福無しで上級魔法も覚えられないのは、純粹に信仰が弱いせいである。

仮に転生したのに『生前の記憶を保っている』事を祝福だと諦めるとしよう。しかし上級魔法が覚えられないのは非常に困る。

故郷を追い出される前はまだマシだったので、せめてそこまでは早期に回復したいところだ。

「話……終わった？」

「終わった終った。全部上手く行ったらだけど、あの二人も協力してくれるってさ」

雰囲気を感じて幼馴染が声を掛けて来る。

こいつは基本考える事が嫌いで、難しいな話題は全て僕に一任している。頭が悪いわけでは無くズボラなだけなので、さつきみたいに外堀を埋めて来るだけの厄介さはあった。

ちよこんと後ろに座って背中越しに会話。

そんな状況だけでうれしく成れるのだから、こいつのことを僕は好きなのは間違いない。できればこいつもズボラだから近くに居る僕を選んだのではなくて、好きだから僕と一緒に居るのだと思って欲しくはあった。

「お風呂……早く造れるといいね、双羽」

「双葉は風呂好きだもんな。なんでこっちは温泉ないのかね」

僕らの住んでいた北領はほとんど山だったが、それだけに温泉が

あつた。

元日本人の転生者としてはその点はとてもありがたかつた。混浴の文化とか大人が子供が成人する時にグフフ……な教えをする文化もあつたので、もう数年地元で過ごさせていたらブラボーだと評価していたかもしれない。

良い機会なので、この国の名前の付け方や名乗り方を説明しておく。

僕らを例にするとまず出身地の北領。次に苗字は出身地のランドマークから取るので、銀嶺山脈から『銀』だ。そこから派生する山や川の名前がそのまま村の名前でミドルネームで、うちだと双子山なので『双』となる。そこに先祖から連なる家業にちなんだ名前を付けるのが定番。僕なら狩人の家系なので『羽』となるから、北領銀嶺群は双山村の人、銀双羽である。幼馴染の方は薬師の家系なので『葉』で銀双葉だ。

「小さい頃の約束、おぼえてるか？ 滑り台とか隠し通路のある秘密基地を作るんだぜ」

「……もうそんなに子供じゃない。それより果物たくさん食べられるほうが重要。いっぱい食べさせてくれるって忘れてないよね？」

どっちが子供なんだよと言いながら僕らはじゃれ合った。

今では遠い故郷での思い出のページというやつである。うちは本村から離れた支邑なので過疎気味であり、小さいころから連れ合いになるのを何となく意識していたから心やすいのもある。

ちなみに逃げ出したのは双葉が悪代官に妾として見初められたからだが、いずれ自分の嫁になると思って綺麗な飾りを与えたり着飾らせたのは僕である。美人と言う程美人ではないが、何も無い田舎に着飾った娘が居れば綺麗に見えてしまうのも仕方なからう。要するに全力で僕のせいなのだ。前世の感覚を思い出しながら見栄えを工夫したのもマズかったかもしれない

小神の使徒

元とはいえ狩人の朝は早い。

傭兵隊は魔物が増える領域に向かっているのだから猶更だ。

故郷で祭壇を築いて洞府……神殿とか神社に当たる場所を開いていた時は神様が声を掛け、気分の良い時は助言もくれたのだがそれも絶えて久しい。

「朝からくつつ付くな」

「……双羽は温かいから」

僕の数少ない特殊能力の一つに『何かを保全』するという物がある。今は体温を一定に保っているわけだが、悲しい事に同じ職種の奴は同じことができる。隊に居る司祭は汎用系だから僕ほどではないが、似たようなことができる万能キャラなので正直羨ましい。上級魔法だって使えるしね。

ちなみに他に出来ることは洞府を開かないと特にない。

出来たとしても神に貴重品を捧げて奉納するとか、保全機能の面積や強度の強化くらいなのだが……。

(もつとレベルあがったら違うのかな……。神様の信仰レベルなのか僕の使徒レベルが重要なのかわかんないけど)

なお僕の職種は小神の……という前置きが付くが、使徒である。

保全機能は保全に過ぎず、精神防壁を兼ねた物理結界なんてやるだけ無駄なレベルなので期待しないで欲しい。

この職種の何が使えないかって、保全機能や洞府を開いて神様に捧げものをするのが上級魔法扱いなのだ。何度か言ってるように、僕が戦闘で役立つような上級魔法を使えないのはこのためである。

「あら早いよね」

「寝ながら起きていられる人に言われたくはないかな。不寝番お疲れ様……でいいのかな」

エルフは種族特性以前に精神的な尺度が違う。

一日中無関心で寝ているのか起きているのか分からない状態で暮

らすことができるのだが、その状態でも周囲を警戒できるからズルイ。森に住む獣と同じだと言われたら返す言葉はないのだが。

とはいえ冒険する仲間としてはこれほど心強い相手はいない。

不寝番を交代制にするのは当然だが、二名一組とかやる時に一人分が既に埋まっているわけだ。感知力が高くアウトドアの経験も長いので、魔法を使ったとしてもエルフを出し抜くのは森じゃなくとも非常に難しい。

「ところで例の件、本当にやるの？ 動員されてるのは徴募兵されたばかりの素人よ？」

「流石にその辺は工夫しましたよ。上手く行けば殆ど被害らしい被害を出さずに済みます。それに昨日言った事の証明にもなりますしね」

昨夜、領主に雇われて魔物退治をしていると言った。

その時に死んだり逃げた荘園主の代わりに有望な傭兵に声を掛け、費用を何とかしてるとも言ったはずだ。それが実を結ぶかは別として領主は領主で色々工夫しているわけだ。

その一環として徴兵したこの辺りの領民たちを投入している。

ロクな訓練もせずに馬鹿なんじゃないかと思っただが、指揮権は僕らに渡して一本化しているところを見るとそこそこに頭は回るようだ。僕らが荘園主になるなら訓練も任せようとか、死んだら自己責任と言う事かもしれないけれど。

「それが剛盾の奴に任せてる作業？」

「あの人、もう取り掛かってるんだ？ そうですよ。いくらノロマなアンデットとはいえ、僕らはともかく素人をまともに戦わせたくないですからね」

いま話に出てきた『剛盾』というのは昨夜のドワーフの事だ。

ドワーフは武器の名前の人が多いのだが、人間と違って絶対数が少ないので、剛家の誰それで通じるらしい。

ちなみに目の前に居る女エルフは『紅梓』で、梓の木は紅に染まったころ生まれた子という名付け方だ。やはり絶対数が少ないのと、生まれた時間を尊ぶ感じだとか。

「という事はまずは僕が指揮するって事でいいんだよね？」

「他に誰もやりたがる人はいないでしょ。荘園主になりたい人が居れば別だけど、それにしたって普通は自分の所で育ててから使おうとするわよ」

要するに積極性の問題である。

僕はこの辺の領主としてここで名前をあげておきたい。成功すれば城主に成った時に支持されるだろうし、失敗したとしても命を守る事を重視しようとした人を徴募された人は忘れないそうだな。

一山いくらの歩兵なんてそんなものだと言鬼軍曹みたいな傭兵が言っていた。

「剛盾さん行動が早いね。昨日の今日で驚いたよ」

「そりゃあおう。楽しい提案だったからお手並み拝見という所じやが、あいつらの命を救うためつーなら動かん方がおかしいじやろ。森に長物を持って行かせると聞いた時は正気を疑いもしたが」

画期的な提案と言うのは基本的に二種類に分けられる。

誰も気が付いてなかったというだけの話と、誰もが問題であることを気が付いてるからやらなかった話。

僕が提案したのはこの両方を混ぜる事だった。

森は木が生えて取り回しが悪いので長物を持ち込むなど言うのは鉄則だったが、考え方を変えることで有効性を見出したのだ。そういった新規の試みというのはあまり受け入れられないこともあるのだが、今回は生命重視ということで動いてくれたらしい。

「しかしまさか梯子を武器として使うとはのう」

「邪魔する為だから武器と呼ぶには怪しいけどね。ともあれ頑丈な梯子があるという前提だったし協力してくれて助かったよ」

剛盾さんに頼んでいたのは梯子の補強と追加だった。

下級のアンデッドだとスピードも鈍ければパワーもない。ゾンビ映画の様に凄まじい筋力を発揮するなんてことはないのだ。そんなノロマと戦って死亡者が出るのはやはり数の暴力に他ならない。傭兵や騎士はともかく徴募された兵士は弱いのでなおさらだった。

そこで僕は梯子や戸板を使って木々の間に壁を作ることにした。

木々の間に梯子で蓋をすれば問題なく動きを制限できる。戸板に

取っ手を付けた臨時の大盾ならば木々が無い場所でも暫くは保つだろう。

「まあ防御に關しちや何とかなったと言つても良いわ。たぶん思つてるよりも人死には少ないんでしようね。でも肝心の攻撃はどうすんのよ。時間が掛かつたら何処かで誰かが死ぬわよ?」

「攻撃はさせないよ。腕つぶしに自信がある人でも梯子の間から突くくらいかな」

思つた通り二人とも良い人だ。

する必要も無いのに僕の案を民兵たちの前で保証してくれている。おかげで僕が信用できる人間だと彼らも思つてくれる可能性は高い。

ならば最後までそれを貫き通すべきだし、狙うならキルマークとか格好良さではなく人死が無い事をスコアとして誇るべきだろう。コンテニューなんて都合の良い物なんかない事だし。

「はっ? それじゃあどうやってアンデッドを倒すつての?」

「僕らが攻撃担当役だよ。強い人間だけで矢面に立って地道に少数を倒していくんだ。分かり易く言うと彼らがライフエンスで僕らがオフェンスつてとこかな。プチ籠城戦をやつてしまおう」

絶対多数のアンデッドに囲まれると熟練の傭兵でも死ぬことがある。

ここで逆に考えて欲しい。絶対多数に囲まれさえしなければ歴戦の傭兵ならばまず負けないのだ。ならば梯子と戸板を盾にして、ひたすら同数以下の相手とだけ戦えばよいのである。

そして効果を疑っている人は、歴史ドラマの江戸時代物で盗賊改めとかが梯子を持つてるのを思い出して欲しい。訓練された兵士が多数ならば、梯子だけで腕利きの盗賊を捕縛できるのである。まあ今回はロクな訓練もされてないので有効利用は無理だろう。なんだつたら幾つかの梯子は木々に括りつけて、民兵たちは補強する方が建設的だろうか?

(この世界にタンク役って概念が無いんだよね。まあ冒険者ギルドとかなないしダンジョンアタックの経験とかが累積されてないんだろうけど。……でも面白いな、このアイデアは後で布教に使えるんじゃないや

いか?)

ゲームの様に一定時間無敵になるような技こそないが、防衛向きの魔法はある。

その魔法を前衛に掛けて守っている間に、攻撃特化役が敵を倒して回る……なんてアイデアがないのだ。もちろん突撃役に支援魔法を掛けたり、籠城戦で弓矢と魔法だけで攻撃することはある。しかしこの世界にシステマチックな配役はまだまだ概念が蓄積されていないのだろう。

そしてこれらが有効だという気付きは、僕が城主に成った後で有効なはずだった。仮に僕が管理する荘園に冒険者ギルドを設立したとして、傭兵ギルドよりも生存率が戦ったらどうだろう? そしてソレをうちの神様からもたらされたものだと言っても良い。

(生活が貧し過ぎて現世利益を教義にしようかと思っただけ、こういう知識を売るのもアリだよな。どうせ賢者や技術者は知識やコツを安売りしないんだろうし)

ちなみにうちの神様は知識神であり、コツを伝える神様である。

おばあちゃんのお知恵袋的な感じだが、主神から派遣される使い神とか来訪神だと思ってくれれば良い。格好良い言い方をすると軍師とか渡来技術者の神様なのだけけれど。

だからこそ、今回の気づきの様なモノを授けるとするのはアリな気がしてきた。

うちの荘園に来れば美味しい料理や暖かいお風呂に入れるし、神様に祈れば様々な知識の詰まった本を読むことができるのだ。販売すると価値が下がるし、そもそもそこまで紙が安くないので実行する価値は高いだろう。

最低限の訓練と備え

●
そしていよいよ魔物退治の始まりだ。

といっても最初は訓練で一日潰れたので、数日後に最低限の連携が取れてからの進軍なのだ。

その訓練と言うのは民兵たちの中でも力の強い者たちをアンデツド役にして、強引に突破してもらうだけだ。こちらは梯子を盾にして相手の行動を塞ぐだけ。何も無い平野で、木々がある場所で、山間の坂でと色々試してみた。

「紅梓にかつた……いえ〜い?」

「ズルイわよ! オプシヨンの八割が禁じ手なんて勝てるわけないじゃないの」

人間とアンデツド側に分かれてお互いに部隊を率いての訓練。

何もかも上位互換の相手に勝てたからか、珍しく双葉がムフ〜と分かり易く喜んでいいる。

こんなことをしてるのも、考案者である僕以外でも簡単に勝てる様じゃないと意味がないからだ。ポイントは前線を見張る役と、全体を見張る役からの報告を欠かさない事。足元を潜ったり山の上から滑り落ちてくることとか気を付けていればまず負けない。

「ゾンビやスケルトンに出来る行動だけで良いって納得したのは紅梓さんでしょ」

「それでもよ! 数で押し込む戦法だつてこつちの連中が怯えてちや使えないんだし! 驚かせるとか卑怯よ! アンデツドは驚かないんだもの」

「そつちも脅しとかさせてたし、おあいこ」

人間が演じてるので梯子を潜り抜けようとしたりする。

そんなことは考えない筈だが、それでも千切れた上半身だけで可能性はゼロでは無いので匍匐前進はアリだ。しかし戦術としてはそのくらいが想像の限界だろう。

逆に反撃を恐れて下がったり、知り合い同士で口論し始めるのが不

毛であった。

普段ならば押しくらまんじゅうで圧殺しそうな状況でも逃げて帰る代わりに、知り合いに『俺を殴るのかよ?』と脅させるのは人間ならではの光景だろう。

「しかしまあ、今回の訓練で良かったのはあの連中が自信を持ったことかの」

「力自慢を普通の人たちが封殺できましたからね。ぶっつけ本番せずに、訓練した甲斐がありました」

訓練としては成果は他愛ない。

連携速度は大したことないし、木々の中で上手く壁を作るのもまだギコチない。

だが上手に連携すれば力自慢を複数名相手にしても何もさせないことは出来た。

知り合いだけのその事が良く分かり、頑張れば自分たちが死なないのではないかと言う自信が持てたことは大きい。僕のアイデアが適切だと彼らにも傭兵仲間にも周知できたことは大きかった。

「そういう事にしときましょ。それで私たちは何をやる役なの? まさか私にまで梯子を持ってとか言わないわよね?」

「攻撃役じゃないのか? ワシらが斧や槌を振るえばアツという間じゃぞ」

梯子と戸板に寄る盾で壁を作り、傭兵は前にのみ専念して攻撃していく。

ただそれだけで無数のアンデッドを倒し、交代して休憩しながら突き進めば何とでもなるだろう。

当初の予定だと僕らも攻撃班に専念する予定だったが、作戦が割りと好評に受け入れられたので少し変更することにした。

「この際だから、僕らは動き回って足りない所の補強に回ろうかと思う」

「遊撃隊というやつか」

戦略ゲームをやった人は良く割ると思うが、基本的に攻める時は安全地帯造りだ。

ある場所を安全にするために、別のある場所を攻めていく。そうして増えていく安全地帯から兵を引き抜いて、その兵を使ってまた攻めていく。今回だとロープか何かで木々の間を封鎖すればとても楽だ。途中からは加速度的に処理が早くなるし、危険は相対的に減っていくはずだった。

だけれど予期せぬ事は起きる物だし、それこそ想定を上回る強敵が居ても困る。そういう時の備えて出動するのは遊撃隊の役目だと言えるだろう。

「とはいえ今のところ何とかかなりそうだから……。むしろ怖いのは穴に落ちたり部屋に閉じ込められて、最初に気が付かなかつた奴かな。建物がある場所なんて絶対に放置できないし、逆に壁として使える場所があれば安全地帯を増やしていけるからね」

「また面倒くさい事を……」

「まあ仕方ないところだの。あの連中に何もかもは任せられん」

僕らの視線の先には、訓練が上手くって氣勢を上げる民兵たちがいる。

だが訓練で覚えられたのは想定通りにしか進んでない場合だ。それこそ中に居るのに気が付かず安全地帯だと思ってしまい、後ろから現れたら面倒くさいではすまないだろう。

「しよーがないわね。それで殿様率いる遊撃隊の初任務は？」

「幽霊退治が始まるまでの切り込み役かな？ 地形にもよるけど最初は壁を作るのも苦労するだろうしね」

今回の作戦はあくまで物理的に動いてくる敵を倒す為の物だ。

レイスやゴーストなど幽霊系は壁なんか超えて来るので、最初にまとめて倒さねばならない。

初手は数少ない範囲魔法の使い手を集めて道を作り、そこを僕らが制圧して確保する。その後には壁だけ作って兵たちは下げること、物理的な壁を越えて来た幽霊系を一掃する作戦だった。

「今回の作戦は基本的に初動に掛かっているからね。上手く行けば最後までスムーズに行くはずだし、その後は妙なのが隠れてないか探すだけになるよ」

「その『だけ』ってのが面倒なんでしょうが」

こういつてはなんだがダンジョンというのは珍しい。

少なくともこの国ではあまり有名なものが無い。魔物を狩っても魔石なんか出無いし、レア・アイテムをドロップすることも無い。だから積極的に探そうと思つた事も無いのだが。

ともあれ、そういう理由で地道に探索し続ける苦労と言うのをみんな味わつたことはないのだ。上級魔法さえあれば以前の魔物は倒せたので、魔王の襲撃まではイーजीモードであつたのではないだろうか？

「そういうのあんたの力でどうにもならないの？」

「余裕が無いので無理です。できるなら苦勞してないですよ。余裕があつても貴重な術師を守るために使うでしょうし」

僕の数少ない特技は保全する対象に選べる範囲が広いのがウリだ。やろうと思えば建物の保全で安全地帯とかできなくもない。しかしながらそれだけに、強度の上昇はとても難しい。強度を上げるのに膨大なエネルギーが必要だし、攻撃されたらアツサリ壊れるし、経年劣化での倒壊を防ぐレベルでしかない。

エルフには神職系が珍しいのでこんな会話をしているが、実のところ僕の職業は閑職なのだ。大きな宗教だと大神殿やら聖域の守りの為に重宝されているらしいが。

「そろそろ良い時間ですし青たちに合流しましょうか」

青というのは貴重な術師たちのまとめ役で、前に話を出した伝道師のボンボンだ。

魔術師で神職というのを不思議に思う人もいるかもしれないが、この世界に神聖魔法とかは存在しない。特殊能力の方はクラスに依存しているのです、神職も魔法が使えないと威張れないのである。

ついでに言うところの辺りでは珍しい東領の出身者で、『青』の苗字だけで通じるのもそのせい。東領は豊かなので他所に行く奴は珍しく、伝道師でなければ僕らも出逢わなかつた可能性が高かつた。職種として布教の旅に出ないといけない癖に、良い暮らしがしたいという点で僕と似ているので暫定同盟を組んでいる相手だ。

「あいつキライ」

「そんな言い方しないの。でも、もうそんな時間だっけ」

「そうそう。抜け目ないのはあいつの育ちのせいで、あいつ自身が悪い訳じゃないよ」

青というのは金持ちのボンボン、かつ伝道師なので何かにつけて布教して来る。

ついでに言うと言仰してるのは大地母神系の神様なので、向こうの方が遥かにメジャーである。うちの神様と比べたらいけないレベルの格差があるので、使徒だから布教しても無理だと伝えたら可哀そうな目で見られた。

要するに宗教的にマウント取られてるから舎弟扱いとも言える。

僕は悔しい以前に身の程を知ってるが……双葉はそれ以来あいつのことをあんまり好いてない。当人の前でも居ない所でも嫌いと言言するが、それはそれとして排除対象にしないあたりが微妙なラインでの妥協なのだろう。

「……お。居た居た。おーい青悟さーん！」

青は東領は清河の街に住まう貴族の息子だ。

貴族は子弟に『こんな風に育ってほしい』という前世に近い名前が付けられている。ミドルネームが存在しないのではなく、都市中央部であり『央』という字が王に通じるのは良くないと略しているだけ。まさに本物のボンボンだった。

せつかくなので彼の職種である伝道師について説明しておこう。

神職なので僕の使徒と似ているが、旅立つ者を祝福できるという部分で幅が広い。使徒が聖域を守り伝統を強固にするという役目であれば、伝道師は新しく広げて行く役目である。何が羨ましいとかと言って、祝福出来る範囲の応用性が広いのに器用貧乏では収まらない事だ。これも神様の格の違いなのだろうか？

「やあ双羽くん。こちらは何時でも行けるよ」

「ああ、祝福してたんですね。お互い頑張りましょう」

「成功しても、お互い苦勞するけどな。まあよろしく」

「ははっ。笑えないな」

彼が祝福していたのは僕と同じく荘園主候補たちだ。

抜け目ない彼はこうやってあちこちで信者候補やら、布教する許可を取っている。もちろん布教エリアを一気に拡大する為なのだが、こいつはこいつでよりよい生活をしたという都会っ子なのだ。声を掛けてる中で一番良い領地に住み着く気だろう。

そしてニコニコと僕に対して微笑んでいるのは、誰が一番有望かを知っているからだ……と思いたい。双葉が嫌いなのは妙な趣味があるからではないと信じておこう。

「でもまさか、結界にあんな使い方を思いつくなんて思わなかったよ。流石は双羽くんだ」

「青悟さんほど強い力が使えませぬ。苦心の結果ですよ」

伝道師の祝福は旅立つ者へ強固な力を授けてくれる。

具体的に言うとうと武器を祝福すれば短期間ではあるが物理的攻撃の効かない幽霊にも効くし、鎧なりお守りを祝福すれば憑依などができなくなる。同じことを魔法でやるとコスト的に大変だが、遥かに効率的なので数人まとめて祝福するくらいは問題なかった。

対して使徒の祝福である保護能力は長期的な反面、矛盾すると維持が難しくなる。

建物がシロアリに食われなとか雨で倒壊しなとかなら維持は永遠に近いが、ダメージを防いだりするとアツという間に維持できなくなる。前に使った温度の維持の場合……故郷に居た時は温度を保つ時でも、ちゃんと防寒着を着こまないと暖かさを維持できない。これが温暖な南領だと雨季でも来ないと永遠と言う訳だ。

「だから多分……突風でも吹かない限りは問題ないんじゃないですかね。元が粉ですし」

「建物があれば安全だけど、まあ岩肌でもなんとかなるんじゃないかな。死霊避けの粉が効くと良いねえ」

祝福で保護する対象は粉ではない。

散布した粉が一定範囲から飛んでいかない様に保護しただけだ。そよ風が吹いたくらいなら粉が飛び散ることはないの、言ってる通り突風が吹かなければ術師たちの安全は守れるだろう。

まあ……突風で駄目なんだから、近距離で大規模魔法使われてもダメなんだけどな。

こうして戦闘準備は整い、いよいよアンデッドの群れを駆逐していくことになる。

被害を出さない為の戦

●
気が付いた人もいるかもしれないが、この戦いで苦戦する要素は殆どない。

村人が避難するレベルではあるが、この地方にアンデッドが万単位で来たなんて話は聞いてない。つまり圧殺されるほどの数を警戒する必要はないのだ。

戦闘前に言った通り、建物の陰に隠れていたとか穴に落ちて発見が遅れたとか。そういうアクシデントでも無ければ滅多なことでは押し負けずらすることはなかった。

「予定地点で爆発したわよ！ どのくらい倒れたとかは判んない！」
女エルフの紅梓が目の良さを活かして着弾観測。

ファイヤーボールとか範囲攻撃の類が爆発すれば、ゾンビだのスケルトンだのは問題なく倒せる。

「よし、先発組突撃！ 二番隊と三番隊は封鎖をお願い！」
「おう！」

五人一組の隊が三つほど進軍を始める。

一番隊は僕らでアンデッドを蹴散らして歩きまわる役。その後ろから付いてきた二隊は側面に梯子を木々に括りつける役だ。

ドワーフである剛盾の斧が一撃でスケルトンを粉碎し……。

何てのは当然なので、二番隊の作業例を簡単に説明しよう。先発隊は勇氣ある者というかサククラによる鼓舞を前提とした傭兵隊だ。二人一組で梯子を構え、あるいは紐で括っていく。括りつけるのは左右でも良いし、障害物を利用できるなら片側に二つとかでも良い。

「二番隊終了！」

「三番隊もだ！ 後ろは気にすんな！」

五名で一組なので、残り一人は監視と報告役になる。

僕ら一番隊が安心して戦えるように周辺を監視しつつ、もし動けるアンデッドが残って居たら始末無いし食い止める事になっていた。

「荷車！ 次の梯子が終わったら逃げるよ！」

「俺の逃げ足を舐めんなよ！」

そして予定通りルートを確認すると、そこへ荷車を呼び寄せただ。

もちろん積んでるのは梯子の御代わりであり、都合よく結べる樹だとか建物が無い時は障害物にする予定だった。

いわゆる幌馬車戦術で、欧州の何とか戦争とか西部劇で大活躍するアレである。

近代的な軍隊には意味がないが、中世レベルの兵士や魔物相手には十分な戦果を發揮する。特に今回はキチっと封鎖などする必要はないのだから猶更だ。

「完全封鎖しなくて良いんだな？」

「そうだよ！ どうせ数が来たら無理だし、だいたい幽霊系には効かないって言ったじゃん！ 坂に誘導だけはしといて！」

乱戦の最中なので誰が言ったのかとか気にせずに口汚く答える。

木々と建物の間を梯子で封鎖し、足りなければ荷車も使って足止め。それさえできればもう思い残すことは無いので、一気に戦線の後退させた。

初動の目的はあくまで一次ラインの設定。

障害物で斜めに受け流し、有象無象のアンデッドを坂道へと誘導していく。そして障害物なんかじゃ止められない幽霊系だけを直進させることが目的だった。

「思ったより数が来てる！ どうする？」

「惜しいけど魔法を使おう！ 拓けたところで一斉攻撃！ 後はゾンビと一緒に 封鎖は要らないけどね！」

これが獣タイプの魔物だったらここまで都合よくはいかないだろう。

大爆発が起きれば警戒もするし、移動速度が段違いだ。背中を見せている間にやられる可能性があるのです、徐々に戦線を組み上げていく必要があった。

だがアンデッドだと話が変わって来る。

恐れる心も焦る心も無く、良くも悪くも狙う相手が居なければ同じ

場所でジツとしてるし、狙う相手が居るならば延々と追い掛けて来るのだ。ゾンビとかは障害物で斜めに受け流せば当然そちらを回って来るだけだし、障害物が効かない奴は延々と直進して来る。

「脱落者は!？」

「居る訳ーねーだろ! 魔法を使い切ったアホは居るけどな!」

聞きたくなかったチキン野郎の暴走。

初心者なのか必要以上に魔法を唱えて魔力を使い切った奴が出た。だがソレ以外はおおむね予定通りで、こちらに被害らしい被害はない。

これなら問題なく当初の予定通り『籠城戦』に舵を切れるはずだ。

「紅梓さん! そろそろ高い所へ!」

「もう上がってる! 幽霊系はもう居ない筈よ!」

やはり観測係を置いておいて良かった。

夢中になって前線ばかりに気を取られ、全体の様子が判って居なかった。この段階で優位地形を設定し、そこに籠るまでの道のりを誘導してもらおう。

そして第一報として幽霊系の有無を知らせた後、痛いほどの沈黙が仲間達全員から上がった。代わりに聞こえてくるのは離れた位置で、回り込んで来るアンデッドを潰す打撃音だけだ。

「猟師小屋は間に敵が多すぎてダメ! あまり好きじゃないけど炭焼き小屋にしましょ!」

「了解! 聞こえたら! 先発隊は炭焼き小屋までの道を確保。後続が登って来るのを援護して!」

「おう!」

事前に三つほど拠点防御の候補を考えていた。

一つ目は村で一番大きな村長宅で、集会場になってる事が多いので立て籠もるスペースがある。しかしこれは僕が見ても論外なので、残るは山の上にある建物の周囲だ。

そして安全に移動できるのは炭焼き小屋か猟師小屋のどちらか?。

今回は炭焼き小屋の方が安全らしいと分かった。後はもう籠城用に山の一角を封鎖するだけだ。幽霊系を始末した以上、移動速度の遅

いアンデッドが登山で素早く登れるはずがない。圧殺戦法すら使えなくなつたところを地道に始末していくだけである。

「おつそろしい程に順調じゃのう……」

「下級のアンデッドしか居ないからつてのもあるけどね。筋肉だの魔力だの残つてる奴が居たらと思うと胃が痛く成つちやうけど」

初動をプロの傭兵だけでこなし、魔法も総動員した。

そして人間同士の戦いですら基本的に高所の方が有利なのだ、下級アンデッドではどうしようもないだろう。籠城に成功した以上は勝利以外の道はありえなかつた。

それはそれとして、剛盾さんの反応が気になる。

後続組もおつかなビツクリながら作業しているし、問題は無いはずなのだが。

「何か気になることがあるんです？」

「逆じゃよ。何本か樹を切り倒して道を塞いだほうが、梯子の消費を抑えられるんじゃないかと思つての。来る奴が終わつたら村を片付けるんじゃない？」

何という事だろうか。確かに戦いは籠城して終わりじゃない。

自分でも勝利しかありえないと言つた以上、考えるべきは次の事だつた。もし今回の話が競争だつたら今ごろは周回遅れになつていた可能性すらあつた。もちろん功績競争ではなく重要地形なり物資の確保とかという意味だ。

とはいえシヨックを受けているばかりでは意味が無いし、せっかく提案してくれたのだから活かすべきだろう。確かに彼の言う通り、梯子だつて無限にあるわけじゃない。そもそもが突貫作業で作つたり元からあるのを補強しただけなのだ。

「そろそろ先発組も休憩する時ですしね。何人か連れてつて下さい。半分は伐採の手伝いで、半分は護衛つて事で」

「そうしよう。オイ！ 怪我人以外は付いてこんかい！」

「おいおい。休息の筈だろ？ まあ楽勝だからいいけどな」

無茶振りではあるが今回はスムーズに進んだのが大きい。

本当の意味で緊張したのは最初だけで、後は夢中になつて行動し続

けたただけだ。その後は幽霊系を退治するまで交代で休息していたよ
うなものなので体力面はなんとかなるだろう。

そして樹を斬り倒すカンカンという音が聞こえて、坂の一部を閉鎖
し始める。何本かしたところで紅梓さんから余計な事をするなど抗
議が出たがそれ以上にバリケードの追加は皆を安心させた。

「……あー後ちよつとで登って来る奴は居なくなる……かな？」

「じゃあ交代で休息しよう。働き詰めの人には寝ても良いよ。朝になっ
てから村を解放しに行こう」

「こんな所で寝れるかよー！」

やがて戦いは終息を迎える。

傾斜とバリケードを使った籠城戦は上手く凶にあたった。元から
数が多過ぎない事を把握していたこともあり、予定通りではあった。

しかし思っていたことが全部上手く行くなんてことはまずないの
だ。ソレを考えたらここで強硬策を取る意味はなく、集中力が欠け始
めたメンバーの休息を兼ねて朝まで待つべきだろう。

「そういえば交換用のロープは十分にあつたっけ？　かなり強く結ん
だはずだから何本かは大幅に切らなきゃ無理だと思っけど」

さて、忘れていたことが一つ。

予備の梯子はそれなりに用意したが、結びつけるロープの再利用が
できるかどうかだ。

これから村を開放するにあたり、また梯子や戸板で壁を作らないと
いけない。その時に家の柱やなんかに括りつけるロープが必要なの
だ。

「安心せい。予備もあるが梯子の方が保っちゃおらん。切ったばかり
の丸太を持って行くとして……次は専用にガツチガチのを用意せん
といかんじゃろうな」

「またやんの？」

「俺らはまたやりたいけどな。何しろ楽でいい」

最初は『ひとまず任せる』とだけ言って様子見していたメンバー。

彼らは笑って『次回も採用しても構わない』と告げていた。要する
に今回の作戦は成功したと思われるっており、後は消化作業に入ったとみ

んなが思っているという訳だ。

やり遂げた……とホっとする気持ちもあるが、みんなに認められたという気持ちで嬉しくて一杯になる。

「みんな……ありがとう。でも最後まで気を抜かずにいこう。此処まで来たら大怪我しちやもつたいないもんね」

「あつたり前でしょ。怪我なんかしたくないわよ」

「ここまで来たら怪我する方が難しいじやろ。しかし言わんとせんことは判るよ」

こうして僕が城主に成る為の最初の戦いは終わった。

今回の戦いで経験を活かせば、徴募されたばかりの兵士たちも自信を付けるしスムーズに行動できるようになるだろう。

実際にそうなってお調子者以外は怪我を負う事はなく、無事にこの周囲からアンデッドの脅威が一時的にはあるが取り除かれたのである。

会見相手の変更

●
バリケードを設置することで、村を無事に開放した。

これで避難している人々を呼び戻しても大丈夫……という段階で少しだけ予定を変更することにした。

本来はこの村を拠点に徐々に広げ、一定の成果があがったところで依頼主の元へ報告に行く予定だったのだが……。

「これだけの成果が上がるんだったら、先に援助しておくべき所があるとと思うね。懸念を考えたら……できればじゃなくて必須レベルでの話」

「青悟さん、成果が上がり過ぎると何か問題なの？」

貴族社会を見て来た青悟の言葉だけに嫌な物を感じた。

彼にはアンデッドの戦よりも、領主との約束を保証してもらう方が重要だった。その事は彼も理解しているはずだ。

つまりこの提案は放置すると依頼としては大成功だが、荘園主になる為の道筋としては失敗につながりかねないのだろう。

「用意してる証書自体は有効だよ。印章さえ押してくれば後は問題ない。どれだけ考え込んだとしても、普通なら君たちほどの部下を持てるなら確保したいと思うはずなんだ。ただし……」

印章と言うのはまんま印鑑の豪華版だ。

どんな貴族でその系譜はどうかなのか、一目で判るような感じになっている。旗や盾の紋章以上に貴族の証を示すので、これを押しして他人がやったと言い切るのは難しい。

だから証書さえ発行すれば、その後は簡単に領地を取り上げることが王家ですら難しかった。

「戦果を見て自分だけでも行けるなんて短絡しなければね。交渉の場すら開かれず、代理人が最初の報酬だけ持って来たら幾ら私でも何とも出来ないよ。そのルール自体は全く問題ないんだから」

「ちよつと違うけど功績を奪われるみたいな感じですね」

この地方の領主は費用を抑えるために僕らを荘園主にしようとし

ていた。

騎士や傭兵隊長として土地を任せ、延々と魔物を退治させながらいずれば税金を得る。

そう考えていたはずなのだが、簡単に倒せるならば自分で退治して平和にしてから、縁故のある下級貴族を呼び寄せれば良いという話になりかねないとの事だった。功績を奪うわけでは無いが、荘園主の話自体を無かったことにするわけだ。

「まあアンデッドの被害を無くすだけならそうじゃろうのう」

「他にも居るには居るけど、苦勞するのは確かにソレだもんね。その後どうする気か知らないけど」

今回の作戦は確かに大戦果だったが、それはアンデッド専用でしかない。

使い勝手の良い傭兵から信用を失って今後の問題をどうする気かは知らないが、完全に平和にできるならば身内で固めた方が良いのは確かだ。

信用も大事な領主がそこまで悪辣な事をするかは別にして、部下の功績を奪う上司くらいならば枚挙にいとまがない。むしろ傭兵としてはよくあることだと懸念を抱くのも当然ではある。

「それでどうすべきなんですか?」

「領主殿の部下としての華々しい行動を、事実に行きさせてしまうのはどうかなあ? 具体的に言うとなら領主殿の上……寄親って言う面倒見の上級貴族が居るんだけどね。その人の領地を援護しておくんだ」「貴方の部下に言われて助けに来ましたって?」

「まあ嘘ではない……のかのう」

貴族には派閥があるので、上の貴族は下の貴族の面倒を見る。

代わりに貴族集団としての権勢を發揮し、総合戦力の提供をより大きな形で王家に対して提示できる。これが寄親と言う慣習だ。

分かり易い爵位で言うところの領主は伯爵で、僕らは騎士とか準男爵級として契約する予定だ。もし国と直接契約する場合は伯爵が寄親になるだろう。そして伯爵の寄親は侯爵みたいな上級貴族たちで、南領どころか国全体でも大きな権力と戦力を抱えている人という

ころだ。

「……悪くないんじゃないかな？ 現段階で領主が僕らを不要と思っていない限り、無駄にはならないと思うし」

「えー！ 遠出する必要があるんでしょ？ スケジュールが長引くんじゃない？」

「どのみちご機嫌伺いに派遣と思うから同じだと思うよ」

青悟が出した案の良い所は領主にとってもメリットがあるという事だ。

この時点で約束を反故にする気じゃない限りは『勝手な事をしおつて！』などと怒ることはない。最終的に派遣されるというならば先に押しに行っても問題なし、予定を先に組んでいた方が急に言われるよりも対処し易いだろう。

デメリットは周囲からアンデッドを殲滅するスピードが遅くなる。少なくとも僕の荘園になる予定のエリアへ手を入れる余地はかなり減るだろう。

（開墾はともかく色々と手を尽くせなくなるのは痛いけど……でも危険がまだ残ってるって言う丁度良い理由になるか）

城の縄張りを立派にしたり、風呂などの施設も揃えたい。

それらの作業が遅れるのは痛いのが、周囲に魔物が溢れているという可能性は残り続ける。現状はかなりスムーズに行ったことだし、トントンに考えておけば間違いないだろう。

「これからの準備なんだけど、境界線の辺りで樹を伐採して加工。樹を取り過ぎない、見晴らしが良くなるレベルで抑えるってのはどうかな？ どのみち梯子も減っちゃったしね」

と言う事は欲張るよりも、頭を切り替えて使える時間を有効利用すべきだ。

となると、出遅れる分を今の内からフォローできる行動を残った時間に当て嵌めるべきだろう。

最低限の木材を調達し、それを重要な順に加工していく。

最優先で梯子、戸板や荷車は製材する余裕が無いので却下。ある物を利用して前回と同じ程度の作戦が組めるようにして、残りの樹はや

はりバリケードにしておきべきだろう。

「ワシの方は構わんが？」

「そのくらいなら妥協できるわ。言わせてもらおうなら端から採って行かなくても、間伐でも十分見え易くなるはずよ。それなら日当たりも良くなるから残った木にも良い事だし、魔物が森に入り込んだ場合でも分かり易いものね」

「じゃっそれで」

残った時間で可能な事を割り当てていく。

作業が可能な人間は樹を弄つてもらおうとして、残りの中で戦える人たちは交代で周辺を搜索。残念なことには何もできない人たちは訓練でもしておくしかない。

とはいえ訓練ばかりでは飽きるし、そもそも身に付かないから雑兵なのだ。むしろ工事にでも使うべきなのだ……時間的にはそれも出来そうにないので工夫する必要があった。

「よしっ。徴募された人たちは訓練の合間に堀でも掘ってもらおうか、一番早く掘った班にはご褒美を出すという事で」

「双羽くくん。ちよつとばっかし穴を掘っても意味が無いんじゃない？」

青悟も民兵が物の役に立たないことは良く知っている。

だからこそ心配しているわけだが、かといって戦闘させる訳にも訓練漬けにするわけにもいかない。

そこで考えた作業が穴掘りだ。

樹を伐採して加工したり柵を組み上げるだけでもそれなりの力を必要とするが、穴を掘って土を移動させるだけならそれほど力は要らない。要はその穴と土をどう使うかだろう。

「アンデッド相手ならそんなに深さは要らないですよ。滅多に膝を上げて歩いたりしませんしね。掘り返した土も含めてそこその高さになれば誘導することも足止めにもなります」

ついでに言うとな来の意味での堀をグルッと巡らせる訳ではない。

この土地は盆地なので入り口付近……山と山の間あたりで、森でも林でもない場所にちよつとばかり掘るだけだ。もちろん街道筋

には堀ではなく数少ない柵で対応しておく。

高さとしては大股ではないと上がれない程度。

それがある事で何もできない人間が逃げ出し、戦える人間がアンデッドよりも有利になる一瞬を稼げる。時間もないことだし、ひとまはそれだけで十分だろう。

その後は手早く梯子で封鎖する訓練の他、発見する訓練に逃げる訓練。

戦闘訓練なんて激しい事をしないので脱落者はおらず、むしろ僕の指示にちゃんと従う訓練といえるだろう。その合間に堀を掘って回り、土砂を積み上げて行けばタイムアップだ。

「君たちが彼の言っていた優秀な兵たちだね？　今回はお世話になるよ」

「恐縮であります」

「いよいよ謁見だが……侯爵さまの笑顔こそ柔らかいが、その目は別に僕らを見てはいない。」

傭兵崩れなんて上級貴族から見ればそんな物であろうし、この人にとって人間と言うのは中央にコネのある青悟だけだと口にしても今更驚きはしなかった。

だから唐突に行われた質問にみんな戸惑った。

隊長格であり荘園主候補だけが青悟に連れられて謁見していたのだが……。

「ところで契約して荘園を構えるのであったか。そこで君は何を為したいと思うかね？」

「よ、良い領地にしたいと思います！」

近くに居た荘園主候補の傭兵が咄嗟にそう答える。

ウンウンと頷きはするが、あまり関心を持っていないのは明らかだ。及第点を口にしたわけでもなく機嫌も損ねた訳でもない。まるで書類にハンコ押すとか、ゲームのAボタンを押すかの如き姿だった。

「具体的には？　同じ目的の者はそちらも回答を頼むよ」

「沢山の収穫を……」

「自分は誰も死なない様にしたいと思います！ 魔物も飢えも無くして！」

そんな風に答えていくが、まあ想像の範囲だ。

おそらく僕も似たような答えをすれば、大過なく過ごすことができのだろう。もし本当にただの荘園主で収まる気ならその方が正解であるはずだ。

しかし僕としては布教目的があるので、その内容を含ませておかねば後で何を言われるか分からないし、面白みもないと処断される可能性もあるだろう。少なくとも青悟は謁見までの間に、同様の事を済ませていると思われる。

「君は？」

「あまりにも何も無い土地でしたので、文化一等の地を目指したいと思います。郷里も田舎でしたし、都会には憧れましたから」

と言う訳でここは素直に目指すべきものを語っておく。

もちろん税金を搾り取って贅沢暮らしをしたい言う意味ではない。前世で味わった生活し易い環境こそが目的だ。

できれば本を手に入れて読書もしたいし、クーラーやヒーター備え付けの生活にも憧れる。ぶつちやけ達成できれば、王都なんか目じやないとすら思った。

「具体的には？」

「いつでもお風呂に入れて、長期保存した食材で美味しい物を作るような場所です」

侯爵さんの笑顔はそのままにスウ……と目が細くなる。

どう考えても笑っていない表情だが、僕が贅沢をしたい愚か者かどうかを確認したのだろう。

以前から考えていた目的に現実味を持たせた回答をすると、眼鏡に叶ったのか侯爵さんは盛大に笑い始めた。

「ハッハッハー！ それはいいな。我が家でも毎日は風呂に入っておらんよ。それに保存食で旨い物ねえ……。成功したらレシピの一つも贈ってもらおうかな」

「竣工には時間が掛かりますが、ご期待に添えれば幸いです」

風呂と冷蔵庫。それが完成するだけでもこの侯爵さんは味方になつてくれるかもしれない。

何しろ南領で一・二を争う上級貴族でも……いや、上級貴族だからこそ都会の生活には思いがある物だ。領地の方が安心できるし費用は掛からないが、都会の方が便利で料理は上手いのは当然の事。

それらが完成して技術の一端を献上してくれば、王都に居る上級貴族にも負けないとでも思ったのだろう。侯爵さんから見れば居ないよりは居た方が良い部類には入れたのではないかと思う。

文明開化の音がする

● 上級貴族との謁見は無事に終わり、確認した魔物の数も問題ないと判った。

おそらくは全体スケジュールの遅延も寄り道程度で収まるだろう。話に聞いたところ依頼を持ち掛けた領主の方も高評価らしい。

と言う訳でここまでは大過なく順調に來れたので、後は城主や莊園主として頑張るだけだ。

「まさかあんな事を言い出すとは思いもしなかったよ。でも双羽くん風呂は難しいんじゃないか？」

「そうでもないですよ。お湯そのものは沸かし易くする方法があるんです」

日本の江戸時代、米どころはむしろ寒い地域だった。

家来の数に比して石高が足りないのに、仕方なく開墾によって国力を増やしたからなのだ。しかしながら寒冷に強い品種など無い頃である。当然ながら育て方が重要だったらしい。水路を浅くして陽で十分に温められるようにしたのだ。

要するに水は少量ならば沸かし易く、大容量であれば時間が掛かるという事だ。ボイラーそのものは古代ローマの頃からある技術なので、この世界でも当然存在する。誰も風呂なんか日常的に入れるようにしないだけだ。

「後は水を上手く調整する方法なんですけど……川の水を引き込んでボイラーに水を汲み上げれば難しくはありません。風呂場を半地下式にすればポンプも要らないですしね」

いわゆる温度の足りない露天風呂方式とボイラーの組み合わせを使う。

上流から下流に流れる水の勢いを利用し、川下に作った温泉施設へ汲み上げていく。後は銅か鉄か何かでボイラーを作って、温めた端から水を移動させてやればいい。なんだったらパイプ自体を温める方式でも良いだろう。

お屋敷の方は流石に下流に作ると洪水での浸水が怖いですが、それこそポンプの設置を前提にするすれば下流に作る必要はない。どちらかといえば冷蔵庫をどうするかの方が悩みどころであった。

「後はサウナを通常の水蒸気流用タイプだけじゃなくて、ドワーフ式の焼き石タイプも併設すれば面白いとみますよ」

「あー。ドワーフは石に水を落とすタイプだっけ。その差は面白いなあ」

この世界のサウナはお湯を沸かす時に出る水蒸気を利用する。

それはそれとして、ドワーフたちは鍛冶の炉などの利用で石を焼くのが簡単なのと、水が貴重なので焼いた石に水を落とすタイプのサウナになっている。お風呂に入らずサウナで汗をかき、水は最後に汗を落とすために拭う程度だ。

面白いのはその時に水を集めて再利用する前提である。

サウナに使った水蒸気も汚れた水も汗もまとめて回収し、濾過と蒸発を経て純水に変えることで再利用している。そういえばバビロン空中庭園も、蒸発した水の気化で温度を下げつつ水を再利用していると聞いた事があるかな。

（イメージとしてのバビロン空中庭園みたいな構図も悪くないな……。温度管理だけ取り入れる予定だったけど、外観も流用して悪くないかも）

名前だけ聞くとファンタジーだが、実はそれほど珍しい概念でもない。

空中に浮かんでいる様に『見える』という構図と、そこでは『地域的』にあえり得ない植物を用意できる部屋があるのだ。密閉により温度管理を徹底し気化による低温を成し遂げた区画と、逆に温度を維持した温室の二種類がある。

今までは密閉による温度管理だけを流用させてもらうつもりだったのだが、この際、温泉施設の一部に空中庭園と思えるような外観を取り入れても良いかもしれない。どうせ半地下式にするのだから、浮いたように見える構図は難しくない。

（しかし温度管理という意味で言えば、仙人の住処が洞府というのも

判る気はするな)

洞窟の中でも一定の広さを持った居住空間。

風が吹かず熱が伝播しないので、冬は暖かく夏は涼しい空間である。要するにエネルギーの変動が少ない訳で、そこに山の精気や日月の精気を蓄えて神秘的な生活を送っているというわけだ。

ひとまず天然の冷暗室として保存食を置いておく場所としよう。

その名目で色々と洞穴を探しておき、一番エネルギーの蓄積が良い場所に洞府を開いてうちの神様をお迎えすれば良い。

(となると蔵として使う場所以外の洞穴への出入りを禁じた方がいいな。酸欠とか説明してもダメだろうし……ここは剛盾さんや紅梓さんの名前を使わせてもらうか)

別に洞府だからといって洞穴でないといけないわけでもない。

しかし屋敷に設置するよりも、エネルギーの流入が少しでもある方が良いだろう。それこそっと良い場所があるならば神様の意見を聞きながら移設しても良いくらいだ。

現状ではそのくらいに神職としての力が足りてないので、神様の助言が早く欲しかった。……というよりも現地民の低位互換という立場に耐えられないので、転生知識以外にも何らかのメリットが欲しい今日この頃である。

「そういえばうちの領地に来た時に暇な時で良いんですけど、希望者に文字を教えてもらっても良いですか？ エルフやドワーフとの協定も結ぶ予定なんで、立入り禁止の看板作ろうかと」

「そんなの絵で良い気もするけど……まあいいよ教会で教えるから中心区画にヨロシク」

一か所二か所なら絵でも良いのだが、そうもいかないなので文字で説明が必要だ。

文字を教える係なんて用意できないので青悟を利用する事にするのだが……この人はこの人で計算高いから、教会を作る場合に隅っこではなく中心部に作れと釘を刺して来た。確かに約束は布教に許可を出す程度で何処と入ってなかったしね。

しかし息を吸う様にこういうことを考えられるのは凄い。

僕も少しは学ぶと同時に、いつの間にか利用だけされていない様に気を付けなきやな。というか利用されるだけならともかく、せつかく作った生活環境を奪われたら目も当てられない。その意味でもエルフやドワーフとの提携は重要だった。

「元からそのつもりですよ。それと進入禁止だけなら絵で済むんですが、危険だから禁止なのか、それとも協定に抵触するからとか区別できないと行けませんしね。ドワーフの所に入入りする許可を出した奴が、自分なら大丈夫だと鉱山毒の穴に飛び込んでも困りますから」「そういえばそうだねえ。でも君も凄いこと考えるよね。普通なら開拓権こそが領主の華なのに」

エルフとドワーフとの協定で、収穫物の制限やら侵入禁止区画とかを取り決める。

そこにある文物は何をしても良いというのが領主の特権だ。それこそ平民に何をしても許される……と言う事には成っている。本当にやったら問題が起きるので普通ならばそんなことはしないが。

とはいえ故郷で普通じゃない代官が平気で面倒な事をしてくれたので、そういうのが嫌だからこそ今の僕らがあると言えた。

「これから数十年爪に火を灯して開拓なんか嫌ですよ。僕は目の届く範囲で面白おかしく暮らせればそれでいいです。それに木を伐採したら植林しろってのは間違いじゃありませんしね」

普通の領主なら領地の広さと爵位の高さが自慢になる。

しかし僕はそんな物はどうでも良いし、言った通りより良い生活を目的としたい。そのためには開拓権なんか放り出し、何だったら必要量はエルフやドワーフから仕入れたって良いのだ。その方が職人の育成が要らないまである。

じゃあ発展性が無いかと言うとそうでもない。

侯爵さんに宣言した通り、風呂やら食事やらで発展すれば十分に楽しい生活が送れるし、洗練される過程でブランドが確立すれば行商人だって訪れるだろう。

「そういう訳で連中と仲良くやってれば放っておいても行商人は来ますからね。僕としては定期的に金さえ落してくれるなら何の文句も

無いです」

基本的に異種族との交易は難しい。

性格的に気難しい連中が多いのもあるが、文化が違い過ぎて禁忌とかの許容範囲が違い過ぎるのだ。こっちの種族でOKな事が、あっちの種族でダメとか平気であるのだからやっけて居られない。

対してうちの領地ではエルフとドワーフが最前線の盾にする事になるだろう。

協定の監視やら交渉役も兼ねて何人かが駐留していくだろうし、そいつらの中には行商人とまともな話が出来る奴も居るはずだ。少なくとも行商人が信じてくれればそれで問題は無い。

「広げたくなったら反対側って聞いているから良いとして、侯爵閣下の領地防衛の援助は？」

「それは真面目にやりますし必要なら続けますよ。何だったら隊を再結成しても良いでしょ。あっち方面はそれなりに収穫が美味しいですから」

莊園主候補がまとめて配置されたら反対側を広げるのは無理だ。

仲間から領地を削れば仲違いしてしまうからだが……普通の領主ならばむしろ結託するのを避けてバラバラに配置するだろう。だから領地の広さに関しては問題ない。

そして侯爵さんちの領地が広いというのが面倒であり、面白い点でもある。

広過ぎる上に飛び地があったりして手が足りないからこそ援助を喜ぶのだ。中央にズケズケと顔を出されたいわけでもないし、基本は辺境部へのテコ入れになる。そして辺境部というのがミソだ。

「収穫って？」

「アンデッドばかりがモンスターじゃないですしね。……何より海があるのが大きいです。五分とは言いませんが飛び地を認めてもらえれば、往復する理由も作れますからね」

この世界には魔石なんか都合の良い物はない。

あつたとしてもただの結石だろうし基本的に価値などなかった。しかしまったく利用の仕様が無いアンデッドと違って、綺麗な毛皮や

羽毛であれば意味が出て来る。

そんなものは期待できないレア・ドロップみたいなものだが、海へ進出できれば別なのだ。エルフの集落を横断しても行けるがどうせ行くなら人間側の土地を通りたい。

「海かあ。海産物は好きじゃないんだよね。東領出身者の私が言うのもなんだけど」

「それもありますが塩ですね、やっぱり。貝紫は怪しいとして運が良ければ砂糖が採れるかも」

塩は割りと高額なので自前で調達できれば自由に使えるようになる。

高級染料である貝紫は期待する方が間違いなレベルだが、砂糖は南国への船が出せるか次第だ。

南領は秋口の朝晩や冬が一日中寒いくらいだが、船でもつと南に行けば話は変わって来るだろう。どこかに常夏の島でも無いものか。

「砂糖か！ それは夢が広がるねっ。もし見つけたら喜捨してもらえるとありがたい」

「喜捨というならうちの神様が優先ですけどね。まあ販売せずに取り置きしなきゃ問題ないでしょうか……って、そもそもまだあるかもどうか分からないので無い物ねだりは止めましょう」

少量だったとしても儲けることは期待して居ないので、自分ちで独占すればいい。

うちの神様は吞兵衛なので甘い物はそれほど好きでも無かったはずだし、むしろ梅酒みたいなのを作るために使う程度の筈だ。

そして何より飛び地が認められるのかすら怪しいので、余計な期待はしないで欲しい。

いずれにせよ莊園の運営計画は順調に始まった。

荘園を手に入れ、荘園に手を入れる

● 無事に荘園を貰って騎士扱いされることになった。

領地付きの騎士であり国家に所属する騎士ではないが、それでも封建契約に基づく立派な契約だ。最低限のランクとはいえ裁判権も持つがゆえに簡単には反故にはされず、腕利きの傭兵上がりと言う評判と何より実績がある間は領主の方も遠慮するだろう。

なのでさっそく荘園の防衛と経営を始めるわけだが……。

最初に打つ手はもちろん、流入する無限湧きアンデッド対策と異種族との交流問題である。

「とりあえず敷地ギリギリに立ってる一家には可哀そうだけど、命には代えられないし保障と引き替えに立ち退いてもらおうと思う。横暴だけど権力を使うならこういう時だ」

過去の出来事もあって、権力に笠を着て何かをするのは好きじゃない。

だがこればかりは危険な上に後へ尾を引くと何かと面倒なことになる。敷地の外に糧を求めるからと好き勝手に出入りされたら、アンデッドはいつの間にか入って来たり異種族ともめ事を起こすことになるだろう。

やるならば断固としてやるべきだし、住民が帰還を始めてない今がベストタイミングだ。人間というものは相談をされたら悩むし対抗手段も考えるが、居ない間に物事が進めば文句を言って保証を求めるのが精々なのだから。

「と言う訳で僕らは今の内に境目にある家を撤去して壁や建築用の資材に替えちゃうけど、その間に族長さんたちと連絡とってくれる?」「こやつ今更何を言っておるんじや?」

「最初に話がまとまってからどれだけ時間があつたと思ってるのよ」
僕が苦渋の決断で家の撤去を使用していると、二人は苦笑して肩をすくめた。

そして手渡されたのはドワーフの族長からは剛盾に、エルフの族長

からは紅梓が代理人であると委任状である。もちろん白紙委任状では無いので、その都度連絡を取るし問題があれば抗議するとある。

だが大まかな協定は僕らの間で相談して良いという事なのだろう。ありがたい気遣いだと思う反面、先に言って欲しかったと思う。

「そういう訳で妥当な内容である事、この交渉が少なくとも百年は長続きする事が条件ね」

「契約の更新はあってもええと思うが、基本路線は継続してもらいたい」

「……判ったよ。おかげ様で時間もある事だし細かい内容に入ろうか」

僕も解体作業の手伝いに行くつもりだったけれど、こうなっては仕方ない。

初期の村人である徴兵組に予定変更を伝えつつ、村長宅へお邪魔することにした。

集会場であるその建物は広く、壁も厚いので少々の事では声も漏れないので丁度良い。領主の館を建てる余裕はないし、余裕が出来ても他の家で実験してからになるだろう。暫くは間借りさせてもらう事にした。

「基本ラインは前回伝えた通り。防衛のために大規模な建材が必要な時は、予め伐採や切り出しに関して話を通すよ。その上で追加条項が幾つか」

そう言って用意した書面が二種、合計六枚。

一種目の羊皮紙は以前に伝えた『人間の開拓権』を譲り渡す事と、その条件付けを他の種族が立ち会って決める事が書いてある。この書類自体も他の種族に同じ物を渡し、任意の相手に予備を作って印章を押して保管してもらう許可も書いておいた。

これに関しては二人とも相違が無い事を確認するだけだ。以前から伝えていた事だし、その間に内容も吟味しているのだから間違い探しではない。

「追加要綱の一つ目。この荘園を最前線の城として使うから、どつちの種族も必要と思えば駐留しても良いよ。普段は協定の監視と交渉

込みで、何人か……『外』が気になる人や協定を信じられない人が監視するくらいだと思うけど」

「可能であって必須ではない……ね。ここは問題ないわ」

魔物との戦いに備えたいけど、別に人間同士の戦いに利用するつもりはない。

そもそも南領と西領は危険すぎて人間同士の戦いとは無縁だし、平和になり始めたら盗賊が出るくらいだろう。そういう時に他の種族に力を借りる必要はないし……領主が僕から領地を取り上げようと思ったら彼らの協力を疑うくらいだろう。正直その辺を疑う程度の仲が維持できるならば問題ない。

「しかし二つ目の交通許可にある冒険者ギルドちゅうのはなんじゃい？ 自由な行き来を禁じるとる割りにはこいつらは許すのよな？」

「行商人の方はまだ判るんだけどね。嫌な奴なら許可出さなきゃ良いんだし」

過度な交流は面倒なことになるので、お互いの領域は守ることにした。

ここで通行許可を出すのだが、エルフの土地に行きたいならエルフの許可をその時に出す。その許可を出すためにも、一つ目で示した協定を監視する人は居て欲しいと書き加えている。一応は逆もあり得るのだが、異種族の領域から人間の領域に来る者は滅多に居ないので忘れていい。

そして二つの種族を利用して表に出したアイデアが冒険者ギルドだ。口入れ屋を仲介とする傭兵組合と何処が違うかと言われたら、あまり変わらないのだが……。

「傭兵と違ってまず戦闘を前提にしない。魔物を狩って欲しいという依頼は出すしスコアに応じた褒章も用意するけど、調査や収集の代理とか何でも屋かな？ ただしその審査は厳正にするつもりだよ。とりあえずこれを見て」

「何よ、そのコイン？」

「……ふむ。等級性か」

やはりこの手の話には先人の知恵を借りよう。

生前のフィクションには冒険者ギルドと等級性というのがあった。そういうのが無い話もあるけれど、その多くは銅クラス、銀クラス、金クラスと言う感じで鉱物の価値に応じたランク分けをしている。物が鉱物の例えだけに剛盾の方は直ぐに察しがついたようだ。

「そつ。一般的な冒険者は銅ランクで見習いは鉄。銀というのは長年任務をこなしたり腕利きなど信用のおける人。金ならその人の保証だけで何人も客に招けたり、領地の防衛くらいなら任せても問題ないような達人になるね」

「私が銀で紅梓が金なのは納得いかない」

「でもまあ……分かり易い区分ね」

話に割って入った双葉と満更でもない紅梓だが、その二人の差が判り易い。

どちらも僕らからみれば同じくらいの信用があるが、双葉はエルフ族の間で信用を得ているわけでは無い。対して紅梓の場合は族長の代わりに交渉に出るくらいだし、剛盾も文句を言わないのだから実力も名声も認められているのは確かだ。

これらの昇格基準を明確に設け、厳正するだけで銅ランク以下の連中が勝手に森や山に分け入らないのは判ってくれると思う。

「だいぶ考えとる様じゃが、傭兵の誰もが冒険者ギルドに加入するとは限るまい？ 口入れ屋に頼まれて動くだけの方が楽なんじゃし」

「そこは特典も考えてるよ。今の出入り禁止免除もそうだけどね」

真面目な話、冒険者ギルドの方に馴染みがあるから作りたいたいだ。

ついでに言うとな神様の教義が殆ど現世利益を追い求める事になるので、社会貢献的な部分を混ぜたいとか、フィクション並に有名になるなら利用したいという腹積もりもある。

それはそれとして剛盾が言うように、何らかの利益がなければ誰も利用しないだろう。

「ギルド参加に金は要らない代わりに資格試験は厳正。メリットとして知識や道具類の調達へランクに応じた補助を与えます。例えば僕が集めた魔物の知識と倒し方。あるいはドワーフの名工が鍛えた装

備の購入権とか？」

「むっ……そこまでするのか」

僕は弱いので戦った魔物の情報は系統立てて用意している。

どんな厄介さでどんな場所に棲んでいるのか、そういうのを聞かれたら応えられるようにしていた。それは彼らも理解しているし、討伐スコアを上げて名声や金を稼ぐ時などは、決め打ちで狩り易い獲物を探したものだ。

知識であれば銅ランクは閲覧許可、銀ランクは模写の許可、金ランクであれば蔵書の持ち出し許可をしても良い。もちろん裏道として、仲間にそういう情報を集めて欲しいと依頼を出すのも良いだろう。依頼の為に依頼を出すとか、報酬に折り合いが付けばの話だが。

「知識と言う意味では地図もかな。迂闊に他所の領地で地図描いてたら罰せられるけど、覚えるのは自由だよな？　だけど冒険者なら自分で描かなくても閲覧は出来るし、銀なら書き写したって良」

「模写して売ろうとするアホは論外ってことね。OK」

意外かもしれないが、地図と言うのは軍事知識だ。

江戸時代にも持ち出そうとして問題になったシーボルト事件もあるが、どの場所に何があるかが判れば攻めるのも簡単だ。

それに情報はギルドの既得権益であり、これを持ち出して小銭を稼がれても困る。依頼主が頼んだらその限りではないが、そもそもそれだけの金を払える大商人なら自分で専門家を調達できるだろう。

「概ね他もこんな感じなら問題ないわ。何日か掛けて考えても良いんでしょ？」

「うん。せいとも本来なら持ち出しは困るけど、どうせスパイも居ないから今は持ち帰っていいよ」

他にも幾つか条項はあった。

例えば開拓権を譲った場所でどうしても欲しい物があれば、既定の料金を払って該当種族から購入する事。逆に欲しい要望があればこちらからも売る事や、中継ぎを受け持つことなどが記載してある。

とはいえどれも境界線を決める意味では当然の事であり、口に出さずとも当たり前前の事までワザワザ記載しているのは『領主に許可を受

けた』とか『向こうの種族が許可出した』とか第三者が勝手にやりそうなことを、前もって禁止しておいたのだ。もちろん引き渡し義務もあるが、罰則としては当該種族の掟や慣習を優先することになる。

「とりあえずまだ先の話だから締結しても一年後には不具合の再確認が必要かな。それに決め事が厳正過ぎたら意図的に破る馬鹿も出て来るし、魔物や災害みたいな緊急避難時に文句をいうのもどうかと思う。そういう時はその都度に話し合おうか」

上に聞け下だから知らない、下の約束は上は周知しないとかは駄目だ。

人間があまり異種族に信用されないのはこの点のお役所仕事の問題だった。役所以外でも下請け孫請けのなどの例もある。急いでカッチリ決める必要はないが、道筋くらいは作っておこう。

そういう感じで堅苦しい事を決めたので、後は楽しい話に移行したいものだ。

「そうだ。二人とも余裕ある時でいいからちよつと協力してくれないかな？ 今の内にやっておきたいことがあるんだけど。ちゃんと報酬は払うからさ」

「なんじやい？」

「簡単そうな事なら構わないわよ？」

やるべき事は終わったので、やっておいた方が良い事業を始めた。い。

かつての失敗の焼き直し。時間が掛かるから荘園主になった今の内にやっておいた方が良く、今ならば以前の様な目に合わないはずなのだから。

具体的に言うのと金策であり、今までの貯えが飛んでいく前にやるべきだろう。

「剛盾さんをお願いしたいのは僕の欲しい建物と、剛盾さんの欲しい鍛冶場の位置決め。紅梓さんの方は森にある植物をちよつとね……」

「別にワシは……あつた方が嬉しいのは確かじゃがな」

「そのくらいなら、まっいいんじゃない？ 薬草取ってこいだと簡単すぎてつまらないけど」

これから作りたいたいのには温室なので、火事場と風呂場は近い方がいい。

温めた空気も利用できるし、日当たりや水回りも合わせて場所の選定は大事だ。

そして何より温室で育てるのは貴重な薬草とか売れる花になる。

以前は町の鍛冶屋と自分たちの知識だけだったが、ドワーフとエルフの協力を得られればもっと良い物ができるだろう。もちろん売り物とする以上は、エルフがいつでも取って来れるような植物は避けるべきだろうけれども。

(前は焦り過ぎてリソース全部突っ込んだところを取り上げられたかな。今回は慎重に行かないとね……)

この世界では良い条件の場所で野菜や花を育てることはある。

だが温室なんか誰も作ってなかったし、故郷に居た頃、獲物を売ってから得た資金で建設した当初は地味な売上ながらも嬉しかったものだ。しかしこの時の僕はすっかり舞い上がって忘れていた。

街に近い方が良く、資金も少なかったから土地は借りて済ませたのだ。

その時に『貸し賃と割に合わない』『次の契約は更新しない』とか言って、土地の持ち主に取り上げられてしまった。自分としては最初の資金を回収できてないので地味な売り上げだったが、貸主から見れば僅かな金で貸したのに儲け過ぎていると見られたのだろう。初期費用とか維持費とか考えてはいないと思うが……。

(そういえばコンビニが初期の混乱を乗り終えて、儲かり始めた頃にも似た話があったと聞いたことあったのにな……。でも、今回は自分の荘園だ。誰にも文句は言わせないぞ！)

今回は以前よりもずっと良い条件が揃っている。

試験データはあるし、職人の腕も集める植物もずっと良い物だ。済む所と場所が離れてないし、保全する能力で温度や水はけを維持することも出来るかもしれない。

順調にいけばこれからの出費を抑えられる以上の成果があるはずだが……やはり荘園の独自色を出せるのは大きいだろう。

洞府を開く為に

● あれから良い事と悪い事が入り混じったような出来事が幾つも起こる。

予定通りに進んだのなんて最初のアンデッド掃討戦と荘園を手に入れた事くらいだ。

分かり易いのは避難した村人の帰郷が遅れている事。

おそらくだが、いつもはこれほどまでに早く退治して居ないので、税を集めるために領主が焦って嘘でも言つてるとでも思っているのだろう。なので税とか、その代用である労働をお願いするのはまだまだ先だ。

「ところで思ったよりもエルフの御客人が多いのはなんで？」

「双羽が作った温室ってやつ？ 説明したら興味があるみたいでさ」
予想もしていなかった技術泥棒にビックリである。

他所の町の技術者がコピーしに来るくらいは予想し、隠すための準備も考えていたが……まさかエルフが正面からやって来るとは思いもしなかった。

これをどう断ろうか、それとも技術が完成した所で高い値を付けるべきかを物凄い悩む。

「あ、心配しなくても増やした薬草を人間の領域に売り出しはしないわよ？ エルフの領域でも育成に困ってる樹があるだけだから。ちゃんとお礼もするし」

「そこは必須の確認事項だね。いきなり金ランク予定者から資格を？ 奪するところだったよ」

危ない。もう少しで友人から知人どころか、見下げ果てた奴扱いするところだった。

転生前は日本人だったので、秘かに評価を変動させることに定評がある。まあ最低限の筋は通すようなのでそこは安心できた。

ならば代価は何か良いかな……と要求する物を考えていると、更なる爆弾が降り注ぐ。

「あ、そうだ。銀以上のランクで良いんだけど資料とかもらえる？」
「……建前の上では国相手でも関与を認めないってつもりだから基本は無理」

目が半眼になって胡散臭い話を見る状態になってる気がする。

それくらいに仰天する程の直球ぶりだ。紅梓はエルフらしから思慮の無さを発揮することもあるが、今回は特段だった。

じゃあ良いのね？　みたいな感じで首を傾げる辺り救いようがない。

僕はエルフスキーでも何でもないので、この辺の対応は容赦なくすべきだろう。なおこの世界のエルフは髪を染めたり入れ墨入れたりする文化があるので、僕の好みから外れます。あとは主に性格が……ね。

「建前で、基本的につてことは条件付きでOK？」

「まあね。まだ冒険者ギルド自体が無いも同然だし、銀以上の審査には金ランク冒険者が立ち会うようにしようかと思ってる。あと……」
言葉を濁すとキラキラした目で見つめて来る。

このエルフ食いつきが良いなと思う以上に、本当に遙か年上なのか疑問に思えて来る。

とはいえ誤魔化すのも面倒だし、いずれやってくる事態に備えて用意した資料があるのでソレを出すだけだ。

「エルフの里にも冒険者ギルドを作って、ちゃんと資料の交換とか業績のまとめとか送ってくれるなら何の問題も無く渡せるよ。あくまでダメなのは他所の組織であって、身内は構わないから」

「じゃあ問題は解決ね。ええと冒険者ギルドの支部を作るには……面倒くさい」

例え国であろうとも見せないというのは、あくまで口を挟まれたくないという建前でしかない。

そもそも莊園主である僕自身が初代ギルドマスターに収まる予定なのだ。それこそ国家騎士団なり魔術師団の中にギルドがある事にして、一定ランク以上のメンバーを引き抜いたら終わりである。

まだ成立したばかりで資料しかなく、他の市町村に何の影響力も無

い組織なのだ。そこまで目くじらを立てることも無いし、裏技なら山ほどあるに決まっている。

「だいたい、警戒しているのはギルドメンバーが勝手に森に入ることだよな？ それならこっちに来てるエルフに登録してもらって、そっち方面の依頼は全部こなせばいいじゃない。今の処、こっちで珍しい薬草とか探してもらうくらいは紅梓さん達なら散歩のついででしょ」「その手があったか！ 何年か後には中核メンバーがエルフだけで揃えられそうね！」

妥協ではあるが、この方法ならば即席冒険者が用意できる。

地図を描いてくれとか言っても頑として受付ないだろうが、『薬草を採集する依頼』と『エルフとの交易で薬草を買う』という複数の手段が用意できるのが大きい。

もちろん温室とも併用できるので、うちの荘園からはかなり植物類の安定供給が可能になるだろう。

「とりあえず薬草とかの採集でも悪くない報酬は出すから、そっちで必要な物はその資金で買えると思うよ。行商人がここまで売買しに来るようになれば、都会でしか売ってないような物も注文できると思います」

「あんまり欲しいと思う物無かったけど……まあその辺は了解」

概ね受け入れられたのでエルフ冒険者に関しては問題なさそうだ。

これで人員について底上げ出来たし、植物の安定供給と言うウリがあれば行商人がやって来るだけのメリットがある。

昔から言われている言葉だが、『近くに美味しい飯屋やファーストフードがあるのに、どうして遠くの創作料理を食べに行く必要があるのか？』という言葉がある。それだけ何をやってるか分からない場所には行きたくないし、それが遠方ならば猶更だろう。その点、うちは質の高い薬草やら花が用意できるのだから訪れるメリットがあるはずだ。

「温室に関しても幾つか条件候補を用意しておくんで、そのどれか……または適当な複合でくださいな。くれぐれもこれ『全部呑む必要がある』だなんて誤解はさせないでね？」

「やあねえ。幾らなんでもそんなわけないじゃない」

そういつて笑う紅梓だが、過去にやらかしたことがあるので信用が置けない。

せっかく他のエルフたちが来ている事だし、不信に思われないうちに仲介したらちゃんと言明しておこうと思う。

ともあれエルフの件で悪い点もあつたが良い点もあつた。

村人が戻つて来るペースが遅い事よりも、将来に向けた点ではよほど大きいだろう。温室のコピーも人間の領域に持ち込まないなら悪い影響はないだろうし。

(それに温度とか管理する結界を敷いたら、向こうには神職居ないらしいから全部パクられる訳でもないしね。……住民はまだ少ないけどそろそろ洞府を開くかな)

準備が出来つつあるのに開かなかつたのは、住民の思考と行動半径だ。

御利益をもたらす神様なら崇めるといふなら人の行き来が多い場所でも良いし、排他感が強いならば逆だろう。日・月や森・山などのエネルギーが多い場所に作るのが定番なのだし、最初は積極的に広める必要はない。

それはそれとしてサツサと開きたいという気持ちもある。

転生させてくれたことの感謝は既に伝えてあるが、やはり慶事があれば折に触れて感謝の気持ちは捧げたいものだ。無事に荘園は手に入ったし、季節的に最初の収穫も間もなくというのもある。

(それに際してやはり教義は現世利益がいいかな。僕自身が転生前の生活と比べちゃうし、銭湯だって娯楽施設に成っちゃてるしね)

現世利益をも求めて生活を向上させ、他者を排除するのではなく努力を促す神様。

そう考え得れば崇めて悪い気はしないし、知識やコツを授けてくれる存在はありがたい物だ。現地宗教との折り合いもバッチリである。

それはそれとして面白かったのが、生活魔法という他愛ない魔法の存在だ。しかし、これがなかなか侮れない。清潔を保つ魔法とかだと掃除が簡単どころか、おそらくは殺菌作用があると思われた。そうい

う意味で入浴は完全にリフレッシュを目的とした娯楽になっている。
(本殿は別にして、やっぱり分社は銭湯に作るかな……。なんかこの流れだと、生活魔法の台頭で廃れた神様っぽいけど……)

洞府を開設するメリットとしては、一番が結界の維持管理がやり易く成る事。

結界と言うのは敷設するとお互いが抵触したり、存在するだけで消耗したりする。

しかし洞府があるとその影響下にある限り、維持管理が一括化されるので扱い易くなるのだ。……洞府による全体結界が最上位である必要はあるのだが。

(後はやっぱり、神様の声が聞けるのはありがたいよね。特に未来予知とか授けてくれずとも、相談できるのは助かるもん)

何とかというか俗世の事に関しては特に協力的と言う訳でもない。

しかしどういふ場所が効率よくエネルギー集められるかとか、結界の維持管理がし易くなるとか押してくれたのも神様だ。

(……そう言えば結界と言うか、保全する機能のアレンジバージョンで体温の保全とか、『方向の保全』で指南車というコンパスもどきの作り方を教えてくれたのは地味にありがたかったなあ。アレがあると戦闘とか凄く楽だもん)

指南車というのは黄帝という偉い神様にうちの神様が授けたとかいう便利グッズである。

コンパスと違うのは、特定の方向を二か所設定することだ。仮に片方は北に固定することでコンパスと同じ使い道をするとして、もう片方を太陽に設定すれば時間が判る。そして本隊に設定すれば遠距離行動しても迷う事は無いし、敵軍の本陣であれば霧の中であろうとも自在に奇襲ができる。

ただこれらの設定には能力同士の抵触で上手く維持管理できないと、あつという間に破綻してしまうのだ。論理的に矛盾がと言うわけでは無く、距離とか強度的な問題の方である。土台に当たる術式を一番強くして、コンパスの針みたいなのを次に、その次は……とか面倒過ぎる内容だった。教えてくれる人が居ないと完成は難しそうだ。

(その辺の逸話込みで、やっぱり軍師系の神様だよ。今の処……おばあちゃんの知恵袋的な扱いしかしてないけど)

何というか申し訳なきで溢れ、洞府の設営に尽力すると改めて誓った。

となると早速行動ではあるが、全体計画もあつて大きく変わるわけでは無い。お風呂など現世利益を感じられるところに幾つかの場所に分社を置くとして……本殿はやはりエネルギー的なモノが良い場所だろう。

この村は盆地なので山は四方にあるが別に四神相応と言う訳でもない。川は西に流れて一番大きな森……エルフの領域もそちらにある。ちなみにドワーフの領域は四方にある山の内、東南に当たるエリアがソレだ。

「東から真新しい太陽の光……いや。日月の両方を取り入れるならやっぱり陽と月の両方が掛かる夕方を基準にすべきなのか？ その上で川と山の配置を考えると北西側かなあ」

元の世界では西域の神様だからといって、別に合わせたわけでもない。

しかし他の色々を兼ね合わせるとどうしてもその辺りになるのだ。村の中央には火事場と銭湯があるので上流側にしたくなるのもあり、エルフの領域を避けるならば北寄りにならざるを得ない。ゆえに北西なのである。

それはそれとして考え込んでいた僕が急に声を出したので、静にしていた双葉が顔をあげた。

「どしたの？」

「あー。神様のお社をまた作ろうかと思ってね」

故郷に居た頃は二人の遊び場に使っていた場所に作ったんだっけか。隠れる事が出来て、そもそも住んでいる地域が山間の村だったので自然と洞穴になった。

しかし不思議なのは双葉の顔が輝くような笑顔になったことだ。この反応はどう考えても昔の事を思い出して、ほんのりと懐かしむような感覚ではない。

「桃園の神様！」

「あー。桃も生えていたらいいね。……エルフの人に聞いてみようか。あつたら植樹しよう」

西域の神様だったらしいが、その山には桃が生えていたという。

それを酒にしたり若返りの薬として食べていたそう。……桃太郎の逸話で爺さん婆さんが若返ってエッチな事をして桃太郎が生まれるという話があるが、それは此処から来ているのだという。

まあフルーツ一杯食べられるようにするって約束したし、エルフと交易するなり温室技術の代わりにもらうなりするのでしょうか。

「となると、お蚕さんも欲しいかな。家蚕じゃなくて純正の天蚕になりそうな気もするけど」

蚕の逸話も面白くて、確か禁輸品だったところに御姫様が嫁ぐ時に髪の毛に隠したんだっただか。

この国には普通に家蚕が居るので大儲けは無理だが、自分の荘園で生産して居れば独自の装束を作れるだろう。

最初はコスプレみたいな扱いされるだろうけれど、前世の思い出を参考に色々と紡ぎあげていくのも悪くないかもしれない。今回は双葉を着飾らせても悪代官に目を付けられたりはしないだろうしね。

こうして洞府を開く準備を整えると同時に、本格的にエルフに注文する内容を決める事にした。

洞府

● エルフから得る物を得つつ、早急に洞府どうふを設営していく。

川がそのままの流れと水路に分岐するよりも少し前で、周囲に山がある中を抜けて来る場所を選んだ。他者が恵みを得る前に一番鮮烈なエネルギーをという心配りである。

なお色々捧げると神さまの力は強くなっていくが、感謝の気持ちや信仰心を間接的に受け取っているだけだ。当然ながら無駄な物や余計な物を捧げてもダメである。排熱とか汚染を捧げて強くなる神様が居ても困るだろう。……まあそれらをクリーンにする神様として認識されて信仰されれば別だろうけど。

「保全能力の限界と、洞府の機能……か」
ここで僕が持つ最大にして、今のところ唯一の能力について説明しよう。

これはおおむね三つの特性を持ち、限界はともカツチリしている。その管理をしやすくするのが洞府の開設だった。

特性1 『保全』

対象一つ、ないし明確に指定できる状態一つを保持する。

最初に魔力を支払って決定し、洞府がある場合は収穫したエネルギーを充てることができる。

また環境が元の状態とかけ離れれば離れるごとに用意した魔力・エネルギーを消耗し、消耗すればその効果は消失。

例として、寒いので暖かさを保ちたいという場合に『暖気』という明瞭でない物を指定するのは割と簡単だ。しかしそのままでは急速に失われるので、厚着するなり建物の中に入らなければ、直ぐに効果は消失する。

特性2 『消耗度の比例』

保護する対象が空間などである場合はサイズが大きくなるたびに消耗度が大きくなる。

保護強度という物は存在しないが、便宜的に保護段階を弱めて消耗

速度を下げることは可能。

例として、子供でも大人でも……居るかは判らないが巨人でも対象は一つ。

しかし建物などは敷地や空間も覆わないと意味がない場合が多くなる。しかし広げれば広げる程に消耗は早い。これに対してテクニクとして、例えば突風を完全に防ぐか消失するかの一択にするのではなく、風の強さを一段階下げたりすることはできる。あるいは家を全てから守るのではなく、虫食いだけを防ぐならば蝗害でも無い限りはコストは大幅に下がるはずだ。

特性3 『抵触の禁止』

保護を一定の敷地に掛ける場合は結界と呼び、結界同士が抵触すると双方が消耗する。

このため同じ場所に敷く場合は、より大きな結界の中に小さな結界を用意しなければならない。

例外は洞府の結界だけで、大枠として見た場合の結界に小さい方の結界が抵触しても消耗は起こらない。

「問題は洞府の規模をどうするかなんだよな」

洞府は基本的に結界の大きいバージョンだが、異なる特性が二つある。

逆に言えばその能力は、先に結界で軽く説明した二つの能力しか差がないのだとも言える。

特性1 『エネルギーの収集と分配』

有益な様々なエネルギーを僅かずつ集め、それを結界の維持に充てることができる。

ダメージを変換することは出来ず、火炎や濁流をエネルギーに替えることはできないのが残念だが、二つ目の能力がこの特性を大きなものとしていた。

特性2 『内部の結界を組み込める』

結界同士の抵触無しにその大枠の中に内包する。

さらには組み込んだ結界は洞府の一部区画である為、その維持に洞府が回収したエネルギーを充てることができる。

通常の結界は最初に支払った魔力のみで維持できるだけだ。

しかしながら洞府に組み込むことで、維持管理がとてもし易くなる。結界なんてものは目に見えないので建て替えが面倒だし、他の魔法の補助で知覚精度を上げる場合など（一番近いアンデッドの反応など）は一々その援助を必要とする。これらの厄介事を忘れることができるのはありがたい。また結界同士の間合い部分が洞府側の優先なので、若干ながらエネルギー効率も高まったりするのは余録としては美味しかった。

ただ、便利な機能を有するが設営できる洞府はあくまで一つだけ。そして何より、その大きさと維持コストの問題が多方面に影響を与えるのが頭が痛い所である

「荘園の西北から東の……駄目だな。もう少し洞府の『領地』を狭めよう。魔物避けに組んでる余裕は無いや」

面倒な話だが洞府を設置するにあたって入念な設計が必要になる。エネルギーの流入と放出のバランスが重要になるというか……。サイズを広げると、それに比例してコストが増大する。また大枠は問題ないが、内部の結界同士は当然のように抵触問題が残っているのが厄介だ。狭過ぎるとやはり消失してしまうのである。

それらをコントロールしようとする広い空間ではコストが膨大になって維持できず、狭い空間にするとガツガツで直ぐに限界が来てしまう。なので程ほどの空間に絞り内部結界同士の建て替えに対応することで、将来の発展に備えなければならない。

「やってることは殆どストラテジーゲームだよな。僕だと洞府以外に管理する方法知らないし、早く何とかしないと」

感覚的には施設配置型のタワーディフェンス・シミュレーションだろうか？

囲碁の様なMAPに色々な施設をコスト内で設定し、その利益や防衛力で領地を運営していくアレだ。囲碁盤にもサイズがあるが、サイズごとにコストが大幅に違うと思って欲しい。

ゲームと違う事は領地のサイズ設定から自分でやる必要がある、施

設の枠バッテリーングでぶつけ合うと結界が崩壊するというシビアな点である。もちろんコストの数字など出る筈もなく、体験してみないと維持管理とかまったく分からないので、ドングリ勘定で多めに考えるか経験の長い神様に頼らざるを得ない。

「どうしよう……。銭湯と鍛冶場は外にしちゃうか？ でも、所したら得る物があっても意味がなくなるしなあ……。でも入れ無い方が計算簡単なんだよね」

ちなみにエネルギーの出入力管理ができるのは、今のところ洞府だけ。

外の結界では内部でエネルギーが得られようとも意味をなさない。結界のバランスを崩したりもしないという事だけが利点である。分社を置けば神様へのネットワークが繋がり、それなりに感謝や尊崇の念が届くかも……。というレベルでしかないのだ。

とはいえ戦闘や鍛冶場よりも内側……。温室までで留めると確実にエネルギー流入の方が高くなる。温室なんてものはこれまでになく、その畏敬を丸ごと吸収できるし、範囲その物が狭くなるからだ。

「……養蚕とか桃林もあるしこの範囲までなら間違いなく成功する。でも入れるとなあ……。転生知識で何か作れないか後で剛盾さんに相談してみるか」

将来的にまだまだ荘園が伸びるならば、銭湯・鍛冶場まで広げる意味がある。

しかし普通の施設だけで終わるならば、広げ過ぎて崩壊する可能性もあった。大枠が崩れるだけならば良いのだが、温室や養蚕場に張った結界まで一気に消えてしまうのが困り物であった。

洞府をロスなくして建て替えたり、その外に別枠の管理システムを作ることは僕は出来ない。可能だったとしても僕は習ってないので神様でなければ知らないだろう。建て替え出来ると期待して小さくして置き、実はできなかつたら大変な事になる。

「少し大きめにして拡大を予定するまではいいんだ。何か作りたい物と言うか……。作れる物あったっけ。石鹸や香水はもう発明されてるしなあ」

確実なのは広くしておき、エネルギーをどうにか増やす方法だ。

建て替えが期待できない以上は、広い方が色々施設を追加し易い。追加施設で収支が合うかどうか判らないが、結界を統合することでメリットも出せる。

洞府以外の結界は使い切りなので、最初に張った後はゆるゆると消えていくだけ。再び張り直す必要があるのだが、洞府の大枠の中であればまとめて管理できるようになるのが大きい。それこそ冷め難いお風呂や、高温を維持し続け易い炉などは魅力的だろう（火傷し難いだけでもいいけど）。

「今のところ思いつかないや。高品質な武具でも増やしといて、一人前に成ったらプレゼントするくらいかな。……後はログインボーナスで配るとか……アハハ」

素晴らしいアイテムや施設でエネルギー収支が増えたりなどはない。

しかし結界の再利用が可能になり、何かしらの維持をし続ける価値があるならば、鍛冶場や銭湯を結界内に入れる意味は大きいだろう。

そういった意味で銭湯の方は思い付かないので、どうしても鍛冶場で生産されるアイテムに考えが寄るのは仕方が無かった。なお非常に残念な事に蒸気機関とかの開発へ目が向くのは、この後に何年も経ってからの事となる。

「その辺も含めて冒険者ギルドは北部のこっち側として……。頭痛く成って来た。休憩するか」

この領地は盆地であり西南がエルフの森に面し、東南がドワーフの山に面している。

北西から川が流れて西側の道はどんどん細く成り、東から北にかけてが街道へ連なる道だ。

アンデッドは国の中央から西側の穀倉地帯から発生するので、勢い、冒険者ギルドのような防衛向きの施設は北寄りになる。結界内に会議室や資料庫だけは入れる様にしないとならないなど結界を前提にすると色々と面倒が増えるのは確かだった。

「……おやつ？」

「うん。お茶にしようか」

甘い物に目が無いあたり双葉もやっぱり女の子だな。

これで紅梓を呼ぼうとしない辺り、取り分が減るのが嫌なのだろう。ゲンキンというかなんというか等身大でよろしい。

それはそれとしてこの国で手軽なお菓子というのは、保存が効く物が簡単に作れる物になる。

「今日のおやつは、なにかな？」

「ガレット。面倒くさいしね。こないだ貰ったお試しのジャムでも使おうか」

知ってる人も居るとは思うが、雑穀を水で溶いて布状に焼いた物がガレットだ。

これを小麦で作って薄く延ばせばクレープだが、生憎とそんな贅沢をする余裕はない。

ここでエルフたちから果物の樹を仕入れる際に、どんな味になるのかお試しで貰ったジャムを使う。もちろん砂糖なんか使っていないのだが、煮詰めている分だけ甘さは増しているのがあるがたい。

「またポンって爆発しない？」

「その辺は止めてるから大丈夫。どっちかという乾燥の方が厄介かな」

以前に食べた時、発酵して空気が膨張して大きな音がしたことがある。

意外に臆病だな……と思ったら、窓の外を伺っていた。どうやら音が怖いのではなく、音がして紅梓がやって来るのを警戒したのだろう。

ちなみに今回やってる発酵を止めるのも結界の応用で、多重結界を作って空気の伝播や温度変化を小さな区画に押し込めてあった。もちろん対象の状況を細かく限定することで、エネルギー消費がどの程度なのかを実験するためである。

「じゃあ私が作ってみるね。任せて！」

「任せるけど……あんまり大量に使い過ぎないようにね。次は買わなくちゃいけないから」

そう言つて双葉が取り出したのは大き目の箱が2つ。

それぞれに別の結界を試してあり、片方は小さく割つた薪で湿気を止める物。もう片方は温度計モドキで、温度によつて色が緩やかに変わる石を保存している。どちらもサイズと形状が違い、やはりエネルギー消費を測る実験用の一環だった。

なお温度計は保全能力の前提として、温度変化を把握する過程で作つた二次品と言えるだろう。本当は温度測定の結果を保全したかつたのだが、間違つて結界を張つた箱に入れてしまい結界同士の抵触で吹っ飛んでしまったのは良い思い出である。

(こういう感じの『A or B』の測定に使う応用は簡単なんだよな。消耗だつて全然少ないし)

あくまで保全する能力の応用なので、使い道に限られるのは仕方ない。

貯金箱に銅貨以外が入るのを防ぐというのは簡単だが、偽の銅貨と本物を区別することはできない。次に明確な本物以外を弾こうと思つたら、含有率が低いだけの悪貨を弾いたというような結果もある。どこまでを偽物と判断するか微妙だと思つたのも良い思い出だった。

だが凄く狭い能力だと考えるならば応用可能であるというのは面白い。

今はこういう使い道を試しつつ、神様が語れるようになったら色々他の方法やら、アイテムとして固定するような方法が無いかお尋ねしたいものであった。

そして場所を区別する為の石を設置し、結界を定礎したのはそれからほどなくの事であった。

とある洞府の銀天君

● 道士の朝が早いかどうかは別にして、普通の荘園領主よりよほど朝は早い。

何しろ領内はまだまだ平和ではなく、防衛体制がようやく整ってきただけなのだ。それも障害物で誘導し、その動きを遠くから眺める程度であるから大したものではない。

それら障害物の集まる北東部は対アンデッド湧きの最前線だ。洞府のある北西部から、いつもと変わりないかどうかを確認に行くのが日課になっている。

「どう？」

「このところアンデッドは減少傾向ですね。他の荘園でもうちと同じ防衛方法を真似してるのかもしれない」

最前線の砦モドキというか、家屋を利用した見張り小屋。

そこを任せてるのは一緒に傭兵を止めた仲間の一人だが、僕が荘園主であることもあり敬語になっている。当然の処世術ではあるが現金な物だ。

ともあれこの発言から伺えることは二つ。

一つ目はアンデッドが減って助かっているという良い面と、他の荘園……おそらく傭兵仲間の中で荘園主候補だった連中が真似しているという微妙な点だ。この世界に特許なんか無いし、有効な手段ならば真似るのは当然とも言える。

「そいつはしまった。真似て良いよと言う代わりに何かお願いしとけばよかったかな」

「はは。それはいいですね。うちで採れない作物でもあればよかったのですが」

当時はそんなことを考えていなかったので後の祭りである。

ついでに言うると他の荘園も似たり寄ったりの場合で、エルフやドワーフと隣接していないという差くらいしかない。こうなってしまうたら、メリットであると考えられないだろう。

例えばそう……この方法を教えて近隣を安全にしたのは僕の主導であるとか。

「うん。そうだね。そうしよう」

「はい？」

僕の脳内思考について来られても困るので独り言だと言つてスルー。

リカバリーの話としては、今現在改良している防衛施設の改良とか配置に関して最新データを手紙を送るとしよう。そうすれば主導者として僕の存在が明確になる。放っておくと青悟あたりの手柄になつてしまうから、やるなら早い方がいい。

そうした場合のデメリットは僕が試した経験が無償で配る事と、領主たる伯爵に睨まれる可能性だ。とはいえ今の処は領主との仲は悪くないし、放っておくとコピーだけされるので行動することは無駄じゃない。

(それに……この村は時々代官を派遣する程度で、自主性があつたみたいだしなあ。村長に荘園主など知らん、出て行けと言われても困るし)

思うのだが、ここの村長は領主の妾の子供とかが送り込まれた村じゃないだろうか？

前に言つたと思うけれど領主館が無いのだがその理由が判るし、村長自身が開拓領主でもない理由が判る。となると最悪の場合、僕と村長で対立する可能性もあつた。

別に村の経営自体は村長に任せても良いのだが、些細な事で対立されても面倒くさい。僕自身は税金と労役の範疇で色々熟す気だけだ、相手の方に隔意が合つたらどうしようもないのだ。

(ここは静かに足元を固めないかね。先にこつちの方が有力だと判れば、無茶しない限りは文句は言わないでしょ)

荘園主同士のネットワークがあつて、領主の覚えもめでたい。

そんな状況で村長が問題を起こすとは思えなかった。やるとしたら領主の陰謀であるか、あるいは僕が重税をとつたり村長をないがしろにする時くらいだろう。

村人たちは親戚が居る村やら町から順次戻ってきているが、村長もそろそろ安全地帯である伯爵の所から戻ってくるはず。もしかしたら伯爵から問題を起こすなど言われているかもしれないが、対策は先によっておくこととしたことはないだろう。

「と言う訳で僕は他の仲間の手紙でも送るよ。防衛に関して目新しい報告があつたら教えてね。みんなに伝えるから」

「判りました、御屋形様」

間借りしている村長宅に戻りながら、送る為の文面も考えておく。僕が用意した地形による防衛の有効性に関して、必要ならば幾らでも流用して良いという追認。それに何かしらの新しいデータもあつた方が信憑性が増すだろう。

見返りを要求されるかもしれないという懸念に関しては、魔物退治は民全体の為であるし、僕が信仰する神様は知恵とコツを分け与える神なので問題ないとしておく。その上で村の産物に関しては報酬次第なので相談して欲しいと切り分けておこう。コピーされるときは一瞬だが、こういう明文化は重要なのだ。

「というか……この手の話に関してはエルフの方がフットワーク軽いよな。……まあ僕らが生まれる前から政治家やつた連中に勝てるとは思わないけど」

温室に関する技術と経験提供に対して、森の産物という代価はちやんともらえた。

桃や蚕に関してはそのまま要望が通った感じだが、恐ろしい事に桑の木ツポイ植物が山ほど送り付けられてきたのだ。そりやお蚕さんには必要な食糧なのだが、どうしてそれほどと思った事はある。普通ならば桑の葉っぱを売りつけるか、取りに行く許可を出すくらいだと思っただろう。

これに対する反応は、ノーマルな衣服の生産と桑の木の世話をこちらに押し付けるといふ算段であつた。ファッションとか無関係な防寒着とか上着に関して交易品にあがってるのはともかく、送りつけて来た桑の葉っぱに関して要求されたのは笑うしかない。まあ要するにそれだけエルフも蚕の食欲に関しては持て余していたという事だ

ろう。

「誰だよ……エルフはノンビリしてて政治とかより慣習を重視する昔ながらの社会形態だなんて言ったやつ……」

まあ天然ボケがリーダーやってたら、とつくに滅びているという事なのだろう。

族長は定期的に変わるらしいし、人間よりもよほど上手くやってる気がする。暫くは利用されることも覚悟しつつ、より良い隣人暮らしをしたいものである。

ちなみにドワーフの方は質実剛健で怒ると怖い連中と言うイメージとあまり変わらない。とはいえ単純に表に出さないだけでやはりお馬鹿さんであるなんてまったく思えないので、こだわりのある職人集団とでも思って置くことにした。

「はいはい。ちよつといいかなー?」

「……紅梓さん。何が起きたんですか? というか何を押し付ける気なんですか」

村長宅に戻ると今しがた話したばかりのエルフが待っていた。

もつとも族長たちと違って素直なヨイ子……考えなしな面がある人なのだが。それだけに満面の笑顔を張り付けた胡散臭い顔だど気になってしょうがない。

こういう時は色々と問題があつて、それを押し付けたい時なのだ。「いやーちよつとした魔物……獣が出てね、面倒くさいことになりそうなのよ」

「それを退治しろつてことですか? 山狩りするから人手を出せつて事じゃないですよね?」

真面目な話、エルフが自分の領域に自ら他人を招き寄せるとは思えない。

呼ぶとしたら自分が絶対的に有利な状況で、ありがたく援助をしてやろうという時くらいだろう。

そう思っていたら斜め上と言うか、答えから行ってしまうと単に紅梓のミスを押し付けられただけである。

「うーん。実はね、もうこっちの荘園に入っちゃったのよ。勝手に追

いかけるわけにもいかないし、一応は追いかけて良いか許可を取るべきかなーって。放っておいて良いならそうするけど」

「対処法は二つですね。僕が狩ってエルフ族に文句を言うか、紅梓さんが依頼を僕に出すかです」

怒りが湧いたが……勝手に入って事後承諾で片付けてない分だけ良しとしておこう。

無視して後から文句を言われる前に通報に来た善意の第三者だと言えなくもない。きつとエルフの仕様だと判る攻撃を当てて逃げられたのだと思うが、今は手掛かりの方が惜しい。

あと、ついでに紅梓に貸しができるというか……似たような事例が起きた時の慣例として積み重ねておきたい。

「えー!?!」

「エー。じゃないですよ。こういう案件は僕得意ですから、ちやっちやと決めてください。依頼を出す場合は地域やら生息やら判つてる分だけ料金は安くしますんで」

かわい子ぶられても色んな意味で困る。

何十歳と年上で性格が難儀してるのでどうてい口説く気にはならない。ついでに言うと言髪を染めるのはともかくタトゥー入ってる人は好みでは無いので遠慮したい。

それにこの人も判つててこういう仕草をしてるのだと思えば、馬鹿しくて本気で口説く気になる以前の話である。

「えーとねー。思ったより足早くないけど……すばしっこくて気配を消すのが得意で、ちよつとした魔法には抵抗力があるのよね。あと外見とサイズは馬より小さいくらいのオオトカゲ……」

「大事じゃないですか! どうして逃がしたんですか!!」

話に出てきたのは六本脚のトカゲである。

確かに足早くないがそれは馬と比べての話。前世で言うトサンコ馬くらいのサイズと速度のオオトカゲだ。皮はそれなりに厚くて微妙に鎧の材料にはならないというラインである。

トカゲの仲間なので足音や気配を消すことができ、探知魔法も効き難いから隠れられると面倒だ。草食性で森の中に棲んでることが多

く、亜種になると沼や川にも棲むという。

「ホラ、アレよ。前に言ってたじゃない？ 繁殖させて馬の代わりにできるか試したいな〜とか」

「うちの荘園に迷い込ませた理由にはなってますよね？ 族長には告げ口しないし、依頼料は格安にしますんで、サツサと何処に逃げ込んだかを教えてください！」

もしエルフの領域で飼っていて、僕の為に送り込んだならばまだヨシでしょう。

しかし子供くらいならパクリとやってしまいそうなオオトカゲを野放しにしている理由にはならない。

木の上に棲む事が可能なエルフには無害だからと言うのも当然なしだ。というか普通のエルフは普通だから地面に家を建てて暮らすしね。

「とりあえず僕は搜索の準備をしますんで、依頼書を早く！ 実は同じ特徴の別の生物とかいうオチもなしですよ!？」

「そこはちゃんとするわよ、もう！」

時間を争うのでサツサと用意することにしよう。

故郷でレアな山鳥や獣を捕まえる事が得意だったのだが、その時の経験を活かすべきだろう。

というかまんま保全能力を使用した小道具の作成何だけどね。

「剛盾さん！ 円盤ない？ 鍋の蓋とかみたいなの。できれば大小揃えて二つ、もしくは一枚と人形みたいなのでもいいけど」

「何じゃい？ 地図でも作るのか？」

この世界にコンパスはないが、円盤を地図の上に置いて方位の測量くらいはする。

だいたい今程度の角度に……というくらいなのだが、今回はニアピンド。方位を図ってオオトカゲを追い詰めるために使用するのだ。

このアイデアの元はうちの神様がエライ主神さまを助けたという指南車がモデルになっている。こっちの世界に来るときに、転生特典を渡すことができない代わりに幾らか教えてもらったアイデアである。

「ええとね。仮に円盤だと仮定して、重要なのは円盤の上と下を抵触させない事。だから複数の円盤でも良いし、高さを作るという意味で人形でも良いんだ」

「ちよつと待つとれ。そのくらいなら今作ってやる」

結界同士を抵触させると消耗して消えてしまう。

そこで数枚の円盤に分けるか、人形を使って区分する訳だ。そしてこの二か所に使う保全する対象を使い分けて、相手がどこにいるのかを追っていくわけだ。

物理的な指南車は、決めた場所とそこからどれだけ動いたかを計算して、元の方向へ戻すという機械だ。確かエンジンだかコンピューターだかにも利用されている仕組みでしかない。

これに対して保全能力を活かしたこの応用技は固定対象1つを指定、この方位に対して逃げている相手を移動対象として設定する。そして固定対象への方向と移動対象への方向で針とか円盤を動かすことでおおよその位置を把握するギミックである。もちろん複数の固定目標と移動目標を設定できれば詳細に把握できるけど、コストの問題と抵触厳禁の問題で難しいのが難点だ。

「今のうちに何人か人を動かして封鎖しよう。この能力は結界と同じ能力だから、あちこちに張ってる場所に入られるとアウトなんだ」

「ほー。面白い仕掛けじゃが万能ではないのう」

こうして指南車モドキを作成し、オオトカゲ包囲網を作ることになった。

相手の居場所が全く分からず、結界に逃げ込まれたらどうしようもないという意味で、その辺のアンデッドよりも難儀しそうである。無傷で捕まえて飼いなせたら、ロボの代わりに使えるかもというのがせめてものリターンであろう。

オオトカゲの大捕り物

● オオトカゲ対策に指南車モドキを組み立てていく。

その作業は故郷に居た時以来で、懐かしさが感じられる。昔はこれを使ってレアな山鳥だとか見つけ難い地域に隠れた獣だとかを狩ったものだ。逃げ込むタイプはそれで終わりだし、空飛ぶ奴相手に移動射撃を練習させてもらった。

そして毛皮と肉は売りに行ったり、神様に奉納したりと色々な面で活かしていた。北の大地と獲物たちだけなら感謝の思い出しかない。吹雪と雪崩で死にかけた時ですらエッチなイベントのキツカゲだったと思えば許容できる。

「固定目標は……村長の家にしとくか。仮の冒険者ギルドでもあるし」

村長宅との方向性を保全した円盤を棒に挿す。

すると僕が右に移動すれば左方向に回転し、左ならば右回転だ。常に同じ方向を指すので自分が固定目標からの辺に居るのががたまかに判る。太陽の角度やら他のランドマークを利用するともう少し詳しく判るはずだが、この固定目標が一番役立つのは地味に吹雪や迷いの森から帰還する時である。神話で出てくる小道具が元ネタなのは伊達ではない。

次に『一番近いオオトカゲ』の方向を移動目標として固定する予定だ。このことで僕からどっちの方向に居るかが判るようになる。今回は知ってる獣（トカゲだけ）なので明確なイメージが出来る相手で助かった。

「えーつと。これでおおよそわかる筈だけど……問題は僕からみた視点じゃないんだよな。瞬時に見方を変えて、説明できるようにしないと」

ただそれだけでは他の人間には意味が薄い。

これに固定目標である村長宅との方向を組み合わせることで、僕からではなく誰もが理解できる固定目標からの位置が判別できるのだ。

分かり易く言うとは移動する僕の位置からどっち方向ではなく、基点からどちらの方向ということで判断に迷えば元の位置を思い出せばよいのがいい。

だが幾つか問題が生じる。

一つ目は自分から見た相手の位置や基点に過ぎず、同行する仲間からは鏡を正面から見ると見るよりも判り難い。そこで結界は使わずに他の方法で補足説明する必要があった。

「とあえず双葉を仮目標にしてつと。少し動いてみて」

「ん……」

簡単な人形を棒の一番上に挿し、これを双葉を移動目標とする。

後は反対側は横に回って確認すれば良い。指南車モドキは地面に置いておいて、正面から見て双葉の移動した先が何処に当たるかをはり地面に書き込む。同じように真横から見た位置を書き込み、元の位置に戻ってその書き込みを把握し直す。

そしてその把握した差異を、円盤の上に書き込んでおくのだ。

正面に居る人から見て対象が何処にいる、真横に居る人間から見ると何処にあたる位置にいると説明する様にメモ書きしておけばいい。

「まっ。僕が使うんだからこんなもんでいっかな。他人に渡すならもつと判り易い目盛りでも付けるんだけど。……あ、もういいよ」

「ん。後でござ褒美」

おやつでも後で焼いてあげるとして、ジャム代は紅梓に回そう。

しかし昔はこの能力に頼るしかなかったのと、獲物を上手く採れたことで色々と使い回そうとしたものだ。木の実や薬草採集に協力するからと手伝わせておいて、上手く見つけられなかったときはとても文句を言われた。

確かあの時は近距離に複数条件あるとダメだったはず。

何が問題かといって最初に収穫した木の実を指してしまうのだ。そりやいつまでも指標がグルグルして、与えた魔力を使い果たすはずである。

(他に……何を作ろうとしたっけ？ 蛇腹剣は微妙だったなあ)

ファンタジー装備に憧れて蛇腹剣を作ろうとしたら、直ぐに剣状態

の保全が無理になった。

じゃあ刃の付いた鞭として使おうとしたら、刃の方向は安定しないし刃と刃の距離も安定しない。だけどこの二つのどっちかを保全すると魔力を消耗するか、結界同士の抵触で消滅するのだ。武器の形状で刃の距離を固定するとしても、方向が真下とか右側だけにしか向かないのである。

今なら剛盾に頼んで機構を簡略化できるにしろ、そこから先が思いつかない。やるなら蛇腹剣ではなく、多節鞭の路線でやるべきだろう。もつともそうそうなるとロマンの欠片も思い浮かばないのだが。(高温の窯とかも失敗したし……。ああ、そういえばレンガとコンクリは成功したはず。確か窯を作る時に量産させられたんだ)

色々試すのに元手の他に、剛盾みたいな酔狂人との交渉が必要だ。その時にレンガで炉を作る手伝いをさせられたのだ。高温の窯も試したけれどあつという間に魔力が尽きるのは同じ、ヒビが入り難い窯は可能だったけどそれだって僕が保全し直す必要があった。

今となつては良い経験だが、レンガ量産とコンクリートの速乾材代わりにする効用はちゃんと成立したのだ。何しろ元が時間を掛けて固くする物である為、型枠を保全したり形状固定を一時的に強化するなんてのは難しくはなかった。もつともコンクリートは北領にある火山の灰を利用した物なせいか、僕のイメージより固まるのが遅かったのでムカついて強引に固定した。

(その辺の経験を活かせることなんかあるつけ？ 赤レンガを量産して村の家を建てるとか、道に敷き詰めて文明圏ポイ雰囲気にするくらいだよな)

かといってメリットがあるほど意味があるかは微妙だと思えた。

そりゃ外側だけでもレンガで立てれば強固になるし、住む人だって魔物対策になると安心するだろう。でも実のところ豚が三匹いる童話じゃあるまいし、レンガの家で守れる魔物というのはたかが知れているのだ。あえていうならばアンデッドが現れる可能性のある北東付近だろう。

北東の家だけでもレンガで固めて安全性を訴え、万一に備えてレン

ガ作りを増やすとでも言えば住民は協力的になるだろうか？ まあ暇な時に労役で作ってもらって、僕が建築時に協力するくらいだろう。

「依頼書と資料できたわよ。これで安く受けてくれるんでしょうね？」

「少なくとも傭兵の一班を雇うよりはね。判ったってば……後は色々な事の練習に使う事にして、それへの期待でもう少し値引きをするよ」

その頃になって紅梓が必要な物を揃えて来た。

「理知的なエルフの筈なのに書類仕事が苦手なのは、単に好みの問題なのだろうか？」

それはともかく資料の方には急いで目を通し、複数体はいない事とか外見に関する情報を確かめる。

「Ok、これなら上手く行きそうだ。人数を動員するけど、それは僕の手元から出すので安心して。サツサと捕まえて村人には安心してもらおう」

「はいはい。私も手を貸せばその分安くなるのよね？ というか私のお金で私を雇うのって納得いかないんですけど！」

必要な情報と手続きが揃ったので、早速移動する。

既に結界前には何人かが配置についているので、労いの言葉を掛けつつ報酬を出すと説明しておく。その時に紅梓に対して礼を言うのは、今夜の酒代を負担してもらったためだ。

「酒と言えば蒸留酒だが、僕にその知識が無いのが痛い。僕でも直ぐに思いつくコンクリートはこの世界に元からあったし、石鹼なんかも同じだ。元の世界で覚えていることなら保全されているらしく思い出せるのだが、蒸留なんか本を読んだ覚えもない。そのうち剛盾とでも話し合って研究すべきだろうか？」

「と言う訳で、紅梓さん主催のオオトカゲ捕獲作戦を開始します。家畜になる可能性があるので捕縛した人には金一封。村の中心部に向かったら殺傷もやむなしですが、習性や動作の情報で少額ながら報酬

も出します」

「おおー！」

周囲の反応はこうだ。

『酒が飲める』『酒が飲める』『酒が飲めるぞー！』トドメに一撃必殺『他人のおごりで酒が飲めるぞー！』である。何しろまだ何も無い村であるし、娯楽と言えばパーティナーとの一夜（夫婦とは限らない）か酒である。酒の分量だってないし、他人の責任で飲酒できる機会は貴重なのだ。

その反応に紅梓の顔は真っ青だ。

資金的な問題もあるが、このグータラエルフは酒と甘い物の両刀遣いである。何をやっても彼女の損害にしなければならない。

「二班は搜索活動、これは僕が相手の位置を補足します。二班はルートを絞る為に動かないでね。三班は二班の傍で待機しつつ、こちらの指示があれば包囲網を狭めて」

「了解！」

既に相手がオオトカゲだと判ってるので、みんな軽装で最低限の装備だ。

重装備の者は村の方に待機し、イザという時に槍で壁を作ったり、槍袂で仕留める役である。

「では早速……西にあるエルフの森から東南中に求めて進む状態。中央にある村長宅からは、当然南下中だね」

「ふうむ。ワシらの山との間にある林に逃げ込む気かの」

「だとしたら経験者（？）ね。あそこは緩衝地帯だもん」

少し歩きながら盤面を見ると、オオトカゲの動きがある程度判明する。

漠然と南下しつつ、相手との相対距離が徐々に縮まっていく感じだ。どこかで相手が警戒して動きを止めるか、別方向に逃げようとするかするだろう。

ということはこちらも二班・三班を帯同して行動するのではなく、どこかでエルフの森方面から中央への道を塞ぐべきだろう。中央への道は今のところ僕らで良い。

「紅梓さんに確認。このオオトカゲは乾燥が苦手な種類で良いんだよね?」

「そうよ。山に登ったりはしないわ。だから逃げ込むとしても林まで」

「だからといって坑道に入り込まれて嬉しくも無いがの」

ここで素早く情報から作戦を組み上げる。

あちらの方向に川や洞窟の類はない。水路はあるから警戒は必要だが、それだって大の大人が二名も居れば十分だろう。水辺のピポポタマスはライオンでも瞬殺するというが、サイズ的にはドサンコ馬くらいである。

なので二班三班をそれぞれ一名ずつのペアで二か所。ドワーフ側と水路に一組ずつ。あとはエルフ側から徐々に追い詰めてもらえば良いはずだ。

「二班と三班から一名ずつ組んで、ドワーフの領域への道と、中央へ繋がる水路を抑えて。他のメンバーはエルフの森側……そうそう。あの辺で待機してて。必要に成ったら移動を促すから」

「うーっす」

一組目が適当な場所で曲がって水路へ向かう。

二組目もある程行った所で僕らと別れて直進するはずだ。その間、僕ら手順を踏まえて作戦に必要な内容を分担する。

足の遅い剛盾と数合わせて連れて来たもう一人が、これ見よがしに動いて囷。中央方向への蓋となりつつ、僕・双葉・紅梓の三人で包囲網を狭めていく。

「紅梓さんは警戒されているだろうから、二番目の囷。途中から風上に回ってくれる?」

「注意を引き付けければ良いのね?」

「追い詰めたら、私が捕まえる」

僕と紅梓は短剣と小弓を持って移動。

狙いは脚だが、六本もあるので微妙である。どちらかといえば移動速度を落とし、行動を鈍らせるくらいだ。本命は捕縛作戦と言う意味もあり、双葉が覚えている眠りの魔法である。

「この世界は下位の魔法なら誰でも使えるが、取得に関して平等であつても機会までは平等ではない。残念ながら田舎暮らしの僕らでは、魔法を覚える個数も種類も限られているのだ。村人の中には生活魔法すら覚えてない人も多いくらいなので、仕方がないだろう。」

「こうしてると、むかし。思い出す」

「そうだね。二人で一緒に山に入ったっけ」

僕は狩人の家に生まれたので、山鳥を獲ることが多かった。

対して双葉は薬師なので、基本的には攻撃しない。それはそれとして自衛手段として弓とか短剣の使い方は覚えたが、眠りの魔法を彼女が覚えるというのが当時の最適解だった。もちろん僕は別の魔法を覚えて負担を折半していた。

その後には傭兵となつてもそういった分担任は変わらない。

僕が水系統から、水の生成や初歩回復の魔法を覚えてフィールドワーク中心。彼女が着火の魔法や活力の魔法を覚えて、自前の薬草と合わせることで治療系や漢方系という風に分け合つたのだ。

「都出身の魔導師が僕らを合わせた三倍以上を覚えたつて聞いたら驚いてたよね」

「驚いたのは双羽。私は知ってたもん」

と言う感じで雑談を交え、仲間達にはハンドサインで合図を送る。

僕から見て相手がどの辺かを腕で指し示し、掌や拳の動きで待機や移動を指示していく。

そして相手の動きが止まり、僕らだけが動き始めた時のことだ。

「……気が付いた！ 所定通りに行動！」

「了解じゃー！」

「……」

僕の指示で剛盾たちが移動を開始。

紅梓は既に足音を消し気配も隠そうとしている。僕らから見れば風上なのでまだ判るが、流石にエルフの隠形は凄いと感心せざるを無かつた。

そしてオオトカゲは剛盾たちの動きに驚いて、紅梓の方へソロソロと動いていった。おそらくはそちら方面から中央へでも抜けるつも

りなのだろう。

(僕が先に立つから。ゆっくり魔法使って)

(うん)

軽く手を握り合って、僕はもう片方の手に短剣を構えた。

森の一角であるためか、木々がそれなりにあつて小弓では当てにくいのだ。

やがて紅梓に気が付いたオオトカゲが、ビクッと体を震わせて一気に走り始めた。

「……今だー！」

「えーいー！」

さすがにエルフの弓は森の中でも正確だ。

牽制のはずなのにちやんと足の一本を捉えていた。僕は接近しながらその事を確認すると、短剣を振って同じ側にある足を狙う。

そして組み付きながら剛盾たちが援護に来るのを待とうとすると……オオトカゲはガクつと動きを止めて、今回の騒ぎは終了したのである。

降臨

● あれから新しい住人が増えた。

最初にその姿を見た時は我が目を疑い、二度見した後で九回くらい頭を下げた。仮に目の前に王様が居てもここまでではない。

その様子を見て剛盾や紅梓に正気を疑われ、あるいは病気ではないかと勘違いされたのも笑って許せる。

「銀や。息災にしておったか？」

「はい。娘々もお変わりなく」

どうみても娘と言う年齢ではないが口にしてはならない。

大した魔力も持つていないはずだが、それは全力で僕のせいなので疑うのも失礼な事だろう。

そう、我が神でありこの世界に転生させてくれた九天玄女さま（分霊）である。人形のようなサイズで浮かび上がる……というより、ホログラフのように見えている儚い存在だ。しかしこの時をどれほど待ちわびた事か。

「と……ころでな。アレはなんぞ？」

「……ああ。この間、新しい住人になったオオトカゲです。名前はまだ無かったかな」

娘々が口元を抑え、もう片方の手でナニカを指し示す。

そこに居たのは銭湯から流れて来る廃湯（？）に浸かっているオオトカゲであった。

乾燥に弱いので水や湿気とか色々試した結果、温めのお風呂でマツタリと寛ぐことが判った。頭カピバラかよと言ってはいけない。テスト期間中であり、専用のお風呂を用意する手間も惜しいので汚れたお湯を軽く濾過して浴びせている。

「左様か。しかし何時の世にも何処かで見た貌が居るのう。その昔、あのような霊獣に乗っておったものよ」

「そういえばあちらの悪……女神は騎獣に乗っておりましたね」

アスタロトは竜に、ゴモリーはラクダに乗っていたんだっけか？

四大の魔王たる竜姫公アスタロトはメソポタミアでは女神であり、元もとは獅子を従えていると言う話もある。ゴモリーのほうは良く知らないが、初代騎獣が魔王マルコシアスだという話なので原典では相当に高位の存在だろう。

いずれにせよおっかない……美しい女神さまには獣が良く似合うのかもしれない。

「何匹か押し付けら……いただきましたので、お乗りになるのならば鞍を誂えますが？」

「もう少し力が貯えられればそれも良かろうな。どのような経緯ぞ？愉快ゆえ教えてたもれ」

あまり楽しい思い出ではないが、探られたら簡単に判るので喋ってしまおう。

神に嘘は効かないわけでは無いが、嘘を吐くのは得意ではないし、そもそもバレたら大変である。

先に一行で要約すると、エルフに畜獣化を押し付けられたのである。

『つがいは何匹か送るから、飼い方が判ったら教えてだつてき』

『……なんか便利に使われてる気がするなあ』

オオトカゲが家畜化できるならエルフにも利益があるからと無償で提供すると言われたのだ。

紅梓がご機嫌なのはきつとその辺の交渉をまとめたら、捕り物をした時に僕らに支払った雇用料を、エルフ族が代わりに出すとか言われてるんじゃないだろうか？

こちらとしても無償で家畜が増える上に、その問題を他者と分割協議できるなら悪い話では無いので断るはずもない。まさしく掌の上で踊らされている感がある。

『馬ほど速くなくて寒冷地や乾燥に弱い。代わりに近場では機敏な……ロバってとこかな。あんまり戦闘に向かないし』

期待していた程の能力をオオトカゲは持っていなかった。

六本脚の機敏さを活かして逃げ回っていたのも臆病だからゆえで、軍馬の代わりに使うのは難しそうだ。得をしたのは生態を知ること

ができたエルフくらいのもだろう。

そんな話をしたら神さまにはクスリと笑われてしまう。

「かような事で足踏みしておるとは銀は惚けておるのう」

「……オオトカゲの話は突然でしたし、損にはならないんだから請け負つても悪くない話だと思うのですが……」

ホホホ……と物語の中でしか聞かないような笑い声で返された。

話を煙に巻くというか、これはこれで演技であり流れを切つて、自分の良いように作り変えるテクニクなのかもしれない。思えば紅梓の能天気振りも、計算されているんじゃないかと思う時がある。

そこから感じるのは、女の人つてコワイと警戒するくらいだ。きつとエルフの族長も女の人じゃなからうか？

「惚けておると言ったのは、そなたが目標を見失のうておるからよ。考えてみよ、この地を手に入れてそなたの目標は一度終わつておろ？

より良き地にするとか、おなごを閨に侍らすのが目的であれば先ほどの件は笑い話にもならぬ」

「それはそうですけど……」

まあ、言われてみればその通りである。

僕の目標は豊かな生活を送り、ソレを誰にも奪われない事だ。その意味ではエルフに便利使いされても笑つて過ぎ、領主が取り上げる事の出来ない絆を作つてしまえばよい。例えエルフ族全体にその気が無くても、他人からはそう見えないのだから。

そういう意味でオオトカゲがロバと変わりないレベルだとしても、人間側から荷馬やロバの供給を止められても労働力には困らないというメリットだけで十分なのだ。もしかしたら大型の馬車や荷車のキャラバンを走らせるのに、重宝するかもしれないではないか。

「そう……ですね。ご助言ありがとうございます」

「うむ。力が戻ればまたなんぞ言葉を投げてても良い。再び励むが良いぞ」

そんな言葉を残して霞の様に消えさってしまった。

ただそれだけの邂逅ではあるが、それだけでも良い方向になった気がする。

特に何かを得たわけでは無い。

しかし新しい目標を立てるべきだという指針と、その方針に沿っているならば多少誰かに利用されても構わないのだという基準ができた。前世の事を知っている存在が居り、助言を得るといふ安心感だけでも違うだろう。

「となると目標と手段は何だろうか？ お城を建てるという方便を本当にしても良いんだけどさ」

最初にそう言ってみんなを説得した。

アンデッドが湧いても困らないだけの砦を建て、掘りや壁を作って安心できるような環境にする。手っ取り早い目標としてはその辺だろう。

しかし現状では困って居ないのと、少しずつ堅固になってる掘りと壁のおかげで放っておいてもいつか達成できそうなレベルであるのも確かだ。天守閣とか縄張りに関して和風の山城を立てるとか、別荘を作って二の丸にするとかでも良いのだが、それは過程でしかない気がした。あくまで幾つかある過程の一つで、豊かな生活を支えるための城壁というやつだ。

「仮に目標を五つくらい作るとしたら防衛体制の完成が一つ目で、お城は三つ目か四つ目って感じだよな。間に食事情の改善や冒険者ギルドを入れて、神様の周知もどこかで入れたい。となると……」

言葉に出すだけで明確な指針を得られたような気がした。

同時に自分が今まで逃して来た意欲と言うものが、もう一度感じられてくる。荘園を手にするのも防衛施設を充実させるのも、より良い生活を守るための手段でしかない。それなのにいつの間にか立ち止まっていたのだ。

最終的な大目標を定め、ソレに抵触しないならば細かい事はどうでも良い。何かしらで選択で悩んだ時にうちどらか片方しか選べないならば、大目標の達成に欠かせない方を選べば良いのだ。

(やっぱり前世での生活を最終目標にすべきかな。そしたら転生して面白い世界を見れた分だけ全部成功みたいなもんだし。レッツ近代

生活教?)

名目としてはどこかにあるユートピアを再現するだけでもしておう。

神様の教義は現世利益を追求し、豊かな生活を実現する事。魔物から身を守りみんなで知識やコツを共有し、僕のところに来たら色んな物が手に入る様にすれば良いのである。

そうすれば田舎暮らしであろうと都会にコンプレックスを抱くことも無いし、前世の生活を懐かしむことはないだろう。その上で親しくしている人々も笑顔になれば万々歳である。

「そうなるよこないだからの件はどう考えれば良いのかな。オオトカゲは『ロバを売らないと言われても困らない』から成功と考えても良い訳だけど……他に何か……」

エルフではお風呂は薪を無駄に使うので、滅多に入らないらしい。そもそも生活魔法で綺麗にできるし、リフレッシュするだけならば泉での行水で十分という判断だそう。だからオオトカゲがお湯で和むという性質を知らなかった。そして飼いならして荷馬にすかはともかく、脅威が減って万々歳だろう。

そういった面を踏まえると、うちと交易して色々な情報を得ることはプラスだと思うはずだ。こつちから見ても、エルフとの交易強化は大いに意味がある。かだから損得という意味では決着がついているのだ。

「となると知識の蓄積と、どういう基準でそれらを教えるかって事だよね。安売りするのもどうかと思うし、押し付けるのもどうかと思う……」

魔物知識のコーナーに、獣類を分類。

オオトカゲの生態とか能力を示し、編纂するのはアリだろう。そういうのは秘匿して冒険者のみが知ることに来たり、お金を出して秘蔵の書を買って欲しいと言われたら譲るくらいだろうか？

もし積極的に情報を流すとしたら、横のつながりで荘園主や伯爵・侯爵といった身内側へのアピール。あとは馬やロバを扱う商人に教えて、オオトカゲを売る商売を始めたい時だ。

「後は濾過技術かな。知ってる人は知ってるけど、その辺は判り易い例として公表しちゃっても良いかも」

先ほどオオトカゲがお湯で和むと知って、ある程度濾過していると聞いた。

方法は単純で岩と砂の階層を通して、炭やら草を燃やした灰を溶かしたくらいだ。これで大抵の汚れは落ちるし結界を間に敷いて低級ランクで効果を試したりもした。

こうした知識はまとめられておいて頒布しても良いだろう。

生活に役立つし、煮沸すれば飲めることも含めて生活に役立つので、神様の教義の一環として衆生を助ける情報セットとしてバラまく種類になるだろう。少なくとも邪教はこんなこと教えない。

「そっか。こういう知識を日頃からまとめおけばいいのか。僕だけの強み、秘匿情報、販売用、頒布用……。いいな。手紙に書くなら面倒だけど教本なら一回で済むし、早々販売できない言い訳になる」

この世界に紙はあるが、まだまだ高価だ。

字を書くのにも失敗することもあるので、手紙は基本羊皮紙になる。その場限りのメモなどは、昔ながらの木製立て看板や木切れと言うことも珍しくない。

そうした時に読み難いのは確かであり、紙の本は閲覧用になる。

賢者の学院などでは紙の本で管理するが高価なので、学生や貧乏学士のアルバイトで写本があるくらいだ。冒険者ギルドに置いておいて写本ならば許す知識や、本殿に立て看板や石碑で誰もが読める知識などなど色々な管理方法があるだろう。それこそ前世という和紙の作成を目指して、高級品紙としても良い訳だ。

(和紙の作成は自信ないから、とりあえず結界で誤魔化しておこう。活版印刷……は無い方がいいな。知識を売る強みが無くなっちゃう。誰かが知識の独占を狙ってうちを攻めたら、先んじて印刷する時の切り札にするくらいかな)

前世の学校で課外授業で和紙の作成や版画みたいな印刷ならした事がある。

しかしながら和紙は上手く行かなかったので、知識はあるがコツが

まるで掴めてない状態だ。販売する程に自信がないし、エルフが木々の問題で良い顔をするとは限らない。やはり知識の閲覧用と、贈り物にするくらいだろう。

そして印刷技術に対して、即座に研究をしない方針を立てた事、そして危険な状況に陥った時に逆利用することを思い立てたのは、大目標が決まっているからだ。前世の生活を目指すならば活字印刷などはあつて損はないが、今はバラまかない知識。としてイザと言う時はバラまいてでもこの地を守るための知識であると系統立てて考える事が出来た。

「ひとまず今までの知識や技術もこんな感じで再編集するとして、最近ではエルフとばかり交易してるし剛盾さんたちドワーフに少しお願いしてみるかな」

加工用の機械はそれほど難しい物でもない。

問題は どうして前世の課外授業で失敗したのか分からない事だ。その辺の研究を剛盾にお願いするとして、確か灰が結構な量で必要だったはずである。

ドワーフの領域にある火山から、火山灰を仕入れて色々研究するのも悪くないかもしれない。まずは防衛用のコンクリートに、ブランド化できるかどうか分からないから放置してた石鹼も今となつてはアリだ。一緒に前世生活を目指すために研究してしまえばよい。大量に灰を仕入れるならば、その辺も同時にこなせるのだから。

新しい目標を見つけたことで、僕は再び動き出した。

第二部

やがて金字塔へと至る再点火

● 新しく目標を設定することにした。

最終的に目指す大目標と、そこに至るまでに当面の目的として目指す小目標だ。

漠然と良い生活をしたというのではなく、大目標として前世の豊かな生活を再現。

ひとまず目指す目的として、この荘園に技術や知識をもたらして豊かな住処とするのが小目標である。

「衣食住というし、この辺をメインの縦軸に据えてオマケ込みで色々実践的な知識を集めていく。そして公開段階を横軸に決定と」

これまでにやって来た事を縦軸と横軸に分けて分類。

今までの総括を行いつつ、これから何をするかを決めていく。

やはり目標が決まることで目指すべきところが決まるのは大きい。

ただ目的を決めるだけではなく、段階を踏まえたりする余裕がある事を自覚できたからだ。

「衣食住の衣は今のところはお蚕さんを手に入れた段階。これに関しては育てていくしかないけど……将来的にはファッションでも確立する？ 流行である必要はないけど、独自のブランド性は欲しいかな」

服装を見ればその人が判るとか昔から言われている。

さすがにそこまでピッチリするのはどうかと思うが、田舎者と思われるかどうかはプライドの面で重要だ。格好良い服や可愛い服を売っているならば訪れてくれる商人は多いし、住民たちの満足度も違う。

とはいえ流行は容易く変遷するもので、こればかりは装備とは同じにできない。戦闘ならば重装甲・軽装甲くらいが良いが、格好となればそももいかないのだから。

「エルフからもらった蚕はやっぱり天蚕だったし、色が乗り難いのを逆に特色とするとして……あとは意匠の統一性があると面白いかも」
普及している家蚕は白い個体は小さいが殖やし易く、管理もし易い。

しかし天蚕または山蚕と呼ばれる種類の蚕はそれより大きい癖に死に易く、糸が強靱な分だけ染色し難いという欠点があったのだ。
そこで普通に編み込むのではなく、服ならイニシャルとか縁取りにして目立たせる。その上でそれらをあしらったコートや帽子を外装として付けくわえるという独自性を持つのはどうだろうか？

「この世界には国の紋章とか騎士団章くらいだしなあ。メイド服じゃないけど制服って文化は良いと思うんだよな」

そういつて双葉がメイド服やナース服を着る姿を思い浮かべる。
そして今回取り入れようとしている外装を追加。ナースキャップやスカートの一部に、独特のラインが入った光景に発展させる。

エッチな事に使うかはともかくとして、コスプレならぬ個人的なファッション・ショーを愉しむのも良いかもしれない。本格的にやるなら領主経由で侯爵さん主催の大規模なお祭りかお茶会でも催し、各家の独自性を喧伝するのだ。

「よし。蚕から始まってファッション、そしてファッション・ショー。夢が広がるし地域も潤うから何時広めるか次第ってことで良いかな。じゃあ次は……」

目先の目標として蚕の増殖、生糸としての使用法確立。

そして独自ファッションに繋げるといふあたりには秘密があつても良いかもしれないが、村で育てる以上はバレ易いしバレても問題ない内容だ。殖やし易くするためのコツを見つけたら隠しておけばいい。

他所の荘園で殖産に励まれても困らないし、何なら余ったらという前提で卵を分けてもあげても良いくらいである。家蚕と違って……天蚕は食べる葉っぱの幅が広いのもあるしね。

「問題なのは食かあ……これは果てしないぞお」

現代社会における料理の味は、改良の積み重ねだ。

肉にしても野菜にしてもたえざる品種改良の積み重ねがあつての味に

繋がっている。天蚕から家蚕への変遷も大きい、食物の変遷も凄まじく大きい。ハッキリ言って自分達だけでは二世代くらいの改良が精々ではないだろうか？

とはいえ目の前の目標として、誰も飢えないようにしたり、いつでも食料が手に入るといふ目標は悪くない。少なくとも包囲されて飢え死になんて願ひ下げなのだから。

「肉牛は年一回のお祭り料理として、少しずつ改良かな。まだ山鳥から鴨みたいなのを揃える方が早いとか先が長過ぎる。その上で穀物を仕入れ安くする必要があるから、どこかで中央を奪還してもらわないといけないんだよね」

この国が終わってる理由も、群雄割拠になっている理由も原因は一つだ。

中央から西部にかけての無限アンデッド湧きが、地方を越えて四方に攻め入ろうという気概を奪っていた。食料が慢性的に足りてないのだから、出征に回す余裕があるわけでもない。

とはいえアンデッド相手そのものは簡単なのだ。僕がやったように地形防衛と小道具を駆使すればいい。それこそ馬車に銅張りの装甲つけた集団を十両・二十両と用意して、攻撃魔術の特異な魔導師や鎮魂儀式の出来る聖職者でも揃えれば何とかなるだろう。国が亡びる前に諸侯の誰かが決断できるかどうかはネックである。

「うちから一番近いのは侯爵さん……だけど、やってくれるかなあ？」
逢ってみた感触として、むしろ中央の貴族がヒーヒー言うほうが満足な気もする。

動くとしたら、他所が統一に向けて動き出した時に何処かの勢力に協力する為だろう。僕が促したとしても、たかが荘園主の言葉に頷くとも思えない。

もしその辺で何とかしようと思うならば、効率的なアンデッドの退治法を伝えて、南領から先に要塞化するくらいだろうか？ アンデッドを完全に跳ねのけるようになれば、もしかしたら中央を奪還して平和な国を作ってくれるかもしれない。

「そして……やっぱり住。ここに戻って来るんだよね」

仮に侯爵さんが動いてこの国を平和にしたとしよう。

良く分からない理由やこだわりで決断するとかありえる話だが、それはそれとして同じような意味不明な流れでこっちに攻めてくる可能性も零ではない。というか国力を上げるために全て直轄地にするとか、有望な土地を取りあげて替地に移動させるのは支配者の常套手段だ。

最悪、他所の土地でやり直すのはまだ良い。

死ぬよりはマシだし、替地に何らかのメリットがあるならばやり直すのも手だろう。どうせ僕は北領から逃げ出した身分なので、拠点を変える事に恐怖などはなかった。

「だけど舐められて何もかも取りあげられるのだけは駄目だ。あの時の経験はもう沢山だし、その為の拠点……その為の城だもんね」

本に書いた知識も何もかも置いて行け。とか言われる可能性もある。

そこまでみみっちくやるとは思えないが、僕はこの地を豊かで便利に発展させるつもりなのだ。上はともかく、中間層の連中が奪っていく可能性はあるだろう。北領では温室を奪われ、危うく双葉も妾にされそうだったのだから。

その辺りに舐められない為にも、魔物と戦えるだけの武力と豊かな戦績。そしてこの場所を取り囲んだ時に、攻め落とせないから交渉しよう。そう言わせるだけの威容は必要だと今更のように思う。

「と言う事は優先順位として、このまま拠点をお城にしてしまうのを継続。オマケで衣・食の改良つてどこか」

何といっても予算は無限ではないのだ。

傭兵時代に蓄えたお金は有限で、出ていく一方だ。エルフやドワーフとの交易はないよりマシであり、どちらかといえば物々交換の延長上でしかない。

住民たちが大方戻ってきたことで、週に数日までの労役に関しては余裕が出てきた。計画立ててやっていくしかないだろう。

「とはいえなあ……戦闘に関しては諦めるとしても、何をやったら防御力が上がるんだ？」

ひとまず、こないだ思いついた範囲でレンガを増産するつもりだった。

日干し煉瓦を作り、程度の良い物を焼煉瓦として積み上げていく。そうすれば徐々に防御力は上がるだろう。

だがそれはあくまで中央の名城や要塞都市を真似た程度の防御力に過ぎない。アンデッドならば問題ないが、仮に騎士が攻め寄せるとしたら何の躊躇も抱かないだろう。

「……アンデッド対策の掘りと壁を徐々に前へと増やしていくとして、中間層に防御施設を兼ねたのが欲しいな。今のじゃ薄過ぎるし頼りなさ過ぎる」

対アンデッド用の堀と壁は、どちらかといえば水路と柵の方が近い。

ちよつとした穴と障害物で進路を誘導し、一か所で守ってトドメを刺している。効率的ではあるが対人性は殆どないと言っていいだろう。

(アンデット以上の魔物対策ってことで、守り易い場所に作るか……。そのラインは嚴重に作って、村人が避難できるようにするっていい訳で大きくできる。普段は集会所なり、工場として使えばよいもんね) この荘園は盆地なので生産地形は少ない。

同時に守ろうと思えば簡単なので、幾つか広くなっている場所に壁を作れば良いのだ。ただの壁では往来し難いと文句を言われそうなので、工場とかを兼ねて大きな建物にすれば良いだろう。

そこで生産するのは衣食住の何か、場合によっては牛や豚を育てる場所でも良い。それこそ穀物を備蓄する倉庫なら、防火する為に煉瓦と土蔵の建物でもおかしくはないだろう。

「後は……何かあったっけ？ 地形で守るのは和風の城を着想にしたんだけど……」

目についたのは、アンデッドを誘導すると書き込んだメモだ。

地形の流れを作って誘導すること自体は間違っていないのではないかと思う。

そういう意味で村の中に壁や建物を作るならば、迂回させて一か所

に導くべきだろう。効率的に移動したらそこに集まるような場所で待ち構え、四方に砦ならぬ工場を作っておいて待ち構えるわけだ。後は矢を降らせるなりすればそれだけで勝てる。

「えーと、これが今の地形で……畑がここ。居住区が此処だろ……」
邪魔だから作ってない施設を、あえて守るために邪魔な場所にする。

代わりに理由を付けて広くして、中で作業できれば良いのだ。先ほど蔵といったが、干物を作ったり雑穀から殻を振る落す為の場所でも良いのだから。

そう思つて縄張りを考え直すと、今まで施設を作るのに躊躇つていた場所にも置けるようになった。村人たちにも移動してもらわないと駄目だが、今は幸いにも魔物の害がある。理屈をつけて保証し、場合によっては防御施設へ逃げ込み易い位置にしてあげるのも良いだろう。

「よし、こんなものかな。後は防御用のカタパルトとかを揃えてみるか」

こうして計画が動き出したのである。

成形

● 計画を立て直したことで、優先順位を決めて行動を開始。

まずは町割りを見直して、城の縄張りを調整していく。こればかりは魔物の脅威が残っている方が良い。対人戦闘は念のためではあるが、魔物がいなくなつてからでは口実も無くなつてしまうからだ。

事実、住民たちに仮目的で魔物用だと説明すると受け入れられた。彼らが労役で作った煉瓦を使って作った防備設備で、彼ら自身を守れるというのだから当然だろう。立ち退く家に大して、空いている場所に家を移す際も便宜を図るなど色々な保証をしているのもある。ついでに労役後は銭湯を無料開放したら喜ばれた。

「冒険者ギルドに大地母神の教会、領主館と倉庫兼作業場……そして見張り小屋。ひとまずこんなもんか」

村の北西部、洞府のエリアに冒険者ギルドは確定。

結界の中に入れて資料を守り、会議室の活気を取り入れるのは当然だろう。その上で青悟との約束を守るという形で教会を建て、領主館や蔵ともども防衛施設化する計画だ。

村ごときで煉瓦造りの建物なんか普通はやらないし、向こうの費用で建てるわけでは無いから文句を言われる筋合いはない。扉が頑丈だったり窓のサイズが防衛施設にしか見えないのは御愛嬌というものだろう。場所だつて村の中枢なので嘘はついていない。

「そういえばエルフやドワーフの領域には魔物は居るの?」

「居らんわけじゃないが」

「対処に困ったことは……滅多に無いわよ」

村長が戻つて来たので仮事務所を明け渡し、仮設住宅で会議。

念の為に剛盾や紅梓に尋ねると、こんな回答が返つて来た。二つの異種族の領域である南端側は基本的に安全らしい。この間のオオトカゲが例外で、それも滅多に無いのだとか。

あるいは魔物への対策が何百年単位で行われており、僕がやってるような事は既に実行済みなのかもしれないが。

「ということとは南に防壁は要らないかな。大繁殖が起きてこっちに逃げ込んで来ることあるなら作るけど、不要なら予算と資材を使いたくないし」

「あつたら助かるのは確かじゃが、そのイザちゆう時を思い浮かばんのう」

「それこそドラゴンでも出てこない事にはないわよ」

籠城戦を目指すならばグルッと一周欲しい所ではある。

しかしそこまでの余裕が僕の所には無いし、異種族相手に警戒しているように見えなくもない。彼らと協力体制を築いていると見せたいならば、むしろ壁などない方が良さだろう。

それに東側は山が連なり、西には川が流れている。警戒するならばそちらを突破して来る無茶なレンジャー集団かもしれない。

「なら無しの方向で。もらった資材で精々立派な壁でも立てるよ。後は東西に見張り小屋を兼ねた避難小屋くらいで」

「そうしてちょうだいな。出来るだけ樹は切りたくないんだから」「こつちは別に構わんが、買ってくれた方がええのは確かじゃな」

エルフとドワーフは基本的に今回の計画に賛成とのことだ。

魔物が流入してくるのは主にこちら側だし、僕が防備を重ねた城を用意すればするほど彼らの安全圏も確保される。交易しているのは自分で見定めた人間……僕が居れば良いという事だろう。

利用されている事になるが、こちらも彼らを利用しているので構わない。交易はそもそもwin-winでなければ成り立たないし、何度も繰り返すが彼らとの友好は翻って僕を助けるからだ。

「剛盾さんに頼んだカタパルトは、相手がアンデッドや獣くらいなので威力はそんなに要らない。ただ広範囲にばらけるか、遠くまで飛ばせたら助かるかな」

「任せて置け。飛距離だけなら簡単じゃわい」

これら対人戦共用で使えるので問題ない。

カタパルトこと投石器は汎用性が高く、幽霊系以外の敵に有用だった。飛距離があり範囲攻撃可能ならば、遠くから牽制する事が可能なので一本道を守るには十分だろう。それぞれの防衛施設から放てば

同じ場所に降り注がせることができる。

あえて言うなら穀倉地帯奪還戦用に持ち運び重視だろうが、そんなのは遙か先でしかも不確定な話でしかない。

「その辺は良いのじゃが、あの鑄型は何に使うんじゃ？ カタパルトの弾には小さいし、そもそも石で良からう」

「あれは新しい保存食用だよ。お菓子も作れるけどね」

「お菓子？… どんな味なの？」

剛盾には他にも頼んでおり、銅板を挟み込む簡易鑄型を注文していた。

甘い物に目がない紅梓は、面倒な会議には出席しない事の多い双葉を警戒してキョロキョロしている。

確か前にガレットを焼いた時に同じように双葉も警戒していたはずだ。妙な所がソックリさんだと思う。女の子が甘い物に弱いとしても、そこまで露骨に警戒してお菓子を抱え込まなくても良いと思うのだが。

「元が鑄型だからね。雑穀を水で溶いて中に適当な具を入れて焼くんだ。お菓子として食べるなら甘蔘とか芋の汁を多めに入れたり、余裕が出来たら卵を混ぜても良いかもね」

いわゆるグラノーラーバーとかなんとかメイトの類だ。

水気は途中で飛んでしまうからこそ長持ちするし、糖分も混ぜるから栄養補給にもなる。卵を入れる場合はベビーカステラになるだろう。

そしてベビーカステラがお菓子として定着すれば、様々な具を入れた大判焼き・今川焼に発展させることができる。それらのバリエーションを工夫して行けば、それなりにお菓子の文化もできるのではないだろうか？

「じゃあさ、さつき言ってた見張り小屋作る所の偵察行ってあげるから多めに頂戴！ もちろん甘蔘の汁はたっぷり入れてね♪」

「チャッカリしてるなあ。いいけど好評だったらエルフの里からの交易料を増やしてもらってね」

甘味の代用品である甘蔘はこの辺りではあまり採れない。

貴重かどうかはともかく交易品なのでパパッと使える物ではなく、今の処はこんな感じで携帯食用がメインだ。季節ごとの果実が庶民にとってのおやつであった。

ちなみに小麦の代わりに雑穀を使ってるのは主に売値の問題。世間では食料が慢性的に足りないので販売用に殆ど回してしまい、残るのは来年用の種やお祭り用である。もちろん雑穀自体も量があるわけでもないの、米の糠や小麦のフスマにあたる物を混ぜて嵩増しして居る。

「鑄型で制作か……これはこれで面白いんだけどな。鉄器に煉瓦に携帯食に……後は何が作れたっけ。中身で言うと思ってるのはコンクリ？」

同じ型に流し込めば誰でも同じ物ができる。

レベルの低い武器ならそれで十分だし、煉瓦は鑄物ではなく木の枠で作るが似たようなものだ。そして今回の携帯食も中身を変えることで煎餅やら何やらできるだろう。

だがコンクリートを鑄型で作って何を作るかと聞かれたら少し悩む。村レベルならば煉瓦ですら過剰なのだ。道路側溝でも作って、水はけでも良くしろとでも言うのだろうか。山登り出来ない法面にしてもよいが、剥がされて矢避けの盾に再利用されるオチまで見えた。「あとうちには足りない物って言ったら皿だけど……無いな」

この辺りではお皿は木の板を削って使っている。

昔は平たいパンを皿にした時代もあったそうだが、今では別の意味でもそうすることはないだろう。穀倉地帯が国土に復帰したら話は別だが、そこまで待つなら他所から陶器の器でも購入した方がよい。「でもなあ。陶器の器とかは夢もまた夢だよね。どんな土がいいのかまるで知らないし、薪とか全然足りないんだし」

文明の地を目指すとしても、元に無い物は仕方がない。

転生前にやったことは無いし、北領からこちら生憎と縁が無かった。もし陶芸職人が難民とか株分けで町を移動するなら迎え入れようかと言うレベルである。

開拓権を譲っている事もあって薪が豊富に採れるわけでもないの

で、迂闊に試すわけにはいかない。もしドワーフが扱っているなら、そちらから購入した方が早いであろう。

(内側の防御設備が整う前後で前進防御でもするかな。隣村の領域までいかななくても、その途中途中に守り易い場所があるかもしれない。その範囲に林とか山があれば理想的だけどね)

戦略シミュレーションでは安全地帯を作りながら進むのは当然の手法だ。

これ同時に複数守らなきゃならない場所を造らず、一か所でまとめて守れる場所を増やすことで、徐々に守る戦力を一本化する戦略である。

それとは別に手元で延々と守るのではなく、守るべき前線を一気に前に出すことで後方を守りつつ、中間層を取り込む戦略も存在した。これは回り込まれたり突破されると大変だが、領地を増やすという意味では一つの手である。

(とはいえ今のところ困ってるって訳でもないし、将来発展する可能性を考えたら無理するほどじゃないんだよね。……あくまで辿り着くアンデッドを減らす為のついででいくか。領主が文句言ったら返すつもりでいればいい)

剛盾と紅梓には、必要だったら向こう側を取り込めばよいと言った。

彼らに譲る開拓権に信憑性を持たせる為だが、何のかんと言って自分たちが暮らす分には困ってはない。

いろいろ面白い物を作ろうとしたら、もう少し薪やら資材が欲しいと思う程度だ。四方に不信感を持たせてまで領地が欲しいわけでは無いのだから。

「剛盾さん。梯子とか戸板は補充してたっけ？」

「しようと思ったが、他の連中が欲しいと言っておったから止めておいた」

ここを開放する時に梯子を即席のバリケードにした。

重宝したが使えば損耗するのは当然だ。下級アンデッドにパワーなどないが、それでも積み重なって押し込んで来たなら所詮は木製の

でひとたまりもない。あの時に使った材料費はお互いが手に入れる
荘園の為と言う理由で出し合ったものなので、既に終わった僕が迂回
潰す訳にはいかなかったのは確かだ。

ということは最低限の数でやりくりする必要があるだろう。当然
ながら一気に隣村まで到達する余裕がない。

「何じゃ。また何処かに出かけるんかいの?」

「うーん。今の処はその予定はないかな。領主さんや口入れ屋に金を
積まれたら別だけど。ただ……守っているだけよりも、安全な範囲を
広げたいって思ってます」

現時点でやって来るアンデッドは減っている。

他の荘園主仲間も頑張ってるし、今のレベルなら堀と壁による障害
物で十分なのは確かだった。

しかし隣村との中間にある適当な場所……山やら谷やらを利用し
て障害物を作っておけば、もっと減るのは確かだった。それこそ今
作っている防衛施設まで到達する可能性は殆どなくなるだろう。

「なら暇な時でええか?」

「それをお願い。アンデッドには困ってないし、紅梓さんが見張り小
屋の候補地を見てきたら、守りたい場所も変わって来るしね」

隣村は北だが、見張り小屋は迂回路と言うべき場所に作る。

当然ながら北東・北西側なので、真っ直ぐ北向きだけに前進防御と
言う訳にもいいかないだろう。

エルフとドワーフの領域を守る形で延ばす方が良さだろうし、お互
いの見識も一致するはずだ。特に急ぐわけでもないこともあり、僕は
やっても損のない決断を先延ばしにしまった。

まさかあんな馬鹿馬鹿しい行き違いがあるとも思いもせずに……。

今後を見据えて

● 隣村は莊園主が戦死しており、村人たちも難民化して離散している。

大部分は領主である伯爵の元に逃げているが、だからこそ領地が欲しく成ればこちら側に延ばすと言うネタを使えたのだ。

魔物に勝てないのも問題だが、残った一族が村人を主導してまとめた行動をさせられていなのは貴族失格。領地を奪われてもおかしくはないし、実際に奪いに行くかともかくその莊園に手を伸ばすことは出来た。

「いやあ二羽くん。こんな立派な教会を建ててくれて私は嬉しいよ」「約束でしたしね。それに今、煉瓦で色々作るのに凝ってるんです。それに作ったのはガワだけですしね」

青悟が建物に彩られた教団の紋章……蓮を象った燭台のマークに感動している。

色々と思う事はあるが、余計な事は言わないでおく。莊園の防衛のためだとか、場合によっては対人戦の為だとか、それこそ大地母神の為に建てた訳ではないとかそういうのはまとめて余計な事だ。

下手な事を言うと、防衛のためだから感謝の気持ちは要らないだとか、領主に歯向かうだとか思われかねない。大地母神以外に信仰している神様はいるし、宗旨替えする気はないのだ。

「そういうええね。伯爵から言伝を預かってるんだ。君には良い事なのか、悪い事なのか分からないけど……。骨を折った甲斐があれば良いなあと思うよ」

「御領主さまからっ？」

嫌な予感はしていた。

問題はどの種類の話であるか……だ。それこそ青悟が言う様に、良い事にも悪い事にも転がるのだろう。

そして僕は以前から言っていたことを訂正したり、曖昧さを活かすべく詳細に意味を告げなかったことを後悔することになる。

「伯爵領に蔓延る魔物を退治せよとの仰せだよ。もちろん褒章は期待して良いとの事だ」

「ゲツ。参戦ですか……」

悪いシナリオとして以前、便利に使い倒されるケースも考えていた。

その時は戦い続けさせられて報酬無しという感じで想像していたが、この様子だとちゃんと報酬を払う代わりに戦闘にさせられるようだ。褒章が名誉なのか土地なのかが分からないのが不安である。

考えていた最悪のパターンよりはマシだが、思ったよりも早く伯爵の方に限界が来たと言う事なのだろう。限界は限界でも僕に対する不信感ではなく、魔物対策に充てる費用と怒りへの限界だと思うけれど。

「少し考えても良いですか？」

「できれば私がここに逗留している間に決めて欲しいかなあ。でも私としては色よい返事を期待しているよ」

青悟は伝道師であり、教えを広めたエリアの広さで功績が前後する。

彼としては教会の行こうと僕ら新莊園主への影響を駆使して、この辺り一帯の長であり司教か、それとも本部に戻つての贅沢暮らしを望んでいるのだろう。

ソレを踏まえれば僕らが活躍して周辺を平和にする、その主導をして伯爵に大きな借りを作らせるというのは美味しいに違いない。

「要請には応じます。しかしどの規模で可能かは判りませんよ？」

「やだなあ。君、前に言つてたじゃない？ 必要なら向こう側に手を伸ばすってさ。コレはチャンスなんだから」

あー。そういえばこいつにも言つてたな。

というか案として挙げただけで、剛盾や紅梓に対して口にした時よりも軽かつたはずだ。それを前提にしているというか、彼の頭の中では『やらないとおかしい』レベルで当然の案だったのかもしれない。

思えば貴族のやり方を聞いた時に、似たような話をして居た気もする。その辺の考え方を参考にさせてもらつて居る事を考えれば、お互

いの考え方の違いをもっと早く説明して、今に至る齟齬を解消して置けば良かった。

(致命的な所で露出しなくて良かったと思っておくかな。流石にそこまではやらないと思うけど、伯爵を暗殺して『君の為に用意しておいたよ!』とか言われても困るし)

とりあえず青悟には何処かで考えを伝えて訂正しておこう。

その後態度で示して、僕が野心的な人間ではないと説明するしかない。

それはそれとして今回の件は悩ましいが、剛盾や紅梓に相談する訳にもいかない。彼女たちは異種族陣営からの協力者であって僕の軍師や参謀ではない。自分たちの種族に利益があるからこそ協力してくれているのだ。少し寂しいが自分で決めたことなので、どうにか自分で決める必要があるだろう。

(さて。今回はどうしようっかな……)

ひとまず伯爵の要請に対しては、三つの方針が考えられる。

消極的に前進する案か積極に行動する案。それらとは無関係に、出動要請を動く理由として流用するだけの案だ。この三つの方針のどれかに色々修正した形に落ち着くだろう。

まず消極案は僕が前にやろうとしていた、うちの荘園を守るための前進防御。

近隣の村を三つか四つ安全にして、その過程で隣村に居座って実質的に僕の物にしてしまう案だ。伯爵が褒章として土地をくれる場合はその辺だと思うので、おそらくは『領有を認める代わりにもう少し魔物を倒せ』で折り合いがつかだろう。そしたら伯爵の負担が軽くなる程度に動けばいい。

次に積極案は以前の仲間を含めた他の荘園主にも声を掛け、伯爵領全体を僕の主導で掃除してしまう案。名実ともにこの地域での名声と影響度を僕の物とし、伯爵領の重鎮として名乗りを上げる案である。伯爵を始めとした古参メンバーの心象次第というのがやや不安である(青悟なら全部奪えと言いそうな気もするが)。

最期に流用案は伯爵の要請である魔物退治は手段であると割り

切って、この地域に影響を与える為だとか国の問題を何とかする為に行動するのだ。この際だが途中経過は何でも良く、最終的に僕の目的を叶えるために利用するという物。

(どちらにせよ、今の状況自体は僕にとってチャンスなのは間違いないんだよね。下手を打つと猜疑心を煽るだけで)

今の僕の身分は騎士相当ではない。

莊園を持っているので上級騎士であり、準男爵くらいにあたるはずだ。そんな奴がこの地方の平和だとか、ひいては国の為に立ち上がるとか噴飯物であろう。

騎士一人の力で魔物の問題一つ解決できる訳がない。しかし伯爵の要請があれば動く理由になるし、他の莊園主に声を掛けて状況を変えただけならば動かすことは可能だろう。

(消極案は以前からの計画の延長上なので失敗しないけど、問題点もそのままだからまあ……ないかな。積極案はハイリスク・ハイリターンな上に、僕の欲しい結果じゃない)

以前ならば迷ったかもしれないが、神様のありがたい御言葉で問題は無い。

最終系を考えて動けば良いので、流用案を前提として何を目的とすべきか、伯爵の要請を何処まで組み込むかの話だった。

小さくは飛び地で面白い収穫物がある土地が欲しいだとか、有能な人材を引っ張って来るとか、あるいは問題の大元をどうする事だろうか？

(食糧事情の改善の足掛かりにしてしまうとか？ 今のままだとかこの国、終わってるしなあ)

何度も行っただと思うけれど、アンデッド湧きが穀倉地帯を封鎖している原因だ。

国全体の食糧事情がよろしくないし、高値で売れるとはいえ穀物を備蓄できないから領主層にとっても頭痛の種だ。度重なる魔物の襲来でどうとう悲鳴を上げた伯爵のような例もある。今後と同じような事が無いとはいえないだろう。

かといって群雄割拠をさせてないほどの末期症状で、このまま同じ

状況が続くとは限らない。現に東部域は大河の影響もあつてかそれなりに豊かである。放置すればあちらから英雄が現れて大規模な戦争にもつれこむことも十分にあり得た。

（うちの影響がないなら放置しても良いんだけどなあ……。逃げ込まれるのも願ひ下げだし、そうなったときに和平案とか穏健路線を提案できるくらいにはなっておきたい気もするんだよね）

莊園の防御を固めて城にするのは良い。

だが統一戦争が始まった時、伯爵やら侯爵が逃げ込んで来る可能性はゼロではなかった。領地を発展させているだけに他よりは可能性が高いだろう。

そういった意味で戦争が起きそうだったら、伯爵経由で和平とか積極的に統一支持に回れるだけの土壌を作っておくのは悪くない。すくなくとも、南領の食糧事情が先に解決して居れば、いろいろな手が打てるはずである。

（そもそも論として、食糧事情が改善しないと万が一の事態が起きたら困るのもあるしね）

現時点では問題ないが、飢饉が起きたら大変だ。

山には豊富な食糧があると言っても、飢饉が起きるような状況だとそれらもグンと減ってしまう。少なくとも来年度以降に種を残すとしたら、余裕どころの話ではないだろう。

それらを踏まえて豊かな生活を送ることを考えれば、今回の件を流用して穀倉地帯回復に向けた一手を打つべきだろう。野心を疑われそうだったら、得られる名声とか影響なんかは程ほどにして、一定以上は他の人間に投げてしまえばよいのだから。

「方針は決まりました。聞いてもらえますか？」

「思ったよりも早かったけどどうすることにしたのかな？ 私で良ければ協力させてもらおうけど」

ニヤニヤと笑う青悟だが、その手には乗らない。

此処で焦ったり隙を見せるよりは、淡々と行動で示すべきだろう。

そして説明の代わりに取り出したのは、南領の古い地図だ。

所々間違ってるし僕の莊園みたいに色々変わっているはずだが、当

時の要衝を分かり易く説明してくれている。

「昔、伯爵領の北の方へ万鹿柵という要塞があつたそうです。その辺りまで一気に行って蓋をしましょう。これで来年以降の魔物は随分と減るはずですよ」

「それは良いけど、もつと北にも貴族はいるよ？　伯爵の縁者だから何か言われると思うけど」

その場所は山にも柵があつて大軍を推し留める程だったとか。

あくまで伝承に過ぎないが、判り易く意図も伝わり易いので名前を挙げた。負けて廃城になるまでは山の麓にある要塞だったそうなので、防御し易いのが一番の理由だ。

そして要塞よりも北に貴族が居るというのも、後に行動する為の言い訳になる。

「その時は神職を集めていきましよう。壁を作ったことで随分と溜まつてるでしょうしね……そして次の要衝を目指すんです。その時はもう騒ぎは起きなくなるかと」

「次の要衝って、南方鎮台だよ？　そこまで行ったら……まさか」

そもそも万鹿柵は、南領を抑え込むための要塞だった。

そして南方鎮台は中央が南領にらみを利かせるとともに、穀倉地帯南限でもあるので周囲からの収益を確保する為の行政府でもあつた。

つまりはそこまで行ってしまえば穀倉地帯の奪回が目に向見えてくるわけだ。浄化の出来る神職を事前に集めておくという事は、周辺の鎮魂によつてアンデッド湧きが抑えられるという事でもある。

「面白い事を考えるねえ君い。神職たちの主導をするのは私って事でいいのかな？」

「それでお願ひします。うちの神様はまだまだ無名の小神ですしね。……あと、その辺の作戦を仕切れる人を知りませんか？　できれば今のうちに声を掛けて仲良く成つておこうかと」

南領でのアンデッドを一掃する儀式の司役を務める。

それは大変な名誉であるし、本来ならば青悟ごときの立場では無理だ。しかし国土回復戦争の途中でそんな事は言つてる暇などはない。

なし崩し的に彼が務めるだろうし、その時の功績からそのまま司教職になる可能性もあるだろう。

そして重要なのは彼にその大役を任せると同時に、指揮官役を探してもらう事。それによって自分自身はこの辺りで覇を唱える気はないと遠慮しつつ、発言力だけはその人物を通して確保したいという狙いは伝わったはずだ。

「そうだねえ。伯爵の長男は武名に乏しくてね。代わりに戦ってくれる人を探してたと思う」

「ではその辺りの調整をお願いしますか？　もし古参の騎士が予定以上の突撃を主張したら、止めないといけませんし」

重要なのはアンデッド湧きに蓋をする事、次回以降に万全の態勢で挑めることだ。

今回の序盤で上手く行ったからと、途中から古参の騎士が主導して中央まで猪突されても困るのだ。そうなる蓋を作ってアンデッド湧きを抑えることができない。万が一成功してしまうと、そいつの発言力で何処までも行きかねなかった。

その事は青悟も困るはずだ。いや、先ほどまでは影響力を増やせるなら面白いと思うかもしれないが、僕の提案した計画の方が魅力的な筈である。丁度良い大将と武官を付けてもらえれば、無茶をせずバリケードを作りながら移動できるだろう。

伯爵家のお家事情

●
方針さえ決まれば後は大した事はない。

今回の目的を決めることも、その過程で必要な事も大抵は逆算で成立する。

まず目的自体は、万鹿柵に壁や堀を敷設するという、うちでやっている事の延長なので後は規模の問題である。その周囲を制圧して敷設するとして、必要な資材と戦力を集めるのが過程と言う訳だ。

「万鹿柵を封鎖する資材自体は徐々に集めると同時に、各地の解放に使います。手順は前と同じで少しずつ封鎖して魔物退治……下級ア宁德ッドに関してはそれで行けると思います」

青悟に仲介されて、知らない顔の男と面会することにした。

その人は領主の長男さん……ではなく、その側近の騎士らしい。同じ騎士身分であっても相手の方が年長なので、下手に出しておく。

そして地形を利用して封鎖し、各個撃破の々と言う戦略は変わらない。いい。

敵は圧倒的多数と言うのが問題で特に連携しているわけではないので、油断したり無謀に突撃しない限りは問題なく倒せるはずだ。

「ここで重要なのは強さではなく、全軍の統制です」

「戦こそは武門の誉と言う輩は扱い難い、かといって文若の輩もダメ。方針としては理解はできるがそう都合よくいくのか？」

作戦さえ上手く行けば何とかなる鬨いだ。

だからこそ、重要なのは全体の統制になる。相手が雑魚だからと無謀に突撃する勇者というのは困り者だし、『うちの領地はもう安全だからサヨウナラ』と言われて協力してもらえないのもやはり困るわけだ。

この案を良しとしてくれるが、そう都合よくない人間関係を突っ込まれた。言葉が荒くないのは、むしろそういう事を忠告してくれているのだろう。

「ですので言う事を聞く方を優先的に助け、その援助を得られる場所

から最初に回っていきます。次々に協力してくれる方を味方とし、援護するとの言質が大勢となるような状況を維持します。そうすれば首を横に振るのは難しいでしょう」

「……間違っではないいな。できれば根回しもしておけばより良いだろう」

右向け右ではないが、全体の結論が決まっている状態で反対は出にくい。

うちは戦力を出せる、我が家は物資、あるいは多少なりとも金銀と……余力が無いのは何処も同じなのだから出せる物を供出してもらおう訳だ

最終的に安全地帯を作る様に動けば、安全になったら戦力を提供できる人も増えて来るだろう。その時まで『みんなが出しているのだから、我が家が出さぬわけにはいかない』と言う論調を作ってしまう問題は無い。

「盟主に御長子たる悌さまが立たれるという事であれば家中も結束しよう。元から伯爵家が何もせぬというのは風聞に悪いという状況であつたからな……」

「何か御懸念でも？」

「ここに出てきた『悌』という人物が伯爵の長男の名前である。

南領は赤に関するランドマークが多いが、緋雁原の『緋』が伯爵家の名前なので緋(央)悌となる。ちなみに悌という名前は王様から頂いた文字だそうで、中央での人質暮らしが長かった名残だそうだ。

そしてその事は家中のゴタゴタを感じさせても居た。

戦い慣れないのもその辺りが原因なのだという話だし、いつまでも中央に従い敬う事を義務付けられた人物が次の当主で良いのかと言う事だろう。

「以前から伯爵家が積極的に南領を救うべきだと主張している古株どもがな。今更何をと言いかねないのと……具体的な戦力の面で懸念を示しかねないのだ」

「戦う前から勝つ戦略なので問題ないとは思いますが……」

「まあ悌さまは君の案に賛同して居るらしいよ。でもね、回りが全員

「そうだとも限らない」

「正面から戦わないというスタイルは、戦いなれないご長男には好評らしい。」

「だからといって全員がそういうわけでは無く、突撃しかねない勇猛果敢な家柄の連中が居るらしい。」

「そいつらを説得すれば一気に話が楽になる反面、むしろ反対に回っているのが問題だという。彼らいわく、由緒ある伯爵家が率先して戦えば自然と平和を勝ち取れるのだとか……もちろん一時凌ぎでしかないから伯爵は選択してないのだが。」

「事前にその人たちを根回しで納得してもらおう事はできないのですか？」

「難しいな。彼らからすれば悌さまのご舎弟である連さまを担ぎ上げたいというところだろう」

「一応はうちも同じ家中の人なのだが、お家騒動は勘弁してほしいと思う。」

「とはいえ連さまという次男は姉二人を挟んで四人目だそうで、年齢的には一回り違うらしい。だからこそこれまで継嗣問題で重要時には至らず、伯爵家の財政が悲鳴を上げる今まで大事にはなかったという。」

「……何とかというか綱渡りな運営で、未来への反面教師にしておこう。」

「青悟さん。何かアイデアはありませんか？ 僕はその辺りの事に疎くて」

「そうだねえ。……まあ手が無い事はないよ。彼らに尊敬されれば良い訳だから」

「伯爵家の事には詳しくない、家庭事情には口を挟みませんよー。というアピール。」

「その為に青悟に声を掛けたのだが、彼は一発逆転のアイデアを持っている代わりに、それは大問題であった。」

「できるかどうか怪しいと見られている方法だから、逆説的に武門の連中から関心を誘えるのだという。」

「まさか……アレを倒せと？ 無茶でしょう」

「だから説得材料には良いのです。伯爵領の誰もがその恐ろしさを知る相手であり、それを倒せるという事は勇猛果敢な彼らの仲間と言う事なのですから」

「……一体、何を相手させようというんですか？」

なんていうかき、できるだけリスキーな事は避けたいからこんな相談してるんだよ。

その事を忘れてないよね？ そう口に出せたら良かったのだが、この状態で問いただすわけにはいかない。

そんなことをしたら青悟の面目は潰れるし、この騎士さんも『やっぱりかー』と説得に回るのを止めかねなかった。

「ああ。銀殿はこちらの生まれでは無かったな。緋家の名の元となった緋雁原には火の精霊が出るのだ」

「普通は小さな鳥サイズなんだけどねえ」

「いつの間にか大きな個体が出たらしい……と？ それは確かに強敵ですね」

ファイヤーエレメンタルとか止めて欲しい。

もしかしなくても魔王軍がこの王国を攻めた時に出現したんじゃないかと思う。

しかしこの話を聞いただけで、武門の連中が尻込みするのも判る。名前からして小さな火の精霊が複数存在する平原で、そこに大きな精霊が一体待ち構えてるわけだ。そりゃ倒せんわ。

「どう？ 何とかなりそうかい？」

「難しいですね。これまで倒せなかった理由が二つあるのは判ります。その双方を超える条件を揃えてどうか……という所でしょうか」

「ホウ……そんな事を言ったのは君が初めてだぞ」

青悟の問いに返していると、騎士さんの方が乗り気になっている。

さっきまで『無理なら無理で良いんじゃないやよ？』という感じの諦め気味だったのだが、今では話を聞いてみたいという顔になっていた。

まあ何というか、いつもの弱さゆえの分類なのだが。

おそらく武門に所属するという彼らは能力に任せて研究とかして

ないんじゃないかなーと思う。

「二つ目の原因は分かり易く、普通の刃が通じない事ですよね。この時点で数で攻めるどころか、有能の騎士であつても倒すことは難しいです」

「そうだな。私は近侍でもあるので問題ないが、誰もが可能ではない」
この世界は誰でも下位魔法くらいなら覚えられるが、機会は平等ではない。

神の加護が前衛系だったら一々魔法を覚えるよりも殴った方が早いし、そうでなくとも覚える余裕があるかは別なのだ。その中で物理攻撃が効かない相手への攻撃手段を備えるのは稀だろう。

仮に二種・三種と魔法を増やしていく人がいれば、その中で付与系なり攻撃魔法を覚える人も居るかもしれない。しかしそれはあくまで可能性でしかなく、それまでの生活もあつて覚えなことが多かった。事実、僕も双葉も付与系や攻撃魔法は覚えていない。

「第二は？」

「延焼ですね。火というモノはそれだけで人を傷つけます。仮に緋雁原が燃える平原という異名、あるいは火の精霊が無数に居るという所から来るならば、目的の精霊と戦う事すら難しいでしょう」

灼熱地獄を潜り抜け、オプション込みで数体と戦闘。

その条件をクリアしようにも、頭数で攻め潰すという手段が使えないのだ。攻撃手段のない連中を連れる事はただの足手まといにしかならない。

つまり魔法の武器または付与魔法を持った十人、または国家で上位から数えた方が良い数名を集め速攻で倒さねばならないのである。群雄割拠でこそないものの、国が一致団結して居ない現時点では、到底不可能に思えただろう。

「しかし難しいという事は、前提さえ何とかする事ができれば可能と
言う事だよな？」

「そうですね。最低でも攻撃手段が複数。これは魔法の武器でも付与魔法の使い手でも構いません。目的の精霊を速やかに倒すために必要です」

「全滅しないというのが条件だがそれは可能かもしれん。例えば私が参加するのかな」

だから第一条件自体は、情報を整理さえすれば何とか可能なのだ。

この騎士さんは近衛兵だから、幽霊やら魔族やら対策で付与魔術を覚えているのだろう。青悟だって攻撃魔法を使えるから可能ではある。もし伯爵家が魔法の剣や魔導師を用意できるならばもっと手段は増える事になる。

だから重要なのは第二の条件の方だ。

この時代、よっぽど叶える方が難しい作戦なのだから。

「ということは延焼対策か。難しいどころの話では無いな」

「ええ。燃えるという行為は普通の事ですからね。攻撃魔法ならばともかく、火達磨にされたら消すのも一苦勞です。そこから回復したんじや僕らが使えるレベルじゃ間に合いませんよ」

なので作戦としては、攻撃魔法以外の火を浴びない事が大前提となる。

偶然に『火では死なない加護』でも持つてる人間でも騎士に居れば楽勝だが、そんな偶然はありえない。

だから作戦とするとあたって、絶対に火を浴びてはならないのだ。普通に燃えてる火の精霊相手にソレがどれだけキツイかはいう間でもないだろう。

「解決策はあるかい？ 例えば君の力を応用するとか」

「火のダメージは無視して良いなら、最初の数秒くらいは延焼を防ぐのも可能ですかね。誰か一人または対象一つに絞るならば話は別ですが」

ゆえに燃えないという状態保全を掛ける事になる。

火のダメージまで防いでいては論外なので、火達磨になってしまいうという未来だけを防ぐのだ。後は防御系魔法の重ね掛けをしておけば、まあ安全性は高まるかもしれない。

そして僕の知識の中には、この事態を解決する方法が存在しないでもなかった。

「今まで無かった戦闘概念を持ち込みます。参加者が従ってくれるな

らば、防げるかもしれませんが」

「どんな方法かね？ 主家の為ならば多少は節を曲げても良い」

もしかしたらと思っていたが、この騎士さんは自分が戦う事を考慮し始めていたのだろう。

だから付与魔法が使えることを明らかにしたし、今ここで参加しても良いと表明したのである。

しかし問題は此処からだ。

今までになかったのは、これまでできなかつたのではない。武門に生きる騎士たちだからこそ、やらなかつた戦法なのだ。

「申し訳ありませんが、付与魔法を自分の剣ではなく他人の武器に掛けられますか？ その上で、その人物を近侍としての技で守るのです」

「かつ……可能ではあるが……」

そう、真面目に戦う物が複数いるという前提だから問題なのである。

攻撃する者を白兵戦一人分に限定。そして残りの者が全員でその人物を守れば良いのである。

ゲームで言うところのアタッカー役とタンク役。

このコンビネーションで戦闘すれば、多少時間が掛かってでも火の精霊を倒せる可能性は高かった。

（多分、魔王が居た頃ならエルフかドワーフに話を付けければ良かったんだろうけど。今となっては博打に挑むしかないってわけだ）

人間と違って異種族はトップとアンダーの差異が無い。

魔法を覚える可能性だけなら人間と変わらないにしても、交渉して人員を貸してくれと言えば適格者の誰かが素直に協力してくれるだろう。一族の中からレジストファイアを覚えてる者を紹介して終わりである。

しかし今回は同盟軍で魔王軍を倒そうという企画ではなく、あくまで僕らが伯爵家の勢力圏で名を上げる為でしかない。協力してくれると思わないし、協力してくれる場合も相当な代価を必要とするだろう。これまでの感触からして、エルフの指導者がそんな機会を逃すと

は思えなかったのだ。

それに、今回は僕らの手で博打を成功させる必要があった。

名前と功績を挙げて武門に属する連中を黙らせる為に、しなくても良い無茶に挑むことになったのである。

目下の目標

● 今回の件は非常に難しい。

大抵の魔物は系統立てて相手の能力を分析し、ちゃんと作戦を建てれば倒せない相手ではないのだ。しかしその作戦を実行できるかが問題である。

何しろ協力してくれるという騎士相手に、自分では活躍するなど言うのに近い事を要求するのだから。

「重要なのは精霊に攻撃する人物を守り切る事です。ご自分を守る事が他者を守るよりも得意であるならば、貴方が攻撃役としての確かなのですが……」

「いや、流石に他人を守る方が得意ではある。あるが……」

この騎士は近侍だと言っていた。要するに近衛兵だ。

技としてはカバーリングを中心に覚え、一般教養と並行して探知系の訓練も積んでいるはずだ。そんな人をフルに活用するならば、攻撃もさせるよりは防御専念させた方が確実である。

とはいえ騎士に活躍するなど言うのは無茶振りなので、彼の教養を逆用して説得しなければならぬ。

「古代の戦車では一人が槍ないし弓を使い、もう一人が盾を使いました。この作戦はそれをヒントにしたものです。さしずめタンク役とアタッカー役というべきでしょうか」

「なるほど……確かに理に適っている」

彼の頭の中では理論的に正しいと判っているはずだ。

自分が盾を振り回して他人を守れば良いと。しかし騎士としてのプライドというか、これまでの生き方が邪魔をする。

そこで彼が知っている教養の中から、当時は正しかったという手法を用意した。戦車戦ならば盾持ちが攻撃役を守るのは当然なのだから。

「とはいえ卿の立場を考えれば、王族が使う三人乗りで主人を守る役目。おいそれと他人を守れとは言えないのですが……」

だが感情的と知識は別だ。

理論的には既に納得している事を補強したに過ぎない。感情で否定しているのであれば、この段階で頷くことも難しいだろう。

だから戦車の話は理論の補強ではなく、次の言葉を出すためだった。

「ここは主人の名誉を高めるためにこそ守ると考えていただけませんか？　無理にとは申しませんが」

自ら戦わない王族の場合、盾役・御者役を部下に貸すこともある。

特に腕の良い御者などは本陣に置いておくよりも、腕利きの射手に付けて戦闘に参加させる事もあったそうだ。戦車の話を出したのはこういう流れ持ち込むためである。

まあ精霊に攻撃可能な人間と防御が得意な人間を見つければいいから、他の人間でも良いのは確かだ。手間ではあるが無理にこの騎士を説得する必要もないと言えるのだけれど。

「そこまで言われたら引き下がれぬではないか。節を曲げてても良いと先に言ったのは私だしな」

「ありがとうございます！　攻撃役は探せる範囲で一番の人間になるでしょうし、共にその人物を守りましょう」

これで一手間省けた。後は傭兵なり味方騎士の中で一番の腕利きを探すだけだ。

自分を守りつつ、代表者一人を守るだけならばそう難しい作業じゃない。そう思っていた所、彼は微妙な顔を始めた。

目の動きや額の皺で内心が判るような能力は持っていないが、流れでいたい想像できる。おそらくは攻撃役に心辺りがあるのだ。そしてそいつはきつと推薦するのも躊躇われるような偏屈に違いない。

「そういう事ならば……幾人か心当たりが居る。他にも暫く会っておらん者の中には、もしかしたら誰ぞ良い術を覚えているかもしれない」「それは心強い！　本日は食事を用意しておりますので、晚餐と共にゆっくりお話を伺いましょう」

あまり急かしても仕方ないし、わだかまりがあるなら強要するのは駄目だ。

時間を置き、なおかつ和やかな雰囲気の中で話してもらおう事にした。酒に吞まれるタイプじゃなきや良いのだが……。

とりあえずこの場に居ない二葉や紅梓にはこのまま外れてもらおう。面倒なことになっても困るしね。女が酌をしたら寝所に引っぱり込む三国志とか水滸伝の世界になったら問題だ。

山鳥を焼いたものと木の実を肴に、酒を添えただけの粗末な晚餐をしながら話を続ける。

「心当たりは三人居る。ただその内の一人は呼ぶわけにもいかないの
で実質二人だが」

「ははあ。紅家の三男坊ですかあ。彼は魅力的なんですけどねえ」
「そういう事なら無理ですね。伯爵家の問題ですし」

金持ちのボンボンで修業マニアだと、幼少期から修行三昧だ。

僕らと違って生活に時間を充てる必要もなく、良い師さえいればかなり延びる。有用な術理を体形建てて学べる上に、装備も良い物を調達し易いので屈強の存在になり易かった。もし神の加護が良い祝福だったら勇者と呼ばれていただろう。

この世界が素質自体は平等でも、機会平等ではないという良い例だ。しかし侯爵は依頼主である伯爵の寄り親であり、借りを作りまくる事になってしまふ。伯爵の長男さんを盛り立てる方向であることもあつて、仮に力を押し売りされたら何としても断らねばならない相手だ。

「残り二人……しかしその内の一人も難しいな。今問題にしておる武門の中でも特に個人的な武芸に秀でた男だ。実質的に残り一人と言えるのだが……」

「何か問題でも？」

まあここまで言い淀むのだ、問題しかないのは判る。

人格的に問題があるか、さもなければ雇用条件が厳しいのだろうか。おそらくは常識的な金額ではないと思われる。

しかし話を聞いてみると、その性格も要求水準もぶっ飛んでいた。条件からして恐ろしく難しいので、話を躊躇うはずである。

「先の二人の兄弟弟子に当たる武侠の『大通連』だ。千の武具を集めて

いるという話で、名前よりもその得物で知られる」

「そして『なんで切ったら駄目なんだ？』と切った後で言う人だよね」
「全然ダメじゃないですか、ソレ」

通称、空飛ぶ魔剣の大通連。

そんな名前の武芸者である、精霊を倒す武器も能力も有しているだろう。しかしその条件にも人格にも大きな問題があった。孫悟空の頭を締め付ける輪つかでも無ければ制御できそうにない。

何と言うか試練を突破する為に、別の試練を潜り抜けるとか頭おかしいのかな？

「解決してもその人の武芸のせいと言う事になりませんか？ それに武器コレクターが持っていない珍しい武器なんて……」

「その場合は問題児を従える程の実力者という事で大丈夫だ」

「まあ従えるってのが難しいんだけどねえ」

とりあえず剛盾にお願いして武器を作ってもらえば何とかなるだろうか？

異世界知識で幾つか怪しげな装備を用意すれば、そのどれかがヒットする可能性はある。

だからこそ、どうやって従えるかが重要なかもしれない。

「しかしその三人の共通点といえばお師匠さんですが、そんなに強い方なのですか？」

「王都の禁軍武芸師範殿とどちらが強いかというレベルだ。本人は武芸百般と言われて、その中でも槍を極めておられた。加えて勇猛な武将でもあったという御仁だったよ」

「惜しむらくは過去形って事だねえ」

どんな完璧超人かと興味が湧いたが、残念なことにどうやら故人らしい。

ちなみに三人の弟子はそれぞれ別の分野で師匠を越えようと頑張っているのだとか。まったく迷惑な師匠の越え方である。

ともあれ無い物ねだりをしてもしようがない。

ここは最低限の準備を勧めつつ、可能ならば勧誘と言う路線にするしかないだろう。

「ともあれ重要なのは精霊よりもアンデッドです。明日にでも僕がやっているアンデッド対策を資料にまとめお渡しします。それは同時期に荘園主になった者たちにも渡している物で、効果はあるはずです。そしてこれから一月の間に更なる成果がでます」

「おう！ 話は聞いておるぞ。その資料を元に根回しは進めておこう」

スツキリしない話から一転、騎士さんは上機嫌になる。

無理もあるまい、口説けるかどうか怪しい奴の話をするよりは、具体的な作戦を聞ける方がありがたいに違いないだろう。

前々からの計画を手直しして、自領ゆえの行動ではなく伯爵領のための行動だと言い換えて説明していく。

「最初の一月は準備と実績造りの為の期間です。道具を揃え後方を守る準備をすることで、僕らは大きく動けるようになります」

梯子を用意して隣村を開放、そこにバリケードを設置。

そのまま居座って隣村の樹で同じように梯子やバリケードの資材を作っていく。職人などの余裕がある村ならば荷車や何かもよいだろう。少なくともここまでの行動で損になる物はなく、荘園主仲間や長男派の身内など、その意味を理解できる者は真似をし始めるだろう。

そうすることで留守にする自分の村を守りつつ、次の村を開放する準備を整えていく。こうして戦って勝つことで、伯爵領に済む他の荘園主に一目置かれる結果になるだろう。

「そして次の一月で大きく動くという訳だな？」

「はい。まずは身内を援護する様に、安全地帯を繋げるように動いていきます。気が付けばこの行動に参加しない方が損だと思えるようにしたいですね」

最初は援護などどこにもない。

しかしそれは無くても良いし、無い方がありがたいだ。自分たちの実績だけが増え、そして協力を求めた身内だけが動けるようになる。

やがて連鎖的に動けるようになった身内が大勢のうちに方針を決

めてしまい、後から功績目当てでやって来た者たちは半ば無視する形で伯爵領の北にある万鹿柵まで突き進むことになるだろう。

「その間に伝手のある名工に頼んで、色々武器を作ってもらいます。先ほどの『大通連』さんが気に居ればよし、気にいらなければ我々だけで戦いましょう。苦戦にはなりますが、負傷者が出るだけで済むはずです」

「そう願いたいな。大通連が味方してくれれば心強いが……まあ居ない方がスツキリするだろう」

その後は武器の形状を聞く程度に留まり、その後は宴会になった。棒にしか見えない銅鞭や、ナイフに紐が付いた縄鏢などは既にあるそう。聞けばこの世界の大通連は刃を無数に付けた盾を紐で結び、引き戻す武器が原型らしい。魔法部分は紐が無くて命じれば戻ってくるレベルだとか。

その話を聞いた僕は、ひとまずお土産に改良中の蛇腹剣を渡した。そして剛盾に頼んで適当なサイズの大型ブーメランを作ってもらっておいた。気に入ってくればよいのだが……。

北進

● 最低限の準備と打ち合わせを終えれば、いよいよ隣村への進出になる。

伯爵の要請と言う大義名分はあるし、元からアンデッド対策で来る可能性はあったので下調べは付いている。要するに戦うだけなら楽勝だ。

だからこそ此処で被害を出すわけにはいかないし、得るモノは確実に得るべきだ。

「今回の目的は少人数で封鎖して、安全地帯を確保すること。だから一班だけで突破して、残りは作業班とその護衛班になるよ」

新しく村に帰還して民兵となったばかりの者が安堵している。

戦うことに慣れて居ないし、自分の村の為ではない事に命など賭けたくないのだろう。

気持ちは判るが、これから先はここまで楽勝な戦いではない。是が非でも慣れて貰わなければ困る。今のうちに戦えとは言わないが、雰囲気くらいは掴んで欲しいものである。

「紅梓さん、上に登って確認してもらえる？　まずは村の出口を封鎖したいんだけど」

「はいはい。お金貰ってる内は便利使いされてあげるわ」

人数が居れば蹴散らして行っても良いのだが、今回はデータ収集も目的だ。

他の荘園が人数集められるとは限らないので、何処の荘園にも居る数名の兵士前提で予定を組んでいる。その上で徴募して増やした民兵は、即席の壁や堀を用意する作業班の護衛に充てる予定だった。

その作戦には村全体の把握が大前提になる。

今は大規模なアンデッド湧きが収まった後だから良いが、潜り込んでいる奴が居ないとも限らないのだから。元傭兵の多い僕はともかく、今まで平和だった荘園の連中には緊張感の維持は厳しいだろう。

「その間に作業班は僕らの村へ通る道を封鎖して置いて。ただしこの

村がもう大丈夫だって判ったらバリケードを動かすんで、その点は気を付けておいてね。もちろん護衛班は付けておくから」

「はっはいー」

村の出口と入り口を封鎖すれば、大抵はもう安全だ。

大量湧きは既に収まっているし、荘園主の中には自分の村の周辺を掃除している者も居る。ここまで辿り着いてなおかつ、周辺でウロウロしている奴は少ないだろう。

偶然に迂回して来る個体や物理的な障害を乗り越える幽霊系。

そういつた相手の脅威は一概に言えない為、時折に巡回を出す必要は出て来る。だが大多数のアンデッドはこの段階で排除できると言っても良いだろう。

「えーつとねえ。上から見た感じだと村の大枠は大丈夫よ。ただし北と東に道が繋がってて、西は少し拓けた後で川に通じてるわ」

「じゃあ北から順番に封鎖と確認を済ませたら村の搜索だね。ありがとう」

この村は僕の村を含めて三面へ道が繋がっている。

一番危険で大量に来る可能性がある北をまず封鎖。そのまま西口に回って川上から村に戻ってここも封鎖、そのまま東口に抜けて封鎖したら殆ど終わりだ。

後はこの村での残敵掃討……という名目で居座って道具を増やしておく。僕の村には準備があつたから即座に移動できるが、普通ならばそこまで素早くは動けまい。妥当な時間を調整しつつ、その間に梯子や戸板を増やしておきたい。場合によっては西にある川を伝って南下し、僕らの村までのエリアを巡回しても良いだろう。

「剛盾さん、荷車とか増やせそう？」

「そいつは難しいのう。野晒しだったやつは雨で腐つとる可能性がある。補強するにしても何処まで直すべきかちよいと判らん」

この村の物資に関しては手を付けないか、帳面を付けてから徴発になる。

僕の荘園に組み込まれそうな可能性が高いが、死んだ貴族の一族が文句を言ってくる事も大いにあり得た。それに報酬が飛び地だった

り土地ではない可能性もあるので、無理に手を付けない方が良いでしょう。

その上で村からの持ち出しを完全に禁止した方が安全であると思われる。

何しろ今の段階で、僕の利益は十分に出ているからだ。自分の荘園が安全地帯になり、領主である伯爵の覚えもめでたくなるのだから。「ちゅうもーく！ 村全体確認と作戦の検討が終わったので説明します。作業班は護衛班と共に村の中央まで資材を輸送。そこで一旦待機して、軽くバリケードを築いて。その後で北・西・東の順番に封鎖していきます。時間は採るからゆっくりでも確実に！」

「はいー！」

「了解！」

中央に資材を運んでしまえば後は何とでもなる。

それこそ周囲からアンデッドが一齐に現れても耐えきることは可能だろう。そして中央に用意するという事は、三か所ある村の出入り口すべてに資材を送り込むことが容易くなるのだ。

そして戦いに専念し、途中からは巡回に回る戦闘班にとっても合流が何時でも可能と言う事だ。相手がアンデッドだけである限り、他の荘園でも同じように作業が可能だろう。

「ねえねえ、この後は北に直進するの？」

「今の処は西回りで川の周囲を確かめるつもりですよ。場合によっては水路を増やすことで、堀の代わりにするかもしれません。北に行くのはそれから、東は余裕が出来たら後で行うくらいですね」

紅梓の確認に先ほど考えていたことを解説する。

なるほどとうなずく彼女を見ていて、少しだけ計画を変更することにした。正確には紅梓に何かしてもらうのではなく、エルフに願うのかどうかの話だ。

その考えを軽くまとめ、シンプルに修正して提案することにした。

「西回りはお任せしましょうか？ 冒険者相手の依頼として適当な額を用意しますんで、一人で行くなり何人か後輩を鍛えるつもりで巡回

「されても構いませんが」

「んー。そりや私一人でも……あ。そういう事ね」

この場合の後輩とは、人間ではなくエルフだ。

冒険者ギルドに登録した者が何名か居るのだが、特に活動しているわけではない。あくまで人間が森に入ってきて来ないように、注文した依頼を人間の代わりに片付けているだけである。

そしてエルフ冒険者に依頼するという事は二重の意味があった。

理由を付けて勝手にエルフの領域には近づかないという事であり、冒険者としての実績を詰むことでいずれ銀級冒険者となる為の下積みである。

「こちらとしては依頼が確実にこなせる人たちであると判れば構いません。お互いの領域を行き来する相手ですし、お互いの為に行動した経験のある方ならば他の支部のコア・メンバーとして問題ないですからね」

「そういう事ならここでの仕事が終わったらひとつ走り行って来るわ」

現状の冒険者ギルドは、監視目的で登録した水増しメンバーを含めても少数だ。

もし傭兵たちへ依頼を斡旋する口入れ屋が見れば、大したことのな規模で、他の組織には『無いも同然だった』と吹聴して回るレベルではない。

だが支部が他にもあって、色んな経験をした人材が増えていけばかなり扱いも変わって来るだろう。

「そいつはワシらの方も同じでええのか？」

「当然ですよ。それに東西への巡回をやってくれるのは僕らにとっても有益ですからね。十分に予算を出す理由になります。相手がエルフ冒険者でもドワーフ冒険者でも同じ事ですね。もちろん人種混同で適当に連れて行ってもらうても構わないくらいです」

実のところ、皮算用で時間を掛ければ何とでもなると思つた直後だ。

他者にお金を出してまで外注するなんて、ただ資金の消費でしかな

い。しかし効率が悪かろうともお互いの心象と言うのは重要だし、ここで異種族と手を組んで協力し合って魔物退治という実績は意味が無いわけでは無い。

みんなでこの地域を守ったという事は今後の心象に大きいだろうし、何よりも他所の貴族から見れば異種族が防衛戦力に回るかもしれないと思えてくるのだから。

(まあ過剰な期待をされて困るけど、仲が良いアピール自体は無駄じゃないよね。とりあえず行動を再修正するか)

出費の代わりに暇になったが、メンバー的には減っている。

紅梓と剛盾が西と東を巡っている間、戦闘班のメンバーは半減してしまう。戦闘する気はないし戦闘する理由も減るから問題ないが、だからといって出来る事が増えるわけでもない。

むしろ戦闘班に居る何人かの傭兵上りは護衛を兼ねた訓練指導者に回すとして、僕と双葉だけで可能な事を探すべきだろうか？

「……何？」

「いや、後でこの辺の薬草とかでも二人で調べてみようか。もしかしたら面白いモノでもあるかも」

視線が向いたことで双葉が声を掛けて来る。

デートと言う訳でもないが、偶然であろうが出来た時間を無駄にすることもあるまい。それに良い薬草でもあれば役に立つのは嘘でもないのだ。

そして当初の予定は滞りなく終わりを告げる。

三方の出入り口をバリケードで塞ぎ、浅い堀で補強してから内部にアンデッドが入り込んで居ないかを確認して回った。最終的に村の中に数体、村の外で数体と戦ったが全てが個別であったこともあって気楽に戦えたのだ。

そして紅梓と剛盾を送り出し、村の中での勝手な調達を禁じて資材の調達やら訓練だけを始められた頃……。よりにもよって、戦力が一番低下した頃にアイツがやって来たのだ。

「大変です！ 北門が、北門が破られました！」

「どんな魔物なの!?!」

「いえ、人間です！」

その報告を聞いた時、目が丸くなった事だろう。

どうして人間にバリケードで作った門が破壊されるのか？ 盗賊でも出たのかと思ったが、アンデッド湧きが収まったばかりで荘園主たちが動き始めているこんな時期にウロつくなら馬鹿も居まい。

要するに招かれざる……いや、ダメもとで招いた客が予定よりも早くやって来てしまったのだ。民兵たちもなんとか押し留めようとしているようだが、睨むどころか視界に入るだけで逃げ散る弱兵ぶりであつた。

「よう！ あんたがここの大將か？」

そいつは赤銅色の肌で赤ら顔の大男だつた。

海でもないのに巨大な錨のついた鎖をぶら下げ、三叉戟と盾を持っているのが特徴的だ。知らない人が見れば漁師上がりの戦士と言つた風情である。

もし盾に刃が無く、腰に巨大なブーメランを挿してなければ僕にも判らなかつただろう。

「君の要件と言うか、要求は？」

「話が早ええじゃないか大將！ 欲しいモンがある！」

ガハハと笑う大男の異名は『大通連』、この間の話で出た豪傑である。

どうやら興味を示してくれたようで何よりだが、こんな時にやって来なくてもと思うのだ。もう完全に周囲の様子は山賊に対するソレであつた。

苦い酒宴

●
予定ではエルフとドワーフが調査を終え、協力体制だと見せてからゆっくり北上。

その時には紅梓や剛盾も戻っており、悠々と目的を完遂するか、それとも負傷を覚悟して緋雁原を攻略する予定だった。

(どうして『今』なんだよ。頼れる連中が居ないのに……)

このタイミングで『大通連』がやって来たことですべての計画が狂った。

彼にはダメもとで声を掛けたが、来るとは思ってもみなかった。本当ならば戦う前に交渉するだけしてから行くつもりだったのだ。

その流れなら彼が何を主張しても困らない。

払える要求ならば支払い、法外ならば無視。高名な武芸者を抱えようとすることも、断られるのもとよくある事だ。まさか挨拶程度の武器で即座に動くとは思いもしなかった。

(どうする？ 勧誘すべきか、それとも今は待たせるべきか？ とうか待っててくれるのか?)

しかし彼は今日の前に居る。最悪な事にバリケードを破壊した不審者に見える。

迂闊な話をすると言葉一つが笑い話の種になりかねないし、場合によつては戦う理由にもなるだろう。既に勧誘した武芸者に対して関を閉ざしている扱いだし、民兵たちから見れば不審者に対して過度な警戒をしていると思われかねなかった。

だが彼の無神経な一言が、僕の弱気な気持ちを吹き飛ばしてしまった。

「こないだくれた武器が壊れちまってよ！ 新しいのくれよ！ あと酒と女！ 胸はねえけどそので良い」

「酒はいいけど女は渡さない！ こないだの武器はただの挨拶だから、お代わりは別！ というかさあ！ もっと良いのが欲しくないの？」

双葉をその女扱いされたことで僕の心にカチンと火が付いた。結婚してないのに自分の女扱いする気はないが、盗られそうなのに黙ってはられない。ひとまず話を繋げて周囲にも『僕が呼んだ強い奴』であることを認識してもらおう。いきなり襲い掛かったりはしないと思うが、もし攻撃したら最悪だ。

間違いなくそいつは殺されるだろうし、放置しようが逆襲しようが僕の株はドン底だろう。

「何だ!? もっと良いのがあるのかよ! くれ!」

「言う事聞いてくれたらあげるよ。後ね、こないだのはただの試作品。この意味が判る!?! つまり後二回は変化を残してるんだ!」

「なん……だど!?!」

とりあえず壊れたのはブーメランではなく蛇腹剣だろう。

ブーメランというものはオーストラリアのネイティブな住民の武器と言うイメージが強いが、実のところ似たような装備はあちこちにある。最後まで残っていたのがオーストラリアなだけだ。

あの時に渡した蛇腹剣は剛盾にアイデアを話して作ってもらったばかりのやつで、改良した物が手元にある。さらにこいつの使用感を踏まえて作り直せばもつと良い物ができる……はずだ!。

「けちけちすんなよ! 山賊だろうが騎士だろうがぶつ殺してやるからよ! さっさとくれ!」

「騎士は殺しちや駄目だし、倒して欲しいのは魔物!! とりあえず酒を飲みながら話そう!」

他の兵士たちに手を振って、いったんその場から遠ざける。

民兵はその仕草だけですつ飛んでいき、傭兵上りの兵は苦笑しながら遠巻きに見守った。

そして相談用に外に出してあるテーブルに向かう事にして……。

「双葉はここで待ってて。あいつと話付けて来るからさ」

「……胸が無いって言った。訂正を要求する」

振り返ると笑っているのか怒っているのか分からない顔があった。

いつもは省エネで無表情に近いが、決して感情が無いわけでは無い。というか面倒くさがりなだけで、必要な時にはちゃんと感情を出

すのだ。

そしてカロリーの無駄使いを承知で表情を出しているのは、余程に『胸が無い』と言ったことを怒っているに違いあるまい。絹の近い道を増やす意味でも色々服飾品を開発したが……動き易いからという理由でブラジャーもどきを開発したこともあり、決して胸が無いわけでは無いのだ。

(……女は渡さないとやったことを評価してくれるといいんだけどなー。とりあえずフォローはしておこうか)

何とか僕は転生したことで若い部分と、無駄に老成した部分がある。

ついでに言うところ故郷で若い女性は双葉と、兄貴分の嫁さんだけだった。そういう意味で『あーこいつとくっつくんだなー』という気分が先行して特に告白とかしてないし、今も田舎だからする事が他なくする事はしてるが、当然ながら夫婦になったわけでもない。

それを良い事にモラトリアムをしているわけだが、……傭兵時代は周囲の男女比で気分が色々と前後したものだ。女性が増えれば目移りし、男ばかりになれば嫉妬でやきもきする中途半端な状態である。ここは覚悟を決めて、吉日でも選んで告白でもすべきだろうか？ だいたい、うちの郷里は『お前のカミさん借りてるぜ、こんど俺のカミさん使えよ』というくらいには風俗が怪しい場所だ。双葉の方にその気が合っても困る。

「だからさあ。女の子は物じゃないし……」

「そう、むしろ男が私の物」

「……ややっこしくなるから黙ってて」

「ガハハ！ 女傑のマネとは面白いねーちゃんじゃねえか。尻に敷かれんじやねえぞ、大将！」

とにもかくにも僕が間に挟まって宴会を始めた。

こういう強引な男は『酌をしても良い』イコール『一晩OK』だと直結する面がある。だから折に触れて釘を刺しつつ、周囲にもオモチカエリーさせないようにしておかねばなるまい。

これが青悟相手だと酒の勢いで『あの交渉約束したよね?』とか言

われないように、むしろ双葉の方が間に挟まって警戒するのが面白い所だ。

「しかしよお。この武器は一体全体、何を目的に使うんだ？」

「蛇腹剣はロマンなの！ まあ奇襲性以外にも意味はあるけどさ。格好良くない？」

酒の勢いを借りてベラベラとまくしたてる。

大通連の方はまったくかわらないが、蛇腹剣以外にも色々準備があると云ったら大人しくなった。どうやら武器マニアの面が出ている時は話が通じるようだ。

……問題なのは頭バーサーカーな面もチラホラと伺えることだ。さっきも腕試しをねだられたが、試し撃ちで勘弁してもらった。もし酔っぱらった勢いで『OK』とか言ったら今ごろは息をして居ないと思う。

「格好良いってんなら、大槍とか大刀の方がよくねえか？ そいつは射程が変わるくらいだしよ」

「判ってないなあ。こいつは分解と再統合で姿が変わるって唯一性があるんだ。それに振り回すだけじゃ真価を發揮できないよ」

大通連の思考はまっさらな武芸者だ。

身に付けた『力』イコール『パワー』であり、それが發揮できる素直な装備を好んでいる。代名詞の『大通連』も魔剣であり、投げて戻って来るという特性で無限に使える弾丸として気に入っているようだ。

その意味でオマケで渡した巨大ブーメランは大通連の予備兵装というところだろう。

「使い道ってつたつて要は多節鞭や縄鏢の仲間だろ？」

「今の改良型は棍棒や槍には成るよ。君にとっては脆すぎるだろうけどね。それと……」

蛇腹剣の強度を上げるために、刃をいったん先端だけにした。

そして肉厚な鉄の筒で鎖を覆う形にして、普段は棒状にしておくのだ。そして鞭状にする時はキュッと回転させ、分解してから延ばすことになる。

とまあこれまでの経緯を喋りながら、僕は必至で内容を考えていた。目新しい使い道なんかサツパリ考えていなかったもので、何かしらでうちあげないと駄目だろう。

(どうしよう。口から出まかせを言ったけど、例として説明するにせよ僕が使いこなせないという意味は無いんだよなあ)

鞭というか鎖鎌の要領で幾つか使い道をやって見せる。

しかしそういうのはこちらの世界にもあるのだ。縄鏢なんかモロにそうで、突き刺したり矢先で牽制するとか当たり前の様に使ってくる。

その上で僕なりの使い道をせねばならないだろう。

説得力が段違いだし、今までとは違う使い道という新しい方向性に持って行けるからだ。

「例えば?」

「……例えば僕は神職だから、こいつを起点に结界作るとかね」

酒のせいもあって思いつかないので、適当に組み合わせた。

僕ができる独自性と言うのは、せいぜいが保全能力だ。長柄状態を保全すれば、かなり壊れ難くなる。しかし……この男が使うたびに消費するは面倒だ。それに元々の目的は魔物退治だったはず。

だから蛇腹剣の周囲1mに结界を張って、即席の防御幕を作るのだと言いつつ口にしたのだ。

「ふーん。んじゃあちよつと試していいか?」

「ダメダメ。君の剛力だと皮鎧も鉄の鎧も同じだろ? ……そうだなあ」

ちなみにこの男が持つ神の加護は、そのまんま剛力無双である。

筋肉が馬鹿みたいにつくのだが、決して俊敏性を損なわないチート筋肉だ。100m走とバーベル上げで金メダルを当前の様に採れるとかズルイじゃないか。

そして不満げな男に対して、見え易い成果をやって見せる必要が出てきて焦る。上手く言い訳を考えないと、僕が受け止めて即死するしかない。

「君を誘ったのって緋雁原の大精霊退治なんだよね。だからここは燃

えないようにして見ようか。そろそろ野営だから丁度良いと思う」

「ホー。あそこのヌシ退治ねえ」

これから試しに使ってみるわけだが、全てを保持すると動かせもしなくなる。

ついでに言う必要エネルギーも膨大で、僕の魔力では即座に維持できなくなるだろう。そこで対象を『耐火』のみに絞るつもりだが、実戦ではさらに『延焼』に絞ることで火傷対策を行う予定だった。

そして蛇腹剣 *ver 2* の穂先から1mほどの耐火性を保全して、燃えない球形を作ってから振り回す。ビュンビュンと振り、蛇の様にしながらせてから穂先の部分を適当な残骸に突き刺しておく。

「これでいいかな？ 刺したところに油を撒いて見せるけど、火を点けてみて」

「……お、こいつは面白ねえなあ。確かに燃えもしねえ」

突き刺した周囲は一切燃えず、結界の外に垂れた油にだけ火が点いた。

このまま放置すればいずれ結界が尽きて燃え落ちるだろうが、たいまつを元の篝火に戻すと心配はないだろう。あとは土でも掛けておけば油も吸ってくれる。

何とか言い訳が繋がったが、これでこの場は乗り切れたに違いない。

「実はコレって逆の使い道もできるんだよ。火責めの時に甕の中に火種を入れるでしょ？ あの使い道を真似して、結界を短めに設定しておくんだ」

「なるへそ！ そいつはおもしれえ！」

こうして赤ん坊よりも目が離せない頭バーサーカとの酒宴が何とか終わったのである。

ちなみに雇用条件とか全く話して居ないことに気が付いたのは、翌朝になってからというオチだった。

一難去つて、また一難

● 朝は爽やかな物とは限らない。友人との楽しい飲み会ではない時は特に。

汗ビツシヨリになって起き上がり、軟らかい感触にホっとする。昨日『胸が小さくない事を証明する』なんて馬鹿な事を言い出したので必死で止めたのだ。

飲み過ぎたこともあつて手は出していないけれど、民兵たちに『戦いに女連れ』というレッテルは張られたかもしれない。愉しむ余裕なかなかつたのに理不尽だ！

「よう！ 先にいただいてるぜ！」

「飲酒の許可出したっけ？ 甕を開けた以上は仕方ないけどさあ」

顔を洗つて外へ食事に行くと、そこでは御客人（？）一杯やつていた。

こいつ沢山あるわけじゃない物資を勝手に飲んでるとか、どういふつもりなのだろう？ いや、こういう奴だとは聞いてたので止めなかつた僕が悪いのか？

だがまだだ。まだリカバリ―は効く。

女に手を出されて『代わりにヤつといたぜ』なんて言われたら脳が壊れるところだった。それにくらべたらまだマシだ。

「ケチ癖えこと言うなよ。まだあるんだからよお」

「普通の兵士はさ、自分より強い相手と戦うにはお酒の力が居るんだぜ？ それなのに飲み干したら困るじゃん。まあ君なら余裕だろうから、ここに居る間は代わりに戦ってくれくれるならいいけどね」
せつかつくなので戦う理由を付けておく。

呑んだ分だけ戦え！ 魔物が来ないなら仕方ない！ そういう言い訳で強力な武芸者を雇っているならば民兵たちにとつてもプラスだ。安酒とはいえ一甕がカパカパ空けられていくのは財布の問題で痛い。

少なくとも自分たちの取り分を吞まれる分の補填と、不確定事項な

がら命賭けの戦いがある時の助っ人なのだと告げておけば不満くらいは抑えられるだろう。

「そのくらいは構わねえがよ。それよりも武器だ、武器！ 新しいのくれよ」

「緋雁原に付いてきてくれるなら名工を紹介するよ。その上で一緒に戦ってくれるなら、武器を作ってくれとお願ひしても良い。僕のアイデアは百八式まであるんだぜ？ まあ一部は何処かで見たことあるかもしれないけどね」

適当にその場を誤魔化しながら雇用条件を設定する。

特殊武装を作ってくれる変人……名人の鍛冶屋を紹介する事で同行要請。技術料・素材材料込みで注文一回分がボス討伐戦の代金だ。

その上で色々と派生武器を作れるのだと主張しておく。

使えるかはともかくとして、前世の知識は有用だろう。この世界に無いと言わないが、国の差・文化の差を考えれば全てであるとは思えない。

「108とは吹かしやがったな？ 例えはどうよ？」

「そうだね。君って盾は殴る事もある、そういう技の他に、小綺麗に戦う必要が無いから殴るだけだよな？ じゃあ専用の盾ってあんまり見たことないんじゃない？ 中には殴ることを前提にした盾もあるんだよ」

代名詞の『大通連』だが、近くで見るとミドルシールドくらいはある。

昨日は小さいと思ったが、どうやらこいつが大きいからそう見えただけの様だ。そして目についたシールドから話を広げていった。

この国は東洋ベースで西洋混じり……インドとかロウラン辺りの文化圏だ。シールドは存在しているが、それほど知られているわけじゃない。

「その大通連は投げるのにちょうど良いサイズだけど、籠手の代わりに小型から仲間を守るための大型。そして騎兵が馬ごと自分や仲間を守るための菱形。大型のバリエーションだけど、弓師が身を守る専用品には地面に突き刺す杭もあるんだ」

「おおー。それで、それでだ！ 殴る専用ってどんななんだ!？」

食事は大きな木のテーブルに載せているが、屋外なので地面に絵を描けば良い。

丸型に長方形、バックラー・ミドルシールド・ラージシールドそしてカイトシールド。弓隊用のシールドには言った通り尖った先を描いて大地にさして後ろから支えるための取っ手があるのだと説明していく。

そして殴り専用の盾と言うのは、盾の先に杭や棘がついている物だ。普通の盾を改造すると本体は木製であることも多いが、専用品だと好きな配分ができる。軽いモノならば木製でナックル付き程度、思いつく物ならば鉄板そのものに杭である。

「特注品で作るなら、君が好む大きさや重さで作ることもできるね。大通連と同じくらいなのか、もっと小さくして動かし易くするのか。小さい代わりに鉄板で作るのもアリだ!」

「おおー」

こうして目を輝かせている間は大人しい。

現物がこの場に無い事もあり、人間で実験しようとかやろうと思っても出来ないからだ。

話聞く限り辻斬り紛いの事をやりかねないタイプだし、止めたとしても『武術家同士なら良いだろ? どうせ俺が勝つし』とか平気で挑発込みで実行しそうだった。

「それとこれは将来の希望で、今は居ないんだけど付与ができる魔術師を呼べたら、使い切りの強化魔法を込めても良いかもね。殴った瞬間にドーン! と二倍三倍の威力を出すんだ」

「良いなそれ! 適当に捕まえて来るから……」

「ストロップ! 緋雁原を攻略したらアテが出来るから! 勝手に連れて来るのはナシ!」

パイルバンカーの夢を語っていると、立ち上がって都の方に歩き始めた。

怖ろしい事に止めなければ実行しそうな雰囲気漂っている。歩き盛りの子供よりも目が離せないとは……。これだから頭バーサー

カーは困る。

(しかし……ここまで酷い二進数思考だと、知り合わなきや良かったのかな。でもなあ、蛇腹剣に食いついたって事は、何処かで出逢ってたんだろいなあ)

前世の知識を活かして色々と作ろうとしたのがマズかったのか？

しかしそういった計画は既に走り出している。冒険者ギルドで一定の成果を上げると、名工が作った質の良い武器をもらえるとかポーナスを用意してたのだ。

もし放置した場合は、何年か後に『こいつより俺の方が強いから、くれ！』と言っていたか、それともコレクション用に片っ端から奪っていく姿が見える様である。

(とりあえず何とかなった……のか？ 後は女の子が増えるたびに釘は刺しておかないと。うちには武芸者いないけど、武人肌の人 came 時もかな)

そのまま色々話し、何度も何度も繰り返して納得させた。

面倒だから嫌だという事はあっても、魔物が怖いから嫌だということはないという事だけは安心できる。後はその気にさせて緋雁原さえ攻略してしまえば理由を付けて追い出すこともできる筈……だ。

それはそれとして下手に双葉が意識しない内に、するべきことを済ませてしまいたいと思う。というか本当なら今までの間にすべきだったからなあ。

「この戦いが終わったら結婚しよう。なんだったら今すぐしよう！

幸せにするからさ」

「あう……むう」

理由を探して先延ばしする未来が見えたんで、即決で双葉にプロポーズした。

全然好きじゃなくて『意識過剰なんじゃない』と言われたらと思うと怖かったが、それならここまで付き合っていないと思う。

だから一大決心して告白したのだが……。嬉しそうな反応と怒っているような反応が見えた。

「嬉しいけど、遅い！ 一カ月くらい遅い！」

「なんでさ!?! そりゃ決心したのはあいつに取られたらヤだつ理由もあるけどさ! それなら三日位でいいんじゃない?」

「なんでか具体的な時間を理由に怒られた。」

「これが『何年も待たせて!』とか『昨日の今日で!』ならばまだ判るのだ。ずっと仲良しのまま居心地が良いから放っておいたわけだし、あいつが来たから久しぶりに意識したという……まあ最低な理由だから怒られても不思議はない。」

「だがこれが一カ月……今回の戦いを計画する前までさかのぼる理由が判らなかつた。」

「……と言う事なだけでさ紅梓さんは双葉から何か聞いてない?」

「え? あー? 本当に判んない? まあ直ぐに判るわ」

「依頼を終えて戻って来た紅梓は苦笑していた。」

「可哀そうな物を見る目で僕を見て、手を振ってその場を後にする。」

「ちなみに大通連の問題があつたので、酒に誘われた時とか気を付けろと言っておいた。別に口説く気はないが、酒を飲むだけでオモチカリーからの『エルフの領域に戻る!』『人間め!』というコンボは困るからだ。」

「でさー。双葉は怒つたまんまだし、紅梓さんも教えてくれないんだよね。剛盾さん、何かアドバイスでもあれば……」

「お前さんは妙に自己評価が低いのが。ああ、傭兵じゃなくて、その後の話な」

「次に戻って来た剛盾の反応はこうだ。」

「同じように大通連の話をした後で、武器マニアだから協力してやってくれとか材料費くらいは出すと告げた時の事である。」

「彼はポンと僕の肩を叩き、溜息と共に同情の言葉を放った。」

「自己評価?」

「そうじゃ。この辺りの平和を勝ち取り、今まさにアンデッドを駆逐してその脅威から南領を救おうとしとるんじゃないぞ? 一口に言っつな、そういうヤツは選べんのじゃよ」

「そして以前に聞いたドワーフ族が母系社会であるという話を繰り返す」

返した。

一族繁栄やら確実性という意味で、そっちの方が遥かに合理的だという身も蓋もないシニールな話である。

なんで同情的かと言うと彼は恐妻家であり……婿養子なのである。女性陣に全く頭が上がらず、女難であるという。

「お久しぶりです。実はこの度、幼馴染と結婚しようと思ひまして」「そう……か。それはめでたいが……。オホン。銀殿、実は悌さまがひどく銀殿の案に感動されましたな。都の軍師でもこうも見事な策は出せまいと」

ご長男の側近騎士である緋七司が再びやって来た。

別に仲人にしようと思つたわけでは無いが、身内が妙に渋いので相談しようかと思つたのだ。

しかし突然に話を打ち切られ、当初の話に戻されてしまう。

そりや上意とあれば仕方はないが、彼は緋雁原攻略までは滞在する予定なのだ。どうして突然話が変わったのか分からない。ていうかさ、齒に物が挟まったように唇の端とか目元とかがピクピク動くのは止めて欲しい。

「いえいえ。現地で集めたデータゆえです。協力してくれる仲間や他の荘園主もおりますし」

「それも含めて実力でしよう。うむ、銀殿は自己評価が低いと言われたことはありませんか？」

なぜか剛盾と同じことを言い始める。

それに彼の方が格上なのに、何故か言葉遣いが丁寧になったのも気になるところだ。

どうしたことだろうと同行して来た青悟に目を向けるが、彼は吹き出しそうな顔で必死に笑いをこらえていた。

「どういふことなんです？ 青悟さん」

「やだなあ。私達の中だろうか？ 青悟と呼んでくれ給えよ。もはや君と私は同格の身分になるのだからね」

え？ と思わず首を傾げた。

僕の身分は騎士相当だ。仮に加増されて荘園が増えてもせいぜい

準男爵程度。それでは貴族と呼ぶには程遠い。

どうしてここで身分の上昇が伴うのだろうか？ 爵位を授けられるほどの活躍はまだしていないのだ。

「……めでたい話が出た後で非常に言いにくいのですがなあ」

「何か条件が出たのですか？ 武門の誰かが文句をつけたとか」

「いや、むしろ好条件だよお。それも破格のね」

いい悩む七司に対し、青悟の方は笑顔でしゃべる。

それならお前が話せと言いたいが、彼としてはこの話を長引かせたいらしい。

どういふことなのと視線で問うと、七司は観念したのか意を決して話し始めた。

「悌さまは君に報いる為にも、そして緋家を盛り立てる最初の案として妹君のいずれかを君に目合わせようとおっしゃったのだ。おめでとう!!」

「はっあああ!?!」

「先に言っておくと断るのは無理だよ？ 侯爵さまも褒めておられた事だしね」

寝耳に水と言うか、気が付かなかったのは僕だけの様だ。

面倒な話になるのだと、僕以外の全員が理解していたというオチであつた。

避けられない難題

●
何でこうなったか良く分からない。

そんな顔をしていたのだと思う。その場に居る青悟と緋七司が順に説明を始めた。

「いいかい？ 伯爵領は南領の守りであり入り口側を守っている。だからこそ功績も信頼も絶大なんだけど、知つての通りここ最近は費用が莫大だね。都に対する長年の滞在費にアンデッドの大量湧きだよ」「そこで中央は人質など不要として、アンデッド討伐に専念すべしと指示したのです」

正確には侯爵家も含めて数人の人質を出している。

近年の大規模アンデッド騒ぎもあり、南領の出入り口に当たる伯爵家の人質を返すことにしたわけだ。これによって都での滞在費用や護衛武官などが不要になり、大幅な改善を期待されてはいた。とはいえ戻されたばかりの長男さんに武力があるわけもない。滞在武官も直ぐには前線に出せないし、七司の様に近侍は純護衛戦力なのは戦場では微妙だ。

そこで僕らのような傭兵を集めて投入したわけだ。

浮いた滞在費用だけでは明らかに足りないので、優秀な者は全滅した騎士や下級貴族の代わり契約する旨を伝えていた。その流れに乗って僕は無事に荘園主に成れたわけだけでも……。

「以前も申した通り伯爵家自ら動くべしという意見がありました。が、ご長男の倅さまは人質暮らしでした。この状態で固有の武力など持っていないし、展望など持てと言う方が無茶です」

「伯爵はまあいいんだ。君たちとの契約で存在感を示せたからねえ。だけれど間の悪いことに弟君も名代として一隊を率いてしまっている」

「そんな所に銀双葉という英雄が現れた」

改めて英雄と呼ばれると恥ずかしい。僕は絶対に勝てる案で押し切っただけだ。

傭兵隊の中では限界が見え始め、上級魔法が使えないことが輪をかけていた。強力な魔物の討伐ではそろそろお呼びが掛からなくなり、雑魚専にならざるを得なかっただろう。

そんな僕が誰もから崇められる英雄だとは思えない。精々が民衆に夢を見させるための看板に過ぎないはずだ。

「君は盛んに自分の作戦は大したことはないという。しかしその大した事のない作戦すらみんな思いつかなかったのさ。正確には思いついたとしても、みなに言う事を聞かせられなかっただろうからねえ」
「実際、伯爵家でも当初から評価していたのは悌さまだけです。だからこそ銀殿の活躍は、悌様に見る目が合ったという事になるのです」
当初は武人らしくないと評価されていなかった。

傭兵隊でもそんな連中は居たわけだし、やはり伯爵家でも同様だったらしい。しかし僕の隊を始めとして、案を受け入れた隊が活躍すると話が変わって来た。

名誉優先の伯爵家は武門連中が居たが、傭兵隊では成果が全てだ。今では僕のやり方を踏襲し、自分なりの方法で改良することがあつても反対する者はいなかったという。

「ぐ、偶然ではないかと……」

「英雄は偶然を味方につける物だよ。君も知ってるだろう？ 聖女が何十年も現れなかった馬鹿な理由をさ」

これには返す言葉が無い。

この世界では神から与えられる加護『そのものは平等』だ。様々な祝福はおおよそ同じような強度があり、誰が身に付けても『環境さえ同じならば』同じ程度の能力が身に付くようになってる。

だがこの環境と言うのが曲者だ。

誰しもが加護として何の祝福をもらったか鑑定してもらう事は出来ない。また生活も関わって来るし、教える者によっては魔法を後回しどころか教えない者も居る。

「聖女が出ない事に業を煮やした王様が、鑑定魔法大会を開くまで判らなかつただけですよね」

「王の命令で、しかも今回みたいな騒ぎでも無ければ無償で鑑定なん

かしないからね」

「銀殿の故郷である北領では、老爺が魔法袋の祝福を得ていたそうではありませんか。ここまで来ると笑い話ですなあ」

件の聖女様は平民出身だった。

このために、光の魔法を効率的に覚えるという祝福を三十過ぎまでまったく活かせてなかったのだ。この世界では能力は平等でも機会は均等ではないという良い例である。

そして勇者や聖女というのは、世間が困っているタイミングで現れた状況に適応した能力者の事と言えるだろう。対アンデッドに関して光の魔法は有効なのだが、覚えるのは『光魔法の祝福』や『万能の祝福』を除けば難しいのだ。

「悌さまから見ても、銀殿の案は判り易く特に誰でも実行できる点で理があると思えました」

「君の案を推すくらいしかなかった事もあるわけだけれど、確実性重視だけに君は活躍していくからありがたい。そして今度は自分の名前前で南領に平和をもたらし、緋雁原のヌシをも倒してくれるという。情弱な暗君が一転、見る目のある名君だよお。これを笑わずには居られないね」

要するに安全策で『寄らば大樹の陰』をやったらやり過ぎたわけだ。

伯爵家の傘下として適当にやれば良かったのだが、向こうから見れば鴨が葱背負ってやって来たという訳である。

「ですが、それならそれで、他の報酬でも良いと思うのですが……例えば領地とか、身分だけでも良いはずですよ」

「それは伯爵家が揺らいでなければの話だねえ。南領の平穏という巨大な功績に対して、領地だけだと広大になるから譜代の連中が文句を言ってくる。かといって金銀摺み取りなんて絶対に無理だし、爵位つてのは平民に授ける為には手順が居るんだよ。そういう意味で血縁を先に結ぶとやり易いんだよね。少なくとも次代からは身内なんだし」

聞けば親族が起こした子爵家で三郡、譜代筆頭ですら良地ながら二群なのだとか。

後は大小さまぎまで微妙な広さの荘園を二つ持つ程度の貴族が精々らしい。侯爵家ならばともかく、伯爵家にとっては本来それで十分だったらしい。

そこに僕が現れ、大きな功績だと認識されたのが問題だった。

「下手を打つと吝嗇と見られませんか。ご舎弟である連さまを担ぐ一派も息を吹き返します。その意味でも妹君を目合わせ一門衆に加えてから……というステップは名案とも言えましょう」

「トドメが侯爵閣下の御裁量だねえ。名案ゆえに侯爵閣下も膝を叩いて感心し、秘かに伯爵閣下を説得中との事だもの」

一門衆に加える事そのものが報酬であり、良い報酬を与える名目になるのだとか。

扱いも大きく変わるのでその場しのぎである筈がなく、伯爵家を持ち直した後からその才能や能力に合わせて爵位を始めとした褒章を与えれば良いとのことだ。

そして話を難しくさせたのが侯爵さんが長男さん擁護に回ったことだという。元から血縁関係があり、都での往来を考えると顔を合わせた回数はかなりのもだろう。長男さんが伯爵家を継ぐに相応しい提案をしたと素直に喜んでいるのだとか。

「……ちなみに断つたらどうなります?」

「無理。その上で説明するんだけど……今回の問題は伯爵家も乗り気ということだね。よその家から押し付けられたり、重臣がゴリ押したというならまだ話は違っただけだねえ」

ダメもとで聞いてみるのだが即座に否定された。

その上で説明して来るといふのは、僕を説得する為に口になっているだけだろう。

見れば七司の方もウンウンと頷いており、貴族階級の共通見解として断るのは不可能に近いという事なのか。

「伯爵家からの御厚恩を断る理由がまずありません。断るようなら傘下に収まってはおらぬと誰もが思うでしょう……で、ある以上はその名に泥を塗っても仕方がない理由があり、それを掲げること無理に抜ける事になります。結果として悻さまも、妹君も面目を失います

な」

「妹君がこの件に賛成である、無しに関わらず誇りを傷つける事になるよねえ」

「もしかして賛成じゃない？　ならそれを理由に……」

「無理」

妹さんが気にいらなから降る。

そんなのは理由にならないし、妹さんが僕を嫌うからというのも理由にならない。まあ政略結婚と言うのはそんなものだとは承知はしている。

何処の馬の骨とも判らぬ輩は嫌だと言っても、その馬の骨を貴族にするために婚姻する。良く知らない人は怖いというならば、婚姻によつて良く知れば良いだろうという理屈だ。政略結婚に際して女の感情が捨て置かれるのは、異世界でもやはり同じなのだろう。

「でも、あの僕。これから結婚する予定なんですけど……」

「既に結婚してれば？　せめて前に逢った時に双葉くんも同席して居れば違ったんだろうけど」

「その場合は忠言したかもしれませぬが……貴族出身の妻と庶民出身の妻は別物。こちらが正妻であろうな……と主張することになったでしょうな」

結局のところ、既に手詰まりと言う訳だ。

双葉が言った『一カ月遅い』というのは、断る可能性が微妙に残っている事と、本妻として自分が上だと主張する理屈が残っているからだろう。

そしてプロポーズに対して返事を保留にしたのは僕を嫌ったからではなく、微妙な関係に適度な距離を保つべきだと思ったように思える。庶民出身で後から結婚したという事ならば、どっちが正妻かと言う論争をしなくて済むのだから。

（うわー。迷惑かけちゃってるなあ。何とかフォローしないと……でもどうすんだ、コレ？）

妹さんと結婚するところまでは確定事項であるとのことだ。

これから逃げ出すには再び出奔して何処かに旅立つしかないが、こ

ここまで来るといつそのこと国外逃亡するしかないだろう。故郷に居る時よりも有名になってしまっているし、泥を塗るのが悪代官と伯爵家では天と地の差があるのだから。

と言う事は選択肢はあまり多くない。

1つは国外逃亡するかどうかについて相談する事、もう1つは双葉の機嫌を取る事だ。すくなくとも『ハーレム展開だ、ヤッター!』と素直に喜べる自信が僕にはない。そう思えるには告白する決意をする前……いや、故郷を捨てる前にまで戻らねば無理だろう。何のかんのかと言って僕は双葉の事が好きなのだから。

「この際だけ諦めて善後策に走った方が良いと思うよ。気に入られるように妹君の印象を良くするとか、気に入られなくても良いって場合は子供を産んだらお互い愛人を許容するってのがパターンだから、そのアレンジとかね」

「……色々と相談してみます」

何だろう、ここに来て一番の案件である気がする。

なんで問題が一つ片付くと新しい問題が出るのだろうか？ 僕としては平穩無事に暮らしたいだけなのだが……。

うちの神様がいつでも動ける状態だったら、一カ月前の段階で今回の件への忠告でもくれたのだろうか？ 既に終わった話ながら僕としては頭を抱えて神頼みをした気分であった。

奇妙な解決の仕方

● 神頼みをしてみたものの、都合よく神様が現れるわけがない。

実際に現われる可能性があるだけ僕は恵まれているが、まあ本拠にある洞府ならともかく隣村まで出現したらおかしいので妥当と言えるだろう。

ともあれ話が固まってから速攻で頭を下げに行った。

良い知らせと悪い知らせがあるのだが、良い知らせの方は不承不承ながら双葉が受け入れてくれたことだ。悪い知らせの方はとても沢山の要求を積み上げられた事である。要するに結婚話に関する話題は今回で終わりつて事なただけだね。

「せっかく作った村から出て行くのは論外！ 面倒くさいし子供の時の約束まだ全部果たしてないよね？ 少なくともプリンとアイスと何とかアラモードってのを食べさせて！ あとあとお肉の食べ比べとか全部！ いつでも食べたい時に食べるんだから!!」

「判った！ 難しいのもあるけど、全部叶えるから!!」

子供のころ、空に浮かぶ雲を指さしながらこの世界に存在しないお菓子の事を説明した。

あんな形でとつても甘く、柔らかくて頬つぺた落ちそうなくらいに美味しくて、しかも載せる物で無限に近いバリエーションが作れるという話だ。

夢のある話だとか、子供だましとか言っではいけない。

この世界で同じことをしようと思うと凄まじいお金が掛かるのだ。しかし、いつか結婚して幸せになるはずだったのに、いきなり妾扱いで本妻が出現するとか言われたら激怒して当然である。このくらいは叶えなくて男の浪漫など語る事は出来まい。

「でもさ……。ちゃんと覚えててくれたんだね。しかも、ソレを条件にしてくれるなんて……ありがとう。そして、ゴメンね」

「あう……。ふーんだ。それだけじゃ誤魔化されないんだからね。夏も冬も居心地の良い家と綺麗な服も！」

要求してることは全部、僕がやってみたいと言った事だった。

それを全部覚えていてくれて、公認浮気的な結婚話の条件にしてくれるとか僕は恵まれている。この際だから予算がどうのとか、材料的に難しいとか言うのは綺麗サツパリ忘れよう。それが可愛いお嫁さんに対する真摯な態度と言うものだろう。

それはそれとして、夏も冬も居心地の良い家なんて言ったか？ まあどうぞそういう家が欲しいから作るけどね。

「あ……。あとあと！ 新しいお嫁さん候補とか選ぶ時は、私の意見も参考にする事！ どうせなら仲良い人を選びたいもんね！ 昔に三軒隣にいたオババみたいのとか町に居た飲み屋の女給とか最悪だもん！」

「はは。流石にもうコリゴリだよ。複数人は重いつてば。今回も選べそうなだけだし、向こうが最終的に決めるんだろうから」

子供のころは子供なので無謀にハーレムとか簡単に言うけど、大人になったら無理である。

それこそ面倒くさいし、そのたびに双葉に新しい要求を突き付けられるとかは困る。可愛い我儘ならば普段から狙っても良いんだけどさ。

しかし滅多に他人の悪口を言わない双葉が最悪と言うからには、その二人の性格は悪かったんだろうな。

「選べるってどんな人たち？」

「詳しくは聞いてないけど、二人居るらしいよ。妹のどちらかを……って話。宴の席かなんかで口にしただけだと思うんだけどね」

宴会で口を滑らせただけならば、そのまま忘れてくれれば良いものと思う。

しかし残念な事に側近が侍っており、侯爵家にまで話が伝わっている以上は無理な話だろう。

そして女性に対してこう評価するのもどうかと思うのだが……。どっちでも良いって事は、おそらく能力的にも政略結婚の価値的にもどっちでも良いって事なんだろうな。

「妹君の性格ですか？ ううむ……」

緋家の近侍である七司に失礼でない範囲で聞いてみた。

どっちでも良いのであれば、双葉の性格に合う方を選びたいというべきか、あるいはお互いの家の負担にならない方と言うべきか。

しかしどうでも良い性格なのか逆にメリット・デメリットが極端なのか……。いや、マジで女性にする評価じゃないよね。ゲームのキャラデータじゃないんだし。

「まず長男の悌さまと次男の連さまの間に、二人おられると言いましたね？ 連さまは銀殿より少し年下。だから年齢の方は察していたきたい」

「あれ？ 言いたいことは判りますが、妙にアレですね。普通ならばとつくに結婚してませんか？」

要するにどちらも二十歳+@だ。貴族ならばとつくに結婚している年齢である。

中央とゴタゴタしているとか、アンデッドの大量湧きがあった事を含めても少し妙な話だ。

何か大きな問題があつて、名目上の結婚とか……まあ無理かなあ。仲良くは無理でも、せめて妥協して欲しいものである。

「姉の麗さまは悌さまの少し下で、一緒に中央に居られた。王家の姫に付いた侍女経験もあり聡明な方です。妹の爽さまは欠点の見当たらない優しいお方ですな。婚家に御不幸が無ければ今ごろは……」

(……説明になってないよ。……まあ判るけど)

結婚して居ない理由は何となく理解できた。

姉の方は人質暮らしが長くて丁度良い相手が居なかったのだ。故郷では高嶺の花過ぎるし、中央では地方貴族の娘でしかない。

妹の方は結婚したものの旦那が亡くなって返されたか、今回のアンデッド大発生で婚家自体が消滅したのだろう。貴族は家同士の付き合いなので旦那が死んでもその弟が変わるはずなので、おそらくは後者だろう。生き残りの妹ごと引き揚げれば領地と財産を回収できるのだから。

(しかし、マジでどっちでも良いから嫁がせようって案件だよね。人

質生活の問題で行き遅れたお姉さんに、旦那がアンデッドに殺された妹さん。どっちも可哀そうと言うべきなのか)

自分が嫁ぎ先で無ければマジでどうでも良い話である。

そして自分の家に嫁ぐ嫁さんであるからこそ、何らかの美点を見つけてよいかお家事情に振り回されて可哀そうだと僕も思おうとしているのかもしれない。

同情なんて失礼だと思わなくも無いので、この話はいったん打ち切ることにした。

「その辺りはお互いに知り合って追々でしょうね。妹君たちにもご事情がありそうですし……。まずは北上と緋雁原の相談でもしませんか」

「う、うむ！ そうですな」

「……ええかつこしい」

なあなあで済ませようとする僕と七司に対し、双葉は不満顔でボソリと口にした。

主家のお嬢さんの事情に対して、なんつー恐ろしい事を口にするだろう。ホラ見ろ、青悟は笑ってるし、七司なんて固まってるじゃないか。

だが双葉は失言だと認めず、そのまま言い張る気の様だ。指を突き付けて言い放とうとすらしている。

「だいたい、それって失礼じゃない？ 聞いたなら最後まで確認して、自分はこういう方を迎えたいと思っておりますとか、相手に遠慮するなら自分を好きになってくれる方とか。あとあと、誰も貰わないなら二人とも僕が面倒見ますとか言えない？」

「なんとという大胆なハーレム宣言!! 都でもついぞ聞いたことのない男前ぶりだねえ」

「いや、結婚するのは僕でハーレム宣言してるのは双葉なんですけど」
プンスカ文句を言う双葉に、笑いこぼる青悟。

いや、確かに男前な言い分だが女の子がライバルに対して言うセリフじゃないよ……。まあそういう爽快なライバル宣言が好きな子も居ると思うけどね。

それと青悟、笑ってないで何か妥当な案を教えて欲しいものだ。都に居て緋家にも最近出入りしてるんだし、ある程度はお嬢さんたちの事も知ってるんだらうからさ！

「あー。いいかい、男子の一言金鉄の如しと言ってだねえ。いや、双葉君は女の子だけだ。ライバル相手にそこまで譲っちゃっていいの？」
「愛し合うか憎み合うかはその時決めるもん。どうせ長い付き合いになるなら、グダグダなのは面倒くさい」

「結局そこなのか……受け入れてくれるのはありがたいけどさ、もうちよつと齒に衣という物を……。いや、ありがとう」

どうやら双葉は最初の段階で決着をつけるようだ。

妥協できる相手ならば妥協して、出来ない相手ならば一生顔を合わさずに生きていくくらいのつもりなのだろう。

こういう時まで省エネ重視とは、男前なのかそれとも……その決断を含めて僕を好きだから譲歩してくれているのだろうか？ そう思うのは僕の傲慢では無いのだと信じたいところだ。

「七司殿、どうかなあ？ 二羽君が結婚を言い交した女性が身分を弁えここまで譲歩している。そうお伝えするべきではと私は思うんだけどねえ」

「……そうですね。詳しい話は後日、我々の方で双葉殿にお伝えしましょう」

「はーい」

「いや、何で僕じゃなくて双葉が決めるって事に!？」

なんでさ!？」

わめく僕を尻目に、結婚話は良く分からない流れで決まりそうであつた。

まあ双葉の性格に合う人を選ぶってんなら、負い目がある僕が文句言える立場じゃないんだけどね。

こうして良く分からない悩みを終えた僕らは、残った課題を片付けるべく情報収集に励むのであつた。

作戦の確立

●
改めて残った課題を並べてみよう。

一つは万鹿柵を奪回し周辺をバリケードで制圧する事。次に緋雁原のヌシを倒してその脅威から解放することだ。

前者は北上して都方面に行く途中にあり、今回の作戦では最終目標に当たる。ゆえに目下のところ緋雁原の攻略こそが最優先だった。

「緋雁原はその名の通り緋家の主城がある場所であり、ここが落ちない限りは伯爵家は安泰です。少なくとも当初はそうでした」

七司が語り始めるその歴史。それは複雑ではないが良し悪しの混ざる物だった。

その昔、まだ群雄割拠の在ったころ。二群から三郡に匹敵する広大な平原であり、その一部がファイヤーエレメンタルの発生する難所であった。これらには鳥のような習性があり、余所者には脅威であるが地元民には守り神である。

北の万鹿柵近辺を有する勢力と手を結んだことで、当初の緋家は地形的にとても高いアドバンテージを得たと言っても良いだろう。残念な事に過去形で、それらの利点が全てひっくり返ってしまっているのだが。

「魔王の出現以降、強大な魔物が様々な地に現われました。ヌシもその一体で、単純な強さでもですが常時存在するという点が非常に厄介でした」

ファイヤーエレメンタルが何処の、何処に時期に出現するかを緋家は知っていた。

だから危険地帯でも平気で暮らせていたし、そもそも広大な平原なので全てが危険地帯と言う訳でもない。倒せる戦力が居るならば訓練ついでに倒せば済む話である。

しかし魔王の出現でそれが一変する。

強大な存在ゆえに立ち向かった者が次々に焼き殺され、常時出現してウロウロしているのだから危険過ぎてまともに暮らせない場所が

増えた。それでも伯爵家の主城が無事だったのは……単純に緋雁原が広く、人々がまだ弱かった頃から安全地帯に作った城だったからだ。

「確か時期で出現地帯が変わるから、輪裁式の農業を始めたんでしたっけ？」

「銀殿のおっしゃる通りです。精霊が出現するサイクルは決まっておりましたからな。時期と場所を外せば安全ですので、休耕地としておりました」

二圃農業などの輪裁式が都で考案された時。

それぞれの領地では対して導入されていなかった。しかし緋家では明らかに使えない時期と使える時期が判れていた為に、初期の輪裁式農業を取り入れて成功したのだ。もしヌシが居つかなければ、今ごろは三圃農業に発展していた可能性もあるだろう。

残念ながらそう上手く行かず、失敗事例で改良案が出たわけでもない。輪裁式農業のモデルケースになりはしたが、中途半端な発展をしているという悲しい例である。

「では今の出現場所は特定できますね。今の時期はこちらから探していく方が良いのか、それとも移動時期まで待つて強襲した方が良いでしょうか？」

「今の時機ならば固定ですね。こちらから探しに行くのは面倒ですが、いつも同じ場所に現れると報告例があります」

先人たちが残した貴重な報告例だ。

ソレがなければ無意味に歩き回って無数の精霊と戦わねばならなかったし、どの程度の相手か予想もつかなかっただろう。

これらの記録があつて尚、討伐されてない。

理由の一つは物理攻撃が通じない事、メジャーな攻撃魔法であり威力の高い火魔法が通じない事。魔法武器が貴重である事。挙句の果てにソレらが魔王率いる魔物の群れとの戦いで浪費されてしまった事だ。魔法武器は回収できても、遠距離攻撃可能な魔導師が死んだらどうしようもない。促成栽培の術師は火系を覚える事が多いので役に立たないことも大きいだろう。

（緋雁原が緋家の本拠地じゃなければな……。異種族を含めた南部連合軍を組んだ時に何とでもなつたんだらうけど）

本拠地の解放は他者に委ねる馬鹿はいない。

この時代の地図はアヤフヤで、軍事知識だからこそ城の位置も正確には載っていないのだ。それに名誉はどうなる？ 地の底まで真つ逆さまだ。

そして僕を青悟が推薦し、緋家の連中が歓迎しているのはその辺の理由もある。系列の下に連なつたばかりの奴なら、適当に持ち上げてしまえば良い。死んだ系列貴族の所までならば別に引き上げてしまつても構わないのだ。身内で爵位継承に関係ない相手ならば幾ら褒めても問題ないのだから。

「他のメンツの準備が出来次第に『主力』が北上します。僕らはメンバーが揃う事を最優先、今のメンバーだけならばヌシが動くまでにルート確保から入りたいところですね」

七司は最初、他にも心当たりが居ると言っていた。

紅家の三男坊や武門の騎士はともかく、もしかしたら付与系の術を覚えているかもしれない相手。また魔法の武具の持ち主が居るかもしれない。

「む……居ないわけでは無かった、というところですね。余計なシガラミも増えるので今のメンバーだけの方が良いでしょう。魔法の剣ならば御本家から何とか」

「なら時間調整を兼ねて連携訓練をしたら行動開始ですね」

どうやら待つても増えるのは面倒事だけらしい。

功績を上げるため名前だけでも参加させて欲しいとか、兵を肉壁にしている間に攻撃すれば良いだろうと考えなしの奴とか。そういう連中ならば居ない方が良いまである。

足手まといが居ても精霊相手には役に立たないし、倒すことは出来たが被害が多かったというのでは期待されている名誉が手に入らない。本来はそんなモノは要らないのだけれど、今回は武門の連中を納得させるために必要なのである。

「そのまま行つて、ガーッと倒すだけじゃ駄目なのかよ?」

「今回必要なのは『物語』だからね。大通連が一人で行つて確実にその日のうちに帰つてくれるなら、何の問題も無いよ? 豪傑に頭をさげで解決してもらいました。めでたしめでたしにできるからね」

と言う訳で早速作戦会議だが、実力から言えば当然の質問が投げられた。

そして楽勝そうにしていた大通連が、その一瞬で押し黙る。この反応が精霊と言う魔物の特性を表していた。

整理には物理攻撃が効かないが、技の一部も同様に通じない。武器の重さ・大ききで殴りつけるスマッシュ系などに意味はなく、装甲なんか元から無いからピアース系も意味がない。馬鹿みたいな耐久性で粘ることから、延々と打撃戦を余儀なくされるのである。

「冗談はキツイぜ大将。あいつらは殴つても平気な顔してやがるからな。一体だけなら楽勝なんだが」

「そういう事だね。んでこれが一番重要なんだけど、又シの周辺に全くないとか保証できないでしょ? 運が悪ければ二体目すら居る可能性がある。そして僕らは成功失敗に関わらず、苦戦が出来ない」

装甲も無いし技も使わず、延々と魔法攻撃が飛んでくる。

ゲームで言うところとHPを削り易いので、魔法の武器さえあれば倒し易い相手に見える。しかし耐久値だけが馬鹿みたいにある場合、この延々と撃たれるというのが最悪になるのだ。

イメージ向上が最大の目的であり、苦戦する訳にはいかないというのがこれに拍車をかける。倒すのであれば、計画に基づいて淡々と倒す方が気が楽である。

「最初の計画では相手の位置確認と、取り巻きの排除。最悪でも同ランクの相手が居ないという確認はしたいかな。それさえできればサッサと帰還しても良い」

「索敵による本陣特定は戦ならば当然ですな」

相手の周囲に雑魚がおらず、そこから動かないならば作戦が立てられる。

少なくとも行き帰りの道筋を掃除するだけでも話が変わって来る

だろう。だが何も考えずに突っ込み、取り巻きにやられて辿り着けないとか、類似個体だけを倒した後から恥をかくのは願ひ下げである。やるならば確実に状況を確認し、複数回の出撃による雑魚退治と本命討伐によって確実に熟すべきだろう。

「又シさえ特定できれば後は簡単だ。大通連が攻撃専念、僕と七司さんはその保護中心。青悟さんと紅梓さんは適宜に援護をお願い」

「かったるいが武器の為だ仕方ねえ！」

「了解しましたぞ！」

「は〜い」

魔法の剣や付与魔法はあるが、大通連が一番強いので彼を守る方が確実だ。

七司と僕は余裕がある時だけ攻撃し、耐火保護を掛けたヒーターシールドで相手の攻撃魔法を防御する。

それで火傷は何とかなるので、後は青悟が治療魔法と攻撃魔法を適宜に掛けていくだけ。紅梓は最初に防御魔法を掛けた後、周囲の精霊を監視しつつ接近してくるならば魔法で牽制する役目である。数が多いようならば僕と七司が接近した時にトドメを指す役目になるだろう。

「私たちはっ！」

「双葉と剛盾さんは帰り道の保護。場合によっては紅梓さんと連携してね。無いとは思うけど大怪我した人が出たら担いで返ってもらうから」

「そのくらいなら何とかなるじゃろ」

予備の武器とか結界は用意できるが、あくまでオマケでしかない。それに魔法で範囲攻撃可能な相手に対して、予備戦力を全員突っ込むとかマジでありえない。それならば後方に配置して、帰り道確保に充てた方がマジというものだ。

すくなくとも小型の精霊くらいならば彼女たちでも何とかかなるし、耐火保護を掛けたマントで覆ってくれば負傷者が死ななくて済むだろうという保険である。

「確認だけど紅梓さん。精霊を呼べる術者とかに心当たりはある？」

練習とか……」

「エルフを何だと思ってるのよ？ そんな便利な術師なんて居ないし、居ても他所に出す訳ないでしょ？」

てつきり精霊はお友達という種族だと思っていたが、違うらしい。

そんなクラスは存在しないと呆れはするが、別に練習戦闘までは否定しなかった。別に精霊は友達でもないし、過保護という事も無いのだろう。

となると後は実践練習あるのみである。

「なら練習は盾で守るのと、守ってる人を攻撃に巻き込まないのだけでいいかな。後は緋雁原で進路を確保しながらやった方が早いと思う」

「それなら火魔法の使い手でも呼ぶかい？ 痛いけど守る速度の練習には成るからねえ」
「げっ」

と言う訳で耐火じゃなくて、耐熱保護を掛けて防御練習。

精霊の攻撃魔法はもつと早いと思うが、一応の手順を覚えたところでフォーメーション練習も何とか成し遂げた。

こうして緋雁原攻略戦に向けて動き出したのである。

緋雁原攻略戦：前編

● 他の荘園主たちも準備が出来て、全体がジンワリと進軍していく。安全地帯を広げる様に動くから、基本的にその歩みは早くない。道をバリケードで軽く封鎖して周囲を偵察し、隣村までの位置を確保。場合によっては穴を掘って堀に変えるのだから進軍するのでペースが早い訳はない。

そして僕らはその間に、精霊に占拠された緋雁原攻略に向けて動き出した。本当であればもう一班くらいは欲しい所だが、攻撃魔法の使い手なんて滅多にいないので仕方がない。伯爵家全体で動くのならば話は別なのだろうけれど。

「実のところ、ヌシはともかく精霊は一か所に留まる個体ばかりではありません。昼と夜で別の場所に群れて移動する個体も珍しくなく、実は放牧くらいはできるのですよ。まあ過去形なのですが」

「そんな情報を集めた先人は凄いですね。緋家が発展したわけですから」
道中に聞いた話だと、緋雁原での出現パターンは特定されている様だ。

精霊達が何処に出て、どう出現するのか幾つかのパターンに別れるという。そしてパターンさえ掴んでしまえば安全と考えられるのが凄いの所だ。普通ならば精霊湧きが起きるような難所に住みたいとは思わないものである。

僕がその年代に転生してたら……パターンを調べて狩りをするとか？ でも精霊は毛皮も肉も落とさないなあ。此処にしか生えない薬草でもあれば採りに来たかもしれないくらいだ。

「と言う事は本来は移動する精霊が多かったエリアにあたるんですか？ 居座っているから困ってる訳ですよ」

「そうなりますな。おかげで二か所で精霊が存在し、片方は延々と存在し続けておるわけです」

これらの情報を資料にまとめるが、緋家独自の問題は別訳。

改めて書き記した二種のメモ書きを七司に渡し、検閲してもらって

からデータに残す。字は汚いが、現地への移動中という事で勘弁して貰おう。

そしてこれらのデータを踏まえてから今日の作戦を修正。

今日は事前に定めた偵察日なので、現地の確認と雑魚精霊での予行演習の予定であった。

「予定通りにヌシが所定の場所に居るかどうかが、移動する個体も含めて全体像がどうなるかまでを確認。帰り際に一回か二回を倒して初動を終える行程になるよ」

「随分とまだるっこしいじゃねえか」

「その代わりに、次に来る時はみんな英雄だけどねえ」

この行程を挟むことで、二つの事が確定する。

一つは当然、普通の精霊と戦う時のペース。もう一つはその経験から、ヌシと戦うまでにどの程度の戦闘を繰り返す必要があるのかが判るといふ事だ。

通常個体を一体倒せば、耐久力と火力が算定できる。

誰が何回攻撃すれば倒せるのかを把握し、一戦闘でどの程度の魔力消費が起きるのかを把握できれば、おおよそ勝ったも同然であった。

「そういう事だね。仮に雑魚と五回戦わなきゃならないとして、今日中に済ませて無事だとは思えないかな。でも半分倒しておけば次がすごく楽になる」

「能力次第ではワシらでも倒せるかもしれないし」

魔法か魔法の武器で耐久力を削るしかない。

その為にメンバーが限られてしまうので、一回の攻撃で削れる相手の耐久力が殆ど決まっているのだ。

仮に威力は高いけれど耐久力が低いのであれば、全員で雑魚を殲滅した方が早い。逆に耐久力がアホみたいにあるのであれば、やはり万全の状態で一体・一体・一グループずつ倒すべきだろう。

「確認をするのですが、銀殿の力で道やこの地自体を封印できぬのですか？」

「難しいですね。結界と言うのは一つ封じれば済む物でもありませんし。もしこの地に火の精霊力が溢れているのが原因だと……」

ファイヤーエレメンタルが出現する条件を調べて封印するとう。

できれば次に精霊が移動しないように封印してしまえば良いし、最後に精霊湧きが起こらないようになるだろう。だがそれはエネルギー消費だとか反動というモノが無ければの話である。

エネルギー消費自体は、まあ神職を増やせば対応できなくもない。火の精霊を崇める文化があるかは別として……まあこの地で栄えた緋家の一員ならば可能としよう。洞府を開いてしまえば吸収出来るからだ。

「魔王がソレを蓄積して作り上げたのであれば面倒なことになります。何しろその真似をしてしまう訳ですから」

「なるほど。自ら材料を集めてしまう訳ですか」

ゴムホースで水を流す時、出口を小さくすれば勢いが増す。

それと同じことを火の精霊力でやったら危険なので、単純封印するのは危険だろう。

それとは別にここに火の精霊力が溢れている事が、伯爵領や南領全体のバランスを採っている場合はもつと酷いことになる。他の場所で別の精霊が出現したり、最悪どこかのエネルギーが枯渇することもあるだろう。

「伯爵家は今が底です。これから復活するのですから無茶はしない方が良いと思いますね。中央に納める税が倍になるような事でもない限りは藪蛇かと」

「確かに。火の精霊が出現する場所が城に移った……では笑い話ですからなあ」

もし試すとしても最低限、火の精霊を崇める教主なり巫女を育ててからだろう。

僕もその辺を考えなかった訳でもないのだ。この周囲で火の精霊力が溢れて居て、それを無制限に収穫できるとか『何ソレ、凄い！』としか言いようがない。もしゲームだったら絶対に試す価値アリだろう。

しかし僕の場合は神様の属性が知識系であるので意味が無いのだ。

どう考えても火の精霊力をありがたい物として吸収できる要素は薄かった。西洋のプロメテウスみたいな逸話でも挟まないと無理だろう。つまりやるだけ意味が薄いので、この話はこれまでである。

「同様に通り道を封鎖しないのも同じ理由ですね。雑魚とはいえ、主と同じ場所へ溢れても困りますから」

魔王の出現で活性化しただけならば倒せばおしまいだ。

しかし穀倉地帯のアンデッドが古戦場であること利用したように、同じく好条件の難所へ出現した強力な魔物である。そのあたりの条件を弄って出現させた可能性はあるわけだ。

下手に弄るとヌシと同じ場所へ精霊が湧き出し、あるいはヌシそのものに流れ込む可能性すらあった。順当に作戦を組めば勝てるのであれば、余計な事はすべきではないだろう。

「そうですね。現時点で順調にヌシの周囲を探索で来ております、このまま順調ならば……」

「何か懸念でも？　こちらは全員無事ですよね？」

今の処は問題なく偵察出来ている。

地元民であり地形を知って居る七司が居る事もあり、特に道を間違えているわけではなさそうだ。平原なので見晴らしは良い方だが、単純ながら起伏のある場所を選んでくれたこともあり、今のところは対処できない程の精霊とは遭遇していない。

隠れてやり過ぎしたり、相手の近く半径を見極めて迂回することで対処できたと思っただけだが……どうやら順調過ぎたらしい。

「幾らなんでも精霊が居なさ過ぎとは思いませんか？　帰りがけに戦うとは聞いておりましたが、自分としては行き途中で遭遇。対処を議論することもありえると思っておりました」

「確かに。目の前に居たら突撃しかねない人も居ますしね」

その意見を聞いて共通の相手を見ながら思索する。どうして精霊が居ないのか、その原因次第でどのような変化が起きるかだ。

例えば目の前に居るような考えなし、または他に理由のある集団が倒して回った場合などである。

「なんで俺の方を見るんだ？」

「そりゃあんたが一番目を話せないからでしょ。退屈とか言つて抜け駆けしかねないし」

「私達の分まで肉食べたっ」

こうなつた原因の一つは、大通連の様な豪傑が討伐に来た事だろうか。

精霊湧きを利用して自分または同行者を鍛え、あわよくばヌシを倒して名声を得る。緋氣の本拠地だけに誰かを連れて来れば功績を証明できるので、悪くはない考えだ。

僕は今まで危険を押し付けられ、面倒なことになつたとばかり思つていた。だが視点によつては、ここをゲームという『狩場』として考える者が居てもおかしくはない。

「七司さん。紅家の三男坊の足取りは掴めてますか？ あるいは目を掛けた武芸者が来たとか？」

「いや、詳細は知らぬが少なくともこちらではない筈です。まさか……」

最初に上がった三人の武芸者。

今そこに居る武器コレクターの大通連、紅家の三男坊……そして最後の一人は緋家で武門に属する人物だ。

極論を言えば、紅家の三男坊はまだ良い。

三人の中で一番強いようだし、魔法の武器を持っていてもおかしくない。精霊にも通じる技を試すために来たならば、今ごろは退治して居る可能性すらあつた。狩場に行っているならドーゾドーゾと出番を譲つても良い。

(名誉とか長男さんの思惑とか気にしなきゃ、危険が減つて万々歳なんだけどな。一番困るのは三人目が中途半端に手を出した場合なんだよな)

三男坊の場合は伯爵家の対面とか、僕が活躍する予定が減るだけだ。

問題は三人目の候補が何らかの理由を持って、僕らよりも先に緋雁原解放を目指した場合である。

倒せるのであれば問題ないのだが……、自分ならば僕よりも上手くやれると信じたり、僕ないし七司なりに嫉妬して考えなしの動きを行った場合が問題だ。

「まさか二広殿が此処に？」

「可能性はあるでしょう。伯爵家を守るために『あえて』動かなかった武人が、僕のような端下の者に苦勞を掛けまいと考えることはあり得る事です」

嫉妬や功績争い、あるいは僕の例を引き合いに妹君の為。

色々な要因は考えられるのだが、僕や七司を活躍させないために無茶をする可能性はありえた。それが問題となるのは挑んだが倒せない場合である。

二広というらしいが、その人物を中心とした精鋭ならば倒せる可能性は高い。だが中途半端に集めた兵では精霊を倒しきれないし、むしろ犠牲を途中で引き返す事もあり得るだろう。そうなれば先ほどまでの懸念が悪い方向に向かう可能性があった。

「出来る限り見つかからないコースで来たと思うのですが、ここは戦闘を覚悟して視野の通る場所に移動しませんか？ それで見つからない様な精鋭なら良いのです。しかし……」

「一門から腕の立つ者を集めただけの可能性もありますな。……こちらです」

「移動する方向は主城のある方面だ。」

名前に『二』が入って入るという事は、緋家が拡大期に先槍として認められた武人の家系だろう。日頃から城に詰めていたり、そもそも領地が緋雁原の出口である可能性は高い。

そして高台に出て視野を確保した時、よろしくない光景が随所に見られたのである。

「攻撃魔法や蹄の痕……か。これは駄目ですな」

「これは酷い。あちこちで戦闘しながら迫ったみたいだねえ。被害はどれほどのものやら」

「移動しましょう。精霊が見つかる前に行動します」

そこで見かけたのは戦闘痕だった。

最初に大規模、そして続く場所は小規模。そこから試すだけ試したように見える。この位置から見えない場所もあるので、実際にはもつと戦っているはずだが……要するに最悪のパターンである。

こうなつてくると計算を練り直さなければならぬ。半端に時間を掛けていると、ヌシの周辺に精霊力が溢れかえる事もありえるのだから。

「どうするのです?」

「可能な限り戦闘を避けてヌシを強襲します。時間を掛ければ掛けるだけ、主の周囲に力が溢れる可能性がありますから。それとも二体目のヌシかな……」

精霊が生まれるサイクルがそれほど早いとは思えない。

一日とは思えないが、数日以上前なら問題だ。思い立った条件にもよるが、七司が僕の所に移動して直ぐなのか、それとも他の荘園主が動いてからなのか?

「しかし二広殿がまさかこんなことをするとは……」

「緋家から魔剣を貸し出したこと、悌さまが妹君を僕などに目合わせるなどと言いつ出したこと。もしかしたら忠義の将にはお辛かったのかもかもしれませんね」

抜け駆けとか嫉妬とか言うのは止めておこう。

誰が聞いているか分からないし、人間関係に無用なヒビを入れるのはよろしくない。とりあえず理由は他に見当たらないので、適当に考えてもらっておくとする。

そして僕は素早く再計算することにした。

仲間達は幸いにも負傷して居ないし、今日はお試しで戦うとはいえない不測の事態に備えて無用な魔力は消費してない。

「ぶつつけ本番になります。ヌシを倒してしましましょう。もし雑魚数体を引き連れて居たり、二体目のヌシが居たら即座に撤退します」

「了解」

もしそんな事態になつて居たら、腕利きの傭兵を名指して呼ぶ必要があるだろう。

攻撃魔法無いし付与魔法が使えるか、魔法の武具を所持して居る連

中を十人位集めてレイド戦である。そんな必要が無い事を祈るのみであった。

緋雁原攻略戦：後編

● 要らん事をしでかした奴のお陰で採算の怪しい博打に挑むことになつた。

幸いにも消耗はないが、戦つて勝てるという保証はない上に、道中の障害を排除する余裕がない。

せめて介入者……というかこの場合は競合者か、彼の仕掛けた時期次第ではもう数日余裕があるかもしれないが、その時期が判らないので最悪を考える必要があつた。

「七司さん。差し出がましいのですが、ルートが幾つあるのかを紅梓さんに教えてあげてください。一番敵の少ないコースで又シまで行きます。問題があれば途中まで導いてもらつてくれれば」

「単純な数じゃなくて、急げば専念できる道よね？ 『私』はいいわよ」
ここは緋家の御料地なので、迂闊な情報漏洩は困る。

だから偵察に行く紅梓の都合ではなく、七司が教えてくれるかどうかだ。前にも言ったがこの時代の地図と言うのは軍事情報であり、末端に加わつた僕はともかくエルフ族である紅梓に教えるのは躊躇するかもしれない。

そこで段階を踏まえ、彼の納得する状況から索敵スタートするべきだろう。

「……では銀殿にはこの辺りの地形を開示いたしましょう。その上でルートを絞り、どちらが現実的かを紅梓殿に考察していただければ」
「なら僕と七司さんだけ向こうで話し合ひましょうか。その上で軽く見えます」

と言う訳で緋雁原の地形を教えてもらった。

簡単にイメージを伝えると、ピザを思い浮かべて貰えるところがある。ピザは必ずしも平坦なわけでは無く、生地が凸凹したり具材やチーズによつても見え難くなる。それらの起伏によつて細かい地形が出来上がっていると見えるだろう。

目に見えない火の精霊力がトマトソースだとして、野菜が畑で肉が

牧草地と言う感じだろうか？ それらが歪んで偏ってしまったているのが現状である。

「割りと見たままだと思うんだけどなあ……微妙に見通しが悪いから怖いよね」

教えてもらった地形を頭に入れ、少し高い位置から見渡す。

傍目には何処も似たような分布に見えるが、平坦な場所と人の生活感が無くて同じような光景が続いている様にしか見えない。実際には知覚半径と移動力・魔法の射程などで誤差があるはずだ。

ちなみに何種類かの精霊と戦った事はあるが、同じ系統でも微妙に姿や能力が一致しない。火の精霊だと火蜥蜴と人型などで、緋雁原だと鳥型になる。

「確か……いつら魔法知覚だから五感で把握してないんだよな。蛇みたいに温度変化だったら誤魔化しようがあるんだけど。まあ良い面もあるからいつか」

目や温度変化を見ていないから、映像や熱源をカモフラージュしても誤魔化せない。

だけれど今回良い面としては、目で見てないから、高い位置から見ても視線が通らない。耳で聞いていないから向こう側で爆発しても、知覚圏内に爆風が入らなければ反応しない。

これがどういふことかと言うと、相手の知覚圏内ギリギリを通ってしまえば、人間相手には視線が通るから無理な偵察やら通り抜けが可能なのである。

「紅梓さん。少し行った所に居る小さい奴の集団と、向こうの方に中くらいのポツンと居るじゃない？ あの間に精霊が居ないか見えてもらえるかな？ 連中は距離さえ保てば動かないから」

「随分と無茶を言うわねえ。私じゃなきや無理な相談よ、ソレ」

元の位置に戻って、軽く作戦を説明する。

紅梓さんに見てきてもらったルートが大丈夫ならば、その間を抜けて突き進むことができる。駄目ならば別案……戦っても周囲から増援が駆けつけられない相手を選んで倒していくしかない。

出来る限り本命以外とは戦いたくないのだが、そんな都合が良い展

開などありえないだろう。ならば迷うよりも最低限の戦闘回数に抑えて、消耗と相談しながら抜けていくべきだろう。

「紅梓さんの持つて帰って来る情報次第だけど、問題なければあそこ
の中間を抜けていくよ。間にナニカいる場合は……向こうに中くら
いのと小さいのが屯してるよね？ あそこを潰す」

目の前の一体を潰さない理由は簡単だ。

位置的に装置が攻撃魔法を使うと爆風が隣のエリアに届いてしま
う。少なくとも崩し的に連戦となるだろう。中型を即座に倒せ
るならば問題ないが、時間を掛け過ぎたりすると大変な事になっ
てしまう。

何しろ精霊は人間よりも精霊魔法が得意である。下級魔法に限る
が熟練の道士並の火力はあるだろう。それも全ての個体が……であ
る。中型ともなると人間には存在する威力の上限値が存在しない可
能性もあるので、一体でも危険なのだ。

「確認は二つ。まず七司さん、精霊の移動時間はまだですよね？」

「問題ありませんな。夕刻ごろから移動が始まりますので、魔王軍が
何かを仕掛けていたとしても暫くは考慮せずとも良いでしょう」

ここで気を付けないといけないのは、万全を考え過ぎて盤面が変わ
る事だ。

移動するタイプの精霊たちが動き、せつかくの偵察が無駄になる。
それどころか次々と戦闘してしまうとか悪夢でしかない。群雄割拠
次代の緋家が無事だったのは、そういう習性を理解していたからなの
だから。

そして懸念事項が晴れた以上は、残る手順はどれだけ消耗少なく倒
すか、どれだけ一介の戦闘でデータを得るかしかない。

「ならば後は戦闘に関する取り決めです。最初は範囲魔法を撃ち込ん
で、弱った小型を確実に仕留めて反撃を減らします。どれだけ優位な
地形や距離でも、他のグループやら効率を求めて戦わない事」

「中型と戦ったら駄目なのかよ？ つまらねえなあ」

「精霊ってさあ。あの小さい奴でも熟達者の炎弾飛ばすんだよねえ」

本当は走り抜けることでもっと良いルートがあるのだが……。

どう考えても途中で大通連が攻撃するだろう。今も忠告しているが、夢中になつたら忘れかねない。口を酸っぱくして言っておけば最初の一発くらいは攻撃魔法を待ってくれるだろうと言う考えでしかなかった。

なお、亡くなったお師匠さんに躰けられる前はそれすらも駄目だったらしい。昔の逸話の中で、どうでも良い魔物に夢中になって本命に後から気が付いて参戦するというアホな事をやったとか。つくづく故人が憫ばれる。

「お待たせー！　悪い報告としてはやっぱり駄目な事、良い報告としてはヌシの近くには小さのが一体か二体つてところよ」

「やっぱりそうなるよね。仕方ない倒しても問題ない所を抜けようか」

偵察に出た紅梓であるが、成果はあまりよろしくない。

潜り抜けるのは不可能なので一戦闘しないといけない上、ヌシ一体だけと戦う訳にはいかないという残念な結果である。

ただ、この後の戦闘で良かったことを一つだけ発見した。

小型はそれほど耐久力が無かったのだ。攻撃魔法の後で大通連が二回ほど攻撃すれば倒せるレベルだったのである。その情報を踏まえて攻撃魔法と付与魔法を調整してから一気に畳み掛ける事になった。

と言う訳で、いよいよボス戦である。

「ヌシの他は小型が二！　まずは小型からだよ、大通連！」

「あいよー！」

青悟の渦潮……範囲魔法が炸裂、倒せない小型に丸盾に刃を付けた『大通連』が飛んでいく。

それに合わせてみんなが素早く展開し、半径5m程へ三角形に散らばった。これは範囲攻撃の連発で全滅しない為であり、同時に単発の火弾であれば僕と七司が守れるという構成だ。

そして紅梓の唱えた風の刃、そして間を空けて双葉のナイフと剛盾の手斧が順番に投げられるはずになっている。

「二発外れ！　小型が少し残ったぞい！」

「後は予定通り！ 大通連に任せて、付与した残りは温存しておいて！ 次が来たら厄介だ！ それよりも反撃が来る！」

「けっ。仕方ねえなあ！」

初手は間合いを調整したこともあり、こちらの遠隔攻撃が先に決まった。

だが奇襲ではない以上、そのまま連続攻撃できるはずがない。火球と炎弾が来ると予想して盾を構えた僕と七司が皆を庇いに出る。

『オーー!!』

「来ますぞ！ 私たちの後ろに！」

「炎弾二回の方が良かったな。まあ白兵戦の方がもつと良かったんだけどさー！」

僕と七司の盾は『延焼保護』の保全を行っているので、少なくとも火傷を追う事はない。

ただの衝撃ダメージを受けているだけなので、青悟が追々治療してくれるはずだ。生き残れば双葉の苦い薬も待っている。

ドーン！ と弾ける音と共に衝撃が盾越しに掛かるのだが……予定通り『延焼』のみに絞った盾は燃えないでくれていた。この保全能力は元の機能に比例し、消費は反比例する為に燃えない素材で作られた盾は有効なのだ。

「大通連は小型を潰した後でヌシに接近戦！ 僕らはその脇を固めるからね！」

「さっさと潰れろってのー！」

小型の精霊を潰し、残った主に向けて徐々に前へ出る。

本当は後衛を遠ざけたいが、残念ながらそうすると火球で一網打尽に出来るのが問題だ。そうなるどころちらがジリ貧だし、何より双葉を傷つけたくはなかった。

理想的なのは敵が白兵戦に切り替える事なのだが、残念ながら精霊はそういう思考をしていないようだ。一番やって欲しくない選択肢を選んでるように見えた。

『ヒューっ……。オーン!!』

「っ！ ブレスが来る！ 散開！」

鳥の形をした火の精霊。

だが形状など当てになるはずがなく、火球ではなく直線型のブレスを放って来た。これは一直線に十数mしか届かないが割りと範囲が広い。

何よりも厄介なのが、延焼を防ぐための盾をすり抜ける可能性があったことだ。

「熱ちやちや！ チクシヨウが！」

「ちよつと作戦！ あーもう！ 台無しだよ！」

腹を立てた大通連が一番威力の高い三叉戟を構えて突撃してしまった。

これでは彼を守りながら戦えないし、かといってこちらでも走れば後ろの双葉たちを守り切れない。

つまりはどちらかを捨てるか、それとも作戦を大幅に変更するしかなかった。

「えーい！ 次が来ても知らないからね！ 炎よ退け、我が前を照らすことを許さず、我が前を奔ることを許さず。……禁!!」

仕方なく僕と七司の間に結界を張った。

盾に掛ける場合は、あくまで『一つ』の保全だから消費は少ない。だが結界になると、範囲を保全するので浪費が大きいのだ。全てを防いではあつという間に与えた魔力が尽きるので、保つのはヌシからの相対距離だけ。

そして躊躇せずに前に出ることで、全体をヌシの方向に進軍させる。後ろを守るよりは、相手の射程を減らした戦いをすべきだろう。

「七司さん！ 暫くですが炎は後ろに行きません。このまま大通連を守りながら僕らも戦います」

「ははっ。結構ですな、武人とはかくある物で！」

僕らは苦笑いしながら抜刀する。

こちらは緋家から借り受けた魔剣、彼は自前で付与魔法を唱えているようだ。ここまで来たら魔力を温存するよりも、全力攻撃で倒してしまうべきだろう。

そして後衛はその事を理解してくれたのか、回復担当以外の青悟を

残して攻撃を始めている。

「クソが！ 手応えがありやしねえ！」

「言ったじゃん！ 強打とか突進とか意味がないって！ 使うなら連撃とかにしてよ！」

残念なのが大通連の方である。

あれだけ入ったにもかかわらず、チャージからのスマッシュとかコンボを決めてくださっている。どっちも実体のない精霊には、意味が無いんだなこれが。

そして繰り返し忠告することで、大通連も三叉戟を振り回して連続攻撃を始めた。

「ヒーハー！ 楽しいよな大将！ 戦いってのはこうじゃねえとよ！」

「あつ、アホかー！ 君のせいで全部グツチャグツチャじゃんか！」

僕は何とか大通連を盾で守りつつ、可能であれば魔剣を振りかざした。

しかし元が戦士系ではないので、盾で防ぐので精一杯だ。こんなことなら防御専念するから不要といった七司の方に魔剣を持たせるべきだったかもしれない。

そして巨大な3D画像に武器を突き込むような間抜けな姿を何度も行い、幻影の様な翼を叩き切ろうとしては失敗。その後僕らはようやく緋雁原のヌシを倒すことに成功したのである。

「やった？」

「やったか禁止。もし二体目が居たり、急に精霊の移動が始まったら怖いからね。……でもまあ、今日はもう帰ろうか」

ちよこちよここと双葉がやって来て僕の顔を覗き込む。

もう色々と気力が無くなったが、今日は双葉に抱き着いて眠ることにしよう。そのくらいの贅沢は許されるだろう。

帰還

● 緋雁原のヌシを倒してから、あつけないほど順調だった……というわけでは無い。

北上して万鹿柵を封鎖するまでは良かったのだが、ヌシを倒したという功績が何故か武闘派と折半する事になったのだ。

こちらの足を引つ張つた二広一派の介入が、雑魚を一掃することで良い方向に動いたという建前である。おかげで功績の評価はダントツと言うわけでは無く、何が貰えるかは微妙な所である。

「博打を打たされた拳句に真逆の扱いされるとかやっつけられないんですけど！ そりゃ功績なんか要らなかつたけどさ」

長男さんに面会するという用件以外は一通り片付き村まで帰還した。

本来は北上中の道中で出迎えてくれるという話だったのだが、目下の物を主人が出迎えるというのは問題だと言う事になったらしい。

一々もつともなのだが、緋雁原と万鹿柵の件を片付ける前は長男さんはもつたいぶられる扱いでは無かつたし、僕も目くじら立てられるほどの相手では無かつた。これも嫉妬とか政治的牽制の一環なのだろうか。

『ほほほ。銀や。それはお主の不覚よ。英雄となるのであれば公正かはともかく目付なり軍監なりを連れるべきであつたな。さすれば今回の件で奴輩めは終わりよ』

「あーそれはあそれで面倒くさい方向になりそう。というか足手まといは不要でしたので」

村に戻ると英雄になった成果もあつたおか、久しぶりに九天玄女様の御尊顔を拝した。

もし見届け人が居たら武闘派のやった失策が原因で僕が苦勞したことがモロバレし、彼らのメンツは地の底である。そうなったら意固地になって今後協力してくれない可能性もあるので、まあ良しとしておこう。

玄女様にその辺りの機微が判らぬではないはずだ。おそらくは僕自らに思いつかせるための言ったのだろう。

『ところで緋雁原とやらが惜しいというておったな』

「はい。精霊力が湧き出る場所ならば惜しいと。娘々には名案がおありで?」

当然と言えば当然だが、火の精霊力が無制限に溢れ出るとか恵まれてる。

これで信仰の力に変えるのが難しいならともかく、緋家は群雄割拠の時代からあの地に守られて来たのだ。近年の恐ろしさ込みで、和魂と荒魂のように表裏一体のモノとして布教できそうなのだから惜しくない訳が無い。

問題は玄女さまの信仰には程遠いという事だ。

知識系の神様であり、軍師や使者の神とも言える方だと流石に炎の信仰とはあまり関係が無い。調べたがプロメテウスのような逸話も無いので諦めていたのだ。

『無ければ話などせぬわ。まあ直接の妙案ではなく、『組み』にしてしまえば良いと言うだけじゃがな。もう我が使徒たる『銀天君』よ。そなた十絶陣を知っておろ?』

「あつ……その手があったか!」

仙人の呼び名として真人、そして天君というものがある。

僕が選んだのは後者だが、『天君』というのは道教におけるその地域の教え長という意味だ。地方での祭司長というのは森の海や地形の遠さでは重要であり、たかが長には収まらない。

そして同系の、似て非なる信仰を率いる長同士が手を組んではならないという法はないのだ。封神演義などでも『十天君』ほか様々な教え長が出て来る。

『あれは五行という組と、陰陽を併せ持った同格の布陣が手を組むというモノじゃ。別に四大でも四神でも四凶であろうとも構わぬ。互いに連立し合う仕組みさえ仕上げれば、同系統の信仰を流用は出来よう。まあ遙か先の話ではあるが』

「間に挟む神様に協力願うという形ですね。ともあれ神職の数を増や

してからですが……」

炎の守護神から攻撃と情熱の神、そして火計や鍛冶の神として小神において願う。

そうすれば知識の収集と効率的な運用を司る、軍師や使者の神様とは相性が良い。水計と水利の神様などとセットで扱えば、滞りなく陣形が出来上がるだろう。

後はそれらの小神さまにお願いして、信仰を集める代わりにエネルギーの一部を融通してもらえば良いというだけだ。実際にそういう契約を結べば融通してもらえるのかはともかく、方程式としては分かり易い。

「自分だけの利益ではなく、他方を立てての一計とは御見逸れしました」

『ほほほ。そなたが崇める神というのは伊達ではないわ。まあそれもそなたが生前に蓄えた知識、そして我が意を組めるという相性を見定めたからであるがの』

どうも神様には当然ながら余計な干渉をしてはならぬという掟があるらしい。

条件としてのコストの支払いを除いて……という前提で、口出しして良いのはあくまでその人物が知っている事・知り得る事の範疇。うちの神様は知識系の神様なので、僕が生前に覚えた知識の中から僕自身忘れていた事、気が付かないことをサルベージして教えてくれるとのことだ。

良くある未来視の類もノーコストの場合は、その人物ならば普通に知ることができる内容が一般的らしい。もちろん神様の側がコストを払わないという前提であり……こちらの世界の大神は、寵愛を与えた相手には他の信者から持って来たコストを払って平気で恩寵を与えるそうなのだが……。まあその辺は復活したての玄女様には酷な話である。

「転生させていただいた御恩はお返しさせていただきますね」

『殊勝なのは良いが、出し抜かれぬようにするのじゃぞ。今回の件は奴輩めが暴走を有効だと言い張っただけの事。本気で貶める心算な

らばもつと悪し様な事を出来ように』

つくづくもつともな忠告を受け、僕は拝して洞府を辞したのである。

神様との面談を終えれば、後は山積みになってることや既にやったことの経過観察。思いつくことがあれば指示もしておかねばならない。

ひとまずリスト化して、優先順位のトリアージをすべきだろう。さっさとやるべき事をやって、双葉のご機嫌を取らねばならなかった。

「樹の生育の方は順調？」

「問題ありません。他と違って判り難いつてもありますけど、大きな差はありませんから」

最初に訪れたのは桑の木を始めとした養蚕用の木だ。

エルフから色々と貰いはしたが、天蚕は春から夏にかけての育成なので今のところすることはない。卵を他の生き物に食われないように保護しつつ、餌になる木がちゃんと植樹出来るかの確認だけしてせつせと育てる程度である。その分、時期に成ったら忙しいとも言えるが。

そして目に見えて分かり易いのが温室になる。

日の当たる場所にガラス張った覆いを作り、中で花や一部の植物を育てている。花が咲くという一点のみに絞っても判り易いと言えるだろう。桃の木も此処に植えているが、木は育ちにくい為こちらも言う程の変化はない。

「あら、何か用？」

「用と言うよりは温室の具合を見に來ただけだよ。ずっと見てなかったしね」

ここを拠点にしているのは紅梓で、技術研修に來ているエルフも結構いる。

植物の生え方が早い事と暖かいという意味でも、割りと過ごし易い場所ではあった。もつとも休憩場所になっているのあ紅梓だけで、研究員たちは丹念に育成状況を確認していた。

そして見る限りアンデッド退治に出る前は伸びてる途中だった場所に、かなり育った植物がある。春に咲く花だが、上手くすれば冬に咲かせることもできるだろう。上手く咲けば伯爵なり侯爵さんに献上しても良い。

「やっぱり暖かいから育つの早いわねえ。ガラスとか注文したらくれるの?」

「代金なり代価なりしてくれるならちゃんを用意するよ。工芸品としてならドワーフから買うべきだけどね」

今のところの成果は大したものには見えないが、エルフとしては関心が高いようだ。

それなのに自前でガラスを焼かないという辺り、面倒事を押し付ける気なのがらしいと言えづらい。

とはいえここは儲け重視にしてもまるで意味が無いので、正当な価格で売り渡すことにする。ドワーフほどの技術は無いし、目の前で値段をつりあげたら直接交渉するだろうしね。

「お金以外の代価って何?」

「色々考えられるけど、今だと蜂蜜とか砂糖かな。通行権を貰えるなら自前で取に行くけどね」

双葉と約束したので美味しいお菓子を作らなければならない。

となるお最優先で必要な物は砂糖または蜂蜜である。甘い物というだけなら蜂蜜でも良いが、色々バリエーションを考えるならば砂糖の方がありがたい。

理想的なのは南西にあるエルフの領域の向こう側、または西にある侯爵領を越えて海を南下した場所に行ける事だろう。

「そうねえ。じゃあ蜂蜜ってどこかしらね。もしジャイアント・ビーが増えてたら連れて行ってあげてもいいけど」

「それ、普通なら傭兵として雇うところだよな? チャツカリしてるよまったく」

反応を見る限りエルフの領域にサトウキビはなさそうだ。

全く知らないような反応でもなく、代価として考慮もしていないので購入することはあっても育てたりもしていないと思われる。

やはり自由時間があれば海を目指して、塩や砂糖を何とかしたいものである。転生前は日本人だったし、焼き魚や鍋くらいは食べたいものだ。

「……見た感じで剛盾さんは今日も鍛冶場かな。大通連の我儘でも聞いているのかもね」

今日も鍛冶場からは煙が上がっている。

薪を採る中で人間の取り分をドワーフに譲っている事に加えて、隣村まで暫定的に勢力圏に加えている。その為に薪やら鉱石には余裕があった。ガラスやセメントの製作は既に彼の手を離れているので、煙が上がっているという事は製鉄の真つ最中だろう。

見ればそこから上がる熱は蒸気として温室に送られ、あるいは銭湯に利用されている。オオトカゲが専用の風呂でマツタリしているのを横目に眺めながら、後で風呂でも入るかと思案しながら歩いた。

「よう、大将じゃねえか！ また何か思いついたのかよー！」

「そうそう新しい武器なんか思いつくわけないだろ。何処かで見たような武器なら別だけどさ」

武器が仕上がるのを子供の様に待ち受ける大通連。

ハツキリ言って迷惑なのだが、この豪傑は迂闊に目を離すと好き勝手を始め。ヌシとの戦いでも作戦を途中から無視したように、感情優先で困り物だった。今も武器製作が無ければ女を口説いているか酒を飲むか、それとも試し切りに出かけているところだろう。

その意味で鍛冶場に張り付いて『今日は何作るんだ!?』と目を輝かせているうちは、まだ安心である。

「来たか。注文の曲刀が出来上がったぞ」

「おっ。これは楽しみにしてたんだよね」

「さっきの奴か？ 切れ味は良かったけどちよつと細過ぎだぜ」

言ってる端からコレである。

僕が注文した日本刀を勝手に試し切りまでしているようだ。苦笑いしながら人間を切るな、エルフを切るな、ドワーフも切るなど何度も忠告しておく。

そして出てきたのは日本刀を始めとして、太刀に斬馬刀に長巻に薙

刀と弁慶にでもなった気分である。

「これは軽装相手にこつちも軽装って前提で戦うものだからね。重要なのは携帯性と見た目。偉い人たちってこういうのは持つてても許してくれるから」

「そういう意味なら分からねえって事はないさ。芸術品にしちまうのはどうかと思うけどな」

そう言つて剛盾よりも先に、勝手知つたる我が家とばかりに取り出した。

紋様を描く方法を教えると剛盾は最初のころに嵌つて、幾つかのパターンを用意していた。もしブランド化するならば統一性というものを進めるべきだろうか。

ひとまず刀を抜いて刃を睨み、その紋様が炎である事を見て取つた。これならば贈られた方も喜んでくれるかもしれない。

「うん。いい出来だね。後はこれを二回り小さくした予備武器と、護身用のナイフサイズをお願いできる？ 贈答用だから鞘とかに彫り物が入つてると助かるかな」

「その辺りはうちの若いモンに任せとけ。それはともかく、この馬鹿に何か教えてやつとくれ」

脇差と懐刀も追加発注すると、代わりに新しい武器を剛盾からも頼まれた。

どうやら次々にせがむ物だから根負けしたらしい。まあ彼自身が新しい概念に目が無いというのもあるけれど。

とはいえ名工に頼まれては仕方がない。我儘豪傑だけなら用つておいても良いのだが、そのつながりは大事にしたいものである。

「じゃあ曲刀のバリエーションで行こうか。傷を残すために炎を象つた剣、船乗り用の小型はロープを切る為、この前に曲がつた奴は盾を超える為ね」

「おい、紙を持ってこい！ メモ用紙に出来る奴で良い！」

地面に描いて説明していると、興が乗つたのかメモしておくようだ。

紙の生産も一応は成功し、大量生産は無理だがそれなりに作れるよ

うにはなつた。売り物にするのは無理なので、蓄積した知識を本にする為に使うべきだろう。

後は手紙のやり取りが増えたら、花の香りを付けて伯爵家にもお洒落な手紙を送るのも良い。そう思った所で双葉の事を思い出し、せがむ男どもに見切りをつけて移動することにした。

「おそーい」

「ゴメンゴメン。今日はお詫びに新しいメニューを作るからさ」

新婚家庭に戻ると双葉が食器を取り出してチンチンやっていた。

いや、木の器と木のスプーンなのでポコポコと言うべきだろうか？

まあ年頃の女の子がやるならともかく、手足も伸びて来た大人の女性がやる仕草ではないのだが。

ともあれゴキゲンを取るために、豚肉を叩いたミンチの他にチーズと軟骨を選んで料理を始める。

「今日はどんな料理？」

「前に作ったハンバーグのチーズ入りと、軟骨入りのミートボール。余ったらスープに入れるから全部食べないように」

牛肉なんてまだまだ夢なので、豚肉のハンバーグを作る。

卵もパンも貴重品なので繋ぎは山芋の類になり、形だけ整えてチーズを包んだ。そして小さくまとめた方には、軟骨を砕いて適当に混ぜておく。

包丁で荒く叩いた後、スリコギで念入りに潰してようやく現代で食べるような軟骨になる。この骨の硬さはきつと豚の生命力が現代よりも高いせいだろう。

「骨で採ったスープだっけ？ あれも不思議だよねー。何日も煮込んで薬草と漬け込んだら美味しくなるの」

「薬草師のお嬢さんがそれはないんじゃないですかね？」

「今は御嫁さんだからいーんだもんっ」

こうして早めの夕食が出来上がり、舌鼓を打っていると予備もせぬお客が押し寄せて来る。彼らに文句を付けながらも楽しい食事を終えて、ようやく我が家に戻って来たのだと思えたのであった。

一年目の終わり

●
その後、論功行賞で無事に隣村を領有することになった。
それ自体は素晴らしい事なのだが、問題が二つ三つどころか五つ位ある。

一番の問題は隣村は領主共々全滅しているので、民衆も居なければ領主の資産も何もかもが無い。領主館に籠って最後まで戦い、館に火を点けてアンデッドを壊滅させた(つもり)というのはどう評価してよいのか分からなかった。

「隣村はこの際だけど、大枠で畑・牧草地帯・休耕田として使い回すよ。まずは一番こっちに近い場所だけ耕して、残り二つは諦めとく。畑の方も今年は育ち易い豆でも植えておこう」

「現状じゃあそうするしかありませんなあ」

避難して戻って来る者も居ないわけではないがまるで足りない。

他所の水飲み百姓をリクルートし、優遇して自作農として迎える手も無いではないが……僕の村は伯爵領でも最南端。やってくるとしても遥かに先の事だ。仕方ないので村長やら傭兵を引退した農民を集めて簡単な会議を始める。まあ荘園主である僕が指示するんだけどね。

と言う訳で今のうちに進歩的な農業を導入しておく。

何も無いと悲しんでも得る物は無いので、丁度良い言い訳が立つからプラスだと前向きな姿勢で行くしかなかった。

「みんなで取り壊しと区画の共通化をやってしまえば、後は適当でも何とかなるでしょ。共通化した区画は税を引いた八割を人数で頭割り、残り二割は良く働いた人へのボーナスや体を壊した人の保証とする」

「そいつはありがたい限りですが、放置された穀物は？」

小規模零細農家から大規模公営農家へサツサと舵を切ってしまう。う。

人数が居ない事で共同作業の言い訳になるし、区画整理をしておけ

ば町並みを防御用および文明的な格好良さを計算しながら設営できる。

隣村の方はあくまで前衛の砦扱いであり、こちらの本村ほど守備重視でなくとも良い。三圃式農業してしまえば、敵兵が来たとしても早めに収穫するのは一部の区画に集中しているからやり易いはずだ。なので必然的に大型の作業施設を煉瓦で作り、区画を三つに別ければ終わりである。

「収穫可能な穀物があつたら種以外は家畜にやつといて。人間が食べるのは心配だから売れないしね。ただ等分するんじやなくて当たり前分量をやった仔と、豊富に与えた仔は区別してくれると助かるかな。良く太らせたのが美味しいなら来年も考える」

「判りやした。そんなに居ませんし、家畜が食べないやつは肥料にしちまつても良いですか?」

「構わないよ」

肥料にするのではなく自分のうちで食べる気かもしれない。

しかし腹を壊しても構わないというなら放置しても良いだろう。その程度の事に目くじらうて怒鳴るのは狭量だし、来年以降も存在するわけでは無いから問題ない。商人に売って作物の信用を落とさなければ良いだろう。

ともあれ最大の懸案事項が片付いたとはいえ、まだまだ他に用事は残っている。

「西海岸の調査?」

「うん。平和な今のうちに侯爵領を回って地形や植物の調査をして欲しいんだ。エルフの里に必要な情報を持ち帰りたい場合は、出資をお願いしたいけどね」

紅梓だけではなく暇している冒険者に依頼を出す。

隣村の警備も大したことは無いし、傭兵の延長で屯している連中にも仕事を出不さないとイケない。できるならば冒険者ギルドらしい依頼が良いのだが、そうそう都合が良い内容はあまりなかった。

となると双葉の御願いをかなえるために、砂糖を求めて三千里計画である。自分達で行く事があるかは別にして、地勢と植生は調べてお

きたい。

「話を通すのも受けるのも良いけどエルフの領域を通つちやダメなの？」

「人間を通してくれる気があるか、帰り道なら構わないよ？ 要するに次回も調査したり、面白い植物があれば収穫に行くからさ。次から知りませんと言うのは困るからね」

当然ながら全員エルフでは困る。

地図は戦略物資なのでどの程度の位置かを誤魔化すことはある。だが全体の行程とか、見つけた植物を誤魔化されても困るのだ。

ゆえにメンバーは混成であり、エルフの領域は次回以降も通つて良いのでは無ければ意味がない。まあ帰り道にエルフたちが自分達だけショートカットする分には認めるしかないが。

「あとは帰り路にエルフの領域を通る場合は、君らにお願いしたら何日掛かるかも教えてくれると助かる。これは正確でなくても良いんで、おおよその範囲で教えてね」

「その辺は長と相談ね。植物調査に関する出資の件も合わせて一度戻って来るわ」

この手の調査活動は時間が掛かる上に、収集した植物も植樹に時間が掛かる。

桃栗三年柿八年と言うが、双葉にお菓子を作つてあげる為の砂糖調査を含めて、今のうちに調べておけば将来に役立てるだろうというレベルだ。

これで冒険者ギルドの実績稼ぎを兼ねて、集めて来る資料収集を用意できる。今後にどういった活動をするかを含めて指針となつてくれるだろう。

「そういう訳で今回のポイントは侯爵領を通つて西海岸沿いを探り、何処かに拠点になる町なり誰の物でもない土地があるかの確認。要するにその近辺で活動できるかって指針が立てたいんだ。植物に関しては拠点さえできれば追々探せるから、現時点では二番目ってことだよ」

「と言う事は最悪、何日か体を休める場所が判れば良いのね？ 了解」

とりあえずは僕だけの都合ならこんなところだ。

紅梓がエルフの里に戻り、村長たちと相談すれば話が変わってくる可能性がある。何しろ僕の出費と人材派遣で情報が手に入るかもしれないのだ。

妙な動きをされたらエルフの活動範囲が判つてしまう危険がある反面、彼らの活動範囲の向こう側を他人の責任で調べる事が可能になるのである。その情報を得るために出資してくれる可能性は高かった。こちらとしても予算は心元無いので協力者はありがたい。

「植物の方は何を優先するの?」

「最優先で砂糖のなる植物。次に暖かい地方で採れる果実かな? ただ一見、ゲテモノくさい形状の皮もあれば、果実に見えて虫とか爬虫類の卵つてセンもあるからそこんところは気を付けて」

「やあねえ。誰に言ってるのよ。でも砂糖かあ」

即座に反応が返ってくる辺り、やはりエルフの領域にも怪しいモノがあるのだろう。

それこそ前世でもタピオカとかカエルの卵が似ているとか、そういう話は枚挙にいとまは無かった。もし僕が向こうに行くことがあれば注意しておこう。

これで全部の案件が済んだという訳でもないが、おおむねやっておかねばならない話は終わりだ。後はやった方が良いか悩む作業になる。

「向こうの村に何を作るか決めたんか?」

「今の処は煉瓦や陶器を焼成する為の窯くらいかな。陶器の方はオマケだから煉瓦を直接向こうで作るくらいになるけど。後はそれと貯めて置く蔵とか」

剛盾と一緒に向こうの村に作る設備の相談だ。

第一に窯を設置し、そこで煉瓦を作つて防衛設備を兼ねた作業小屋を作る。二つ目の教会は要らないから、後は倉庫くらいになる。もし奥さんが増えて別居する場合は……どっちかが済む別邸も必要になるだろうけど。

ともあれ煉瓦やセメントの使い道を考えておかねばならない。

僕の目的はこちらの村を城にすることで、前世のような心地よい生活空間を守る能力を得る事だ。だから土塀の壁だけではなく、煉瓦やセメントを使った施設は多い方が良い。系統立てて作っておけば田舎でも格好良く見えるし、イザとなれば別の施設に転用できるのだから。

「そういう訳で暫くは壁や見張り小屋を煉瓦とセメントでガツチガツチに固めて、不要に成ったら家の資材にするなり街道に埋めていこう。煉瓦の製造数は増えてるんだよね？」

「まあおう。みんな慣れたちゆうのも大きいな」

労役で煉瓦を作ってもらっているが、このペースでは可能なのは今だけだ。

来年になって畑作業が本格化すれば暇な現在とは比べられない。村人自身、自分の命を守るために働いているが、安全になってまで煉瓦を増産したいとは思わないだろう。そんなことをするくらいならば開墾でもしたいはずだ。

やはりその時にも水が重要なので、今のうちに水路が抑えておくべきだろう。

「あとは水路と東の出口の周囲を固めて、万が一に備えるってくらいかな。西も東も荘園主がまだまだ近隣を固めてないし魔物が残っている可能性がある」

「そこまでせんでもええ気はするが……まあ煉瓦を焼くのは幾つでも一緒にやからな」

この辺りは過分にいい訳だが、やっておくに損はない。

水利という物は昔から争いごとが起きるし、西の荘園主と喧嘩になっても困る。既成事実として水路の拡張を行い、あちらにも有利なようにする代わりにこちらに引き込む権利もちゃんと主張しておきたい。

こういうことを地道にやっておかないと、気が付いたら『水路の権利は俺の物だ、使用料を払え！』とか言われかねないので大変である。同じような事が東にも言え、中間にある森や山などへ兵を出す権利の為には、ちゃんとした防衛といつでも兵を出せるのだというスタイル

を見せておかねばならないのだ。

「せめて同期のメンバーが近くに居たらなあ……。昔馴染みだから基本的に話し合いが付くんだけど」

「無理に決まっとうろう。手を組んで反乱を起こせと言っとうるようなものじゃ。寝た子を起こす必要はないでな」

まあこれは判る話でもある。

伯爵家からみた僕の信用が置けるかはともかくとして、同時期に傭兵から荘園主になったグループが近在していれば徒党を組む可能性がある。派閥問題で済めばよいのだが、手を組んで反乱を起こしたり他の貴族に鞍替えされたら困るのだろう。

結果として気心の知れた元傭兵仲間は僕の近くで荘園を経営して居ない。頼まれたら口は出すが、今のところ魔物退治の記録くらいしか手紙のやり取りは無かった。

こうして何も無い一年目にやるべきことは終わり、特に変化のない春を喜ぶ時期になったのである。

外伝：転生前後

● 永き時と共に習合と分離が続いていく。

九天玄女と呼ばれた神もまた、西王母の一側面と言われ、王母の派遣した九尾の狐とも習合や混同を受ける。今もなお信仰が残るヴェトナムの地では敵対側の蚩尤とすら混同されているとか。

教え導くのは使命であり信仰を受けするための糧であり、時に神を時に仙を時に英雄を時に悪漢を導いていく。軍師であり使者である者に善悪はなく、だからこそ善悪のいずれかで見られれば、容易く移ろい混同されていくのだろう。

『わらわは九天玄女。正確にはこの地に住まう者に使命を授け、教導する為に訪れた分霊である』

日本のとある場所、とある時。

九天玄女は拾いモノをした。九尾の狐と習合し妖怪にまで零落した彼女を正しく神と識っている、今では珍しい存在だ。封神演義か水滸伝でも愛読書なのだろうか？

ともあれ玄女はこの機を逃さなかった。

正確には他に幾名かの候補者が居り、目を掛けはしたのだが……星の運行の問題で都合が良い相手はこの者だけであったのだ。この機を逃すわけにはいかぬと動いたわけである。

「……その、僕を助けてくださって？　ありがとうございます」

『まだ助けてはおらぬな。そなたは一度死んだが、使命を受け入れるならば別の世界で生きられるようにしても良い。簡単に言えば異世界への転生と言うべきか』

死んだと聞かされて動揺する者と、まるで動じない者が居る。

その魂は中間と言えるだろう。死んだのは困るが、転生できるならば助かったと思えるタイプの人間である。理由があつて拾い上げたにしても、玄女に感謝しても良いとすら思える位には殊勝だった。

そして玄女がその魂を選んだ最後の理由もそこだろう。落ち付いて現状を確認し、おかれた状況に対して前向きに対処できる存在であ

る。

「どのような使命なのでしょう？ さすがに世界に散った魂を集めて来いとか言われても困りますが……それともお力を授けていただけるのでしょうか？」

『使命そのものは他愛ない。わらわに感謝するその気持ちを持ったまま、異世界で信仰を広めてくりやれば良い。ただ……授ける力には『現時点』では不足して居る』

玄女はまず、使命自体が大事ではないと説明した。

最初に問われたからでもあるが、それこそが重要だったからだ。ほぼ信仰の途絶えた日本ではなく、異世界へ行つてやり直す為である。もとより九天玄女は異邦神であり『あらゆる世界』を名前に抱くだけに世界の差など問題なかった。

そして言葉に力はないが、力を授けることは出来ないと言い切る。

『口惜しいが、秋津洲では既に我が信仰は絶えて久しうてのう。今や混同された妖物の方が有名で信仰心など得られぬ有様よ。すまぬが生まれ変わったそなた自身の保護と、今もつておる記憶の保護が精一杯という事か』

「いえ。僕なんかを選んでいただいただけでもありがたいですよ。それに転生後に放置される訳でもないようですし」

ここで殊勝かつ前向きな魂を選んだことが生きて来る。

玄女の目に留まったモノの中には、十年に一人ないし一芸であれば百年に一人というモノもいた。だがいずれも星の配置が悪かったり、声を掛けても我が身可愛さで話を聞かなさそうなモノが多かったのだ。

そして授ける力が無いという事は、本人の力量のみで生きねばならない。それだけの事を喜び、感謝する性質と言うのは今時珍しかろう。

『そうじゃ。転生して問題なく、生き抜く環境と自由くらいは選んでやれる。金銀財宝が余る人生ではなからうが、そなたが『こうありたい』と望めるまでは不自由なく暮らせるであろう。そして何より……』

「何より？」

玄女の言葉をその魂は待った。

今までの内容の中で思い付くことは幾つかあったが、せっかく説明してくれるならば待った方が良い。それこそ思い違いはありえるし、玄女がすでに理解しているなら不要と説明半分で切り上げる可能性もあったのだから。

『そなたは六韜三略やら孫呉を覚えておろ？ いや、諳んじる必要などない。その事実が重要なものじゃ。それは我とそなたを縁付けるには十分、授ける前から所持しておる者に助言して何が悪かろう。この事は異界渡りの掟に抵触せぬゆえな』

「もしかして、僕の覚えている知識を怯えてくれるって事ですか？ 忘れてる知識も込みで」

その魂は玄女が言いたいことを良く理解していた。

何せ世界はインターネットの時代である。ウェブ・サーフィンで様々な文献を漁りはするが、到底覚えてなどは居られない。検索神と冗談交じりに入力することはあるが、そこで調べて覚えている事など余程インパクトの強いことくらいだ。

だが逆説的に、そういった忘れている事のサルベージをこの女神は行えるという。

『すくなくとも三千の竹簡に刻める程度の事は造作もない。何よりそなたが既に得た知識ゆえな。当面はそれで勘弁せよ。そなたが信仰を取り戻すにつれ、少しは何某かを授けられよう。そうじゃな……』
「荷車……？ いえ、これはもしかして指南車ですか!？」

玄女は簡単な図を示して見せた。

それ自体も記憶から掘り起こした物であり、その魂が知っている事ゆえ違和感なく思い出させることができる。これ自体は機構を使つた絡繰りなのだが……。

玄女は笑ってイメージを修正した。

『よいか？ これはカラクリじゃがそなたが身を守る為に身に付ける術を使えば、コレを再現する事が出来る。コレは南ではなく設定した対象の方向を示すモノ。上手く使えば本陣であろうが敵陣であろう

が霧の中で見つけよう。言いたいことは判るかの?』

「応用と言う事ですね? ゲームで言う結界とかを使うだけじゃなく、応用すれば便利な力がある……」

こういった裏技あるいはコツこそが九天玄女が授ける叡智であろう。

それゆえに軍師の神であり、技術をもたらず使者なのだ。そして応用に使い知識というのは、異世界渡りの掟とやりに縛られぬに違いあるまい。

そして暫しの別れがやって来る。

『それでは暫しの別れじゃ。たとい力を異世界で有さぬとも、わらわはこの知恵だけで渡って見せる。唯一の信徒にして使徒たるモノよ。息災にな』

「我が女神様に感謝を」

元より星の配置にそれほどの余裕があるわけでもない。

正しい刻限の一瞬ならば余計な力を使わぬが、時間が過ぎればそれだけ浪費する。

この日、この時、この瞬間に死した魂の中で……その魂程に九天玄女の事を知り、信仰を捧げられるモノはそうは居るまい。

やがて時が過ぎ……銀嶺山脈の本村に連なる支邑、双子の邑に子供が生まれる。

その子は獵師の家に生まれ、隣に住む薬師の家と同年であった。あるいは一人では寂しかろうと九天玄女が隣人のある家を選んだのかもしれない。

『銀や。その力は無闇に付こうてはならぬ。上手く使えば僅かな力でずっと身を守るゆえな』

「ですが娘々。物凄く寒くて死にそうなんですけど」

銀双羽と名前を受けた少年が外に出るようになると、九天玄女は姿を表すようになった。

時折に助言を与え、時折に記憶を掘り起こして手助けを行う。その数も少ないが、信者がたった一人とあっては仕方があるまい。

だが確実に、今の様に死にかけた時は感謝を捧げるに値する素晴らしい助言者ではあった。

『温度を保って命を長らえるのは良い。だがお前に教えた通り、その力は周囲と違えば違う程に浪費するものよ。せめて変化の少ない場所に使うが良いぞ。例えばあの洞穴とかのう』

「あ……あんな所に……気が付かなかった。双葉、双葉、行こう！」
とある冬の日、不意に訪れた来客のせいで食料がなくなった。

父親たちは兵役やら傭兵として稼ぎに出ており、仕方なく子供たちが猟に出る。そのくらいには腕を上げていたのだが……この日は生憎と吹雪が出たのだ。

子供たちは哀れ雪山で遭難することになる。

もし九天玄女が存在の危機を押し現れなければ、一環の終わりだったかもしれない。

「双羽……さむいよー」

「直ぐに寒くない所に行くからね。……獣とか居るでしようか？」

『居らぬとは限らぬが……そなたの見える範囲からは痕跡は何えぬの』

あくまで使徒が見聞きした範囲で助言するのみ。

その制限に歯がゆくなるが、いまは我慢する他はない。獣の危険よりも凍死の方が先だろう。

そして子供たち二人はなんとか洞穴に辿り着く。

『入り口ではなく、風が通らぬようになった場所で温度を保全するが良い。風さえ吹かねば力は削がれぬ。外よりも余程安全じゃし、子供は体温が暖かい故な』

「……判ってます。ごめんね、双葉」

「う？ おふろ入るの？」

風も通らぬ洞窟の中、子供二人は肌を寄せ合って峠を越えた。

もちろんこの峠とは山の事ではなく、山場と言う意味だ。思えばこの洞穴との短い様で長い付き合いも、この時から始まったのだろう。

顔色に出さないよう意識し始めた双葉の方にとっても、思い出の場所なので秘密基地というまいちピンと来ない単語でも我慢する

ことにした。

『また訪れる時があれば、獣が嫌う臭いを用意しておくが良い。それを置いておけば迂闊に入り込んだりはすまい』

「はい。ありがとうございます……ます」

子供たちが寝入って、それでも体温が急変動しない。

その事を見届けてから、九天玄女の分霊もまた眠りについたのである。次に現れる時はもう一人の信者が増えた後の事であったという。

第三部

裾野か、頂きか

● 新生したてであまり意味のない新年が始まる。

しかし神様のお陰を持って、十分に充実した一年が始まると言っても良い。

周囲を取り巻く状況は丸で変わって居ないのに、たかが助言一つで変わるのだから我が神が軍師の神様だというのも十分に領けようものだ。

『手を広げるのももちろん重要なのだが、積み上げるのもまた重要であろう』

「中途半端と言う事ですか？」

前々から感じていた事だが、指摘されるとやるせない。

あれもこれもとしたくなるし、前世にまるで足りないのだから焦りもする。それぞれが時間の掛かる改良作業でもあり、少しでも進めたかったのもある。

そんな事は判っていたし、他の誰かが指摘する可能性もあった。

だがあえて神様が助言してくれたのは、神の言葉ならな僕も素直に聞くし、角が立たないという事なのだろう。

『例えばその茶碗よな。木製の椀は見ずぼらしいが、陶器の方もまるで話にならぬ。しかしそなたならば解決策程度はある？』

「エルフの職人に作ってもらって、ドワーフに染色してもらおう事ですね」

当然ながら森に生きるエルフは木製品に囲まれている。

その加工技術は優れているが、残念なことに用途が十分ならばワザワザ染色はしない。暇人というか趣味人が見事な掘り込みを行うくらいで、特に売り物として成立してないから多い訳ではなかった。染色に至っては植物性の色合いが僅かにあるくらいだろう。

それに対してドワーフは顔料を始めとした染色に長けている。

主に石であるが彫刻技術もあるのでそちらは優れたものだ。とはいえ樹木は手に入っても道具の一部で、木工品はそれほど多くないと言えるだろう。

「そして図案は僕が用意します。彼らの文化は彼らの文明あつてこそ。こちらの文化に馴染んでいくわけではありませんし……仲立ちをすることで、彼らの間を取り持てます」

『その通りじゃ。彼奴が交易をしておらん以上は、ソレがそなたの村の利益にもなろう。彼奴等が買わずとも、町に売ることもできような』

実際に使う以上は、僕らが判断するのは当然だ。

商売を行うことで、二次加工・三次加工を行える。彼らに人間社会の用途に合わせた様式は即座に作れないし、彼らに真似されて困ることもあまりない。他の人間が真似しようとしても、異種族との付き合いがないので難しいだろう。

そしてこれらの事で、木工と陶芸に割いていた労力を一本化できる。僕が持つ前世知識にしても、漆塗りやそこから派生する螺鈿の蒔絵などもあるだろう。流石に全ての知識は持っていないが、同じ時間を掛けるならばこちらの方が効果が高いとすら言えた。

『他の技術や知識にも言える事じゃが、深みを備えた上で幅を広げることがよかろう。そうじゃのう……そなたの張る結界は何もかもを拡げようとしておるようなものじゃ。広さだけ、強度だけ、形状だけ……と個別に設定できるのであれば今の洞府ももそつと良く成ろう』

「可能なのですか!？」

ハッキリ言つてそれは意外だった。

というかゲームじゃあるまいし、防御力だけ上げるとか大きさだけ広げるとか無理だと思つていたので。

まあ言われてみれば納得のいく理由と方法だったのだけれども……。

『対象一つの維持が簡単で、結界の維持が難しい事など自明の理。広さと対象の範囲が大幅に違おうぞ? ではどうして自分自身と自分の表面の結界、あるいは掌なり服なりの一部のみを覆う結界が簡単に

できるのか？ 同じことがどうして他人に出来ぬのか？ その理由は判断出来ぬからに決まっておる』

「判断が出来ない……」

『認識できないと言い換えても良い』

娘々が言った使い道は、故郷に居た時にやったことがあった。

寒い時に自分の体温を保持したり、双葉と一緒に出歩くようになってからは僕の表面に使って風避けになったりしたものだ。

二人して雪山で遭難した時などは、体の一部を密接させてその温度変化を保全していた。その部分は確かに暖かったし、分かり易かったからだ。そう言えば……あの後、獣が嫌う臭いを保存するのに入り口に幕を作るような使い方をしたような気がする。

「つまり僕が明確な形状や大きさを理解できないだけで、無意識に自分中心とかやってるせいで詳細な使い道が出来ていないだけ？」

『左様じゃ。現に強度と維持を保つために炎に対する温度の保全や、さらに絞って延焼のみの保全をしておろ？ そういう使い道ができるのであれば、四角であったり壁の形状であったり作れぬ理由などはない。現にそなたの形や、盾と盾を繋ぐような形状を作っておろうに』

それは緋雁原を攻略するためにやった使い道であった。

ガンガン火の魔法で攻撃されることが判っていたためにに結界を張ろうとし、それが魔力消費の問題で難しいので、まずは盾そのものを、そして短期間のみだが壁のような使い道をしたのだ。

ソレを考えれば形状や大きさなどに絞った使い道は出来るのも当たり前ではないだろうか？ 確かに強度だけならば現状でも可能なのだから。

「では修業を繰り返せば認識を広げて様々な使い道ができると……それは凄いです！ 今まで無理だった消費とか効率とか！」

『待て待て。肝心な修行方法をまだ説明しておらぬわ』

早合点で修業を始めたがる僕を推し留め、娘々は修行効率を上げる小道具を教えてくれた。

それこそ転生前に最初に使い道を教えてくれた、とある保全能力の

応用であった。そう……指南車を保全能力で使うコツの焼き直しなのだ。

娘々は僕の脳裏に指南車を思い出させ、自らはそれに乗るような形で指示を出し始める。

『覚えておろろ？ 最初に説明したコレを用いる。そなたがオオトカゲ搜索に使ったやつでも良いぞ？ ようは方向や数字を認識できれば良いのじゃ。最も近い結界の際、最も大きな結界の際……そのように無数の針を作ってしまったえば数値を用意できる。まずは魔力の消費、次に大きさ、さすれば形状へと移行できよう』

「あ……そうか！ 僕自身が確定させる必要はないんだ!」

我ながら迂闊と言うか、そんな応用があるとは思いもしなかった。

最も近い相手を割り出すのではなく、相手の位置をコンパスの様な使い道をしたことがある。その位置を特殊な対象ではなく、結界の位置や強度に設定すれば良いだけの事なのだ。

術は白と黒、同じ方法で別の使い道があると聞いたことはあるのだが……まさに目から鱗であった。

『最初は外で慣れるが良い。人の集中できる時間は限られておるから。魔力が尽きるのを基準にするが良い。その上で慣れたら小さな結界針を洞府に組み込めば効率的に運用できようほどに』

「ありがとうございます！ これを悩ませていた問題が一気に解決します！」

今まで洞府のエリアや建物の配置に頭を悩ませていた。

しかしこの技術というか認識方法が完成すれば、不要な位置の結界は無理に作らなくても良くなる。それこそ温度変化を保全する能力などは薄皮一枚でも良いくらいなのだから。

実際にどれだけ意味があるかは試してみないと分からない。

だが基本形だけに様々な事態に応用が可能になるだろう。それこそ鍛冶場から送られる空気や水蒸気などは、全体ではなく配管だけを覆えば良いのだから……。

「と言う事は……木工品とかは紅梓さんが居ないので、適当なエルフの人に伝言を頼むとして……漆や柿渋みたいなのを探してもらうか。

既にあるかもしれないし、それを自分達でも染色しながらドワーフに発注すればいい」

同じように手を広げ過ぎな分野は一本に絞る。

絞らない方は維持しながら地味な改良で良いし、重点的に高めた技術からフィードバックも可能になるはずだ。

他にだが例えば畜産もそうだ。

餌を豊富にやる個体とそうでない個体を区別して育てる様に言った。もしそれを鶏と豚の両方ではなく、片方……食事量の少ない鶏で試し、その結果を豚にフィードバックしてはならぬ理由はないのだから。

「後は新しい指南車の開発かな。時間管理の問題も指摘されたし、砂時計と一緒に剛盾さんに発注しとくか」

どうせ暫くはすることがないのだ。

焦ることなく一歩ずつ試せば良い。鶏が順調ならば卵が何時でも食べられるし、デザートも作り易くなる。そしたら鶏を出荷できるほどに増やすか、それとも豚の改良にも手を出すかと悩むことができる。

そして結界の形状や大きさだけを個別に使用することができるようになれば、様々な事を試せるようになるだろう……。

技術と知識の精練

● 特殊能力は想像を超える力を持ち、使い手に足りないモノとは可能であるという確信。

この文面が一体何の物語であったのか、原作ではどのような言い回しが正解だったのは既に覚えてはいない。

だが我が神によつて可能だと知れた以上は、方法を思いつくことはできる。再び眠られた神が目覚めるまでに覚えておくのが良い使徒という物だろう。と言う訳で領主館の内、近くに結界の無い……練習し易い部屋に行く。

「まずは指南車モドキを作成する為に結界を認識できないとね。指標は何がいいかな」

指南車モドキは設定した指標への方向を保持する為の物だ。

回転軸を作り動作を固定しなければコンパスの様に動く。ソレを複数造り、盤に好きな文字と目盛りを付ければ六分儀のような計測だって出来る。

とはいえ今回は結界の端と端、複数跨った向こう側なども認識するならばソレも含めて二つか三つを設定すればおしまいだ。

「やっぱり『光景』がいいかな。目に見えるから指させるし。……結界作成。この遮光を保存」

窓際に移動し、入り込んでいる太陽の光を保全する。

言葉に出して対象を明確にし、意識に刻み付けることで確定させる。そして魔力を支払い術を発動してからカーテンを掛けると……。

そこに先ほどと同じ光景が残されていた。

カーテンで隠したにも関わらず同じ光量であり、カーテンの枚数を増やそうが取り囲もうが同じ光景が続く。まあ魔力を使い切れれば消えるけど。

「次に針を取り出しまして……と、指標針の作成。最も身近な結界の僕の側への方向を保全。指標針の作成二、最も身近な結界の僕より遠い側への方向を保全。指標針の作成三。二番目に近い結界の方向性

を保全……」

と言う感じで遮光を保全した結界が消えない内に指標針を作る。そのまま移動することで、二本の針が光景のこっち側と向こう側という短いエリアを指し続けるのを確認。三つ目の針は相変わらず同じような方向を指しているの、洞府にある結界でも示しているの、だろう。

こうすることで、おおよその結界の位置が判るようになった。

後は少量の魔力消費で何度も結界を作っては消し、自分の感覚と針の動きの差を無くすだけだ。結界に色なんか付いていないからこそ判り難いだけで、魔法で作成した物だから感性を研ぎ澄ませれば全く分から無いと言う程ではないのだ。空気中の陽炎や川の中の小魚など見分け方が判れば判り難くても何となく区別できるのと同じである。

「次は軽い物が良いんだけど……流石に塩でやったら怒られるよなあ。外に出るか」

砂状の物を遮断する結界を張る。

対象物が砂なのは、軽くて消耗が少ないからだ。布よりも軽く、一つ一つが反発して直ぐに弾かれるので消耗し続けない事が大きい。

そして外に出ると目の細かい砂を選んで握り込む。

「対流入遮蔽幕の作成、『く』の字型。……こんなものかな」と

作り出した結界に砂を放ると、おおよそのイメージ通りに砂が流れて落ちる。

ここで指南車モドキを見ると……イメージしたよりも、指標針1と2の幅が広がった。余計な幅で作ってしまったという事だろう。

こうやって結界の位置確認と作成を繰り返し、思い通りの形状で作れるようになれば消耗も抑えられるだろう。もちろん冒険とか戦闘ではそれほど役に立たないが、洞府に組み込むことで様々な効果が期待できる。少なくとも書庫の湿気・虫対策などは格段に行い易くなるだろう。

「これで形状はOK、派生系で広さも問題なし。強度は元から対象物を絞ってるから、逆算で魔力の込める量を図るべきなのか？」

そこまで考えて少しだけしまったと思った。

今朝から幾つかの保全やら境界作成を行ったが、どの程度のサイズであるかとか計算して居なかったのだ。

要するにどれほど魔力をそれぞれに使用したかが判らず、最低限の魔力をその都度に使ったと思うしかない。

「こんな凡ミスをするなんて、この集中力じゃあ今日はもう駄目かな。強度に関しては、対流の遮蔽幕を何回か強く試してみても本格的な計測は明日だな」

今は砂の流入を弾く程度のもりだったが、布を弾くレベルで試すでしょう。

流石に矢を止める程の結果はオーバー過ぎるだろう。やはりこれから何日も繰り返すことで、データや経験を蓄積していくべきなのかもしれない。

そうする間に集中力を欠いていると自覚し、女神のお勧め通りひとまず修業をいったん切り上げ部屋に戻ることにした。

「とりあえずデザインが決まったら木工品の発注と染色を依頼するとして、陶器の研究は据え置き。次は家畜を増やしていく計画かあ」

正直な話、それほど増やす余裕はない。

中世をイメージした小説で、鶏は卵を産まなくなるまで飼い続けて生まくなったら潰す。そういうサイクルになるのが判るような気がする。初期投資として大量に買うような余裕がなく、卵を日々の食事や販売に回すと、鶏を次々に増やすような余裕もない。

要するに当たり前の思考で考えると、鶏を若い内に処分して肉へ変える発想に繋がらないのだ。飼いや易い鶏ですらそれなので、豚はともかく牛に関しては猶更だろう。そういう意味で美味しい肉類を食べたいなら生産量を集中させるしかない。

「とはいえうちはまだオオトカゲをもらったからな。移動用や耕作用に余裕があるからマシか」

エルフの領域で邪魔者をしているオオトカゲを飼う事に成功した。

馬ほど早くなく牛ほどに力強くないが、代用は可能だ。唯一の欠点は食べてもマズイらしいが……まあ荷車や鋤を引かせるだけな

ら十分である。

どうせ森に居ても邪魔なだけなので、お願いすればそれなりの金額……手間賃レベルで送ってくれる。牛は飼わないか肉食用として緩やかに増やす程度で良いだろう。

「その辺を踏まえることやっぱり豚は適度に飼って、鶏に特化かな。まずは卵に余裕のある生活を目指して、いずれは若鶏を食べられる食生活。牛は……年一回ほどお祭りか何かでいいや」

豚と牛を一定数に固定すれば、余力を鶏に割ける。

厩舎の配分に穀物の作付けの計算もし易くなるし、イザとなれば豚の方はどこの村からでも仕入れる事は可能なので保険は効いた。

こう考えてみると確かに、中途半端に色々と研究するよりも特化した方が研究し易いのも確かである。飼料やスペースを鶏に絞ることで、その派生形で卵料理が豊富になり肉も食べられる可能性が出た。仮に砂糖が手に入ればお菓子も充実するだろう。

「偏り過ぎると何だけど……まあ三圃式にしたことであつちの具合で調整すればいいか。飼料が採れ易いとも思えないし」

新しく組み入れた荘園の方は、人手が足りないので一部しか育てていない。

三分の一を畑にして、残りは休耕田と牧草地に変えている。牧草地には文字通り牧草の他に豚が食べる根菜も適当に植えているが、要するに放牧しているだけなのだ。これらのバランスに従うしかないので、いずれ適度な配分になるだろう。

農業に関しては後は水路を作り、広く浅くして暖かい水を引く程度である。その水路をコンクリートの底と煉瓦の塀で補強すれば殆ど手を出すところは無かった。

「山鳥とか鴨とかの養殖は無理だろうなあ……というか試そうとしたら食われちゃったし」

そもそも殺すのはともかく、捕まえるのが難しい。

双葉の眠りの魔法で捕まえ得るにしても、かなり接近しないといけないので警戒されたら終わりだった。その上、何とか捕まえた山鳥を考え無しのアホが『非常食で置いといただけだろ?』と食ってしまった

たのだ。

なお他にも食料があるのに非常食に手を出す馬鹿は、新型のクロスボウの試射を兼ねて山へ狩りへ行かせている。小型の予備兵装用から、大型武装レベルまで用意したので暫くは返ってこない筈だと思いたい。

「次は武器を絞るとして、どんな方向が良いのかな。面倒なら美術品としての日本刀にすればいいんだけどさ」

正直な所、難しい話ではある。

剛盾には新しい物を作りたい欲求があるのだが、洗練する大切さも知っているはずだ。しかし『大通連』と言うある種の厄介者には、新しい物を見たい覚えたいという思いが形になったようなところがある。

当面は彼が以前に手に入れた武装を、彼の体格やら戦法に合わせて作り直すだけでも良いだろう。しかし一通り終わったらまた新しい玩具を強請るに違いあるまい。

「せめて大通連が設置型兵器に興味を示してくれば、防衛兵器の開発に舵を切れるんだけど」

試したところ、巻き上げ式のクレイン・クロスボウは大丈夫だった。

しかし台座固定式のアーバレストには興味を示さなかつたので、それこそチャリオットに取りつけて戦車でも作らないと駄目だろう。かといって大砲を作るには技術も知識も足りなさ過ぎた。

銅張の馬車とアーバレストによる戦車はいずれ作っても良いが……今は過剰戦力で何に使うのかと言われたら困る。馬車の改良とかに手を出した後に派生させるくらいで丁度良いだろう。

「ダメだ……何にも思いつかない。こういう時は駄目だな。日本刀の技術をフーイドバックした武装で誤魔化しとこう。付与魔法の使い手でも呼ばないと手詰まりだなあ」

この世界の魔法のアイテム作成は上級魔法の一種だ。

僕が状態を保全したり結界を張れるように……アイテムに魔法を持たせる職種が存在する。最初は大したことはない術師から初めて、上級職と呼べるまで鍛え上げると専門分野を選ぶらしい。

その時に自分の専門分野として付与魔法を選んで研究する術者が、アイテムを製造することになるのだ。

「とはいえ招請して雇えるような余裕があるわけでも無し、剛盾さんや大通連みたいになんかの条件をこっちは？むしかないな。そんな都合の良い奴いるわけないし学生に声掛けて奨学金でも出すくらいか」

おそらくは何年か越しの話になるだろう。

適当に名前が売れたところで話を付けて都にある魔法学院の学生をリクルートするか、冒険者の術師として登録する者に声を掛けて送り出す形になるだろう。

そういった学生が付与魔法を専門分野に選ぶ可能性は少なく、うちの領地専属になってくれる可能性はもっと低い。だが一から専門家を呼ぶと金が掛かり過ぎるのでそれでもマシな可能性と言えるだろう。

そしてそんな分野に金を出すくらいならば、もっと先に色々と投資する場所があり、そもそもそんな余裕はないという事に落ち着くのだ
が……。

新しい目標に向けて

● 時間と資材の使い道を絞り、なげなしの資金を締めると……するところが随分と減った。

とはいえそれは絞った方向性に使う為の物であり、意味のある積み上げに使わなければならない。

間違っても余ってるから何に使っても良いというわけでは無いのだ！

「なんで……こんなになってるのかな？　ちょっと説明して欲しんだけど。いや、先に理由を告げてから計画的に使ったのなら文句は無いんだ」

「あ？　駄目だったか？」

「バカモン！　じゃから止めたらうに……」

気が付いたら僕のアイデアノートが消えていて、幾つかの武装が用意されていた。

まあ銅張鉄鋼馬車じゃないだけ良いんだ。アレを勝手に作って他所の人間……伯爵家とか侯爵家の連中に見られたら何を思われるかわからないからさ。

だからといってフル・アーマーを幾つも作られたり、失敗作で兜割りの練習をされたらたまらない訳です。スクラップは溶かせばリサイクルできるけれど、薪は貴重なからさ。

「剛盾さんも剛盾さんですよ。もちろんOK出してるレベルならまだ良いんですけどね。どう考えてもお願いしている他の装備やら文物に使う資材を突っ込んでますよね？」

「あー……いや、まあなんじゃ。結界で高炉モドキも出来たし、使ってみたいじゃろ」

どうも話を聞く限り、洞府に出来た余裕を使って炉をアレンジしたのが原因らしい。

温度変化やら炉自体の保護を個別に設定したことで、コークスがまだないために風の強い谷でしか出来ない炉を疑似的に作成したのだ。

前述の理由から高炉は鍛冶の巧みであるドワーフ族ですら、中々所持していない設備なので、夢中になって使い熟すために繰り返し返らしたい。

「それにじゃノートに書かれた、あれほどのアイデアを放っておくこともあるまい？ ガハハ！」

「ノートってまさか……」

「そうだよな！ 駄目な奴はどれも駄目だけど、良いパーツもあるぜ！」

「黙つとけ!!」

なおノートは何冊があるが、見られてしまったノートは黒歴史に近い。

いわゆるマジカル・アーマーの類で、合体変形させると動物の形やら大型武装の形状になる。考え事をしている時に気晴らしに作るネタ帳であり、『無理だろうなく』とメモ書きにして残したものだ。

なぜそんな物を残しているかと言うと、紙が貴重な事、お遊びで他愛ないアイデアであろうとも真剣に取り組む為にちやんとデザインしているというだけである。

「他の為に用意した物を勝手に使ったという事を覚えておいてください。何のことも理解していない大通連へ説明すると、夏まで君の酒を割り当て無しにするくらいかな？」

「はあ!? なんでそんな事するんだよ！ ケチくせえなあ！」

こいつケチ臭いという誤謬しかないのだろうか？

それとも僕がケチだと思われたくないから、そう言えば聞くと思っているのだろうか？ まあいいけどね。

とはいえコイツが呑むときは勝手に呑むので、溜息吐きながら代案を提示しておこう。

「幾つかお願いを用意するから、ソレを片付けてくれればいいよ。簡単なので言うど獣を狩って来るとか、面倒なのだど魔物を退治……誰にも迷惑かけずに倒して来るとか」

「なんでえ！ その程度なら簡単だぜ。そいつにしといてくんない！」

馬鹿で助かった。適当に……はマズイので監視付きで魔物でも倒

させよう。

それはそれとしてやってしまった事は仕方がない。この二人のプライドに泥を塗らない程度の穴埋めをさせつつ、ペナルティとして任務を割り振っていく。

その上で造ってしまった物は、適当な理由で有効利用せねばならないだろう。

「現物に関しては使えるパーツのレポート。戦に行く装備と、魔物退治なり調査用に向けた簡易装甲でも設計し直しましょう。剛盾さんへのペナルティはそれでいいですか？ もちろん頼んだ物は剛盾さんの責任で完成させてください」

「ぬう……そういう事なら仕方ないのう。しかし用途専用の鎧か……」

完成した鎧は黒歴史だが、逃げてはいけない。

全部バラバラにして、長距離移動する調査用とか、魔物用とかの簡易装甲を割り出すのに使えば無駄ではないだろう。

確か何かの小説だかゲームの資料だったかで読んだのだが、人間相手に必要な鎧と魔物や獣相手に必要な装備は違うそうなのだ。

「何かの文献で読んだのですが、獣が噛み付く時は相手の動きを止める為に四肢を狙ったり、人間の方で急所を庇おうと腕で塞ぐんだそうです。籠手と脛当て……あとは胸当てだけなら動き易いと思いませんか？」

「そうじゃのう。人間と違って突き技など使わんしの」

脇腹を抉られることはあるが、胴中央を獣は突かない。

汎用装備として胸当ては重要だが、ある意味で獣相手には不要と言える。四肢を籠手などで守り、脇腹を革製の補助鎧で覆えば騎士の軍装よりも遥かに軽量で済むだろう。

使う資材もずっと減るし、ずっと鎧を着て旅など出来ないのだから丁度良いと言える。

「確かに傭兵たちも手前勝手に使う部分だけ残すことが多いか。しかし……ちとみつともないというか、せっかく作った他のパーツが惜しい気もするが」

「その辺はサンプルとして必要ならば残しましょう。そして好評な部位だけ備蓄すればいいんです。上級の付与魔法の使い手でもお知り合いに居れば別ですが」

「付与魔法じゃと？」

ドワーフのおっさんが首を傾げても面白くないので簡単に説明しよう。

この世界ではその手の武具の進化が始まっていないというか、せいぜいが特攻武器と呼ばれるスレイヤーウエポンとか大通連の戻って来る投擲武装などだ。

いちおうは能力向上アイテムなどもあるが、そういう魔法武具を組み合わせる特化するという概念がないのである。ある意味で『凄い武器を作ろう』以上の概念がないのだ。

「簡単に言うとう平均的に強くなるんじゃないやなくて、速度を上げる鎧や護符で常人の二倍にして攻撃特化の槍を持ったら強いですよ？ 逆に呪い対策や魔法防護をかけまくった鎧を持って、対魔族用のデモンスレイヤーを持てば魔族の部隊を単騎で倒せます」

「ははあ。専用の鎧……いや武具一揃いを専用で造ろうという訳じゃないな」

「お！ スゲージゃねえか！ それ作ろうぜソレ！ 付与魔法師が必要なら……」

「出来たら苦労しないってば。ていうか、前にも言ったじゃん。攫って来たらダメだってさ」

当たり前だが自主的に来てくれるならともかく、誘拐は駄目だ。

もちろん招請する資金などないので、この問題児二人の様に『何らかの目的で研究したい学者馬鹿』を許容するのが一番手っ取り早い。

その場合は三馬鹿を許容することになるが、そこまで行けばいっそ諦めて人材管理を徹底すべきだと思えてくるから不思議である。

「いいかい、勝手に連れて来るの禁止！ 地位とか予算で釣るのは無理！ 知り合いとか友人に術師が居て、こつちで資材とか触媒を用意する範囲で研究するっていうなら良いけどね」

「流石にそんな都合の良い相手はおらんのか」

「居たらお目に掛かって見てえよな」

鏡を見せてやりたいが、おそらく通じないだろう。

おそらく列車とか飛行船とか、そういうこの世界にはないであろう発明品を見せてからある意味発狂させないと早々に学者系がお馬鹿さんにはなら無いのである。

とりあえずこの話はここまでであり、以前に魔法の武器を考えた時とループし始めるのでここまでだ。しかし気になる事が一つだけあった。

「そういえば質問なんだけど、なんでノートなんか持ち出したの？」

「アイデアだけなら定期的に出してるよね？」

「うん？ そりゃあ双葉の奴が……」

「バカモン！ それは禁句じやと……」

ああ、尋ねるのではなかった。聞きたくない台詞に上位に位置している。

まあNTRされて微発とも満足ともつかぬ顔をされても困るわけだが。しかし微妙に怒り難い相手である。

これから浮気と言うか本妻と結婚して上下関係を作る身勝手な夫が、我儘を言っただけの恋人を怒れるのかと言われたら少し微妙である。それはそれとしてノー・ペナルティでは示しがつかないだろう。

「双葉にも何らかの用件を飲んでもらいます。美味しい物を食べさせるってのは約束だったからね。……でも勝手にやって良いって訳じゃないんだ。二人もどうしてもやりたい研究があれば、理由と採算を説明する事！ 釣り合うお願いを聞いてくれれば出さない訳じゃないんだからさあ」

「ガハハ。次からはちゃんとそうするわい」

「そうそう。ちゃんとやるってよ！」

子供の自制心並に信用できないが、この二人は得難い人材なので仕方ない。

問題は惚れた弱みがある上に、正妻戦争の敗北者にしてしまった双葉への対処である。どうした物かと思うが、おやつ抜き以外のペナルティを考えておこう。どうせ僕も一緒に節制する羽目になるからス

トレスが溜まるだけである。

それに美味しい物を作る理由が『僕に食べさせるため』とか『正妻戦争で敗者復活戦するため』とかだといまいち怒り難いしね。とりあえず目の前の二人の前では何らかの適当なペナルティを与えるとかだけ言っておいて、思いつかなければエッチなお願いででも要求しよう。(しかし物は考え物だな。行動と資材を絞ったからこの双葉や二人が暇を持て余したとも言える。全体的にそうなのだとしたら……分かり易い目的でもあった方が良くないかな?)

小人閑居して不全を為すというが、暇だから馬鹿な事をする余裕があるのだ。

何らかの目的があり、目的に邁進している途中なら自然とその方向性で修業でもするだろう。

となると今の洗練作業とは別に、何か目標を作るべきだろう。さすがに結婚問題とかは目標にしたいくはないが、最初のお祭りなり魔物狩りなり適度で分かり易い内容にしたいものである。

(目的があればするべきこと自体が変わって来るよね。お祭りとか目標があれば、それこそ双葉がノートを持ち出したのだから、つまみ食いとかじゃなくて試食程度になるはず)

もちろん僕の大目標は豊かな生活であり、神様の信仰を広める事だ。

その仮定にこの地に城を作り、冒険者ギルドを通して軍師の神様のくれた知恵だと喧伝する。他にも色々アイデアはあるが、最終目的が決まっているから注ぎ込む情熱と時間と予算の方向性は決まっているわけだ。僕や双葉以外の協力者たちにしても同じことが言えるだろう。

例えば最終目標に列車があつて、その手前で装甲馬車があつて、大前提として馬車の改良を行う。そんな目標があればこんなに馬鹿馬鹿しい無駄使いをするわけがない。日常的にパーツの改良を繰り返して、余った資材があつてもそれに費やすはずである。仮に付与魔術師がいたとしてもその研究成果は列車に関連するはずだ。要するにこの現状は判り易い目的を設定して明示しなかった僕にも責任はある

ということだ。

「よし、秋にでもお祭りしようか。収穫祭と一周年を兼ねて、そこで色んな作品の発表会を行うんだ。蚕とか間に合わない物は生糸にして、来年はフリル、その次は布。そしていつかは最新の服に成ればいい。もちろん武器とか紙とかも展示するよ」

「おお！ では早速力作を……」

「まずはお願いしたのを先にね」

当面の計画は積み上げで、対アンドレッド用浄化作戦とかもまだ先の話だ。

宣伝を考えると伯爵家の御嫁さんとかもその前後だろうし、踊りとかで誘うのは双葉になるだろう。何だったら御嫁さんをお祝いする宴も並行して、今年の主役は双葉と言う事にしても良い。

そして展示会があれば商人を呼んで宣伝し易いし、技術と知識の展覧会にかこつけて女神様の事も伝えても不自然ではない。いや、そもそもお祭りというのは神事であったと思うから、神様を広るのも当然ではないだろうか？

こうして今年目標として、最初のお祭りに向けて村全体が動き出すことになった。

面倒な問題

● 大目標に向けた新たな過程としての小目標。

あるいは目盛りの一つとしてお祭りの開催が周知された。これから住人たちはお祭りに向けて動き出すだろう。

そして去年からの情報が少しずつ集まって来た。

具体的に言うると対アンデッド作戦の推移と西回りの海岸情報だ。

「そんなに退治するペースって遅いの？」

「そりやそうよ。魔物だってアンデッドだけじゃないし、中には大きな獣が多い場所もあるしね。それと誰も居ない中間の場所や、他の領主との線引きが難しい所じゃ人間同士で睨みあってるから、設置した壁を動かして終了って訳にはいかないの」

西に行った紅梓がエルフの領域を通って戻って来た。

何人かはそのまま向こうに残って調査中であり、何人かは人間の領域を通って戻って来るのだとか。

紙での資料は後からとして、今は言葉による所感で第一報を受け取っているという訳だ。紙の資料は場合によって道中の検閲で取り上げられる可能性もあるが、言葉は奪われることはない。エルフ経由なので猶更だが、まあ偏見が入るのは仕方のない事である。

「頼まれていた話だけどサトウキビ……だっけ？ それらしいの？ 果実は一応見つけたわ。植樹できるかどうかはまず近場にあるエルフの領域で試すしかないんだけど……」

「ハイハイ。温室用のガラスでしょ？ 資材と引き替えに送らせてもらうよ。植物の現物でもいいけどね」

エルフの族長も出資に納得してメンバーを派遣していた。

だから無条件に成果を持ってこいとはいえないし、情報にファイルターを掛けずに伝えてくれるならばそれはそれで重要な価値がある。

そして植樹に関してはエルフの技術は人間と隔絶した技術があり、場合によっては独自の魔法の可能性すらあったのでこちらも出し惜しみしている場合ではないだろう。

「これは前報酬としての設計図ね。そっちの職人が独自に作るだろうから、参考書にでもしてよ」

「それは助かるわ。……へえ。どうしてこうなるのかも書いてあるのね。サンキュー」

渡した資料を即座に判断出来る辺り、エルフの方でも既に研究が進んでいるのだろう。

なお温度を保つ方法の一環として、僕が使ってる結界についても追記しておいた。当然部外秘だと添えてあるが……木や森を崇める神職を用意できるならばエルフでも可能だと説明してある。

どうして自分の強みを売るのがかって？

そりや神職自体は強くない上に、彼らにはその職に就く為のツテがないからだ。こちらに頼ってくればしめたもの、うちの神様の系列神としてエルフには『木を崇める宗教』、ドワーフには『火を崇める宗教』を組み込んでしまえばよい。彼らは神を崇める文化がないから神職がないだけで、信仰基盤が無いわけでは無いのだ。

「あれ？ ガラスの交換レート変わってない？ 前はもつと高かった気もするんだけど」

「紅梓さんがいない間に高炉モドキが作れるようになってね。一枚辺りのコストが下がったんだよ。色々試している間に、前より綺麗な透明度の高いガラスやら色が着いたのも作れるようになったから、そっちなら逆に値が上がっちゃうけどね」

この辺の価格は変動するようにしている。

昔作ったガラスならコストは高いのだが、それほど枚数を備蓄する余裕があったわけでもない。そしてその数枚だけを理由に高額で売ると、安価になっていいる事に向こうが気が付いた時に腹を立てかねないからだ。

そして何よりエルフ族やドワーフ族との取引はお金ではなく物々交換や、専門家の派遣で行っている。後のち個人単位の商人でも現れれば別だが、今の処は種族間取引なので信用問題の方が何倍も重要である。

「色の付いたガラスねえ。そんなの何が嬉しいのか知らないけど、考

えとくわ」

「フッフッフ。これを見てもそんなことが言えるかな？」

僕は精一杯の虚勢を浮かべて引き出しから薄桃色のガラス製の
コップを出した。

透明な方はまだ現代の水準には及ばないのと、注ぐ飲み物の方も綺麗じゃないので色の着いた方が高級感がある。それだけならば自身があるのだが……。

馬鹿馬鹿しい事にこの『ガラス製の器』に気が付いたのがこの間だという事だ。よく考えたら前世知識を元に、陶器の器を作り始めた時に思いついても良いくらいである。結界を把握するイメージ修業がガラスみたいだと思っただ事も理由だが、それらの理由ゆえに作られたのは最近で洗練度がまるで足りておらず、魅力的に映るのが判らなかった。

「ふくん。確かに前よりマシだけど、これが売り物になるの？」

「ここはセットでこういう物を注ぐからね。……おかえりなさい、紅梓さん」

薄桃色のガラスコップにワインを注ぐと赤身が強くなった。

これまでの色ガラスはもつと野暮ったい色あいと厚さで、中身によつて変わるほどの色彩や厚みでは無かったのだ。

そして酒を注いで色合いの変わったコップを見て、紅梓は別人のようにハシヤギ始めめた。

「いいじゃない！ 紅色になるってのが気に入ったわ！ もちろん外側も私にくれるんでしょ!？」

「……試作品で良ければどうぞ。まったくそういう所は変わってないね」

どうしてここまで図々しくなれるのか分からないが、不思議と憎めない。

まるで近所のおばちゃんが、お土産くれるかわりにうちの食卓で食事し、あるいは田舎から送って来た果実などを持って行くかのようだ。

いや、この強引さはむしろ……大学の先輩が家族の送ってくれた支

援物資を強奪するかのようである。アパートぐらいの連中はともかく、寮暮らしの垣根は非常に低い。行き来が簡単なのだから勝手知つたる我が家とばかりに、帰宅したら物資が開けられていたこともある。エルフ族はタトウーを入れたり髪を染める文化があるので、ギャル系の厚かましい先輩にしか見えなかった。

「試作品？　ここからまだ変わるの？」

「今はまだ作れたばかりでね。もっと色鮮やかにするか、逆に淡い色合いにするか。削って模様を刻むか、それとも模様を描くか。そういう試行錯誤段階なんですよ。削ると言えば全体形状もですが」

当然ながら実用品の第一号は双葉にプレゼントした。

一番完成度の高いのはコップではなく加工し易いサイズの装飾品で、まさしく『双葉』の形状になった緑のガラスである。第一号がブローチで、第二号が髪飾りになっていた。

悲しいことに二号はぶつけて壊れてしまったが、肌に傷がつかなかったのでよしとしよう。新しいのを用意しようとしたら、もっと凄いのが出来るようになってから欲しいと言われたのでお祭りに合わせて鏡でも用意するつもりだった。

「まあいいわ。コレは気に入ったし、長に見せればまた新しいのを手に入れようって話になるでしょ、そんな時にもらうことにするから」

「程ほどの依頼を用意しますよ」

そうそう無料で配れないので、さすがに次はお金を取る。

とはいえ彼女は冒険者登録しているので、依頼をこなせば金になり、その金で購入するから実質的に何らかのお願いで交換するのと変わりはない。紅梓の方もガラスを作るのに燃料が居ると知っているので、ケチだとかなんだと言わないのはありがたい。奥さん以外の女性へのプレゼントはしたくないので助かった。

……もつとも、そういう意味で言うとお興入れする予定の妹君との間柄は微妙ではある。贈り物をしないわけにはいかず、興入れた後は更に本妻として色々と格差を付けなければならぬので今から胃が痛い。

「あ、そうだ。向こうの拠点を探してたわよね？　現地の子たちがお

願い聞いてくれたら提供するって言ってたわよ」

「現地の子ってエルフ？」

最初は微妙に面倒な話だと思っていた。

何分かなり離れた位置にある土地で、こちらの環境とは割りと違うはずだ。魔物の能力だつて同じとは限らず、傭兵時代に集めたデータが役立つという訳でもない。

だがその意味合いはだいぶ違っていた。

「ううん。水棲種族」

「また面倒な」

まず問題の種別とレベルが変わった。

侯爵領の沿岸でも他の貴族の領地なので面倒なのだが、水棲種族となると二重の意味で外地である。場合によっては他国扱いされてしまふ可能性もあるだろう。

そして何より、水棲種族が困っている内容という時点でハードルが上がった。水の中の魔物とかそもそもどうやって倒せばよいのかわからない。振動を叩き込む漁法とか毒を撒くとかはむしろ味方に被害を与えかねないものね。

「あー！ 違う違う。そんなんじゃないからつ。流石に水の中に行けって話じゃないわよ」

「そうなの？ というかそれなら何が問題な訳？」

僕の勘違いに対して即座に出る否定。

どういう事だろう？ 全く無関係だから強く否定したのか、それとも紅梓自身も体験した誤認だからか？

まあどちらにせよ解説してくれると思うので、話の腰はおらずに聞いて居よう。

「貴族だろうが種族だろうが基本的に自分の領域つてのは自分で守るものなのよね。伯爵領はアンデッドの総数が多いから別だけど、普通は舐められたくないし他人に口出されたくないから自分で何とかするの」

「まあ判るよ。侯爵家での活動も、伯爵の寄親だから奉仕として成立した話だしね」

莊園を持つ前に、侯爵領へ既成事実を作りに行ったのだが……。

他の貴族に協力してもメリツトが無い上に、恩を踏み倒される可能性もある。しかも縄張り争いでイチャモン付ける為に介入したと見られかねないとの事だ。領地の境で目印にしている岩を動かしたり木々を伐採されては困るといふのだろう。

人間同士でそこまで気にしなくとも思うのだが貴族間だと領地と名誉と言う問題があり、異種族だと生存権に関わるから更に大きな問題になる。これまでエルフの問題やドワーフの問題が冒険者ギルドに持ち込まれていないのも、多くはその辺が原因だろう。

「だから侯爵家の領域を通った時も特に頼まれはしなかったわ。アンデッドの流入がない分だけ、大問題つてのも無いしね」

「それなら問題は何さ？」

何か作って欲しい物でもあるのだろうか？

そう言いたかったが、話の腰を折ると元に戻すのが面倒なので黙っておく。込み入った事情と言うのは本人が頭の中で順番を決めている事が多く、その順番に逆らうと腹を立てる事が多い。

それはそれとして思った通りの事だけを話されて主語述語が足りないことも多いので、相槌を打ちながらその辺は見守っておいた。

「前にキラビーが大繁殖したらって過程でお願いするかを言ってたじゃない？ アレの大本があっち側なのは判ってたんだけど、あっちでも問題になり始めたらしいのよね」

「あー。そういう事か」

この話が面倒になった一つ目は、海上の何処なのか分からない事。水の中ならば何とでもできる水棲種族も、問題なのは地上の何処にあるのは分からないのでは対処のしようがない。

水の中から出れない事もないが得意ではないし、水の外に出ることもあるからこそ被害にあってしまふ。それでも普段は無視して水の中での生活を多めにしておけば良かったそうなのだ。

「暫くすると大繁殖して株分けで女王が出て行くらしいわ。その一部がエルフの領域に来ることが判ってるし、あっちで居つく島が増える」とまた問題になるってわけ」

「なるほどねえ。……ところで確認して良い？」

「なによ？」

「誰から誰に？」

面倒の二つ目はこの案件が何処から何者に頼まれたのかだ。

その所属は曖昧であり、責任と報酬のやり取りがいまいち分からない。エルフが受けて下請けと言う事になるのか、彼女らはあくまで仲介だが、頼まれた先が冒険者たちなのかそれとも僕という荘園主なのかで異なるのだ。

この辺はハッキリさせておかないと、報酬でもめたり、キラービーが良く分からない動きをした時に困る。それこそ他に蜂が居らず、全滅させたら蜂蜜が採れないとか笑い話にしかならない。

「現地の水棲種族から冒険者ギルドにキラービーの調査、可能ならば退治って依頼なのかな？ それとも僕宛て？ 僕やエルフが受けて依頼するのもかもしれないけど。問題が出た時の問い合わせ先とか、報酬の受け取り確定とか決めなくちゃならないし」

「あつちの子からギルドって事なんでしようけど……受け付けは現金だけ？ 面倒ねえ」

「面倒だよ。宝石とか換金可能な物があればいいけど、代替物なら僕かエルフが受けて依頼を出すことになる」

所属を跨ぐとこういう時に面倒が起きる。

前世であったが『下請けがやりました知りません』上だけが知って居ます。任せたので知りません』というのは困るのだ。こちらの世界でも貴族は良くそういう手段で、犯罪めいた行為を誤魔化して居るらしい。放逐した部下が勝手にやったとか、日時の問題を出しても理由は背信行為だったのでその前から裏切っていたとか言いかねない。

そういう訳で、ダメな時はダメだが判る範囲では冒険者を可能な限りバックアップしたかった。

「場合によっては僕が現地に行く必要もあるしね。そこまで労力を掛けた報酬をもらうか、それとも調査作戦を組んだら終わりで許してもらえるかの差も確認しなきゃ」

「オオトカゲを見つけた時のアレを貸すのはダメなの？」

「キラビーは知ってるけど、僕の認識だと僕の知ってる基点になるからダメ」

そして三つ目の面倒さがコレだ。

指南車を使えば適当な個体を追い続ければ良いのだが、それは僕が居て明確な指標を作れてこそ。あの辺で一番近い知っている場所は侯爵家になるだろうし、そこに戻る為のは針と、気一番近いキラビーくらいになってしまう。

それだと複数のキラビーがすれ違おうと巢まで案内してもらえないし、侯爵家から遠過ぎると縮尺の問題で何処まで移動しても針が変わらないことになってしまう。

そういう訳で調整だけで面倒になりそうなのに、春から夏に女王が巢を株分けするとなれば急がなくてはならないという矛盾があった。これを回避するためには僕自身が移動するのが一番早いのに、荘園主がホイホイ移動するのもどうかと思う上、途中で対寄る侯爵家にあいさつしないわけにもいかないのである。

こうして面倒ばかりしか残らない情報が僕の元に残された。

通行権の為の贈り物

● 水棲種族の居住地は僕の荘園から見て弓状の位置にある。

伯爵領を経由して北西にある侯爵領を越え、西海岸に到着してから南下。という弧を描いたルートが人間の領域を通るコースだ。

もう一方で、直線的に移動するのがエルフの領域を通るコースなのだが……。

「どっちも面倒なんだよね。紹介してくれた紅梓さんや、向こうが困ってる事を踏まえても断るのは論外だし。とはいえどっちを通るべきか……」

「あれ？　うちを通るの？」

メリットだけを考えても単純に断る事だけはない。

最低限でも僕に考えられる案を送り、冒険者を雇って可能な範囲でキラビーの問題い対して少しずつ解決を図るといいう事になるだろう。

とはいえ繁殖する生物に対してそれでは対応が遅すぎるので、僕が直接現地に行って解決した方が確実ではある。その場合に重要となるのがどちらのコースを通っても問題しかない事だ。

「エルフの領域を通る場合……僕もエルフ族も紅梓さんの顔を立てて会議、通行許可を得るかどうかというのが筋ではある。でもこれは遅過ぎるし、僕が利益を得るために何かの譲歩をするか、エルフが利益を得る事にして僕が協力するかというのを決め打ちしなきゃいけない」

「まあそうよね。何の利益があるのか知らないけど」

まず難しいのがエルフが利益を得る事にする場合。

その場合は水棲種族からエルフ族に大きな譲歩をして、その利益のために僕に解決を頼む事になる。これでは僕にどんな利益があるか分からないし、水棲種族もまた大きな譲歩を迫られる訳だ。

カードゲームに例えると……互いの手札の勝ちが違うので、低い手札と高い手札を交換できることがある。しかしエルフと水棲種族で

は、価値観が近いので損益が合わないのである。

「そういう訳でエルフが僕に頼むほどの利益を水棲種族が払うとは思えないんだ。なのでエルフ族の領域を通りたいなら、僕が大幅な譲歩をしなくちゃいけない。温室やその設計書に載せてる『木を崇める神職』とかの教授以外でね」

「まあそうなるわけよね。今の処、別に困ってないもの」

これまでの付き合い上、エルフの族長や元老たちは政治手腕が高いと判っている。

長生きから来る知恵を上手く使っているからだ、おそらく大きな譲歩を払えば許可はくれるだろう。何しろキラ……あれ最初はジャイアント・ビーだったよね……話がすり替わってるぞ……マズイ、難易度が上がってるんだ。

ともあれキラ・ビーの大本を絶てるなら、譲歩次第で許可を出そうという前向きな話になるだろう。この場合は『絶対にノー!』という所を譲歩で認めるまで下げたので、これがエルフの譲歩だと言ってくるに違いない。それに、エルフばかりに譲歩しているとドワーフとのバランスも崩れるので面倒しか出ないのである。

「その場合は根拠地だけじゃなくて、もつと大きなナニカを僕が貰わなきゃ割りに合わない。でも、それはそれで色々と困るんだよね対外的にもさ」

「と言う訳で、侯爵領経由で決定ね。がんばって〜♪」

建物を建てる土地だけならともかく、島一つを領地というのは論外だ。

現時点で手が足りないのに、外国扱いかもしれない水棲種族と契約するとか問題になる。仮に国内扱いでも、侯爵さんとか伯爵相手の問題が出ると苦労ばかりが増える事になる。

だからといって換金価値のある宝石を山ほど貰って嬉しいかと言うとそうでもない。これから水棲種族と交易するのに、彼らの貨幣的な物が大幅に減るので交易が成り立たない可能性が出てくるのだ。彼らが使っていない資源でも都合よくあれば別だろうけれど。

「問題は時間が掛かる上に何で僕が行くのかという説明が必要な

と、その問題解消なんだよね」

「川を通るのはダメなの？」

「バレなければね。見つかったらエルフにも侯爵家にも喧嘩を売ることになるのでダメです」

川は境界線なので、どっちも刺激することになる。

どっちでもない場所になってると危険だし、川の通行権も含めて税が掛かる場合がある。支払う気が合っても気づかれなかったら無視する気だろうと言われたら面倒なので、この手段は取りたくない。

この世界の船は魔法で風を起こして帆に当て動くという、モーターボート並の性能らしいので速度の面で惜しいと言えば惜しかった。もし使うとしても侯爵さんやエルフと話を付けてから、高速連絡船として使うくらいだろう。

「いつの間にはジャイアントビーがキラビー騒ぎになってるし、ソレの初期予防を言い訳にすれば侯爵さんはなんとかなるかな。それはそれで贈り物は必要だろうけど」

「あ、バレた？ あはは今年は狂暴らしくてね」

自分で対処するつもりのエルフがこんな言い訳するくらいである。

おそらくは怪我しても僕の自己責任ということを通してくれるだろう。『道中で魔物が居たらヨロシク！』位の事は言うだろうが、そこは冒険者ギルドとして何をやるかという説明の場に言えば良いので問題は無い。

タダで働かされるとしても、後に冒険者ギルドのメンバーが通行するときに、何をしたら問題になるのか問題にならないのかを話し合う良いキツカケになるだろう。

「侯爵家への伯爵家が行う奉仕を僕が担当するけど、それは僕の都合でもあるから伯爵家では僕の功績はカウントしないってとこかな？

その辺を差し引きすると……あとは贈り物を何にするかか……面倒極まりないなあ」

おそらく二か月くらいほっとけば、方々で問題が起きて向こうから頼み込んで来る。

早期発見と対策を促すレポートだけで済み、向こうの要請なのだか

ら何かを貰うのはこちらになるのだ。しかしそれでは侯爵家や伯爵家からの、むしろ要らない紐付き報酬が増えるし完全解決まで動かさ続けられるだろう。

その場合は水棲種族からの報酬が目減りすると思われる上、僕の都合で動けなくなるので却下。結果的に贈り物を抱えて伯爵家や侯爵家に話を通すことになるだろう。

「このガラスじゃ駄目なの？」

「まだまだ試作品だからね。初期段階のだと都で造った一級品の方が優れているのは当然だし、ハッキリと判るほどまだ差は無いんだ。それに……意図して区別を付けられるような品はまだ贈りたくない」

文化には積み重ねと言うモノがある。

これまでの流れで培われた一級品の文物は、『眼鏡に叶う』という意味で上流階級御用達なのだ。ポッと出の新製品では太刀打ちできないだろう。

そして姿見や鏡台のような……見ただけで差が判るような品と言うのは、要するに婚礼用の品くらいである。双葉に贈る方を優先したいし、今の時機から無理して渡すところの方が結婚を望んでいるという事になってしまわないか。

（手に入れたばかりの貝殻を使って漆を塗り、螺鈿の蒔絵でもでつちあげる？ いや……それはこれからの流行りで向こうに要望させた。ということは今あるモノか）

現在手に入れた物だけでも、螺鈿とかは一応完成させることはできる。

だが漆塗りとか柿渋を塗る木材染色技術はエルフの装飾に及ばないし、ドワーフに彫刻してもらおうにしたって限界はある。金粉を使って装飾する技術もちよつとずつレベルを上げている所だ。

所詮は経験のある素人を、エルフやドワーフ達の徒弟代わりに付けて無理やり職人に仕立てているだけに過ぎない。うちの荘園で造れる確固とした特産品にはまだまだ遠かった。そして『螺鈿の蒔絵』がエルフ・ドワーフ・水棲種族たちの協力なしには作れない……と認識してもらおう方が商品保護の立場からしても有利だろう。

「仕方ない伯爵家には予定していた刀を一揃えとして……。侯爵家には軽装鎧でも用意するか」

「ん？ 同じ物でいいんじゃない？」

「それじゃあ珍しさもないし、比較が出来ちやうからね」

伯爵家には日本刀・脇差・懐刀の三本セットを贈る。

前々から予定していたので準備が不要だし、美術品としての意味合いを前面に出しているのありがたい。侯爵家に同じ物を贈らないのは、伯爵から失礼がないかという『理由』で見せてくれと言われたら困るからだ。

侯爵家に送るのだから当然差を付けないといけませんが、明確極まりない差をつけてしまうと伯爵家には劣る物を用意することになってしまう。これが財宝ならば単純に量の差で良いのだが、美術品となるとそうもいかない。個別に送るならまだしも、同じ物を目の前で見せたらスネられる可能性はあった。侯爵に送った物を寄こせと言うと問題だから、伯爵が文句を言えないので余計だろう。

「だったら鎧でも同じことじゃない？」

「紅家の三男坊の事を兄弟弟子に聞いたことにでもするよ。それなら角が立たないから」

こういう時に重要なのは話題性である。

タイムリーな贈り物と言うのは、普通の贈り物より喜ばれる。その家の事を判っていると判断されるし、侯爵さんが三男を可愛がっているなら猶更だろう。

そしてそんな話を聞かされた時、伯爵家で欲しいとは言えまい。それにどうしても同じ品を欲しいだけならば、同じ物を作ってくれと要望すればよいだけの事なのだ。格付けを行ったわけでは無いので『侯爵家に贈ったものと同じ物が欲しい』と要求しても、侯爵を羨んでいいわけではないという事になる。

「贈り物をその辺にすれば問題は無く成るけど……今年も鉄製の農具を増やしたかったなあ」

「仕方ないでしょ。資源を譲ったのはあんたなんだし」

僕は開拓権を譲ったので、資源はエルフとドワーフにある。

木材だけならば隣村の新莊園でも用意できるが、鉄鉱石はそうもい
かないので一カ月ごとに使える最大量が決まっているのだ。

軽装鎧を仕立ててしまうと、どうしても今月から来月に掛けての予
定に穴が空いてしまうのであった。ドワーフがこちらに何か要望が
あれば別だが、今の処は何も無いので開墾に向けた新農具を揃えられ
ないのが何とも残念であった。

アポイントメント

● やることは決まったので、自分ではできない事の時間調整を行う。
伯爵家と侯爵家にお伺いの手紙を書いて、大通連に尋ねつつ剛盾ともすり合わせをしておく予定だ。

せっかく鎧を贈るならば喜ばれる物にしたいし、それはそれとして奇抜な物もできるだけ避けるべきだ。説明書をちゃんと読めば甲冑をバラして捨捨選択出来るくらいが妥当だろうか？

「紅家の三男坊ってどんな人？ 槍の名手としか知らないけど、大通連みたいに使分けたりはしないのかな」

まず本人のバトルスタイルを確認。

好きで槍にこだわっているのか、槍を中心に据えているのかで随分と違う。また走り込んで槍の長さで機先を制するタイプか、どっしり構えて槍で制圧するタイプなのかでも違う。

これらの差に合わせて鎧の機構を考え、走るタイプなら動き易く、制圧型なら攻防一体と言う感じだ。

「紅包の奴か？ 色々できるし普通に殴ってもくるぜ。ただ、お師匠さんから受け継いだ槍が魔法の品なのと、あいつ自身の加護が余計な事をしねえ方が強えんだよな」

「へー『使える』加護持ちか。それは考えるなあ」

大通連からも紅家の三男坊こと、紅包の詳細を尋ねる。

既に魔法の品というのは聞いていたが、加護が有用だというのは初めて聞いた。この世界の加護は地味に強いモノから、用途限定で特殊なモノまで様々だ。

いずれも平均すれば同じ程度の有用性なのだが……。

一定分野に従事する者たちの中で、自らが就く職業にマッチした特殊能力と言うのは中々存在しないのだ。この分だとかかなり有用な組み合わせなのだろう。

「あいつの性格は名前と違って尖ってるんだがよ、加護も似たようなもんだ。陽炎の軌跡を残して攻撃すると、陽炎も本身も両方受け止め

ねえと守った事にならねえんだよ。まあ両方当たっても一撃は一撃だけだな」

「残像で攻撃できるの？ 格差を感じるなあ」

陽炎と言う表現が良く分からないが……。

おそらくは魔力を消費すると残像が残り易くなるのだろう。槍が当て易く威力の高い武器……それも魔法の品であることを考えると、その一撃は全てがワンランク高レベルだと言い換えても良かった。

確かにそんな能力があるのであれば、槍一本に絞った方が無難だろう。

余計な事をして様々な武器に切り替えなくとも、目線や動きで誤魔化す必要自体がないのだ。ただ腕前を上げて相手の急所を狙い、威力を高めればそれで済む。

「殴る蹴る方に印象があるって事は、あくまで動いてる自分だけなのかな？ 投げた物もダメ、絡め手で動きを止めてもダメ」

「良く分かったなあ！ そいつを一発で見抜いたのはお師匠たちくらいだぜ」

ゲーム脳で考えると良く分かる。

ついでに言うのと長所も短所もおおよそだが推測できた。要するに何もしなくても攻撃がフェイントになり、ただの技が奥義になる。物凄く当て易くなるが、それ以上でもそれ以下でもない能力である。

蛇腹剣の改良型を用意し、軽く保全能力を使用。刀身の光景のみを保全して軽く動かした。そして途中で機構を展開し、多節鞭状にしてくるくるしてみる。

「要するにこういう感じで、これは姿だけだけど相手は両方防御できないとダメ。ただ残せるのは手にした武器だけで、こういう感じで伸ばす武器なら大丈夫だけど……持ち替えても威力が上がるわけじゃない。だから名槍の腕を磨いている」

「スゲーな大将！ あいつのやった説明まんまだぞ!!」

「そりやどうも」

物凄い能力だが、適用されるレベル帯が異様に狭い。

雑魚にはそんなことをせずとも当たるし、自分より強い相手に使っ

ても全部防御されたら終わりだ。有用なのは自分と同じレベル帯からちよつと上までだろうか？

それも避けられないと割り切つて、急所だけ守りながら受けが無しに徹されるとどうしようもない。注意力の散漫する戦場で戦えば無双できるが、高レベル同士が戦う決闘なら少し怪しくなつて来ると言えるだろう。

「性格も当てて見せようか？ 最初は自分が無敵だと増長してたけど、お師匠さんに痛い目を合わされてからは変わった。能力を理解した大通連たちが工夫し始めてからは努力の量も目に見えて変わった……とか？」

「良く分かるなあ。訂正するところなんざねえよ」

おおむね高機動キャラを扱うゲーマーが味わつた悲哀である。

扱い易いし強いのだが、足を止めて戦う防御系には全く手が出ない。せめて急所を狙つた攻撃も絶対命中になるとか、威力を底上げする魔法などが欲しい所である。

そしてこれは専門の鎧を作るにあたつてとても難しい事になつたと言えるのだ。

「欲しいのは威力……か。だから片手で振り回すことはあつても、両手持ちが前提。できれば走り込みでのチャージもやりたい。足を止めての打撃戦はやる時点で不利な相手前提になるよね」

「ビヤ樽呼んで来るか？」

「剛盾さんと呼んであげてね。確かにそういう体形してるけどさ」

僕がメモを取り始めたので大通連が気を利かせた。

いつもこれだけ空気が読めるなら良いが、大抵は気にしないのが困り物である。

それはそれとしてゲーマー魂が蘇ると、こういう時の能力考察と装備比較はたまらないものがあつた。とりあえず筆も止まらないので、メモ帳代わりに木の板へ書きなぐりながら進めていく。

「なんで仕様は決まったかいのう」

「まず形から入るけど、容れ物はガラス張りの長櫃に布を敷いて上には紅の幕。幕の代わりにマントでもいいけど、逆の配色は絶対にダメ

だから注意してね。その上で軽装鎧を着てもらおう事を前面に出して、全身部分は予備として内包する」

「あー紅が包むって意味か。まんまだな」

紅家の三男坊、紅包の為に用意した鎧。

同門である大通連に話を聞いて、面白いから用意したという触れ込みだ。これならば他人である僕が紅というイメージの布を用意しても咎められることはなく、伯爵が欲しいと思っても奪われることもない。紅が包むで名前をそのままイメージしているのは大通連の言葉通りである。

そしてサンプルである軽装鎧のパーツ群に目を向けた。

「左右対称に見えるけど、機能面で分けるよ。左籠手はソードストツパー、右籠手は尖拳として武器と防具を兼ねる。全体構造は獣か何かにしようと思うけど……紅家の御料地ってどんな所？ 何か面白い獣居る？」

「紅来川は砕けた紅玉が上流から転がって来たつー浅い河で、どっちかってーと鮭だな」

何というか武門という感じではなく、経営者だろうか？

ゴールドラツシユならぬルビーラツシユで有名な川と山があり、彼らに色々な物を供給したとか？ なんかイメージ的に貴族と言うよりは商人ぽいので思考が止まってしまった。単純に火山でもあるのかもかもしれないけどね。

しかし微妙にイメージが一致しない来歴は良いのだが、鮭をモチーフにすると戦闘スタイルとかどうなのだろう？

「飛び跳ねたり走ってからのチャージを使う感じのイメージかな？

やっぱり軽装鎧だね。足はその辺の保護とか、飛び跳ねるのに邪魔をしない造りで。飾りはあっても良いけど、外せるほうが親切だと思う」

「まあええじゃろ。尖拳は膝にも入れてええか？」

「どうぞ。……じゃあ四肢全部に入れて、右手は手刀で左手はソードストツパーってとこかな。後は兜も額当て以外を外せる感じにしよるか」

絵を描きながら微妙に修正する。

四肢に尖った形状を付け足し、籠手にはストレートな三角形とギザギザの三角形を入れる。そして脇や腿の可動域は大胆に採り、スカートアーマーやショルダーアーマーをいったん大きくしてから、邪魔なら外せるようにしておく。

そして頭に関しては良くある兜、額当て、そして仮面の三つに分割可能な様にして置いた。仮面は胸元に留め具と紐を、兜は逆に首の後ろに入れておく。せっかくなので鮭を模した兜の目には安物ながらルビーを入れて、仮面の方の目には紅色のサングラスでも入れておこう。

「こんな感じで最初は戦場で使う全身鎧で、頭の方だけ鮭を模した甲冑。でも重要な部分を取り外して軽装鎧に出来るのと、コレだけを固めたら鮭のイメージにする。伊達と酔狂でこんな構造だと思えば美術品だし、そういう理由で鎧を持ち込めるって感じだね」

「槍を通すと焼き魚のようじゃがの」

「良い感じじゃね？ 俺にもくれよ！」

「鉄がない！ 先に言っとくけど農具に使う鉄を回してるから！ 持って来てもダメだよ！」

そんな感じでまとめつつ、魔法の付与を行う機会があれば再設計するとメモへ。

今は説明書に載せる文章でしかないが、付与魔術師が居れば攻撃増強をメインに脚力増強も行いたいところである。コンセプトとしては軽戦士用の強化鎧であり、戦場を制する場合は全身鎧用のパーツに頼るべきだろう。

もつとも付与魔術の研究もしてないから平然と言えるわけで、制作時から同時付与する必要があったり、パーツごとに強化出来ない場合もあるだろう。その点においては未熟ゆえ仕方ないけど、鎧の製造技術を持っているがゆえに将来的に置き換える事ができると言い切れるのは幸いだった。

「伯爵家には三本セットを持って行く予定だから、鎧の方は後から持って追いかけてくれる？ 長櫃用のガラスはあったよね？」

「色ガラスで無くても良いなら温室用がある。飾り立てれば問題ないじゃろ」

サンプルのパーツの中から近い物を選び、剛盾と相談しながら詳細を詰める。

ここにある獣型ではなく鮭の形状なので微妙に違う物になるだろうが、イメージとしては十分だ。胸甲・腰甲を中心に四肢のパーツを並べ、頭部のパーツでそれを締める。

箱の設計も同時にこなしつつ、できればこつちにも魔法をかけて、開けると鎧が飛んで来ればよいのにな……と他愛ない冗談を交わし合った。

蜂対策にもタワーディフェンスを！

●
手紙が届いたところを見計らい伯爵領のあるエリアへ移動開始。

問題があれば途中の何処かで静止の使者でも来るだろうという見積だ。体面を整える為に形ばかりは整えた馬車で移動している。

水棲種族の依頼を片付けるために、伯爵領を通る許可を得る事と、改めての御挨拶としてちよつとした贈り物を携える程度である。おべっかを何う為ではないので荷物はそうたくさん用意しなかった。

「もう大丈夫だからさ、置いとけば？」

「うゝ。あいつが近くにいてもかもしれない間は信用なんない！」

そんな中で双葉は大切そうに鑄型を抱えている

それというのも何処かの馬鹿が、鑄溶かして鎧の材料にしようとしたからである。

銅を材料にしても鉄鋼にはならないと制止されなかったら、危うく形状がなくなっていた所だ。ちなみにその馬鹿は暫く帰って来るなと追い出されたが、どこかでまた馬鹿やってこつち迷惑を掛けないか心配である。

「じゃあさ、また後で人形焼きでも作るから貸してよ」

「大判焼きがいい。餡をたっぷり入れてね」

「はいはい」

双葉はこの調理器具がお気に入り……というか甘い物に目が無いため激オコ。

片時も離さずに抱きしめているが、流石にそろそろ大丈夫だろう。狙撃でもされるなら役立つかもしれないが、その時は大人しく盾にでも隠れて欲しいところだ。

とはいえ本来は調理器具、食べ物を作る事こそ本堂だろう。こんな所まで持って来てしまったが、せつかくなのでお菓子を作るとしよう。

「……そういえば双葉の魔法つてまとめて眠らせれたっけ？」

「無理」

どうせ移動中は何もすることが無いので、作戦を考えてみる。

まず魔法には様々な効果と強度があるのだが、便利な様で不便な物も多い。双葉の使える火系の魔法は対象を非活性化させて眠らせる物だ。

明確な対象指定なので集団には使えないし、他にも欠点があったはずだ。そういった欠点があるからこそ、低レベルにしては強度の高い魔法なので相手次第では有効な魔法なのだが。

「じゃあ目印を付けるために近くに寄って来たらかな？ 最悪、この馬車の中なら外が見えるし」

「そだね。乗り心地は良くないけどそこはいいかも」

この世界の技術レベルの馬車は微妙である。

荷馬車とレベルがあまり変わらず、座っているとお尻が痛い。天蓋があつて壁があるのでしっかりと素材で作れば壁に出来るくらいだ。

それはそれとしてこの馬車には窓ガラスと格子を付けているので、矢狭間ならぬ魔狭間として使えた。沿岸のキラビーならそれで済むだろう。

「一番近い蜂じゃあ探しにくいからね。……まあ死角から急接近して来る奴を見つけるには便利なんだけど」

僕の能力に限らず魔法は使い様である。

双葉の使える眠りの魔法は低レベルだが、僕らが忙しくしていた時でも双葉が頑張つて覚えられるというシンプルさ、そしてかなりの確率で眠る強度があるので扱い易い。これが闇魔法の眠りだと範囲を巻き込めるのだが、眠らせる強度が低いので……おそらく落ちた瞬間に痛みで起きる筈だ。

どの系統の魔法にもそんな感じで強みと弱みがあり、上手く使いこなせば有利だが場当たりに使つても対して強くもなかった。まあ使えるだけで便利なのは、上級魔法だから仕方がないのだが。

「そーいえばどうやって倒すつもりなの？ 多い時は滅茶滅茶多いけど。そういう時はちよつとくらの突風を吹かせてもダメなんだから」

「エルフに言う話じゃないけど、昆虫系には生態があるんだよ」

一体、二体とかいう数なら水棲種族が困っているはずはない。

基本的に海の中に居るのだし、陸上に上がるのは短期間の筈だ。此処で問題になるのは二つの要因である。

一つ目はいう間でもなく、地上が得意ではないので集団相手に苦勞する事。そして二つ目は長期間敵を追えないので、巣を探せない事である。

「虫は寒くなると眠り、暖かくなると動き出す。そして夏以上の温度に成ったら死ぬ。後は空気の取り方が少し違ってことかな」

「ふーん。空気ねえ」

温度変化に関してはエルフの紅梓が無関心なのは当然だろう。

その程度のことは日頃の生活から察しているだろうし、広域の温度を変化させる魔法なんか無いので、それが切り札にならないのは簡単に判る。

だからここで決め手になるのは、空気の取り方の方だ。本当はアルコールの方が良いのだが、蒸留法なんか知らないし意味があるのは工業用アルコールの生成だろうから諦めて置く。

「基本的に人間を含めた人族は口と鼻から呼吸する。魚は口じゃなくて、喉の脇にあるエラから、水棲種族は……どっちなのか両方なのか分からないけど。で、虫は脇腹なんだよ」

「お腹あ？」

紅梓が細い体の肋骨の辺りを抑えながら首を傾げる。

丁度虫はその辺りに幾つかの穴があり、そこから空気を吸っているのだ。小さな口ではとても全身を賄い切れるだけの空気は吸い込めない。

とても効率的な体をしている虫であるが、効率的であるがゆえにちよつとした機能不全で死んでしまうのが虫というものである。

「虫は脇腹から腰に掛けて幾つかの穴があつて、全部塞がれると死ぬ。そこまできかなくとも数個塞がれたら今まで通りには動けない。巨大な蜂は巨大であるがゆえに不自然だから猶更だろうね」

効率的な体に新鮮な空気を通して活力を得る。

基礎的には強靱な昆虫だからこそ、それだけで爆発な体力を出せる訳である。何割か減れば元の動きは出来ないし、大型ならば問題ないというのは単純に、体が大きいから塞ぎにくいというだけの話だ。

だが体が大きければそれだけに、一つや二つの穴が無事なだけでは済まないはず。

「本当かはともかくとして言いたいことは判ったわ。でも、どうやって塞ぐの？ 沢山だから問題って話よ？」

「まず蜂は臭いで餌の位置と、敵対者の反応を教え合う。だからルートは推測できる」

少数だからと無闇に倒してはいけない。

倒して良いのは各個撃破すると決めた時だろう。もちろん襲い掛かって来たらどうしようもないのだが。

だが上手くやってくる方向を絞れたら、そのルートに仕掛けを施すなり、待ち構えて一気に罨やら魔法を使用すればよいのである。

「石鹼水を散布するんだ。もちろん普通の手段じゃないけどね。敵の数が多い場合は、気流操作や水流操作を使う事になると思う」

「あー。なんとなく判ってきた。夏のアレね」

気流操作と言うのは文字通り、風を操作する魔法である。

こちらは言うまでもない風の魔法で、イメージ通り風の吹く方向を決められる。微妙なのが水流操作で、遅い速度でしか動かせないのが本来は微妙な魔法だ。

しかしこの二つの魔法を同時並行すると、びゅーっと水分を散布して夏場は涼しいのである。魔力の浪費なので傭兵としての仕事中には滅多にやらないが、拠点に戻ったりすると良くやった物である。

「夏場でアレやった時に、石鹼水を混ぜると泡がシャボンになって飛んでたでしょ？ つまり石鹼の成分は飛ばせるんだよ。後はそのエリアを保全して終わり。蜂の集団は徐々に動けなくなるよ」

昆虫に大量の水を掛けても水死しない理由は、脂である。

体にある脂で水の成分を排除するのだが、獣の毛皮にある油よりもその性質が強いのだ。そして水と油が交じり合わないという性質は、石鹼によって成立しなくなる。

よって石鹼水の成分をまき散らし、その空間が霧散化しないように保全すれば蜂を殲滅するフィールドの出来上がりであった。

(なんだか十絶陣みたいで格好良いな……問題はそこまで石鹼を用意できるかなんだけど)

さて、ここに至るまでの理論はご理解いただけただろうか？

真面目な話をする、理屈だからといって試しても無い方法に頼る気はない。だいたいが異世界な上に、成立するとしても大量の石鹼水が必要なのである。不経済なことこの上ない。

だからあくまでこの方法は凄まじい数の蜂が居たらの話であり、八が七割で空が三割みたいな絶望的な状況でしか試す気はなかった。

「とはいえ資源は惜しいし、石鹼水をばらまくと蜂蜜も採れないしね。滅茶滅茶居たら石鹼水を使うけど、基本は地道に探して倒すよ」

「それを聞いて安心したわ。シャボンは綺麗だけど無駄遣いは嫌いよ」

「はちみつ、大事ー」

ひとまず大量にいた場合の質問をされたので、その方法を口にしただけだ。

侯爵領ならば石鹼水の材料は簡単に手に入るとしても、資源を浪費する気はない。万が一環境汚染になってしまったら水棲生物にも顔向けできないだろう。

じゃあどうやって倒すのか、さっきの話は何の意味があったかと言うと……。

「重要なのは蜂は臭いで集まって来るって事かな。実は蜂って目が近くの速さに特化してるから、実は遠くが良く見えないんだよ。臭いを遮断して待ち構えるか、帰り道を遮断して倒そうかと思ってる」

僕は強い方じゃないし、ゲーマーとしても強くはなかった。

だから戦略系でもタワーディフェンスの方が好きだったし、『僕らの城を作ろう！』なんて考えも出てくるわけだ。

そして臭いに釣られる性質があるというならば、そのペースを制御できるという事だ。風の少ない日に臭いを遮断するか、海風の強い場所ならば洞窟なり建物に引き込めばいい。

「確認だけするけど、気流制御って吹てる風を弱くするのって来たっけ？」

「出来る訳ないでしょ。ぶつけて相殺っていうならそうでもないでしょうけど」

「なら地道に引き込むしかないね」

やはりここでも工業アルコールが無い事が残念だ。

酒ではないアルコールは臭い消しに使えるので、実は道に撒くだけでも蜂や蟻の侵入がされ難くなる。前世でも古い家屋で蟻が入ってきて困るといふ人は、逆行しながら除菌用アルコールを吹いていくと何とかなったという。

ともあれ今の段階ではどうしようもない。

剛盾に何か作ってもらおうとしても、石鹼水を噴霧する為の圧縮容器が精々だろう。もしかしたらドワーフの秘密で工業アルコールを生成できたりするかもしれないが、交換するような物は何も無いので無い物ねだりは止めておこう。

ちよつとした災難

● 緋雁原を目指す中で幾つか誤算があった。

前々からのアポイントメントでは無かったので面会が無視される可能性はあったが……、まさか手前で留め置かれるとは思わなかった。

これが重臣たちの行方嫌味ならば何とか回避する方法はあるのだが、長男である悌さまのご厚意とあつてはどうしようもできない。

「偉い方が下の者を迎えるとか大丈夫なんですか？」

「銀殿は既に南部の英雄だから問題ないでしょう。それに御当主様自らではありませんし、何かあつたら狩りの途中で偶々ここに出逢ったことにするまでの話です」

一連の開設に、悌さまの近侍である七司が説明に訪れていた。

スケジュール調整やら家内での言い訳とかの問題で、彼が先行して狩場の調査。悌さま派の何人かに声を掛けてこちらに来るらしい。

そこまでするなら無理に出迎えなくても良いとか、緋家の城へ着いた時に形式的に顔を合わせれば良いのと思う。

「実は悌さまの方でもゆつくり話し合いたいと仰せられておいでしてね。西回りの話も合わせて、早く行きたかろうということと緋家で滞在期間を延ばすよりはこちらで対面した方が早いだろうというのが主体です」

「あー。それはどうもご配慮をいただきましたまして……」

察したらしい七司が補足するが、何とも言い難い状況である。

通行と侯爵家に奉仕をする許可を取りに伺うのはこちらの都合なので、緋家にとっては『良きにはからえ』程度の案件である。授与式などの大事にさえしなれば、書類一枚でも済む話だ。

しかし元から大仰な話になって居た場合、予定よりも早く来てしまったことになる。準備が出来てないのでバタバタする上、僕の礼法がなっていないみたいなお話から始まって、面会スケジュールとかぶちこわしだろう。

「つまり、その。大仰な話になる前に、悌様に気を聞かせて頂いたのですね。申し訳ありません」

「……他にも問題はあったが、まあ概ねその通りでしょう」

「なんだか言い難そうな反応だったが、おおむね間違いはないらしい。」

幾つかある選択肢の中で、どれも一長一短な状況だった。そんな状況で悌さまが『あれ、これってオレが出向けば一発なんじゃね?』と思いついたのだろう。

そこに問題はあるが、今回の急な訪問で生じる幾つかの問題を同時に解決出来るのは確かだ。悌さま派は成功の累積による発言権の強化もあって推し進め、最も数が多いであろう中立派がどっち付かずの反応をしたために押し切られたらしい。

「しかし武門の人たちは反対しなかったんですか?」

「あの連中は銀殿の功績を認めてとつくに見方を変えていますよ。まあご老公方は若輩の為に動く必要なしと反対されておられますが。……しかし主体ではなく余録としての理由が、まさに武門の連中にあるのです」

「え?」

何かにつけて丁寧な七司の言葉が荒い。

どうみても反感と言うよりは、何か腹を立てる問題があつてプンスカしている状態だ。僕も見覚えのある態度だけに嫌な予感しかしなかった。

「というか最近ほっぽり出してた奴は今ごろどこにいるんだろうなあ?」

「武門の?」

「ええ。ヌシを倒す時に二広殿が独断で出向き、返り討ちに合つてしまいました。そのせいでご迷惑をかけ、あまつさえ功績を奪つてしまった格好。これを詫げる良い機会だと、……大通連殿が。話を聞いた悌さまもたいそう乗り気でおられます」

「あ、あ、あの馬鹿!? またか!」

僕も七司も同時に頭を抱えた。

無謀な攻撃で又シ周辺の場を荒らした豪傑は武門に所属していた。そして彼の出撃を周囲は功績であるかのように語り、僕に名誉が集中しないようにしてしまつたのだ。これを是正するために大通連は『活躍したつもり』なのだろう。

そういうのはお互いの間でやり取りして、こつそり『悪かつたな』と声を掛けるとか、僕の方に問題が出た時にフォローするだけで良かったのだ。それが表沙汰にしたら向こうにとっては不名誉だし、武門に所属するメンバーだつて良い気はしないだろう。何だつたら文官連中に嫌味を言われるまであつた。

「そういえば何でもたいそうな贈り物を用意されたとか？ 最初は紅家の三男坊にも声を掛けようとしたとか。ですが安心してください、みなで必死に止めましたので」

「……格別のご配慮、痛みります」

僕はこれ以上ないくらいに頭を下げた。

主家を家臣の客将に過ぎない男が動かすとか論外である。しかし今回は話を通せる筋道があり、やるべきことではないのにやつてしまふ行動力の持ち主が居た。

大通連は今回の問題を起こした二広という豪傑と兄弟弟子であり、同門には紅家の三男坊こと紅包も居るのだ。『ちよつくら行つてくる』とこちらに言えば、絶対に止めたであろう暴挙なのだが、あの馬鹿が思い立つたのであればやれてしまふ筋道が立つのだ。

「ともあれこうなつては仕方ありませんね。何処で落ち合ひしましょうか？ 適当な狩場でもあれば良いのですが……それとも魔物に潰された何処の荘園を解放に？」

「そこまでやつては配慮のし過ぎかと。ここは素直に狩場で良いでしょう」

悌さまがやってくる場所を整えようとしたが、やはりやり過ぎはダメらしい。

となるとその辺の森で獲物を狩つて、適当に調理してしまうのが良いだろうか？ まさかこんな展開になるとは思つていなかったので、調理器具なんてあんまりないのである。

となると最低限の調理と材料の調達で出来る何かを用意しておくのが良いだろう。

「紅梓さん。この辺にある樹の中で、香りのよい葉っぱとか探してくれますか？ できれば大きい目のを何枚か」

「んー？ そりゃ難しくはないけど……あ、アレね？」

「あれあれ！ 旅してた時以来だから、すっごい久しぶりだね」

簡単な調理器具で簡単に作れる物。

それでいて偉い人を持って成すのに相応しい料理と言うのは限られる。刃物と火があり、他には水やら木の実に雑穀というところか？

後はあればあるだけありがたいという事で、期待しないでおう。

「何をされるおつもりで？ 必要な範囲で協力しますが」

「簡単ですが手間のかかる料理を用意しようかと。できればお酒・蜂蜜・塩その他の調味料として使える何かをお願いします。無理をお願いできるならば、お酒の追加よりは卵を」

いわゆる乞食鶏である。

香りのよい葉っぱで包み、内臓の代わりに雑穀を入れて蒸し焼きにする。雑穀は移動時に食べる食料として十分にあるので、後は山鳥と葉っぱくらいだ。

七司に調味料を可能な範囲で頼んだ後、僕らは狩場となる森の中で一足先に山鳥を探すことにした。

「こーやって鳥を探すのも久しぶりだね」

「結構あるような気も……あー。そうだね。二人で探すのは本当に久しぶりだ」

子供のころは良く二人で山に入ったものだ。

指南車モドキの他に、色々な方法で保全能力やら結界の限界を確かめに行っていた。

それぞれの針に山鳥やキノコに木の実を指定して、短い期間で確実に用意できる僕らは町に行くときに重宝されたものである。

「鳥はともかく木の実とかあんまり採れないね。別れて探してく？」

木の実探しは得意だよ」

「止めとこう。無いよりマシってことで。それに双葉があんまり可愛

いからさ、悌さまとか二広さんだっけ？　そういう人が恋に落ちても困るし」

「もー！　こんな時にいうなー」

そんな馬鹿馬鹿しい事を言いながら、二人で集められるだけ集めた。

どうも森の幸が少ないのだが、難民が採りにでも来たのかもしれない。獣に合わない限りは知識さえあれば何とかなるし、最悪、サンプルと比較しながら探せるので難民の出身層次第では見つからない時もあるのだ。

そして指定した時間で落ち合うと、紅梓は僕らが狙ってない……エルフの領域ではメジャーな木の実とかを見つけてきてくれた。

「こんなもんかな？　七司さんが何か持って来てくれると信じて何羽かは置いておこう。無理だったら干しとけばいいしね」

「でも蜂蜜は何に使うわけ？　泥の窯に入れるのには使わなかったわよね？」

「おかし？　おかし？」

蜂蜜は簡単に言うと、鳥の照り煮に使う。

甘辛く煮つけ……というか焼きながら塗っていく。すると北京ダックモドキの味付けになり、パリつとするかはともかく思ったよりも上品な味付けになるだろう。

まあ主催は乞食鶏なので、外したらそれまで。もし蜂蜜が多ければ双葉が言う様にお菓子でも作っても良いかもしれない。

なお、七司が頑張ってくれたので、大判焼きや人形焼きも作る作ることができた。プチ宴会には十分だろう。

ご長男と中央の料理

● 何分、調理器具が少ないので大したものを作れない。

骨太な山鳥だと軟骨を潰しきれないし、ミンチにするのも一苦勞。仕方ないので乞食鶏と北京ダックモドキが静一杯だ。

後は菓子を用意し、大判焼きや人形焼きは甘く、ガレットは塩気を付けて南部せんべい風にした。

それらの準備が終わって暫く、伯爵家の長男悌さまと、護衛として豪傑の二広がやって来る。彼らと形式的な挨拶を交わすと、ゆっくり本題へと移る。

「すまぬな、こちらの手ばかりで」

「いえ、タイミング的にはこちらも助かった塩梅でした」

二広という豪傑が紹介され、一通りの問題を背負って頭を下げる。それに対してこちらは問題ないと返し、彼の下について見せてバランスを取る。結果的に部下の格下という具合になり、上座に座る人物の下風に立つことができた。

上座の人物は最初に挨拶を交わした後、このやり取りをジツと待っていた。特に喋れない訳でもつまらないという訳でもなく、こちらを観察しているという風である。

「銀双羽と申します。お初にお目に掛かり……」

「うむ。この度は色々と苦勞を掛けるな。だがそれ以上、畏まる必要もあるまい。何せここは狩場に過ぎぬ、偶然出会ってそれでは場が寒かろう」

挨拶し直す僕を悌さまが止めた。

既に形式に沿った挨拶は行われており、改めての様子見は不要と言う事なのだろう。

それに僕と二広の仲がこじれなかった事で、特に口出す必要がないというのもある。ならばここは宴会にしてサツサと場を流すことにしよう。

「では僭越ながら用意させていただきました。走り回って手伝ってい

ただいた方にはかたじけなく。また毒見が必要でしたら手前が食させていただきます」

「いえ。私は特に」

「毒見も不要だ。しかし説明は欲しいな」

七司たちに礼を言いつつ配膳を行う。

その中で悌さまが興味を示したのは、まったく同じ乞食鶏が二つ並んでいる様に見える事である。

まあ同じ調理なので同じ料理なのだが、片方には保全能力でちよつとした仕掛けを施したのだ。

「どちらも同じ料理ですが、小さい方は比較用で元の料理に近い物です。泥臭いですがご容赦ください」

乞食鶏は香りのよい葉っぱに包んだ後、泥に包んで埋める。

その上で焚火をしたり、別の料理をしながら蒸し上げる料理だ。当然ながら泥臭くなってしまふのである。

ちなみにこの料理は中央にはなく、エルフの領域やその近場に存在する。ドワーフの方には溶岩焼きや石焼き鍋があり、郷土料理になっているのが面白い。

「ほう……野趣に溢れた味かと思えば以外に上品な」

「こちらの方も同じ塩梅ですが、少し泥臭いですな。なるほど原典と洗練した味の差でありますか」

悌さまと二広が早速口を付けているが、悌さまは意外と喜んでい

る。スマートな都会派貴族と言う姿で、十年前はさぞや貴公子として鳴らしたといった風情だ。それなのにこの程度の料理を喜んでいるのは訳がある。

前にも言ったかもしれないがこの世界の、特に中央の料理はクツソまずいのだ。僕らが何時までも中央に居つかなかつた最大の理由だろう。

「この料理は素早く血抜きをした鳥を蒸すことで、余分な脂を抜く料理です。更に派生させると、小麦や塩などで釜を作ります」

「その辺りは別に良い。気の利いた蒸し料理なら都で幾らでもあつた

ゆえな。どうして上手いのかを説明して欲しい」

「では間接的に、教会批判になることをお許しく下さい」

マズイ理由の第一は、ぶっちゃけ教会のせいである。

なんでかというところ、魔族の影響が大きかったと言えるだろう。もし歴史に詳しい者であれば、イギリスの料理がマズクなったのと同じ理由だと言っても良い。

要するに、これでもかと思われ過ぎて素材の味がしないのだ。

「中央では大地に染み込んだ毒を抜くために、何度も煮込むことで毒と一緒に味を殺します。そう教会に徹底されているはず。これが格別に技巧に優れた筈の料理を味に乏しくさせた理由です」

何度も煮込み、場合によっては浄化処理を行う。

そんなことをすれば素材の味がしないのは当然だし、歯応えだって微妙になるだろう。そこで仕方なく、調味料をこれでもかと思ってしまう。

肉も野菜もクタクタに煮込まれ、ソースの味しかなかったりマズくて当たり前だろう。

「対して地方では魔族の毒はそれほど染みておりません。最低限の毒抜きで十分であり、素材の味を活かした料理が存在します。とはいえ、娯楽は中央より戻られた方ですので、可能な限りお口に合う様に工夫させていただきました」

此処で地方料理の説明をすると、二広が頷いている。

この男は筋肉質で刈り上げという、体育教師が武将になったような姿をしている。ハッキリ言って厳しくて怖い、まあ郷土愛溢れる人間なのだろう。

地方にも褒めるところがあると娯楽に伝えれば、ウンウンと素直に頷いていた。

「続いて次の料理ですが、これは丸焼きにした後で皮を削いで食べる物です。お手元に雑穀で作った布がありますので、包んでご賞味ください。肉の方は酒のツマミなり、従者の方に下げ渡されても良いかと」

「なんと！丸の鳥を皮だけと？」

「ハハハ。二広よ、それでは中央務めは出来ぬぞ」

今度は逆に驚いている。まあ贅沢な料理だから仕方ないよね。

この世界にも北京ダックモドキはあるので、純粹に味のある鳥の皮を食べる事になる。ちなみに中央で食べると干した後でポーポー焼くので、まずくはないが上手くも無いのだ。

そしてこの二品を出したことで、悌さまにも僕の意図が伝わっただろう。

「なるほどな。決して中央が悪い訳でも、地方が悪い訳でもない。そう言いたいのだな？」

「はっ。教会の方も悪気はないのでしょうか、魔物に苦しめられた期間が長いせいかと」

何度も口にしたことがあるが、悌さまは人質暮らしが長かった。

お陰で料理に関する好みの問題とか、中央と地方の差に色々と思いがあはずだ。しかし主に悪いのは魔物であり、その影響を受けまくった教会なのだと説明しておく。

……正確には悌さまに伝えるのではなく、忠言するフリして二広に悌さまの立場を摺り込んでいるのだ。まあ今更ながら、伯爵家の長男ともあるうものが気が付かない訳はないし、むしろこだわっているのは地元民の方だろう。

「その言葉覚えておこう。だが妹の麗も幸せ者だ、これほどの料理は中央でも中々食せぬ」

「はっ、ありがたき……」

形式通りに答えながら、僕は少し違和感を覚えた。

何か大切な事を見落としているような気がする。いや、以前はもつとアヤフヤであったはずだ。

結婚自体は固定で逃げられないと言われていたので、定まって居ない別の用件が決まっている事になる。

「もしや、自分と麗さまの婚約が決まりましたので？」

「そうだ。どちらか好きな方……と私的には言うつもりだったがな……フフフ。許せ。なあ、二広よ。双羽は麗に相応しかろう」

「ははっ……」

決まったのは姉の麗に相手が固定されたという事らしい。

義姉さん女房で伯爵家の娘だから頭が上がらないのは、今更なので特にいうまい。

だがおかしいことは、二広が奇妙に固まった事である。まるで突かれたくない事を探られて、痛い腹を抱えて唸っているような姿であった。

「ハハハ。そう硬くなるな。お主と私は兄弟になるのだからな？　そなたからもいう事があるろう？」

「……ははあ。銀殿、いや双葉殿。お主を義兄としてこれから仰ぎ、色々教えを請いたく……」

「え？　まさか……」

「そのままかです」

その場に居る者はみんな笑顔ではあつた。

しかし本当の意味で笑っているのは悌さまだけで、二広は顔を赤らめているのか青ざめているのか分からない。七司に至っては畏まって動こうとしない。

いや、まあ意味は分かるんだ。

姉君が僕とくつつき、妹君が二広とくつつく。まあ義兄弟になるという意味で、悌さま・僕・二広という順番になるから長兄としては笑いが止まるまい。

「これには説明が必要だろうが、他の者では答えるに答えられまい。ゆえに私が説明するがな、下の妹は自分を救いに来た二広に恋をしたのだよ。負うた背になあ……くく」

「悌さま……それ以上は……」

蔵ついおっさんが赤面する姿は微妙である。

貴公子然とした悌さまは、なるほど良くありそうな光景で笑いをこらえているだけだ。笑い事ではないが僕としては苦笑する他はなかった。

「ともあれ選んで良いと言っておいて、勝手に推し進めたのは済まぬとは思ふ。しかし私も妹の恋くらいは、できるならば叶えてやりたいのだ。判つてくれるな？」

「お氣になさらず。元より決まったという程でもありませんでしたし」

あまり恐縮すると妹君を馬鹿にすることになるので出来ない。

仕方ないので知らなかったし、決まって居なかつたので問題ないという風に返した。

しかし悌さまとしてはまさに笑顔が止まらない。妹のどつちかを僕につけて英雄を取り込むと決めた物の、もう一人はどう動くか分からなかつたので彼としては良い結果に転がったのであろう。

「幾分か右か左に流れる内容ではあつた。だが私としてはこの件は天運と思うておる。爽は外に行くのを怖がつておつたし、麗は中央暮らしが長かつた。双羽の所ほどにこの辺りで口に合う料理を出せる場所はあるまいよ」

「そうですね。今となつては、麗さまのご不満も理解できます」

「さようですか……食以外にも努力させていただきますね」

そういえば姉の方は中央と一緒に人質……。

ではなく留学していたのだと思つて居そうだなあ。この様子だとどんな我儘が飛び出してくるか分からない。

全体はともかく一部の技術だけは中央以上にして、度肝を抜くようにした方が無難だろうか？　そういう意味でも中途半端は駄目だと忠告してくれた神様には感謝しなかつた。

「さて、時間も惜しかろうゆえに、残りの用件も片付けておこう。行き帰りの通行を許可するのは勿論の事、西への援軍にはこの二広も付ける」

「良いのですか？　まだ完全に収まつたと聞いてはおりませぬが」

「侯爵家にも借りがある。それを返しておけとの大殿の仰せなのだ」

要するに妹婿二人を侯爵家でデビューさせようという事らしい。

自分の勢力が固まつたと喧伝しつつ、形式上は侯爵家の安泰を手助けする。そこにどれだけの価値があるかはともかくとして、悌さまにとっては丁度良い宣伝ということなのだろう。

ともあれ交通の許可が無事に降りたと喜んでおくべきなのかもしれない。

未来の義兄弟と行く

● 二広を加えた僕らの一行は侯爵領を目指す。

獣に出くわすことはあったものの、街道沿いに入ってからには特に何も無かった。途中の村に滞在すれば別だったのだろうが、魔物狩りに参加する代わりに食料を浪費させては返って迷惑だろうと寄らなかつたのもあるだろう。

そして二広と話す機会があつたことで、色々な事が理解できたのは行幸だった。

「お師匠さんは人材コレクターだったのですか？」

「身も蓋もない事を言うとそうだな」

三人の豪傑を育てた師は、彼らの能力を聞いてから育てたらしい。他の地域でどこぞの流派の高弟なども居たが、熱心さにおいて及ばなかつたらしい。あるいは『普通』の弟子を鍛える事にはもう興味がないとか、『時間』が無かつたのかもしれないが。

最終的に死ぬまで南領に留まり、三人をそれぞれの方向に育ててから逝去したそうだ。

「あの馬鹿には大通連をほか様々な武具を、紅包さまには愛用の槍と無双の技を。そして私にはこの護符の造り方や、身代り人形を授けて下された。むろん基礎的な武芸もだが」

懐かしそうに語るがきつと厳しい人であつたと思われる。

どうみても野蛮人な大通連に最低限の教養と見識を身に付けさせたのは凄いと思う。できればブレーキが掛からずに走り続けるのあの性格を何とかして欲しいと思う。

しかし少しだけ気になることがあつた。僕だつたら護符よりも先に与える物があつたからだ。

「その、全ての武具をあの馬鹿に渡されたのですか？ 魔法の防具なりありそうなものですが。それに……うちの莊園で最新の甲冑が作れるようになりましたので、よろしければ素材だけで……」

「そこまで。事情がある故な」

二広は苦笑して僕の言葉を遮った。

全ては聞かずに止めたのは、師が彼に武具を渡さなかった理由と一致するのだろうか。聞けばこの男は生命力と魔力……要するにHPとMPが上がり易い加護を持っており、そうなれば良い甲冑を与えない理由はない。間違いなく僕だったらそうする。

おそらくは何かの心象的な地雷が埋まっており、僕が踏み抜く前に止めたらしい。

「この鎧は先祖伝来、遡れば緋家の尖槍として任ぜられた初代より続く物だ。拝領した剣もまた然り。初代ではないが中興の祖と言われたお方が都の武芸大会で優勝し、時の帝から授かったものである」

甲冑も剣もこの時代ですら旧式で、僕が剛盾と作った装備には及ばない。

しかしそれより重要な意味合いが、そこにはあったという事のようにだ。さすがにそんな立派な伝来品とは思わず赤面するばかりである。

そして押しつけがましく恩を売ろうとしたら、喧嘩になったことも伺える。だから途中で止めさせたのだろう。

「おいそれと替えの効かない品なのですね、失礼いたしました」

「うむ。双羽殿は厚意で申し出ようとしたのであろう？　だが余人には伺えぬモノも色々あると心得られよ。言葉次第では家同士の争いになるがゆえ。とはいえ、説教する程に私も『今』を知らないではないからな」

二広は双葉にチラリと目を向け、僕らが故郷を出てきた時の事を伺わせた。

もし忠誠の証に双葉を差し出せ、代わりに妹のほか領地をやるうとか言われても困る。前世を無くし生まれ変わってからずっと過ごした……比べようがない替えの効かない存在だからだ。しかし知らぬこととはいえ我ながら迂闊であり、そういう流れが存在することを公式ではない状態で聞いたのはありがたかった。

今回は恥をかく前に止められただけで済むが……。もし公式の場で同じことをやったら大変な事になるだろう。片や先祖伝来の品と功績を馬鹿にされ、片や努力で作り上げた成果を無用の長物と罵られ

ることになるのだ。そして周囲もソレを止めるどころか煽ることになるだろう。

「あ……では紅包殿に贈るのは問題でしたか？」

「公式には紅家へであろう？ それに紅包さまは三男ゆえに問題ない。私も弟妹に戦える者が居るとか……しよ、将来に子供が長じれば新しい鎧を誂えようと思わないでもない。その時であれば頼もうかと思う」

「ええ、その時は是非。ただお代はいただきますのでヘソクリにはご注意ください」

「こやつ、言いおるわ」

そんな感じの他愛のないやりとりでお互いの距離感を測っておく。

譜代と新参で急に打ち解けるといいうのは無理があるが、少なくとも共通の探して話し合う事に意味はある。食事時期には料理の話題を、自然を見ては郷土の話で適当に相槌を打ち合った。

そして当然のことながら、侯爵領に身を移してはその後の対応に話題が移っていく。

「それで、双羽殿はどのような方針を立てるつもりだ？ 此度の私は与力ゆえ、気にせずと言ってくれ」

「そうですね。方針としては侯爵家にご挨拶してから南下する予定ですので……」

どこまで頼って良いものか分からないが……。

作戦案を聞いて、妥当だったら従ってくれる程度に考えておく。もちろん妥当であってもコキ使うとへそを曲げて無視する可能性もあるのだが。

これまでに決めた基本案と、侯爵家で起き得る問題を勘案して振り分ける事にした。

「本来の目的は侯爵領の南西で爆発的増殖しそうなジャイアントビーを何とかする事です。既に一部が狂暴化して、キラービー化しているとか」

「なるほど。増える前に駆除してしまおうということか」

「その通りです。作戦案そのものは既に立てていました」

まずは状況を説明しつつ、作戰案があつたと過去形で語る。

到着までに情勢が変わることもあるが、何より伯爵家や侯爵家の対応で変わるからだ。

蔵に二広加わること、戦力が増えたともそれぞれの家の動向を伺わざるを得なくなったとも言える。

「それからの大きな変更としては、口にするまでもありませんが二広殿が加わったことで対外的な対応が生じる事です。おそれくは悌さまもこれからは武将としてではなく……」

「御使者に私が、か。あまり性分には合わぬがそうも言っておられないな」

「お互い色々とありますが、何とかいたしましょう」

紅家にも知れ渡る二広が来たことで話が変わる。

これまでは伯爵家の末端であり、目を掛けられる程度の才がある者が御用伺いに来たという程度だった。魔物が出るならば『良きにはからえ』という風情で適当に出立できたはずだ。

しかし二広の加入でこの一行は正式でこそないものの、寄り子である緋家が寄り親に足して派遣したあいさつ回りに変わってしまうのだ。何といつても妹君二人を介する形で義弟を派遣したという事になり、悌さまにとっては外交の第一歩となるだろう。

「どのような意向があるのか尋ねられるでしょうし、ここは悌さまよりの紹介という事になるのは間違いがありません。その上で歓待があったり、逆に要請もあるでしょう。普段ならばそれも経験と割り切れれば良いのですが……」

「増殖間近か……であつたか」

「はい。長らく放置すれば、そもそも何のために来たのかと言う事になりかねないでしょう」

悌さまの派閥が固まり、その顔見世に義弟を派遣する。

侯爵家からみれば寄り子の縁者が顔を出し、頭を下げに来るのだから放っておく必要もない。準公式として所属する武将や文官たちに紹介しつつ、せっかくだから……と宴会なり、あるいは領内で困っている魔物の件を相談されることになるはずだ。

まあ実際に出現したらしくて、後に頭を抱える事になるんだけどね。

「悌さまが『次期殿』と呼ばれ始めたことをお伝えして、正式なご挨拶に際して何が必要かを確認。そのまま数日過ぐして……という通り一辺倒にならなかつた場合はお願いします」

「その時は仕方が無いな」

此処での会話は順番が重要だ。

先に時間制限がある事、そして作戦は立てている事を説明しておかねばならない。やるべきことがきまつていて、筋道の問題で二人のどちらが何をやるか、判り切つた状況ならば文句は出ないからだ。

しかしフリーハンドに白紙化した状態で伝えた場合、自分に面倒を押し付けるのかとなりかねなかつた。

「だが最初だけでも頼むぞ」

「はい。また、それとは別に……もし二広殿を頼つて魔物の件を持ち込まれましたら、その特徴を聞いておいてください。魔物は特徴が判れば言う程に難しくはありませんから」

「判つておる」

真面目な話、僕も二広も外交経験などはない。

莊園主になる前後でも青悟に頼つており、今だつて本当は頼りたいくらいだ。しかし神様の教えを広めたいこともあり、あまり既存の宗教に頼りたくはなかつた。まあ既に借りた分の借りはいづれ返すつもりではあるし。お互い様と言えるまで持つていければ良いだろう。

そしてここで二人同時に苦勞することに意味はあるし、二広が上司で僕が部下と言う訳ではない以上、頑張つて乗り越えて一体感でも高めておくしかないのだ。

この後は鎧を完成させた剛盾と合流し、侯爵家の御料地である紅来川入りするところまでは特に語るところはなかつた。

紅来川の街にて

● 侯爵家の御料地である紅来川。

その地に入って感じた事は『未来』である。街道にの一角に位置し、港町とも連なるその土地には活気ある風情が見て取れた。

何より一目で領地のあらましが判るといふ事が、その発展性を如実に表している。

「侯爵家の御料地とあれば当然と思いますが流石ですね。これからドンドン発展していきそうです」

「判るか？」

「ええ」

二広が同行した今回の度に関しては色々あったが……。

僕が貴族の……と言うか武家の価値観を理解するには役立つ。民衆にとつて良く分らない事を貴び、良く分らないことに目くじらを立てる。前世の知識故にある程度は判るが、知識と経験は違うものだ。

彼の同行を押し付けられたことや増えた用事は迷惑だったが、得られた経験には感謝しておくでしょう。

「通常、領地の構成は防衛を念頭に置かれます。平地だからと言って……いえ、平地だからこそ普通ならば目につく物です。しかしこの町並みは利便性を重視した造りになって居ます」

「そうだ。侯爵家は、紅家はこの百年以上に渡って脅威と言うほどの害にさらされたことがない」

「だから街道が直線的なのです」

車の時速と、距離・道のりという言葉で説明すると判り易い。

時速100kmで動く車があったとして、町中で100km向こうに1時間で着けるなんてことはまずない。道は曲がりくねっており、実際には100kmどころでは無いからだ。

こういった距離と道のりに関しては小学校で習ったと思うが、高校の授業でも出てこない領域として、領地防衛問題が出てくる。普通の

城下町は真っ直ぐにお城へ向かえない様になって居ると言ってもよい。そういう無駄のない土地がどれほど好条件か判るだろう。

(この地形には敵を誘導する為の構成が無い。流石に旧市街は別なんでしょうけど、全体が京都みたいなの町割りになってる。というか防衛施設もないだけでも羨ましい)

縦横を直線的な道で構成し、移動の利便性が優れていた。

もしこの町で移動に時間が掛かるとしたら、通行客や商売上の荷物が山となっている場合だろうか？

もつとも現在は中央からの交易がアンデッド問題で途絶え気味と言う事もあり、南領の中での交易が主体だ。港での荷揚げは直接かわらないとしたら、それほど混雑することは暫くないだろう。

「双羽殿ならばどう對抗する？ 無論、戦いと言う意味ではないぞ」

「對抗しない事が對抗策ですね。侯爵家で生産しない物を売り込む方が早そうです。もちろん防衛戦力も商品と言えるでしょう」

「ほうっ。」

平地にあつて防衛施設の不要な町と、馬鹿正直に経済戦など出来ない。

僕の領地だと平地など雀の涙の山間部であり、生産物の量で戦えば間違いなく敗北する。というか勝負にもならないだろう。この周辺の農家はただひたすら生産すれば良く、売り込み先も南領ではれば問題なく売り捌ける。港町から西領なり、春から夏ならば北領の凍結港に持って行っても良いだろう。

前世で言うと東京から神奈川、あるいは熊本から長崎に近い地形なのに、周囲に敵がいけないという好立地である。早期に縁深い身内や義理堅い同盟者で周囲を固めた、侯爵家の先祖が持つ手腕が伺える。

「防衛戦力が商品と言う意味は分かる。現に中央からの流入を防ぐのは我らが緋家であるからな。では他に何を売り込むのだ？」

「小麦などは中央で好みのある作物に絞るか、いつそ金を使わない為だと割り切ります。その上で油を絞るための豆や、衣服の為の綿花でしようか？ もっと平和に成れば花などの嗜好品も良いでしょうけど」

侯爵領が平和なのは、四方を縁深い貴族や同盟者が固めているからだ。

東は幾つかの小貴族を挟んで同盟者であり縁戚のある伯爵家がガードしており、中央から流入するアンデッドなどの魔物をシャットアウトしている。南北も同様の諸侯が固めており、縁戚関係もあつて陸地では安泰なのだ。

では西にある港町周辺はどうかと言うと、半島の中にある入江なので守り易いのだ。山伝いで侵入できる西領に至っては、中央とどこいどっこいの規模で魔物が暴れまわっており青色吐息である。水棲種族や周辺豪族と共に海の魔物を退けてからは、港町の防衛さえしっかりやって居れば何の問題も無かった。

「しかし豆や綿花も平地の多いこちらには叶わぬと思うが？」

「そこは考え方次第です。緋家に所属する荘園群・貴族領では農地の多くが荒らされ、農家にも被害者が出ました。大きな区割りにし集団で効率的に経営させれば、難民たちでも作業ができます。……もちろん伝統ある農家に立ち退けとは申しませんが」

僕の荘園だと、新しく増えた北のエリアではそうしている。

まあ住民が居ないから、手が足りないのでそうせざるを得ないというのも大きな理由なのだが。しかし区割りを大きくして、全員で耕せばアツという間に作業ができるのも確かなのだ。

そうするうちに元の荘園に居た農家の中にも、その利便性を羨ましがって土地の統合や交換を申し出て来た者もいた。こちらも働き手が減ったことで、効率化を求める声が大きかったのもあるだろうが。

「農地の統合だと？」

「畑の一面毎に細々とした作付けをして、それぞれ管理するのは大変みたいですね。ですが集団で一斉に開墾し、交代で管理すれば難しくありませんし、未経験者でも誰かに相談できますから。ただ苦勞して入植した思い出のある者には、配慮が必要だと思えます」

僕がやった事を解説しながら説明すると驚いたようだ。

まあ集団農業などこの時代は存在しないか、奴隷を使った大規模農家くらいだろう。奴隷は厳しく扱っても甘やかしても効率が落ちる

ので、買えたとしても扱いたくはないものだ。

そして伝統ある農家が文句をいうのは前世と同じであり、その辺は武家が領地替えを嫌がるのと同じ理屈なので、ちゃんと配慮しているとオブラートに包んでおいた。

「緋家の方々ですな？　主人がお待ちしております」

「(一)丁寧」

やがて城のある旧市街地に着くと、来客を出迎える役人が現れた。

寄り親の郎党であるがゆえに、こちらも遠慮して馬車を降りる。本来であれば城付近までは馬車で乗り入っても良いはずだが、礼法上の問題があっても困る。それに悌さまとの話し合いではないが、別館なり大きな商家を借り切って内々の話という線も無きにしも非ずだ。

だがその折に、僕の馬車に使っているガラスの窓に目を向けて居たのを見つけた。透明度のガラス自体は高炉を設置すれば行けるが、この時代ではまだガラス窓なんか付けないからね。少しだけ気分が良かった。

「不躰な往来へのお詫びに御家へ贈り物を用意したのですが、お引渡しをいたしましたでしょうか？」

「念のために拝見させていただきますが、それには及びません。後程、正式な物が預かることになるかと」

せつかくなので念の為に見分をしてもらっておく。

こんな所で偽家臣や持ち逃げする横領犯など居る筈もないが、逆にこちらが妙な物を持ち込んで居ないというのは確認してもらおう必要がある。ここで確認してもらえば、後の見分は短い物になるだろう。

ガラス製の長櫃に紅の布を被せた初見。

布を取り外せば最新式の甲冑が現れるのだ。武芸に興味のない役人でも、これは驚くだろう。

「……総鋼造りの甲冑でありますか？」

「いえ、部分的に別の素材を使って動きを確保しております。必要でしたら製作者に説明をお願いしますが」

「その必要はありませんとも。失礼をいたしました」

この甲冑の本質は実用的な軽装鎧と、オマケに分かれるのがメイン

だ。

しかし全体構造自体に特異性がない訳でもない。まず鋼は高炉がないと作れないので、おいそれと出回る物でもない。普通ならば見分ける事から苦勞するが、役人なのに理解できる辺り、侯爵領では機会がない訳でもないのだろう。

そして全身の形状にも流線形にして外観と防御力を上昇させ、鱗状部分・鎖部分と使い分けることで可動域を保っている。全体的には西洋鎧なのだが、シヨルダーアーマーとスカートアーマーは和風鎧をイメージしているので異質さも伺えるはずだった。兜なんか鮭をイメージしてるしね。

（昔はこういう装備を自前で揃えて戦うとか憧れたなあ。……どう考えても僕の体力じゃ無理って判っちゃったけど。もし将来に付与魔術師を呼べたら、軽量化の魔法でもかけてもらおうかな）

役人の見る目が変わったが、おそらく田舎者から扱いがランクUPしたのでだろう。

まあ冒険者あがりの荘園主の扱いなんてそんなものだ。陳情に来た名主とか商人たちと比べてどっちがマシか分からないものである。

しかしこれからは一段くらは扱いが良くなるだろう。

緋家の縁者になる事でも同じ扱いになるだろうが、それでも自分が調達した産物によって扱いが変わるといふのは気分が良い。

その後は登城して面会となったのだが、ちよつとしたアクセシブントというか笑い話があった。侯爵さんが描いた一幕なので、茶目つ気というべきだろうか。

「大層な鎧をいただいたそうだな。まずは礼を言っておこう」

「いえ。御家ならば鋼の鎧などその気になれば誂える事など造作もない事。増長をいたしました」

最初は互いに譲り合う、良くある光景だった。

仲の良い家からの進物を受け取るのは当然だし、そこにイチャモンを付けることはない。そして紅家ほどの裕福な家が、高炉さえあれば生産できる鋼の装備を揃えられるのも当然だ。面倒だし平和だから不要なので、生産体制を用意してないだけである。

お互いに譲り合いはするが、侯爵家の方が遙かに上だと主張してこの話は終わるはずだった。だがしかし……。

「だが足りぬな」

「え？ ……いえ、失礼いたしました。ご無礼を承知で申し上げますが。何を用意すれば……」

「はっはっは。こやつ忘れておるな？」

ニヤリと笑って侯爵さんは冗談であることを示しつつ続けた。

驚くこちらや、目録を探そうとする文官を制して思うがままに立ち上がる。

そして僕らと言うよりは家臣たちの方を向いて話しかけたのだ。

「確かその方、毎日風呂に入っておるそうではないか。それどころか民たちを労役させた日には楽しませているとか。その設計図を持つてくると言っておらなんだかな？」

「し、失礼しました。どこぞの別邸の設置する大きさが判れば早急に提出させていただきます」

確かにそう話したが、まさか覚えているとは思わなかった。

それどころか本気に行っているとも思っても居ない。以前に逢った時は青悟の仲介で顔売りに行った程度だったが、ちよつと開明的な事を口にしたつもりだったのだ。

というか侯爵さんの城にしても別荘にしても風呂など幾らでもあるし、命令すれば毎日入ることは可能だろう。鋼の鎧と同じで、その必要がないからやって居ないに過ぎない。

面白い風呂が必要ならば、用意しますよとだけ伝えつつ、僕はどうしてこうなったかを考え始める。

（というか間違はなく青悟のせいだね。大通連と話し込むとは思えないし、そもそもあいつ風呂好きでもないし。それを考えたら青悟しか居ない）

いちいち覚えているとも思えないし、調べる筈もない。

ソレを考えたらうちの莊園に来ている奴が話したとしか思えないのだ。そして侯爵さんに面会できたコネは青悟の物だったので、他に候補は考えられなかった。

そこまでは何とか考え付いたものの、どういいう意図があつてこんな
ジョークを交えたのかが、この時は想像もしなかつたのである。

ともあれ謁見は終わり、僕らは当初の予定通りに行動することになつた。

紅包の来訪

● 多忙な侯爵さんは直ぐに離席したが、そのまま持て成しを受けた。非公式な事もあり料理などは客室に用意されたので、特に宴会などはない。

紅梓などは初日を終わると飽きたらしく、一足先に水棲種族の元へ向かった。調度品に興味のある剛盾はともかく、僕と二広の方は仕方なく答札を受けているという塩梅である。

「侯爵さまがあんなことを言い出した理由の半分くらいは、彼らへの当てつけなんだろうね」

「私も退屈。紅梓と一緒に行けばよかった」

双葉も飽き飽きしている様子で、椅子に座ったまま足をプランプランさせている。

ちなみに妾扱いだから自由行動し易いが、正妻だったら自室に籠って居ろと言わんばかりのスケジュール構成だったはずだ。少なくとも僕の方は色々と勝手に予定を組まれてヘキエキしている。

その中でも感じたのは年の近い若者の文官武官は熱心に話を聞いてくれるが、年嵩の役人などは通り一辺倒にしか話して行かない。侯爵さんが風呂をネタに使ったので、一応は話を聞きに来た程度だろう。

「でもどうせ案内されるなら、大聖堂よりは図書館の方が良かったのにな」

「ガハハ。ワシにとってはどっちでも良かったがの。まあもう数日の辛抱じゃろ」

珍しい物を持って来たものに、対抗心で領地自慢をするのは判る。しかしステンドグラスを用いた大聖堂なんて、神職である僕にとっては罰ゲームだ。青悟でもいれば話は別なのだが、海と交易の神様の神殿だったので特に惹かれはしなかった。

この数日というのがどれ程のロスタイムなのか、まるで分からないのが痛い。ジャイアントビーの増殖もだが、後になって相談される魔

物と言うのが人に化ける虎、いわゆる『人狼モノ』というのだから猶更だ。この時に知っていても大して変化はなかったろうが、部屋に缶詰になっていて間に何か対策が考えられたはずである。まあ彼らにもプライドがあるから仕方ないんだけどね。

「挨拶するのが遅くなつてすまないね」

「いいえ押しかけたのはこちらですし、贈り物としか申しませんでしたので」

予定も終わりごろになつて三男坊の紅包と出逢つた。

本当はそのまま立ち去るはずだったが、その時になつてようやく鎧の話を知つた彼が面談を求めて来たという訳だ。

それならまた次の機会にすれば良いのにと思わなくもないが、役人たちが牽制したいという侯爵さんの事情もあるのだろう……と思つていたので、実は違つたらしい。

「実はバーレイに街で出逢つてね。私宛の鎧を誂えてもらったそうので申し訳ないのはこちらだよ」

「……いえいえ。急な通行でしたので、何かしらの礼物が必要だったのは確か。お役に立てれば幸いです」

最初は誰？ とか持っていたのだがようやく思い出した。

魔法の武器から異名を取つて『大通連』と呼ばれているが、彼は確かにそんな名前だった。この国風の名前では無いし、本人も親や祖父から同じ名前を受け継ぐそうで、あまり気にしてないらしい。

しかしすつかり通名化している大通連ではなく、律儀に本名で呼ぶ辺りにこの人の性格が伺えて取れる。ちなみにウルフヘアーをした生意気盛りの青年と言つた風情で、律義さとはかけ離れた容貌をしていたのだ。

（この人……バッキバッキにプライドへし折られたんだろうなあ。領主の息子で神の加護が強力だから、武芸も魔法も面白いように伸びる。おまけに顔も良いから増長するだろうし……そういう人は一度分からせるに限るからね）

紅包が現時点で青年と言う事は、指示したのは子供の頃だろう。

その頃から周囲の武官よりも遥かに強く、ガキ大将どころでは才能

が有ったと思われる。大通連や二広も兄弟弟子になったばかりのころは苦戦したそうで、必死になって修練して競い合ったという。

逆に言えば天狗になった所に突如現れた自分よりも強いお師匠さんと、同じくらいに才能を持つ兄弟弟子たち。そんなモノを見せつけられたら、過去の事が黒歴史になる事は間違いないだろう。

「ところでバーレイの話では貴公ならば私の悩みも解決してくれるという事だったが、どうなのだろう?」

「その『悩み』を知りませんのでなんとも言えませんが……」

まったくあいつは余計な事しかないな……。

おそらく本人は出禁を解除するだけの良い事をしたつもりなのだろう。しかし現時点で確実に足しか引つ張って居ない。

とはいえ目の前の相談事を放置できないし、放っておいてもいつかされる話だとしたら今解決してしまう方が良いのは確かである。

「話を聞く限り紅包さまは万夫不当。それが知られて居るがゆえに戦った時に守りに徹されて困ると言う事でしょうか?」

「まさしく」

この男……平然と頷きやがった。

一騎当千には違いないと思うが、お世辞で万夫不当と格上げしたのに頷いたぞ? いや、プライドがへし折れてもこういう所は曲がってないというべきなのかな。

しかし他人の話を素直に聞けるとかは良い面だとは思う。強くなるためにここまで平然とやれるならば、例え曲がった性根であっても一周回って格好良いかもしれない。

「武芸に関しては通り一辺倒の事しか申せません。槍は円運動で、戦場にて機先を制す尖槍だとか、突きと払いの基礎こそが重要……などとは、万言ほど聞かされているのではないかと思えます」

「その通り。いや、バーレイが言った通りですね。私の事をよくご存じだ」

前世でこの手の知識は色々な話で読んだものである。

軍師の神様である九天玄女さまのお陰で、生前の知識はおおむね保たれている。欠けているのではなく思い出すキツカケがないだけな

ので、理由さえあれば口にすることはできるのだ。

さて、この紅包という男の悩みは高機動系キャラに共通する悩みである。長大なリーチと速度を持っているが、相手に防御されたら火力が足りない。同じ兄弟弟子の中でも持久戦型の二広とは最悪の相性である筈だ。

「自分が思いつく範囲の方法は三つ。一つは解決方法ではありませんので、残りの二つを説明いたしましょう」

「ああ、なるほど。無視には無視ですか」

一つ目の解決方法は防御に徹する相手など無視することである。

極論を言うと戦場では武将を無視して兵士に無双しても良いし、そもそも大将を討ち取りに行っても良いのである。そして彼は魔法も使えるのだから、防御に徹するなら攻撃魔法で完封するのも手だろう。

だがそれは彼の悩みを解決しないので、紙片を持ち出して簡単に説明する。

「二つ目の方法は道場の発展形です。必殺の一撃は必ず防がれることを前提に、連技を組み立てます。この流れに持ち込めば確実に決められる。そんな連技が一つあればよろしいでしょう。同じ相手と戦う事はあまりありませんから、初見殺しでも構いません」

紙片にはワンワードだけを載せて並べていく。

まずは『突く』の一枚、次に『払って』から『突く』の二枚、その次は『払って』『抑えて』『突く』の三枚だ。そして『守り』『払って』『突く』と言った風情の派生形をその隣に並べる。

要するにコンボ技でガードをこじ開け、ダメならガードキャンセルから崩し技を入れてから攻撃しても良い。クリーンヒットさせられないのが問題なのだから、手を尽くしてクリーンヒットさせるまでである。

「ほう……お師匠さまと同じことを言うな。これは三つ目にも期待できそうだ」

まあそうだろうね。初見殺しの技一つあれば戦場では十分。

戦場や決闘ならば殺してしまえば済むし、そもそも武道大会ならば

防御に徹するキャラはポイント負けするものだ。

さて、ここまで来て納得してもらえないどころか、むしろ期待されているようで困り物である。ここはむしろゲーム知識を流用すべきだろう。

「それほどでもありませんよ。最後の一つは正面からのゴリ押しですから。武芸としては邪道、戦人としては王道の流れに持ち込みます」「むっ?。」

紙片に今度は『回避』『受け流し』『防御』の三つを書いていく。

見ての通り攻撃を受けたら行う行動三つである。まずその内の回避を遠ざけ、次に受け流しを中間に持つて来る。そして紅包の前に残すのは防御の一枚切りだ。

そして防御と書いた紙の前に、白紙の紙片を三枚置いた。

「紅包さまが連技に持ち込めばまず競り合いで勝てます。つまりどうにもならないのは盾か何かで素直に防御された場合のみです」

「まあできなくはないな」

ツツコミどころは沢山あるが、この際は置いておこう。

状況を絞ると相手にガードされてしまうというのが問題なのだ。ではどうするか? 普通にガードブレイクしてしまえば良いだけのことだ。小難しく相手のガードを掻い潜り、急所に一刺しだなんて格好良い事を考えるから勝ちきれないのである。

だからやるべきことは単純、ガチムチタンク相手にクラッシュヤーがやってるような猛攻を仕掛ければ良いのである。できればその技に隙がなければ理想的だろう。

「ですから単純に大技で押し切ります。ただし実力が拮抗する相手にそんなことをすれば危険なので、その技を出したら勝つというのが大前提。とはいえ腕前が急に上がるはずはありませんから……他で補う事にします」

紙片に書いた『防御』の手前に『大技』と書いておく。

その紙片の隣に残り二枚を設定。そこには『装備』『魔法』と順次記載していく。

ゲームで強い相手に勝ちたいならばどうすべきか?

そんなことは決まって居る。自分のレベルを上げるのでなければ、装備を更新し、バフをモリモリ掛けて勝てるようにするのだ。同レベルの相手に勝てる様に成ればレベル上げも簡単になるしね。

「相手の防御の上から攻撃可能ならば技は何でも構いません。大上段から叩いても、首なり腹を薙いでも、極論を言えば槍を蹴り飛ばして急加速させても良い。ですがそれでは精々が打ち身でしょう。そこで防御してはならないほどに魔法の道具や付与魔法で威力を底上げします」

装備と搔いた文字の隣に、腕力上昇や脚力上昇という紙を追加する。

これで叩き降ろすスマッシュなり走り込むチャージの強化が測れるだろう。そして魔法と書いた紙の隣には、炎の付与に疾風機動といった有名どころの強化系魔法を書いていく。

下位魔法であつても、地水火風それぞれの属性に一つ二つは強化魔法が存在するので、どれでも良い。紅包ほどの強い武芸者であれば、攻撃魔法一つと強化魔法一つを使いこなすだけで戦場で無双できるはずだ。

「理屈は判る。……しかし武人ともあろうものが後付けの武具に頼るのは問題ではないか？」

「それを申せば質の良い武具や名馬でも同じですよ。それに紅包さまの代名詞と呼べる技にまで昇華すれば問題ありません。大通連……バーレイ相手に飛び道具がズルイなんて言う者は居ないでしょう？」

この男は御曹司なのだから極論、その辺は何でもできる。

魔法の装備を手に入れることも、都に居る付与魔法の使い手に発注すらできるはずだ。

それこそ戦争に成れば命賭けの戦いになるはずで、金を積み上げて勝利をもぎ取ったと批判する奴が出たら笑い者になるだろう。

「言わんとすることは判る。しかし、しかしだな親の金というのは……」

「……ではどういふのはどうでしょうか？ 自分はいずれ魔法を付与できる術師を招きたいと思えます。その折りに必要な素材……それ

らを魔物を討伐して採りに参りませんか？ 場合によっては魔物の皮や骨も素材になるかもしれません。海獣の骨を使った銛や悪竜を倒して造ったという鱗鎧のように」

装備品に頼るのどうなの？ とか言おうとした顔が急変した。

そもそも彼の武芸は侯爵さまの名前を使つて、有能な師範について幼少から学んだものだ。魔法の槍だつて師匠のお下がりだが、そこに文句を付けないのは自分の努力の成果であると自負しているからだろう。僕だつて緋家の縁戚になるから扱いが良くなるのではなく、自分の先見の明ならば嬉しい物だ。

そして何より、魔物を退治して財宝を得るとか、そいつを倒すことで得られる最強の武具であるとか。そんな話は男の子にとつて何よりの楽しみであり、成し遂げれば武芸譚になるだろう。だからこそ紅包も顔色を変えたのである。

「むむ……」領主が付与魔法士を呼ぶとは俄かには信じられんが、そういう事ならば納得しよう。その折には同行をお願いする」

「自分は傭兵ではなく冒険をする仲間を援助するギルドを設けました。その折には魔物を退治しに共に参りましょう」

実際にそうなるかはまだ分からない。

だが、この場で紅包の出した無茶振りを納めるには十分な切り返しであろう。それに究極の魔法武具ではなく、腕力向上とか脚力向上程度ならばそこまで危険な事にはならない筈だ。

こうして最後の難題を無事に乗り越えたつもりになった僕は、胸を撫でおろして港に向かったのである。

水棲種族との邂逅

● 侯爵領の西に『L』字状の半島と、その湾内に港がある。

それらを中心にして集落があるが……貴族としてまとまっではない豪族たちの村であり、自治の形を取っているがその生活は港を中心に回っている。前世で言う漁港や木材港のような物だろうか。

侯爵家はいち早く良港を抑えたが、強権で支配して居ないのでこんな形になっているらしい。もう百年もすれば、侯爵家に臣従するのかもしれない。その当時の侯爵家は完全に併呑するより時間を選んだわけだが、その狙いは確かだったと言えるだろう。

「ここで紅梓と合流するの？」

「正確には水棲種族ともだけどね。ここは彼らの出先機関……交流する場所にもなってるんだよ。双葉」

半島よりも南に水棲種族の領域がある。

しかし半島はL字型であり、陸地が彼らを阻んでいる。これまで抗争になって居ないのは、その立地が防衛に有利な点だ。加えて言うところの魔物の件もあり、水棲種族としては敵対するよりは、逃げ込む避難先にした方が楽なのだろう。

それはそれとして彼らも港での交易をする都合上、どこかで荷揚げしたいができるだけ丘の上で過ごしたくない。侯爵家に支配されたいわけでもないのに、折衷案として豪族たちの村に出先機関があるというわけだ。

「そういえば聞いたことなかったけど、水棲種族でどんな人たちなの？」

「僕も見ただことはないけど人身魚頭の近縁種族というから頭が魚だったりタツノオトシゴみたいだったりするようだね。龍頭の人も居るらしいけど、特に特別な血や能力があるわけじゃないってさ」

これまでマーマンともギルマンとも言っていなかったが……。

彼らは複数種族ひとまとめで水棲種族と呼ばれる。お互いに交配可能であるために血が混ざりあっており、今では人間体の上に様々な

種類の頭があるという括りのようだ。前世のイメージだと獣人の魚版だと思えばよいだろう。

なお、この世界は下位魔法の中に地水火風以外に共通魔法があり、その中でも普段から使う物を生活魔法というのだが……。陸上呼吸と簡易変身がトレンドらしいので、どれほど交易が盛んになって居るかが伺えるだろう。

「何か美味しいものある?」

「彼らは養殖が得意だからね。臭みが無くて脂の乗った魚介類が食べられるはずだよ。少なくとも紅梓さんのレポートにはそう書いてあった」

「おさかな!」

考えてみれば当然だが人間が牧畜するなら水棲種族だってするだろう。

それが水の中だから畜産ではなく、魚の養殖と言うだけの話だ。陸の魚は清水に近い恵まれた場所で無ければ泥臭いので、水棲種族が養殖している魚の方がおそらく美味しいはずだ。

紅家の持て成しの中には特に魚はなかったが、こちらに向かうと告げて居なかったら魚料理が入っていただろう。おそらくは新鮮さの問題を知っているので、自慢したいが後から味わうこちらの料理と比べられたくはなかったと思われる。

「新鮮な魚に塩を振って焼いた物が美味しいと思うよ。本音を言えば貝を油で炒めた料理や、酒蒸しがあれば良いんだけど……」

「……双羽。何処でそんな料理食べたの?ズルイ!」

前世を思い出しながら料理の話をしたのだが……。

完全に藪蛇だった。基本的に二人で一緒に居るし、贅沢をして美味しい物を食べに行くにしてもちよつとした冒険で微妙な店に行くときも一緒だった。それなのに僕だけが美味しい料理を知っているとこののはおかしい。

とりあえず誤魔化すにせよ、いつか前世の話をする事もあるのだろうか? 気にしないような気もするが、せめて気色悪がったりはしないでくれたらと思う。

「人に聞いたんだよ。だから此処にそういうのに向いた種類の魚介類があるかは分からない。油はともかく酒は怪しいかな……終わったら美味しい物を探そうか」

「……絶対、絶対だよ！絶対なんだから!!」

すねる双葉は可愛いなあ……と思っておくとしてやるべきことをやっておこう。

先行した紅梓が舟を抑えているはずなので、初期情報を聞いてから水棲種族の領域に向かう事になるはずだ。ただでさえ遅れているので少しでも情報を集めるとして……。

● 放っておいても新鮮な魚介類以外に口に出来ない日々が続く筈なので、魚醤の類でも購入して味付けを整えたいものである。

そして無知と知って居るかどうかの差、知識と現実の差。この差をハッキリと理解することになる。

「魚滑木です。よしなに」

「銀双葉です。よろしくお願いします」

現れたのは魚の顔をした水棲種族だ。

デップリと太った青白い体に鯖か何かの頭が乗っているのを想像して欲しい。その体の上から服を着ているのが異質だが、これでも人間の様式に合わせているのだろう。

ちなみに水棲種族は沢山生まれてたくさん死ぬという魚に似た出生率で、成人できると判ってから名前を付けるそう。そして頭の形状が一字目、生業であるとか役目が二文字目以降になる。つまりは滑らかな玉……珊瑚か真珠でも磨いて売る担当なのだろう。

「赤色港の方なら龍学才殿が居られたのですが、こちらであるならば私に対応いたします。御言葉は通じておりますかな？」

「恙なく。早速、お困りの内容をお聞かせください。僕の利いている範囲ですと……」

侯爵領にある港は赤色港と呼ばれている。

紅来川で採れたルビーやら、この辺で交易した珊瑚やら赤真珠を出荷する港という意味が現在の主流だ。侯爵家が傘下に収める前は、血

で血を洗う抗争だとか、増え過ぎたプランクトンで赤潮になったことが由来であるとも言われているが。

なお、先ほど言ったと思うが龍頭でも特に特殊能力などはない。単に人間がありがたがるから、龍頭の水棲人類を留学させて大使代わりになったそうである。奥に引込めて祭司とか大臣扱いしていない所を見ると、エルフほどに交渉術には長けていないのだろう。

「ジャイアントビーが年々増えている。去年からキラビーが混じり始め、今年は大繁殖しそうだと思込まれている。そして活動区域が広いので、巣を特定できて居ないと?」

「左様です。付け加えるのであれば、既に被害者が何名か」
意外と正確な地図を無警戒で見せてくれる。

大丈夫かな……と思つたが、よく考えればこの人たちは水の中に棲んでいるのだ。幾ら地図が戦略物資だとは言つても、海流図さえ見せなければ問題ないのだろう。こういうのは種族差というべきなのだろうか?

それはともかくとして、尋ねるべきことは尋ねておこう。

本当は何処が危険かとか、何処に多いのかを聞きたいのだが……。水の中に暮らしている人々にとつて、むしろ危険なのは数よりも浅瀬だろう。明らかかな危険地帯という説明では伝わらない筈……ちよつと言ひ回しを考えつつ先に聞くべきことを尋ねる。

「出現頻度の低い場所から少しずつ特定していくとして、ある程度は安全に休息できる場所などがあればありがたいのですが」

「こちらの島に海の魔物と人間たちが争つた時の施設があります。どうぞお使いください」

地図の上にベタつと墨で円を書くのはどうかと思う。

まあ彼らはサンゴや真珠を簡単に採つて、人間の領域ではありえない安価で売るくらいなので、資金に困つてるとか物が大切という文化ではないのかもしれない。嵐が来たら全部吹っ飛ぶのだから一緒にでも思つて居そうだ。

ともあれこれで探索中の拠点は確保できた。

ある程度は壊れているとしても、ジャイアントビーが入れない程度

に補強すれば大丈夫だろう。イザと成れば結界を強めに張るまでだ。「ではもう一つ要望と、条件の確認を。ジャイアントビーからは可能な限り守るつもりですが、危険を恐れない船頭ないし案内人をお願いできますか？　また報酬その他の条件に関してある程度目安はありますが、そちらのご協力によって引き下げても構わないと思います」「案内人であれば打ってつけの者が居ります。条件に関しては、住処や作業所でしたか……」

「ええ。間に人が入ると曖昧になりますので、改めてお話を」

魚滑玉は周辺の漁村を見渡した。

豪族たちの村であり、魚を水揚げしたり水棲種族から買い付けた養殖魚を丁寧に運んでいる。作業所では調理して居る者から、燻製にしたり天日に干している物まで様々だが、このレベルの作業ができれば十分と言えた。

そして間にエルフ族や紅梓が入らない、ダイレクトな話をしておきたかった。そこまで悪度い事をしていても思わないが、伝聞と言うものは歪む物である。

「それこそ製塩や魚の干物などは、この村や港で買っても良いくらいです。ですからむしろ必要なのは、今回の件の様に虫や獣に魔物などの情報を集める場所。そしてまだ見ぬ植物や魚の他に何か未知の……素晴らしい場所があれば行ってみたいというくらいですね。もちろん聖域や生活に必要な場所へ無理には押し入りませんよ」

真面目な話、港で買い付けても荘園で買うよりマシだ。

行商人を介すれば無茶苦茶な価格になるし、彼らも輸送費用や危険性を距離に掛ければそのくらい取る必要があるだろう。しかし港に駐在所があり、魚介類や宝石を直に買い付けたら、欲しい時に魚醤などが必要なだけ手に入るならば問題などなかった。

だから重要なのは活動拠点であり、移動手段への協力だ。

サトウキビなり南国の果実を手に入れても、自在に輸送できなければ意味がない。数が必要ならば、貯蓄する場所も必要だろう。何より魔物が居るから倒すという話であれば、体を休めて食料を貯える場所が必要なのである。ぶっちゃけ冒険者ギルドくらいの大きさの建物

が必要という程度であった。

「お話は分かりました。できるだけ良い場所を探すとして、報酬自体を引き下げる条件とは何でしょうか？ それなりの者を選んで蹴散らすだけの場合と、腕利きを呼んで元を絶つのでは違うと聞いております」

まあまんま傭兵を雇うのに似ている

滞在中の住処があれば、宿を借りる必要がない。食料提供があれば食事を買う必要も、保存食を手に入れる必要もない。案内人や船頭が居れば、それらを雇う必要もない。

前にも紅梓に説明したような気もするが、それらの用意があれば丸つと必要が浮くのである。

「おおよそはそちらにお願いした内容になります。滞在拠点に食料その他、そして案内人や船頭を雇う費用などがまず差し引けます。他にも最後に蜂たちを蹴散らす際に、我々だけで挑むか、魔法の使い手をお貸しただけかにも寄ります」

この辺はもう、書面で見せた方が早い。

傭兵部隊を雇う時の要領で、数十人から数百の傭兵を期間中ずっと雇う場合。それらを全て腕利きに切り替えた場合の差分。同じ費用を掛けるにしても、腕利き数人の方が管理し易いのは確かだ。少なくとも聖域に入るかどうかを見張るのは簡単である。

そして情報などの用意もまた、必要期間を差し引くことに使えるだろう。この場合は単純に目撃情報だけを述べるのか、それとも浅瀬などの水棲種族の認識出の危険地帯ではなく、陸上を歩く我々の観点で危険な場所の情報があるかないか。

それらを用いて可能な限り我々を雇う日にちを減らし、可能な限り手間や危険を無くすことで費用を下げる事が可能なのだと説明していった。もちろん本来ならば遠距離出張費用などは上乘せするだろうが、今回は現地に拠点を作る許可をもらう事で、出張料と差し引きするのだとちゃんと説明したのである。

島へ

● 水棲種族の領域は当然水中をメインとしているが、陸だって重要なフアクターだ。

地震や嵐が来れば高波だって来るし、丘の上で作っている施設は簡素な分だけ大変。その規模の問題に成れば、海の中も無事なわけでは無い。

だからこそ島やら入り江の形状で守れる場所に棲んでいるのだそう。海中のみにしか入り口の無い洞窟などは、絶好の安全地帯なのだという。

「それは良い話を聞きました。実物を見せていただければ族長たちに掛け合わせていただきましょう」

「ではサンプルを一つ二つ提供後に、それを輸送する費用と、土地を提供する場合の差でご判断ください」

情報収集ついでに雑談して居たら、気が付いた時にはセールスをしていた。

波消しブロックやら水津壁をコンクリートで造って、海に沈めて安全地帯を作るといふ計画が俄に持ちあがったのだ。

最初は水棲種族の中でも、大岩を動かして波消しブロックにするという話を聞いたくらいだったのだが……。その時に『丁度良い形状の岩が無くて動いてしまう』とか、地上の土壁を見て『こんな感じで壁が作れたらなあ』と嘆いていたので、可能かもしれないと相談に乗った結果である。

「どうして僕はゼネコンみたいな事をしてるんだろう……。というか拠点から輸送するのと、こっちで工場建設やら材料集めやらするのとどっちが簡単なのかな」

「ゼネコン？」

「コンクリ製品の商人のことだよ」

魚滑玉が人の手配に行ってる間に双葉や紅梓たちに解説。

何を取り決めたかを伝えながら、今後について考えておく。蜂退治

の事に関しては現地に行ってみるしかないので今の処はゼネコン問題だ。

何人かいるエルフに頼みエルフの領域経由で、荘園からコンクリ製品を送ってもらう手配をすることで今までは確定だ。荷車は二つ用意し、人間の領域経由と合わせて二つのコストを見比べておく。

「こつちにももらえる土地で造れば良いんじゃないの？」

「将来的にはね。もっと南にも火山があるそうだし、材料自体は何とかなるとは判ってるんだけど……。出生率とか生態系的に大丈夫かなって」

あまり考えたくない話だが、下手に保護壁を作ると増え過ぎる可能性もある。

現時点で水棲種族は無数に生まれて無数に死ぬという出生率であり、そのバランス的に人間よりもやや下の発展度である。もしこれが劇的に改善されたらと思うと不安でならない。

何しろ先ほどの会話でも、水棲種族が愚かではないことは知らされた。養殖だけでなく波消しブロックなどの概念が既にあるのだ、陸上種族が思いつくのが数百年先の利便性だとしても、水に棲んでいる彼らにとっては目の前の問題なのだから当然とはいえる。

「流石にそこまで増えないでしょ？　っていうか、そうなるようなら売らなきゃいいのに」

「今の処は逢った人は良い人ばかりって話だけど、良い人でも長に成れば別の判断するかもしれないじゃない？　どの種族もエルフやドワーフみたいに個人と指導者の考えが同じではない……と考えておくべきじゃないかな」

輸送費を考えれば高額だけど民を守れる防護壁。

そう考えれば財布と相談しつつ増やすか考慮する程度の存在に過ぎない。しかし沿岸ならまだしも島の上に工場があるなら判断が変わって来るかもしれない。

現時点で人間と争うのは得策では無いからしてないだけであるならば、工場を制圧して種族が安泰に成るならば、島程度ならば攻めてくる可能性もゼロではないだろう。

「判らないでもない話じゃが、お前さん以外の連中が売り渡したら同じじゃないかの？　あるいは子供が生まれて引き継いだ時はどうじゃ？」

「そこまで責任は持てないよ。僕は僕の気分の範囲で彼らに適度な味方をしたただけだよ。迂闊に隙を見せて取り上げられたくはないけど、他の連中の面倒まで見切れない。生まれて来る子供たちが彼らに協力したいとか資金が必要になったのなら、それはそれで尊重するだけの話さ」

別の言い方をするのであれば、自分が責任取れる範囲での協力だろうか。

波消しブロックやコンクリ壁で集落の幾つかが安全に成れるなら喜んで協力するが、人間たちとの戦乱を起こさせたいわけでもない。僕の影響を受けた人間たちが、僕の忠告を無視して商売するのは僕の責任の範疇外だろう。

もともと水棲種族はそう長くは外に出られないそうなので、戦争が起きても沿岸までだろう。よほど人数が増え過ぎたり、逆に人間の方が悪い事をしない限りは問題ないと信じておこう。

●
そうこうする内に一人目の案内人がやって来た。

この村の周囲で活動する人だという話で、水の中よりも陸上の方が能力が高いという部類だそうだ。

具体的に言うとも視力が高く、両目とも5・0以上はありそうである。水中だと鮫並に鼻が良い方が重宝されるので、あくまで陸上向きは二次的な扱いなのだとか。

「蝦鷹視です。みなさまの偵察役を仰せつかりました。途中で案内人と呼びますので、そちらの方もご安心ください」

「よろしくお願いしますね」

現れたのは海老頭の水棲種族だった。

首筋は甲羅で覆われているのに、特に防御力が高い訳でないというのは不思議である。

まあ神の加護はランダムなので文句を言う筋合いなどない。

勇者も聖女も都合が良いタイミングに有名になればそう呼ばれるだけで、選べないという意味では水棲種族も同じような物なのだろう。

「ご予定はいかがでしょうか？」

「手紙をもう一種、合わせて二通書いたらここでの用事は終わるので、現地入りを目指してください。情報持って居そうな人や、食料その他の補給場所が途中にあれば立ち寄る程度で」

「承知いたしました」

本当は不要な手紙なのだが、僕も学習したので先手を打っておく。

この村に一通、赤色湾に一通残しておく伝言である。誰に充てた手紙かと言うとこの場に居ない大通連だ。これまで彼が引き起こした問題を考えると、事前に釘を刺しておいた方が良い筈だ。

幸いにもというか大通連は旅の武芸者でもっと南国の生まれなのだそう。水棲種族に関しても知っているはずなので、敵対せずに話を聞くに留めるだろう。しかし釘を刺しておかないと勝手に暴れ回って作戦が崩れかねなかった。

(今回は巢を見つけるのが優先だからね……勝手に暴れてジャイアント・ビーのフェロモンをまき散らされても困るんだよね)

疑うのは良くないが、いつも迷惑をまき散らすので先手を打つ。

内容自体はいたって普通で『秘密戦力として投入する作戦の都合上、拠点の裏側からコツソリ合流して欲しい』というものだ。隠密作戦でも何でもないが、細かく指定しておかないと勝手に判断しかねない。

指示を出した当初は守ることが多いので、魚滑玉さんに渡しておけば良いだろう。……拠点にも同じ物を用意して、呼ぶまで待機してろと告げるべきなのだろうか？

「心得ました。現地でも食料になる樹はありますが、途中で立ち寄る島にあるバザーを用いましょう」

「お願いします」

こうして中型船に乗り込み、馬車と小舟を運ぶことにした。

馬車は安全に籠って中から魔法を掛ける為であり、小舟は自分たち

の都合で移動する為でもある。

海原に乗り出すつもりはないが目的地が『群島』であるためだ。

「群島の北辺に人間の施設、西辺からはギリギリで歩けるんでしたよね？」

「正確には干潮時になんとか繋がるという具合でありますね。私共にとっては丁度良いのですが、人間の方々には少々手間かと思われま

す」
蝦鷹視は人間社会の近辺で生活している事もあり、尺度が近いのが助かった。

彼の加護は視力を高めるモノなので、安全に接近できるし、干潮時に人間だと困るという具合を判断できるのも助かる。

もし彼の一族の中で不遇であるならば、高給で雇っても良いと思うくらいには有望な人材だろう。戦闘力を見ていないので比べられないが、物腰しも柔らかく傭兵であればかなり重宝されると思われる。

「確認いたしますが、群島内は小舟で移動されるおつもりですか？」

「その予定です。今乗って居る船では調査するのに迅速に動けませんし、蜂が少ない場所であれば少人数でコツソリ動く方が安全ですから」

「承知いたしました」

蝦鷹視は僕の答えに何事かを考えていた。

タイミング的におそらくは案内人を誰にするか、知識と加護を天秤にかけて誰なら確実かを考えている物と思われる。

こういつてはなんだが、部族の中から有望な加護持ちや魔法持ちを引っこ抜けるという意味で、彼らの手腕は手際が良い。海は舐めている熟練者でも直ぐに死ぬから、こういった時の配分が早いのだろう。

「では鯨守人を案内人に呼びましょう。彼は守りの加護がありますので、万が一蜂に襲われても大丈夫です。それと干潮時以外に限りますが、イザという時は小舟をひっくり返して泳いでください。小舟にある空気で過ごさせるはずですよ」

「ああ！ それは良い手ですね。何から何まで痛み入ります」

斥候という職業は軍でも有能な人物が配されることが多い。

よく軍記物で『心利いたる者』と評されるメンバーが揃られるのだ。その意味で、この蝦鷹視はかなり有能だった。彼を付けてくれた魚滑玉氏には感謝をしておこう。

「ねえ。私……泳げないんだけど」

「ワシもじゃ」

「……後で練習しようか。基本的に逃げ込むときだけだから問題ないよ」

こうしてその日の内に施設入りし、経年劣化した部分の確認や掃除を始める事になったのである。

ジャイアントビー対処計画

● 途中でバザーに立ち寄り補給してから現地入りした。

そこで感じたのは自分が水棲種族たちを舐めていたという事実だ。補給したのは二つの島を幾つかの舢で繋いだ市場であり、そこでは周囲の国々からも交易が行われていたのである。

大型の筏である舢は移動できるのが最大の特徴だ、季節や天候によっても変わるだろうが好きな位置で市場を開けるのだから制圧など難しかろう。

「鯨防人です。今回の一件が終えるまで案内人を務めさせていただきます」

「ご丁寧ありがとうございます」

何というか僕の勘違いだったのだが、彼らは別に丁寧でも物腰も柔らかくはない。

生活魔法は下位魔法の中にある共通魔法でも、特に生活に密着して開発された魔法。その中に翻訳魔法があったというだけの話だ。

魚頭ゆえに舌足らずなモノも居る筈なので、そういった面を翻訳魔法で調整している。しかし所詮は生活魔法なので、完全には翻訳し切れて居ないし、個人個人のニュアンスなど画的に丁寧語に変化するというだけであった。

（しかしここに寄って正解だったな。本国の連中……水棲種族がここまで大規模な交易とかしてるなんて思ってたないだろ。文明だって決して低くない。重視してるモノが違い過ぎるだけだ）

鯨防人は水中でも邪魔しない簡単な鎧とクロスボウで武装していた。

クロスボウの方は水中銃の劣化版みたいなもので、この時代ならば十分に機能するだろう。探せば他に何かしらの文明的なアイテム……薬品だの何だのとあるかもしれない。仮に水棲種族が開発して居なくとも、他の国で買った可能性はあるのだから。

彼ら水棲種族はともすればアツサリ死ぬし、嵐でもくれば一瞬で文

明が崩れさる。だからこそ刹那的で目の前に投資し、集中するが決して愚かではないのだ。迂闊に蛮族だなどと信じたら危険な事になるだろう。

(ともあれ今はその辺を理解したって事で十分だな。現時点で出生率とか長期視野とか欠点は目白押しだし)

善意を持つて協力を要請してくる相手には善意で返せば良い。

今の処はそれで十分だし、相手を蛮族と侮つての適当な対処を危険だと知ってさえいれば良いだろう。適度な付き合いの中で弁えてさえいれば良いのだ。

よく考えたらエルフだって相当に抜け目なくて交渉上手だったのだし、水棲種族が頭悪い訳はないのだ。有能な人物はいるし、独特の価値観を有していると知つて居れば問題ないと思われる。

「しかしすみません。急な要請で」

「いえ。あの群島は貴重な場所でもありません。子供たちを守る事にもなりますし、市場の候補地でもあります。お気になさりませんよう」

この旅で知らされた事だが、彼らは一丸となって動く。

前世での海賊は船ごとに別の組織で、滅多にいない海賊団規模でようやく同胞意識を持つ程度だったという。だが水棲種族は連絡網を持ち、仲間の為に一丸となっているのだ。船と言う括りがないのも大きいだろう。

ともあれ文字通り水先案内人を得て、目的の群島に到着することになる。

●

到着後に思い返すと、群島はエルフの領域から見ても南側である。

これだけ離れて居れば渡つて来ても端っこであらうし脅威にはならず、紅梓たちが他人事の様扱つていたはずだ。

最初に地図を見た時、西側に陸地があるのを間違いかと思つていたが、直ぐ南だったら東であるはずというイメージからである。今思えば中型船で移動するのだから近いはずはないし、そんなに近いのならば侯爵領から派兵されていただろう。

「流石に早いな。人間の案内じゃあここまでの日程じゃ無理だ」

「そりゃあそうでしょうよ。水深だの海流だの良く知ってるんだから」

喫水の問題で通れない場所もあるが、水棲種族さえ居れば問題ない。

ショートカットし放題だし、海流に乗って風向きの良い位置に移動すれば良いのだから、そりゃ移動速度は比べ物にならなかった。

そして一連の会話から思い起こされるのは、侯爵さんやエルフたちの水棲種族への理解度である。当然ながら馬鹿では指導者は務まらないし、侯爵さん達もそれなり以上に彼らの事を理解していたのだろう。

「ここまで来ただけでも遠出した価値があったね」

「うん。また来たい」

「お金出してくれるなら私が往復してあげるわよ」

移動再開中に情報量の多さに感動しているのだが……。

双葉と紅梓はそれぞれ壺を抱えて奇妙な友情を育んでいた。具体的に言うとフルーツの砂糖漬けである。

こちらでは塩も砂糖も普通に採れるし保存料でもあるからな。本国と比べたらビックリの現地価格である。同じ重さの金とは言わないが、三倍から五倍の費用が掛かるだろう。そして往復の手間を交渉材料に、紅梓は自分の代金を双葉に押し付けている。

「双羽双羽。後でこれで何か作って♪」

「こつちにいる間にジャムを作っておくとして……まずはガレットと大判焼きのバージョンアップかな。砂糖の甘さに慣れないと……慣れ過ぎても困るけど。その前に掃除と周辺確認だね」

島への到着でようやく地図の縮尺が判る。

この後に干潮と満潮を見ることで、この周囲の島々の情勢がようやく判明するだろう。

とりあえず判るのは小さきまな群島と、大き目の島……人間の領域がある事。

群島で採れる食材を加工し、あるいは海の魔物から逃げ込む先にす

ることができるといふ意味で、この周囲は水棲種族にとっては高額な費用を払ってでも取り返す価値のある場所と言ふ事だ。

(小さなオーストラリアと無数に砕け散ったニュージールランドって感じかな？ まあ中国とオーストラリアほど離れていないけれど)

ちよつと違うのだが、おそらくこの表現が一番分かり易いはずだ。

大きな島は最も西であり、そこから群島としてここから見た感じ五つの島が連なる。もっとも干潮時や水棲種族にとって意味のある岩礁も含めれば、大小合わせて二十以上の島があるらしい。

ただ巣を探す必要上、岩礁などは調査する意味はない。

五つの島を順番に回り、巣を特定して悉く殲滅する。おそらくはその流れで済むはずなのだが……。

「紅梓さん。風の変化とか判る？ ずっと西から東向きなのかな？」

「そうねえ。うちに来るからそのはずだけど、偶に妙な風が吹くとかあつても知らないわよ？ 私だつてここには初めて来るんだから」

「了解」

ということとは西にある大きな島も怪しいという事だ。

基本的にあちらから東へ吹くにせよ、干潮時には陸続きになるような場所である。何かのキツカケで風向きが逆に成れば、あちらへ渡るのも楽だろう。

仮にそちらの方にも果実のなる樹がある場合、風に逆らつてでも蜜を集めに行く可能性はあるだろう。帰り道は風に乗れるのだから、トータルで射程圏内だと判断する可能性は大いであつた。

(というか人間の領域だから蜂退治を頼まれて居ないだけで、あちらにも普通にいる可能性はあるな。そこまで面倒見切れないと返されるかもだけど、向こうの方が本拠でも困る)

これまでエルフと水棲種族経由で話を聞いていた。

だからこの島に巣があるのだらうと思つていたが、あちらの方に巣がある可能性もゼロではない。いや、果実のなる樹の分布次第では、あちらの方が絶対多数と言ふ可能性すらあるのだ。

人間の領域としか知らされていないのだが、蜂が来ないエリアにだけ人間が生き残っている可能性だつてあるだろう。

(その辺の情報収集と、植生の把握が先決か。何も無ければパパッと回ってもらえば済むし)

まずは全容を把握しないと意味がない。

群島の蜂を苦勞して片付けた後、大きな島から群れなして株分けされても意味がない。今後数年は良いにしても、その数年後にまた同じことが起きるだろう。

もちろん冒険者ギルドにもう一度依頼させる手もあるが、結果が判って居て同じことを繰り返すのはどうかと思う。もし根に持つタイプの人間が居たらきつと許さないだろう。

「暫定的に方針を五段階に分けます。蝦鷹視さんが戻り次第に行動開始」

「了解」

周辺探索を頼んでいるので、彼が戻り次第に行動に移る。

まともにやると面倒なので、大雑把に行動スケジュールを区切って方針を打ち出す事にした。

その方針にさえ従ってくれば水棲種族だろうが大通連だろうが勝手に動いてもらって構わないし、方針に反したら大通連でなくとも細かい指示で抑制せざるを得ない。

「まず蜂は匂いを探り、匂いを言葉代わりに出すので迂闊な刺激は避けてください。その上で第一段階はこの島の確保。安全な拠点として戻ることが出来るように防備を整えます」

「匂いですか？」

「らしいわよ」

最初に匂いの話をしてから決定を伝える。

こうしておかないと『倒せる内に倒しておく』とかやられると、蜂は警戒するし増援がビュンビュン飛んできて面倒くさいことになるからだ。

その上で北辺にあるこの島の安全確認、および砦化を最初にしておかなければならない。でないとなら蜂の大群に襲われた時に逃げ場がなく、教えられた通り潜って蜂が居なくなるか空気がなくなるかを待つしかなくなるためだ。

「第二段階は外周の確認です。群島の西辺にある島と、西にある大きな島の間で蜂の行き来が無いかを確認。調査に無関係なメンバーは、この島から徐々に手を広げていく予定です」

「そりゃ。向こうから来てる可能性もあるわね」

「臭い物を絶つには元からじゃな」

それなりに長い付き合いになったので紅梓と剛盾は即座に理解した。

二人は傭兵としても行動していたし、周辺的环境やら僕の立てる作戦にも理解が深い。

後は布石を打ちながら徐々に範囲を狭め、ゆっくりと巣を無くしていくだけだ。

「鯨防人さん。あの大きな島に居る人間たちのとの交流はありますか？ 無い場合は西辺周辺の植物だけでも判れば……果実や蜜の出る花があるかないかだけでも助かります」

「勝手に探す訳にもいかないでしょ？ 知ってる範囲で良いの」「ふむ……」

蜂の往来が無ければ後は簡単だ。

森林ならば紅梓に探索を頼んで軽く回って来てもらえば良い。しかしそこが人間の領域であり、果樹園ではないにしても何らかの蜜が出る花があると面倒な事になる。

人々の出入りがあるだけでも面倒なことになるが、一番面倒なのはジャイアントビーを定期的な蜂蜜の供給源にしている場合だ。その場合は責任問題として苦情なり交渉を入れてもらわなければならぬいし、そうでないにしても勝手に入ってきて狩場を荒らされたらたまらないだろう。

「彼らの本国はもつと西であり生活圏もそちらの筈ですが……。確かにそうですね。誰かを送って立ち入り許可を取っておきましょう」「ありがとうございます。ソレなら何とかかなりそうです」

これで最悪は免れた。果樹園を生活圏から離す訳はない。

つまり西辺から上陸した周囲に森林があるとして、そこは住人の狩り場程度だろう。それならば蜂の巣がある場所とは思えないし、あつ

たとしても小さい物だと思われた。

それとは別に、水棲種族があゝの島に対して強く出れるということが判ったのも大きい。鯨防人は事も無げに口にしたが、翻訳魔法の誤訳でない限り殆ど断られないと確信して居ることになる。まあ島に住んでて水棲種族相手に逆らうとも思えないが……何かあつても文句を付けられることはないだろう。

「紅梓さん。第二段階に移行した時点で、匂いを保つから向こうの探索をお願いできる？」

「任せといて」

西にある大きな島に何もなければ後は群島の探索だけだ。

島を一つ一つ探索し、場合によっては匂いを遮断したり、逆に開放しながら各個撃破して行けばよい。最悪、島の一つを丸焼きにすれば収まるだろう。

全体像の把握が第三段階、水棲種族と相談して実行に移すのが第四段階。危険があるが力押しで倒せるならば、訓練を兼ねて徐々に制圧するのが最終段階である。

駆除作戦の開始

● キッチリとデータを残しながら状況を進行。

拠点は壊れた場所をジャイアントビーでは破壊できない程度に補強しつつ、西側の確認を終えた。幸いなことに蜂が行った痕として針が残っていたが、数が少なかった為か何者かによって倒されていたと思われる。

おそらくが現地の人間か、さもなければ大型の獣が倒したのだろうとの意見だ。

「銀大人。新しい状況進行表、感謝の念に堪えません。前回の提出にも長老たちも満足していると思われれます」

「いえいえ、お役に立てれば幸いです」

そこまでする必要はないが、僕は石板に報告書を刻んだ。

定時連絡なのか、何か大きな状況変化なのかをまず記載し、次に結論から入って内容を説明する。とはいえ基本的には予定通りに進んでいるという訳で、大きな変化などないのだが、冒険者ギルド込みでこういう習慣は根付かせておきたい。

施設の修復を始めとした北辺の島の確認、西辺から人間の領域に蜂が居なかった事の報告。それらにより全容を把握したので、これから作戦を開始するという旨の通達だ。ここで異論・反論がなければ、僕らは蜂退治を徐々に進行していくことになる。

「銀大人にお願いがあるのですが、匂いを封じて討伐を行う方法を教授して頂けませんでしょうか？ 代価はお支払いするとの長老たちの意見です」

「……そう来ましたか。可能な事と、難しい事があります」

この話はとても難しい。まず色々な意味で教えても良いかという問題だ。

専門の狩人に『君の儲け方を教えてくれ』と声を掛けるのはマナー違反である。これで食ってる連中にそんな事を口にしたら、喧嘩を売っていると見なされるか、相当な代価を要求されるだろう。

次に此処に来るのが面倒だし構わないか……と言う判断もできるのだが、応用によって他のナニカが異様な発展をした場合が問題になって困る可能性もある。それこそ出生率が激変して、水棲種族が沢山増えたら責任取れるのかなどだ。

(でも、なあ。僕にとっては少し話が変わって来るんだよな……)

匂いを封じるのは、神職の能力だ。神様布教を考えたら悪い提案ではない。

実際には海の神様の教えになるのだろうが、九天玄女様が知恵を授けたとか、冒険者の神としての括りとして意味が出る場合などだ。

直ぐに何もかも教えるのではなく、少しずつ問題なさそうな範囲で教えつつ、それが神々の交流とでもしておけばどうだろうか？ 近場に居る他の種族へ教えるよりは水棲種族の領域は遠いので安全な気もする。遠くて簡単に育てられないのであれば、指南車モドキを羅針盤代わりにされる可能性も減るだろう。

「まず僕は知識の神……口伝で大切な事を教えてくれる神様の神職です。だから教えるのは良いのですが、神職の能力ですので相手は同じような神職とか巫女に限ります。教えても使えませんからね」

「むう。それは少し難しいですね」

当たり前だが種族によつては居ないし、人の間でも数が少ない職である。

便利でも強くも無いので需要はなく、同時に必要な時は必須と言っても良い程に必要な職なのだ。それこそ聖域の管理とかで巫女やら神職が居るとしたらそこに必要だから居るのである。

そんな中で余所者に付けてジャイアントビー対策とかさせられるのか？ と言う問題が出てくるわけだ。

「また、これは神職が持つ当たり前の能力を、応用するコツなんですよ。教えたとして一朝一夕に身に付くとは思えないので、覚えるまで僕と同行して人間の領域に行くのは非常に難しいでしょう」

「確かに。それでは諦めるしかありませんか」

単純に保全能力や結界を許可しても意味がない。

また応用を聞いた後で、外周だけを防御してエネルギー効率を良く

したとしよう。だがソレは本当に良い事だろうか？ 例えばガスなどは抽出され合成される物である。匂いを遮断したはずなのに内側で充満するガスに気が付かない可能性はあるし、臨時の壁ならまだしも、子供たちを守るような場所なら有害物全部を排除するままの方が良いはずだ。

こういった事に対処するには、様々なパターンを実地で学んでいかなければならない筈だ。となるとどうしても僕の傍で学ぶ必要があるだろう。まったく応用する気が無いのであれば、それはそれで妙な発展が無いので助かるが。

「あとは候補者の子たちを預かるとか、既に絶えた神様の兄妹神・姉妹神を復興させる一環くらいでしようか？」

「候補者や兄弟神ですか？」

「現役の巫女や神職を呼ぶのは非現実的です。しかし……」

ここで求める人材をワンランクかツーランク落してみる。

こちらは概念構築をしたいのだし、あちらも将来の保険を増やしたいだけだ。現時点で必要な人材を右から左に動かしたいわけでもない。

「後継者の候補……それも二番手以下の者では如何でしょうか？ 上手く覚える事が出来れば上位の候補になれます。仮に次代の巫女や神職でなくとも、群れを守る隊長の一人にはなれるのでは？」

「確かに候補のみなら何人も居ります」

神職は何人も必要ではないが、絶やすわけにはいかない。

だからこそ後継者候補までなら、数人居たりするわけだ。その中で有望な者を次期巫女なり神職にするとしても、加護の関係やら本人の性質で惜しい者だっているはずだ。逆に覚えは良いのだが加護が全くない者が居たとして、ボーダーライン上に居る者であれば送り出して損はない。

それらの候補生の中から、人間社会に入り込める者を僕に付けてはどうかと提案したのだ。まあ暮らすだけなら川の周囲に水路を作っても良いし、サウナの隣にある水風呂を拡張しても良い。

「そして現時点で教えの失われた神の系譜を再興する一環という手も

あるという事です。海の神の兄弟神なり姉妹神として水の神が居てもおかしくはないでしょう。もちろん風の神でも何でも良いのです
が」

「そういえば我々に親しい人間たちの中に、そういった者も居ると聞き及んでおります。村長にもですが、そちらにも声を掛けてみましょう」

「どうやらこの様子だと、どこかの島に系譜の絶えた神職が居るらしい。」

神職が居なくなつて失伝してしまつてはいるが、信仰そのものはまだ残っているパターンだろう。あるいは魔法を学ぶ余裕が無かつただけかもしれないが。

ともあれこの件に関してはここまでだ。

おそらく蜂退治が終わるまでには間に合うまい。後からエルフナリ侯爵家経由で連絡でも寄こすだろう。

● さて、作戦実行に際して幾つか確認事項がある。

これらを全員に周知し、徐々に群島を攻略していく。匂いの件は既に伝えてはいるが、作戦概要は石板を送った族長なり長老衆くらいしか知らないだろう。

ちなみに今回はエルフヤら水棲種族を合わせて二十名ほどで決行する。ただしそのほとんどは見張り要員である。

「作戦前に幾つかの事を伝えておきます。匂いの件はみなさんに周知して居ますが、それと同じくらいに重要な事です」

「なんで俺に向かつて言うんだよ」

「君が一番心配だからだよ」

ここに来て合流した大通連も含めて全員に周知する。

戦うにしても逃げるにしても、とても重要な事だ。具体的に言うと小さな獣ほどもある蜂がどれだけ危険であるか、逆にどの辺が弱いかわ知っているかどうかで対処のしようが違うのだ。

サイズが大きくなったことは蜂にとってメリットであり、同時にデメリットでもあるのだから。

「まず大型化した昆虫の恐ろしい部分、ジャイアントビーなどは元の虫と同じ能力で、それを数十倍の力で行使してきます。昆虫はあのサイズで獣よりも素早く強靱で力が強いから、そりゃ巨大化したら強いですよね」

「何を当たり前の事を言ってるんだよ大将。ここにあいつら舐めてる奴は居ねえぞ?」

豪傑である大通連ですら油断できない相手、それが巨大昆虫だ。

ジャイアント・ビーなど速度やパワーが凄まじく、小型バイクが体当たりして来るぐらいの強さがある。しかも空を飛んでいる上に、集団というのが恐ろしい。

だが、それだけだ。

それしかないのが巨大化昆虫の欠点である。逆にデメリットを抱えているので、元の虫よりも駆除し易いまでであった。

「では彼らの弱点を知ってる? 彼らは元の昆虫よりも幾つかの点で弱体化してるんだよ」

「あ? 知らねえけど、餌とかか?」

「それもあるけど、元が強靱だから思ったより長持ちするかな」

確かに巨大昆虫は環境の変化に弱い。

僕も前に言ったけれど、寒くなれば眠るし、熱く成り過ぎればそれだけで死ぬ。もしあの森が丸焼けになったら火達磨にならなくても全滅するだろう。

そして何より、関節部であるとか空気を吸い込む穴……気孔だっけ? そういう部分が元の虫よりも脆弱なので、不利な状況に追い込まれたら簡単に死んでしまう。だが、そこは重要ではない。元の昆虫よりも強靱だから、中々死なないのだ。プラスマイナス・ゼロくらいに考えておこう。

「虫を素手で捕まえようとして簡単にできる人は居ませんよね? それは彼らが僕らが動き始めた『後から逃げて、先に行動できる』からです。しかし巨大化昆虫はそれが出来ませんし、何よりも遠くから姿が判ります」

「あ……」

思考速度と行動速度の差と言うべきだろうか？

昆虫を始めとして、小さな生き物はそのサイクルが小さいのだ。人間ほどの大きなスパンで行動できないし、策略なんか考えたりしない。しかしこちらが動き始めてから回避しても、悠々と軌道変更が間に合ってしまうのである。

だが巨大化昆虫はそれができないのが致命的だ。武器を使えば普通に当てられるし、避ければ回避することができる。そりゃ移動距離は長いし素早いが……絶対に倒せない相手では無くなってしまっているのだ。

「まずは遠くから、それも風下からゆっくりと行動半径を調べていきましよう。遠くならば攻撃されても間に合います。鮫や猟犬の群れではなく、猪とか魔物とかそういう類の敵だと思ってください。そして最初の忠告、倒せるけど倒さない事」

空飛ぶ猪だと思えばいい。

空中を飛ぶのは厄介だが、真つすぐしか来ないならば避ける事ができる。空中に居るのだから見分けることもできる。イザとなれば魔法でまとめて攻撃するか、巣ごと焼き払えばよいのである。無理をする必要は全くなかった。

ではこの人数は何に使うか？ 当然ながら外周から小さく輪を縮めていくためである。

「水棲種族の人たちは、水の中からゆっくりと時間を掛けて確認してください。何処の島から何処の島に移動があった、まるで移動して居ないなどですね。まったく移動の無い島から上陸して片付けましよう」

「承知いたしました。銀大人」

干潮時に出て来る小さな島は考えないので、最大で五つ。

その内の北辺・西辺は既に探しているの、後は三つだ。おそらくは果樹園代わりに使っていたという最大の島であろうと思われるが、他の島にも果実の成る木はあるので油断はできない。

まずは移動の無い島を特定して、居ないことを確認するか、居たとして殲滅してしまおう。

「エルフの人たちを中心に、斥候能力のある人はその後の上陸します。大通連や鯨防人さんたちはその護衛。彼らが無事なら何度でもやり直せるので、もし群れに出逢ったら躊躇なく引き返してください。場合によっては隠れる事が可能な物を輸送します」

「了解、まっかせといて」

「承知いたしました。銀大人」

紅梓の方は笑って応じたが、水棲人類組は画一的だ。

仕草の方が少しずつ違うので、やはりこの辺は翻訳魔法の曖昧さだろう。とはいえ彼らにとっては丁寧語に聞こえれば十分なので、問題はあるまい。

これでおおよその作戦概要は終了した。

上陸すると判った段階で、斥候組に匂いを保全しておけば問題ないだろう。範囲ではなく個体に掛けるから長持ちするし。

「僕と双葉そして剛盾さんはこの島に残ってやって来る蜂を観察します。双葉は眠りの魔法を、剛盾さんは区別する為の小道具をお願いします」

「ん」

あとは僕と双葉の方で、色々と悪さをして行く。

ジャイアント・ビーを倒さずに眠らせて個体識別して、指南車モドキを使って巣を探すのである。

眠らせた個体、次に一番近い蜂という風に指標を作成して、少しずつ観察すれば相手の動きが見えて来るだろう。何体目かの蜂を眠らせて観察対象にすれば、指標を使った三角測量で見分けられるはずであった。

そして相手の巣と思わしき場所を特定し、殲滅するまでである。

ジャイアント・ビーの駆逐

● さて、行動開始だという所で茶々が入った。

赤色港からの直通便で僕宛ての手紙が届いたのだ。それも二広からの手紙……侯爵領での事件に関する相談であり、急な返事を要するやつである。

できればもうちよつと前後した時期に、待機して蜂の動きを情報待ちするところに欲しかったものだ。

「鯨防人さん。この折り返しの次は時間が掛かるのかな？」

「はい。急ぐのであれば返事を持たせた方が良いと思われませう」

と言う事はあまり余裕のない頭で考え、即座に手紙を書かなければならない。

仕方なく木の板をメモ帳に、幾つかの情報を精査することにした。優先順位の上から片付けるとして、あちらでの情報収集や被害を考えると、どう考えても少しでも早い返事が必要だからだ。

という訳で群島調査隊の内、上陸する紅梓たちに匂いの保護を使う。

次いで手紙を書いて送り出し、僕ら自身の蜂対策と言う塩梅だ。忙しくて目が回りそうだが、僕しか担当者が居ないので仕方あるまい。神職にしてもギルドのスタッフにしても、バックアップ・メンバーが欲しい所である。

(しかし、人に化ける虎。ライカンスロープか。人狼ゲームみたいだな)

二広からの要請は、侯爵領の一角で人間に化けた虎が出るという話だ。

そいつが領民を襲うらしいのだが、これまで表沙汰になってないのが気に掛かる。大きな事件であれば僕が紅来川に滞在していた数日で、耳にしているも良いはずだからだ。

正直な話をすると、惜しいと思う。

本来であれば僕も直接かかわって何とかかしたいと思う問題だ。

色々な背景が考えられるし、本当の魔物であったり、水棲種族のような人身獣頭の種族かもしれない。隠れている相手を焙り出すにせよ、目の前に居るかどうかで変わって来るのだ。

（しかし獣人関連ねえ。アンデッドに精霊に巨大昆虫と来て、獣人！次は何来るだろう？ それともこつちから意欲的に関わってデータとして残すべきなのかな）

そんな妄想を抱きつつも、時間が無いので手早く行動をまとめる。最初は情報収集しかないが、背景事情を確認しなければならない。人虎が本当に人に害を与えているのか、狡吏が押し付けているだけなのか、それともいったん遠くへ移動しているだけなのか。関わる者が結託して匿っているのかなどだ。悪いが種族としての獣人であったとしても、本当に被害があつたらどうしようもない。逆に魔物であれ、人の心を得て取引可能ならば話は変わって来る。

と言う訳で僕としては情報収集に努めて欲しいとしか言えない。その上で、表立って動く者とは別に、裏から調べてくれる者を手配すべきだとは言えなかつた。こう言つてはなんだが、二広は目立つし調査向きではない。むしろ表だつて公的機関を訪れて事情を確認しつつ、裏で人を動かすべきだろう。彼にその伝手がなければ、傭兵でも雇うか紅包さまにでもお願いするしかなかつた。

「鯨防人さん。これを赤色湾経由で緋二広にお願いします」「了解しました」

舞い込んだ別件の仕事にひとまずの対処。

そして僕らは本命の蜂退治に乗り出すことになった。無駄な時間を食つた気もするが、これも人の世の不条理と諦めて仕事に取り掛かることにした。

既に紅梓や蝦鷹視たちは動き出しているので、僕らが直接調べる蜂の軌道調査である。

●
と言う訳でようやく蜂の調査を開始。

北辺の島にある果実のなる樹の一角に向かい、ちよつとした小細工をする。いつもの指南車モドキの出番だが、今回は安全の為に馬車の

中から行動である。

蜂があまり活性化してない時間帯から出掛け、できるだけ近くで眠りの魔法を掛けたい。まずはその外縁から、無理なら翌日もう少し近くに……と言う面倒はしたくないので裏技を使用する。

「双葉。あの辺までなら大丈夫？」

「うん。でも……もったいない……」

ここまでは大丈夫だと保証されている位置まで馬車で移動。

馬車から持つて降りるのは長いロープと、とあるモノ。ロープは馬を安全地帯に戻すついでに離れた位置に居る剛盾に渡し、とあるモノは逆に果実の成る樹に近い場所に置く。重要なのはソレの出す匂いと、一番近い果実の成る樹の匂いを管理する事だ。

そして広い器に入れたり布に染み込ませたりと工夫を凝らした蜜を置く。

当然ながらその周辺には時間制限付きで薄い膜の結界を張り、他の工作が終って馬車に戻るころには自然と解除されるようにしておいた。そして似たような結界を時間差で少し離れた樹にも掛けておくが、こちらは先ほどよりも長時間掛かる様にしておく。

「これで周囲の果実からは匂いがせず、そこにやって来るはずだ。そしたら眠りの魔法をお願いするね」

「んー」

そして僕らの乗る馬車にも同じような結界を、別の匂いを元に仕掛ける。

こちらは蜜ではなく、蜂が嫌う臭いだ。眠りの魔法をかけ、個体識別が可能に成ったら僕らとしてはストレートに離れていきたい。そのため果実のなる樹は一足先に結界が解けるようにして、こちらはギリギリまで維持しておくわけだ。

これで指標が完成したところに、相次いで二か所の結界が解除され、蜂たちは果実の香りに晒されつつ嫌な臭いからは立ち去るという計算になる。

そして……。

「うわっ。いっぱい来た。あれが食べ物だったらいいのに……」

「蜂の子は食べられるって言うけどね。まあ今の処、そのつもりはないけど。……じゃあ眠りの魔法をお願い」

「ん」

前にも居たと思うけれど、方向を指定する為の指標作りには認識が重要だ。

一体だけなら一番近いジャイアント・ビーと言うのも可能だが、今回は沢山いるので入れ代わり立ち代わりする蜂のリーダーにしかない。だから『一度眠らせたあの個体』という認識をしないとならないのだ。

そして剛盾に頼んで複数用意した針の内、『一つに一番近い個体』、次いで『眠ったあの個体』に対する方位を保全していく。これでありつらが移動したら自動的に針がクルクルと動く筈である。

「あ、こっちに来てる蜂が向こうの樹に行つたよ」

「二つ目の結界が解けたね。じゃあそろそろこの車から匂いがするはずだからマスクでもしてて」

準備した蜜の方はもったいないが、回収できるのは夜になるだろう。

そこまで放っておいたら埃塗れになりそうなので、この際だが放っておくことにする。この位置からでも結界を広げられないことも無いが……どんな指定にすれば蜂を遠ざけられるか分からない。

忌避剤の類を向こうにも撒いておけば良かったかなと思いつつ、諦めて別の場所に移動することにした。蜂を刺激しないようにゆっくりと馬車を降り、剛盾と一緒に馬車を引っ張って回収すればここでの作業は終わりである。馬もこちらに居るので楽勝だろう。

「どんな塩梅じゃ？」

「今の処は成功かな？ 途中で何かに殺されても困るし、分布を確かめたいから別の場所に行こう」

馬の場所に居る剛盾に指南車モドキを見せる。

一番近い蜂を示す針はクルクルと忙しく動き回るが、眠らせた個体を示す針はゆっくりと別の場所に移動し始めた。おそらくは巣に戻っていると思われた。

継続観察と三角測量を繰り返せばその内に判るはずだが、念のため別の個体を確認しておく。鷹の類に襲われたらジャイアント・ビーでも危ないし、海の中からナニカが襲ってこないとも限らないからである。

「後は詰めていくだけの筈……。問題は予定が詰まっちゃったことかな。どうしたものか」

少しは休みたいけれど他にも予定があるので、移動時間に考察。

まず目下の問題である蜂退治に関しては巣を特定して排除するだけだ。しかし二広に頼まれた人虎の件もあり、それを片付けると僕の莊園に戻るのが何時になるか分からない。

こんなことなら判断する事が無いからと傭兵を引退した仲間に適当な任せ方をせず、正式な代官にでも任命して置けば良かった。特に問題が起きてなかったとしても、報告書を定期的に送ってもらおうとか、伯爵家なり他の貴族から何かあった時に『代官だから』と対処できるからだ。

（今回はまだ良かったけど、将来に同じことが起きたらマズイな。妹君と結婚した後に、伯爵家から代官を送り込まれても困る。行政担当だけでも決めて置かなきゃだし、冒険者ギルドとか洞府に関しても規模が大きく成ったら今のままじゃ駄目だ）

結婚した場合、妹の要請で代官を送ったとかいう言い訳が立つてしまう。

方針を踏襲するならともかく、勝手な判断で色々な……例えば異種族とモメられても困るのだ。エルフやドワーフとの境界線は青悟も立ち会ってる正式な書面だが、領内の活動に関してはトップの裁量の内である。つまり代官が勝手に『異種族は入って来るな』と追放してしまう可能性もあったのだ。

かといってあの時点で『代官にするからお願ひ』と言ったとしても、彼らも困るだろう。何しろどんな方針でどういう風に経営して、問題が出たらどうするかなど取り決めていなかったのだから。そういう意味ではギルドや洞府は成立して手間も無いこともあり、する事自体がないという点で問題その物が無いので助かっている。しかし将来

も同様では困るといふのは確かであるのだ。

(人虎の件は面倒が持ち込まれたただけだけど、今回の問題を思い出させてくれたってという意味では幸いだったな。戻るまでにある程度決めて、色々解決していかないと)

馬車に揺られての暫定的ながら、そんな感じで方針を決めた。

やがて次のポイントに到着した所で、寝ぼけている双葉を起こして次の蜂を眠らせる為の準備に入ってもらった。

そして二匹の移動経路及び、紅梓さんの向かった上陸班の報告を受けて最終目的の概要が判明したのである。

● 複数筋の情報を総合して判断すると巣の位置が浮上した。

良い面と悪い面があり、悪い面は巣が複数ある事。良い面は一つの巣には思ったよりも蜂の危機が緊急ではないという事だ。

つまりは何度かに分けて巣を潰しに行く必要があるが、既に株分けをした後だからそれほど急ぐ必要はない。

「位置的に元の巣が中央にある一番大きな島のこの辺。双葉の眠らせた蜂は両方とも此処に行ったからね。位置的にもう一つ巣があるとして、目撃された移動半径と風向きを考えると東辺の島の何処か……かな」

「株分けが近くに収まったって感じかしら?」
「多分ね」

おそらくは西から東の風に乗って移動するつもりで、近場に留まったのだ。

もちろん勘違いの可能性もゼロではない。もつと前に株分けした巣であり、これから増殖する間際と言うパターンもありえるのだ。

だからこそ、暫く安全だと仮定してここで手を引くのはありえない。少なくとも東辺の島にある巣を攻略して、最低でも中央にある島のみを観察できるようにしなければならない。理想を言えば中央も制圧が必要だろう。

「では最終過程に入る前に、東辺の島を先に攻略するよ。上陸班は風下に回って探索しつつ、巣が見える位置を確保。風上から匂いで蜂を

おびき寄せる班が先に動いてから強襲。場合によっては狙撃で片を付ける」

「なんだかここに来て強引ねえ」

「そりゃ巢だからね。匂いが無くても巡回する蜂は居るさ」

ジャイアント・ビーは生物だから、同じパターンで攻めることができる。

おびき寄せて分断し、あるいは忌避剤で遠ざけることもできる。しかし巢や子供の居る周囲と言うのは別格なのだ。生物だからこそ偵察網は厚いし、攻撃すれば過敏に反応するのである。

とはいえここで強襲戦をするからと言って、知恵を使わないというわけでは無い。できる限り最大級の準備をしてから行いたいものだ。

「剛盾さんと鯨防人さん。準備の方は？」

「射程距離は短いが何とか投石器が準備出来たぞ。ただし性能は期待するな」

「水流操作を使える者は数名。材料の方は十分に届いております」
以前から頼みである物を使って蜂たちを攻略する。

東辺攻略作戦の成果次第では、中央の島を水棲種族だけで攻め落とせるだろう。

手を抜くつもりはないが、後進を育てる意味でも彼らに任せてしまいたい。僕は何度もここまでくるわけにはいかないからだ。

「何を用意したのよ？」

「前に言わなかったっけ？ 石鹼水を使うんだ。投石器で飛ばすから怪しいけれどね」

途中でまき散らす形になるので散布率は低い。

だがそれでジャイアント・ビーの勢いが削がれるのであれば十分だ。最初は激高して暴れまわるだろうが、その時に攻める必要などない。その後はまだ動き続ける様ならば、水流操作の魔法の出番である。

この水流操作の魔法だが、1m立法メートルほどの水を浮かばせてコントロールする程度の術だ。地味な魔法で僕らの間ではそれほど使い道がないのだが、水棲種族たちは陸に水を上げる時に使うので需

要がある。だから数人程度なら呼び寄せの事が簡単だった。

「強襲戦に際して投石器。上手く掛からない様ならば、ある程度収まった後で移動しながら使用します。狭くても良いから壁を作ってください。その中に隠れて移動しますので」

「心得ました」

数名の術師で何ができるか？ 攻撃魔法ならばまだしも。

その答えは水の壁であり、薄くても構わない。泡の層を突破した蜂は直ぐに呼吸困難になるし、そもそも水の壁にぶつかって勢いを削がれた蜂など怖くはなかった。少しずつ倒して殲滅できるだろう。

もつとも、結果から言えば投石器と狙撃で何とかなった。

相手の偵察圏が判っている事、そして匂いを遮断して接近したことで狙撃位置を確保できたからである。森の中で狙撃できるエルフがいればこそこの話だが、次回以降は投石器の数を増やして何とかすれば十分だろう。

こうしてジャイアント・ビー駆逐任務は終了した。

人虎と社会コミュニティ論

● 帰還途中の乗船時間は最終レポートの作成に充てた。

時間が余れば他の件を考えると、中型船に揺られながらガリガリと石板へ文字を刻んでいく。

ジャイアント・ビー討伐はこのレポートを作成・提出する事により完了する。

特に今回は最初のレポート形式であり、同時に効果の高い討伐方法が見つかったので記録する意味と、水棲種族に申し送りする意味は大きかった。

最後の最後でも簡単な討伐方法が見つかったのだが、これを記録してあり次回も導入できるかどうかで遥かに討伐し易さが変わるのである。やっておかねばまた面倒なことになるだろうし、知恵とコツを伝授してくれる神様の信徒として不甲斐ない。

「鯨防人さん。水流操作の魔法に関して、何処の部族にも何人か居るってことで良いのかな？」

「はい。我々は陸上行動が苦手です。時折休むために、水風呂のような物が必要ですので」

「じゃあその旨を記録させてもらうね」

とても、とても馬鹿馬鹿しい事に最終戦は開始から十分程度で終わった。

格闘ゲームで言うところスーパーアーマーを付けた無敵・ノックバック無しの状態で、巨大蜂の巣まで歩いて殲滅しただけである。何が馬鹿馬鹿しいかと言って、水棲種族の子たちが夏場に陸上へ水を輸送する時の方法……身にまとう形で輸送する方法を使ったからだ。

水流操作の魔法は1立方mの水を浮遊……地面で支える必要があるが、少しずつ移動させることができる。人間がやると常識的に目の前で集中して動かさないと駄目だが、水棲種族ならば身にまとった形で動かしても集中できる。いつものことだから当たり前といえは当たり前前の話だ。それなのに作戦当初にやらなかったのは、1立方mの

量では全身を覆ったとしても突撃して来る蜂の勢いを殺せないからである。

「いや、まさか二人掛かり・三人掛かりで運用すれば良いとは思わなかったよ。儀式魔法みたいなものだと思えば納得できるけど、あんなに簡単に行くとは」

「普通は下級魔法を集団で使いませぬからな。我々も驚いております」

1立方mというのは微妙なサイズだ。

縦に延ばせばスッポリ人間大の生物が収まるのだが、それでは蜂が突撃して来たら針が貫通するし移動時にはみ出る可能性もある。しかし二人でピツタリくっつけば余った水が増え、移動する余裕がないでもない。三人居れば騎馬戦の馬みたいな態勢でもつと余裕が出来たのである。

実際には安全策を取る為、右側と左側に大楯を持たせてフアランクスみたいな態勢で移動した。石鹼水の入った容れ物をバシヤバシヤ投石器で投げていたこともあり、積極的に動き回れない蜂を恐れる者がおらず、集中が解ける可能性が無いのも大きいと思われる。

「ともあれコレが最後の報告書だね。もしかた同じような事があつたら早い段階で、エルフの領域にもギルドを作る予定なんでそつちに依頼を出せば何とでもなると思う。もちろん僕らが作る予定の施設でも良いけどね」

「それはありがたいです。我々は森どころか陸での移動自体が不得意ですので」

ひとまずこれで水棲種族との契約は終わりだ。

彼らから高額な報酬をもらうのではなく、土地の代金を差し引いて適当な額で受け取るようになっていた。その額自体も真珠や珊瑚のような貴重品を物納する形でもOKにしたので、滞りなく支払われるはずだ。彼らは赤色港で売るよりも高額の査定で引き替え、僕らは大都市で買うよりも遥かに安価で手に入れるからwin-winの関係である。

こうすると資金が増えないが、こちらに作る施設で砂糖や塩を手

入れる事が出来れば問題ない。内陸では遥かに貴重品だし、美味しいお菓子や料理を安価に作れるようになるのだから。香辛料も安価で欲しい所だが扱っているバザーは遠いそうなので、仕方があるまい。(帰ったら螺鈿の蒔絵を作ってみないとな。川の多い東領には似たのがあるかもしれないけど、エルフの染料とドワーフの金粉染めとか併用してないと思うし)

貝殻なんかは無償で欲しいだけ拾えた。

昆布・貝・魚の干物も見つけたので、乾物にしてから送ってもらえば魚貝系の出汁が作れるのが大きい。これまでは作れても美味しなくなかった茶碗蒸しがやっとなともになる。砂糖が手に入ることも合わせて、プリンだって作れるだろう。

夢だけは広がるが、手元に何も無い事だけが残念だった。いや、砂糖漬けのフルーツならば山ほどあるがこれだけ食べ続けて来ると飽きて来る。僕の前世は日本人なので魚はバッチコイだけど双葉は既に悲鳴を上げていた。そろそろ内地に戻りたいのも確かだ。せめてパンが豊富にあれば唐揚げでも出来たのだろうが。

「これから帰還して一週間くらいは赤色湾で別件の用事を片付けていると思う。期間中に万が一の事があったり、何か追加で話があったらそつちにお願ひ」

「承知いたしました銀大人。おそらくは入れ違いで届く『商品』を見て長老たちが決断するかと」

以前に漁村で約束していたコンクリート商品の第一便がそろそろ届く。

エルフに手数料を払って直通する便で、人間の領域経由で送る場合の時間と料金を比べて返事することになっていた。波消しブロックに使えるが、おそらくあまり数は普及しないだろう。子供たちの部屋の周囲を固めて終わりくらいになると思われた。

水棲種族との付き合い方次第だが、彼らに肩入れでもしない限りはこちらにはセメント工場を立てる気はない。海を全て制圧されたいとは思えないのだ。それこそ莊園を取り上げられて逃げ出す時の亡命先にでもない限りは実行しないだろう。

● 水棲種族の要請は今後も取引に期待できる感じで終了。

それはそれとして赤色港に上陸し、彼らが預かっている二広からの手紙を受取りに行く。そこには思った通り、戻り次第に事件に協力して欲しいとの伝言も添えて何枚かの手紙があった。

本当は他人の用事で手紙を読むより先に、自分の用事……荘園の経営に関して代官でも決めて手紙で人事を送りたいところだった。しかし僕が居ない所で任命される前例を作りたくない。仕方なくその辺りの構想は脳裏に留めつつ、二広の寄こした最新情報を確認する。「代官が隠してたのか……。そりゃ知られてないよね。だって表沙汰にしたくないもん」

二広に調べる様に返信したが、ポイントを伝えていないわけでもない。

ジャイアント・ビーの件を振り返ればある程度の推測はできると思うが、『事件の被害内容』、『事件の起きている広さ』、『事件の起きた時系列』の三つである。二広自身には、公的な情報から色々調べてもらっている。

この件が難しいのは地方で起きたことであり、代官次第で情報封鎖も簡単だという事である。だからこそこの話は今まで知られていなかったし、現地で調べるのも難しいのだ。

「街道筋じゃないのが幸いだな。死体が無い神隠しって事は魔物じやなさそうだけど……今回の件はどのパターンかな。『夷』かそれとも『しつぺい太郎』か、それとも『山賊茶屋』か」

調べるのは難しいが、パターンがあるので推測できないことも無い。

村社会での人の出入りというのを知っているだろうか？ 村に住む人々がどの程度の頻度で遠出し、どの程度の人数が移動するのかわかる。実は限られているので、人の出入りを追うのは難しくなかったりする。知っている人がいれば社会コミュニティ論の資料などに詳しく載っている。

さて、回答を言うならば『殆ど無い』である。

隣村への移動は婚姻の可能性があるので別として、殆どその村に留まって生活をする。森の海は一般人にとつては恐ろしいので自給自足で済ませ、足りないモノを出入りの行商人なり産業系の人間から購入するのだ。林業ならば木こりや人足は村人だし、船頭なり荷車を扱う馬借がこれに当たる。

「移動経路にある酒場や宿屋で被害報告は無し。じゃあ山賊茶屋はないな。この段階で追える可能性は残り二つだけど……」

山賊茶屋というのは道筋に立つ店が犯人というパターン。

水滸伝などで有名だが、通り掛かった時に相手を見定めて場合によつては毒を吞ませる。弱い奴ならそのまま襲つて山に捨て、強い奴なら毒を効かせから襲う訳だ。

残る二つの可能性はどちらも同じ系統に立ち、犯人がどちらにあるか……という差でしかない。『夷』は通り掛かった商人や僧侶など金持ちと思われる相手の隙を突き、金目当てで貧困村が行うパターンだ。逆に『しつぺい太郎』は村で行われている非道……人買いや悪代官などを旅人が襲うパターンである。

「税の状況的にやっぱ怪しいなあ。代官が隠してたのも不祥事とか税率問題とかだろうし……、ここ最近の侯爵領は羽振りが良いしなあ。他の役人に対して、対抗心を出したくなくても不思議じゃない」

人の出入りが無ければ代官は好き勝手ができる。

貴族の領主じゃないから自分の土地ではない為、いつか離れる訳だから遠慮は要らない。他人と比較して我が身の不幸を知らなければ訴えようもないし、そもそも基本的に貴族以外の人間は王侯貴族の持ち物であつて裁判権など無い時代なのだ。伝えたところで何もしてくれまい。

だから代官と言う者は『許容範囲の中』という限定で好き放題やると考えてよかつた。名君にならなくても税を沢山とつて上納すれば良いので、貴族よりも気楽なのである。まあ全員がそういう狡吏ばかりでもないだろうが……事件の起きた村は地方のわりに税収が良いのである。疑うなど言う方が無理だろう。

「商人や僧侶が居なくなつてれば『夷』だけど、今の侯爵領で能力のあ

る人間が居なくなつて噂にならない筈はないよね。と言う事は『しつぺい太郎』に代官が厄介事を押し付けた？」

大金を持つて移動しているならば目標があるはず。

平和な侯爵領には人の出入りがあるが、商人が無目的にウロつくなんてことはない。僧侶の類だつて基本的には術師であり、あるいは何処かの長候補なのだ。修行の為に出発して行方不明になったのに音沙汰が無ければ問題になるだろう。少なくとも何処かで調査したという報告があるはずだ。

それと重要な事だが、そういう人物の行方不明が何件も重なるのは不自然である。むしろ傭兵たちが魔物の討伐を依頼されて、相手のレベルを把握し損ねて全滅する方がありえるだろう。魔物の存在が知られてない事件の序盤などは、そういう話はよく合った。

「今のところ思いつける可能性は三つ。一つ目は代官の言う様に人虎なり魔物が本当にいて、死体を食うなり埋めるなりした。二つ目は何処かに異種族の村なり隠し田でも作つて、そっちに移動した。第三に、どこぞの武芸者みたいなのが偶々見かけた人買いでも蹴散らし、その一件を覆い隠すために売られた人々を行方不明扱いにした……つてところかな」

魔物が一々死体の処理をするとも思えない。

そこまでやる知能があるならば、既に他の地域に移動しているはずだ。ゆえに第一の可能性は低く、もしそうならば包囲網を築いて村ごと焼き払う準備でもすれば向こうから勝手に出て来る。知恵ある魔物がそこまでするとしたら、侯爵領を混乱させる為だろうから。

第二に貧困に喘ぐ人々が、隠し田を造つた支邑なり異種族の村へ逃げ込むという物。これは周辺地域を総ざらいすれば終わってしまう話なので、レポートの隅にでも書き込めば終了だ。だから現時点でもつともあり得る可能性としては、誰かが人買いと代官の癒着関係を勝手に暴いたという事だろう。

「貧困村でも……いや、だからこそかな。子供は死に易いから多めに作るし、他に娯楽も無い物ね。そして増え過ぎたら子殺しをするなり、売り払う事になる」

昔はよくあった話だ。水棲種族ほどではないが人間も子供を沢山つくる。

途中でバタバタと死ぬのを計算に入れるのだが、それでも死なずに無事を祝う余裕があるはずもない。だから子殺しの話はあちこちにあるし、無事に過ごせてもちよつとした困難で売り払う事もある。物語になっっているパターンが多い。

代官などに見初められた『白羽の矢』、器量よし売られる『天神参り』、他にも『狒狒』などが生贄を要求して来たというのもある。『しつぺい太郎』はその逆襲に成功した……というか、余所者が大通連のように空気を読まず悪人だと判じて殺してしまう場合であった。

「二広さんにこの話を伝えて追ってもらう事は出来るけど……。その前にすることがあるな」

もしこの件が人買いと代官の癒着ならば、解決だけなら難しくはない。

売られていった子供たちは第三者に買われているのでどうしようもない可能性があるが、人買い……というか地方回りの口入れ屋に少しばかり注意をすれば良い話だ。傭兵を仲介している連中とは別口だが、同類には同類の集まる寄り合いだって存在する。

だが、その辺の話を追求する前にやっておくことがあるだろう。優先順位を考えればそれほど高い方ではないのだが、この場所と今の関係性が無ければ尋ねる事が難しい質問をする為だ。

「申し訳ありません。龍学才殿に面会をお願いしたいのですが」

「ただいま留守にしておられますが、御戻り次第にお伝えします」

手紙を受け取ったのは水棲種族たちが赤色湾に作った拠点である。彼らは侯爵家とも緩やかな友好関係を築いており、それなりの立場と才能ある者を送り込んでいた。龍学才というのは龍頭の水棲種族であり、龍に関する特殊能力は特にないがそれと知られた才人であった。要するに大使でありこのTOPみたいなモノと言えるだろう。

子供が居なくなる話の一つに、『赤い靴と異人さん』という話もあるのだ。子供を売るにしても、住み込みで働かせるにしても水棲種族は丁度良い相手ではないだろうか？ 彼と腹を割って話すならば今だ

ろ
う。

とある些細な公共事業

● 先ほど考えた人虎事件の様相はあくまで可能性の問題だ。

所詮はデータを見て適当に判断しただけで、現地で調べてみたらまるで違うという可能性もある。

しかし水棲種族と腹を割って話し合い、コツソリ裏を取って穏便に済ませるならば今の内だけだ。今ならばお互いに良い関係だし、誰かが迷惑を駆ける前に鎮火できるのだから。

「初めまして。船旅はいかがでしたかな？」

「非常に満足できました。仲間の中に船酔いした者が出ましたが、人間の中には合わない者も居ますから仕方ないものと思います」

僕は腹芸が得意ではないので、出来るだけストレートに話をするつもりではある。

しかし今回の話は推測が当たっていたとして、誰も得をしない話なのだ。変な話の持つて行き方をすると相手を刺激してしまうので、あの程度は出方を探る必要があった。

何しろ農奴はいても奴隷制度の無い国である。代官は不正を見逃し、村人ならば子を売り、一部は町の一角に遊女なりになっていると思われるが……水棲種族ならば労働力として子を買取ったという話になる。実際には奉公の勤め先だろうが、風評的によろしくないのは同じだった。ある程度はオブラートに包んで話すか、性格を見定めながらジツクリ腹を割って話しても問題ないかを見極めないといけない。

(本当ならばここまでする必要はないんだよなー。でも放っておくと方々で延焼しそうだし、この辺で消火しておかないと)

何が最悪かといって、全部明るみに出ると侯爵家の問題になる。

ソレを暴いたのが緋家に所属する二広とあっては侯爵さんも良い顔をしないし、代官を始めとした役人たちは立場を無くすだろう。不正を暴いてくれてありがとう……となるわけがなかった。

だからこそ少しずつ対策を立て被害を抑えにかかる。もし本当に

魔物だったら胸を撫でおろして討伐に行くレベルだろう。獸頭人身の種族だったら……それはそれとして静かに暮らしてたのだろうし、やっぱり迷惑な話だよね。

「ふむ。何か御不満なり御懸念でも？」

「いえ、そういう訳でもないのですが……。時に龍頭の水棲種族の方に聞くのも失礼なのですが、人身御供を捧げられて困ったことはありませんか？ 僕も旅の途中で困った申し出がありました」

話の切り出しに困った僕に龍学才さんが伺って来た。

せつかくなので流れに乗り、僕の体験談として話をする。まあバザーとかでも持ちかけられた話でもあるので、あながち嘘でもない。「ホツホツホ。それは大変ですな。我々も似たような経験がありますぞ。人の肉など食わぬし異性に催さぬというのに贈ってよこされたという」

「善意だから断り難いのですよね」

何度も言っている様に龍頭の水棲種族に特殊能力などない。

しかし、ありがたがる人間はそれなりに居るし、人身御供を捧げられて困った事もあるそうなのだ。何しろ彼らは人間を食う事も無いし、種族が違い過ぎて性癖に刺さらないとか。その例に今回の話を引っかけてみた。

そういえば有名な冒険小説でも、主人公の女魔導師が敵の魚人にそんな事を言われたことがあったっけ……。

「僕は神職なのですが、旅の途中で助けた村にお礼として村人を神に捧げられるとか言われて、正直困ったことがあります。それを今回の途中、バザーで他国の商人に戦争奴隷を勧められた時に思い出しましたが……何分、この国では奴隷売買は禁止されていますから」「それはそれは……」

細部は違うがそれなりの形に整えて話してみた。

多少強引などころはあるが水棲種族には無関係のラインで攻めてみる。実際にはバザーで戦闘奴隷を売っていたのをチラッと見た程度で、売り込みなど掛けられてはいないのだが……。

此処で重要なのは、この国では奴隷売買は問題だという事だ。

農奴が奴隷同然とかいうオチは置いておいて、水棲種族が他国と同じ価値観であるならば気が付いていない可能性もある。此処に居ないとか売られた方も納得した上で居るならば良いが、もし戦争で捕まって奴隷になった者のように隙あらば逃げ出そうとする者が居たら面倒なことになるだろう。

「私の方からも懸念事項がありましたな。別に龍頭でもないのですが、親しくして居る者たちが同じような話で難儀しております。断るに断れず、どうしたものかと」

ここで竜学才の方も強引に話を変えて来た。

僕があげた事例を用いつつ不自然でない程度に投げ返して来る。主語は水棲種族でもなく奴隷でも奴隷商人でもない曖昧な状態で、親しくしている者が何をさせたいかという目的もあえて入れていない。会話の流れるには不自然ではないが、その部分だけ抜き出したら何の事か分からない言葉である。

(投げ返されたけど皮肉じゃないから、対処法を尋ねてるって意味で良いんだよね？ でもどっちの対処なんだろう)

相手の話をそのまま返す『お前もそうだろ?』という皮肉があるらしい。

しかし今回は僕の方で奴隷押し付けられても困るよね……という話だったので、反射する意味がない。つまりはそのパターンではないという事だ。

僕はこの手の会話をした経験が少ないので良く分からないが、『奴隷を持っているけど何か対処法はないかな?』という意味であると思われるが、『今回の件で水棲種族と似たような部族が困っている』という意味かもしれない。前に予想したが、獣人族が居たとして代官に悪者を押し付けられている可能性があるからだ。

「期間を定める年季奉公の契約や、本人たちも納得する程度な用事を済ませれば解放するなどはいかがでしょう。例えば何年後に契約を終えるとか、遠方への往復を何度か繰り返し返せば契約終了ということですね。もし獣頭人身の方々ならば生活環境に留意は必要でしょうけど」

腹の読み合いは得意ではないので、もう直球で行く事にした。

まずは年季奉公の契約か遠方への使いで遠ざけろと提案しておく。さっさと腹を割って話し合った方が早いだろう。僕の方にこの件で稼ぐ気はないので、忠告をするだけしておけば良い。話を聞かないならばそれまでだ。

それはそれとして獣人が関わっている場合は、海の上に移動すると目立つとか、そもそも会場が苦手という可能性がある所以对処が必要かもしれない。

「おお、まさにまさに。実は方々が路頭に迷うて、自身を買ってくれとおっしゃっておるのです。しかし付き合いが長いゆえにどうしたものかと。無碍には出来ず、かといって山ほどの財宝を持っておるわけではありませぬ。それに遠方への使いと申しまして、色々とありましてな……」

(あー。本当に獣人居るのね。しかも一番面倒くさいパターンだ)

おそらくはその領地全体が貧困に喘いでおり、獣人一家も子供を売る羽目になった。

しかし今回の件で人買い問題が明るみに出た上、獣人が居るという事もバレてしまったのだろう。そして何よりの問題が、売り先に困るということだ。水棲種族が引き取ろうにも事件となっては難しいし、高跳びさせたり匿う程に予算があるわけでもない。

何が一番困るかって、やはり事件となった以上は追及の手が伸びるという事である。獣人達全体が搜索される訳だし、匿ったら水棲種族も確認される可能性があるのだ。もし一人・二人ではないのであれば、複数人の移動がおきれば悪目立ちしてしまうだろう。そうなら追及される可能性どころか、確実に調査の手が入るに違いあるまい。

(うえー。どうすれば良いんだこれ？ 僕の勘違いだった方がマシなパターンだぞ)

何が問題かって、誰もが得をしない事件に僕が首を突っ込んだら火傷をしかねない事だ。

傍観者ゆえの気楽な助言は出来ても、親身になって引き受ける程の

予算や名望があるわけでもない。そもそも動き出した事件である以上、二広程度ではどうしようもないだろう。

止められるとしたら紅包さまか、それとも侯爵さんか。いや……役人の発言力が強い現状で、それも難しいだろう。無かったことにするとしたら彼らに譲歩する必要があるし、侯爵さんからすればむしろ追及して役人たちが叩きたいまであるはずだ。それゆえに侯爵さんに伝える事が出来ても、事件を無かったことにはできない。

● 事件を無かったことに出来ない以上、どうにかして獣人を匿う必要がある。

食料やら日々の暮らしに関して水棲種族を中心になってカンパしつつ、何かの形で回収できれば問題ないだろう。それこそ労働を押し付ければいい。

ここで水棲種族に頼って海に出れないのは、そもそも種族的に難しいのか、あるいは慣れない仕事では不安と言うのもある。できればその辺も解決したいところだが……単純労働で何か『不自然ではない仕事』を見つければいいだろう。

「もうここまで来れば腹を割って話し合いましたよ。ひとまず重要なのは名目です。彼らが離れても不自然ではない理由が」
「腹芸は疲れますからな。しかし名目ですか」

極論を言えば、追跡調査が無いならば何とでもできる。

人食いの化け物ならばいざ知らず、ただの種族であるならその後被害など出ないのだ。しかしこれまでの人買い事件を押し付けられた以上は、最低限の調査が入るはずである。

調査が入った時に何家族かが姿を消して居たら怪しいどころではない。その後の調査自体は『成果なしで打ち切り』という事になるとしても、最初の数回は追求をかわす必要があるのだ。

（何が面倒くさいかって、二広に調査をすべきだと提案したのは僕なんだよな。公式記録の調査から、傭兵を雇った裏の調査までしてるだろうし。いつそ紅包さまに頼っていてくれないものか）

少なくとも代官が不正に行方不明者を隠している所までは調べて

いる。

その行方不明事件を『人虎がやった』ことにしているのが問題なのだが、いずれ税率やら何やらで追及されるだろう。幾ら何でも必要以上高い税を取りながら、その事がバレない筈はないからだ。

ゆえに数年ほど匿えば問題は無いし、もしその間に見つけた仕事が順調ならば戻す必要もない。だが現状では集団で移動するだけで目立ってしまうのだ。

(移動するのに不自然じゃない理由ねえ。でも普通は移動しないからこそ、僕も事件の裏側に気が付けたようなもんだし……どうしたもんか。日本だったら『お伊勢参り』と『租庸調』に『公共事業』あたりが定番だよな)

社会コミュニティの成り立ちからして、田舎では人の移動がまず存在しない。

だから何かしらの大きな行事に関して、理由を付けて移動するのが定例である。しかし僕がやりたいとしたら『お伊勢参り』のような神殿関連の奉納旅行だが、うちの神様ではネームバリューが無いので問題だ。青悟に借りを作つた上に、大地母神の信者が増えるという得にもならない方法は却下である。

次に『租庸調』だが、昔は税金を納めるのも命がけの仕事であった。都に持つて行くことも含めて税金の一種であり、そういった理由があれば人はおかしいとは思わない。ただし代官が代行業務を一通りやってる村でそれをやるのも妙な話だ。

「何らかの公共事業を起すのはどうでしょうか？ 昔から人を募つて公の行事をやり遂げるのは良くありました。紅家辺りに話はずけねばなりません、神殿を造るなり大型船を作るなり、あるいは港湾の整備でも良いでしょう。問題の村で石材なり木材が切り出せれば上等です」

「それならば理屈は通りましようか。しかし……大事ですな」

最後の一つである公共事業は昔からある非常手段だった。

ピラミッドも公共事業の一つで、奴隷が働いていたものの食事とビールが提供されて割りと待遇が良かったそうだ。日本で言うの大

仏やらお寺の造営などになるが、村々から数名ずつあるいは少数の村から大規模に集めることがあった。

この件で問題があるとすれば、幾らなんでも大事過ぎ。

紅包さまを経由して侯爵さんに認めてもらうにしろ、必要性のある工事でなければ予算が降りまい。

「龍学才さんでも不自然とは思わないのですよね？　ではもう少し規模を下げて河川の堤防造りや……。待てよ？　要するに公の命令なら何でも良いんだから……」

「なんぞ名案が浮かびましたかな？」

元ネタとして公共事業にこだわって考えていたが……。

よくよく考えれば移動する理由があれば良いし、政府機関がその理由を提供すれば問題ないのである。

究極的に言えば、役人一行が適当な理由で獣人たちを人足として徴発すれば良いのではなからうか？　その後別件で用事を押し付け雇ってしまった良いのではなからうか。

「幸いにも今回の件で事件解決を頼まれた緋二広には話がつきます。ですので山狩りに『彼ら』の力を借りました。そこから他の領地に隣接する場所まで移動するとして、食料その他は出しておきます」

「なんと！　疑われている当人たちに搜索を頼むとは！」

公共事業と言う程ではないが、山狩りも公から下々に下す役目である。

主に猟師たちを動員して森や山を搜索する訳だが、別に探されている当人たちを動員してしまっても構わないだろう？

そして今回の件を頼まれたのは二広であるし、彼が事態解決に乗り出すのも選択肢の一つとして常にあったはずだ。後は予め根回しした上で、獣人たちを雇ってしまえばよいのである。

「その上で、別件の人足の仕事でも用意しておきましょう。雇われても良い、雇われずとも良い……と『彼ら』以外の山狩り参加者全員に声を掛けるのはいかがでしょうか？」

「ホッホッホ！　面白いですね！　彼らへの話は儂の方から付けておきましょうぞ」

こうしてありもしない事件を解決する道筋は立った。
後は各方面に根回しをして確実に最後まで被害者抜きでやり切る
だけである。

密室での解決

●
それから根回しを測るついでに、色々な情報を仕入れてみた。

するとやはり例の村は税が高いそうで、子売りである可能性が高い事。獣頭人身の種族の伝承は他の地域に存在する事。それらの話を傭兵の口入れ屋経由で聞いたり、大規模な査察が始まるかもしれないから余計な動きはするなと忠告したりもした。

そして関係者が集まってくると紅包さまもやって来ていた。二広に協力したのか、あるいは龍学才さんが呼んだのだろうか？

「今回の近因は見栄を張った代官が税をとり過ぎて寒村化したことです。おかげで子供を売って糊口をしのぐ農民が出ました。しかし遠因は魔王率いる魔物の侵攻で、それまでの問題がおざなりにされて一部は大きく拡大したことです」

「直接の原因が代官の仕業というのは判るが……」

「魔王の？」

そのまま報告しても華が無いのと、誰も得をしないので魔王のせいにした。

あながち嘘入って居ないし、その問題もいつか解決しないとならないので、ついでに提出した形になる。

目の前の『代官の人虎偽装』、直近で片付けた『ジャイアント・ビー駆逐』、その前の『緋雁原のヌシ討伐』、僕が南領にやって来た時の『アインデッド掃討戦』を順次並べていく。関係者の目が自分の関わる問題にまず目が行くのは仕方ないだろう。

「みなさんがご承知の通り、魔王はこの国を滅茶苦茶にして今も禍根を残しております。しかし今示しました事件は、それぞれに昔から根があった物です。四方貴族と中央の軋轢は魔物対策のために棚上げになり、各地に潜在する脅威がズルズルと先延ばしになった為でしょう。人虎の話は代官が騒ぎ立てただけでしたが、たまたま獣頭人身の種族が温厚だっただけです」

「むっ……その問題か」

「それを言われると……」

この国は中央と四方貴族との間柄が良くない。正確には皇帝陛下の外戚関係など親しい貴族が一時的に上に来て、中央プラス外戚になった四方貴族の誰かが他の貴族と争っているというべきだろう。上手くやったり問題を起こして再編されたりして来たのだが……。

魔王率いる魔物の侵攻は、その解決を有耶無耶にってしまったのである。まあ彼らからすれば、混乱している国に漬り込まぬ理由などはないのだろう。さぞ侵攻し始めた当初はやり易かったに違いあるまい。

「四方貴族が団結すればアンデッドを一度退治して、浄化する祭りはいつでも行えた筈です。これ以上は不敬になるので今回の件に移りますが、代官の場合を例に取れば好景気で功績を挙げる他の役人に対して見栄を張って功績争いをしてしまった……町と農村の乖離が問題になります」

「言ってくれるが簡単にはいかんのだぞ？ 原因というのは認めるが」

アホな話だが交易の結果増える税収と、農耕を繰り返す税収を一緒にしやがった。

都市部での交易では直接税などなく、あくまで入荷に関わる税が増えたに過ぎない。それ以上は商人たちの寄り合いが自ら提出する、お札以上の物ではないのだ。その辺を理解せずに税を搾り取るとか呆れてモノが言えない。

地方の農村を経営することで得られる収益は、食料や特産物が増える事による国力そのものの増大だろう。食料生産量と人口増大の比率こそを誇るべきなのに、減らしてどうするのかと言いたい。

(というか紅家の都市部が登り調子なのは南領が身内の取引で完結しちゃったからだし、健全化するの根が深そうだな。足りないのは穀物だけだそれだって大規模農業をやれば何とでもなるし)

これから穀物の価値が上がるのだから代官も真面目にやれば良かったのだ。

目先の功績に惑わされて悪代官扱いとか、運が悪いとか先行きの見えないボンクラなのだろう。この場合は盤面が見えないという本来の意味での盆暗だが。

南領のブロック経済化と侯爵さんの態度は気になるが、僕とは身分の違う人の話なので気にしても仕方がない。動向には注意しつつ静観するしかない所だ。

「失礼しました。その辺は追々何とかなるでしょう。その上で『代官の人虎偽装』をまずは片付けたいと思います」「うむ」

とりあえずデリケートな話はここまでだ。

目の前の話を片付けつつ、できるだけ『誰も得しない』状態から『少しはマシ』な状態まで持って行きたいものである。

● ようやく本題に移るが要は随分とシンプルだった。

結局のところ、『大袈裟にしない』以上の目的も方法も無いのである。大袈裟な話題になりさえしなければ何とでもなるし、大袈裟に成れば方々のメンツが台無しになる。

だが幸いにもキーパーソンになる関係者が此処に揃っているので、介入をして方向性を整えるのは難しくないだろう。

「本書は緋家の将、二広に対し持ち込まれた要請に対しての基本計画です。まずは正面から乗り込んで山狩りを行う予定です」

各人の前に提出した書類は構想をまとめたものだ。

近隣の代官や貴族からの要請で周辺の『人虎問題』の解決を持ち込まれた話だが、役人がその行動を許可するところまでは進んでいる。本来は緋家の将に頼む話ではないが、彼は武芸者でもありその勇名に代官や貴族が縋ったという形ならば無碍には断り難い。だからこそ二広も困っているのだ。

そして許可が出た以上はこの段階までは何の問題も無く、他所の将が領内で好き勝手をしないように見張る役人に関しても、むしろ居てもらった方が良いという塩梅である。

「その折に問題の村から獣頭人身の種族を含む相当数の住人を徴発

し、近隣の村まで捜索の手を広げたが何も無かった。『いや、元も何
も無かったのだろう』という結末になるのが理想ですな」

山狩りを行うのに現地住人を使うのは常套手段だ。

強力な魔物を討伐する場合は兵や傭兵が付き添う事もあるが、その
辺に関しては問題ない。二広自身が武芸者であり、必要ならば兄弟弟
子の大通連や紅包さまを呼べるのである。戦力自体は問題ないし、紅
家から戦力を付けるならば紅包さまの手勢をねじ込んでも不自然で
はなかった。

そこまでの話は書面にも書いてあるが、ここで質問すべく手が上が
る。

「そうなるのが理想的ですな。しかし、そうならなければどうなさり
ますかな？ 例えば『取り逃したのではないか？』や『恐ろしくてワ
ザと逃がしたのでは？』と疑問に持たれた場合です」

「龍学才殿の御懸念も当然です。それに関しても対策は立てておりま
す」

流星は異種族、僕らがメンツを気にして口に出来ない事を平然と聞
いてくる。

まあ彼もその辺を尋ねるのは自分の役目だと心得て居るのだろう。
一番角が立たないからこそ口にしたと思われた。

ひとまずこの件に関しては幾つか問題があるので、順を追って解説
する為に周辺区域を簡単に地図として描く。

「まず『取り逃がした』という懸念に関しては、詳細な調査と数の統計
を確実に取ります。周辺の地図を詳細に区分けして全ての区画を捜
索し、建物・人数などを可能な限り追いかけます。役人や兵士たちか
らも『ここまでは普通やらない』と言われるほどに徹底すれば良いで
しょう」

村一つだけではなく、その周囲を二十から三十に分割する。

A～Zの区割りと洞穴などオマケ込みでデータを残し、その全ての
建物を捜索し、住んでいる人間に付いて複数名で調査をするという訳
だ。

もちろん獣人たちに関しては村人と僕らの誰かが付き添う事で、不

審な行動はなく村の住人であるという証言も用意する予定である。

「全ての場所を調べ相互に監視し合えば、まず土地に関しては問題なくなりません。次に人間に関しては、村に残り続ける者たちも、移動してしまう人間に関しても追跡調査を行うという計画を立てます。字数が全く同じであり、旧知の人間から見ても本人だと思える者だと判断出来れば良いでしょう」

この監視に関しては、役人が付き添う意味が出て来る。

詳細な地図を作って丹念に調査し、全ての場所を調べていると判れば良いのである。調査自体はするし、怪しげな場所もなければ納得するだろう。そして役人と言う者は、人間の移動に関しては人数が揃っていれば安心する者である。

追跡調査で何処に誰が住み、暮らしていけないからと転居した者が何処にいる……と人数が合っているならば普通は追及されない。その上で旧知の村人に引き合わせるなり、僕らの方で『あの時の人物と出逢った』と証言しても良いだろう。別に海外に高飛びさせる訳ではないので問題は無い。

「なるほど。では実力に関しては？ 申し訳ありませんが陸上に関しては疎い物で」

「それに関しては同時並行で別の場所に居る魔物討伐を行います。……大通連という武芸者が二広殿や紅包さまと同等の実力とされており、彼が実際に魔物を狩って来れば良い証明になるかと」

この件で大きいのは死体が残る事である。

魔物の実力はおおよそながら普及している。死体が消える魔物ばかりではないので、討伐したばかりの魔物の死体を持って帰れば良いだろう。

僕らにとって重要なのは、大通連と言う何をするか分からない男の行動を縛り付けられることだ。少なくとも魔物を退治している間は問題行動をしないし、監視を兼ねて兵士でも同行させれば実力も確かめられるはずだ。

「そして何年にも渡って被害が出なければ人虎というのが嘘であったと知れるでしょう。そもそも代官のでっち上げのような物ですし、死

体に關しては山狩りすれば一つ二つは出て来る物です。何年前の死体が判りませんが」

仮に今後十年追跡調査するとして、一切の被害が出ないとしたら？ 人虎問題など無かったと沈静化し、問われるとしても『以前の被害者は何処へ行ったのだ？』という事に収まるだろう。そして普通の人間はともすればアツサリ死ぬモノである。

侯爵領は早期に解決されて平和になったが、魔物じたいは出たこともあるのだ。周辺の村まで搜索の手を伸ばせば死体が転がっているなんてことは良くあった。それが魔物に殺されたのか、盗賊に殺されたのかは別として。

「では私からも質問をしよう。獣頭人身の種族とやらを逃がすのは良い。しかし他の地域に移動させて問題は出ないのか？ こういつては何だが私の村から移動する人間など部下くらいだが、商人もだが新しい住人が来れば注目するぞ」

「二広殿の懸念も当然ですね。そこは幾つか案があります」

「あの件ですな？ 長老たちからもお願いすると」

今度は二広の方から質問が出た。

大通連がやって来ないと知ってあからさまに安心していたが、彼の領地でも人は滅多に動かないのだろう。彼の領地は緋雁原の出口のはずで、そんな立地でも滅多に人が移動しないならば疑われるのも当然だ。

その説明をする為、今度は僕の莊園と水棲種族の領域でも、問題の村に近い場所や川を矢印で繋いだ。

「波を小さくする人造の岩を水棲種族の方にお売りすることになりました。値段を下げる代わりに、彼らに提供する食費や旅費を負担してもらいます」

「我々としてはその岩で子供たちを守るので文句はありませんぞ。古き友人にも面目を施せますからな」

波消しブロックを量産して、期間限定で値段を下げる事にした。

そうすれば水棲種族も購入する気になるし、輸送料の掛かる人間の領域で運ぶ為、獣人たちを使うならば多少値段が出て仕方がないと割

り切れるのだ。

これでしばらくの間、人間が動き続けるルートに理由が付く。追跡調査されても困らないし、別に匿ったりエルフやドワーフの領域に逃がしたりもしないので、探られても痛くないのだ。

「あの岩か？ 私の方も皆用に良いと聞いている」

「はい。必要でしたら緋家や紅家の砦建設にお売りできますし、一部は献上できます。その上で他にも人手を要する仕事を臨時に増やし、口入れ屋経由で募集させても良いでしょう」

コンクリで造った製品は、輸送中に役人や兵士が確認したそうだ。

密輸で無いか調べる必要があるのが当然だが、その時に形状を要求して変更できるならば良い品だと報告があったらしい。まあ下っ端荘園主である僕からならば、献上品として買い叩けるといふ下心あつてのものだろうけど。

ともあれこれで不自然ではない人の流れができ、臨時の仕事にあり付けば村人たちも当面の金を工面できるだろう。基本的に被害者はでないし、なんだつたら今回問題を起こした代官も『行き過ぎた忠誠ゆえ』という理由で弁護しても良いかもしれない。

と言う訳で粗筋は出来上がったので、後は解決するだけの運びとなった。

第四部

新年度の開始

● 直接に関わるのも変なので人虎事件は間接的にしか知らない。

しかし概ね平穩に終われたのではないだろうか？ 獣人たちも人足になったり僕の村とか水棲種族が持つ沿岸拠点に移動したとか。

その段階で初めて知ったのは、これまで獣頭人身の種族が辿った歴史だ。妥当と言えば妥当なのだが、彼らは戦乱の世の中で数を大幅に減らしていた。水棲種族と違って逃げる場所がないのも大きかったらしい。

「君たちが僕の村に来るって事で良いのかな？」

「はい。お世話になります。この御恩は一生掛かってもお返しします」

数人の獣人たちが村に戻る道中の僕と合流した。

獣頭ではあるがやはり特殊能力などはなく、生活魔法で人間に変身できる以外は特に変わった所はない。どこか優れている部分もあるかもしれないが、生活魔法の一つ分が固定枠だと考えるなら微妙な所だろう。

彼らの村で妙な所があったとしたら、いやに警戒嚴重で外からは直接移動できない小部屋が幾つかあったことくらいだと二広に言われた。おそらくは生活魔法で変身を覚えるまで隠れて生活するスペースだろう。

「それは良いですから普通に暮らしてください。まあ生活習慣の差とか、実験的な農業とかで違和感があるかもしれないですが。強いて言うならば率先して働いてくれればありがたいくらいですね」

「判りました。そのようにします」

スペースの問題で彼らは組み入れた……もう直ぐ到着する村に住む。

農地を統合して大規模化した場所で、今年からは雑穀以外に小麦や

ら豆を本格的に増やす段階だった。これまでは殆ど牧草地以外に何も無い同然の荒れ放題だったので、人手が増えるのは正直ありがたかった。

なお牧畜に関しては、放置されていた穀物を沢山やった個体と、普通の分量だけやった個体の識別はされている。前者は二年目以降も育てる個体を多めにするが、一部は冬の間処分しているはずなので、戻ったら肉が楽しみである。まあ半年も肥育して居ないので大したことがないと判って入るのだが。

「そういえば村で何か特別にやっていた事とか、面白い穀物とかありますかね？ 家屋に関しては魔物対策として実験的な建物という形で用意しますが」

「何から何まで申し訳ありません。ですが特にこれといった物は……」

残念な事に特産品などはないらしい。

この辺りには無い品種だとか根菜でも良いのだが、何処でも採れる物ばかりだとか。まあ目新しい物があれば代官が栽培を奨励するよね。

ともあれ獣人たちに関してはコレで終わりだ。彼らを受け入れる為の長屋みたいな場所はあるし、実験施設という理由で外から見えない家屋を幾つか建築してしまえば問題ない。いずれ消えていく種族の宿命だが、それほど数が必要ないのだ。

(ようやく出張が終わったな。出稼ぎにしては現物支給が多いけど、まあ来年以降に期待しよう。ひとまずは村に帰って計画の立て直しだね)

砂糖や塩を生成できる土地、そして産物の買い取り場所。

そこが僕の得た最大の利益であり、交易としてコンクリート製品の代わりに真珠やら珊瑚を手に入れる。他にも安価なところで干物やら、高価なところで香辛料も送ってもらおうがこれらはオマケでしかない。

宝石類は都市での原石取り扱いよりはるかに安く手に入れたとはいえ、加工して得ることを考えたら時間が掛かるだろう。近場で売る

と水棲種族とモメかねないので、中央方面への道が安全になる来年以降まで収入源としては計上できない。

（今年の大目標は万鹿柵以北の確保をする作戦と浄化の祀り。そして最初の収穫祭か……それに向けて色々準備しないと。来年は来年で考えるのも面倒だけど）

戦闘関連は基本的に『待ち』の態勢だ。

緋家の勢力圏の北限である万鹿柵の砦周辺を抑え、周囲に柵やら堀を築いてアンデッドの被害を無くした。もはやアンデッドの無限湧きには問題ないと周囲に喧伝しつつ、縁戚のある貴族が援軍を送って欲しいと要求するのを待っている所である。

その辺に関しては新入りの僕が関与するところではない。戦線を押し上げるといふ話になったら援軍を兼ねて、バリケード用の荷車・戸板・梯子などの物資を送るべく少しずつ備蓄して居る所である。だから荘園経営に専念できるのはありがたかった。

● 荘園に戻つてくるとなんだかホっとした。

まず目にするのは組み入れた村の方だが、目に見えて変わった所と言えば作業所を兼ねた集会場が完成し、こちらへ移住する住民用の長屋が増築されたくらいだ。何しろ大規模農場をみんなで作業するから便利だからだ。

こちら側に関しては獣人たちに何をするかを軽く説明しつつ、三圃式農業を二段階目に移すくらいである。

「君たちにはここで働いてもらうよ。ひとまずあそこの長屋を一つ割り当てるけど……。作業はあそこでやってる感じでみんなで耕作して、みんなで牧畜するって感じかな？ だから他の人を真似すれば良いから迷う事はないと思う」

「承知いたしました。見たところ大きさ以外に不思議な所はございません」

「あれなら直ぐに混じって働けそうです」

まあ大規模農業自体は既存の農業の組み合わせだからね。

三圃式にしてる部分だって村人が減ったから、少人数で作業する意

味で自然と受け入れられてるのが大きい。

そう言えば緋家でも精霊が移動する時間帯や季節が決まってるから、牧畜と農業の入れ替えが受け入れやすかったというのがあると聞いたことがある。やはり必要は発明の母なのだろう。

「税は……見ての通り取れるほどじゃないから省略するとして、労役に関しては村で使う施設をみんな建てて。建築とか無理な人は、煉瓦を型枠に嵌めたり乾かして作る作業をしてもらおうよ。村の入り口近くにある建物が煉瓦造りなのは、アンデッドとか魔物対策ね」

「問題ありません。自分たちの使う場所なら働き甲斐もあります」

とはいえ魔物も減っていく筈なので、そろそろ仕事が減って来る。税がちやんと取れるならば労役なんか押し付けなくても良いのだけれど、収穫はまだまだ先なので何かしら作業をさせておきたかった。どうせならば村の発展に役立つ物が良いだろう。

（本村の方は工業、こっちは農牧として……何が要るかな？ いずれは道とか色々整備するにしても、それは急ぐほどの事じゃない。長い目で見て先に用意した方が良い物……）

牧畜に関してはもう弄るところが少ない。

肥育なんて時間が掛かるし、家畜を殖やすにしたって時間が掛かる。購入するほどの予算がないので、うちの文物を欲しいという貴族が現れたら、物々交換で家畜を貰うくらいだろう。

では農業はと言われると、こちらも大規模農業を三圃式農業で実行している途中なので弄り様がない。小麦・大麦は植えている所で、果実のなる樹だって桃栗三年柿八年と言うくらいだからどうしようもないのだ。米でも手に入れたら水を引いて田んぼでも作るかもしれないが……。

（水を引く？ 今の処は足りてるけど、大規模農業が成功したらもつと水を使うよね。堀を増やして防衛用に使っても良いし、何だったら水棲種族が来れるようにしても面白いかな。流石に川で輸送は難しいだろうけど）

ふとした思い付きだが悪くない様に思われた。

途中で侯爵領やエルフの領域を跨ぐので、川を使って重い物を運ぶ

というアイデアは難しいと前にも言った覚えがある。だが水路を整備して置いて、水害が起き難くすると同時に、農業用水に使うのは悪くないアイデアだと思われた。この水は本村にも流れていくし、海まで続く大規模な整備をしなくとも本村との行き来に使えるだけでも面白いだろう。

「労役での施設に関しては今は家屋中心ですね。魔物への防御用を兼ねて村の入り口を中心に煉瓦造りを何件か。それらが一通り揃ったら、今度は水路や溜池でも造って日照りに備えたり、水棲種族の人が来ても困らないようにしましょう。とはいえ、先ほど言った通り家が優先ですけど」

「はい。お任せください」

これでこちらの村に関しては問題ないはずだ。

本村に戻り次第、代官的な役割を決めて明確なリーダー役を設定して終わりである。

ああ、でも顔合わせするなら今の内に内定くらいは伝えておくべきだろうか。いきなり呼び出されるよりは、いずれそうなる就先に伝えられた方が本人の為であろう。

「おーい、六耕！ こっちに来てくれる？ 新しい人たちの紹介がために話があるからさあ」

「へーい！ 今行きやす」

緋六耕は近くにある六番目の村出身の元傭兵だ。

三人が足を洗って居ついた連中はいるが、元農民とあってここを任せていた。残り二人ほどいるが一人は巡回要員で普段は何処に居るか分からない為、彼を呼んで済ませておく。

「この人は緋六耕。このリーダーでいずれは代官補佐になる予定だよ。この人たちは前に手紙で伝えてた獣頭人身の人たちなのでフォーよろしく」

「ちよっ！ あっしのガラじゃないっていったじゃないすか」

「それがそうもいなくてね……補佐で抑えるから我慢しといてよ」

獣人たちが挨拶を始めたが咄嗟に六耕が首を振った。

元が農民だけあってあまり責任のある立場が好きではないそうだ。

僕が莊園を手に入れるにあたって、自分が戦闘好きでも無かったことから一緒に足を洗っている。

「後のちに婚姻問題で緋家の役人が乗り込んで来たら困るでしょ？ 計画とかは予め伝えとくから、誰か文句付けて来たら『計画書通りだ』と言いつ返せばいいよ。でないといきなり『一人が畑一枚を耕せば済むのに、人数を使うとは怠け者だ！』とか言われちゃうよ？」

「慣れて来たばっかですし、そいつは困りますけど……」

「じゃ、そういう事で。困ったら全部、三硯に任しとけばいいから」

強引に納得させて、基本的には同じ傭兵あがりの黄三硯に代官を任せるとしておく。

この人物は中央にある町の学者崩れで、どうせなら地方の文物を調べたいと思つて僕の下に付いてきた。元学者だから物腰はスマートだし、役人から見ても好印象だろう。

ちなみに残り一人の傭兵あがりはアンデッドに潰された村の出身で、橙二尾という猟師である。僕が猟師の家の出身であり、傭兵の中でも偵察を重視していたので自然と仲良くなった。そしてそのままくっついて来たという経緯だ。

「それじゃ僕は本村に戻るから彼らを長屋に案内しといて。今後の予定としては魔物対策用の家を実験するついでに、彼ら用の家を作るから。それが終わった前後から余った時間で水路の拡張かな」

「三硯はちゃんと説得してくださいよ？ あつしは代官なんか嫌ですからね？ でもまあ家と水路関しては承知しやした」

ここで獸人たちの引継ぎを済ませて本村に戻る。

人数が減つたことで静になり、馬車の中に揺られて残りの時間で方針を固めておくことにした。

神様の忠告もあるし、全部の企画を進めるつもりはない。陶器の様に中断する計画もあれば、鉄製農具の様にひよんな理由から中断したり復活する話もあったりする。

「剛盾さん。戻ったらさっそく木工品の染色をお願いします？ エルフから貰った漆使つて、金細工とか金粉を貝と一緒に散らしたいんですけど」

「構わんが農機具とか鎧はええのか？」

「それはドワーフ族の返事待ちですね」

大通連に言う事を聞かせるために彼用の防具を造ることになった。幾つか大問題を引き起こした彼だが、既に覚えて居ないし、あいつを魔物退治に直に向かわせるには約束する必要があるのだ。そこで中断した農機具用の鉄と合わせてドワーフから輸入することにした。

まあ代わりに色々な技術を提供する事になったのだが、こここのエルフとばかり提携することが多かったのでバランスが取れたと思っておく。

「で、どんなのを造るんじゃ？」

「前に双葉に約束した手鏡の話があるじゃないですか？ あれを二つ作ることにして、片方は計画通りに白木でシンプルに、もう片方は漆に金と貝をあしらった黒色にします」

「二つに増えた！ やた！」

うちの村の特産品はコンクリ製品とガラス製品になるだろう。

コンクリの方は適正サイズと形状を水棲種族の注文通りに合わせるだけだが、ガラス製品の方は前から計画があった。

収穫祭に合わせて文物を展示するのだが、その目玉も兼ねて双葉に高品質の手鏡をプレゼントすることになっていたのだ。その時に渡す品を黒と白の双子造りにする。

「今年は収穫祭までガラス関連と装飾関連に時間と資材を割きます。後は経過を感じる感じですかね。農牧もですが蚕とかも直ぐにはなるとかならないので」

「そんなところかのう。ワシとしては鋼の鎧も楽しみなんじゃが」

こうして春からの計画がスタートする。

捨捨選択の要

● 信仰が集まってきたせいか、神様の来臨ペースが早い。

やはり大規模農業と三圃式農業を組み合わせ、そのコンボを神様の知恵だと広めたことが大きいのだろうか？

ともあれ村に戻って真つ先に洞府に顔を出すと、九天玄女様がお目見えになった。

「と言う訳で何とか順調なのですが、予算に限りがあつて流石に全てが上手くはいきません」

『ホホホ。銀は贅沢者よのう』

現状を報告したら軽く笑われてしまった。

もちろん以前よりも信仰が集まっているので、文句はないのだろう。僕の方も未熟なのは当然なので特に不満はない。

『そのような時の心得を教えてしんぜよう。銀や、そなたの好きにするが良い。どうせ同じならば最後にそのくらいは好きにしてよかろう。どうしても良い物に関しては、儲け話であつても取られようが押し付けようが意味は変わらぬ』

「で、ですが……流石に好き勝手というのは……」

『獣頭人身の輩を引き取つたは結局、そなたの自儘である？』

好きにして良いという言葉は流石に躊躇った。

上に立つ者が自分勝手に良いのかと言われれば、違ふと言いたいのがこれまでの僕の人生であつた。しかし獣人たちの処理が色々ある中で、助け船を出したのは僕の我儘でもある。

最終的に足りない労働力になるからという理由で自分を誤魔化したか、もし発覚してしかも魔物扱いされた時の事を考えると、微妙な判断だったのは確かだ。

『もそつと判り易い例えをしよう。ここに器がいくたりかあるが、それぞれに差異があれど同じモノじゃ。何を普段から使う？』

玄女様はそういうと、成果を見せるために持つて来た物の前に移動した。

木製の器は漆塗り・丹塗りまではいったが、まだ螺鈿までは完成していない。陶器の器は以前と同じで、ガラス製は切子を作ろうとして失敗している。鏡やら細工物はともかくとして、ガラスの器もまた大して変わってはいなかった。

これらの器には一長一短があり、どれが良いかとは中々言えないのは確かだ。コストや売値を考えればともかく、器としてはどれも同じと言えなくも無かった。

『木は誰でも彫れるが上を見ればキリがない。陶器は簡単に増やせるし型も自在じゃが……この分では売り物は無理じゃな。そして硝子は最も良いが最も高価である。ならば好きにする他あるまい？そして下の者を導き責任を追うならば、そのくらいは自儘にせよ』

「心得ましてございます」

言われてみれば同率一位になったら、最後は好みでしかない。

もちろん他の判断材料が混ざれば別だろう。木は薪や建築資材にもなるから量産には向かないし、高額で売れるならば手を掛け装飾して売りに行くなり献上品にすべきだろう。陶器は大量生産可能だが木の器を誰でも作れるからこそ意味がないが、僕でも簡単に形状を決められるのだから、魚の形の器に魚を盛るとか遊び心を反映させ易かった。

それらの中で贈答用にも売り物にも良いのがガラスなのでこれを主力製品になるが、売り物だから手元には残らない。だからそこまで行きつけば、最後に残るのは僕の好みであるわけだ。

『それとな……ようやった。何も無い村ではあったが、よう一年でここまでこぎつけたの。いずれ『格』が上がればなんぞ権能を授けよう。今の内から考えておくが良い』

「っ!?! ありがとうございます！一層の精進を重ねます！」

思わず平伏したが、その価値はある言葉だった。

一年間の苦労、そこに至るまで行った傭兵としての流浪生活。それを褒められたことは嬉しい事である。

そして何より……神職としての権能がもらえそうだというのは大きい。色々な物を奉納するという代価は必要であるが、神様に応じて

力の一部を分けてもらえるのだ。分かり易い所で『加護の鑑定』であるとか『結界の特殊化』などがソレに当たるだろうか？ よく漫画で神主とか巫女さんとかが持っている特殊能力の定番がソレである。

「……あ、もうお帰りになられたのか。寂しいけど前よりペースが早いし……ここは努力のしどころだよねっ」

今までと特に何かが変わったわけでは無い。

だが、いずれ何らかの能力が得られると聞けばゲーマーとしては心が浮きたつ。どんな物を奉納すれば喜ばれるとか、選べるならどんな能力にしようかとか、そのコンボで何ができるかを考えるだけでも楽しいのだから。

だが、ここで最も役立ったのは、先ほどの忠告であったというのが、後々まで頭の下がる場所である。

● 神様のお話が終わった所で、早速に懸案事項を処理することにした。

出張中ずっと考えていた代官問題だ。これで緋家からの正式な圧力以外で勝手に差配される可能性は無くなる。

早速に書類を作成し、同じ内容を念の為にもう一枚用意しておく。適当な人物に預けて置き、同じ内容の文章の控えがあると書いておけば無視することも少ないだろう。

「三硯なら代官の重要性も判るでしょ？ 基本は僕が居るから問題ないと思うよ」

「意味は分かりますが……未来の奥方様に文句を言われる相手が私になるだけじゃないですかね？」

黄三硯は留守を任せた三人の傭兵上りの中で、元学者だけに一番先が見える。

書面で優先事項や僕の同意がない場合の勝手な変更を縁者でも禁止する文面を見せれば、何を問題視しているかを理解してくれたようだ。

不平を言うのはいつものことだが、面と向かって文句を言うのは珍しい。正確にはそんな状態で受け入れるべきだと承知しつつも、何か

を切り出したくてウズズしているところだ。

「何か意見があるの？ 修正するアイデアがあれば採用するけど」

「そうじゃなくてですね……。厚かましいのを承知で言いたいんですが、お願いしても良いですかね？ それさえ受け入れてくれるなら心労も吹っ飛びます」

「内容に寄るけど？」

引き替えに要求したいことがあるとは思わなかった。

こういうのは引き受けるか受けないかで、交渉材料ではないと思うのだが……。まあ元仲間の顔見知りから、ちゃんと登用して部下にするという過程だと思えば間違いではないか。

領主や荘園主と同じ村に住んでるだけで、軍師系キャラが仲間になるかと聞かれたらゲーム的にはあり得ないもんな。給料を払ってるけど、どちらかと言えば物納とか待遇面なので正式に雇っているとも言い難かったし。その意味でストレス直面する代官にすると言われたら要求の一つもしたくなるか。

「実はですね！ 私の妹が中央の士学に居るんですが、今年の導術師の門を叩くことになりました！ 何とか援助を頂けませんか？ いずれ此処に呼んで協力させますから！」

「……言ってる意味は分かるけど、なんか急だね」

要するに魔術師学校に行かせたいから、その金を出してくれと言う事らしい。

うちの領地には今の処、それほど金の入る余地がない。判っているだろうけど直ぐには領けない問題だ。

ちゃんとした魔術師が加入してくれるなら戦力面でも、便利系な魔法と言う意味でも凄くありがたいのは確かだが……。これって有能でないという意味が薄い上に、有能だと中央にリクルートされ易いんだよね。どうしたもんか。せめて上位魔術師になるところなら話はまるで違ってくるのだが。

「フラフラするのを止めて、ここに在住することになったじゃないですか？ 一応は給金も出る事になったし、妹に鑑定を受けさせたんですよ。そしたら見事に魔術師向きの加護を持ってまして……」

「あー。なるほど。それは育てたくなるよね。元から妹さんを気にしてたんだろうし」

この世界ではみんな神の加護を貰えるが、誰もが知ってるわけでもない。

鑑定してもらうには神殿または魔術師の学校に寄付を積んで、鑑定をしてもらわなければなら無いのだ。神殿の場合は奉納したら神様にももらった能力が使えるという、僕がさっき考えた選択肢の一つが機能する。

基本的には奉納物の問題で高額になるか、まとめて一気にやる時に混ぜてもらう事になるのだが、今回はあえて高い方を選んだのだろう。自分の加護も知らないのに、良くやると思う。

「偶然自分が成りたい職業の加護なんて、滅多に無いから気持ちは判るよ。それでどんな加護なの？」

「魔力が増え易くなるというやつらしいです。どうでしょうか？ 村の守りなり発展に協力させますんで！」

「それは確かに考えるなあ……多分、学校でも同様だろうねえ」

ちなみに能力が上がる加護はメジャーな祝福ではある。

その中でも『魔力が増える』というのは二種類あり、純粋に『魔力が多い』タイプと、『成長したら人よりも増える』タイプが居る。前者は気が付きさえすれば誰でも、どのレベルでも活躍できる判り易い能力だ。後者ならば成長すれば成長する程に、覚える労力を魔法系に絞ればかなり有用な加護といえる。

この場合はおそらく後者なのだろうが、冒険者になるにしても土地で何かを開発するにしても向くだろう。身内びいきを考えても悪くない選択に見える……予算と言うものに限界が無ければの話だ。

(……どうしたものかな。最終的にちゃんとうちにきてくれるかな？ 五年先か十年先に卒業としても、そこから中央に在籍してやって来るのは何十年先とか言われても困るんだよな。でも……欲しい未来があるなら……投資するのも悪くは無いか)

来る保証はないが、金を出した相手の要望を無視することも少ない。

来てくれた時のリターンは大きいが、現時点で予算が少なく、来てくれる時期も判らないのではマイナスも多い。かなりの金を使う話で無ければ即座に領きたいが、他にも用件を重ねるところでこの出費、そして保証がないというのがなんとも難しい。

だが、これまで魔術師の知り合いが居ない状態でこの話ならば乗るべきではないだろうか？ 何よりもこれから部下になってくれる人物の家族である。そしてかねてから考えていた、マジックアイテム作成に関して付与魔術師を得られる可能性は捨てがたいのだ。

「認めるには条件がある。どのみち作ってる文物を売りさばくには中央に窓口が必要だからね。そのついでに資金を渡していくなら何とかなりそうだ」

「何でしよう？ 自分にできることなら……」

今度は要求する立場が逆転した。

出資自体には納得するし、資金の稼ぎ方も説明した。三硯もゴクリと喉を鳴らして話を待っている。

「むしろ妹さんが何を研究したいかの好み次第だよ。やって欲しいジャンルなら出資しない手は無いでしょ？ 上位魔術師への道が開けた時、幾つかある術門のうちやって欲しいところならむしろこっちら出資をさせて欲しいとは思う。逆に強いだけの魔術師だと……ね」

「それは確かに。……ですが妹は私と同じく面白い物が大好きでして！」

一番の理想は付与魔術師で間違いない。

マジックアイテムが作れるならば死霊や精霊相手でも困ることがなくなるし、自分たちの要求次第で欲しい能力アイテムが作れるなら強度が低くても意味が大きい。

少し離れたところで錬金術師だろうか？ 薬品とかは色んな研究に使えるし、それこそ溶鉱炉代わりに上位の火術で解かせるだけでも村の発展に役立つと思われる。流石に下位魔術を全体強化する四大精霊系とかつ精霊そのものを呼ぶ召喚系とか居ても、何に使うのかイメージできないだけに困り物なのだが。

「とりあえずマジックアイテム作る付与魔術とか、薬品造れる錬金術

とかそういう生産系が望みだね。三硯と同じ性格なら大丈夫かもしれないけど、この辺は相性もあるからゆっくり妹さんと話してきてよ」

「承知しました！ この黄三硯、銀さまの代官として奨励いたします！」

これまで聞いたことのないような真面目ぶりに苦笑しつつ、この話はこれで切り上げておくことにした。

ドワーフからの返事が来て鉄の代わりに出すモノの交渉をしたり、西の水路を増築する件でエルフやら近くの領主が何か要求するかもしれないとか、考えることは色々あったからだ。

魔術師の方は直ぐではないだろうし、ダメもとで向こうの情報を得るくらいで我慢しておくことにしよう。

水利の推理

● 三硯の妹の件は妙な所に波及した。

情けは人の為ならず、巡り巡って我が身の為……ということ援助することにしたが、流石に見返りを求めるには先が長すぎる。そこで魔術師たちの興味を引きそうな文物を持たせて三硯を送り出すことにしたのだ。何年先になるか分からない相手よりも、地方でも良いという魔術師を引っ張る方が早い物ね。

そこでガラス製で可能な限り平たく造った物差し・分度器・シャーレ皿・フラスコ、鉄で作ったコンパス・天秤と分銅その他（メジャーなど）もろもろ。思いつく限りの計測器具を剛盾に作ってもらい三硯に箱詰め持たせたのだが……。

「鉄鉱石の代わりにあれが欲しいって？」

「うむ。研究するのに便利そうじゃからの。話をしたら精度を高めてから送って欲しいと言っておった。その普及の許可もな」

気に入ったのは魔術師ではなくドワーフ達だった。

質実剛健な彼は厳密に計測して調査することを受け入れたらしい。この表現だと薬師や錬金術師だとは思いますが、意外な方向に波及したものだ。

もちろんドワーフが薬草やら錬金術を行わないわけではないが、どちらかといえば鍛冶や細工物というイメージが先行していたので意外だったという訳である。

（何を要求されるか心配だったから渡りに船なんだけど……渡して大丈夫だよな？ 変な発展しないよね？）

水棲種族の出生率と違って問題ないと思いたい。

もしこの事で上手くいけば、必要な筈の代価を大幅に削減できるからだ。もちろんドワーフ製の器具の方が有名になって、魔術師たちが興味を覚えるのがそちらだったら藪蛇なのだが……。

「ドワーフの領域と一部の例外なら問題ないよ。気が付いたら人間の領域で僕らの商品が買われなくなった……なんて間抜けな事が無け

れば問題ない。それと神職……金の杜とか火の杜とか育てるならこつちで一緒に色々教えるから」

「そう言えば水棲種族経由で水の杜を育てるのじゃったか。いずれにせよ受けておこう」

神職の保全能力は色々と応用が利く。

高炉モドキを造るために温度を保ち易くしたり器具を保ったり、あるいは一定の重量・分量を入らなくして、目分量に頼らずとも数値計算を行い易くなるのだ。実際に各種サイズの分銅や匙をそれで作ったので、神職が居ると居ないとは大きく違うだろう。

そしてこのコツを伝えたのが九天玄女さまということ、教義を伝播させるつもりであった。知恵とコツの神なのだから、金属や火を敬う巫女が並行して信仰を捧げてもおかしくはない。

「それで何を造る？ やはりアレか？ アレを造ってしまわんか？」
「土台になる荷車と馬車の改良が先だよ。それに農機具が優先っていったじゃない。大通連にも専用の鎧を用意しないといけないしね」
「ここで言うアレとは銅張鉄鋼馬車という黒歴史がとうとうバレたのである。」

砂糖を手に入れたことで双葉が再びレシピ帳を漁り始め、その時に剛盾が発見したと言う訳である。いい年こいたオツサンの癖に、こういうところは子供であった。

そして鉄の余裕ができたとしても、そんなところに割くほどの余力はない。まずは全体を底上げできる鉄製農具を製作し、大通連との約束を守るべく鎧の製作を行わなければならなかった。

「そうか……」

「あーでも鎧の方は大通連と相談しないといけないから、設計くらいはやっても良いかもね。まずは荷車からいこう」

「そうかー」

判り易いなオツサン……。

とはいえ剛盾の気持ちも判るし、水棲種族の領域にできるだけ大きなコンクリ製品を持って行くなら荷車の改良は必須である。農作業にも使えるし、市場に売りに行くにしても悪くはないだろう。

というわけで色々と優先順位を付けて改良して行くことにした。

「最優先は秋口までに双子の手鏡。次に鉄製農具だけど、これは直ぐに終わるから荷車かな。こいつは用途に合わせてサイズで二種類作る」

「ふむ。小さい方は木牛か？」

「うん。大きい方はとりあえず軽虎とでも呼ぼうか」

小さい方は農業や工事で『猫車』と呼ばれる三角形の手押し車だ。器の中に練ったセメントを始めとして、泥だろうが砂利だろうがなんでも運べる万能運搬具である。三国志では木牛流馬と呼ばれるアレと言えば、昔からある道具であることが判るだろう。そして大きい荷車はまさに軽いトラをイメージした存在だ。

まずは道幅をイメージして机を起点にサイズを測る。

「小さい方は農道に置ける程度で、大きい方は今回の度で通って来た道を二台が交差できる程度に。あまり大き過ぎると対向車からみて邪魔なものね」

「構わんが大きくなる以外に改良するところありやせんぞ？」

「剛盾さんは人間に毒され過ぎ。軸をドワーフと同じ金属製にしようよ」

この時代の荷車って大八車の四輪型でしかない。

貴族の乗る馬車の方が大きく、小型だから取り回しが良い以外に見るところはない上に、軸がお安い木製なので載せる重量にも限界があった。

しかしドワーフから見れば薪や建材に使うので、むしろ軸やら骨格部分は金属であると聞いた覚えがある。そもそも彼らは鉾山からの荷や、完成品の金属加工物を載せるので、重い物を載せられないと意味がないのだ。

「おお！ そうじゃったそうじゃった。なんで木で作ってあるんか昔は疑問に思ったものよ」

「なのでその辺を金属製にして耐久性の上昇を見て、一番コストに合うのを使いましょう。その上で……そうですね木製の戸板だけでなく金属板を壁に出来る構造にしときますか」

最終的に銅張鉄鋼馬車を造るつもりである。

なので軸やら骨格は丈夫にして、戸板とか金属板を張りつけても倒れない構造にしたい。そうすれば万鹿柵以北に攻め上がる時も、魔物に対して荷車を盾にする幌馬車戦術が組めるはずだった。

それとクレーンはピラミッドの時代に初歩的な物がもうあったらしいので、現地にそういう物があっても扱い易い構造が良いだろうか？ 荷物は載せられるが降ろし難い構造では意味がないものね。

「とりあえず建物が整って来たら次は水路を拡張するつもりです。で、その時に木牛と軽虎を実験してみましよう。できるだけ便利に出来るだけバランスよくという感じで」

「うむ。任せておけ！ ワシは先に農機具を造って来るぞ！」

こうして二つの荷車を改良しつつ、水路拡張に向けて動き出した。

僕は凸凹を付けてロープを縛り易くしたりと荷車の構造や、水路の場所やら構造の設計に専念していた。

しかしまさかドワーフの方が上手く行ったのに、エルフやら近隣の村が文句をつけて来るとは思いもしなかったのである。

● 水質保全という至極まっとうな事に能力を使いながら工事を進める。

まずは階段状にコンクリのブロックを置き、その脇に荷車やら家畜用に斜めのスロープ状に板を置いていった。最後にセメントを間に流し入れて乾かせば舟溜まりと呼ばれる待機エリアの出来上がりだ。

本当は舾りたいのを浮かべて、杭で固定すればよい。だからこんなことをする必要はないのだが、うちの荘園内でやりくりしようとするとならざるを得ない。と、うちは荘園内でやりくりしようとする。

「銀。水路の周辺でエルフと隣村の連中を見かけた」

「……なんか妙だね。エルフなら見つからずに隠れられるはずだし、見たいなら堂々と覗けば良い。二尾に心当たりはある？」

巡回担当で見かけることも少ない橙二尾がやって来た。

同じ獵師で向こうの方が年嵩なので、彼だけは平然と僕を呼び捨てにしているしこちらにも気にして居ない。

それはそれとしてその報告に無駄はなく、必要最低減なので改めて尋ねてみた。

「水利が絡むと血みどろの争いになることもあるが、今回は大人し過ぎる。いきなり施設を破壊した上で訴状を届けることもあるからな。隣村の方はエルフを恐れて遠慮しているのかもしれない」

「うちには大通連も居るしね。じゃあエルフの出次第か」

森でエルフと戦うのは自殺行為だ。加えて大通連も居るなら決闘も無理。

だから隣村が様子見しているのは判らなくもない。何をしているのか、大きな溜池や水路を作って、川の水を全て奪われたら困るといふところだろう。

確かに案の中では水路を組み入れた方の村まで繋いで、直通路を繋ごうとしたこともあった。まあ……大袈裟過ぎるしやること一杯だから諦めたのだけだ。

「確認するけど濁った水は流れていかなかったよね？」

「ああ。もしかしたらその理由も聞きたいのかもしれない……。後は何の為の水路改良なのかも気になっているのかもな。実際、俺もここまでする必要があるか理解して居ない」

「あはは」

環境汚染する気はなかったのだが、良い影響なら望むところだ。

それはそれとして舟溜まりを整備したのは水路を大規模に加工する為の実験であり、いずれやってくる水棲種族に備えた物であり、周辺領主にコンクリ製品のセールスをするアピールでもある。

要するに複合的な理由過ぎて、個別の情報を見ていると判らないのだろう。オマケに荷車の改良実験もついでにやって、猫車とかは既に好評であるため、何の為の工事か判らないのも確かだろう。

「じゃあそのうち紅梓さんが質問に来るかな？ 僕はその為の資料でも作っとこうかと思うけど、二尾はどうする？」

「いつも通りだ」

二尾は村がアンデッドに潰されて傭兵になったそうだ。

その為か用件が終わると直ぐに巡回に出る。いつか彼の魂が安ら

ぐことを九天玄女様に祈っておこう。

それはそれとして資料に色々と水路の効果や、その費用をまとめておいた。どの程度のコストが掛かるのか、代価としてどんな物がもらえたら金でなくとも渡せるのかを書き込んでおく。エルフなり隣村の連中がやって来た時に、あるとないのでは説明し易さが変わるからだ。

「えーつと浚渫すると舟が通り易く成る上に、洪水が起き難くなる。堤防と合わせて作るとなお良し……あー、デメリットも書いとかないな。何がマズインだっけ」

そういう感じでメリット・デメリットの両方を記載。

エルフの方は環境破壊も考慮して頼まない可能性は大きいが、隣村の方はどうだろうか？ できれば提携し整備された水路をできるだけ長くしたいと思っていたが……。

領主間の交渉と言うのは、基本面倒くさいというのをこの時の僕は忘れていた。

やはり水利権というのは争いの元なのである。

求めるモノ

● 春になって暫く、隣村の領主がやって来た。名前は緋八大。

これほど名前と姿が一致する人間を見たことはない。まあこの国のネーミングライツ的には、領地を大きくしろよ……という親の期待なのだろうけど。

この解説で判ると思うが体格が大きく比例して横幅も広いという人物で、性格も厚かましいという人物であった。

「まったく困ったことをしてくれましたなあ!」

「……何が困っているんですか? 具体的に説明してください」

普通に話してたのだが、用件を伺うと当然に声を大きくし始めた。

ニヤニヤと笑って気持ち悪いが……昔出逢った代官とか田舎の郷士はよくこんな顔をしていた。自分の為に役立つ、自分が優位にあるから話を進めると言わんばかりの表情である。

まあ判り易いという事はそれだけ都会に揉まれていない、まさに地方の名士なのだろう。おかげでこちらも腹が座って話せるのでニコニコと対応しておく。

「何かもですよ! 大損害だ! どうしてただけるのですかな!!」

「具体的に言われないと判りませんね。昨日の今日で木々の成長や畑の育成が判るはずありません。じゃあ魚かといえば、報告を見る限り同じ数値ですけど?」

「そんな事はない!」

どうしてここまで言いたい放題言えるのか判らない。

少なくとも僕は環境には気を使っているし、『何』が対象なのかを何度も述べている。彼は『何』が対象かも告げず、自分には損害がこうむってその理由が僕であるとしか言っていないのだ。

というかここまでノータイムで話しているということは、こちらの話を最初から聞いていないのだろう。何かしらの要因があつて怒鳴っても問題ないと理解して、じゃあ要求してやれということだろうか?

「報告例で魚が見える範囲で何匹くらい見えたか、その数字がどの程度であるかをこの紙に記してあります。この数字が正しいかは、今後監視すればすぐに判るでしょう。そもそもこの辺りの住人は魚をあまり食べないそうですけど?」

「私の村では食べていたんだ! いや、魚だけの問題ではないぞ!」

「じゃあ何だよ? と僕は声を大にして言いたい。」

しかし紳士的な対応にはならないので、笑顔を保って問い続ける。というか木々の成長が一目では判らない、魚はグレーであるとして、何が問題なのだろうか?

まあどんな証明をしてもそのたびに文句を言い始め、じゃあ魚を提供しようといえ、魚なんか食べないとさっきの言葉を忘れるんだろうな……とは思う。

「では何の問題なんですか? 僕の方は少なくとも数字を示していますし、これはずっと監視すれば嘘ではないと判る数字です。なんだつたらエルフにでも尋ねましょうか? 木々も植物も魚も変わらないと言ってくれると思いますが」

「口裏を合わせているかもしれないだろう! そんなものあてにはならん!」

「ではせめて、何の問題なのか教えてください。出ないと対処も出来ません」

顔色がクルクル合わるのは面白い。

エルフの名前を出すと少し青く成り、どんな問題で対処するべきなのかを聞けば赤くなる。何に怯えて何に興奮しているか丸判りだ。

何と云うか侯爵さんとかあの辺から見れば、僕もこう見えているんじゃないかと苦笑したくもなる。

「金を払えばよいだろう! 私の被った損害を金で! 損害が起き続けるならば来年もだ!」

「対処すれば問題は無くなるのに? それでは金をせびっているようにしか聞こえませんが」

「失礼な! 今の発言は私の名誉を傷つけたぞ! 二重、いや三重の損害だ! 必ず払ってもらうからな!」

そう言い捨てて彼は去っていった。

何が問題なのかも伝えもせず、じゃあどんな対処をすれば良いのかと聞けば、ここぞとばかりに金を要求する。それでいて指摘すれば名誉を傷つけたというのだから、一体何をしたいのか判らない。

しかし後に訪れた青悟曰く、僕が最初の対処に失敗して無意味に長引いて引くに引けなくなってしまうのだという。

● 緋八大が去って幾日も立たぬうちに青悟が苦笑しながらやってきた。

大地母神の教会で色々と春の行事を行った後、八大が起こした訴状を持って来る。

「ご苦勞な事だがどうして彼を通して訴状を出すのだろうか？ 青悟を弁護人に雇って言ういくるめることを封じたのかもしれないし、もしかしたら八大の村にも大地母神の教会があるのかもしれないけれど。」

「二羽く〜ん。駄目じゃないか。あの手の輩にはガツーンと行かなくちゃ」

「もしかしてこっちが上で無視するべきだったんですか？」

「似たようなものだねえ。親しき仲にもパンチありつてのが貴族だけど、君は緋家の縁者になるはずだろ？ それなのに交渉しようって事は、何かを要求できるって事さ」

要するに最初に大きな要求をしておいて、徐々に下げていく交渉術らしい。

初めに普通の対応をしていたのは、こちらの方が上だから強権的に来られないように伺っていたのだろう。

それが話をしてみたら同等の相手であり、色々な文物を開発している所を見て金を持っていると思っただろう。まあ僕も緋家の名前を使うとか、親分に頼る気はなかったし、頼ったら何か要求されるかもと気にしたのがマズかったのだろうか。

「そもそもさ、南部の英雄で緋家の縁者になる予定で、豪傑を抱えて色々な開発に成功している領主さまだよ？ あんなの無視したって

いいし、言い掛かりを付けるなら殴り返すと言ってやれば良かったのさ」

「今からでもそうするのは？」

「もうだめだと思うよ？ それに交渉とか根回しで行くと決めたなら、そつちに慣れた方が良いね。特に……これからは、ね」

そう言つて青悟はお土産に要した砂糖漬けの果実をつまんだ。

お茶請けを口にしていているというよりは、話題を反らすためだろう。ちつとも美味しそうには見えないし、むしろ珍しい物をもたらえる立場と言う自分の身分を確認しているようにも思われた。

何と言うか彼の態度を見る限り、八大のことはオマケなのだろう。何か言いたいことがあつて、ついでに用事を引き受けたのだと思われる。

「これからですか？」

「海の向こうを見たんでしょ？ ならそろそろこの国の歪さに気が付いても良いんじゃない？ そして四大諸侯が抱えている不満にもね」

「あー。何となく……くらいは？」

青悟は執務室にある文物の中で、地方の物を勝手に移動させる。水晶は何処にでもある物だけど北から持つて来た数少ない僕らの故郷の石。最近作ったガラス製の瓶は南領産になる、以前に青悟からもらつた東領製の筆。西領の品は持つてないので、代わりに自分の懐から何かの壺を取り出した。

それぞれをテーブルの四方に置いて話の続きを口にする。

「この国は外戚になることで負担と権勢を持ち回っている。四人の侯爵の誰かが大公、皇太子の後見人が公爵という風にね」

そう言いながら青悟は勝手に瓶の中に壺の中身を入れた。

そして空になった壺を右側にある筆の傍に置いて、まるでインク壺と筆のセットであるように見せた。もちろん中身は空だと僕らは知っているわけだけど。

「なのに魔王の侵攻以来、西大公は権勢を保ったまま東側に疎開をしている。まあうちの東公としては出費を押し付けられた形さ。ハッキリ言つて邪魔だし、せめてもう少し東に行つてくれれば権勢とか確

保しようもあるのにな」

今度は筆と壺を順繰りに上下に入れ替え踏みつけさせていく。最終的に筆の端っこを壺が抑えて邪魔な態勢だ。完全に筆の上ならば転がり落ちもしようが、危うい所で踏み止まって居た。要するにこの態勢が今のこの国の現状なのだろう。

そう思った時、青悟は瓶の蓋をコンコンと叩いた。

「西領の景気とか早い段階で移ってはいた。なのに南領の侯爵はそのまま据え置き。非常時だからと上納を迫られるし、諸侯の義務だとアソビ相手のお出陣も迫られていたんだ。そんな中に颯爽と英雄が現れて未来を切り開いてくれた」

「……狙ってやったわけではないですよ？」

「知ってるだろ。この国ではタイミングの良い奴が英雄なのさ」

クツクツと笑いながら青悟はイジワルな笑みを浮かべた。

普段は人の良い司祭と言う感じだが、こんな時に浮かべるこの表情こそが彼の本質なのだろう。傍観者として酒を飲みながら眺めているような悪人めいた表情だ。

まあ彼は東領の貴族の息子であるし、大地母神の神殿に属する伝道者なので傍観者なのだろうが。

「そういう訳で侯爵閣下は君に期待している。ボクが報告したからうちの公爵さまも期待している。できるならあの程度のボンクラ相手に足踏みして欲しくないんだけどね」

「なら緋八大の狙いくらい教えてくださいよ」

「それは守秘義務に反するからダメ。それに面白くないでしょ？」

まあ金でなければ物資か名声か。

八大の狙いはそんなところだろう。僕から色々むしり取って左団扇に成りたいのだ。青悟としてはその程度の輩は軽くあしらって、奴も組み入れて僕にステージが上がってこいとも言うのだろうか？

いや、青悟が傍観者なのだとしたら、侯爵さんが使える駒を求めており、それによって南領が動き易くなることを東の公爵が求めているのだろう。いずれはこの国を動かすために東と南が手を組むための第一歩と言う訳だ。

「なんか陰謀の鹵車になった気分ですね」

「それが判ってるなら成長してるじゃないか。まあボクとしてはなんだねえ。君がボクの下に来てくれるなら色んな意味でハツスルしちゃうんだけどさ。部下とか恋人の為なら守秘義務くらいは安い物さ」

「そういうのは冗談でも勘弁してください」

ブタから逃れるために蛇に絡まれるとか冗談ではない。

地方の水利権に関わるいざこざだと思っていたのに、話が妙な方向で大きくなった物である。

フエーデ

● 今回の騒動、周囲の思惑を考えると見えて来るモノがある。

正直な話、青悟が言う程に四大諸侯が僕の事を気にかけているとは思えない。精々が紅家から見て『系列企業の面白い提案をする営業マン』というくらいだろう。

だから期待しているのは面白がってる青悟自身と緋家……長男の悌さまではないだろうか？

「緋八大。最初は猪かと思っただけど……養豚場の豚だったか、可哀そうに」

大きく動くには僕の力はまだ小さ過ぎる。

緋家では二群を持つ貴族が精々で、僕はそこに仲間入りをする程度だ。緋家に縁を持つことを含めても『南領に貢献する面白い男が居ます』と青悟が報告するレベルではないだろう。

しかし僕が三郡を領有とは言わずとも代官として掌握したらどうだろうか？ 緋家の筆頭家臣になり、次期伯爵の悌さまが目をつけているならば話が変わって来る。二人三脚で緋家を動かし、数年内に中央への道を確保してみせればその話題も確実な物に移るだろう。

（そうすると報告した青悟の目は確かつて事になるし、悌さまも妹婿……それも好きな方を選べと言っておいて、やっぱりこっちって格下げを受け入れた相手だもんな。扱い易い舎弟ってことか）

青悟と悌さまにとって、僕は都合の良い相手と言う訳だ。

だから二人としてはここで八大を抑えて、大きな影響力を八村に与えさせようとしているのではないだろうか？ だから青悟は八大の訴えを潰さなかったし、悌さまも無視しているのではないだろうか？（ついでに弟君の派閥が八大に付いてると理想的なのかな。一緒に叩き潰して大勢を確立できる）

もし弟君の連さま派が逆襲の一手としてバックに居たら？

そう思うと八大の強気も判る気はするのだ。最初は念のために顔見世に来て、大通連はいないしこちらは交渉しようとしている。なら

ガツンとぶん殴って、イザとなれば連さま派に頼れば良い。まあその派閥が実際に何かするとも思えないけど、八大がそう信じる分はタダだ。

もつともそこまで大きな話ではなく、僕を見て『噂の英雄ではない。儲けられる』と軽く見られただけの可能性もある。その場合は家同士の戦いに成れば疲弊する事も、負ける可能性も考えていないただの馬鹿者ということになるだろう。いずれにせよ青悟や悌さまからみて惜しい人物とも思えない。

(全部終わたら八大は隠居させて子供が成長するまで僕が代官つてとこかな？ 子供が居なければ……僕と妹君の麗さんだっけ？ その子供を領主にして緋家から代官を送るって感じかな)

もちろんこちらが負けたり、そこまでいかずとも妥協する可能性はある。

傭兵どころか豪傑を抱えるこちらが負けるとは思えないし、負けそうならばそもそも青悟が仲介して止めるだろう。しかし連さま派が協力する場合は助っ人を送り込んで来る可能性はあるし、そもそもアソビが今年も大量に湧いたら戦いは中断する事になるだろう。

次に八大の狙いを考えてみる。

こちらが強大な英雄だったら困るので、最初は本当に様子見だったはずだ。場合によっては悌さま派に鞍替えして美味しい汁を吸おうとしたに違いない。僕に要求するのも高いレートでの交易……いや、こちらの生産した文物を分けてもらえば良いくらいの可能性すらあった。

「真摯な要求も無視しただけではなく甚だしい侮辱があり……つてどう考えても逆じゃない。で、勝ったら川のこっち側までよこせ。それが嫌なら示談金？ いっそ清々しいな」

訴状を見るとデタラメな事しか書いていない。

第三者が見ている訳でもないに、というかだからこそか。デタラメを並べてこちらへの不満を訴えかけている。裁判だとありえない内容だが、別に裁判を行うわけではないからコレで良いのだろう。川が境界線というのにもありそうな話だが、実際には同じ時期に作

られた開拓村なので怪しい所だ。

ただ貴族には決闘権というものがあり、要求が認められない場合はフェーデを挑んでそれが受け入れられるまで延々と嫌がらせができるのだ。勝手に占有して周囲を荒らし、決闘裁判に応じる様に求める訳である。要するにその流れに持ち込むための第一報であり、後に正当な行為であると主張する為の証拠造りの一環なのである。

「この件を裁くのは誰か判ってないんだろ？　まあ決闘裁判だったら勝利した方が勝ちなんだから正統性は何でも良いって事かな」

もしこちらが何も考えずに逆襲したら、セオリーを無視したこちらの問題になる。

そうなたら正式な裁判で裁かれるのはこちらで、いかに非道をしたのかを問われることになってしまふ訳だ。まあ領地を防衛する分には構わないはずなのだが、大通連がいきなり出てきて抹殺すると後ろ暗い所があつて暗殺したと言われるのだろう。

だからこちらもセオリーに則つて訴状への反論を用意し、反撃を準備しておくべきなのだろう。

「ええと、緋八大は被害が出たと言いながら具体的な内容をまったく示さず金銭を要求するものなり。当方が漁獲・林業に影響なきことを貴兄に先月送りし観察記録で例示し、この記録に偽りが無いことを共に確認しようと述べたところ、そのようなはずがないと一方的に拒絶するものなり……」

セールス商品なので当然観察記録は方々に送つてある。

莊園主仲間もそうであるし、水棲種族や緋家にだつて送付してある。もし興味を示せば売つたり献上品として扱うつもりなので、虚偽があれば問題になるから嘘偽りは記載していなかった。

まあ八大はそんなことを知らなかったからだろうが、証拠というか証言を述べる為の物証は既にあるのだ。他の莊園主や領主が確認しそうな内容に関して、こんな感じで問題ないようにしていますよとセールスポイントを用意していたのだ。というか無ければエルフの領域に跨る河川の浚渫・護岸なんかしたくない。

「あ、そうか。こういう時にエルフやドワーフがどう動くかも注目さ

れてたのかもな。八大くんは良い仕事するなあ……エルフが見てたのを悪意的に考えたのかな。この辺は後で確認しとかなくちゃ」

土地を取り上げられないために、エルフやドワーフと仲良く成っておいた。

イザというときに協力してくれるつながりがあるなら、周囲は警戒するし僕の荘園を通して彼らの力も借りる事ができるかもしれないからだ。もしかしたらその辺を確認するために周囲が八大を突いた可能性もある。

もちろんハツタリを多めに効かせるなら当然のように利用するべきだが、別に困ってないのであえてそうする必要もないだろう。剛盾に参戦を要請する場合と傭兵として雇われた場合の差を確認し、色よい返事をもらえなければ諦めても良いくらいである。そして紅梓がやってくるとしたらそろそろのはずだ。

紅梓自身に他意は無くても、エルフ族としては優位な立場で交渉できるのだ。参戦するか中立でどちらでもないというか、はたまた温室の研究なり冒険者として登録だけはしているエルフ達を引き揚げさせるか……そういう干渉をして来る可能性はあった。

●
そして推測した通りのタイミングで紅梓がやって来た。

そろそろ青悟が大地母神の教会での職務を負え、帰ろうかと言うところである。これ以上後になると彼に渡す返書とかの内容を返られなくなるので、エルフが協力するにしても中立になるにしてもこのタイミングが一番都合が良いのである。

ただ想定外だったのは、紅梓だけではなくもう一人エルフの少女が居たことであろうか。

「青柳と申します。初めまして」

「銀二羽です。よろしくお願ひしますね」

伴っていたのはプラチナブロンドの一筋に青い染色を施した少女だ。

入れ墨も施してあるが紅梓より少ないので、もしかしたら紅梓よりも若いのもかもしれない。あるいは単純に部族でのランクが班長と一

一般人みたいにワンランク下なのかもしれないが。

ともあれ初めてやって来るお客さんだし込み入った用件みたいなので、御菓子として雑穀を蜂蜜で固めたグラノーラモドキと果実の蜂蜜付けを出しておいた。

「紅梓さん。護岸工事の書類は読んでくれた？」

「読んだわよ。だからこうして新人連れてやって来てんでしょ」

何だろう紅梓の意外に面倒見の良さというか……。

若作りのOLがお茶くみの新人を紹介するような感じは。どこかで見ただジャブだとするならばそんな感じだろう。

いずれにせよ新人と言うからには、これから顔合わせをする仲になるということだろうか。ということは少なくとも人員総引き揚げで脅すという事はなさそうなので助かった。

「あの数字は本当なの？」

「直ぐに判る嘘は吐かないよ。結界に関しては何を残すか次第で、認識の訓練が必要だけだね」

資料は同じ物をエルフに送っている。

コンクリ商品のデメリットである、植物の育成や水なんかも遮断してしまう部分も書いておいた。そんな資料にワザワザ嘘を載せる必要はない。やるならデメリットも載せなければ良い話だしね。

その上でこの場合の結界とは、工事の際に水質保全を行った事である。川の流れから泥の汚れだけを防ぐ結界を造り、川下側に張ったのだ。物凄く狭い範囲なので長持ちするし……あえていうならば一時的に遮蔽壁を作り、岩と砂利を使った簡易濾過装置でもあれば結界なんか不要な程である。

「水の流れや魚に虫まで止めたら一瞬で崩壊したと思うね。でも大多数の水も生物も止めない、止めるのは泥の中の汚れだけ。だから魔力の消費は少ないって事かな。少なくとも僕の魔力が回復するまで保てたのは確かだよ」

ここで紅梓と青柳の前にあるグラノーラモドキを指さした。

これを全て止めるための魔力だとする。全部止めると一瞬でこれだけ消費してしまう訳だ。しかしその中の一部、それも粉になってい

る雑穀だけを止めるならばそれほど消費しはしない。

保全能力を利用した結界の優れている部分は、見て居なくとも途中からは知覚できなくともオートで反応してくれることだ。最初に区別できないとまったく反応もしないが、魔力が保つ限り掛かり続けるのが利点であった。

「欠点と言うか気を付けなきゃいけない問題は？」

「絞る場合は自分が認識できないといけないし、近くの相手を指定したりする場合は移動で入れ替わる可能性が高い。絞れたとして無関係な対象はまったく排除しないし、逆に有用な部分に気が付かないと大変なことになる。この辺は慣れと知識の蓄積次第だけだね」

「有用な……ですか？」

質問の内容は水質汚染ではなく、結界に関してだった。

この時点で紅梓というかエルフ族の考えは透けて見えたので、真摯に説明することにした。おそらくはエルフ族も木の杜なり森の杜を育てる気になったのだ、今回いる青柳という少女は多分巫女さん候補であろう。

これならば色々と便宜を図ってくれると思うし、神職仲間の後輩だと思えば親切にしておいて損はないはずだ。今度は果実の砂糖漬けを指さして説明する。

「温度を一定に保つ結界を張ったとして、気温が下がらないと花が咲かない種類の植物に掛けたら大変でしょ？ 同じように虫から排除する結界を張ったとして、虫の中には実を結ぶ事を助ける種類のやつがいる。その辺を把握しておかないと大変なことだね」

「なるほど……参考になります」

「ちよつと、私と態度が違うんですけど！」

「人徳と言うか、出逢って間もない人だからね」

他にも皿を何種類か用意して、サイズやら重さで消費が変わると説明しておいた。

広ければ広くするほどに魔力の消費は激しくなるし、態勢を支える場合などは重量だつて問題になる。元の状態とかけ離れるごとに魔力消費が跳ねあがるのだ。

ここで泥の話をして、消費を抑える例をもう一度上げておくことにしよう。

「さっきの泥の例だけど、実は綺麗にするだけなら岩と砂利、できれば布を挟めば濾過するのは簡単なんですよ。そこまでやれば境界に必要な魔力は殆どありません。砂利だけでもかなり減りますし、数日だけなら大きな岩を並べるだけでも違うんじゃないかな」

とりあえず水質保全と結果の件はここまでだ。

青柳には神職が来た時の為に用意するつもり資料から、雑稿を抜き出して読ませておく。

そして紅梓に緋八大からの訴状を見せエルフの態度を確認しておくことにした。

「こういう訳でうちに吹っ掛けられた喧嘩を買う気なんだけど、紅梓さんはどうする？ 雇っても良いしエルフ族としてオブザーバー参加する手もあるね。もちろん積極的に参加して僕らが勝った時に何か要求する手もあるけど。もちろん参加しなくても問題ないよ」

「勝てる博打に相乗りするのは好きなのよね。まあ族長次第なんじゃない？」

紅梓はこのタイミングで来てる段階で、殆ど答えは出たようなものだ。

周辺地形は完全に把握しており、エルフの領域を間に挟むから本村から攻め下れないだけである。焦点になってる川の周囲を固めて守っても良し、こっちが逆に攻め入っても良いだろう。

そして参戦に関して色よい返事を聞けたところで、青悟に渡す手紙に『戦力調整』の話し合いが必要かを載せておくことにした。戦力調整と言うのは兵力が劣った側が、何かの妥協条件と引き替えに相手方の戦力を減らす交渉の事である。騎兵を使わない代わりに弓を使うなどか、そういう感じの話し合いだと思ってる。

「剛盾さん。軽虎に投石器載せといってもらえる？ 前に移動させるために小型化させたのがあるじゃない。用意しとけば荷車を動かすだけで遠距離射撃ができるからね」

「ホウ！ 面白い使い方じゃのう！ こりゃあ特等席で見んといけん

わ！」
裏でこういう悪巧みをしながら、八大の返事を待つことになった。

勝算

● 青悟に訴状を持たせてこっちから喧嘩を売り直すことにした。

事態の経緯を記載して殆ど同じ内容の文章を何枚か書いておくが、正統性以外のポイントは『戦力調整』と『戦場の選定』の交渉要請である。後は見届け人を呼ぶ気があるから『日時』も決めたいと書いておく。

訴状いわく、侮辱されたのはこちらであり緋八大の言う主張こそデタラメである。

それに対してこちらこそ決闘裁判による決着を申し出てるが、当方が遥かに有利なので、こちらが控えるならば戦力調整などの交渉に応じるという内容であった。

「せっかく有利なのにどうして手加減してあげるっていうの？」

「勝てるけど本当は戦闘したくないってアピールかな？ まあボコボコにしても何の意味もないってのもあるけどね。後はお互いに数が増えると食料とか時間とかもつたないから」

まあ交渉しても良いけど、しなくても良いという内容なのだ。

こうしておけば経緯を知っていると、『デタラメの訴えで嫌々戦闘を持ち掛けられた』けど、それでも余裕だから大人の態度を示したという形になる。

なお追加戦力を使わない条件は、相手も追加戦力を呼ばない事を前提としている。他にも交渉の種類は用意したが似たり寄ったりだ。完全に手加減するのではなく、お互いに使わない手段を設定するとう意味に近いのだと双葉に説明しておく。将棋で言うところの飛車・角の好きな方を落とし合うという流れだろうか？ 選ぶ戦術によって不要な駒を削りあうという感じである。

「例えば紅梓たちを呼んだらお菓子は食べられるし怪我させたら保証も居るし、援軍のおかげで勝ったらお礼も沢山いるでしょ？ でも相手が援軍を呼ばない場合はこっちもエルフを呼ばないってことにすれば、相手の兵士は減るし必要なお礼も減るからね」

「そういう事ね。まあどつちにせよ名前を貸したお礼くらいは貰うけど」

八大が連さま派を読んだら際限ないので、エルフを使って引き下がらせる。

もしそうならなかった場合は、エルフの領域を通って相手の村を直接攻めれば終わりだ。森を焼き討ちなんかできないし、かといって森の中で戦ったら死ぬしかない。相手が何人援軍を呼ぼうとも勝負にならないので、向こうからすれば絶対に呑まなければならぬ条件である。

こちらが勝ったとしても向こうの村に面している森をエルフの領域に組み入れ、代わりに僕が木材を貰う程度の条件になるので、まったく美味しくも何ともないのだが。

「異種族が戦いに介入する前例を作りたくないと思うから、この条件を出した時点で向こうは絶対に折れるだろうけどね。だから殆ど援軍や助っ人を呼び合う可能性はなくなった」

八大の村の住人以外も呼ぶことができる。

しかしこちらも呼べる以上は、コッソリ援軍を送り込んだら大変なことになる。その場合はこっちも大通連を参加させても良いという事になるので、家臣と村人以外の戦力は禁止ということになるだろう。似た流れで決闘に代理人を呼ぶ話もおそらくはない。

戦力調整の項目を載せた時点で、際限のない援軍競争と言うオチはなくなったのだ。

「戦場を決めるのは本来、広過ぎる場所で戦うと相手の軍が何処に居るか判らないからやるんだよ。この場合は村を焼かずに中間で戦おうねって約束かな」

「でも放っておいてもそうならない？ 私達も相手も村を焼いてもつままないでしょ？」

「そうしない可能性もあるからだよ。何人かが隠れて忍び込むって可能性もなくはないし」

組み入れた方の村に攻めて来るはずだが、入り口は三か所。

その全てを守るのはナンセンスだ。人数規模的に相手の援軍が無

ければ気にすることもないが、その場合はゲリラ戦をやり合う感じになる。傭兵生活を送った僕らの方が有利だが、向こうも雇う可能性があるから無制限の戦いは無しにしたい。

こうしてお互いに戦力を最小限にし合うと、基本的には泥仕合になる。ただ投石器を始めとして色々武装を開発している分だけこちらが相対的に有利であり、この時点で負ける余地はないと言っても良いだろう。

「じゃあ、あの辺に看板とか立ててるのはその辺が理由なの？」

「そういう事だね。距離を測ってるから、どのくらいで戦いが終わるかも推測が付けられるよ」

ちなみにこの計測はグレーゾーンである。

こちらは荷車に投石器を載せてる最中なので、測距射撃ができるからさ。戦ったらマーカーで位置を測って方向を変えてぶっ放せば終了だ。相手の上にバラバラと石が落ちてきて、散弾代わりに降ってくることになる。

見届け人と言うか見物人を呼ぶ気だというのは、悌さまに泣きつく為ではなく、新しい兵器を見せてアンデッドを倒すための北上戦に備えた物だった。大砲と言うよりは古代の攻城兵器を小さく運用し易くした物で、銅張鉄甲馬車よりは異質ではない筈だ。

「そもそも。土地に関しても八大の訴状じゃ川が境界だからこっちの岸まで寄せとあつたけど……。同じ時期の開拓村の上にアンデッドの跳梁もあるんでお互いに適当で、済ませてるはずなんだ。多分、探せば『お前の領地だからお前が討伐しろ』みたいな手紙を送り合ってると思う」

組み入れた村はアンデッドに滅ぼされていた。

だからまとめて放り込んだ遺物の中に手紙がある可能性はあるし、無くても成立時期と地図を見ればどちらが正しいかは判りそうなものだ。訴状の内容に関して即座に反論できないのはその辺の怠慢と言えなくもないが……。

今回の件に関してこちらは詳細な資料を用意し、論拠を立てているのに向こうは特に何もなく声が大きだけ。仲裁を行う者が向こう

の味方であるとか、ボンクラで『喧嘩両成敗だから』などと言い出さない限りは正式な裁判になっても勝てる気はする。

（僕が若造だから何も知らないと思つて、境界線を誤魔化すだけでも儲かると思つたんだらうなあ。もし川が全部の境界線だったら、討伐を要請してらつての）

他にやることが多いし遺物は放り込んで確認して居ない物も多いのだが……。

川は直線ではないのでお互いの領域が混ざり合っている。向こうにとつて境の部分もあれば、こちらにとつて境の部分もあるだろう。しかし大部分は不明瞭なままでエルフの領域に跨っているのだ。中間地点は人間の領域の筈だがエルフの土地に近いし、アンデッドが跳梁跋扈してるからナアナアで済ませていた場所が過分にあると思われ。

ともあれその辺は遺物を片付けつつ戦いの趨勢が決まった後だろう。僕は目の前の問題に専念することにした。

● 改めて現実的な計算をしてみる。具体的に言うとな戦力の問題だ。

この世界の村は大き目の本村と、その周囲の山や谷に支邑が幾つかと言う構成になる。場所にもよるが本村が百から二百、支邑が一つ辺り十数名くらいで全部合わせて三百くらいになる計算である。

古い村の中には離れに家を建てて次男・三男が仮独立し、もつと人数が増えれば板を渡して茅を葺き、アーケード状にして収容人数を増やす。もちろん畑を分けてもらえない末っ子などは、村はずれに小さな家を建てて開墾したり、兄たちの世話になりながら代わりに畑を耕す小作人になる。

「双方ともに援軍は無しで開拓村だから村人も多い訳じゃない。こちららは二群あるけど片方は壊滅した村だし、総数が二百人前後で徴兵できるのは十数人から無理して数十人つてところはこつちも向こうも同じかな。普通は分散するから人口密度が低いのがネック……と」

先の数は普通の村であり、初期の開拓村にはそんなに居ない。

八大の村もこちらの村も開拓村なので多寡が知れる数なのである。

村人は全員が顔見知りで、出入りなんか無いから数世代の内に全員が親戚になるだろう。

疎開してて無事な本村は四方を山に囲まれた盆地にある事もあり、元から人数が多いわけではない。それが組み入れた村の方にも移動して働いているのだから、人口密度はかなり少ないように見える。発展性が大きいとも言えるが、現時点では八大が侮るのも仕方ないと言えるだろう。

「もつとも本村を守る必要はないから、そうでもないんだけどね……後は向こうがどう攻めて来るか、かな」

戦える十数人は全員を、向こうに集められる。

四方が山と言うのは守り易いという事であり、エルフやドワーフの領域もあるからまず突破されたりはしない。山の中で移動し易い場所を把握しているのも、相手が山を通ろうとしたら即座に発見できるというのも大きいだろう。間に見張りを兼ねた休憩小屋があるので巡回する者が疲れると言う事もないしね。

普通は此処まで地形に詳しくはないし守り易くもないが……僕は和風の城を作るつもりだったので、地形の把握と建物での補強は当然のようにやっていた。

「戦えるメンツは組み入れた方の……そろそろ名前を決めなきや面倒だな。まあ向こうで作業してもらって、投石器で嵩ました。主要な振り分けは今までと同じく、北口をメインに西の川に見張りつてとかな」

仮に本村を壺として、向こうを忒の村とする。

忒の村は西に川があり、北と東に出入り口がある。その周囲に山は幾つかあるが壺の村ほどではなく、林やエルフの領域に連なる森に面していた。

この中で東口に回る前に捕捉できるので、メインで警戒すべきは北だろう。西の川は深くはないが溪流なので流れが早く、あの村が壊滅した理由の一つであり、八大の村が比較的無事な理由でもある。そんな川をただの村人が簡単に渡って来れるはずがないので警戒はし易いのだ。

「西の川は見張りを置いて渡河ポイントを確認するだけでもいいかもね。測距射撃ってほどのレベルじゃないけど投石器を移動させられるし」

援軍を呼ばない以上はどう頑張っても百名だ。

戦えない者を後ろに置いて、訓練した者を前に出してイキがるくらいだと思われた。それならば投石器を載せた馬車を武の村の中央に置き、こちらの戦える者を北口に配置。あとは見張りを東西に用意しとくだけで十分だろう。

どちらかと言えば問題は回答を先延ばしにして北口よりも北部への道を塞ぎ、侯爵領からこちらに向かう水棲種族や人足から物資を奪われる方が困るくらいである。もっともそれをやるには何十日も畑仕事をさせずに街道筋に張り付けておく必要があるうえ、こちらに向かっているかもしれない大通連を刺激する可能性はあった。

「あ……人足たちもだけど、大通連に釘挿しとかなないと。全部交渉決まった後で皆殺しにされても困る……」

迂闊と言えば迂闊だが最近平和なのですっかり忘れていた。

専用鎧で釣って侯爵領で魔物退治させていたはずなので、そろそろ戻ってくるはずだ。私闘の真っ最中だがおそらくは余裕で片が付く筈なので、直通で戻ってこられたら大変である。

どうして敵対している領主の為に心配しないといけないのか。世の中理不尽だと思いつつ、手紙をしたためることにした。腹が立ったので大通連を止める内容であると同時に、さっさと返事をしないとこちらでも傍若無人な豪傑を止められないぞと八大に脅しを兼ねていると思ってもらえばいい。

交渉のテーブルに乗ると言ってきたのは、手紙を送り届けて数日後のことであった。

予期せぬ仲裁者

● 相手が戦力調整の交渉に乗って来たのは良いが……。

少しやり過ぎてしまったと気が付いたのは、余計な人間が増えていた事、そして返事を伝えたその瞬間から交渉をしようなどと前倒しを要求された時である。

八大は青悟の他にもう一人、貴族らしき老人を連れていた。この辺りの名士を知らずとも、それが緋家に属する貴族……おそらくは連さま派であることは容易に予想できた。これが驚かずにいられようか？

(こいつ負けて悔しいからって……泣きつきやがった!?)

八大は自分だけではどうもできないと判断したのだろう。

あるいは老人の方で無理だと判断したのかもしれないが、先生とか親に『一発殴ったら三倍返しされた』と泣きつく不良みたいなものがある。どこにメンツがあるのか教えて欲しい。

それはそれとして村の外であることもあるが、肝心の青悟も苦笑いするばかりで特に何も喋らない。この程度は何とかして見せろと言う事なのだろうか。

「……軽虎のシートは取らないこと。それと適当なタイミングで下げたいて。まだ気が付かれたくない」

「ういっす」

出迎えに行く前に六耕へ投石器を隠すように伝えておく。

流星に向こうの丘候に見られたくないからシートは被せておくが、もしこのまま本村である壺の村で話し合うと言う事に成ったらバレルのは時間の問題だろう。ここは文句を付けつつ時間を稼いで秘密兵器は隠しておくところだろう。

そういう意味では何処にでも駆けつけられるように壺の村の中央に置いておいて良かった。三圃式農業で分割して居るから不自然な位置ではないし、遠目ではシート越しに何があるかは判らないはずだ。

「あつ……勝手に入って来やがった。しかもジロジロとこっちの建物見てるし。仕方ないなあ」

遠巻きに姿を見せ用件だけを伝えるのかと思たが……。

こちらが対応を決める前に、手を振りながらズケズケと入り込んで来る。使者だから狙撃されないと判ってるのだろうが、同時に偵察をするとか良い度胸である。

ひとまずこの段階で言えるのは、明らかに八大が当て馬でしかないと判った事だ。切り捨てても痛くない末端の駒とは言わないが、派閥に大きな傷が残らない程度の男なのだろう。哀れと言えば哀れだが、僕が何もできない場合は大きな利益を手にしたはずなので同情する気はない。そもそも奪われるのはうちだしね。

「緋五堀じゃ。主家に迷惑を掛けることもあるまい。この老人が交渉の見届け人ということで構わんじやろ？ 青悟君もおることじゃし」
「五堀さんも青悟さんもどちらかには肩入れしない、あくまで中立の立場と言う事でしたら構いませんよ」

残念な事に緋家を名目にされると断り難い。

悌さまたちを呼ぶのはどうせ戦いの日なので必須ではないこともある。それに中立性が保てないことを強烈に主張すると、その事を理由に『八大の件とは別に』挑まれる可能性があった。

友誼によって八大に肩入れするのは無理でも、僕の断り方が失礼だったからという理由で決闘裁判と私闘を挑むことは問題ないからだ。そうなれば八大どころではなく、派閥全体を敵に回すことになるだろう。

「では本村の屋敷にご案内します。馬車を回しましょうか？」

「いや、寄る年波には勝てんでな。あそこの建物で話をしようじゃないか。まだ寒いし腰も悪いでな」

五堀という爺さんは好々爺のフリして中々抜け目がない。

もし戦いに成れば簡易砦として利用する建物の一つを高所の場として指定したのだ。おそらくは中の構造や、煉瓦を何処まで使って建築しているかを今のうちに確認するつもりなのだろう。

作業小屋として使ってはいるが、まだ小麦などの収穫はないので空

いているから申し分は無かったし、交渉の場として使うという理由では断れないのが痛い。

「フン。調度品の一つもない殺風景な部屋とはな。多寡がしれる」
「申し訳ありませんね。ここは作業小屋ですし精々が講堂として使うくらいですので。ここで交渉すると知って居たら机と椅子以外にも用意しておいたのですが」

うちは木工を修練している者はいるが、売り物の為に小型のみに絞っている。

練習する意味でも飾り付ける意味でも何度も作る必要があるし、そもそも薪や建物自体に使うからタンスやなんか回せる木は少ないのだ。

「これ。事を荒立てるでないわ。それに領主として見どころは色々あるように」

「そういう訳では……」

そっぽを向いているようで、五塰は別のモノを見ていた。

建物の構造がどの程度なのかを見た後は、数字と簡単なマークを教える記号表に目を向けて居る。文字や計算を無理に教えるのではなく、最低限の部分だけでも覚えさせる為の物だが……。

確か例文は労働条件のはずだ。労役で働いた日は本村の風呂に無料が入って良いとか、ノルマ以上に働いたら残業ポイントを付けて物々交換に応じるくらいの事が書いてある。言葉や数字を教えるたびに周知されるので、労働意欲を書き立てると評判だった。

（まったく。勝てる相手だと侮って居たら、余計な人間を引っぱり込んでるじゃってまあ。利用されてる事に気が付かないのかな……まあこの辺の情報を抜かれても困りはしないけどさ）

こういった情報は他の荘園主とも共有している。

洞府の機能でうちだと効率よいだけで、他の荘園も同じ情報を持っているのだ。だから見られても困ることはないが、これだけ抜け者のない爺さん相手が向こうについていると思うと面倒くさかった。

そういう意味ではこちらの援護射撃をして欲しいところだが、残念ながら青悟の表情は変わらない。まあ彼から見れば上級貴族たちと

比べて他愛ない相手ということなのだろう。経験値として食べる相手にしては少し渋いような気がする。

●
そして本題の戦力調整が始まると途端に声が大きくなる者が居た。もちろん八大のことだが『馬鹿は馬鹿役にやらせる』という言葉がピッタリあてはまる人間も珍しい。八大が怒鳴って五塀が宥めるというコンビネーションがなかなか面倒だった。

なにしろ表向きは仲裁役なので、適当な所で五塀老人が『じゃあそうしよう』と言ってしまえば例え話をしただけで僕が納得したことにされかねないことだ。

「とんだ恥知らずですな！ 異種族の力を借りようなどとは」

「国勲や歴代のご先祖方を馬鹿にするのはどうかと思いますよ。皇帝陛下や大貴族の方々が異種族と手を携えた例は少なくないのですから。それに外国の勢力を引き入れるわけでもありませんしね」

本当は『エルフの力を狩りたくないんだよなー。チラツチラ』とかやるはずだった。

しかし下手にそんなことを口にする、『なら借りない方が良いね』とされてしまうので出来ない。しかないのです。まずは嫌味を受け流しておく。

まずはお偉いさんが異種族と提携した例を挙げて代わり身。国内勢力であれば幾らでも例があるので、特に事例は述べずに問題ないただけ口にする。

「俺が魔物だと言いたいのか！」

「そんなことは言ってますよ。他にも例なら幾らでもあります。しかしお互いに援軍を呼ばないという協定はいかがですか？ それならば僕が異種族を呼ぶ可能性もありません。そもそも僕と八大さんの問題ですしね」

「…………ふむ」

五塀老人は少し閑上げる仕草の後、青悟に目を向けた。

一見意見を伺ったように見えるが、彼が僕に助け船を出しているのか確認しているのだろうか。

生憎とそんな優しい人物ではないので現在進行形で僕が苦勞しております。

「援軍ではない！俺が侮辱されたことを我が事のように怒りを覚え、友誼を結んだ仲間が駆けつけてくれようとしておるだけだ！」

「それならば窮地に陥った僕を助けようと、友誼を結んだ仲間が駆けつけるのもおかしいことではありませんね。街道筋を跳梁して交通を妨げる者を通行人が排除することも」

助けを求めたわけではない。そう主張する彼にこちらは素直に返した。

私闘で『悪いのは全てあいつだ、あいつの所へ行く奴が悪い。保証はあいつから貰え』と主張して害するのは一応罪ではない。だが同時にそいつに大して反撃することも罪ではない。

際限ない戦力拡張を行うと、八大は派閥の仲間を次々に呼べるが、こちらは僕と交渉して得る者が多いと思った連中が駆けつけて来ることが可能になる。数だけなら向こう側に理があり、場所と戦力だけならこっちの方が上だろう。

(ジリジリと時間を掛けられたらこっちの方が迷惑だけど……決着つかないとそっちの方が赤字になり易いんだけどなあ。そろそろ折れてくれないかな)

こちらは水棲種族以外は自己完結できる。

経営してまだまだ一年程度の荘園に商人が買い付けに来たりはしないのだ。場合によっては割高になることを前提に、エルフの領域を通れるのでこちらは被害を抑えられる。しかし向こうは畑仕事でできないし、援軍を呼べば食料だって負担しなくちゃならないだろう。「それとも人数制限を比率の利で考慮して掛けますか？最大人数の多いそちらは多めで、こちらは少数。もちろん比率はお互いの納得できる割合で」

「それなら……。そんなことはせぬ！」

「コホン……いや、双方納得できそうだったのに残念じゃ」

八大は人数比率を下げると、こちらが少数精鋭な分だけ有利なのに気が付かなかった。

五嵬老人が乗り気なフリをして止めなければ、向こうが三十人でこちらが魔法を使えたり豪傑中心の十人とかできたのに残念である。そうなったら魔法での爆撃と弓の狙撃で追われたのだが。

しかし五嵬老人が露骨に介入しそうになるとか、中立性は最初から気にしてないが八大の方も相当にじれてるな。まあ畑仕事を中断すると損害が出るのは向こうだもんな。

「ならばいつそ俺とお前との一騎打ちと言うのはどうだ？ 貴様も領主ならば男らしく剣で決闘で片を付けろ」

「生憎と手前は作戦立案で名前を挙げましたから。それにどちらの訴状にも手段を一騎打ちでは書いておりませんでした。一騎打ちをする場合は応じるだけでも何らかの譲歩を貰うことになりますね。最低でも魔法や武装を自由に選ぶ権利はないと」

「何だと、この卑……ぐぬぬ」

剣での決闘というのは華だが別に決まり事ではない。

よく三種類くらいの決闘法を提示し、相手に選ばせるとするのはそれ自体がフェーデの慣習に基づいている。訴状を出す方から複数種の決闘法を用意し、相手にどれでも良いと選ばせる度量を見せるものだ。ちなみに勝負方法の中にはチェス類の遊戯もあったりするが、前世の分だけ僕はゲームが得意である。

しかしながら今回はお互いに想定外というか、嵌め殺す気であったためにそんな方法は例示していない。無理に要求すれば、交渉の席での言葉なのだから譲歩を迫られるのは当然だろう。

「あえて申しますがそうなれば最も得意とする方法で殺し合う事になります。これからアンデッド退治に向かって手を取り合う必要のある同胞ではありませんか。傷つけ殺し合わない用に、この場で交渉しているのだと思います」

「グヌヌ……口の達者な小僧めが！」

先ほどは侮辱になるので口を閉ざしたが、僕が若いのは見ての通り。

侮辱にならないギリギリで罵倒して来るとか料簡の狭い大人である。まあ一騎打ちの決闘に自身なんかないので、魔法とか武装という

ハツタリを利かせておいた。

僕がどんな魔法を覚えているか判らないので、離れながら攻撃魔法でも撃たれたら危険だとでも思っているのだろう。

「おおそうじゃ。アンデッド対策ではあちこちの者が世話になったそうじゃの。この老人にも一つ見せてくれんか？」

「あはは……そう来ますか。まあ良いですけど」

露骨な肩入れだったが、あえて乗ることにした。

このままでは何のために交渉しているのか分からないので、物別れになって偵察された分だけ不利になるだけだ。しかも仲裁案を蹴つたとかありもしない宣伝をされそうなので、使う気の無い物を見せておくことにした。

軽く手を挙げて人を呼ぶと、用意だけはしたクロスボウを持って来させる。

「石弓の新型かの？　しかし巻き上げ式では時間が掛かりそうなものじゃが」

「一つ用いるならなそうですね。三列用意して順繰りに撃ち込む予定になってます。作戦例はこんな感じですね」

他の荘園主にも配ってる資料を見せる。

魔物対策用と銘打ったページであるが、紙の資料と言うこの辺では珍しい物にクレインクイン・クロスボウによる連続斉射作戦を記載したものだ。まあクロスボウの開発をした時に作ったものでもう古い内容なのだが。

「随分と物騒じゃのう。こんなものを人間に使う気かの？」

「そうならないように今、努力をしております。何らかの譲歩……例えば騎兵を使わないなどの条件が頂けるならば、殺傷性の高い武装はつかない協定に応じますよ」

もちろん即座に肯定も否定もしない。

別に人間相手に弓を使ってはいけないというルールなどないので、こちらから否定はしない。ルールに基づいた戦争をするのだと仄めかして、戦闘自体を控えめにする。

そして飛び道具を見た時に怒り顔だった八大も、この辺の協定には

前向きになった。

「では日時と場所については双方納得ということでもいいですかね？」

「こちらが馬を使わぬのだからこちらも石弓は使うなよ」

「もちろんですとも」

こうして私闘の規模は小さく成り、最大の懸案だったゲリラ戦に關しては妥協が持たれたのである。

地方の戦いでは付き物の『石投』に言及したが相手も使う気満々だったようで止められなかった。このままいけば投石器も問題ないだろう。できれば使わずに済ませたいものだが。

私闘の始まりと、私闘の終わり

●
中間地点にある丘と丘に挟まれた小さな平原で戦う事になったが……。

開戦前にも策を使ってこられたのでこちらも肝が座った。陰険な策略は正面から粉碎する事にする。嫌味を言い合うのは馬鹿馬鹿しいが、かといって腹が立つても黙っているのは舐められっぱなしでつけあがらせる事に気が付いたからだ。

何が起きたかと言うと何時の間にか見届け人を二広に譲ったという話が出ていたのだ。五堀いわく八大への友誼ゆえに仕方なく参戦するが、それでは公正性が保てないので見届け人を変わるとい建前だ。

「皆さまにお見せするつもりだったのですが、よく考えればお呼びするのは非礼でしたか。二広殿にはお手数をお掛けしまして申し訳ありません」

「いや、気にすることはない。対アンデッド用の武装と言う事なら家中の関心は高い故」

おそらくは二広が悌さま派になったので、援軍となるのを牽制したのだろう。

そればかりか中立役で仲立ちすると言っていた五堀までが参戦するとか、彼らのモラルはどうなっているのだろうか。まあ仲介役を譲ってはいけないとか、僕が呼ぶつもりだった見届け人を勝手に向こうが呼んではいけないという決まりはない。普通はそんな手段は採らないから、当たり前過ぎて気にしなかっただけだ。

それよりも腹が立つのは連中の一部が馬に乗っている事だ。取り決めは八大の村だけとか、あるいは下馬騎兵は移動したら装甲歩兵として降りるから騎馬ではないという建前なのかもしれない。

(……あるいは単純に『一部が暴走して』取り決め無視とかね。この手の戦いは『話が違う!』と取り決めが実行されなかったことが、新しい戦いのキツカケだったりするしなあ)

ここまで来て良い子ちゃんでもない仕方ないだろう。

平然とグレイゾーンを攻めて来るならばグレイゾーンで脅すことにする。それで引きさがらないならば、こちらも平然と実行に移すまでだ。

僕が先に文句をつけても『騎士が約束したことを疑うのか！ ゲスの勘繰りだ』と切り返すだろうから、その前にグレイゾーンに踏み込んだからこちらも使うと示しておく。もちろん大義名分は用意してあるので、それが脅しとは言えないだろう。

「あそこに的を用意しましたのでご覧ください。まずは丘の上から砲撃します」

「うん？ 荷車に何か……」

見えないように丘の上に隠しておいた投石器を前に出す。

砲撃する場合の距離と角度は、前もつてうちの村と村の間で練習しているので問題ない。ただ投石器なんて物の命中精度が高い訳はないので、そこは大きな石ではなくゴルフボールからソフトボール大の石を無数に投げる散弾形式にしておく。

まあ相手がアンデッドであり……もし使うなら人間相手だ。城を攻めるわけではないので、大きな岩を投げる必要もない。だいたい大きな投石器でもないしね。

「投石器か。確かに有効な兵装だが……よくもまあ小さくまとめたものだ」

「冗談ではないぞ！ あんなものがあるなどとは聞いて居らん！」
「ご安心ください。殺傷性の高い石弓を使わぬ代わりに馬を使わぬと約定を定めております。あれは石弓に準じた危険性がありますでしょう？ そちらが約定を破らない限り用いることはありません」

二広は感心していたが見慣れない顔の騎士が喚いた。

八大に協力する小領主なり荘園主なのだろうが、馬をつれてきているメンツの一人だ。先ほども推測したが約定なんか知らんと勝手に乗るか、途中の移動までは騎兵ではないと言い張るつもりだったのだろう。八大を睨みこちらを睨みどうしたものかという顔に変わっている。

もちろんグレイゾンの投石器をまともに使う気はない。どう考えても過剰な攻撃力で、当たれば何日も働けない者が出てくるはずだ。徴兵した農民など当たり所が悪ければそれだけで死ぬからね。

「聞いての通りあれは対アンデッド用の兵装です。その為に皆様にお見せしました。北上する際はあれを複数用意するつもりです。今のところはあの通り一つ切りですが、準備はしておりますので」

ここで重要なのは名目である対アンデッド戦を告げる事だ。

これで脅しを掛ける大義名分は立つし、二重三重に士気をへし折りにいった事に理由が出来てしまう。重ねて人間相手には『約定が保たれる限り使わない』と明言しているのだ。騎士が恐ろしいからどころ、信じられないから離せなどとは言えまい。

ではこれが士気に影響を与えないか？　とさえそうでもない。約定を破る気だった連中はその気を無くすし、逆に投石器の援護があれば北上しての対アンデッド戦で楽に戦えると判ったはずだ。ここで僕を痛めつけて量産させない理由などない。そして何より……動員された農民たちはどう考えるだろうか？

「……本当に使わぬのだな？」

「何度も申しております。そちらが使わない限り、使う事は論外です。五堀殿からお聞きしておりませんか？　新開発の石弓を多数所持しております。使う気であれば最初から戦力調整などこちらから申し出はいたしません」

「グヌヌ……」

その男はこちらではなく八大の方を見ながら尋ね返した。

何らかの取引があり、馬の運用をせぬ方向に切り替えて良いと暗に聞いているのだろう。こちらはそしらぬフリをして、グレイゾーンに踏み込まぬ限り使わないと繰り返しておく。

それに対して八大の方は僕を睨むばかりで特に返答をしない。せっかく集めた援軍の士気が低下しているのは目に見えているし、馬を使うことでこちらの動揺を誘うのは作戦の内だったのだろう。咄嗟に変更してよいものか、それともここで言いがかりをつけて約束を反故にするプランに切り替えるかを決めかねていると思われた。

「もう良いじやろう。使わぬとワシは聞いて居るし、サンプルとして借りた石弓も見せたであろう。それに数だけならばこちらが有利、恐れることもあるまいて」

「老公……」

「そういうことなら」

代わりに返事をしたのは五嵬だ。八大の方は難しい顔をしていた。というのも今回の問題は『騎士の裁量権』にあると言っても良い。騎士はそれぞれが独立した権利を持っている小領主であり、同胞の指示など基本聞く必要はないのだ。よく漫画の戦場で独断専行したり好き勝手な装備やら専用機を用いる奴もいるが、それはその辺の慣例に基づいている。

要するに馬を移動手段だからと判断するのも騎士の裁量、そんな命令を出す盟主など盟主ではないと勝手に乗るのも騎士の裁量権。もちろんそんなことをすれば約定を統制できなかった八大の名誉が下がるが、最初から連さま派の代理人なので問題はない。『奴は見限った』という事にすれば良いし、本当に見限る必要も無いからね。

「それに……もう小細工は打ち止めじやろ？」

「攻撃手段に関してはそうですね。エルフも二人しか連れて来てませんし」

笑いながら油断のできない目をする五嵬に笑い返しておいた。

正面からの打撃戦ならばエルフに奇襲をさせる意味はない。高い代価を払ってまでお願いする意味は薄いし、妥協で済ませた場合は持ち出しの方が大きくなるからだ。金一萬枚を使って賠償金百枚を得ても赤字になるようなものだ。一萬枚なんか払えないけど、森をエルフに渡したら将来的に一萬では済むまい。

その上で攻撃以外の小細工は色々と用意しておいた。元から僕が対アンデッド戦で使っている方法なので、予習して居ないとか言われなくても困ってしまう。

● ようやく開戦と言うか、これから短時間で決着をつけるので準備時間の方が遥かに長い。

所詮は貴族同士の私闘なので開戦規模は小さく、しかも同じ寄り親を持つ貴族同士とあつては全力で殺し合う事もないので当然と言えば当然だ。

お互いに初期陣地は丘の上にあり、中央にある狭い平原をどれだけ確保したかで勝負が決まるというせせこましい戦いだつた。

「二人しかエルフを連れてこなかった事を後悔するのだな！」

『僕は貴族に列せられるばかりですからね。費用効果も考えられるところをお見せしませんと』

お互いに嫌味を放ちながら開戦。

幾ら狭いからといってとうてい声が明瞭に届く位置ではない。体格と性格的に声の大きい八大はともかく、僕の方は魔法の補助でも無ければ無理だ。

その魔法を使ってくれてるのはこないだから居候している青柳であり、もう一人のエルフは当然ながら紅梓である。

「でも……良かったのですか？ 部族の皆は協力しても良いと……」

「いいんですよ。そもそも勝負になりませんから」

青柳さんは紅梓と違って殊勝で謙虚なのが癒される。

性格なのだろうが色々とエルフ族の事を教えてくれるのは、きつとまだ外での経験がないのだろう。紅梓は迂闊なところもあるが口は堅いので、エルフ族の情勢など教えてくれないのだ。

しかし戦力が少ないのだが、作戦上問題ないので援軍は無用の長物だつた。こう言つては何だがこれ以上を借りたら過剰戦力だし、費用も馬鹿にならないので遠慮しておいたともいう。

「勝負にならない……ですか？」

「ええ。彼らは人数に任せてやって来るでしょうが、まとまりが無くてバラバラな上に士気が低いですからね。ホラ……あちらは全員が降り始めているわけでもない」

互いにジリジリと伺いながら丘を下つていた。

途中で石を投げたり剣やら槍で殴り合うが、鋭利な名刀は使われないし刺し殺したりというアグレッシブな戦いはしないだろう。

そして相手方の兵である大部分の農民は徴兵されているというの

は同じだが、投石器を見てくじけているうえ『数が多いから自分くらは戦わなくても良いかも』なんて考えているのが良く判る。僕だってこんな馬鹿馬鹿しい戦いなら真面目に戦いたくはなかった。せっかくアンデッド対策が成り立ったところなのである。

「指揮系統がばらばらな時、一番影響が出るのは魔法と装備の使い方ですね。と言う訳で攻撃魔法は不要ですので、先ほどと同じ魔法だけをお願いします」

「……判りました。それでよろしければ」

こちらが圧倒している点は、まず士気が高い事。

良く分からないうちに喧嘩をふっかけられ、自分たちはせっかく得た平和を守ろうとしている。加えて投石器と言う秘密兵器があれば、今回は使わずともアンデッド戦が楽になるのは判っている。そして何より、こちらの作戦を知って居るからというのもあるだろう。

最後に決定的なのは、こちらが魔法と装備を効率的に使うという事だった。

「そろそろ良い距離よ。走ったら戦えそうな雰囲気」

「ありがとう紅梓さん。向こうに到着したら風の守りだけ使って、後は監視お願い。弓は今回なくても良いので」

目の良い紅梓さんに戦場の監視をお願いした。

敵味方の移動速度でどのくらいの位置なのか、どこが優勢でどこが不利なのかを発見し易いのはありがたい。加えて言うともっと視認し易くなるので、こちらは快適に戦場を管理できる。

もうある程度分かったと思うけれど、魔法の使い道はこの辺に絞っている。紅梓さんは風の防御魔法で周囲を守り、青柳は風の魔法で声を必要な場所に届ける。こちらだけがオペレーターによって一方的に戦場をコントロールできると言う訳だ。

「さて、みんな行くこうか！ 本陣を前に出す!!」

「おお!!」

先に降りた屈強な男達ではなく……。

それほど闘い慣れていない数合わせの村人に声を掛けた。彼らが率先して行動してくれるほどに内の士気は高い。それだけ村を守る

うという意識が強く、かつ僕の立てた防御策が有効なのを知って居るからだ。

そして指示に従って本陣を構成する馬車と複数の荷車が一気に丘を降り始めた。

「本陣は中間位置に停止！ 大通連たち遊撃隊は同じ位置で待機。荷車はいま前衛が居るところで停車して、戸板と梯子を降ろすよ！」

以前アンデッド相手に使った作戦の焼き直しだった。

荷車に戸板や梯子を載せて即席のバリケードを築くわけだ。今回は森だの林だのはないが、荷車が以前よりもガツシリしている上に台数あるのが大きい。この辺は改良して置いて良かったと言えるだろう。

そして指示に従って荷車たちが前線に到着し、そのままV字とV字を構成しつつお互いを繋いでW字のフォーメーションを作り上げる。完全に囲めば幌馬車戦術になるが、今回はあえてそうしないでおいた。

「戸板に隠れて投擲！ 各チームはリーダーが狙った敵に集中！ 当たらなくてもいいから怪我しないように！」

「はいー！」

と言う訳で一方的な戦闘のスタートだ。

こちらだけに防御兵器があり、相手は盾を持っている騎士や戦士が何名か居る程度。どちらが石の投げ合いで有利かは素人でも判らうものだ。

加えてもう一つ、馬車の上に紅梓さんが飛び乗った事である。

「紅梓さんは狙うべき場所を教えてくださいから。もし相手が集中してきた時だけ風の守りをそこに掛けてあげて。最優先は回り込む敵の主力だけどね」

「はいはい。それだけで良いならそうするけど……でも、なんだかそうなりそうね」

こちらにだけ防御壁があり、こちらにだけ管制塔がある。

ここまでやって負けるとかはあり得ない。突破することは不可能ではないが、それをするには固まる必要があるので、高い位置から把

握したら集中攻撃をかければ済む話だった。

また風の守りで矢弾を反らす防御魔法を使っているので、強引に石投げ合戦をすれば100%こちらの勝利は揺るぎないだろう。

「汚いぞー！ そこから出てこいー！」

「僕の声をまた中継してくれる？ 相図を出したら、声の対象を八大から周辺全体に調整をお願い」

『……僕がこの戦術を取るの報告例を読めば一目で判ったはずです。ではどうして禁じる代わりに何かを妥協しなかったのですか？

戦力調整の場で可能だったはずです。そこで約定を結べば別の手段に切り替えていましたよ』

数に任せて攻めれば勝てると思っっているから研究もしない。

ちよつと僕の戦闘例を確認すればこうなることは判っていたはずだ。緋雁原でも盾で守りながら大通連に攻撃を専念させたのだ。僕が防御シフトしながら戦術的勝利を目指すのは判り切った事だろう。

そもそも戦力調整は『使つて良い手段』を合う場所ではない、良い勝負になる様に『使つてはいけない手段』を指定して封じ合うための場なのだ。そして『他の手段に切り替えた』と宣言しておくのは重要だった。

『……そもそも僕の目的は対アンデッドの作戦を確実にし、できるだけ被害を出さない事を目指しています。あなたがありませんし、要求を突きつけなければ、今年の終わりには北上できてました。どうして同じ緋家に所属する我々が戦っているんですか!?!』

「黙れ！ 俺に立ってついてどうなるか判っているんだろ！」

青柳に合図を送りながらプロパガンダ工作に切り替える。

もはや戦いの決着はついているも同然だ。あとは少しずつ前進して狭い平原の要所を抑えるだけである。ガツタガツタの向こう側はそれだけでやる気を失うだろう。

それはそれとして舌戦の最中に向こうの一部が短気を起こして突出し始めたらしい。

「あつちからグルつとやって来てるわよ。中央にも何人が居るけどそこは石投げてれば終わると思うわ」

「了解。じゃあ終わらせようか。大通連は回り込んでいる連中をできるだけ怪我させないように。剛盾さんは念の為に大楯を構えて遊撃隊を守ってくれる?」

「ようやく出番かよ!」

「任せて置け」

こういつてはなんだがお互いに援軍なしで、同じ人数でぶつかる方が困っただろう。

戦闘手段まで指定されては考える余地もないし、援軍一切禁止だったら大通連やエルフ・ドワーフといった面々の手助けも借りられないからだ。

問題なのはここで八大が信じられない暴挙に出てきたことだった。

「剣と剣の一騎打ちを挑む! この期に及んで断るまいな!」

「この期に及んで!? ならどうして無理にでも条件を付けて最初から挑まなかった! そうすれば僕もみんなも苦労しなくてすんだはずだ! ワザワザ援軍にきてくれた人たちだって、何の為に来たんだ! 負けそうになったから自分が勝てる戦いを挑む気か!」

「黙れ! 御託はいい! 武器でも魔法でも認めてやるから男らしく自分で受けてみろ!」

こちらが前進を始め、向こうの主力が回り込みに失敗すると今度は一騎打ちに出て来た。

しかも無条件で自分有利な条件で、受けなければ男らしくないという。その上で手段を妥協し、それでも一騎打ちでの逆転を望む当たりどちらが男らしくないのか。

これを断るのは簡単だ。しかし……この後の展開を考えれば受けた方が無難ではある。負けたとしても僕の名声はあがるし、勝ったとしても八大の名声は地に落ちる。何しろ負けている状態で『勝てたら撤退を認めろ、負けたら無条件降伏』というレベルの案件である。こちらが応じるだけでも何らかの妥協をもらえる状態なので、良い勝負をするだけでも良いのだ。

「僕が男らしいとか男らしくないとか言う以前に、貴方は貴族らしくない! もし僕が勝利したら隠居してもらおう! この条件が妥当

かは、貴方ではなく貴方の援軍たちに判断してもらおう。それでも良いならば受けよう！」

「何だと！言うに事欠いて！」

「その条件、緋五塀は認めようぞ」

「私もだ」

「オレも認める」

幾ら何でも八大のやり方は杜撰で強引過ぎた。

相手方の何人かが捕虜になったり怪我をしている事もあり、奴自身はともかく周囲は次々に受け入れていた。それだけ情勢は傾いていたということだ。

まあ僕が勝てるかは別なんだけどね。

決着とその向こう側

● 貴族や騎士の一騎打ちという物は我儘を通す場ではない。

あくまで条件闘争の最終手段であり、条件を突き詰めた上で『決権をこの戦いを委ねる』というものだ。特に定める要件が無ければ慣例に則ることが多いのだが……。

今回は緋八大の要求が過大過ぎた。事前に定めた決闘ならまだしも、フェーデに及んでいる最中に勝負の趨勢を分ける内容で挑むことはまずない。あっても泥仕合に成ったり他の参加者との腕前が隔絶し過ぎて、話にならない時に二人だけで終わらせようと申し出る程度だ。

「俺が勝ったらお前は貴族になるのを取り下げろ！」

「通例では追撃無しで捕虜即時釈放を伴う撤退ですが？ それ以上に積み上げる場合はそちらの待遇が悪くなるだけですよ？ それでも良ければ」

もし最初の交渉で『お互いの貴族たる資格を賭けた決闘』としたなら何の問題ない。

しかし殆ど敗北が決まって、見届け人の裁定が降りる前に無理やり挑んだ場合は撤退条項となるのが慣例だった。『これ以上戦えばこちらは壊滅するが、そちらも少なからぬ被害を及ぶ』という理由で申し出るのが普通だからだ。それをフェーデなど何もなかったかのように決闘裁判を押し付けるのであれば、賭け金が高くなるのは当然だろう。負けそうなので仕切り直しましょうというのは虫が良すぎる。

もちろん決闘する事を最初に何も話し合っておらず、向こうがこちらの本陣まで切り込んで来ていれば状況自体が変わるので話は別だ。その場合は最初の取り決めに不備があるわけで、騎士の慣例である決闘条項に言及しない方がおかしい。負けているのではなく、道を切り開くために不利を承知で戦ったという言い訳ができるのだが……。

「戦えば勝敗が関わるのは騎士の常だ！ どうして俺が他人の尻を拭わねばならん！俺はまだ負けておらんかった！」

「貴方の味方をした人にとっては良い面の皮ですね。協力させられた挙句、身代金まで払わねばならないとか」

一応は戦闘行為なので捕虜は殺されない代わりに身代金が必要だ。鎧や馬を担保に解放し身一つで放り出した後は、金を持って来たら返すとか昔の物語で見た人もいるだろう。約束組み手の戦争で殺し合いをしないというのは、遡れば親戚一同が多い騎士・貴族間の慣例らしい。

友誼に基づいて参加したフェーデであろうとその条件は引き継ぐ。だから殺害を許可した決闘裁判以外では基本的に殺されるまではやらない。決闘裁判になったとしても、代理人アリとか戦闘ではなくチエスで勝負をつけるとか色々方法があるのである。

「まあまあ。そこまですておいてやっておくれ。代わりにワシの処の川辺を賭けよう。全部持って行かせる訳には行かんが、乗りつけて商売するも宿を借りるのも自由じゃ」

「それは五堀さんにとっては得じゃありませんか？ 川を使った交易はしてないと聞きましたが」

「ここで領けば、その話をエルフに持って行けるぞい？」

何というか五堀老人は抜け目がない。

まるで八大の弁護をしたかのように見せて、こちらにも利益のある話を持ってきている。エルフが通行の許可を出さなければまるで意味がない上、許可を出したとしても護岸工事を僕がする必要があるだろう。だがエルフに話を持っていくにはこのくらいの前提条件が必要とも言える。

必要もないのに自分の領地を賭けたということでも漢気は示せる。また今回の一件で色々と賠償をせざるを得ない場合でも、自分にとって得になる条件で折り合いをつけたのだからかなりのタマだ。しかも連さま派と僕をつながりつけたという意味でもタチが悪い。

「老公。それでは……」

「悪いと思うならばお主も自分の処の川辺を賭けい。さすれば他の血筋に跡目を譲らんですむ。のう？」

「そうですね。僕もそこまで鬼ではありませんので」

八大も領地のレイズをされて流石に顔色を悪くしている。

食えない爺さんだが正直な話、この条件は悪くない。下流域に大きな影響を与えられると判っているならば、エルフだって乗って来る可能性は高かった。彼女たちにとっても利益はあるかもしれないし、逆に利益が僕の方に多いと判ってから他の条件を呑ませることが出来るからだ。

そして何より、僕の血筋から領主をねじ込む気はないのだ。仮に八大の血筋を外すとしても、緋家の縁者から送り込まれる可能性があった。最悪のケースとしては次男の連さまが分家ということとで強制的に放り出されてこちらを恨むことになったかもしれない。

「グヌヌ……老公がそこまでおっしゃるなら判りました。俺の処の川辺も賭ける！　ここまでやる以上は乗って来るのだろうな！」

「僕の進退は緋家に預けます。敗着の結果、裁定で貴族に列するのは取り止めとなっても文句は申しません」

これが莊園没収ならまだしも、貴族位は不要とも言える。

片腕にするつもりは悪くはないが、ただの助言役でも問題ないだろう。警戒されて狙われる可能性を考えれば、貴族でない方がありがたいともいえるから頷かない理由はない。

後は妹君が嫁入りする話が消えてくれれば良いな〜とか言いつつ、自陣に戻って取り決めを書類に起こすことにした。

● その後は二広と青悟が訪れて条件とコンディションの確認。

先の条件を含む一連の流れを話し合うと流石に二人も苦笑していた。良くも悪くも緋家には悪くない流れであるが、僕が勝つと負けるのでは大きく躍進の差が違ってくるからだ。

僕が勝てば緋家にとってはめでたく後継者に対し忠実なNO.2が誕生。僕が負ければ連さま派が存在感を示して僕の名前はそこまで悪くない……という程度で止まるだろう。

「まったく面倒なことになったな」

「双羽くんは実に面白いねえ。これで勝てる算段があるなら安心して見てられるんだけどさ」

「良く判ってますね。そんな物はありませんよ。一応ですけど」

急に挑まれて混乱せず格好をつけて話を綺麗にまとめた。

それ以上でもそれ以下でもなく、僕の戦闘力そのものが変わったわけではない。武装も魔法もハツタリ掛けて脅したり相手の不躰さを助長しただけだ。交渉材料でしかないものを使って戦闘力が増したりはしない。

では勝率がゼロかと聞かれればそれは否だと言うほかはないのだが。

「へえ？ 何か作戦でもあるとか？ 魔法の剣を借りたり？」

「手近な所には『大通連』だけですし、ソレを借りる訳にもいかないでしょう。どっちかといえば彼の性格ですね」

「なるほど、驕りと焦りか」

八大は僕を侮っているし後がない。

引き分けに終わってジャツジに持ち込まれたらそれだけで危ういとすら思っているはずだ。つまり彼が取る戦術は苛烈な攻撃による一方的な攻撃のみ。また彼の体格は大きい方なので、剣でラツシュを掛けるというよりは大仰な武器を使用するだろう。剣と剣の勝負ではない以上、彼がメイスや大剣の様な武装を躊躇う必要はないのだから。

牽制やフェイントを交える小刻みなラツシュや鋭い突きはおそらくあるまい。その辺は手堅くガードに回られると突破し難いのだ。多分、横薙ぎか縦の振り下ろしで大ダメージを狙ってくると思われるた。

「ある程度をいなしでカウンターか。悪くない戦術だがそれでは死んでしまう可能性があるぞ？ 滅多にない事とは言え大振りの攻撃を浴び続ければ起き得る話だ」

「それ以外に勝機はありませんからね。戦いが始まれば保険を掛けておくつもりではありません」

おそらく八大は僕を殺しても良いくらいの勢いで迫るはずだ。

決闘であれば不慮の死は罪にならない。それこそ魔法戦士同士の戦いで手加減なんか出来ないだろうし、昔は殺しあっていたくらいな

ので『偶然』急所に当たる事を咎めるのも野暮なのだから。

では剣と剣のコンパクトな勝負だったら良いかと言うとやはり微妙な所だろう。それでは負ける可能性が高い上、殺そうと思えば突き刺せば良いのだから。

「その辺は勝負所だからボクとしては止められないのがつらいなあ。……それはそれとして、君の加護は判るかな？ 判ってて強力なモノなら一応は報告し合うものだけけれど」

「あー。激しく能力が変わる場合は重要ですしね。僕の場合は記憶も保全対象になつてることかな？ 思い出そうと思えば印象的な記憶は全部思い出せますよ」

一騎打ちで有効な加護だと適正な勝負にならないかもしれない。

だからこういう場合は中立の相手に加護を教えて、強力なモノであれば調整したりするそうだ。まあ加護を調べてない者も多く、それほど重要視する項目ではないらしい。知っているメンツだと大通連や紅包さまが該当し、二広はその範疇にならないのが微妙な所だ。八大の能力も教えてもらえないので知らないか微妙なのだろう。

そういう訳で僕は加護が無いのに完全記憶能力に近いとだけ言っておいた。何も無いのはおかしいし、かといって自覚症状がある内容など他にはない。正確には『僕の意識と記憶を保つてこちらに転生させる』という神様との契約だが、それは加護にあたるのだろうか？

● そんなこんなで一騎打ちを始める事になる。

簡単に場を整えて希望者と見届け人が観戦。僕は小剣・シールド・軽装鎧を鋼素材一式で揃え、八大の方は旧式の甲冑と大剣にメイスとダガーという古式のスタイルだ。

その様子に威圧感を感じつつも何とか勝機を見い出せていた。

「異論無ければここに決闘を執り行う」

「異論はない」

「異論はありません」

二広を挟んで双方が平原にしつらえた決闘場で向かい合う。

もし騎馬の心得がある者同士だったらランスで突き合うのかな？

と会場を眺めながら考えていた。騎士の何人かは僕の鎧に関心があるようだ。

対して八大の方は怒り顔をさらに赤くしてこちらを睨んでいる。鋼の鎧に対する嫉妬か、それとも甲冑を着てないことで馬鹿にされたとも思っただのだろうか。兜のバイザーを降ろされたのでその後の変化は判らない。

「死んでも後悔するなよ小僧！」

「まともに取り合った事を後悔してますよ。最初の面会を断るべきでした」

睨み合いながらそんな軽口を叩き合い緩やかに接近。

まっすぐ距離を詰める奴に対し、僕は斜めに右へ右へ移動し回り込んでいく。大型武器の使い手に対して正面からの戦闘は避けるべきだし、今回は蛇腹剣を使わないので遠距離を維持する必要はないからだ。

そして踏み込めば攻撃できる位置の手前でお互いに動き出した。

「しねい！」

「汝、波打ちて伝えることを禁ず！」

予想通り大振りの一刀が僕を狙う。

予定通りに保全の術を限定使用し、シールドに対して衝撃のみを維持した。盾の耐久力は向上させてないので壊れる可能性はあるが、鋼なのでその可能性は薄い。むしろ衝撃を殺したことで僕が打撲傷で倒れる可能性の方が減った。

慣性もあるので軽く吹き飛ばされたが、衝撃は殺しているから骨にヒビすら入って居ない。向こうからは上手く衝撃を殺したと思うかもしれないが、実際には僕が軽いだけなので直ぐには気が付かないだろう。

「どうしたどうした！ 魔法で攻撃できるならば使ってみろ！」

「生憎と僕の魔法は防御用なんですよ。自分と仲間を守るためのね！」

正確には扱い難い上級魔法だが気にすまい。

大剣を振り回す八大の攻撃を避け、あるいは盾で防いで事なきを得

る。本当は範囲指定で結界として使いたいが、それでは与えた魔力があつという間に尽きてしまう。途中で小剣なり軽装鎧にも掛けるとして、今はジッと我慢しながらカウンターを狙う。

狙うべきは受け流すと見せかけて相手の腕と肩だ。甲冑を着ているから胴を狙っても攻撃は通じないし、牽制と疲労蓄積を狙って腕回りを中心に殴りつける。

「逃げ回るなー！」

「逃げてるんじゃないなくて隙を伺ってるんですよ！ ホラ、そこー！」

僕は右へ右へと回り込む動きを続けている。

そうすれば盾で防ぎ易く、相手の攻撃も横薙ぎになるしかないので予想し易い。下段で足を払ったり急所を狙おうと頭を殴ろうとすれば軌道が判り易いので避けることもできるからだ。

もちろんこんな動きが何時までも続く筈はない。奴だつて対策するし作戦も変更するだろう。何よりカウンターがガンガン当たっているので、僕の胴体は大剣をぶち当てたいはずだ。相手がジレてきたところで、先ほどと同じ衝撃防御を軽装鎧のブレストプレート部分に掛けておく。

「これでおしまいにしてくれる！ ヌウン!!」

「同感ですが、これを待ってました！」

さて、ここからは詰将棋だ。

八大は体を小さく回して大剣を掲げて振り下ろしてきた。僕は盾で防ぎながら肩を内に入れ、被弾面積を抑えつつ盾が押し負けないようにする。そしてダツシユで内側に飛び込むのだが……。

その瞬間に八大は大剣を捨てて腰のメイスに手を伸ばした。もし兜のバイザーが降りて居なければ笑っていただろう。僕も予想はしていたが、あのタイミングで保全能力を奴の手と大剣に掛けることはできない。

「待っていたのは俺だ。小賢しい小僧めが!!」

「いいえ。予定通りですよー！」

騎士の武装は様々だが予備武装はメイスと決まって居る。

相手の甲冑の上から殴りつけ、転がしたところに鎧下をまくり上げ

て短剣でトドメを刺すか、降伏を促すのが泥臭い騎士の作法とも言える。

それで僕の方はこの流れを予想していたのでメイスは頭に来ない限りは正直怖くない。盾を構えて頭を守りつつ、腕と足を『獲り』に行った。最初からこれが目標だったからだ。

「何？ 甲冑組み手か！」

「違いますよ。柔道って言うんです！」

重要なのは態勢を崩すことだ。

そもそも体育の選択授業で習った程度なので、綺麗な投げ技にはこだわらない。だが甲冑を着た相手ならば倒れたら立ち上がることは難しい。腕を取り腰を入れ、足を狩って転がしてしまえば僕の勝ちだ！

その状態で八大は咄嗟に僕の胴を殴りつけて来た。メイスで殴りつけて肺から息を出せば、肋骨が折れずとも体術は使えない。しかし僕の方は衝撃を殺しているので多少はのけぞったがそれだけだった。このタイミングで余計な色香を出した八大の負けである。

「ぬおお!! まだだ、まだ俺は負けて……」

「汝、大地より背を離すことを禁じる！」

それでもまだ立ち上がるうとしたので姿勢の維持を強制した。

普通の人間に掛けてもいつか破られてしまうが、重い甲冑を着ている相手ならば楽勝だ。厚い装甲に頼って大ぶりの攻撃を当て、僕に派手な勝利をすることを狙った八大の自滅である。

「それまで！ 勝者、銀双羽！」

こうして一騎打ちは終了し僕の勝利でフェーデは終了したのである。

川の利用権利も手に入った事なので、エルフとの交渉やら護岸工事やらで忙しくなるだろう。

まずは治水から

●
フエーデから暫くして再び人々が集まった。

それというのも川辺を扱う権利と通行税の問題、そして何よりエルフとの話し合いがあるためだ。五塰老人ほか流域の貴族や代官に加え近くではないが、交易に川を使えそうな連中も見物に来ている。

妙に話が広がってしまっただが悌さまと青悟の裏工作だろう。ここで僕の知名度と立案能力を示そうという腹に違いない。

「結論から言うけど不要な立ち入りを禁止できるならという前提で、エルフも認めても良いわ」

「おお……」

紅梓の言葉にまず周辺領主が安堵した。

最大の懸念であるエルフ族の領域通過。それを認められるならば行商人だけではなく大きな商人も呼び易いからだ。

「ただし利益を受け取る事よりも、勝手に立ち入らない保障を優先している事を覚えておいてね。それを破った者への対処をあたしたちに委ねることが前提なのを忘れないで欲しいわ。あんた達だっておエライさんの子弟が物見遊山で入り込んで来たら困るでしょ？」

「それはまあ……そうなのだが」

「なあ？」

どこの領地も勝手に侵入するのは厳禁だ。見知らぬ人間は追い出すに限る。

しかし顔見知りならばザルになるのは良くあるし、相手によっては咎める訳にもいかないという事もある。もし悌さまとか連さまが狩りでも始めたら、近隣の村としては入って来るなどは言えまい。

「入るなど言われたら入りたがる人は一定数いるし、じゃあ見張り小屋を用意して見張っても『雨で難儀してるから泊めて欲しい』という状況まで見えるようだよ。それを断るのもなんだから最初から入るなど今まで言ってたわけ」

「では今更になって許可を出すのじゃ？　大きな利益と引き替えでは

ないのじやろ」

「そりゃね」

紅梓の言葉に頷きつつも五塀老人が首を傾げた。

もつともな話だし断るといっても判る気がする。エルフ族に理解の無い連中は疑問に思っているだろうが、近くに住んで居たら納得の出来る話なのだ。

だからこそ、今回どうして納得したかと言う事になる。エルフ族は通行税を取ることはずせずつまで断って居たのだから。

「前に大規模な水害が起きたことがあるのよ。その対処を教えて欲しいのと、私たちだけで対処が無理なら、その工事に限って立ち入るのだという事を理解してから立ち入るなら認められるわ」

「ふむ。そういえばそんなことがあったのう」

僕の領地やエルフの領域に山がある。

その周辺から溪流が湧き出し、八大の領地や五塀老人の領地に向かって合流しながら下っていくわけだ。長雨でも起きればその何処かで水害が出てもおかしくはない。

五塀老人にとってはそんなこともあったな……という程度であるが、長生きしているエルフにとっては何度も経験している事なのだろう。

「侵入者によって私達が傷つけられたりする可能性よりも、水害の方が危険でしょ？ 今後にそんなことが起きなくなるなら侵入される事よりも対処すべき問題なの。その上で最初に戻るけど侵入者は私たちが対処……もちろん最初は警告から始めるけどね」

「そういう事ならば良いのじゃないのかのう」

「ではその権に関して僕から」

周知と納得が終わった所で解説を始める。

話を持って行った時に予め聞いているので、事前に資料を用意して紙に書き込んでおいた。人数が多いので印刷技術が欲しく成ってしまっただけである。

それらの資料を配り対策とコンクリ製品のプレゼンを開始する。砂袋と小さなコンクリとオマケとして竹筒で作ったオモチヤを、何

セットか用意すれば万全だ。

「水害への対処はおおむね二つです。一つ目はみなさんもご存じである堤防。これは誰でも出来る代わりに根本的な対処になりません。そしてもう一つが水量を調節して圧力を下げる方法です」

「圧力？」

まずはテーブルの上に砂袋とコンクリを置いた。

これは堤防を示し次々に積み上げて山なりにして視線を塞ぐ。しかし視線を全部遮ることはできずその限界も判り易い。突き崩せば一発なので耐久性だつて低いと一目で判る。

そして圧力を説明するのに判り易いのは竹筒で造った玩具だ。何本かあるがサイズの違う穴を空けており、裏側を布で巻いた木を押し込めるようになってる。

「圧力と言うのは水の通り道の大きさだと思ってください。その説明に使いますが、水鉄砲と言うオモチャで穴の大きさが違います。見ててくださいいよ……」

「おお、水が飛んだぞー！」

タライに入れた水をキューッと吸い込み、宙に向かって押し込めば水が飛ぶ。

何だか分からないが興奮して居る者と、何の意味があるんだと全く理解して居ない者。そして圧力の意味を即座に理解してその利用方法を考え始めた者がいる。

そして穴のサイズが違う水鉄砲を噴射して、先ほどとは出の勢いが違う事を示してから説明を再開した。

「穴の違う水鉄砲はご覧いただきました。つまり小さい方が勢いが強いのです。なのでこの穴を広げるといふ行為を、川に応用することで洪水は非常に置き難くなります。具体的に言うところと川幅を広げ、あるいは底を浚渫し、可能ならば水路で二本・三本と分散させていきます」
紙の資料で全部説明も出来たが、全員が文字を読めるわけでもない。

加えて言うところと全部説明する前に勝手に判断する者も居るし、だいたい全員分に数枚の資料を書くのが面倒くさすぎる。だから水鉄砲の

パフォーマンスを示した上で説明することにした。

ちなみにリハーサルでは剛盾と大通連がかぶりつきで眺めまわし、何かの武器に使えないかとハッスルしていた。まあポンプ車を造れば薬剤なり油でも飛ばせるかもしれない。

「ではそれぞれの長所と短所を上げていきましよう。まず土やコンクリ……この練り石を積み上げていく方法は、一番簡単で安価です。しかし先ほど言った通り効果も薄く、魔物と隣り合わせの場所でもなければ費用を掛ける程の価値があるかと言われれば難しいでしょう」

「それならアンデッドの……いや、そうか」

まずは判り易い堤防案から解説していく。

暇な時に土砂を積み上げ土手にすれば労役だけで済むし、コンクリ製品さえ買わなきや予算は掛からない。しかし水害が起きた時に何処まで確実に防いでくれるかといえはかなり疑問符が残るのは確かだ。仮にコンクリの壁を用意しても全ての堤防を強化できない。

そして現時点で一番意味を成すアンデッドを中心にした魔物対策ではあるが、これから平和にする作戦を建てるので無用とは言われないが効果が薄くなるのは確かなのだ。あくまで並行して行う補助事業と言えるだろう。

「次に川の浚渫ですが、深く広くすることで川を二倍にするようなものです。最も確実な方法ですが予算と手間が大きく違います。専門の職人と鉄製の農機具とか、あるいは魔法などの要因が無ければ採算が合いません。水害の多い東領や長寿のエルフ族でなければ判断が難しいかも」

元の世界でも最終的に選ばれたのがコレだ。

場所にもよるが河原すら掘ること二倍どころか三倍くらいにしてしまうと、その場所だけなら殆ど洪水は起きなくなる。ただ手間と予算も掛かる為、河川の拡張工事が主流になったのはだいたい後の筈だ。

と言う訳でお勧めは折衷案である次の方法である。

「その点で水路を造るのが最も効率が高くてお勧めになります。その分だけ川の水量が確実に減りますし、農業用水として領地の経営にも

使用できません。魔物対策と言う意味でも簡易的な堀に使えますのでバランス的にも優れているかと」

こういつてはなんだが水害ほど領主にとって微妙なモノはない。

万が一にでも起きれば凄まじい災害であるが、目の前の戦争や飢餓ほどに危険ではない。人間ならば生涯に一度も味合わない者もあり、どうして自分がそんな事の為に行動するべきなのか疑問視する者も居るだろう。実際に先ほどまではほとんどの者が話半分に聞いていた。

しかし農業用水や魔物対策としての水路と言えば話は変わって来る。畑に水は必要であるし、アンデッドなどは水路に邪魔されてな動きができなくなる為だ。そのこともあり一応話は聞いておくかと言う顔を始めた者も居る。

「浅い水路は水が暖かくなるので作物が育ち易くなります。深い水路は魔物対策と水を保存出来るという安心感ですね。ただ中途半端ではあるので、心配ならば川辺に土を盛る方法と組み合わせると良いでしょう」

おそらくエルフとドワーフは浚渫を選ぶだろう。

一度工事したらこの時代の感覚的にはもう水害の恐れが無くなる。エルフは寿命的にドワーフは合理的に考えてそう判断すると思われる。その上で貴族たちは何も工事しないか、水路を増やす程度だろうか。

まあ他の領地の事だし治水が目に見えた効果を上げないのは確かだ。僕としてはうちの領地が持つ特色だと思って気にしないことにした。そしてここからはようやく川岸を護岸する話になる。

河川協同組合

● 水害対策について一通り説明が終わったところで新しい資料を配布する。

これまで乗り気じゃなかった層も、河川を利用した船使の話になると目の色を変え始めた。

何が重要かと言って地方では交換経済の穴埋めとして貨幣が使われる程度である。通行料だとか産物を商人へ売ること始めて現金を得ることができるとし、使う事が出来るのだから。

「ではお待ちかねの河川通行の話に移りましょう。メリットは移動時間の短縮と輸送量の増加、そして税の話になります。総合的に利益が出るならば商人たちは陸路よりも河川を使うでしょう」

この時代は地形を買えるほどの工事は難しい。それゆえに自然の形状こそが最初であり、村だの領地だのなんのはその後に来た存在なのだ。それぞれの事情で複雑に別れる陸路よりも、河川を通った方がよほどに早い。

加えて下りへの流れに乗れば素晴らしい速度で移動できる。もしモンスターが現れても獣程度なら、下流に向かえば逃げ切れる可能性の方が高い。

「知っている人もいます、水の上では物が多く運べます。陸路で運ぶよりも木材や石材を運べるのはその為です。行きと帰りの帳尻を考えれば何らかの交易品を持って来ると思うので、塩や砂糖を安く手に入れることも可能でしょう。僕らが買わずともそれらを求めて陸路の商人も中継で来ますしね」

「おお……」

よほどに急ぐ商人で無ければ、こちらで売れる商品を持って来る。

町で買えば塩なら三倍から五倍くらい、砂糖だと十倍程度くらい値段がするはずだ。利益確保もあるが途中で通行税も取られるからね。それを二・三倍の価格で買える上、向こうの方から持ってきてくれるのだ。これが美味しくない筈はない。領主は買わずとも御用商

人が代わりに購入していくと思われた。

と、まあ。夢だけならば広がっている。夢を語るだけならば誰でもできるはずだ。ここからはデメリットや『そうならない』場合も含めて話をして行く必要があるだろう。

「問題なのは……」

「そう上手く行かん場合じゃろ？ 領地に寄るとも税を払うとも限らん」

「その通りです。場所によっては対岸の領有権が違って、河川は境界線を兼ねてどちらでもない事になっている場合もあるでしょう。これまでアンデツドの害もあつたので押し付け合っている所もあるかと」

フエーデの決着後、緋八大は隠居して次の領主が決まるまで暫定的に代官を任された。

既定路線ではあるがその時に向こうの領主館を調べると、案の状ながらお互いが押し付け合った手紙やら木の板に書いた下書きなどが残っていた。やはり八大が言う様にうちの川まで領地があつたなどは誇大だつたという訳だ。

それはそれとして向こうの領地ではアンデツド対策が徹底されておらず、うちの橙二尾が探して歩いたこともあつて割りと僕らが受け入れられているというのが不思議であつた。

「立ち寄る事に関しては通行税を高額にせず、宿代で回収する手もあります。一日で往復など幾ら船の方が早くとも無理ですから。あとは領地の特色次第ですね。正攻法で税を取るならそんなところですよ」「正攻法？ では裏技があると？」

「ええ、みなさんと提携できるなら話が変わってきます」

メリットがあれば商人だつて利用するし、無ければ利用しない。

だから通行税を下げたおけば陸路よりも選ぶ可能性の方が高いのは確かだ。基本的に野営で済ませるにしろ全てをそうする訳にもいかないの、ある程度は度丘の宿に泊まることになるだろう。

その辺を考えてまともな税額ならば水路の方が良い商人は水路を

選ぶと思われた。問題があるとすれば『自分くらいは高くしても良いのではないか?』と考える強欲や、『隣は関係ない荷揚げしなくとも関係ない! うちに払え!』と強引に迫る領主である。

「単純に河川全ての領主が連合した組合を作って、そこがまとめて通行税を受け取る方式ですね。これならば仲の悪い領主同士がもめる事もありますし、これまで組合自体が無かったので川では税を取って居なかったという理屈も通用しません。この場合は宿代は自分だけの儲け、または商人を寄せさせるための方便ですね」

「その方法があつたか!」

「確かにそれならうちの領地に寄らずとも……」

この案に即座に飛びつくのは産物が少ないとか、河川で領地が終わる領主だ。

そこを通るなら税金を払えとか、うちの領地で売る物が無いから寄る事もないだろうと悲観しているメンバーである。逆に渋い顔をするのは、むしろ産物に自身がある領主だ。そちらは逆に『なぜ通行税を頭割りする必要があるのか?』と言いたいだろう。金貨百枚もらえなくてもしれないのに、五十枚で納得する奴は少ない。例え組合を造らねば商人が来ないとしても……だ。

だからここからは、細かい調整とか費用分担とかの話になる。具体的に言うとは何もない領主には最低限の利益を、元から売れる物がある領主には通行税以外のメリットを与えなければならない。

「税の分配に関しては船着き場の利用率次第で変更するとして、年が明けるとその年の負担でも調整するという考え方があります。売上が多かった領地の取り分が大きいのは当然としても、宿や倉庫などの資材や周辺の安全に協力した度合でも調整を掛けます」

「む……」

「それならば……」

まず組合への参加までは平等でも、全てを平等にしてはいけない。

何の負担もない領主にはフェーデに兵を出してもらおうとか、宿屋ら倉庫を作る際に資材を出してもらおう。その上で利用率の高い領地には多めに分配するという事で良いだろう。多く利用された場所が多

く貰い、何もしていない場所も何かの役に立っているならば一応の不満は無くなる物だ。

重要なのは年が明けるときに『どんな負担をしたか』という事をレポートにして提出すること。ちゃんと何かを請け負っているならば、基本的には文句は出まい。

「意味せんとすることは判る。夢があるのもう。しかし、しかしじゃ。元から税の回収に不安のない場所が乗る必要はあるまい？ 例えばお主はそれで何を得る？ ワシは何を得るのじゃ？」

「この方式でやる最大のメリットは組合による相互保証ですね」

僕の荘園は川の上流だし色々な産物を用意する。五塀老人は元から町だ。

放つておいても川の通行料を何かの形で確保できると言っても良い。僕の所ならばガラス製品なりコンクリ製品を買おうと思つたら、上陸して品定めをしないといけない。少なくとも通行税を払わないとは言わないだろう。同様に五塀老人の方も、町で売買する以上は儲けを稼ぐためにも必要なのだ。

「誰にとつても困るのは、『ある領地に入った途端に荷物の半分を寄せ』と言われることです。そんな山賊まがいはありませんにしても、途中で法外な金額を要求されても困ります。また商人から見ても、行きと帰りで二度取られることもなく途中で値上がりすることもなければ計画を立て易いですから」

「どれだけ良心的な経営をしても、馬鹿が居れば止まってしまふ。」

これに対して組合を経由するならば既に払った以上の金を取られることはなく、安定して商人がやって来るだろう。上流に居る僕はこの効果が大きいし、口には出していないがコンクリ製品などを護岸工事をする領地に売るといふか交換することもできる。

五塀老人の方は確実に儲かるとは言えないが、川を使った商人が増えればソレを目当てに今まで以上の商人が町に訪れる事はあり得た。「後は互いの名譽の保証と、資金の貸し借りですかね。偽者の組合が現れれば場合によつて組合で、フェーデを行う際に兵を出して頂くこともあるでしょう。また組合から借りる場合は貴族間ですから、領地

を担保に無利子で借金ができます」

「そういえば領地は売れぬが、貴族に一部を譲るのは可能じゃったか」
「キッチンと借金を返してもらおう事が前提ですけどね。できれば木材や石材くらいで抑えるべきですが」

この二つの話を同時に出すのは奇妙に聞こえるだろう。

だが偽者対策というよりは、組合が協力して兵を出す事、そして土地の担保を利用して借金をするという事には意味がある。商人に借りれば利子が膨らむこともあるが、組合ならば資金のストック次第でそんなこともない。貸し倒れになっても領地を没収できるので、商人の金貸しよりは健全なのだ。

なにしろ領地は国家であるとか上級貴族との契約であり、御恩と奉公の関係とも言える。好き勝手に売買することは許されないが、相手が貴族ならばフェーデによる決着で領土交渉が行われたのと同じ扱いに出来る。反故にされても単独の領主ではなく、貴族の連合なので発言力と証拠能力が破格なのだ。

「そういう事ならば話は別じゃな。ところで……河川に参加しておらぬ領主を参加させることは？」

「人足とか素材の提供などで商人たちが購入する資材が多いとかですかね。踏み倒された借金の借り換えは、河川組合以外に結成されることをお勧めします」

「それもそうだ。ハハハ」

どうやら五塰老人に金を借りて返さぬ領主も居るらしい。

昔から栄えている町の領主ともあれば、気苦労の一つもあるだろう。ひとまず勝手に名前を使われるのは困るが、組合を作って商人たちを呼ぶ計画自体はスタートすることになった。

色々な作戦指導

● 緋家西側の河川管理の協同組合を立ち上げて、意外な事が幾つもあつた。

収入は初期配分が五割、残りは調整金と組合から出す任務の費用として残した。その折に借入金や担保の事も決定したのだが……。

貴族たちは躊躇なく金を借り入れ、代わりに周辺への見回り・討伐任務を受けていった。まあこれまで現金収入は多くなかったし、商人に借りるのも恥ずかしかつたのだろう。

「しかし銀殿。私としてはこれほどまでに献金が増えるとは意外に思えるのですが」

「七司さんは真面目な御領主ですからね。半分は商人たちの期待だと思いますよ。基本的に見回りをしたり盗賊や魔物を討伐するのは義務ではありませんでしたから。安全への保証料と期待感と言うやつです」

通行税以外にも商人たちからの自主的な献金があつた。

見学に来ている緋七司が驚いて居るくらいの額だが、その使用は討伐任務や船付き場の整備を要望してる。商人たちにとつては河川を通る限りは安全が保障されることや、スムーズに取引できるのは大きい。

思えば地球でもチンギス・ハンなどの霸王へ商人たちが献金したのはシルクロードの通行をやり易くし、支配領域での商売を認めてもらう事もあつたそうだ。それを思えば河川流域沿岸へ投資することは自分たちの為であるとも思われた。少なくとも侯爵領に負けてる经济圈を立て直せそうには見えるくらいの魅力が感じられたのだろう。「僕が意外だったのは参加者たちがあれほどまでにアツサリ金を借り、資材の担保価格を下げることも受け入れたことですね」

「何かと手元不如意ですから。貴族と言う者は見栄が張ります。ゆえに家計はどこも火の車なのですよ。利子もないのであれば商人から借りて居るところは軒並に借り換えたのではないでしようか」

借入金には三段階のランクを設けた。

まず一年後に受け取る調整金の予想額までは無担保。次に木材や石材を相場価格の下で担保可能とした。これは不要な伐採による値崩れや水害を警戒したものだ。どうしても必要な場合は組合や余裕のある貴族が買い取れるようにする為だ。最後に領地になるがこれは最後の手段だと警告はしておく。

実際に組合で買い取り、僕の所からコンクリ製の階段やスロープ用資材と交換している。担保を取り上げるのは数年後の筈だが、直ぐに買い採れないかと打診があった為である。

「長期的に見れば損なのですが……。まあ利子を増やされるよりはマシですか。踏み倒すにしても外聞と言うものがありますしね」

「体面こそが貴族というものですからね。見栄えに金を使ったとしても、商人が立ち寄る様になれば税も増えるという見方もできはするかと」

面白いのは見回りや討伐任務に名目を付けたら食い付きが違った。自主的にやっているという仮定で、『協会の要請で増やす場合への代価』と言う事にしたら喜んでいたので。要するに領民を守る気はなくとも、誰かに低くみられるのは嫌なのである。

この時代は領民は財産であるが守ることは必須ではない。盗賊や魔物が出てても退治する義務はなく、領民が害されたら財産が減るかもしれない程度の認識だ。むしろ盗賊や魔物を倒せば善行と思われるのが近代に生きていた僕としては不思議だった。魔物に対して領地を守らないのは怠慢ではなく、あくまで戦時の経営判断と言う事らしい。

「ところで今回の訪問ですが……東の河川に面している者たちから頼まれたのです」

「向こうはドワーフの領域ですから、合理的な理由があれば認めるのでは？」

説明会に話を聞くだけなら東側の領主も居た。

あの時は西側で協会を造りはしたが、興味はありそうな雰囲気だった。今回の成功を踏まえてその気になったか、あるいは向こうの商人

たちにせつつかれたのだろうか？

とはいえ向こうはドワーフの領域に跨っているだけなので、話をすれば許可が出る可能性が高いのだが……。

「ドワーフと揉めた領主が居りましたね。悋さまに取りまとめをやれと命じられた事もあり何度か往復したのですが……」

「あちゃあ。彼らは大抵の事は許容しますが頑固ですからね」

ドワーフ族は合理的な上、大抵の場合は名誉だのメンツにはこだわらない。

だが何かしらの問題を起こしてもめた時が大変だ。頑固な上にもめた相手が信用できないという情報を一族中で共有してしまう。一つ二つならともかく、複数の情報を検証して『こいつと関わるな』と回状が回ると初対面であろうと、その事を知っているからちよつとやそつとでは交渉自体に応じてくれないのだ。

つまりそいつが居る限りドワーフは『信用の置けない奴が加入するグループ』には許可を絶対に出さないわけだ。巡り巡ってどこかで必ず騙されるか誤魔化されると思っているのだろう。

「僕はドワーフと付き合いはありますが、仲裁できるとも思えませんよ？ だいたい僕の顔で仲裁できたとして、何かあったら僕との取引も止まっちゃいますし」

「ああ、そこは問題ないですよ。問題を起こした領主は近々引退が決まって居ます。ただ再び信用を得るための試練として、幾つか準備を要求されたんです。その内の中に、銀殿の資料と偽造が難しい例の許可証を……と」

「ああ、あれですか」

引退が本人の意思か、それとも周囲の共用かは置いておこう。

しかしドワーフは『信用の置けない相手をメンバーに加えた』事に対して、事後策を求めたのだろう。同じような事がたびたび起きてもらっては困るし、保証料を欲しいと言っているわけでもないのだから。

そこで要求されたのが、まともな運営と偽者業者対策を施した特別な許可証である。

「サンプルをお見せしますけど、同じ物は渡せないと伝えて下さい。東河川専用の形状と内容を用意すると言えば何のことか伝わります」
「それはありがたい。しかし専用の許可証ですか」

僕が用意した西河川の許可証はガラスの額縁入りだ。

ラミネート加工をイメージして二枚のガラスで閉じている。大きくしないと不具合が出るので一回りか二回り位大きくして、エルフの木工職人が掘った木枠を嵌めて完成だ。

これを偽造するには和紙モドキと透明度の高いガラスを二枚。そしてエルフとドワーフの職人がそれぞれ必要になる。和紙モドキを使ってるのは基本的な文章を木版で刷り込み、対象者と発行者と許可ナンバーだけを後から手描きで入れるようになっていた。偽造自体は出来る奴もいるだろうが、そこまでして通行権を得る意味があるかは微妙である。

「こちらが協会運営で蓄積した経験と献金された推移などの詳しい資料です。そしてこれがサンプル品ですね」

「おお……」

当面の間は僕が協会長と金庫番をやることになっている。

しかし毎年報告文章は送っているし、何年かごとに役職は交代するので準備が必要なのである。中世なのだから気にする人間も少ないとは思いますが、明朗会計にしておいた方がスッキリするだろう。

数年後に『あいつは横領していた』などと言われるのは願い下げである。

「基本的な構造は同じですが、この外から見える部分と見えない部分を変更してお渡しすることになるかと思えます。専用の物を用意するのは、予備の通行証が流出する可能性も踏まえてですね」

「そこまでしますか……。いえ、そこまでするからこそ、ドワーフ達が信用する条件にしているのですね」

言いながら七司は資料の方に夢中だった。

どうせ後で同じ物を渡す訳だが、組合員を説得するのに役立つ言い回しや文言などを特に眺めている。どうやら彼も向こうで相当に苦労しているらしい。まあ近衛兵であって貴族としての取りまとめ

交渉はそれほど得意ではないのだろう。これも悌さまの側近ゆえの苦勞と我慢してもらおうほかはない。

● 悌さまの側近である七司が居るならするべきことはある。

当然ながら緋家の今後であり、特に北上作戦に関しての話だ。こちらにはようやく資材の目途が立ち、用意できる兵装をリストアップすることが出来た。

後は縁戚のある貴族が援護をどのレベルで求めているか次第で作戦決行が何時になるかが判るだろう。

「木材の調達は何とかなりそうです。今年中に揃えるのは難しいですが、来年ならば確実に被害を押さえて進軍できる数がお約束できるかと。それ以上のペースだと緋家を経由しないと難しいですね」

現時点では投石器が二、大型馬車が五というところだ。

うち単独だと木材の調達が限られ、協会経由で木材を持ち込むことで何とかなっていた。緋八大の村からも動員すればもう少し行けそうだが、今のところは反発が出ないように村の整備からやっているので難しい。

緋家から声を掛けて貰い近隣領主に資材を融通してもらおう手もある。その事を伝えて近況の事を聞くことにしたのだ。

「それは喜ばしい限りですが……問題なのはあちらですね」

「何か問題でも？ 確か援軍は不要との事でしたよね」

万鹿柵の砦周辺を奪回し、周辺に堀やバリケードを造って閉鎖した。関所を通れば商人や旅人たちも普通に抜けれるので、うちの黄三砦も無事に往復している。

その折に『この封鎖で余裕が出来るから危険ならば援軍に行けるが？』という問いに対して『こちらは問題ない。地力回復に勤めてくれ』というような感じの返事が返って来たらしいのだが……。

「当時は本当に問題が無かったそうですよ。我々も関の周囲では蹴散らしましたし、圧力は相当に下がったはずです。しかし一向に返辞が変わらないのはおかしいと……」

「やせ我慢でもしているか……最悪、魔物に操られているのでは？」

あちらの家が壊滅する程の規模でアンデッドが増えればまた危険になるのではありませんか？」

「アンデッドは大量発生が無ければ基本的に恐ろしい相手ではない。倒しても倒しても滅らない敵と言うのが問題で、動作は緩慢だし基本的には脆い相手ではない。」

しかし疲れもしないし食料も不要と危険な要素はあるのだ。中央から西に広がる穀倉地帯は古戦場であり魔物の関与もあって、大量発生する可能性は常に存在していた。

「それも警戒して居ますが他の大貴族の関与も捨てがたく……。いずれにせよ救援要請を出せずにいるのではないかと言う疑いは存在しております。しかしコレを何とかするということのも付き合いの面で問題でして……」

「大貴族……中央や西領ですね」

現在、この国を牛耳っているのは中央や西領の貴族である。

彼らは疎開しつつも権勢を振るっており、南領だけでなく周辺諸侯に命じて魔物退治と奪回作戦をやらせようとしているようだ。

それなのにどうして邪魔するのかわかと思わなくもないが……僕らが早々と万鹿柵を封じて、分断作戦で少しずつ奪回を目指している事に危機感を覚えたのかもしれない。もしかしたら南領だけで安全策を取るとか、あるいはそのまま発言権を確保しつつ周辺を制圧して領地に加えようとしているとか。その辺を警戒しているのかも。

「偵察隊……いえ班レベルで送り込むしかないですね。実力者の集団を送り込み、あくまで個人の冒険の範疇で見に行くしかないでしょう」

「それは危険ではありませんか？」

「貴族単位で動けないなら他に方法は無いかと。その上で精鋭チームとバックアップ・チームに別れ、援軍到着を待つくらいですね」

あまり考えたくはないのだが、他に方法がないのであれば考慮は必要だろう。

できれば僕の出動は全体構想の立案と差配くらいで納めて欲しいものである。

第五部

北上作戦へと至る前に

●
悌さまとの面会やら作戦立案など、一通りは上手く行ったが残念なこともあった。

場所は緋家の領地にある大きな屋敷を借りて謁見の間代わりに。名目に関して最初は預かっている緋八大の領地に関する事やら河川協会の話をしようとしたのだが、何時の間にか妹君と結婚する為の準備の話になってしまっている。

お陰で双葉はブーブー言ってますね、こういう理由だとお土産を用意する必要もあるので面倒くさいことこの上ない。

「鶏の塩釜焼きと川魚の奉書焼きを幾らかお持ちしました。妹君がおいに召した方をメインの料理とする予定です。それと婚礼の前に特注の鏡台を二組ほど納めさせていただきます。それとは別に試作の『覗き鏡』です。暇潰しにでも」

「うむ。まずはコレを肴に一献と行こうではないか」

簡単な万華鏡を用意したほか、ようやく届いた精製塩がお土産になった。

これで鳥を蒸し、あるいは紙に包んだ川魚を蒸し上げる。特に川魚はコンクリ製の池で暫く育て泥抜きをしたものであり、臭みを取り除くところまでやっていた。これでマズイとか言われたら困る。

まあ気に入ったから結婚式の当日に家臣全員分とか言われても困るわけだが。

「河川の管理は思ったよりも利権がありましたので、いずれ緋家の方が東西河川の総裁に収まられた方が良いと思います。それと緋八大の領地に関してもしそれまでに軌道に乗せておきますね」

「黙っておれば良かろうに、その方は欲がないな」

「後から『身に過ぎていいるから領地を取り上げろ』と他の方に言われると困りますので」

悌さまはともかく他の側近までそう思うかは分からない。

その辺も含めて殊勝に暮らして悪い事はあるまい。今ある利権に關しては、協会の運営を上手く回したりアンデッド対策に使う事で勘弁してもらおう。はたから見て多額の出費をしていると思わせて置き、その痛みは特にならない……と言うくらいバランスで僕は満足ができる。

こういう差配をできるとか、魔法のような手腕と思われること自体は面白いのだ。しかし後から問い詰められて処刑されたりせつかく作つた領地を没収と言うのを避けたいとも言うが。

「……ふむ。この覗き鏡は面白いな。麗に持って行ってやりなさい。まだ試食をしているだろう」

「承知いたしました。御客人の前を失礼いたします」

人数が居ると邪魔なので、万華鏡を理由に側近を遠ざける。

傍には七司と二広が居る為、それほど人が付いている必要もない。

万華鏡を預けられた側近はその場を後にして部屋から出て行った。

おそらくは道中でどんな話をしたとか、どんな料理を僕が作らせたかなどを話して歩くだろう。まあ態の良い囃であり、噂造りの一環である。

「では本題と参るか」

「はい。兵装の方は七司殿に伝えた通り順調です。今年ならばそれなり、来年ならば確実に余裕を持って北上可能でしょう」

用意した兵装は投石器・大型荷車・兵員輸送車両の三つ。

基本的には同じフレームの荷車を使用するが、上に何を載せるかで用途が違う。もちろん投石器は石を飛ばす為、大型荷車はバリケードの材料輸送。最後の兵員輸送車両は新作で、板の覆いを付けることでアンデッドが飛びつけない様に……そして『矢』が当たらないように出来ていた。

援護射撃で矢が当たっても問題ないという理由だが、人間との戦いにも当然転用できる。

「銀殿。兵の輸送用というが、そこまでする必要も無さそげな気がするのだが……何どのように用いるのだ？」

「二広殿。これは多くを揃えるのではなく、精銳のみを一息に運ぶための物です。五百の内の百を載せるのではなく、五名から十名の勇士を疲れさせることなく彼方に運ぶ為です」

現代で言う機械化歩兵だっけ？

移動手段を高速化し、歩くよりも安全にすることで高速で歩兵を展開するために使用する。どんなに強力な豪傑が居ても地形の確保なんかできない。これはそれを補うためにしようするものだ。

実際に使う時は軽装か重装かで登場人数が違うが、数台に分乗して優位地形を先に制圧することになるだろう。そこへ大型荷車でバリエードの資材を運び、防御陣地を設置して簡易砦を作るのである。もちろん人間との戦いに成れば、前線拠点の一つを高速で落すために使用するようになるだろうけれども。

「北上作戦ではこれらの車両を円形に繋ぎ、徐々に前線を押し上げていきます。投石器で薙ぎ払い、そこへ兵員輸送車両に載せた精銳が突っ込み、大型の荷車に載せたバリエード用の資材でグルリと壁を作ることになるかと」

「フェーデの時に使ったという戦術をもっと大きくやるのだな」

幌馬車戦術を組めばアンデッドごときには負けたりしない。

何度も言っているがアンデッドの脅威は疲れが無く大量に湧くことなので、周辺を封鎖して人間の方が多い状態で戦い続けなければ何の問題もないのだ。幽霊系や一部の強力な個体以外では負ける余地がなかった。

それらの展望と戦術をレポートにまとめアイズ・オンリーで焼却予定の資料に書いて回し読みをする。

「楽観は禁物ですがもはや勝ち負けの勝負ではないと思います。ここからは後に問題を残さないための戦いです」

「うむ。その為には大義名分は抑えておきたいものだ」

予定が上手く行って陣列を組めれば負けはないのだから、作戦の要点はそこではない。

陣列が組めないように風聞を立てられたり、男らしくないなどと良く判らない言い分で差し止められる方が問題だ。同様に『緋家、ある

いは南領に謀反アリ』などと言い掛かりを付けられる事も問題だろう。

だから今回の相談ではその辺を急ぎ詰める必要がある。今年になつたばかりのころは、荷車と戸板を増やせれば楽勝と思っていたのに、何の因果でこんなことになっているのやら。

「縁戚筋からの要請が使えない以上は、おおむね二つの方法になります。一つ目は王朝の指示によって南領全軍が北上する事。もう一つは『偶然』に異変を知って北上する事です」

「おそろくはこちらを軍に組み込みたいのであろうな」

僕は魔物の洗脳を疑ったが、悌さま達は中央の陰謀を疑っている。関を塞いで疲弊した地力回復に努めている以上は、大手を振って北上しようと思つたら縁戚の援軍に出るか、あるいは王朝が以前に出した命令に乗るしかない。前者が使えない以上は後者になるのだが……この場合は王朝の命令がダイレクトになつてしまふのだ。

あちらを落とせこちらへ援軍と右往左往させられるのも問題だが、場合によつては軍監を付けられて『王朝軍はそんなことをしない、こうやれ』と行動規制を掛けられる可能すらあつた。

「それでその『偶然』というのは何か心当たりがあるのか？」

「はい。我が領内に橙二尾という、滅びた貴族家から流れて傭兵になつた者がおります。彼の願いであの辺りの様子を伺い、中央へ留学していた子弟を立てて家を復興する『計画』というのはいかがでしょうか？ もちろん子弟が復興を望まなければ計画だけで済ませ、山ほどの書なり絵画などの望む物を集めて図書館なりで美術館で済ませるべきでしょうが」

うちの二尾は暇さえあれば巡回する程にアンデッドにトラウマがある。

話をしたら乗り気で、自分の名前で良ければ是非使つてくれとのことだつた。貴族家に仕官した彼が墓参りに訪れるのは自然な話だし、元の領主家の忘れ形見が生き残っているならば、領地を回復できる可能性さえあれば動いてもおかしい話ではない。

実際にそうした過去例は昔からある話だし物語としては定番だ。

小さきとはいえ中央貴族の橙家の子弟全員が全滅しているとは限らないので、一人くらいは生き残っていると思われた。

「もちろん橙家に限らず、同じような話が使えらば何処でも構いません」

「……そうだな。こちらの話に乗る者ばかりとは限るまい。探すだけ探すとして、どのように偶然を探す？」

話の筋として説明し易いネタを使ったが、別に他の貴族家でも構わない。

残念なことに悌さまの妹君の一人、爽さんが嫁いだ先は万鹿柵のこちら側だ。あの辺は領地と血縁がマダラに入り乱れているので判り難い。まあ嫁ぎ先から一人救出された爽さんを利用できるか、して良い気分かどうかは判らないのでこの話はここで終わるのが良いのだろう。

それはそれとして潜入計画だ。このまま行くと僕が管理することになるので手を抜いて死にたくないものである。

「まず橙家の例としますが、かの家は外れの方なので北上した後には東方へ向かいます。その後には緋家の用事で『余裕のある時に届けてくれ』と言われた進物でも送り届けるのはいかがでしょうか？」

「銀殿。主家の用事を後回しにするのはどうかと思うが……」

「二広。この場合は大義名分に過ぎぬ、見逃せ。まったくお主は硬いな」

名前は知らないが緋家の縁戚筋は、北の盾でもあるので北西側にある。

だから橙家のある北東とは正反対だ。普段ならば主家の用事を片付けて、余裕があればついでに東まで移動するのが当然だろう。しかし今回は名目なので意味がない。いや、あの辺りを搜索したいのだからその方が都合が良いのだ。

それはそれとして中央のスパイなり、もしかしたらレベルで魔物が潜んでいる可能性がある。それを遠巻きに見つけるならば、直行すると警戒されるから即座に赴くのは問題があるのでこういうコースを計画したと言える。もつとも、もう一つ別の懸念もあるのだが。

「この過程で現在のアンデッドの状態は判ると思います。特に急ぐほどで無ければ地図を作りながら移動し、全体としては大義名分に使える貴族家の子弟を探しつつ戦力の充実を待ちます」

「そんなところか。問題は……既にアンデッドが溢れておる場合だな」

中央の意向はおおむね判っている。

南領を操って西領を回復するか、さもなければアンデッドの大半を押し付けつけて後の動きを楽にするつもりだろう。

どちらにせよ上手く使われて南領を独り勝ちさせぬため疲弊させるようになってきている筈だ。

「現時点で通行可能や連絡が行き来できる事を考えると、基本的には問題ないはずです。しかしどこかに誘導している可能性はゼロではありません」

「誘導だと？」

「ちよつと待つて欲しい銀殿。そんな事が可能なのか？」

この問いに関して僕はゆっくりと頷いた。

最初はここまでの話をするつもりはなかった。貴族の子弟ならば誰でも良いからだ。橙二尾のセンチメンタルな部分に関わるかもしれないし、橙家の子弟が望まない可能性も踏まえてあまり大袈裟にするつもりはなかった。綺麗ごとを言うつもりはないが、自分の負い目になるのは嫌だからだ。

しかし一つの可能性がこの話を……北東側に向かわせる。中央貴族が自分たちの安全もあってアンデッドを誘導し、余裕の出来た南領にぶつけるべく一か所に移動させている可能性だ。

「魔物なり邪法師の類を捕らえて『保存』しておけば楽ですが……もつと確実な方法があります。僕が敵を地形で誘導して倒したように、囚なりバリケードか何かで北東方面へ誘導してやれば良いのです。橙家を始めとしてあのあたりの貴族は壊滅してますから」

「その手があったか。悌さまこれは……」

「中央の利益にもなる。可能性は高いと言わざるを得ぬな」

この懸念に関して悪い面も良い面もある。

悪い面は一か所に集められたアンデッドに向かって突き進むことになる。場合によっては黒幕の手で一気に開放されてしまう事もあるだろう。良い面としては現時点で多くの問題が北東に集まっているという可能性である。

こうして僕たちは当たって欲しくない懸念に対して真剣に取り組むことになったのである。

参謀旅行

● 馬車一台に隠せるだけの武装を用意して北東へ。

橙家の領地を目指し、僕らは移動することになった。後に残す黄三硯には兵員輸送車両を優先して作るように伝えている。

万が一、万鹿柵を北に越え東へ向かった場所にアンデッドの群れが隠されて居たら大変だからだ。その時は増援込みで数十名に過ぎぬ戦力で持ちこたえなければならぬ。

「これで何とかかなりそうだ」

「殿はここに残られた方がありがたいのですがね」

「俺が殿を確実に守る。心配するな」

領民として申し訳程度に居るだけではなく、黄三硯に続いて橙二尾を正式に登用した。

これまで対等の扱いでやや尊重してもらったが、殿呼びと改まった状態なので何だかこそばゆい。しかしこれからは公の席だけでも、上下の区別くらいはせねばならないだろう。

多少寂しいところもあるが、これも領主になった以上仕方ないのだと思っておこう。

「もし誰かに尋ねられたら、来年以降の『下見』だとしても言うておいて。あとは洞府をお願い」

「承知しております。あの御方の手を煩わせることなど決していたしませぬ」

今回の道中は逆転の発想で中央の意向に従う場合のルートを下見することにした。

事前に地形を調査し、作戦の為に状況を把握するのは当然の事だ。だから表向きのコースは『Y』字であり、橙家やら緋家の縁戚である貴族の所に寄る本命のコースを合わせると『?』マークのような感じになる。

そして洞府に居られるあの御方と言うのは当然、九天玄女さまのことだ。どうしてあの辺に重要施設が集めているのかも含めて、代官で

ある黄三硯には神様の話をするつもりだった。しかし実際には、もう一歩進んだ対応を取ったのだ。自分でも会心の一策だと思っている。『そういえば、僕の能力を強化できるって話でしたよね?』

『申したがなんぞ面白い使い道を思いついたのかえ?』

ここに戻って来て暫くの頃である。神様が再び来臨した時に格が上がった時の話になった。

その時に決めかねていた能力の強化を決めたのだ。最初は結界の浄化だとか、認識できるようになった特殊な力を集めたり強化とか、普通に張り易くするとかエネルギー回収してリサイクルとか、夢と妄想だけは色々であった。

しかし思ったのだがこれまで僕は神さまにお返しができていたのだろうか? 今回の件も先行投資のようなもので、本来はまだまだ先の話ではないかと思ったのである。そこで強化の使い道を別の対象に使う事にしたのだ。

『では娘々ご自身に、あるいは周囲の認識に働きかけることは可能でしょうか? この地に訪れた者たちに九天玄女さまのお姿とお声を伝えられるようにしたいのです』

『ホホホ。これは面白い事を言う。次に能力を格上げできるのは何時か判らぬ。わらわにソレを使うと?』

『はい。これは感謝の気持ちであり、同時に娘々の事を世間に伝え易くするためです。僕自身の為にもなりますので、追従でも気遣いではありませんせぬ』

と、まあ存在力の強化または認識力のコントロールを選んだのである。

どちらであるのか僕には良く判らなかつたがそれ以降、三硯たちにも紹介したら会う事が出来た。それまでは双葉に『今こんな感じでない話をされている』と伝えた位なもので、それも桃園の神様くらいの認識だった。それが誰も知らない概念だけの神様から姿と意思を持つ超存在に認識が変わったのである。

そしてこれは恩返しだとか僕のこだわりをスッキリする為であると同時に、やはり僕自身の為である。第一に神様の存在がハッキリと

していれば教義を広めるのもやり易くなるし、場合によっては僕以外にもアイデアを渡してくれることもありえるだろう。そして何より……。

（双葉とかいずれやって来る麗さんとかに説明し易くなるし、どっちが上とかいう戦争を見なくて済むんだよね。すっごい気が楽になった）

実にこれが重要な事なのだ。娘々に気を使う行動を浮気と見られなくなる。

更に『誰が女性の中で一番なのか？』という質問をされた時に、ハツキリと最も素晴らしい女性は恐れ多くも九天玄女様です！ とハツキリ言う事が出来る。胃が痛むことが無くなるのは凄くありがたい。ともあれそういう訳で三硯たち主要メンバーも娘々の事は知っているのです、何かあつても洞府だけは守つてくれるだろうし、不意の来客が居てもあそこにだけは通さないだろう。

「万鹿柵まで暫く何も無いから、道中で色々と変化があつた時に実地で教えて行こうか」

「はい、判りました。ご指導ご鞭撻をお願いいたしますね」

馬車は最大四人乗れるが、下に色々と隠してるので今は三人。

僕と双葉とエルフの青柳さん。今回は参謀旅行というか、地形やらシチュに依じていろいろと保全能力の使い道を説明することになる。どうせ移動中は何もすることがないし、アンデッド対策に関しては殆ど対応が決まっているから、現地の地形でも見ないと立案しようがない。

それならばせつかくだし、弟子一号である青柳さんに説明することにしたのだ。まあ半分は結界能力と言うよりも、化学なんだけどね。「じゃあまずはこの馬車に入ると、何ができるのか。思いついたことを言ってみて」

「そうですね。扉の開け閉めで鍵の代わりに出来ます。あとは……喋っている事を聞かせない事でしょうか」

「うん。良い応えだね」

保全能力はあくまで基本状態の維持でしかない。

変化を抑えられるが、あまりにも当然のことは留めにくいのだ。だからパパっと思いつく鍵の代わりと言うのは、判り易い例ではあるが意味が薄い。そういう使い道をしたかったら、粘性のある液体を扉に塗るとか言う工夫が必要と伝えつつもう一つの解説に移った。

この概念の解説は段階を挟むので、彼女が自分で気が付いているならば説明がし易いのだ。

「音は囲まれた場所では伝わり難い。だから馬車の中で使用すればかなり消耗を抑えられるし、そもそも他人から気が付かれ難い。馬車の素材を変えるともつと楽になるけど、何だったらカーテンを増やしても良いね。これは温度変化にも言える共通点かな」

「確かに狭い場所では変化が起き難いですね。氷室に冷却を掛けた時もそうでした」

洞窟の一つをコンクリで加工して冷蔵庫にした。

空気が入るようにしたうえで、二重の扉で塞ぐことで温度の伝達速度を下げたのだ。青柳は冷却の魔法が使えたので中にも魔法をかけてもらったが、この二重扉の間と外にも使用してもらった。多重の寒い空間と障壁により、冷蔵庫がようやく完成したのだ。

今は冷却の魔法だけだが、もし将来に氷を作る上位魔法を覚えたらもつと確実な冷蔵庫もできるだろう。しかし今は氷を夏まで保存できることを喜ぶことにした。

「今の話だけどポイントは二つある。工夫を凝らせば消耗が抑えられる事。もう一つは他人に気が付れない事。神職がやる事じゃないけど、隠密行動にも使えるって事だね。皮と草の靴を造れば忍び足も簡単になるとか」

「既存の知識に縛られない、創意工夫が重要と言う事ですね」

と言う訳で青柳は素直な子なので教え易い。

道中はこんな感じで思いついたことを説明し、アンデッド対策もまた地形を使ってバリケードのコストを下げている事。そして戦う必要が無いように工夫しているのだと判り易い例を示した。

こうして万鹿柵までは特に何事もなく進んでいく。スパイが入り込んでいる可能性が高いので、色々と話す事には注意しながらも調査

旅行が本格的に始まったのである。

南方鎮台とそのエリア

● 通過点である万鹿柵は山が横に連なった様相をしている。

山の配置にも特徴が出るもので、うちの本村である壺の村は四方を囲まれた盆地である。これに対して万鹿柵は横に連なり、丁度左右に山々が見える辺りの中央部分に街道があるという構成。東西にブレはするものの『△?△』という形が続いていると言う感じだ。

何も無ければさぞや通り易かろうに、砦が幾つか設けられ、今では関所やらバリケードが設置してあるので商人から見てもたまったものではないだろう。それでアンデッドの大量湧きから守られているのだから、文句を付けようがないというのが事情を複雑にさせている。「ここからは場所ごとに何かしらの役に立つ事や、守るべきナニカのために考えていこうか。座学よりもフィールドワーク重視ってことだね」

「そうですね。では時々、紅梓姉さまと交代します」

青柳へのレクチャーは保全能力および教義関連の二本立てで行っていた。

対象固定の保全と範囲への結界から始まる能力の使い方。何を信じ、何を守るかと言った教義の設定。そしてそれらを実地で考えながら進んでいく。

それと同時に、外に出ているエルフの情報を固定させないでおくのが目的だ。紅梓はそのうち二尾と一緒に橙家方向へ偵察に出るので、影武者として青柳には歩きで着いてきてもらう事になる。

「出発前にも言ったけど僕らはこのまま北上して陥落している城を見て回る予定だよ。まずは東領との結節点までいくから『く』の字状に曲がることになるね」

「その間に私たちは東進して適当に見て回れば良いのね」

今度は紅梓を乗せて説明会。基本的には既に話している情報の再確認だ。

僕らは囿であり、中央から命じられた話に乗る場合の下見として調

査に行くのも本当。正確には城完全奪還と再築込みで、何処の道筋を封鎖して何処を確認すれば良いのかを見に行く。

当然ながら橙家のある方向にアンデッドを向かわせる場合は、その辺りに細工をして居るからだ。周辺の兵士たちを動員しているならば、不自然ではない様に『こちらには迎撃部隊が仕事をしている』とでも説明しているだろう。『南領で確立された手法だから、南領に任せれば問題ない』とでも言えば通ってしまおうだろう。

「それでワザワザ交代したのは他に何か意味があるわけ？ そりゃ歩くよりも楽じゃあるけど」

「うん。この辺りの地形が判って来たから怪しい場所を伝えておこうかと思つてね」

万鹿柵を越えて南方鎮台のエリアに入った。

穀倉地帯の南端であり有事とあれば南領を抑えるべき場所だ。侯爵である紅家の領地よりも広いが、南領全体より遥かに狭いという微妙なサイズである。要するに南領が問題を起こしたら時間稼ぎをする場所だと言つても良い。独立経営が可能で財政も豊か……日本と言うと兵庫・岡山・広島、中国で言うところと荊州辺りを思い浮かべてくれれば判り易いだろうか？

ともあれ、この世界の公式地図は重要な地形は隠したり、距離やら方向をあえて間違えて記載するのが当然。正確に記した地図など軍事物資であり、所持しているだけで怪しまれることから、現地入りしないと詳細が分からないのである。それゆえにエルフメンバーのカモフラージュも兼ねて紅梓を馬車に乗せたのだ。

「鎮台の城郭跡を含めた街道の中心はまず関係ないから置いておくね。もし何かやっているとしたら、東領との境にある城跡、および西領との境にある同様の城跡付近……ここまででは良いよね？」

「何となくは判るわ。魔族の動きと連合軍の動きは凡そ一致してるしね」

魔族はまず西側に現われた。当時の権力者である大公の領地を占領下に置いたのだ。

そのまま中央に雪崩込み南へ東へと軍を進めた。山がちな北を省

「……山の上ね」

「正解」

アンデッドそのものは窪地のような一段下がった場所にでも封じ込めるのが一番良い。

他の場所へ進む道をバリケードで封鎖すればよい訳だし、木製の壁ならば火矢でも放って燃やせばそれで済む。もしその行動を問い詰められても『大量のアンデッドを見かけたので周辺ごと燃やそうと思っただ』とでも言えばよいのだ。

もしそれが陰謀であるならば何処かで管理をする必要がある。中央の将軍なり貴族家の誰かが面倒くさがってるならば誘導だけして管理などしないだろう。そして周辺を観察して上手くコントロールするならば山の上が一番安全なのは僕が一番知っている。他ならぬ僕自身が確実な籠城策として一番最初にやったからだ。

「そいつらを発見したら倒しちゃえば良い訳？」

「ううん。むしろ発見したという事実を隠して欲しい。二尾が墓参りを済ませて戻る行程でアンデッドの行き先を発見。その後は無事に戻って僕に報告する……って流れだけ見守ってくれればいいかな。今の段階で見張りを排除する意味は無いから」

「了解」

偶然を装って暗殺したとしても、どうせ管理人はまた派遣されて来る。

完全に排除するにはアンデッドをコントロールしている事ではなく、ソレが『陰謀の手段である』と認識されなければいけないのだ。そこまでやってしまうと相手にこちらの対応がバレて、別の手段に切り替えるなり、スパイや暗殺者を送られてくる可能性が高まるので避けたいところだ。

重要なのは『橙二尾による発見』と言う事実を覆い隠すために、彼を暗殺される方が困る。知って居る人間が殺されるのは嫌なものだし、大義名分的にも彼には無事に戻って報告してもらわなければならないのだ。

「という訳でしばらくしたら二尾が墓参りを申し出て来るから、その

後をコツソリ護衛してもらえるかな？ 必要なら最初の段階では姿隠しでも試してみるけど」

「誰に物を言ってるのよ。森の中を抜けるなら私が見つかるはずはないじゃない」

この後で僕らがどういうコースと時間軸で動くかを説明。

何処で合流するかとか、何も変化が無く陰謀が懸念である場合、怪しいけれど橙家の周囲まではギリギリで何も無い場合など幾つかのパターンで作戦を詰めた。

二尾と紅梓たちの調査と、僕らが東領への結節点で行う調査。その二つを見比べてアンデッド問題と中央が陰謀を企んだ場合に対処する事になる。

「守ってばかりじゃ駄目って事かな。後は平和を願う皇帝陛下の御意向の賜物ってやつさ」

「まだまだやれると思っていた王と、戦いに飽きた周辺諸侯では対応が違う。」

「イザとなれば籠城で済む王様と、戦い続ければ疲弊していく諸侯の差は大きいのだ。強大な武力を見せつけられ、大義名分として平和による範囲を約束された諸侯では考えが違うのも当然だろう。」

「そして援軍が存在しなくなればどんなに強固な城もおしまいである。王は降伏しこの地は直轄地として南群と呼ばれるようになり、それ以降は紅家が南部の雄となったわけである。」

「城壁が壊れてるのはその時じゃなくて、つい最近だけだね。魔王と魔族率いる魔物の軍勢が無茶苦茶やったんだ。アンデッドが湧き続けるのも関係してるけど、過去にこの辺りで戦いが続き続けたのも原因の一つだろうね」

「近年になってありえない程の災厄が襲って来た。」

「魔王と魔族率いる魔物の軍勢、その中には巨人族の生き残りも居たという。強力な上位魔法が飛び交い、巨人族の体当たりで城郭を囲む壁は破壊された。それでも壁に意味はあったのか、巨人族の中でも格下の殆どが討ち取られたという。元から生き残りの数が少なかったこともあり、巨人族の歴史はそこで終わっている。」

「いずれにせよこの周囲で多くの争いがあり、穀倉地帯を争って中央や西領方面と戦い続けたのは確かである。魔物によってこの地が呪われ、アンデッドが湧き出るようになったというのも不思議でも何でもなかった。」

「あの……さしでがましいようですが、なんとか止められないのですか？」

「結界でという意味なら無理だよ。専門の神官が大規模な浄化術を儀式魔法や祭事として施すしかないと思う」

「エルフの青柳がおおずと尋ねて来る。」

「この場合は保全能力で結界を張り、何とかアンデッドが湧かない状態を保てないかという質問だろう。しかし結界と言うものは魔力の

浪費が大きく、発生を防ぐと言う方法では無理なのだ。

そういえば前に緋雁原で精霊を例として緋七司あたりに話したことがあるが、その時の例を元に少し説明し易く改変してみようか。

「まず何がアンデッドの発生に関与してるか特定できない。しよつちゆう戦ってる光の神の神官なら別として僕らじや理解するのも難しい。となると魔力が馬鹿食いする上、その原因が何処にあるかも判らないんだ」

「原因……ですか？」

「邪悪の気配とか負の生命力とか？」

何が集まってアンデッドを存在させているかがまず判らない。

特定さえできればソレをピンポイントで封じれるかもしれないが、現状では『アンデッドは入って来るな』とキャンプ地に结界を敷くのが精々だ。それだって全魔力を動員しても、いつまで保つか怪しい所である。広ければ朝まで持つかも厳しいだろう。

そして封じる事が可能だったとして、邪悪な気配が別の場所で湧き出たら困るのだ。

「そういうのが都に集まっても困るでしょ？ 最悪の場合、一か所に集中し過ぎて強力なアンデッドが生まれるかもしれない。噛みついた相手もアンデッドになるとか、特殊能力がなかったとしても巨大なアンデッドが出てくるかもしれない。巨人の死体だってその辺に埋まってるんだから」

「あ……」

問題なのはここが穀倉地帯の南端でしかない事だ。

中央も西も穀倉地帯であり、そこで人々が争ったという事は変わらないのだ。魔物たちは穀倉地帯を陥落させたときに、その全域で儀式を行っている。だからこそ何処かでアンデッドが湧き続けているのだ。

もし下手に封印などしたら、別の場所に集まって強力なアンデッドが生まれるとか、そうでないにしても今まで以上のペースでアンデッドが湧くことすらあり得るだろう。

「植物で例える場合は、虫を寄せなくしたら実が成らないとか、一か

所に虫の群れが集中するとかね」

「なるほど。判りました。私も気を付けますね」

今回の件は善意の申し出と言うよりは、参謀旅行の一環だ。

同じような起きた時に、どうすれば良いのかを考える為である。だから青柳も気軽に尋ねているし、間違えたことを反省するというよりは学習の一環として捉えていた。

「だから邪悪な力を浄化するお祭りの方が効率良いんだよ。植物と虫の例だと、虫の接近を止めるんじゃないかと花の香りを抑えるとかね」「できるだけ自然に近い方法で……と言う事でしようか」

アンデッドの邪悪な力を恨みととらえるならば……まあ自然に近いということだろうか？

こればかりは何とも言えないが、まあ呼び寄せるエネルギーを霧散化させるという意味では同じだろう。

そんな風に話していた時、警備に当たっていた者から申し訳なさそうに声が掛かった。

「すみません。商人が我々の旅に同行させてもらえないかという申し出が……」

「僕らと？ 真っ直ぐに都に行くわけじゃないと説明したの？」

「はい。そう申したのですが、途中まででも良いと」

実のところ、ソレは珍しい話ではない。

行商人が集まってキャラバン化することで、護衛の数を増やそうというのは良くある話なのだ。キャラバンが構成されれば一人旅の者なども自然と近くで寝泊まりして、少しでも危険を避けようとする。ましてこの周辺ではアンデッドが何時湧いてもおかしくない。群れようとするのは当然だろう。

問題なのは本当に商人なのかということだ。スパイの可能性もあれば盗賊の可能性だってある。どこかの役人が身分を隠して使者を務めたという可能性もゼロではない。

（僕らの行先自体は調べようと思えば調べられる。この城郭跡に着いた時に情報収集はしてるしね。だからそこで聞きつけて理由にするならば簡単なんだ。だけど商人ではないとしたら……どっちだろう

?)

本物の商人が戦力を欲しているだけならば別に構わない。

途中まで引き連れて行って別れた後の責任は負わなければ良いのだ。キヤラバン目当ての大きな盗賊団なんて聞いたことはないし、居たとしても剛盾や青柳が居るから何とでもなる。大通連は居ないが、だからこそ失礼な事をして決闘沙汰になる事もない。

問題は盗賊が僕らを襲うために装っている場合と、スパイか何か情報が抜くために付いて回る場合である。

「僕らは主命があるので東河翠道までは入らない。緑林洞の辺りまでしか行かないけれど、それで良ければ勝手に付いてくる来るのは構わないと伝えて。挨拶とかも特に要らないから」

「判りました。そう伝えます」

あからさまにホットとした様子だけど袖の下か何かを貰ってるのかな。

農民出身の民兵じゃあ仕方ない。咎めるのも気が引けるし彼が『そういう人間』かもしれないと心のノートに付けておくだけである。

一回くらいで人間の評価をするべきではないが、かといって性善説で機密に近づけるのも問題だ。

「翠道は判るけど緑林洞って？ 洞窟の中に森でもあるの？」

「その昔、東領の方向に緑家という貴族家があつてね。彼らが砦代わりに使っていた大きな洞窟があるんだよ。まあ貴族家といっても実際には傭兵みたいな暮らしだったらしいけどね」

なんでもこの南群地方の王様と同盟を組んだ貴族だったらしい。

この王家に関しては名前が忘れ去られても、貴族家の方はしぶとく生き残ったこともあつて名前が残っている。その勇名もあつて似た地名が存在しており本来の故郷が緑林山、本拠地を滅ぼされても砦である洞に籠って戦い続けたことで名前が付き緑林洞と呼ばれているそう。

ランドマークの地名が苗字になるこの国では、珍しく家の方が先にあつたという例である。

「今回は境にあるお城を抜けて、その緑林洞で引き返す予定。周辺の

アンデッドを確認しないと困るけど、そこから向こうは湧き出してないそうだからね」

東領との結節点であるお城までは当然として、その緑林洞までは行ってみる予定だ。

浄化するにしろバリケードを作って封鎖するにしろ、碧遣いしていたならばそこまではいかないと周辺のアンデッド事情が分からない。もしそこにもアンデッドが湧いていけば浄化なり封印が必要だからである。

逆に安全な休憩所としてキャラバンが使っているならば問題ないだろう。さつさと引き返して西領との境まで行く事にして、引き返すべきだ。……どこかで橙二尾や紅梓と合流するスケジュールになっているので東に進み過ぎるつもりはない。

なお、先に結果を言ってしまうと基本的にこの計画自体は遂行された。

基本的なんて妙な前提になって言うのは、今回出逢った商人が面倒くさい奴だったからだ。商人は商人でも大商人と人は言う……。

インフラの見積もりと大商人

●
付いて来た商人は途中までは普通にしていた。

僕らの後ろを追隨して邪魔にならぬよう、それでいて集団としての規模を保つ。要するに盗賊の類が警戒するレベルであり、もしアンデッドが湧いたら共同で倒せるレベルである。

それが奇妙な動きを見せたのは、旅の東限である緑林洞の調査を終えた時だ。

「ねえねえ。あの人たちがまだ付いてくるよ?」

「そんな馬鹿な。僕らは引き返すんだよ。それなのに付いて来たら、彼らは何のために……」

馬車の向きの問題で双葉が先に気がついたのだが、残念ながら事実だった。

もう訳が分からない。中央のスパイであることを覚悟はしていたが、それだつてこんなあからさまな事はしないだろう。お役所仕事で付いてくるにしたつて、最初に命令書と同行を認めさせるようなやり取りをするだろう。

それが判明したのはその夜、説明とセールスを兼ねてその人物がやって来てからだ。

「俺はキリー・ゲラルド。こつちで言うなら南商豪つてとこかな?」

まあ見ての通り大商人。未来のつて意味なら南国一の大商人になる予定だ」

(こいつ……ダメな奴だ)

何となく大通連に通じる豪快さと奔放さを感じる。

商人である以上は自嘲できるはずだが……『駄目だと言われてないことは何でもやって良い』とか言いそうな雰囲気は何えた。僕が勝手に付いて来るのは構わないと言ったから、本当に勝手にしてるのかもしれない。

しかし大通連とこの男に共通することもあり、南国からこつちの国に渡ってきている連中は性格的に難のある奴ばかりなのかという偏

見を抱いてしまいそうだ。

「それで……そのキリーさんが僕に何の用事ですか？ 幾ら付いて来ても良いと口にしても、ずっと付いてくるつもりはないのでしょうか？」

「話が早くて助かる」

面倒くさいのとフランクなキャラに礼儀は要らないので単刀直入に聞いた。

こういうタイプは鏡写しに何でもやり返すことが多く、礼儀を口にしての間は礼儀を返して話が進まない。そして腹を探ろうとすると、晒しても良い反応しか返してくれない物だ。

まあ傭兵仲間の反応を思い出しながら対応しているので、こいつもそうとは限らないのだが。

「水棲種族の所であんたの商品を見たぜ。緋家のところで河川組合を設立したって話も聞いた。俺にはピーンと来たね。此処で商売の話が出来るってよ」

「ならその直感の外れかな。僕は別に物を売りに来たわけじゃないよ。仕事だからね。まあ一緒にする商売のタネがなくはないけど」

コンクリ製品でも見たのだろう。何タイプかサンプルを送って形状を選定した。

その時に使わなかった長方形のコンクリ製品を、波消しブロックではない使い道に使うからと船着き場に使用したらいいのだ。僕も同じような事に使っているし、何となく察することはできる。

それはそれとしてこの男はその製品が欲しい訳ではないだろう。もつと他にしたい話、あるいは前から思っていて僕を巻き込めば出来ると思つた商売があるに違いない。

（ただの商品ならガラス製品なんだけど……。こいつ馬車を見ても何とも思つてないんだよなあ。大儲けとか恒常的な利益を考えるなら……インフラかな）

夜になって挨拶に来たと言いつつこの男は周辺を物色していた。

その時に馬車そのものの造りは気にして居ても、透明度の高いガラスは気にしていない。まあ高炉があれば作れる品なので、似たような物を何処かで見えたのかもしれない。

それを考えると水棲種族の所で整えた船着き場であったり、河川組合の関連で僕から何らかの大きなハコモノでも受注できると思つたのではないだろうか？ 前世でもゼネコンとか儲かってたそうだし。「へえ。どんなタネだい？ できれば帳簿を付けるだけで済むような簡単な仕事だとありがたいんだが」

「んー。計算だけで終わる仕事じゃないけどね。そこから先は僕の裁量からは外れるから」

ひとまず僕の関わってる任務に絡めてみよう。

その範疇ならば問題ないし、費用が生じるならば緋家への貢献と言う事に出来る。もし彼が才能があるなら仲良くなるのは良い事だし、最悪でも『証拠固め』に使えるだろう。

今回の任務は廃墟の視察ではなく、アンデッド探索のついでに中央の要請に乗って復興を目指しているフリをすることなのだから。

「例えばそうだね。さっきの緑林洞を復旧させる場合の見積もりを出してくれるかな？ 商人として資材の代金や人件費ごと受注する場合と、領主たちが労役で適当に済ませる場合と……商人目線での改築を組み込む場合。それが妥当ならば、この先の城とか南方鎮台に関しても頼みたいね」

「……おもしれえ。再建の見積もりと来たか。しかしただの金勘定だぜ？」

「情報料と考えれば効果はあると思うよ。それに……君だって計算だけで済ませる気なさそうじゃない」

この世界に見積もりという仕事はない。

正確には見積だけで金を取り、その正確さと発展性などで工事を受注する仕事自体がない。基本的には城主などの施工主が勝手に決めて、領民やら職人たちはその通りに設計してその通りに建築するだけなのだ。

だけれど僕は前世の経験から見積もりを仕事だと言い切った。専門家の計算が出せるならば金貨を何十枚か払っても易いくらいだ。何しろソレは『証拠』に使えるのだから。

「そりゃあなあ……特に南方鎮台を俺ら商人の好きにして良いと言わ

れたら心躍るなって言う方が無理だ。そのために献金しろと言われたらそりゃあ金を出す奴だっているさ。まずは見積だけでコネが作れるって言うならば、二つ返事でこの仕事を聞いても良いように『見える』。少なくとも俺以外の奴なら即答するぜ」

「じゃあ何で領かないのかな?」

「二つだけ確認したいことがある。あそここの城、あんたならどんな利用法を出す?」

労役ではないインフラは金になる。

その事を嗅ぎつければ動きたくなるだろうに、この男は鋭い。単に計算するだけだと意味がない事に気が付いているのだ。

僕は別に試したつもりはない。本当に見積もりという『証拠』を出してくれば、僕らが中央の指示に従うつもりがあると見えるような材料として、ありがたく買わせてもらうつもりだった。

「模範解答が無いと駄目って? 抜け目がないなあ。……僕ならあの城はそもそも復旧させないよ。せいぜいが街道警備や周辺整備の労役用。あとは荷物を濡らさない為の貸し倉庫かな? 西の城は見てないから言えないけど、少なくともあそここの城が役目を終えているのは判るよ」

「良い答えだ。ならその仕事を受けるぜ。俺の意見を楽しみにしといてくれ。高く買わせてやるからよ」

南群の歴史を振り返れば東の境にある城は必要だった。

ただしそれは過去形であり、現状では復旧させるほどの意味はないのだ。群雄割拠の時代ならば周辺諸侯の軍勢を抑え、同盟者の軍勢だけを招き入れるために有用だった。東領方面の貴族であったり、南群周辺の諸侯……滅びた橙家もそうだろう。そういう貴族を利用するには重要だったのだ。

しかし現在では曲がりなりにも一国の支配下であり、南からこの国を制圧する気でもない限りは不要である。街道と言う意味ならば中央を經由した方が道も整備されており、よほどに早く文物を売り買いしながら辿り着けるのだから。少なくとも交易で利益を出そうと思つたら、あそこに城なんか作つてその建設費用を負担するべきでは

ないだろう。

「緑林洞が終わったなら、あそこの城の見積もりもお願いね。ちゃんと払うから、無理して安めの見積もりを出さずに妥当な価格にしといて」

「あいよ。その辺はちゃんとつけとくさ。安物買いをされても困っちゃう」

証拠にしたいので見積もりはちゃんと出してもらおう。

費用面で復旧する意味はない、むしろ魔族などに奪取されて周囲を席卷し、中央を伺う方が問題だと意見を提出する為だ。中央の意向に従って本当に軍を出すかは別にして、割りに合わないから中断したという言い訳は重要である。

それに……紅梓たちと合流すべく引き返している最中なのだ。不信任を抱かれない為にも、緑林洞だけではなく、あそこの城でも調査して時間を潰しておいて欲しい物であった。何しろこの男がスパイではないにしても、情報売り物にしていないとは限らないのだから。

今後の予定

● 今回の探索行は概要だけならば組んだ予定通りに進んでいる。

中央が命じそうな奪還・再建場所の確認は終わったし、アンデツドの脅威に対して確認もできたからだ。余計な付録さえなければ成功裏に終わったと言ってよいだろう。

問題があるとするれば僕らの方は妙に自己主張の激しい商人と出逢った事であり、紅梓たちの方は予想外の大物が居たことである。

「と言う訳で数だけなら殿の予想を下回っていた。しかし別の脅威が問題でな……」

「代わりに何が居たの？」

「巨大なアンデツドよ」

東の境の城まで戻ると、橙二尾と紅梓の報告でよろしくないことが判った。

狭い道にアンデツドを誘導したり放り込んでいるという推測は当たって居たが、そこに強力な個体が居たのだ。てつきり沢山のアンデツドが居たと思ったのだが、巨大なアンデツドとはまた面倒な相手である。

「巨大なアンデツドは二種類存在するんだ。巨人がアンデツド化したものと、死体が群がって一つになったもの。どっちか判る？」

「そこまでは気が付かなかったな。そっちはどうだ？」

「ジャイアントの方じゃない？ 肉とか残ってるように見えたし普通の相手なら腐ってるわよ」

ジャイアントゾンビとガシャドクロ。このどちらかで対応が異なる。

前者は巨人の強大な生命力と魔力を内包したまま変異したものであり、動きは鈍いが強烈な力を持っている。後者は群生したスケルトンが合一したモノなので、一体一体を砕いても総数を何とかしないと他者を取り込んでしまうのだ。

学術的な立場ではなく倒す側からみると、ゾンビの強靭さを特化し

た物と、倒してもきりの無い部分を特化したものと言い換えても良かった。

「ジャイアントゾンビかあ。倒せない訳じゃないけど、これまた面倒な相手が居たもんだ」

こんな大物は警備とか巡回する兵の手には余る。

もしかしたら最初は陰謀ではなく、仕方なく隘路に誘導したのかもしれない。誘導した人は決死の覚悟で山を登って逃げたという可能性もあるから……迂闊に『管理人』を暗殺して欲しいとか言わなくて良かった。やはり後ろ暗い事に手を染めてはいけないという神の忠告だろう。

それはそれとしてアンデッドの処分はしなくちゃならないのは同じだ。今回の旅で戦わないにしろ、いずれ来る北上作戦で倒さねばならないのだから。

「ともあれ二人ともありがとう。西側でも似たようなことを頼むから今は休んでよ。予定通り向こうも見に行くけど、ちよつとばかり此処で人を待つ用事が出来たんだ」

「誰よ?」

「大通連みたいな商人」

第一印象はあまりよろしくはなかった。

身なりは良かったがチャラそうな男で、どこかのボンボンが強引さと金の力でなり上がったという印象を受ける。もちろん才能がなければ大商人にはなれないし、自分ならやれると自負していなければ新参の領主と組んで新しい商売などやろうとは思わないだろうけれど。

とりあえず女に手が早そうだったので今後は双葉に近づけない様にしよう。もし妹君の麗さんと仲良くなれるならば、やはり近づけないようにしておこう。僕自身の嫉妬もあるけれど、気が付いたら情報から権利から何もかも奪われて居そうで怖い。

「頭は良さそうだから馬鹿みたいな事はしなないと思うけどね。でも代わりに『自分ならやれる!』と思った時は妙な商談に手を染めてそうな感じはしたよ」

「会う前からどんな奴か想像できそうだわ。あんまり油断しないよう

にしところかしら」

止めなければ勝手に商談を進めそうな人物だが……。

問題なのは真つ直ぐなタイプなのか、斜め上なタイプなのかだ。商品を渡して儲けが出る場所まで戻ってこないとか、帰りの商品を買う原資にする程度ならばまだ良い。問題なのは技術やら独占権まで勝手に決めたりされると困るし、頼んで無い物も売られても困る。幾ら儲ける為とはいえ、タコ足食いで短期的な利益を出されても困るからだ。

そういう訳で見積もりを色々頼んだわけだ。商人目線で調達を変わってもらう代わりに金を要する見積もり、領主目線で節約する見積もり、そして最後に商人から見て使い易い改造案の三つだ。

(もし馬鹿みたいな利益を上乗せしたり、逆に必要以上に差つ引いて受注を狙ったり、使つて良いと言つてない技術やら好き勝手に盛り込まれても困るものね。今回必要なのは正直な数字だし、コンクリ製品とか持ち込むとしたら事前に相談してもらわないと)

見積もりを頼んだ時、僕の模範解答を彼は尋ねた。

彼自身も僕と同じで、目の前にある東領との境にあるこの城を不要だと思つているのは確かだ。だからここで緑林洞の見積もりをやり取りした後、不要と知つて適当に数値を埋めたり、逆に意欲的に倉庫街みたいなのを作つて良いのか尋ねるのはアリである。そんな勝手な判断を先に聞いてからやってくれるならば問題ないと言える。

だが頼んだ三種の見積もりという意味を大幅に超えて、勝手にこの城を無い物という前提で色々考慮されても困るのである。

(まあ強引な行動と自己紹介を見て、僕の方で勝手に人格とか方針を想像しただけだから、普通に見積もりを立てて来たりする可能性もあるんだけどさ。用心はしとかないとね)

やはり第一印象が大通連の同類というのがいけない。

あの強引きと止めなければ何処までも行つてしまいそうな身勝手感はいけない。それはそれとしてそういう人を嫌いになれないのは、明らかに自分と違うタイプの人間であるからだ。

僕には遠慮しがちな所があるし、できることでもまずは試しなが

ら、人の迷惑にならないように始めてしまう癖がある。だからこそ突き抜けていく弾丸のような人生には興味が湧いてしまうのかもしれない。

（せっかくだし僕もアイデアを考えてみようかな。どこまでOKとか説明し難いし、角つき合わせて議論し合うのも面白いしね）

既存の城を普通に直すプランはあまり興味が無い。

南商豪だかキリーだか知らないが彼の事を笑えないくらいには、僕もアイデアの上だけなら好き勝手にしてみたい。もつとも緋家や紅家に尋ねられたら提案するレベルで、されなければ推定費用を見せて大枠だけ直すレベルになるだろうけれども。

とりあえず中央に見せてパクられても困らない程度で、理解できないからと問題視されない程度の案を考察してみる。

（アンデッド湧きの問題もあるし、解決できないことを前提に軽騎兵と軽歩兵の詰め所。厩舎と倉庫街を作っておいて、街道整備の人足の長屋つてとこかな）

目の前にある城は平山城の西洋版である。

南方鎮台が平城の総構えで町ごと囲んでいるのに対し、軍勢を山によって防ぎつつ防衛施設を配置して効率的に守る様になっている。山越えルートを潰す壁は申し訳程度で、平野部に面した壁で山の反対側を守っているという風情だった。

しかしこれからの世の中には大きな城壁など必要はない。アンデッドを食い止める程度の壁を作り、大きな盗賊団が居たとしても困らない程度で良いだろう。そういう意味で、街道を広くしながら巡回部隊が幾つか休憩所にする程度で良いと思われた。

「まあこんな所かな。合流して見積もりを貰ったらそのまま西領との境に行こうか」

おそらくはあちらでも、アンデッド溜まりと言うべき場所が作られているのではないだろうか？

緋家の縁戚に当たる家はまだ無事らしいので、その分だけアンデッドもそう遠い訳ではないだろう。道筋の何処かの山に封じ込め、貴族領に近くはない場所で適当に食い止めていると思われた。

僕らはその様子を確認した後、緋家にレポートを提出してもう一度この地に戻って来るに違いない。その時には大型アンデッド対策を整えるだけではなく、南方鎮台の復旧に関して議論することになるだろう。

路線変更

●
自分だったらこうするという案を書き上げて、次に来たのは自分の限界を知る事だった。

具体的に言うと思いついていて当然のアイデアを盛り込んでおらず、この世界の住人から未熟なアイデアを貰って気が付くという事だ。

彼のアイデアが未熟なのは後発なので当然であるが、元の世界の知識を持っていた僕が思いつかないのは不甲斐ない。まあ記憶を保全してあると言っても、全部思い出せる訳でも、思い出したとしても使うかは別なのだが。

「と言う訳でどうせ重要じゃないなら、移動させることを前提に簡素な仕上げにしたらと思うんだが……ダメか？」

「いや、そうじゃないよ。忘れてた技法を思い出してるだけ」
南商豪が見積もりと同時に持って来たアイデアは、施設を移動させるというものだった。

どうせ不要な城なので、ここで建設した後には復興予定の場所に移動させ直すというものである。中央の領分なので直ぐに誰かの領地化するわけでもないが、無味な施設をガツチリ立てるよりは、移動させることのできる状態で簡素化するというモノである。

移動させるための建物を建てる。この世界としては新しいアイデアであるが、僕は元の世界でプレハブやら何やら知ってる。加えて自分の領地でも既存の建物を材料にして見張り塔やら壁を作ったこともあるので、気が付いていても良いアイデアだったのだ。

「技法？ 既にそういうのがあるのかよ？」

「まあね。僕は知恵とコツの神様の信徒だから幾つか知ってるし、教えることもできる。例えばそうだね……大枠の骨組みをしっかりと計算して作って、外側の板も同じサイズで張り付ける形で組み上げるんだ。ちよつと見てて」

紙はもつたいないので、野営中ともあつて地面に描いていく。

縦・横・高さを仮に10 x 20 x 5くらいの長方形で造ると仮定する（比率と長さは適当）。そこに張り付ける板を1 x 1 x 1と1 x 2 x 1の定格であらかじめ作っておき、これを張り付けて端っこを固定していくという図形だ。もちろん固定したり外したりというのは、流石に大工に任せて釘やら紐が必要だろうけど。

こういう建物を何組も用意して置いて、それとは別に最初から大きく造った長屋造りの物を用意する。これに使う板やら柱も定格で作っておいてどちらでも作れる……要するにサイズは長さ以外は同じ建物であると簡単に図形で示した。

「スゲエじゃねえか！ このアイデアなら売れるぜ。どうしてもっと早く言わなかったんだよ」

「僕も忘れていたというか再建も含めて勝手に決めて良い物じゃないしね。それに『思いついた案は、実は始まりに過ぎない』という言葉が僕らの中ではあるんだ」

プレハブ工程どころか一夜城すらない時代である。南商豪ならずとも顔を赤らめて興奮するし、職人を何人も雇える商人もなれば幾らでも商機を思いつけるだろう。今ごろは頭の中でこういう風に売り出すかを検討しているに違いない。

それはそれとして昔から漫画……特に料理物で言われている言葉がある。『馬鹿め。お目はそのアイデアを完成系だと思っただのさ。しかしそれは始まりに過ぎなかったのだ』と先輩格・師匠格の料理人が『今度こそ勝てる！』と思いが上がった主人公を叩きのめすシーンだ。

「始まり？ 他に何があるってんだ？」

「この形と大きさが決まって居る事を規格って言うんだ。同じ形状で同じサイズ、どこで注文しても同じってね。例えば鍛冶職人が自分が造り易いサイズで作ってる釘とか工具を、同じ規格で作ったらどうなる？ その商品が他の商人に先駆けて君の商会で扱ってたら？」

「そ、そりゃあ……大工たちは当然俺の所で買うよな」

もちろん間に立ち塞がる問題は色々ある。

頭の固い職人は基本的に自分の考えた理想、もしくは過去からの惰

性で同じ物を作るのだ。釘だって工具だって、『このサイズが良いに決まって居る』とか『この位が一番作り易い』という考えの延長で作っているのだから。

なのでまずは言う事を聞いてくれる職人を探す必要がある上、作り始めたら以後も同じサイズで無ければならない。第●号という規格の差は必要だが、同じ号数で別物だったら困るからだ。

「しかし、それって本当に可能なのか？」

「基本的に無理と言うか、無理だったから僕も忘れてたんだ。今回みたいに、一から全部差配できる可能性でもなければまず無理だよ。だから前段階から見直さないといけない……作るのは規格じゃない、話を聞いてくれる職人や、ちゃんと規格品を扱う部下の商人だ」

つまり最重要なのは人間の育成であり、その前段階である教育なのだ。

これまでは村人に文字とか初歩的な数を教えて済ませて来た。村の生活にはそれで十分だし、村の職人たちも好奇心の高い者たちが多かったから話を聞いてくれたというのもある。だがこのアイデアを押し通したいならば、最初から教えることを前提に素人を育てるくらいのつもりでなければならぬだろう。

要するに職人や商人の学校を作るという事である。自分の村に作るなら過剰であるが、町の復興であったり南群全体の復興であるならば十分に意味があるはずだ。

「人を育てる？ その必要があるのか？」

「雇っている丁稚の全員が使える丁稚だった？ 違うから一部の人間のみを抜擢するとして、その中で現地の店を任せられる人間は何人いた？ でも雇う者が全員、数や計算などの初歩的な知識を知って居れば話が変わる。性格の方を選べるんだ」

当たり前だが村人や町人を教育する領主なんかいない。

僕は人が居ないからやったし、それでも必要な部分までしかやれていない。しかしこの地方全体を普及させるならば職人見習いと商人見習いは何人居てもいい。

そして学校で教えるのであれば、教材や商品として扱い易い規格品

というのは便利であるし、それで覚えた彼らも使ってくれらるだろう。「最初は数字と計算を教える場所で共同で教える。どうせどこでも使うんだから共同でいいし、それなら何人放り込んでも良い。そこから職人を目指したい者や商人を目指したい者を選抜して教えていく」「土学みたいなもんか？ まあそういう事ならば判る」

この世界では基本的に私塾で教えるか、試験入学の土学という学校に行く。

そこから見込みがある者は役人や軍官僚を目指したり、魔導師を目指して色々と専門的な教育を受けるわけだ。そういう場所くらいしか先生となる人や、専門教育できる人間へのコネクションが無いとも言える。

黄三硯は頭の良い妹に金を出して土学に通わせ、魔法の才能が有ったからコネクションで専門機関で学ぶという事なのだろう。

「そこで学ぶ時の教材は全部規格を作る。同じ重さ同じサイズ同じ形状の物をたくさん用意する。もちろん練習に立てる家やら、作る工具なんかも規格を目指してキッチリ教えるわけだよ。そういう目的にするならば、このお城にも意味があるんじゃないかな。『黄の町』が学問の町である様に、ここを商人や職人の町を教えるにするんだ」

幸いにも南群の復興はまだ先で、完全に終わるのは遙か先。加えて西領の話もある。

つまりここで教えていくことは意味があるし、その過程で規格を作ればここで生産する品を商品として売れるという事だ。流通して増えれば増える程にあちこちで使われるようになるだろう。仮に真似されてコピーが出回るとしても、同じ物をコピーした方が早いので規格だけは残る。

まあ問題は、その話を『上』に通さなきゃいけないわけだけだ。

「夢は果てしないな！」

「夢だけはね……」

何が面倒かって、この話は城の債権を僕らが担うという前提である。

まず南領の総意としては中央の意向に沿って戦闘し続けるのは本

意ではない。加えて南群に所属する貴族自体は中央の所属であり、あの程度は縁者に割り振られるとしても全員ではないだろう。それこそ完全直轄になって代官だけ割り振られる可能性すらある。

南領の後押しで城のどれかを確保するのか？　そこまで紅家や緋家が望むとは思えないし、中央が戦いではなく再建を命じたとして……完成しそうなところで取り上げられる訳だ。真面目にやる気力が削がれるのは今から判る様であった。

「浮かない顔だな。何か懸念でもあるのか？」

「再建を何処の勢力がやるのか判らない。中央から南領が命じられるのは本当だし、北上作戦とその前後を仕切ってるのは確かに僕なんだけど……決断するのは『上』なんだよ。見積もりと一緒に計画書を提出して、君の名前を出すことは可能だけどね」

この場合の上とは中央かもしれないし、南領の誰かかもしれない。事前にこの話を通しておけば侯爵さんは企画書を使ってくれるかもしれない。緋家がやるなら決めるのは悌さまだが、僕の提案通りになるだろう。

だが中央が最初から何もかもやる場合には無意味だ。計画書を読んでくれればよいが、場合によっては何も聞かずにハイそれまでと言う可能性もある。南領としてはそれ以上の負担が無ければ万々歳なので、特に反対もしないだろう。

「いずれにせよ見積もり計画への報酬は出すし、君を推薦はする。後はそうだな……僕が戻ってから規格という概念の仕上げまではやっというても良いね。それを買うと言うなら相応の額で渡してもいい」

「それなら俺の方に不満はない。適当な頃に顔を出して経過を聞きに行くとするよ」

こうして僕らは別れ、路線の変更をしながら計画を進める事にした。

南群を領地としてもらえる可能性は高いが、何処かの復興を任せられる可能性はあるからだ。

その復興に今回の計画を用いつつ、僕は領地の発展に、南商豪は商会の繁栄に利用することにしたのである。

目の前の不満と、最終目的による鎮静作用

●
村に戻ると北上作戦から派生した三つの項目を文面にしたためる。
一つ目は橙二尾の見たアンデッドの巨人の報告。二つ目は南群全体の様子と諸費用の予想。最後に規格化に関する計画書だ。

真つ先に書き上げたのはアンデッドの分布図である。巨人の位置を始めとして東側と西側、そして農閑期に増え始めるといふ住民や旅人の証言。何者かが『ウツカリ始末を忘れて集まってしまっている』という現状を照らし合わせて今後の推移を完成させる。

「これを届ければ任務終了つと。同じものをあと三通も書かないといけないのが苦痛だけど。見積もりが終わったらそれも書かなきゃな」
この報告を元に出兵、南群を浄化して周辺を守る所まで押し上げる。

それで南領は安全になるし、中央が代官なり領主を派遣して来れば維持管理を任せて安泰である。誰も送って来なければ南領に組み込みかねないので、おそらくは誰かしら送って来るだろう。

詳細を書いたこの書類は緋家だけではなく紅家にも送り、そこから南領に属する諸侯へ伝達される手はずだった。おそらくは紅家から出兵への要請文と共に送られるだろう。真偽のほどは現地で見た貴族たちが把握するだろうし、兵のすべてまで口を塞ぐのは無理なので、中央も嘘だとは断じ難い。

「北上作戦自体は別にやったが勝ちだから良いんだけど……この費用は頭抱えるだろうなあ。まあ、でなければ中央も南領いじめに使わないだろうけど」

見積もりを頼んだ南商豪は南でも中央でも商売をしている。

だからどちらの商人から物資を購入すれば、どの程度の価格差になるかと書き記していた。矢弾に鎧などはまだしも、毎日消費する食料や飼い葉などは馬鹿にならない。一カ月単位でもかなりの金額になり、半年・一年と時間を掛ければ恐ろしい金額になるだろう。ましてや城の再建にまで手を出したらどれほどの金殻が飛ぶのか判別が付

かない。

ゆえにできるだけ初期段階で北上し、兵は最小限に抑える浄化儀式が重要なのだ。南群全体を浄化してアンデッドが湧か無くなれば、後は中央から流れて来る個体だけを順次始末して行けばよい。

「城の再建とか一貴族が賄うには頭おかし過ぎる。大諸侯でも辛いぞコレ」

手元にある資料は先に受け取った緑林洞と、後から送ってもらった東の城だけだ。

洞窟を利用できる緑林洞ですら馬鹿にならない費用が掛かるのに、東の城になるとその比ではない。もちろん貴族が民を引き連れて、労役で材料を切り出し基本作業をやらせれば安くはなる。しかし食料は途中から自領だけでは賄えなくなるし、重要な部分は職人に発注する必要があるので凄まじい金額になるのだ。

はるか昔に南群地方の王様がやった時ですら、広大な領土に支えられた状態で数年から下手をすると十年以上掛けた筈である。それを他所から来た諸侯が代理でやったら、凄まじい予算になるのは目に見えていた。

「どれだけ費用が掛かるか判らない……だからこそ『最終目的』が重要なんだろうな」

過去の王侯貴族は、城に凄まじい金額が掛かろうとも最終目的に合致するならば許容した。

それは領土を守るためであり、新たに領土を得る為だ。作り上げた豊かな町並みを守るためであれば、非常時以外には使わない壁で覆って総構えの城郭すら築き上げる。

今回の北上作戦もみな同様の覚悟を決めているはずだ。小さくは目の前のアンデッド掃討で平穏な暮らしを、大きくは中央が馬鹿な考えを起こして粛清の軍勢を送って来ないように協力。実際には大事になる前に動くのだがちゃんと大義名分を用意している。

「しかし何を目標にすればみんな盛り上がるのかな？ 僕は新しい目標を見つけはしたけどさ」

北上作戦を取り仕切るだけで僕の株は上がる。

そこから青悟と大地母神の教会に功績を渡し、周辺を浄化すれば平和になって大助かり。戦費も抑えられるし、開拓地に付き物の協会とも仲良くなつて万々歳だ。しかしそれ以上……城を再建しろだとか、西領を奪回城だとか言われても困るのだ。

僕はまだ企画化のアイデアと職業訓練学校を作るというネタを推進すればよい。そこに九天玄女さまの名前を盛り込めば言う事はないのだ。しかし他の貴族たちはたまった物ではないだろう。

「その辺りの目的を適当に探しとかないとな。この際、南群を我が物に……とか言い出されても困るからね」

財政管理とかもやってる主流派は嫌な顔をして、必要な経費を払つて終わりである。

しかしその辺を知らない非主流派は『これだけ出費を強いられたのだから、領地を増やしても良いはず』とか言い出しかねない。かといつてその気にさせなければ、北上作戦にすら反対しかねないのが面倒なところである。

僕は目の前の書類と格闘しながら、これからの作業の中に他人の目的探しと言う馬鹿馬鹿しい内容を放り込むことにした。



それはそれとして温めたアイデアを実行に移すのは楽しい。

移動中に考え練り上げたものを、一つ一つ実験しながら有益な物に変えていく感動は説明しがたい。

僕は渋る剛盾を説得しながら規格化を進める事にした。

「同じ物を作れと言われてものう」

「剛盾さんにまですつと作れとは言わないよ。軌道に乗るまでの面白い所だけでいいからさ。その後は有益だったら使うくらいでいいさ」
面白い物を作りたい、見たことのない新しい物を作りたい。

ドワーフの剛盾が協力してくれるのはそんな理由だ。だからこそ同じ物を作り続けるという規格化に関しては渋られた。そこで規格という新しい概念が成立するまでの、最高に面白い部分のみに巻き込むことにしたのだ。

「そういうことならええが、何をすればええんじや？」

「まずはこの前に作った分銅があつたじゃない？ アレをもう少し大袈裟にして有効活用しようか。同じ重さの材料をいつでも持つてこれたら、色々作る時に楽でしょ？」

前に保全能力を元にした指南車モドキを使って分銅を作り上げた。同じ指標への方向を固定し続ける為、指定した重さの値を割り出すのに使えるのだ。もちろん何度も繰り返し、まったく同じ場合・近似値の場合・多い場合・少ない場合と言う、色々な針を用意しなければならなかったのだが。

しかしこの同じ重さの金属を用意するというのは有用なのである。最初に色々と用意すれば、その加工で『似たようなサイズ』に整える事が可能なのだから。

「こういう感じの基準を作るところから始めようと思うんだ。逆に職人が愛用するような道具はダメだね。あればつかりは職人ごとの手足にカスタマイズしないと」

「判つとるならええ。まずはそこからか……」

地面に文字と絵で軽く書いて説明する。

チェインメール用の鉄線を適当に作り、鋼鋏でそれを切れるようにする。すると誰でもチェインメールを作り易くなるし、職人が凝るべきは鋼鋏の使い易さとか、もつと良い鎧に力を注げばよい訳だ。分銅で同じ重さに釣り合う様にすればよいので、やるべきことは簡単である。

この行動には目安としての意味がある。実際には剣であるとかの方がよく造るし、道具で言えば釘の方が多い。しかし説明として判り易いのである。

「これが完成したら次は金の塊とか、鉄の塊かなあ。資材として管理する時とか、売り買いする時に使い易いからね。インゴットつてやつ」

「定型の金殻や鉄塊か。まあそうじゃろうのう」

この辺は鍛冶師たちには付き物の悩みだ。

用意した金とか材料がどこまでまともで、どこまで扱い易いかは重要である。最悪の場合、注文しておいた中身がクスということもある

ので、目利きから監視までちゃんとやっておく必要があるわけだ。

そんな感じでもまずは剛盾が納得してくれる部分から始めた。他の器具に関しても、ガラスの皿やら色々作り上げ、以前に興味を示したドワーフの薬師や錬金術師に送りつけて置く。もちろん規格が完全に整えば、黄三硯の妹経由で中央の魔導師に見せても良いだろう。

「終わったら最終的に移動可能な建物を作ってひとまず終わりかな？」

「なんじやいそれは」

「予めサイズと形状を固定した柱と板を用意してから、一気に組み上げるんだよ。これだと結束を解けば簡単に崩して移動可能だからね」

ちなみに剛盾は途中から夢中になった。

エポック・メイキングは面白いというか、同じ形の柱と板で色々とパズルのように組み立てるというのは、才能がある者にとつての遊びだからだ。特に凝ったのは組み上げを簡単にする為の穴と棒の組み合わせだったり、不要なはずの窪みを作りロープで固定し易くする工夫であった。

彼の本分は鍛冶師であり、その延長である貴金属の細工物である。木工関連はその辺の大工よりマシ程度で、その腕前と工夫がプレハブを作る工程で磨かれていくのが面白かったのだろう。

最終的に小屋と長屋の二つを何とか作れるようにして、規格化までの第一歩が終わった。

パラダイムシフト

● あれから一カ月と少々、上層部の会議に呼ばれて資料を提供。

アンデッドの巨人やら現在の総数と分布、今後の推移を示した南群の状況を記した物は既に提出してある。今回の焦点になっているのは見積もりが終わって、まともに北上作戦を行った場合や城の再建を任された場合の予算の予想を提出していた。

緋家の城で庭に面した広い部屋にて、居並ぶ出席者の顔が全員青いのは見物というべきだろうか。こうなるのが判っていたので、ちよつとした趣向も含めてカーテンを閉めさせていた。

「銀殿。……この数字は本当なのか？ 桁を一つ、いや二つ間違えているのでは？」

「ハハハ。おおかた商人が吹っ掛けた場合の数字でしょうよ。若い者にはありがちなことです」

「然り然り」

僕と親しい緋二広が口火を切ると、他の諸将も声を出し始める。

二広は嘘だと言って欲しいと願うような顔であり、連さま派というか反悌さまは空元気で文句ばかりを口に出している。そんな中で五堀老人が苦虫を噛み潰した顔なのが印象的だ。

田舎暮らしでは物々交換の差額を埋めるためにお金を使う。領主はまだ縁があるとはいえ、売り捌いた自領の産物で資金を得て、必要な物資を購入して後は活動用に貯金。場合によっては借財を返すという生活である。金貨数十枚から百数枚の暮らしをしてるのに、数万枚という予算を計上されても困るだろう。

「その辺りは御用商人たちにもご確認ください。おそらくは相場に寄ると返すはずですよ」

「……対策はあるのじゃろ？ こんな額はお家どころか南領全体でもありやせんぞ」

「二応は」

この数字は商人である南商豪に出させたものだ。

間違いなく彼は商人の論理で数字を弾き出し、長期化すると踏まえて相場の上の方で計算しているはずだ。だから対策自体はあるし、自分の領地から手弁当で駆けつけ消費し続ける事が可能ならば抑えることはできる。しかしその程度ではどうしようもない額なのだ。

だが先ほども言ったが金貨で数万枚という世界である。数百枚の無駄金を圧縮しても多寡が知れる誤差でしかない。

「聞かせてもらおうではないか。どうせそなたに任せるのだ。二羽。好きに言ってみるが良い」

「はい。僭越ながら述べさせていただきます」

ここで悌さまが僕に意見具申の機会をくれた。

既に周囲からは不満こそあれ若造だの経験不足だの文句を言い立てる者はいない。貴族と言えど戦鬪経験が豊富と言う訳でもなく、今回の調査も含めた総合成績では僕の方が上である人も多い。

後は僕がアンデッドの被害を止めたり、その功績で緋家の縁者になることが決まって居るのもあるだろう。もしかしたら八大とフェーデに勝つてることも影響してるのかな。

「中央は物資の販売を優先的に売ってやれとは言っても、安く売れとは言わないでしょう。有力な諸侯に普請をさせて力を削ぐのは国のバランスを保つ常套手段ではありませんから。その上で商人たちは、理屈をつけて常識範囲ギリギリで儲けようとするでしょう」

「奴らは命ではなく金勘定で暮らしておるからのう」
「さもありなん。まったく浅ましい」

五塀老人は事実を述べただけだが、周囲の連中は僕も含めて馬鹿にしている。

金勘定だの数值のやり取りで成り上がる事に不満があるのだろうか。しかし殿様商売で諸侯がこけるのは正直過ぎると言うべきだ。実際、中央のお偉いさんはその数字を覆い隠して南領を締め付けようとするのだから。

「ここで重要なのは行動に要する総合期間です。商人の計算はあくまで、我々が手持ちの食料を使い果たしている。その状態で何か月、下手をすれば何年も現地に張り付けられることを計算しているのです

から。よって重要なのは時間と言う訳です」

食料の無い軍勢に食料を高値で売る。

中央にも他の諸領にもあまり穀物は無い。だから高額で売ること
は当然だし、その額を出さないと諸領から余剰の穀物を引っ張って来
れないというのものもある。大量購入すると安くなるのは前世でも近代
のような大量生産社会になってからの話だった。

だから作戦のキーとしては時間にポイントを置かざるを得なかつ
た。仮に三年から五年掛かる作戦であれば、半年以内で決着を付けれ
ば良いのである。

「電撃的に戦果を挙げる、あるいは最低数の軍勢で勝利を納めてしま
えば良いのです。いえ、アンデッドが農閑期に増えるのであれば、速
攻で解放する方が安全確実ですらあります」

ここで新しい資料として二枚の紙を配る。

一枚目の紙は全軍で電撃的にアンデッドを掃討するパターンと、あ
るいは最小限の部隊で駆逐しつつ周囲がソレを助けるといったパター
ンの構図だ。

二枚目に用意したのはそうやって時間経過を抑えるか、精鋭部隊だ
けで行動して手持ちの食料を長持ちさせる場合の予算推移である。
食料を買わなければそもそも費用は対して掛からないし、その後、城
の再建を任されるとしても最低限の購入で済む。その場合は商人
だって相場から高すぎない程度に抑えるだろう。

「しかしそんなことが可能なのか？」

「可能だとして維持できるのか？ アンデッドは幾らでも湧くのだぞ
？」

「ですので浄化儀式によりアンデッド湧きを止めます」

アンデッド最大の脅威は疲れを知らず補給も要らず、それが幾らで
も湧くことである。

よって今回の北上作戦はかなり前からの段階で、浄化儀式を念頭に
入れている。術者というかコネに当てがあったので計算に入れるの
は当然の事だ。

「浄化の儀式……だと？」

「はい。既に大地母神の神殿は協力を約束しております。作戰概要の提案が通った時に根回しを行っております」

「何時の間に……」

莊園をもらう前から青悟に声を掛け、悌さまたちには最初の段階で計画を伝えている。

だから正確に言うとき大地母神の教団に対して、青悟が上層部との交渉を終わらせたのがこの間だと言うべきか。まあ青悟の方もゴーサインが出たから正式に了承を得ただけで、根回し自体はとくに終わらせていたのであろうけれど。

「費用は？ 莫大な寄進を要求されるのではないか？」

「その辺りも交渉しました。彼らは危険な矢面に立たず浄化したという名声を得て、危険に対しては我々が戦います。今後も我々に協力するならば彼らに儀式実行役を推薦し続ける。と言う事で話が付いております。大地母神の教団もこの国ではまだまだ肩身が狭いですからね」

「それならば……」

この国では魔物との戦いが激しかったために光の神の勢力の方が強い。

大地母神は悠長な開拓が可能になってからようやく勢力を伸ばし始めた為、身近であるがそれほど権益は強くないのである。それゆえに神職や神殿騎士などよりも伝道師の方が遥かに多く、青悟もその一人として右往左往している。

名声を挙げて上に行きたい青悟や、勢力を伸ばしたい大地母神の教団。彼らとの取引が上手く行ったのもそう言った事が背景にあった。少なくともアンデッド騒ぎに関しては常識以上の寄進を求められることはないだろう。

「これが前半部分。戦闘面に関する対処策です。持ち出す戦力を控えてローテーションなり物資提供を行えば、南領全体での出費は抑えられるはずですよ」

「次から次に現れるアンデッドさえおらねば確かに全軍は不要か」

一カ月に百・二百の消費だから問題なのだ。十ならば身内の供出で

何とかなる。

ローテーションを組む段階で戦力を出せない領地からは多めに食料なり物資を提供してもらい、南領全体で出兵組を支えれば良い。そうすれば余計な買い物をしないし、大量購入と言う無茶をしなければ相場が上がる事も無い。

もちろんこれでは片手落ち、あくまで出費抑制なのでもう一枚切り札がある。まあこのまま終わると、以前に出した計画書のままだしね。

「しかしそれでも城の再建は膨大ですぞ。領地を貰えるなら何年か掛けても回収できますが……」

「二羽。先ほど前半部分と申したな？」

「はい。それについては明朝、お目に掛ける資料を見れば一目瞭然かと」

残り半分に関して、いったんここでは伏せる。

会議をここで切り上げ、カーテンを広げて庭に何も無い事を殊更に印象付けた。今朝会議を始めた時と変わらないからこそ、ここで違和感を持つはずがない。

そして明朝までの時間を使い、やるべき事こそが後半部分への対策だった。

「馬鹿な……ここには何も無かったはずだ！」

「それも、建物が二つだと!？」

翌朝、プレハブをイメージして作り上げた家屋を立てておいた。

土台から弄るわけにはいかなかったので、河川沿いに家を建てる時の工法……平たい石の上に大黒柱を立てる方法を利用させてもらった。二軒も立てたのはインパクトの為である。

家一つならば人海戦術で強引に立てることも可能だが、二軒は流石に無理だ。

「なるほど。お主が木材を集めておったのはこの為ということかの」

「流石に五堀さんにはお見通しでしたか。ええ。事前に作っておいた『移築するための家屋』を分解して持ち込ませて頂きました。緋家へ

の献上分の資金を使う許可も得ておりますので、みなさんの所に今年の決算で分配させていただきます」

度肝を抜くために同じ形状にしてあるから気が付く者は気が付く。特に五堀老人は僕の領地と同じ河川を使っているのです、流域から集めている事を見つけ易いだろう。自分の領地だけではなく、周囲からも集めるような理由などは早々ないからね。

そして全く同じ建物にしたということは、一度の説明でその効果を判り易いからである。昨日からの短い時間で建設した……というか組み上げたこともまたそれに拍車を掛けている。

「これならば職人を呼ぶ期間も、城下町や施設を再建する時間も半減できます。同じ形状の建物ばかりなので味気はないのです、見張り塔や詰め所はもう少し工夫を凝らしたいですね」

「いやはや、これは恐れ入ったぞ。銀殿」

「言ってくだされれば東河川の組合からも木材を送りましたのに」

二広と七司が素直な感想を述べるが、それが追従ではないことは即座に判る。

居並ぶ諸将の全員が度肝を抜かれた顔をしており、前情報もあつて落ち着けた五堀老人には胆力があるように見える程だ。

真面目な話、規格化の企画自体はそれほど儲けは出ないし技術も発展しない。あくまでうちの領地と神様のブランド化が出来るくらいである。しかしこうやって意表を突く形で示せば、何か有効な事に使えるという面白さはあつた。

「中央の意向としては来年どこか再来年まで引つ張つて、アンデッドが溢れた状態で我々を使い倒すつもりでしょう。しかしこれから半年で南群を電撃攻略し、派遣されてきた軍監が到着するまでに一夜城を立ててしまえば対応も変わるのではないでしょうか」

「放置すれば南群を丸ごと取られかねない。余計な事はするなと言うであろうな」

悌さまには事前に計画を全部伝えてあるが、諸将の対応を見て満足したようだ。

中央に人質として出され、軽んじられた男が自分の見出した男の動

きで情勢が変わっていくのを見るのは面白いだろう。まあ僕としては警戒されて領地を取り上げられないように、悌さまへの尊敬へと周囲の感情を挿げ替えたい所であった。

いずれにせよ、方針と諸将の気持ちを一つにまとめたところで北上作戦を始める事になったのである。

作戦立案とその始動

● 北上作戦に関して最も紛糾したのは、方針による部隊規模の決定だ。

全軍で早期掃討を測るのと、精鋭部隊による広域運動戦。どちらが妥当でどちらがより損害が少ないかとモメ続けた。

形として見栄えが良く手っ取り早いのは前者であり、費用負担と言う意味でも経験則の蓄積と言う意味でも安全確実なのは後者であった。民兵なんか幾らいても大して役に立たないというのが原因であるのだが。

「気持ちには判るが一度くらいは全軍を動かす必要がある。前例主義者どもを納得させねばならぬからな。もちろん中央対策だけではないよ」

温厚な侯爵さんをしてブチ切れたモードにさせている。

国元でどれだけ官僚に文句を言われたのか想像できようものだ。このまま悩み続けたらナイスミドルになる数年後には、髪は残らず白くなっているに違いあるまい。

理論的にそんな馬鹿な事をやったら凄まじい金が飛ぶと判っているのに、体面とか中央とか身内の頑固者を理解させるのに無意味な金を使うとなれば判らなくも無かった。これが人間同士の戦争ならば、数で押すことに意味はあるわけだが魔物相手な上に、頭の悪いアンデッド相手と成れば無駄でしかない。

「公称一万五千。国元で治安活動や輸送の護衛に回す兵を含めて実働一万強……というのはいかがでしょうか？ 最初の一撃以外は五千も要りませんが」

「そうするしかなかろうな」

仕方ないので妥協案でいくことになった。

南領の総力を挙げたという設定で軍を動かさないと体面に関わるどころか、中央の意向を無視して適当にやったことになるというのが官僚陣の言い分である。一理あるので軍団規模だけはガワを維持し、

実質的な中抜きをして内情を整える。

まあ治安維持やら輸送部隊に兵を回すって事は、南領が安全で平和な国になるって事で悪い話じゃないのだ。問題は人数の配分やら、前線に出たがる貴族や逆に国元に残りたがる貴族の調整がすつごい面倒くさいだけで。

「皆には迷惑をかける」

「我々はまだ。書面を貰って討議するだけです」

「僕の方もみなさんにご理解いただけてるので満足ですよ」

三徹目に突入したが、上層部に理解があるので幸いだ。

戦争をするのに補給の大変さや費用の問題を理解してもらえないなんて中々ないだろう。青くなるまで脅した甲斐があるという物だ。重要なのはここから身内で喧嘩をしないとか、手元にある数字がおかしな変化を見せないように見張る事だろう。

陰謀なんかなくなつて我の強い連中はいがみあうし、検品なんかまともにできないから不正だつて当たり前前の様に蔓延る。

「序盤の山場を越えたら残る懸念事項はアンデッド巨人戦くらいです。あとは惰性になりますので、いかに中央の使者を抑えるかと身内の錆を落とすかになるかと」

「我が家からは弟を巡行使に派遣しましょう」

「連殿か。優秀な若者と聞いておる。よしなに頼むぞ」

危険なのは巨大なアンデッドのみ。問題があるとすれば人間関係だけだ。

ここで悌さまは弟の連さまを思い切つて重用することにした。これまで無役であったが、領地の監察官として緋家を中心に南領を巡回させる役目を与えたのだ。

これは地位の無い弟に権力を与えるという危険性を持ちながら、太つ腹な部分を見せることで、緋家を立派に切り盛りしているという証明になる。それを判つて居るから総大将である侯爵さんも役目への就任を認めた。

「使者の方はなんとかしよう。銀殿にはすまぬが、なんぞ面白い料理でも出せんかね。結婚式に用意して居たような」

「予定している料理であれば直ぐにでも。そうでない場合は一から料理を説明せねばなりませんので、お時間をいただけたらと」

「うちの料理人にまた出向する様に言いつけておこう」

前に鶏の塩釜焼きと川魚の奉書焼きを試食したことがある。

あの時に緋家の料理人にレシピを教えて何分か作らせたのだが、その料理を悌さまは侯爵さんにも食べさせたらしい。相談も含めて何日か逗留するということで、地方では珍しい料理として提供したそうだ。

その辺りを悌さまから聞いた侯爵さんは、ナチュラルに飯ネタを要求して来た。暇な時ならば幾らでも構わないのだが、徹夜続きの時に止めて欲しいものである。

● 後は細部調整なので侯爵さんには下がってもらって悌さまと詰め
の作業だ。

援軍に送ってもらう予定の紅包さまが来ない限りは、紅家の人には暫く出番はない。南領の本隊が出張するような事態にはならない筈だ。「ともあれこの計画が上手く行けば、補給線が整い出費は現実的な物となります。中央が経済戦と社会戦を挑んでいたとしても何とかなるでしょう」

「経済戦に社会戦か。聞き慣れぬが言い当て妙だな」

戦いは戦闘だけではなく宣戦布告した敵にのみ行う訳でもない。

現代の用語に近いが、悌さまは都暮らしが長いので普通に反応してくれる。あつちでは戦の話よりも陰謀の方が当たり前だろうし、そこまですぐにいかなくともマウンツの取り合いとかよくある事と思われる。

「まったく魔物が残っておるのに身内と争わねばならぬとは」

「国体の組織維持としては正しいのかもしれませんが、締めあげられる側としてはたまったものではありませんね。今は計画だけは万全な話を可能な限り現実の物としたい所です」

諸侯の中で最も早く立ち直ったのは南領だった。

そこを牽制するだけならばまだ我慢できるのだが、意のままに動かして自領土の保全を図りたいという外戚の考えが透けて見える。国

の為に全領主が立ち上がるならまだしも、上手くやったからと言う理由でそんな風に操られるのは御免である。

悌さまは都暮らしが長くとも南領の人間なので、僕と大し考えは変わらない筈だ。重々しく領いて内情を確認して来た。

「その話だが……問題ないのだな？」

「現状では理論的に負けないところまではこぎつけました。後はいかに確実に戦力を送り届け、いかに数以外の追加要素を積み上げるかですわね」

軍師格としては『やれとおっしゃるならば』とか格好つけたいが……。

生憎とそこまで確約できるような自信はない。それに冷徹に色々と実行できる軍師サマというものは最後に信用度の問題で切られるのがオチである。自分としては傲慢であるよりも謙虚に親しみを持たれたいところだ。

それはそれとして主君の為に勝利を奪い取るのが軍師の役目だ。僕としてはデータを積み上げて安心感を持つておこう。

「アンデッド湧きの問題は何度も繰り返し返した通りの持久力です。疲れを覚えぬ戦力の補充が容易いのに食料を必要としない。戦う上でこれ以上ない性質をもっておりますが、戦闘力は低くなるという欠点を持っています」

「まず補給を叩く為に浄化儀式を行う。その意義は判るのだ」

何度も説明したし、頭が良いので悌さまにアンデッドの害を説く必要はあまりない。

ここで口にしたのはあくまで話の呼び水だ。もちろん徹夜続きで頭がボーっとしているのもあるだろう。それらを振り切って本題に入る。

重要なのは計画は計画に過ぎず、数字は所詮カタログスペックではないことである。

「問題は数を集められぬ事と、巨人だな。どうなっている？」

「まずは数の方から。初動段階での数の問題に際しては、南領の総軍を動かすという建前のおかげで助かりました。当家は五千の兵を集

めることは可能でも能力込みで維持することは叶いません。どうにか必要数の二千というところでしたので」

前に言ったと思うが一つの村は人口300人ほどが一般的。

家を家を屋根で繋いだアーケード構造にしたり、一群全体に支邑込みで発展させてようやく500人というところだろうか？ 緋家は開拓村が多い上に南領の出口を固めていることもあり、アンデッドの害をもろに受けて平均200人を超える程度でしかない。さらに金銭面や食料も酷いものだった。過去形なので回復中だが、それでも全快な筈がない。

一つの村から徴収できる戦力は平時で十数名、限度いっぱい徴募して数十名から百名というのが限界だった。もちろん精鋭であるはずがない。

「以前の作戦通りに兵員輸送車両で精鋭を先行させて場所を確保し、投石器や荷車で前線を構築。そこへ徐々に部隊を送り込んで、儀式に必要な安全圏を確保します。移動途中に天幕内でアンデッドが湧かない限りは、この初動段階で敗北することはないでしょう」

「そこは良い。では巨大なアンデッドはいかがする？ 橙家の近くに居る個体が移動せぬとは限らぬ。いや、増えぬとも限らぬのだ」

最大の問題である無限の体力と無限湧きは対処できる。

ここまでは籠城しながら戦うために、野戦築城すれば何とでも勝算を積み上げる事が出来た。しかし強力な個体に対して、どう対処するかをまだ説明していなかったのを思い出した。

侯爵さんは紅包さま合わせて三人の豪傑をぶつけます……といったら信じてたよな。まあ息子が強いと知ってるとか、それが三人も居れば無敵だと思えるのだろう。しかし悌さまはそうも行かない。身近な二広が地味に強いタイプなので、戦闘力が判り難いというのもあるだろう。

「ジャイアントゾンビは肉体強度を残している可能性はありますので、アンデッド最大の欠点である知性が無いという事を利用します。例を挙げると、囷には100%引つ掛かりますから」

「なるほど。場所を誘導して罠に嵌めるといふ事か」

僕は頷きながら、掌に手刀をクロスさせた。

巨人の強大な攻撃力を、予め用意した受けとめ易い場所に促すだけでも違う。だいたい攻撃力が高い相手と馬鹿正直に数で殴り合ったら死体の山である。もちろん余裕があればもう幾つか仕込めれば問題ないだろう。

片方の掌を握り込む仕草にしつつ、今度は近くにあつた色々な物を集める。インク壺を油に見立て、羊皮紙を削るためのナイフを専門の大刀に見立てる。まあもつと楽な方法があるのだが。

「アンデッドの長所にして欠点の中には、総身が体力に変換されているという物があります。骨身も内臓も筋肉も全てが体力に直結しており、異常にタフネスで急所が存在しない。これは一見、長所に見えます」

「確かにな。……続ける」

自分でも同じ状況ならばどう戦術を組むのか考え始めたのだろう。

魔物というものは情報が無ければ脅威だが、情報を集めてしまえばそれほど恐ろしい存在でもない。特にアンデッドは弱点山盛りで、知性を残した上位の個体以外はむしろ弱い部類でしかない。

ゆえに突くべきはその欠点。知性が無い事を利用して、守り易く攻撃し易い場所に誘導すればよい。突如現れたのであれば、時間を稼いで攻撃準備を整え一方的に攻撃すれば簡単に倒せてしまう。

「内臓も筋肉も体力と化している。これは逆にいえば、筋力のバネを活かし魔力を活かした集中的な攻撃が出来ないという事。出し抜く知恵も無く畏ごと武者を潰す膂力もありません。叶うならば足を払って縫い留め、固定してでも倒してしましましょう。もちろんそこまでいかずとも殴り続ければいつか倒せます」

そして知性が無いからこそ、致命的な罠に嵌っても逃げ出そうとは思わないのだ。

アンデッドゆえに眠りはしないが、最終的にはガリバーに挑む小人の様にロープで括りつけるのも良いだろう。巨人であれば筋力で千切ったり、ジャンプして抜ける可能性もある。しかし大きなアンデッドと化しているのであれば、時間を掛ければ地面に杭を打ちそこに紐

を繋げて罨とするのは難しくも無かった。

こうして作戦運用を整えたことで、集まって来る木材を加工しつつ農閑期を待って作戦を始動。もちろん相手も農閑期に活性化することから、一部の味方はその前に出発させたのである。

勝つよりも先に未来の布石を

● 今回の北上作戦で全面的に得をした者が居るとしたら、それは商人だ。

どんなに儉約しようが大量の物資が動き、少しでもかき集めようとするなら買い取るしかない。普段ならば手前勝手な文句を付けられて支払わねぬ可能性もあろうが、中央から文句を付けられないためにそういうのは軒並み禁止している。

そして何より行動をスムーズに、少しでも行き来の日程を削減するために、事前に街道を広げたり盗賊や魔物の類を討伐してあった。

「君にとつて我が世の春じゃない？」

「まあな。渋ちんの連中もたんまり出してくれたぜ」

南商豪は事前に僕経由で北上作戦の計画を知っていた。

紛れも無いインサイダー取引だが、どのタイミングでどの物資が必要になって何時値上がりするか予想し易く、今後に何を売りに行けば良いのかおおよそ把握している。もちろん詳細を伝えたりはしないが、事前計画を知って居れば幾らでも予想はつこう。

そう……まるで紅家や緋家に入入りする御用商人のように。

「まさか見積もりの代金に金貨じゃなくて情報を要求するとはね。戦鬪での価値は覚えてたけど、商売にも使える事は忘れてた」

「それはぐ愁傷様。とはいえ商人の真似をして儲けるつもりは無かつたんだろ？そこは負けとけよ。こっちは教えてくれなくても知ってる範囲で儲けたし、出し抜かれるよりは良いだろう」

この男には正直な部分と狡い部分がある。

僕が納得しなくても勝手に情報を抜けると言った上で、取引に応じさせて正確な情報を持つて行つた。それだけならば『騙される方が悪い』とやらなかつた分だけ信用を置いても良い。いかし問題なのは、御用商人の仲間入りをしたフリをしたことだ。

そして中小の商人を巻き込んで自分の商会に組み入れ、それなりの物資を確保すると共にその看板を現実に近づけたことだ。兵を出せ

ない領主に街道整備の仕事を割り振ったので、おそらくは『お前が使う道も太くさせてやるよ』とゼネコン政治家の様に囁いたに違いあるまい。

「僕としてはこっちの名前を勝手に出さなきゃいいけどね。妙な誤解をされても困るから」

「欲がねえなあ。あんたの名前を売り込むチャンスだと思えばいいのに。どうせ万が一にも負けねえ戦いなんだろう？　そこは投資だと思っとけよ」

言葉巧みで自尊心をくすぐって来るが大通連と同じ人種だと思えば油断はできない。

気が付いたら中央の政界・財界へも喧嘩を売って、南領発の陰謀だとか挑戦状とかを勝手に売りかねなかった。僕にその気はなくとも、この男は持てるチャンスを最大限に使うだろう。釘を刺しておくにこしたことはない。

まあ暴走する時は釘を刺してもダメだろうが、禁じ手だと言われたことくらいは守るタイプに見えた。言われなかったら何をやっても良いというタイプにも見えるのだが。

「アンデッド湧きが活性化するのは農閑期。その前に先発隊を送り出したから負けはないよ。君の投資者たちにも安心してもらっても良い……」

「何だよ。歯切れが悪いな足りないモノでもあるのか？」

「現状では十分。むしろこの先を勝手にやって良いのか悩んでてね」

こういって何だが、これっぽっちも負ける気などない。

野戦築城に十分なだけの車両を付けて、言う事を聞いてくれる領主の兵を中心に送り込んでいる。勝手に戦線を広げられない限りは負ける要素がないのだ。その辺りの懸念事項を考慮し、戦うための戦力ではなく現地で防衛戦を築く為の戦力を用意した。

指揮官として選んだ領主と補佐の騎士も、実直で余計な行動をしないタイプを選んでもらっている。作戦指示書にも『予定外の事態があれば引いて良い』と書き込んでるので、ジャイアントゾンビが出て問題ないはずである。

「先？ 浄化儀式に必要な物は教団が用意するし、南方鎮台は中央の連中が決めるって言っただけだ。」

「滅びてる領主家の話さ。部下にその出身者が居てね。血縁の人間が生きていたら復興を支援してやれないかと相談を受けてはいるんだ。まあ本人が望んで、かつ中央が認めればの話だけだ。」

勝つのが当然であれば考えることはその先になる。

浄化儀式でアンデッド湧きを抑えるという事は伝えてあるが、大地母神の教団は既に安全地帯で待機している。紅家の主催する南領本隊が南群入りする頃にはすべて終わってる予定になっていた。本隊の役目はむしろ統治と地方掃討用だと言っても良い。

「中央は判るとして本人の問題って？ 普通は貴族に戻してやるっていったら喜ばないか？」

「もし君が何処かの国の王侯貴族の末息子だったとして、後継者候補にしてやるから商売なんか放っておけ。何だったら懇意にしている商人が貰ってやっても良いそうさ。とでも言われて嬉しいかい？」

「あー。完全に納得したわ」

別にこいつが王侯貴族だと疑っているわけではないが判り易い仮定だろう。

せつかく商売が軌道に乗って面白いところなのに、そんなもの不要だから貴族にしてやる。今までの成功も何もかも捨てて、自分を捨てた環境に戻ってこい。そんな言い方をされたら腹が立つはずだ。それでなくとも本が好きとか、絵を描いて居たいとか本人の趣味は千差万別なのだから。

「別に滅びた貴族家全部を復興させたいわけでも、本人のやりたいことに遠慮したいわけでもないんだよ。ただ今回は部下たちの頼みであつち方面を調べたこともアンデッドの巨人を見つけた一因だからね。少しくらいは配慮してもバチは当たらないだろう？」

「そういう事なら任せとけよ。中央で商売するついでに調べといてやるよ。もちろん本人の希望込みでな」

最初は行動を起こす言い訳に橙家を使った。

蓋を開けてみると北上作戦に際して他の貴族家の一員だった……

という触れ込みの縁者が多数参陣を申し出た。中には小なりとも部隊を避難先で揃えた者も居るが、殆どの者は本当に縁戚なのかすら疑わしい者ばかりだ。

要するにその辺の人物像を調べ、同時に彼らの要請もあって『旅を奔した』という建前造りである。橙家の話をしたのもアリバイ工作の一環でありつつ、調査可能ならば縁者であるという裏を取りたいのもあった。

「妙に協力的だね。そりゃ調べてくれるなら、復興できたら彼らの御用商人として推薦はするけどさ」

「それもあるが……買い取ってくれるんだろ？ その滅びた連中の借用書。今なら捨て値で転がってる筈だからな」

「チャッカリしてるよ」

魔物に滅ぼされた家に価値などない。

元は貴族だったというのは市井に置いてステータスになりはするが、中央にとって意味などなきない。つまりは南群一帯が復興したとして、彼らの領地が戻るとは限らないのだ。もちろん縁者が生きており、功績を上げれば可能性は高まるが……。

いずれにせよ彼らが作った借用書は現時点でただのゴミである。仮に貴族に復帰できたとして、前の家が由緒正しくない場合は『無関係の家です』ということで踏み倒すだろう。南商豪はその証文を捨て値で買い取り、貴族家へ付ける首輪代わりに僕らに買い取りをさせようとしていると思われた。

「保証は二つ。第一に中央が復領を認めずとも一定額までは保証する。第二に可能としても誰が認められるか分からないけれど、総合額での相談を認める。代わりに全部が全部買い取れないことだけは覚えておいて」

「それでいい。その辺りで適当に博打を打つさ」

おそらくだが今回の顛末として、南群に所属する領主復領をそこそこ認めるだろう。

中央が制御しようとする前に北上して、三つの城を確保してアンデッドが出ない様に浄化の儀式まで済ませて、中央との境に警備の関

所か何かを置いて街道を守る。そこで戦闘終了宣言を出されると、南領に余裕が残ってしまうのだ。

城は全て中央の直下に置いて代官を派遣し、代わりに南領へ縁のある貴族の復興支援をやらせる。領地は一切渡さないが、遠慮のある貴族家が復活すれば権勢は増す。その代わりに大規模な出費が付いて回るという訳だ。

「……先に言っておくけど、こつちで名前を挙げようとする馬鹿の証文は要らないから。多分、際限が無くなる。予算だって無限にあるわけじゃないしね」

「型に嵌めちまった方が楽だと思いがね。まあ依頼主がそれでいいならそうするさ」

もちろん幾人かの貴族家は復帰させず、中央なり西の貴族をねじ込んで来るだろう。

その中には借金してでも賄賂を上層部に送り、あるいは見栄えのする戦力を送り込もうとするだろう。賄賂の影響よりもこちらに監視網を置くという意味であちこちに少しづつ送られると思われた。そこまでは予想できるが、彼らが負う借金までは面倒見切れない。

上手く行けば首根っこを押さえられるだろうけれど、スパイと言うだけならばただの行商人なり傭兵で良いのだ。あえてそこまでする意味があるとも思えなかった。場合によっては居直って貸し倒される可能性だってあるのだから。

そうして南商豪を見送り僕らも南群へ進撃。問題なく南方鎮台に入場して北上作戦の半分を終えようとしていた。

魂鎮めの祀り

再び訪れた南方鎮台。その様子はかなり変わって居た。

破壊された壁と壁の間を腰までの高さの柵で繋いでいる。これならばアンデッドを止めることができるし、万が一誰かが向こう側に取り残されても乗り超える事ができるのが大きかった。木材を省エネしながら籠城策を行うための工夫である。

そして何より……人々の反応がまるで違っていたのだ。

「双羽双羽。なんだかスツゴイ歓迎されてるね」

「僕らじゃなくて侯爵さんや悌さま達だろうけどね。まあ南領総軍が歓迎されてるなら良い事さ」

去年の今ごろは大量のアンデッド湧きで大変だったはずだ。

それが蓋を開けてみれば南領軍の先遣隊がバリケードを築き、周辺警備までやってくれている。詳しくは伝えていない筈だが、侯爵さん率いる本隊が到着すればさらに良くなると、何となく態度で判るだろう。

大抵の住民は周辺の掃討を南領軍が本腰を入れて行う……とでも思っているはずだ。まさかこれからお祭りが始まるなどとは思っても居まい。

「二羽殿。悌さまが采配を任せると」

「承知しましたとお伝えください。代官の到着を待つて全てを終わらせませす」

側仕えの緋七司が僕の馬車に伝令に来た。

近衛にやらせる仕事ではないが、人だかりの中で特別感を出すためだろう。僕も慣れない軍師モードに突入する為、馬車を前面に出して先発隊の元に急いだ。

それなりの屋敷を侯爵さんや悌さまの宿として借り受け、その周囲に天幕を張っている。僕の馬車はガラス窓があるので特徴的であるため、先発隊を率いる大柄な男に迎え入れられた。

「八大殿にも恙なく」

「……軍師殿の到着をお待ちしておりましたぞ。俺ではなく、主に代官殿がですね」

先遣隊の隊長はかつてフェーデで隠居させた緋八大だった。

貴族家の当主としては引退した身だが、そのまま村に居座っていたら彼の意見を優先されてしまう。そのために八大は緋家預かりの身となり……今回は汚名返上のチャンスと言う訳だ。

とはいえ活躍しても騎士としての身分が上がるだけで当主としての復帰は許さない。その事を知って居るからこそ、八大も嫌味を混ぜて口にしたのだろう。逆説的に考えれば、緋家の行動に対して影響力が増したとも思ってくればよいのだが。まあ息子が成人するまでは無理か。

「代官殿が？ お会いしたいとは思ってましたが、向こうからとは意外ですね」

「勝手にみつともない物を作るなど。もつとみつともない状態で壁を放置したのはあちらでしょうがね。……ゴホン。まあ用事の方はいつアンデッド退治の出征を行うのかと何度も問うておられました」

幾つか想像できるのが代官の役目と権限だ。

本当に壁を邪魔だと思っているならば強権で先発隊を追い出せばよい。しかしソレをやってないというのは、南領総軍のやることに口出し出来ないのだろう。あるいは出来たとしても、南方鎮台の都市機能を守る上で仕方なく認めているということだ。

おそらくは『南領を上手く使って南群の治安を取り戻せ。南の連中が疲弊すれば疲弊するだけ良い』と言う程度の指令しか受けていないのではないだろうか？南領総軍をコキ使いたいのが、南方鎮台の治安も大事で中途半端な決断しかできないということだろう。

「それはそれは。……苦勞をおかけしました。申し訳ありませんがこれからお祭りの準備に取り掛からなければなりません。三日掛かるので四日目には終わらせるとでもお伝えください」

「……まったく意地の悪い。全部伝えてしまえばその場で居なくなるでしょうに」

「新しい指令を貰って来ないならそうするんですけどね」

八大も何処かのタイミングで計画の全容を知ったらしい。

まあ最初から聞いていれば色々考えられるが、いきなり聞けば良い反応はすまい。だが彼は騎士として、そして現地でアンデッドと戦う身として計画の重要性は理解しているようだ。苦笑いを浮かべながらも頷きを返した。

何とか代官が中央と連絡を取って、こちらの計画を全部伝えられては困るのだ。こちらに抱き込めるなら話は別だが、代官は所詮中央から派遣された役人に過ぎない。それを期待するのは間違いだらう。

「銀殿。こちら南方鎮台の代官殿です。面会を求められておりますが」

「一息吐いたところなので構いませんよ。祭りの準備も概ね終わりました。あとは大地母神の教団に運営を任せるのみですから」

翌日になり、適度な所で面会することにした。

どうせ指示するだけなのだから、直ぐにでも会えみたいな嫌味が何度も飛んできた。しかしながら日程の問題でこれは重要なのだ。あまりにも急がせては教団の方も嫌な顔をするし、もし中央から茶々入れがあつた場合は代役を立てねばならない。

幸いにも青悟が昇進して今回の儀式を執り行うらしく全ては計画通りに進んでいると喜んでいた。なおこの儀式をうちの神様がやるのは不可能である。神としての格がまだあがって居ない上に、九天玄女様にとって死体というのは人間の姿の一形態に過ぎない。知性あるアンデッドを尸解仙と呼ぶ文化圏の神様にはやれというのがお門違いだろう。

「どういうことですか？ 民は不安に怯え苦しんでおるのです。この街だけではありませんぞ！ その事を思えば勝利を願う宴などせずに疾く蹴散らして行くべきでしょうに」

「ああ、申し訳ありません。まさにその為の準備なのです。我々はアンデッドを蹴散らしに来たのではなく、その被害を終わらせに来たのですから」

「何を……？」

挨拶も適当に終わらせ、さっさと行けと怒鳴っていた代官が黙った。

まあ判らないよね。判らないように偽装もしてきたのだから仕方あるまい。表向きは宴の準備でもしていたように見えるだろう。金持ちの上級貴族ならば本当に数日掛けてお祭り騒ぎをするだろう。

だがこれは祭りというよりは、祀りなのだ。アンデッドの迷える魂を鎮め、二度と蘇ってくれるなど祀る為の祭り。

「アンデッド湧きは例年の害でしょう？　ですから浄化の儀式を行って二度と行わないようにいたします。ご安心ください。儀式を終えれば速やかに東の城を奪還に向かいますとも」

「なっ……浄化の……儀式を？」

考えもしなかったとか、『どうしてソレを思いつかなかったのか』という表情だ。

アンデッド湧きは例年の悩みであり、この代官も頭を抱えていたはずだ。民衆を守り経済を守り、どうにかしろという中央の要求。南領を動かせと言う権限違いの無茶振り。そういう問題を片付けるには確かに浄化儀式と言うのは有効なのだ。

ただその為には『ここからここまで綺麗にします』という指標と、『儀式を行っている間も大丈夫です』という保証の二つが無ければならない。加えて何処かの教団へのコネクションが無ければ難しい。大きな都市を預かる代官とはいえ思いつけなくて当然なのだ。

「無制限に湧く増援などなければこの八大、いえ当家の武将らにとってアンデッドなど物の数ではありませぬ。安んじてお待ちあれ」

「は、はは。そうですね。しかし、しかしですぞ。それならば西の城や、中央方面にも儀式を行うのでしょうか？」

「やって良いのであれば行いますとも」

八大が胸を叩いてわざとらしくアピールすると代官も一度落ち着いて新しい火種を探し始めた。

この南方鎮台が安全になるのであれば彼の落ち度はなくなる。それならばオマケの命令である『南領を疲弊させろ』という命令に従お

うと思っただのだろう。

可哀そうだがこの流れは想定済みだ。ゆえに続く言葉のやり取りもほぼ決まって居た。

「良いも何も、中央からの御指示でしように。浄化でも何でもされればよろしかろう！」

「西の城は間違いなく取り戻しましょう。その儀式も。さて……同じ言葉を大神殿の方々の前でおっしゃれますか？ それで良ければ勝手に中央でも行いましょう。無理ならば当面は関所を作って、徐々に安全圏を広げる事になりまう」

「あ……ひ、光の……」

この国は魔物との戦いが長かったので光の神殿の勢力が強い。

開拓地が多く、大地母神の勢力が比較的強い南方面ならば問題ないのだ。しかし光の神の教団の影響が強い中央で、勝手に他所の教団がやって良いとは言えない。だからこそ大地母神の教団とも『今後に出征と、同じ儀式を続ける場合』という限定で彼らを守り、影響を広める手助けを組む同盟関係にあった。

「いかがですか？ まずは難しい事を考えずにパーっと酒でも飲まれては？ 嗜まれない場合は菓子や煙草も用意しております。南の次は東、そして中央。その時には問題が無くなりますとも」

「そうですね……そうですね」

と言う訳で代官さんは一足先に宴会へ突入。

中央へ指示を請う時間を遅らせる事にする。後は東の城なり西の城へ軍監が来た時に合わせて、プレハブによる即席復興を見せつければ南部における戦闘の終息宣言を出しても問題あるまい。

そうやって準備を整え、アンデツドの害を鎮める為の祀りを紅家が南領総大将として主催し、大地母神の教団が青悟の元で執り行う。

『みなもの者！ 長く待たせてすまない。これより死者を弔う祀りを始めよう。これが終われば次の城でも同様に行く。もちろんその次の城でもだ！ これにより、南部一帯よりアンデツドの害は消え去る！』

「おお！！」

バルコニーから侯爵さんが顔を出し、良く通る声で盛り上げる。

もちろんサクラは何人も配置しているが総大将のお声掛かりであり、自然と周囲が熱狂するのも当然だ。悌さまを始めとした緋家や他の南領貴族たちも駆けつけている。総軍として動くのはこれから一週間ほどだろう。しかしそれだけの時間があれば十分であるし、それ以上の時間をかければ予算がひっ迫するというお寒い状況だった。

まずは無事にここまでこぎつけた事に喜び、次は東の城……いや橙家の周囲まで移動した巨人アンデッドを討ち取って喜びたいものである。

解放戦の終了

● 東の境にある城を取り戻すのはそれほど難しくはなかった。

荷車を壁にした幌馬車戦術で壁を作り、投石器を使いながらゆつくりと前進。途中で飛ばした岩を拾って使い回す余裕すらあるほどである。

南方鎮台と違って無人であったこともあつて城に入り込んでいる無数のアンデッドたちも、壁で分断し投石器で削った後で戦えば脅威になる個体など存在しなかった。

「バリケードを設営次第に大地母神の教団を呼び、我々は南下して南群東部を解放します。道中に巨人のアンデッドが居るコースは最後に回して、さつたと残りを攻略してしましましょう」

「はっ！」

去年まで騎士たちが苦労したアンデッドを容易く攻略した為か、彼らの反応が変わつて来た。

この後は大地母神の教団が浄化の祀りを行い、来年以降はもう苦労することはないのだ。仮に全てを浄化できずとも、万鹿柵を超える程の大群が現れることは二度とない。

南領の兵士たちが奮い立ち、彼らを率いる騎士たちが僕の伝えた任務を忠実に果たそうとするのも当然なのかもしれない。

「どういうことですか？ 巨人のアンデッドは恐ろしいとでも？」

速やかに討伐されるべきだと思いますが」

「あれは攻城兵器の様なものですよ、軍監殿。正面から挑むのではなく効率的に処理すべきです」

ゆつくりと確実に攻略を進めたこともあり、中央から派遣されてきた軍監が間に合った。

色々と文句を付けて来るのだが、彼は監視・報告するのが役目なので作戦に対する感想しか出せない。少なくとも中央と南領の実力差が大きく開いていない以上は、唯唯諾諾と従うような相手ではない。

攻城兵器に例えた時、彼は少しだけ考えた後で再び口を開く。攻城

兵器に例えた意味を解釈する為だろうが、理解したからと言って黙る様では派遣されてきた意味がないので続ける気だろう。

「最後に全軍で総掛かりにし、身動きできない所を倒すと？ 南領の兵は勇猛果敢と聞いておりましたが、勘違いだったようですね」

「相手が知性のある魔族ならば正面から挑むこともあつたでしょうね。しかし知性の無いアンデッドという状態を、データとして情報を分けてみれば面白い事が判ります。あれらは目で見ないので隠れても無駄ですが、目で見ていないので自分以上の遠距離攻撃を理解できないのです」

「数に任せて袋叩きにするのかと問うてきたので、違うと言いつ返しにしました。」

「だいたいそんなことをしたら被害はでるし、全軍を動員している時間が掛かってしょうがない。橙家の周辺にいる貴族家の領地を解放したら、兵士たちは西の城に向かわせるつもりなのだ。」

「さて、ここで敵の動きを考えてみよう。仮に巨人のアンデッドは50mレーダーの付いた攻城兵器だと思つて欲しい。50m以内ならばどこに隠れても見つけることができるが、60m以上離れると魔法知覚で感知できないのである。まあ実際にはもう少し距離はあると思うが、概ねこんな存在だ。」

「最終段階で兵士は不要です。木を切り倒して射線を切り開き、山の稜線越しに投石器で攻撃します。もちろん道中にロープやバリケードで罫を作りますけれどね」

「なっ……。まさか……」

「せっかくなので地面にどういう光景かを描いて見せた。」

「先回りした一帯が木を伐採し射界を確保。投石器を使つても邪魔をせず、万が一見つかったとしても問題ない高さの位置から射撃する。投石器というものは山なり弾道で飛ぶ岩なのだ。地形効果を利用して何が悪かろう。」

「そ、それでは活躍をしたとは報告できませんぞ？」

「どうぞ。僕の役目は彼ら騎士と兵士の一人を誰一人として欠ける事なく故郷へ送り返す事。そして南領の役目は南群一帯を人類の領域

に居り戻す……来年度以降のアンデッドを出さない事ですから」

軍監の役目は主に二つある。戦場を監視し不道徳と功績を報告する事だ。

臆病風に吹かれて何もしなかったとか、盗賊の様に何もかも徴発したなどと讒言することが第一の恐ろしさだ。しかしこれは任務を既に果たしつつあり、南群東部は壊滅しているので徴発しようもない。つまりは問題視されるようなことはなかった。

そして功績に関して僕には不要である。そもそも南領の誰かが大活躍をしたとして、中央が褒章として南群に領地をくれるはずもない。もし現時点で橙家の縁者が見つかって復興させるのであれば、ここで活躍する意味があったのだろうけれど。

「ひ、一人も？ 騎士だけではなく兵士も？」

「はい。この度の北上……南群解放作戦でただの一人も戦死者は出しておりません。おそらく最後までそうなると思います。せっかくですから報告書と計上した全数値を確認してみますか？」

さすがに驚いた軍監にこれまでの報告書を見せた。

面白いのは負傷者と戦死者の数を見て一度、掛かった費用の代価累積を見て二度驚いたことだ。まあ代価であって金貨じゃないからそのままの数値にはならないけど、馬鹿みみたいな数字だもんな。

何しろ現段階で掛かった費用は金貨一万を既に超えている。経理畑ではない彼には驚きの数字であったのだろう。

「……確かに戦死者は居られぬようだ。しかし随分と金を握らせたようですね」

「何分、こちらは領内ではありませんので。それに住民も居ませんかから食料を徴発する訳にもいきませんしね。最終的に掛かる費用を考えると頭が痛いです」

札東で頬を叩く（意識）のかと聞かれたら、そうするしかないと答えるしかない。

領地ではないから穀物が生えていても収穫する訳にはいかず、壊滅した領地の解放なのだから住民から手に入れることも無理なのだ。必然的に領内から輸送させるか、商人から買い取るしかない。

まあ実際には出兵しない領主に任せた食料の代金やら木材に、領内巡検とか街道整備の費用も入れてるんだけどね。各地の貴族が受け持った労働の代価として、そのくらいになるといふ計算なのだ。

「この資料、頂いても？」

「どのみち後で提出しますが構いませんよ。他国や魔族と戦争しているわけではありませんから防諜の必要もないですしね」

言い訳用の資料なので余計な事は書いていない。

あくまで各領主がまともに出兵したら食料の合計が幾らほどで、手持ちが幾ら。それらを商人から買った場合の予想値として記入し、最終的な費用は最後に計算して確認することになる。

ただし南領の総軍本部や貴族たちが代価をどういう形で支払うとか、その代価の代わりに何をやって居るかなどは記載してはいない。最終的に辻褃合わせをして、相場の高いレートで買わないということも教えてやる必要は……少なくとも今はない。

「同じ物を三通用意しています。もし紛失された場合は南領総軍に映しを頼まれると良いかと。流石に最新のデータは僕の所にしかありませんが」

「そうさせていただきますましょう」

こうして南群東部域も解放。山が一つハゲ掛かったのも記載。

この地の領主が決まったら適当な埋め合わせを代価で支払うという旨を記し、やはり一定期間ごとに総軍へ送っておいた。

ちなみに巨人のアンデッドは三人の豪傑たちが訓練代わりにトドメを刺した。ある程度削つても能力が落ちないのがアンデッドであり、そこまで不利になつても撤退しないのが特徴だ。大通連はともかくあまり戦えない紅包さまは、愉しんで体を動かしていたようだ。

そして……

「ぎ、銀殿!?! あれは一体、どうしてあんな物が……私の目がおかしくなったのか」

「何って東の境にあったお城ですよ。復旧まではやれという指示でしたので、直すように指示しておきました」

橙家の辺りまで到達し、巨人のアンデッドを倒して直帰。

一週間もかかってない筈だが、その間に城が復旧しているのが驚きだったのだろう。特に家屋が立ち並び、今にでも住民や兵士が入城できそうなのが特徴である。

まあプレハブ建築を知らない人間が見たら驚くよね。この時代は天幕の方が簡単なのだが、木材と違って布の方が調達が難しいので仕方がない。

「馬鹿な。正味五日も掛かって居ないはず……」

「ですから壁も木材です。石の壁を建てるなら流石に時間が掛かりますが、その辺はご勘弁ください。群雄割拠の時代と違ってこの辺りは城の必要な区域ではありませんから、そこまでやってしまうのは躊躇われました」

まるで必要だったら石の壁でも建てた。

そう言わんばかりの表情で出来る限りハツタリを効かせて見せる。もちろんこんな短期間でやるのは無理だが、時間と材料さえあればコンクリ製の壁だったら行けそうな気もする。

それはそれとして、追撃の準備も必要だろう。侯爵さんに頼まれた食事を色々と指示しないといけない。レシピは教えてあるが、演出とかも知った方が良さだろうから。

「既に侯爵さまが御待ちの様です。今宵は久しぶりに夕餉の晚餐を用意しております。田舎料理ですがぜひお楽しみください」

「はは。ご冗談を楽しみにしておりますよ」

最初にやってきた時は、二種類のフライを用意した。

片方は肉に衣をまぶしてあげ、もう片方はすり潰して練り物にしてから衣をまぶしてあげた。それに銀の食器を組み合わせ、毒殺がないと見せつけておいたのである。

今回用意したのは色違いの寒天ゼリーをガラスの器に入れて、下から明かりを灯して幻灯機にしたものだ。愉しんでくれると良いのだが。

戦後処理

● 北上作戦は無事に終わったので、マイナス部分の穴埋めになる。

前世で言えば元寇みたいなものだ。無事にアンデッドを退け浄化したからといって、領地が増えるわけでもない。基本的に金は出るばかり、街道整備などで金が落ちるのはもつと先だろう。あくまで翌年以降のマイナスが生じなくなるだけなのだ。

なお僕の領地は特に赤字を出してないが、別口の問題が起きていた。どうやら南群地域の解放時に軍監の前でやり過ぎてしまったらしい。

「貸し付けと臨時の市場で息を吐いたと思ったら、今度は加領を『せよ』ですか?」

「ああ。功績拔群につき南領のいずれかで行うべし。統治の権につき何処に与えるかは口を挟まず……とはあるがな。まったく自分の懐は痛まないからと好きに言ってくる」

所領のマイナスを埋めるべく、河川組合の帳簿を弄って奔走。

利用料やら献金も底を叩き、これ以上は年度末の利用料支払いに影響が出るところまでを無償で貸し付けた。それで利子付きの借財を返済してもらい、百貨店じみた臨時の合同市場で各領地の物を売り捌き『困るほどではない』『頭を下げて願う程ではない』というところまで持ち直したのだ。

そんな段階で中央政府から名指しで功績を称える書状が届いたそうである。

「無視はできないのですか?」

「できると思うか? 言っておくが与えたことにして報告のみを送るのも駄目だぞ。懐の痛い連中は不満そうな顔を浮かべていたが、武官連中はみな渋々ながら納得するほどの戦績だからな。……まさか本当に死者無しを成し遂げるとは」

面倒くさいのは中央からの命令だという事だ。

また信賞必罰の見地から、ナニ力を渡さないわけにはいかないのだ

ろう。余っている土地がないわけではないが、そこは未開の地であったり後継ともども家が絶えて継承権が浮いているだけの領地だ。親族でもない僕が持つて行ったら文句しかでないだろう。

しかし『こう来たか』というのが素直な気持ちで、むしろ中央のやり口には感心するところだった。完全に文句のつけようがない言い訳を用意したら、完全過ぎるとホメ殺しに来たのだ。こういう所を見ると中央の陰謀の手管は凄いなと思う。

「どう思う？」

「忠節を割くには良い手です。何より大義名分は揃ってますから。与えぬわけには行かず、かといって素直に与えるわけにもいかず。与えたとして不満が出るのは当然、与えられた方も経営が苦しくなりますから」

「それを判っているなら話し易いか」

前世では豊臣秀吉が使った手だ。

子飼いの部下が致命的に少なく、名目上は従えただけの大名家が多かったので、引き抜きと同時に仲違いを狙ったのである。大名家の重臣を優遇し、太っ腹な所を見せつつその大名家でのバランスを崩しに掛かった。

当面の問題は土地よりも人間関係の方だろう。悋さまも判っているようで、その面に関しては僕もありがたかった。

「紅家からイザと成れば海沿いの地を……と声を掛けられたがそうもいかん。両家の仲がこじれかねんな。侯爵殿がこの国の……。いや、それは不敬だ止めておこう」

「飛び地はダメですか。そこは素直に残念です」

侯爵家は海に面しているので、イザとなれば未開地を確保できる。それこそ水棲種族と交渉して、どこかの島を領地として借り受けることもできるだろう。そこで両者の間柄を取り持つて、三角貿易でもすれば利益が出る目算はあった。

だが侯爵家とも僕が契約する形になり、両方に宙ぶらりんで仕えることになったら面倒なのだ。それこそ侯爵さんが王さまにでもならないと力関係的に難しいのだろう。

「八の村はどうだ？ 現時点で代官として統治して居るから無駄は出まい」

「その場合は八大さんの家系から文句が出ませんか？」

「傍さまから最初に提示された土地は代官として管理している八の村だった。」

「確かにこの面だけを挙げるならば統治に齟齬はないし、新しく大きな出費も無い。だがこの件には幾つか問題があった。」

「緋八大はあくまで隠居だけであり、特に次の領主に関して指定はないという条件だったこと。先ほどもあった他の貴族が赤字なのに、僕だけ得するという自体は丸で変わってない事など色々ある。」

「それでもない。奴の娘に子供を産ませてその家系に継がせれば良い。なんなら息子さんの方は別の家に入れ、何処かのタイミングで血を合わせても良いしな」

「最初はおくまで隠居だけという条件だったのです。今後の約定を結ぶ時に齟齬が出るような気がします。選ぶとしても、他に方策がない時といたしませぬか？」

「ここまで来ると貴族家の管理としては妥協範囲なのだろう。」

「確かに妾として八大の娘さんを娶り、その子に子供を産ませてしまうのは手だ。次期領主である息子さんの方は父親と一緒に騎士として修業を積ませ、今は不在になっただけでどこかの領主に据えたと約束する。確かにこの方法ならば文句は出ないし、次代かその次で婚姻を結べば彼の家は元より大きい勢力を持てるだろう。」

「しかしコレには僕らの事情をサッパリ無視することになる。ハッキリいって今の僕はハーレムを目指したいとは思えない。八大だつて騙されたと憤慨するだろう。」

「(多分アレだなー。僕が征服とかやったり、強引に拡大策とか愉しんでたらその一環で嬉々として領いてたんだらうな)」

「八大の娘は特に良くも悪くもない子だし、三人目の奥さんとかそういうのは面倒だ。」

「文学の上でならハーレムは浪漫かもしれないが、一々機嫌を取って婚家にも配慮するとか面倒でしかない。美人でも同じ顔を見続けた

ら飽きるからといって、とつかえひつかえ女の子を相手するという奴の気が知れない。まあそれこそ秀吉みたいに天下人なら違うのかもしれないけどね。

それはそれとしてこの件は是非断らなければならない。双葉はまた機嫌を悪くするだろうし、家出した先で恋人とか見つけられても困る。

「ではどうする?」

「まず滅びた家や当主の絶えた家は除きましようか。それこそ苦勞された他の領主の方も望まれているでしょう」

領地ごとアンデッドに滅ぼされても親戚は居る。

今回の出兵で領地など得られてないが、功績と出費を勘案して、何人かの領主には領地を増やすべきだろう。中には騎士を格上げして荘園主の上級騎士も出ると思われる。その人たちに既存の領地は取っておくべきなのだ。

不要だとは思うのだけど、こうしてみると爵位をくれる方が良かった気もするな。まあそれだところちがモメないから選ばなかったんだろうけど。

「領地以外でか? 中央も他の家臣も納得させるような方策があるのか?」

「三つありますが、一つ目は加領に匹敵する俸給ですね。今回の一件で各領主は出征に置ける出費の労苦を把握しました。今後のモデルケースとして、利益の出易い俸給による加増を行う。もし領地の方が良い場合は、何時で振り替えると但し書きを付けるのです」

要するに騎士や官僚が俸給を貰うような感じだが、領地と並行することに意味がある。

今までの領地をその採算で納め続け、領主としての義務を行っていない。そこに対して純資金を加算するので利益はとても出易いし、領地も持ち続けるのでその辺の体面も問題ないのだ。

本当を言えば領地管理は寄り親である伯爵家が一元化し、領主たちも上級官僚として全部俸給での管理の方が良いのだろうけどね。今は封建社会なので無理だろう。

「なるほど。組合からの上納金と相殺ということか。まあ領地に振り替える事を望めるならば、一応は問題ないのかな。……他にはどんなアイデアがある？」

「二つ目の案は、係争地や不入を条件としている土地を領地とします。もちろん相手方に最大限の配慮を行う事を前提に」

最初にエルフやドワーフと取引したのと似ているが、同じような例は人間同士でもある。

例えば紅家との境や、僕の所の式の村と八大の村の中間などだ。どちらが先に入植したのか分からず、相手の土地との区分が不明瞭な部分になる。どちらの領地とも言えず、上手く囲い込んだ方が得をするので睨み合っている場所というのは結構あった。中には緋家が一時召し上げて、抗争を阻んでいる場所も存在する。

その何処かを貰って、係争地の両側へ僕が配慮する形で便宜を図るわけである。既に二つの村を領有しているので、領土欲がないから出来る話でも合った。

「では二つの目の案を聞かせてもらってから判断するでしょう」

「二つ目によく似ていますが『利益が上がるはずと言われて久しい場所』です。実際には運用が難しかったり、場所自体は良くとも難関の克服ができずに匙を投げた場所になりますね。場合によっては多めに頂いて、利益が出たら一部を返上するというのはいかがでしょうか？」

最後は要するに開拓地候補でありながら入植できなかつた場所になる。

思ったよりも鉱石の取れなかつた鉱山であったり、平坦だが湿地帯で開墾し難い場所など。場所自体は有望であるという情報があり、見方を変えれば確かに有望なのだから文句は出ない。周囲の領主も困難を極めて放り出した土地だと知っているので、やつかみなどはあまりないはずだ。

しかしそれでは中央が文句を言いそうなので、土地自体は多めに貰っておく。その上で開墾に成功して利益が出たら、その部分は取り上げるといふ風にも見えるのでやはりやつかみは少ないのである。

この辺は僕があまり領地にこだわってないからこそ出来る決断だろうと自画自賛しておこう。

「ほう？・と言う事はある程度の算段が付いているという事か？」

「むしろ方法を思いついたので、試したいというのが先行して居ますね。今回の件が無ければ困窮している領主や商家を探していたとも思います」

前世にある技術や文物を実現できても、使えるとは限らない。

むしろ意味がなく、剛盾などに作ってもらったが『何の役に立つのだ？』と首を傾げられることもある。同時に『これは面白い技術だ。しかし近場に使える所が無いな！』というアイデアもあった。そういうのを活かして好奇心を満足させつつ、うちの神様の福音だという事にして広めたいものである。

先ほどの鉱山や湿地帯の例だと、鉱山ならばドワーフに『人間が気が付いてない鉱石』『人間では掘るのが難しい鉱脈』の開発を頼めばいい。湿地帯ならば水田にしてみたり、むしろ水路だけ作って建物メイソンというのもアリだろう。特定の魔法が必要ななら、その術が使える人を探すというのも良い。

「その三つ……当初の案も含めて四つか。その中から良い物を選ぶとしよう」

こうして僕は緋家に置ける開拓長官みみたいな立場に収まった。

色んなアイデアを試せるのは楽しいが、不要な婚礼策を回避できて万々歳である。

第六章

やる事と情報のトリアージ

● 開拓長官的なポジションに収まったものの、当面は情報を集めつつ様子見をする事にした。

新領地(仮)は無駄に広いので中央への言い訳としては十分だし、馬鹿みたいに広いからこそ情報が十分ではない。当然ながら何も生産して居ないので、収支が黒字になるのは遙か先だ。

まずは情報を集めてトリアージをせねば。こういう時は優先度を決めてから処理する方が早い。単純に人力や予算の問題で不可能な場所ならゴリ押しすれば良い。魔法や技術などの手段であつたりモンスターであればその対処手段を用意すれば良い。何もなければ周囲の領地の産物と泡得て、何かに活かせるように現地で確認しなければならぬだろう。

「と、言う訳で。お預けになつてる第一回収穫祭を目標として頑張ります!」

「おおー!」

アンデッド湧きは農閑期に活性化するので必然的にその前後で出撃した。

一部の精銳はその前に移動し、数を揃えたい諸侯は農作業が終わつてから兵を出したというわけだ。僕の村は強い兵こそいないが、言う事を聞いてキビキビ動ける『使える者』は多い。またお祭りする暇はなんかないのでお預けだったのである。

もつとも領主層や商人などの希望者が眺めていく展示会を除いて、それほど大した事はしない。今年の祝辞と来年の祈願を行い、飲み食いして終わりである。

「お牛さまめ! 年貢の納め時なんだから!」

「二頭だけだよ? 来年以降も殖やさないといけないから勝手に締めたらだめだからね双葉」

お牛さまというのは肉用に肥育している牛である。

前に一部の動物はあえて豊富な穀物を与えていると言ったが、その中でも牛は食っちゃ寝の生活をさせてある。ずぼらで面倒くさがりな双葉には、自分が夢見て叶えられない生活をしているので羨ましいのだろう。

ちなみにお牛さまが動いていないのは単純に牛がやる労働を大トカゲにやらせているせいである。

(だいたい、あの大きなトカゲも微妙なんだよなあ。馬を飼う環境が無いエルフなら別なんだろうけど)

以前に捕まえて飼いならした六本脚の大トカゲ。

馬の六割くらいの移動力しかないが、より高い機動力と体力を持っているのだ。馬鍬や馬鋤を引かせるにはピッタリなので、無理に牛である必要はなかった。もっとも牛ほどパワーが無くてしかも牛乳を出さないのも、他に使えるかと聞かれたら微妙な生き物だ。

今は牛馬の代わりになるから資金を使わなくても良いのだが、エルフとの交易で何かと交換する必要があるのでコストを掛けて居るという意味でも本当に利益が出ているか不明な点が多かった。

(まあそれでもトロッコよりマシか。苦勞して開発した割りに使い道が無かったもんな。早く開拓地で良い場所見つけないと)

開拓長官に収まる時に、悌さまにアイデアがあると云ったのは嘘ではない。

自分の領地で使うつもりだったトロッコなのだが……壱の村と弐の村を繋ぐだけならば、舟の方が早いのだ。じゃあ鉞山に住むドワーフはと言うと……彼らは力強く少々の荷運びでは疲れもしない上、大量の鉞石を手に入れても薪の方が十分じゃないから意味がない。

少なくとも炭鉞の方も大規模に見つかって大量生産にでも踏み切るか、広範囲の工事でもしなければ使い道が無かった。

●
そういう訳でいよいよ収穫祭に向けて動き出す。

本村である壱の村でやるのが正しいのだろうか防衛上の問題もあるし、弐の村の方が区切りが広くて見易く三圃式農業と大規模農業を

組み合わせたモデルとなるためにこちらでやることにした。長屋造りの建物もあるから、お客を通し易いしね。

「そうだ！ 二羽二羽、アレやろうよアレ！ ゼリーでピカーってやつ」

「確認するけどゼリーが食べたいの？ それとも幻灯機がみたいの？」

「両方！」

双葉がねだっているのは中央の軍監を驚かすために用意した料理である。

硝子の器に寒天ゼリーを入れて、下から明かりで照らすことで幻灯機……要するにプロジェクターみたいな光景を演出できる。軍監も驚いていたが双葉も気に入ったようだ。

水棲種族から手に入れた寒天らしき物はまだあるので問題ないのだが、問題は味付けの方である。あの時は軍中でもあり甘いデザートではなくスープとしての味付けだったのだが……。

（甘い御菓子としての使い道があると教えるべきかな？ ……でもなあ。砂糖は他の物に使いたいんだよね。紅梓さんを調査に送り出す時にプリン風寒天を作って在庫が減ったもんな）

水棲種族と付き合い出し、エルフにサトウキビを育ててもらっている。

しかし砂糖を運んでもらうにしても限りはあるし、エルフの方は遙かに先である。その辺りを知っている青柳は、アイコンタクトをするに即座に首を振っていた。

なお後日、この時のアイコンタクトを浮気かと勘違いされ、誤解を解くのに甘いゼリーを双葉の為に用意することになった。

「剛盾さん。頼んでる蒸留装置と攪拌機は作れそう？」

「片方だけなら何とかなりそうじゃが……時にお主、もし蒸留装置と似たような物があると言ったらどうするかの？」

「大前提として技術の転売はしないし、元はドワーフ製だと記述。もちろん新開発した改良技術はそちらに公開するよ。エルフ製の薬草樽や果実樽を仕入れたいなら応相談。僕を經由しないなら口は出さ

ない」

「よし売った」

ドワーフやエルフの凄い所はやはり意思の統一性である。

彼らは同族が勝手に秘匿技術を流出させたりはしないし、何かの交渉時に使えろと判断したら秘かに連絡を取り合って、交渉窓口にその許可を出している。

僕が蒸留装置を作りたいと言っても、剛盾が指示する範囲だけで協力し裏で上と話し合っていたのだろう。そして技術公開しても元が取れると判断したので、今回の話を出したのだろう。

「やっぱり蒸留技術あったんだね。持ってそうな気はしたんだ」

「しかし果実の樽はともかく薬草樽か」

「僕の知ってる知識の中に別の酒を詰めた樽を使って、独特な香り付けをするって技法があるんだよ。瓶詰めは良くも悪くも日光以外に影響ないからね。アルコールは醸造を繰り返すと味気なくなるから、香り付けに使うそうだよ」

ドワーフは酒が好きだし、鍛冶や細工の技術レベルが高い。

醸造技術は初歩だけなら紀元前からあったらしいし、ドワーフならば持って居そうな気はしたのだ。木材は鍛冶に使うので余ってないから、瓶詰めだろうと予想は出来た。

なので予め彼らが食いつきそうなネタは探していたのである。

「まあええ。じゃが攪拌機の方は何に使うんじゃ？ 棒でかき回せば十分じゃろう」

「山ほど回す時には向かないよ。それに……比重が違う物を分離する時に、同じ機構を使い回せるからね」

攪拌機は縦回転と横回転を組み合わせる、初歩の手回し機構である。

絡繰り仕掛けとしては簡単な物なので専門家でもない剛盾でも作れることは可能だ。もっと楽をしようと歯車を増やすならば専門家のドワーフでも呼ばないとならないが。

そう言いながら冷温室とでも言うべき部屋から卵を回収に行った。そこは複数の部屋と壁で囲まれた中心部分で、温度の変化が少なく

なっている。青柳が温度低下の魔法を使えるので、保全能力と組み合わせればそこそこ温度を保てる場所であった。

「色々混ぜり合った物として判り易いのはヤツパリ卵かな？　これは網で何とかなるけど、卵黄まで崩れてると別けるのは苦勞するよね？」

「そうじゃのう。時間を掛ければそのうち分離すると思うが」

次に卵をグチャグチャに混ぜ、前に作ったガラスの器に投入。

武器のスリングを取り出し、ゆっくりとグルグルと回転させていった。すると比重の差でグチャグチャに混ぜた卵黄と卵白が分離し始める。この作業が面倒で場所を食うのだが、攪拌機の先を取り換え混ぜる為の棒ではなく、容れ物を固定する形にすればこんな面倒な事は要らなくなるのだ。

真面目な話、剛盾を説得するためにやってるけど僕の目的は大層な事はないので、言い訳用でもある。腕が疲れるまで手で回したくないんだよね。

「気温が高くなるまで放置すると危険つてのもある。食事用だったら食事用の問題が、薬品なら材料がね。それに歯車による機構で回すと安定するでしょ？」

「ううむ。そう言われると確かにそうじゃのう。錬金術師に相談して重要そうなら時間を増やすとしよう」

攪拌機やその応用である遠心分離機を使うメリットは『他人』である。

自分がやる時は目で見て詳細を把握すれば良いが、弟子やら徒弟だとそうはいかない。剛盾もその辺は判っているので、こういう言い方をすれば話を聞いてくれるのだ。

そして判ったと思うが、彼は自分が面白いと思う事を重視する。せっかくの余暇ともなれば鍛冶や細工を行い、あるいは自分が未熟な事の修練に充てている。ゲームの中登場人物と違って説得が重要なのである。

「……話し終わった？　今日はその卵で何を作るの？」

「あー。せっかくだし攪拌機がある時のメリットを示しておこうか。

収穫祭のメインにも関わって来るしね」

「メイン!? なになに? それってお菓子? それとも主菜!」

退屈そうにしていた双葉がジーンと卵を見つめる。

本当ならば最後まで隠し通し、サプライズしたいところだがそうもいくまい。ならばこの機にお披露目と行こう。

まずは分離した卵黄を脇にのけ、卵を追加してある程度の卵白だけを用意した。

「卵黄だけの料理が美味しくなるって茶碗蒸しやプリンで説明したよね? でも卵白が余るともつたいたないので別の使い道をします。どのくらい混ぜるかと言うと、軽く二百回くらいは混ぜるかな。聞いてみるけどやってって言ったらやってみたい?」

「絶対にイヤ」

真顔で答える双葉だが、もし味わったら作ってくれと頻りに言うだろう。

御菓子は好きだが、とてもとても面倒くさがりなのである。少なくともこういう事をやらせるのは絶対に無理だ。とりあえず簡単な変化だけ見せれば良いので、泡立ってメレンゲを用意しつつ、暖炉にある炭の中を弄って木片を放り込み火を点け直した。

転生するまでは知らなかったのだが、水を掛けずに灰の中に放置すると、炭火が残り易いのだ。コンロの無い時代の家庭の知恵というやつである。

「時間が無いからコレで済ませるけど、卵白は攪拌する回数で別の料理に使えるんだよ。茶碗蒸しとかプリンならそんなに要らないけどね」

「それって寒天ゼリーってやつだよ? スープじゃなくて卵白を使った料理なの?」

「うん。泡雪っていうやつね。寒天じゃなくてゼラチンってのを使えば別の料理になるはずだけど、僕は知らないからコレしか作れないけど」

寒天は水棲種族が知ってたから良いのだが、ゼラチンは作り方が判らない。

なのでメレンゲに寒天を混ぜ、砂糖……は貴重なので蜂蜜を使う事にした。このまま肉に塗ればゼリー寄せみたいになるはずだが……今はお菓子用だ。

火に掛けた水と寒天とメレンゲを混ぜる。後は冷ませば泡雪と言おうお菓子の出来上がりである。

「この泡雪には卵白を使ったけど、収穫祭のメインに使うやつは牛の乳から作るから最低でも二百とか三百とか混ぜないといけない。お願いされる度にそんな事はやってれないし、他の料理人にやらせる時は目安の回数を教えにといけないからね」

そう、僕が作りたいのは生クリームである。

正確には生クリームを使ったウエディングケーキと言うべきか。収穫祭のメインとして白く飾り立てたケーキを双葉と一緒にカットするのだ。きつと一番大きな場所が欲しいというだろうけどね。

ちなみに剛盾はこの後で攪拌機を作ってくれたのだが、一番最初の任務は酒を混ぜる事であったとき。

収穫祭に向けて

● 収穫祭に向けて実行する事はそう多くはない。

今更ジタバタしても仕方がないし、何人かの貴族や商人に紹介状を送ったら、後は今までの積上げをより深くより見易くするだけだ。

まずは弐の村にある船着き場を川の両岸に拡張して浚渫。片方は船溜まりで、もう片方はロータリーだ。コンクリート製の底を作つて張つてあるので、木材などを積み下ろす時も足を踏ん張れるようになっていている。

「クレーンもどきも完成したし、倉庫代わりの長屋を展示会の会場にした……こんなもんかなあ」

滑車を使つたクレーンで荷物の楽々積み下ろし。

こちらの設置が後になつたのだが、コンクリ性の支柱で右往左往できるようにしたため、コンクリート製の床を足場にする意味がなくなつたと言われてしまった。

別々の技術なのだが……実際の作業者にとっては苦労した分だけ残念なのだろう。気持ちは判るがクレーンの完成はドワーフ技術者が増えたおかげなので、いつになるか判らなかつたのだ。

「閘門の方はどうだい？ 問題ないなら水を溜めて水位を上げるけどさ」

「問題ない。やっつくれ」

村の中に水路を作つて、単純な堀していると説明したことがある。それも浚渫して全体を拡張し、深さ広さの両方を本格的に見せてみた。展示会を行う弐の村は大規模農業と三圃式農業の実験場でもあるので、村を三分割する大きな堀だ。もちろん舟が通らない時には通行用の板を渡す。しかしいつも深い堀にしていたら水が冷え、植物の育ちが悪くなってしまう。

そこで用意したのは水門で水の流入を堰き止めて、水の溜め具合を調整できる閘門を作つてみた。これならば必要なだけ水路に水を流せるし、高い位置にある水路から水を適度に抜けば浅く広いことで温

かい状態を保てるのである。

「二羽二羽！ お舟が浮いたよ！」

「はしゃがないの双葉。おっこちたらズブ濡れで風邪ひいちゃうよ」
「そしたらおふる入るからいーもーん」

水路を浚渫したことで小舟ならば自在に動かせるようになった。

川から乗り換えで楽ちんだが、本来は農業用で荷物を運ぶ為である。それほど大きくないから動き回ると転覆しないまでも乗ってる人間は落ち易いのだ。

そして今回、展示会用に労役を増やした代わりにこちらにも設置したのがお風呂である。浚渫すると泥だらけになる上、体が冷えるから直ぐに温める必要があるからだ。もし水路をもっと浚渫して、コンクリ製の側溝を張るならばまだまだ重要だろう。

「お疲れ様。問題ないようだしお風呂入って来なよ」

「ほうじやのう。先にいたただかせてもらおうか。いくぞい」
「おう」

ドワーフの技術者と人足たちはこないだの取引でやって来た。

蒸留技術を貰って代価に色々渡すことになったのだが、その後に攪拌機が評価されたのだ。そして攪拌機は結局、遠心分離機とは別物になった。剛盾さんはあまり意味が無いと言っていたが、やはり安定した速度で分離・攪拌の両方をこなせることに意味があると錬金術師や薬師たちが判断したそうだ。

その辺の技術を煮詰める為とクレーンの改良もしたかったので、様々な技術者と人足を呼んでもらい、攪拌機・遠心分離機・クレーンの完成品はドワーフの方でも使うという事で折り合いが付いたのである。

「ところでのう。コンベアって何に使うんじや？」

「ほうじやほうじや。水路と水車を組み合わせたら臼がまわる様に、板の床が動くのは判るんじやが、ちつとも意味が分からんぞ」

「トロッコと一緒に数が増えないと駄目かな。残念だけど今は意味がない技術だね」

人足たちは風呂に行ったが、技術者たちに僕は捕まってしまった。

勢いで提案してしまったベルトならぬ板のコンベアーだが……大量生産しないと意味がないんだよね。エスカレーターにするほどパワーは出ないし、これに関しては明らかに時期尚早だった。今のところは農作物を勝手に移動させて、離れたところで受け取るとか、そのまま白で引く程度にしか役立たないだろう。

少数で何かを為せるのは凄いなのだが、別に人員に困って居ないので意味がないのだ。手回し式の小型エレベーターで見張り塔の屋上に矢弾や料理を運ぶのは、意味があると受け入れられたのでアイデアの活かし方次第なのかもしれない。

(家庭内手工業と分業を組み合わせて難民対策までは思い付いたんだけどなあ……。肝心の材料が山ほど無ければ意味がないんだよね)
元はといえば難民対策で考えた手法だった。

何も出来ないのが難民とよく言われるけれど、分業させてしまえば難民でも覚えられる仕事があると思ったのだ。例として服を挙げれば、一グループ目が布を切り、二グループはボタンや飾りを用意し、三グループ目がそれを決まった場所に縫い付ける。こういうことを思いつけば『第一次産業革命万歳！』と僕がヒヤッハーするのも仕方ないだろう。

しかし残念なことにソレをするだけの材料が無かった。生糸でそんな事はさせられないし、そもそも天蚕の数があまり殖やせてない。じゃあ綿花はというと、この辺では採れないのか数が少ないので試せないのである。麻とか木綿でも探してもらおうところからスタートである。

(収穫祭までに何かを作るのはもう無理だな。農業用の見本、職人用の見本、商人用の見本。それらが全て集まることで領主用の見本……にも成ってるのか?)

何かを用意できるとしても、小物を増やしてもお土産を用意する程度だ。

そこまでの意味はないし、意味があるとしたら紅家や緋家から直系の誰かが遊びに来る時くらいである。そう言う場合は先触れの使者が来るので、今のところ無理に用意する必要はない。万が一来てし

まったら在庫の中から渡せばよいだろう。

別に目立つ必要も何かを誇る気も無いが、緋家全体の経済事情がよろしくないのでは何かしら産業を盛り立てる必要があった。

（この辺の技術を見た商人が買ってくれるとか、他の領主が真似して生産力が上がってくれば来年以降が楽になるんだけどなあ）

今のところ淡い期待でしかないのが辛い。

個人としては充実しているが、緋家の軍師的なポジションに収まっ
てしまったのでこのままだと来年以降が困るのだ。逆に誰かが食
いついてくれると非常に楽になる。

もちろん前世と違って特許なんか存在しないので、商人が形だけパ
クってこちらの商品価値を下げ、領主層は何も感じずに過ごして終わ
りと言う可能性もゼロではなかった。

● 残りの時間で可能なのは、後は料理関連くらいだろう。

メインの料理は色々考えられるが、屋台にも少々お高目の物を比較
的安価に置いてある。まあ人形焼きとかグラノーラの類で、冒険者だ
とか行商人が試しに買う程度でしかないだろうが。

となれば後は食事関連に集中するべきだが、こちらもスープを煮詰
めるくらいしかやる事がない。冷蔵庫なんかないし忒の村には氷室
すら存在しない。だから当日になって焼いたり煮込んだりするくら
いなのだ。一部の例外は存在するのだが。

「内臓を洗い終わったそうですよ。本当にあんなグロい物を食べるん
すか？」

「それは普段から食べ慣れてないせいだよ。多分だけど豚の内臓だっ
たら煮込みで食べてると思うけどね」

牛を捌いてある程度の分類に分けた。

肥育を始めて一年目だし部位の味わいなんか意味はないだろう。
ひとまず肉は壺の村にある氷室で熟成させて、内臓は中身を洗ってか
ら寸断し、一部はホルモン鍋として一部は油で揚げて干し肉加工であ
る。

しかし面白いのは農民である緋六耕が拒絶感を示している事だ。

豚の内臓の煮込みとかは奥さんが作ったのを食べて居ると思うので、牛の無数にある胃袋とか見てゲテモノだという先入観でもあるのだろうか。

（この様子だと牛の丸焼きを祭りの時に食べたりはしなかったのかな？ まあ傭兵になったくらいだし、恵まれた村じゃなかった可能性はあるな。牛が貴重な時期に飛び出た可能性はあるけど）

五の数字までは町になっており、六からは開拓村だ。

緋五堀老人の領地が町で、六耕の故郷が村だからそう思うのだろうがおそらくはそれほど勘違いではない筈だ。北上作戦に出て来た兵士もそれほど多くなかったし、垢ぬけている様子はなかったものね。ともあれせっかくの貴重なお肉を無駄にする事はない。煮込み料理や干し肉にして、村人全員で頂くべきだろう。

「骨の方は？」

「一応は骨だけで煮込んでます。豚の方と比べてはみまずけど、量が無いですからね。味比べ程度になると思いますよ」

牛は貴重なのであまり数を捌かない。

お客には揚げ物やら豚と鳥のハンバーグなどを振舞う事もあり、牛は村のみんなで食べる予定だ。お貴族様に食べさせなくても良いのですか？ みたいな事を言われるが、この辺は鼻屑して悪い事もあるまい。まあ牛が貴重だから何人来るかも判らない客に出したくないのもあるが。

もし客に出すとしたらもう何年か肥育を続けてからだろう。物々交換で牛の数を増やし、分母も分子も多く成れば乳牛も肉牛も殖やせるのだ。そうすれば潰した乳牛をみんなで食べて、お客にはご馳走として肉牛と言うのも悪くはないだろう。

「そういえばスープを作った後の骨はいつも通りに？」

「ええ。磨り潰して薬品の材料にします。一部は食用の実験に、残り
は膠の元に」

間抜けな話なのだが、技術者が増えて膠の事を知る機会があった。

動物の骨やら色々な物からコラーゲンを取り出すのだが、『煮汁が固まるじやろ？ あの効果で』という例え話を聞くまで、ゼラチンに

出来そうだとは思ひもしなかつたのだ。

ただ磨り潰すよりは成分を抽出し、精練しながら効果のある粉にしないと意味がないそうなのだが。牛と豚の骨はスープの材料にしていることもあって、オマケ程度だがないよりマシだろう。

(ゼラチンが完成したら寒天ゼリーよりも柔らかいゼリーが作れるな。歯応えが違うから食べ比べするのも面白そうだ)

生クリームは思ったよりも美味しくないし形状も保てないが、一応は完成した。

試作品の小型ケーキを作ったら双葉は気に入ったようなので、今回の収穫祭は一定以上の成功は保証されている。後は何とか無事に乗り切るだけだろう。

その事を考えたら、商人や貴族が技術を気に入るとか商品になるとかいう展開は、成功すれば御の字だとも思っておこう。

賑やかな収穫祭

● 収穫祭が始まるにあたり、良い事と悪い事が一度に起きた。

先に言っておくと残念ながら子供が出来たとかではなく、僕の影響度が妙に高かったのである。先触れの使者がなければ大慌てで困ったであろう程に、今回のお客が多かったのだ。期待せずに出すだけ出して置けと言われたのだが、まさかほとんどが来るとは思っても見なかったと言える。

仕方がないので使うつもりはなかった予備のプレハブをすべて動員し、宴会用の食料やら屋台用の軽食を急遽増産する他無かった。

「しかしこの文面を見ると……素直に喜べそうにないなあ。絶対に様子見とか、食事をタカリに来てるだけでしょ」

領主は貴族なので手紙または使者を送るのは当然として……。

暇だし呼ばれたから行くとか、今年は肉用の牛を遠征費用に充てたから行ってやるとか嫌味交じりに書いてある。使者の場合は慇懃無礼でこそないが傲慢な所が透けて見えた。

これは僕の影響力が増したことを示すと同時に、恐れられたりはして無い事も示している。あくまで見たまま、雑多な人々が僕が何をするか様子を伺ってはいるが、意見を伺っているという訳ではないのだ。どんな奴かを見てやろう、利用できるならば利用するが、領内経営の為に意見を聞く必要などないという訳だ。

「それが判ってるなら良いんじゃない？ まあ中央だと笑顔の裏で良からぬ事を企む者も多いからね。こっちは判り易くていいよ」

「青悟さんは言葉を隠すのは上手いですよね。手は口ほどにものを言ってますけど」

一足先に訪れた青悟は試作品の蒸留酒を片手に手酌をしていた。

酒の出来自体は特に何も言っていないので、何処か他の地域で味わった事でもあるのかもしれない。寝かせても居なければ、樽で香りも付いてないので評価し難いのもあるだろう。

しかし珍しい物を漁って飲み食いしに来ているという意味では、あ

まり他の領主層と変わりはない。

「商人連中も結構来てるんだな。俺が高く売りつけてこようとしたんだが、見られちゃうか」

「阿漕な事はしちや駄目だよ？　　うちは明朗会計だから一度決めた価格は基本崩さないし」

「安くさせたいなら代価を寄こせて事だろ？　　判ってるって」

蒸留酒を飲んでるのはもう一人居る。商人の南商豪だ。

彼一人だけなら『待て、ステイ！』と言えるのだが、青悟も一緒に現われたので断り難い。二人して揚げたホルモンを肴に早めの晩酌としやれこんでいた。

「確認するが、あの滑車は購入できるのか？　　真似るのはちとキツそうだ」

「どこまでオーダーするかに寄るけどね。可動半径や力を伝達する効率を上げようと思ったら、ドワーフの職人じゃないと無理だから費用はかさむよ」

南商豪が言ってるのは船着き場に設置したクレーンである。

荷物の積みかえパフォーマンスとかやったら、俺も欲しいと言い出した。それでも自前のコネで『コピー出来ないと言口にする』辺りは抜け目がない。おそらくは他の商人との差を付けようというのだろう。今からやって来る連中は、真似してみるところからスタートするからだ。

この場でコピー商品と純正の差を見極めて、真似るか発注するかを考えた上で、発注する場合は交渉も先にやっておこうというハラに思われた。

「南方鎮台にでも売り込む気？」

「いや？　　水棲種族の連中にしとくよ。紅家の連中が何処まで関わるかは別にして、ここで見ていくだろうしな。そっちは開拓地か？」

「まあね」

クレーンそのものはこの世界にもある。

しかし僕は土台に横軸の回転を入れて、積み下ろしを簡単にするための土台になる木の板も専門で作っておいた。後はロープを所定の

位置に掛ければ簡単にAからB、あるいは舟へと移動させられるのだ。

何処に使うかと聞かれたら、開拓地を水路沿いに広げていくとしか答えようがない。一番の理想は紅家の使ってる河川と、こちらの河川を繋ぐ位置にある湿地帯を水路で打通することである。

「へえ。その辺りは今度詳しく教えてもらい所だねえ」

「青悟さん処にも声を掛けますよ。開拓地に大地母神の神殿はつきものですからね」

「必要な物があれば俺が特別価格で調達してやるよ。と言う訳で、俺らの成功を祈って乾杯といこうぜ」

やはり専門性というのは侮れない。

大地母神の神殿には農耕テクニクなどが蓄積されているし、食べられる根菜などもエルフとは別口で詳しかったりする。そして商人の知恵やコネクションというのは重要だ。僕らが知らない物も、頼めば仕入れてくれる可能性があった。

彼らにだけではなく僕にもできることはあるが、やはり専門性による発展度合いの差は捨てがたかった。蒸留技術を目指しても微々たる物だったのに、ドワーフと共同開発すれば一気に進んだのと似ている。

「乾杯」

僕らは開拓地を上手く切り盛りするために、それぞれの範囲で協力し合うことにした。

● 当日より前に来て話そうとする者や、自分は鼻肩されて当然だと思ふ者。

双方ともに平等に扱い、あくまで慣例などから上に置かねばならない者だけを上に置いて正しい判断をしたと見せて置く。

その中で非常に面倒くさい相手が急遽参加していた。その人物のお陰で食料やお土産が妙に増えてしまった。今回の収穫祭だけ見ると大赤字だろう。

「義兄上！ 新しい料理が出てきましたね。私に取り分けましょう」

「いえ、連さまはお座りになってください。うちの者がやりますよ。あくまで最初のカットだけ入れますので。それに僕はまだ結婚しては……」

緋家の次男である連さまとその護衛や取り巻き達の参陣である。

彼らも僕を無視できなかったんだねーなどと甘い事は言って居られない。彼らは彼らで、僕の顔を立ててやったと喧伝するだろうし、僕がこの村で何をやってるかを調査に来たというのもあるだろう。

そして何より面倒くさいのが、連さまが無邪気に善意を振りまいている事である。

「まあまあ。私はここで一番下の年齢ですから。それに義兄上は南領の英雄ではありませんか」

「えーまあ。しかしそういうことは専門の者がやった方が……」
「あ……」

何というか連さまは『ちゃっかりした末っ子』という感じだった。

他愛のない用事を率先してこなし、重労働や遠出などの用事は他人に押し付けるタイプだ。周囲から『真面目で偉い』『上級貴族なのに年長者を敬ってる』と褒められ易い事をやっている。

それと、まだまだ若いから仕方がないのかもしれないが……。料理を勝手にとりわけ、自分の皿に大盛りで注いでいくのはどうかと思っただ。しかも人数配分を無視して『上席にいる貴族』たちだけで分配してしまい、下座で護衛してたり眺めている騎士や、招待している商人連中には配らないのが酷い。

(まあ普段は家から来た下々の者には残り物を渡すそうだからなあ。そういう常識じゃあ間違い無いんだけど……。向こうには別の料理を出さないとな)

こんなことなら配分し易く持ち帰り難い、鍋料理でも用意すれば良かったと思わなくもない。

あるいは配膳係を数か所に分けて、それぞれワゴンか何かの手押し車を用意しておくとか。その辺は来年以降にするとして、今は料理の配分でも考えよう。

ひとまずハンバーグやら揚げ物をこちらで片付けてしまったので、

持ち帰りも可能な様にしたパイ系の物を向こうの席で出すように指示しておいた。聞かれたら戦場食バージョンの研究とでも言つて誤魔化そう。中身がミンチつてのは同じだしね。

「義兄上！ あそこにある白い塔はどんな料理なのですか？」

「……あれは女の子や子供用向けのお菓子ですよ。白い塔の形は、これから婚礼を祝福される者へ多めに取り分けます。今回は初の祝祭ですのでうちの銀双葉を主としますが、来年は姉上にも用意しますね」

連さまが特に注目したのは、よりもよつてウエディングケーキだ。

あれはデコレーション込みで目玉だし、暖かい所に放置も出来ないので会場の中で涼しい場所に飾つてある。保全能力も欠けてあるが限界はあるので、適当なところでサツサと切つてしまう予定だった。

ひとまずここで静止しないと、あれも勝手に分配されてしまうだろう。せつかく今日の日を楽しみにしている双葉に悪いし、ここいらで強硬してもイニシアティブを取り返さねばなるまい。

「御菓子……甘いのですか？」

「連さまが知つてる高級なものほどではありませんよ。婚礼を控えた者たちを祝うイベント用と言う方が主ですから。……双葉、前倒しで切つちやおうか」

「……うん。早く切ろう、直ぐ切ろう」

料理をパクついていた双葉だが、僕が話題を振ると即座に反応した。

このままでは勝手に分配されてしまうし、仮に気に入られたらかなりの分量を持つて行かれる可能性はあった。だから双葉と一緒に儀式的にやつて、主に女子で分配するというのをやつてしまわなければならぬ。

そして儀式として実行するために、あきらかに戦闘用ではない長さの薄いナイフを用意。僕と双葉の二人で握り締めたのだ。

「みなさま。宴もたけなわですが、この地に芽生えた新しい儀式を一つ。婚儀を祝福する料理を、門出に新しい夫婦たちが切り分けます。

お菓子ですので主に奥方や妾、あるいは子弟で分ける事になります。……あとはお酒の呑めない方には代わりにお相伴になっても良いかと」

「ケーキ。入刀」

僕が説明するのを待っていた双葉は、普段の面倒くさがりが嘘のように勤勉に働いた。

躊躇せずにケーキを両断し、分配開始。そのおかげもあって、自分の分を多めに切り分けて持ち去ることに成功したのだ。面倒くさい状況だったが、なんとか問題を起こさずにやり遂げる事に成功した。

ただこの判断が上手く行ったのは、あくまでお菓子だからだ。領主連中はお菓子などと軟弱な者は食べないし、地方は味付けが濃い方が好まれるので、それなりに上品に味付けたケーキはそれほど人気は無かった（下戸の領主が食べはしたが）。

「優しい味ですね！ 私はこのお菓子を気に入りました。イベント用とのことですが、普段は食べられないのですか？」

「さもない事を言うようですが、これには蜂蜜ではなく砂糖を使っております。後でお家の料理人や五僽老にもレシピを渡しておりますが、イベント時に絞らないと厳しいかと」

「そうですね。少々厳しいやもしれませぬ」

僕が話を向けると緋五僽は苦い顔をしていた。砂糖を使う菓子を強請られたら大変だからだろう。

まあ実際には僕には伝手があるので、そこまで費用は掛からない。何度か作ることはあるだろうが……その事を正直に話すと大変だろう。連さま派を率いてしよっちゅう押しかけては平らげていきかねない。

そんな風に思っていたら別のアイデアを思いついたようだ。

「では来年の楽しみにしておりますね！」

「ははは……その時に備えて牛も殖やしておきましょうか」

来年も来る気かよ……と思ったが、今年の終わりが来年には麗さんという方と結婚するのだ。

悌さまから見れば妹、連さまから見れば姉。彼とその派閥が来て食

べ散らかすのは今から確定したような物である。今年だけでも大赤字になりそうなのだが、来年の備えが今から怖い程であった。

なお、このことで一つだけ良かったことがあるとすれば、貴公子に見える連さまを双葉が不倶戴天の相手だと判断したことだ。万が一にもNTRな展開はあるまい。生まれながらの貴族ではない僕にとって、そのことだけが唯一の良かったことである。

来年度の目標

● 収穫祭の次の日は、収穫祈願祭。

アフターフェスティバルというかネクストシーズンというべきか。次の年も良い収穫がありますようにと祈って終わる。

その時に用意しておいた手鏡を二枚。白木にビーズのような装飾を施した物と、漆塗りで金と貝殻を装飾した蒔絵造りの物を渡す。

「ありがと。大切にするね」

「うん。そうしてくれるとありがたいけど……。大切なのは双葉の方だから、万が一の時は脱出してよね」

「普段はここまで言わないが偶には良いだろう。」

少なくとも昨日に機嫌が急降下したことを踏まえて、サービスしておく事に意味はある。まあ鏡なんか幾らでも作れるし、人材と言う以上双葉が大切な事に嘘はないのだ。

とはいえここで何も言わずに収めると、後に問題が残るので二つある事に言及しておく。でないとな枚ある事に興味を示している誰かさんが余計な注文をしかねないからだ。

「これが白黒二枚造りなのは僕らの出身地にちなんだのもあるけど……片方は持ち運ぶ用で片方は家に置いとくやつね。好きな方を置いといて」

「じゃあこっちかな？ キラキラして可愛いし♪」

双葉が選んだのは白い方だ。ビーズをイメージした小さな色ガラスを嵌めてある。

他にも真珠を入れたり、クズ真珠を磨り潰して装飾に利用している。太陽にかざした時の光沢と輝きはまるで魔法少女の様であった。もう一枚の螺鈿造りの方は漆黒と金で豪華ではあるが、持ち歩き難いのでこういう決断なのだろう。

双子の邑出身の僕らを示すには丁度良い鏡と言える。この世界には無い概念なので特に言わなかったが『比翼連理』をイメージしたりもしたんだけどね。

「……来年以降はどうするの?」

「あーえーとね。この鏡は贈答用や象徴としての記念となる最初の一つ。来年は家財として最初の一つに鏡台を研究する予定なんだ。その後は日用品で良くなつて思つてる」

僕の方から来年は麗さんの嫁入りに合わせるとは言えないので、双葉が気を使つてくれた。

その事に感謝しつつ、双葉には第一号の品を用意したと明言。そして麗さんには麗さんに、別口の意味で最初の品を用意する。双葉用が持ち歩きを可能とした最初の品で、麗さん用は公式的な顔でありその為の用意だと象徴できる品である。その後はコンパクトでも何でも良いだろう。

そしてその言葉を聞いたことで、後ろで気にしていた連さまがようやく納得したという顔をしていた。妾というか以前からの恋人が居る事とか、そういうのを生産する必要がないのは貴族なので特に疑問はないだろう。それはそれとして、姉への贈り物やら公私の区別を僕がしているのかは気にしていた筈なのだから。

「ガラス製品はその辺なんだね。じゃあ家畜は?」

「予定よりも牛を増やそうかと思つてる。昨日の有様を考えると少し不安だからね。豚は最悪購入すれば良いし、鶏は卵を常備したいから減らしたくない」

双葉が気にしているのは主に来年のお食事である。

うちの村の総生産力なんか簡単に増やしようがないので、何かを犠牲にして他の何かへと振り替えるしかないのだ。小麦を色々な料理に使つたり換金する以上は、単純に飼料を増やして家畜を増やせないのである。

その辺を考えたら何処の村でも飼つてる豚を減らすのが一番と言えるだろう。売れる物を増やした時に、再購入し易いのも流行り豚だしね。それに肉を食べたいなら鶏を殖やして、卵の合間に食べれば良いのだ。卵は御菓子にも使えるし鶏はスペースを取らないからね。

「義兄上。牛を増やすのであれば、あの申し出を断らなければ良かったのでは?」

「それはお互いの費用と価値観が共通して居ればの話ですね。多くの穀物を与えてこれからも太らせる牛の予定でしたし、向こうは向こうで貴重な労働力の強い牛です。価値観が違う物を交換し合うのは難しいですよ。しかも申し出は一对二でしたから」

昨日の宴会の後、牛を食べない習慣の領主から申し出があった。

牛はこれほど美味しいのかと感動したらしく、どうやって作るのかとかを尋ねられた。その時に肉専用で育てた牛である事と、豊富な穀物を与えた実験用であることも告げている。その領主は他の領主の手前、牛を二頭出そうと言ったのだ。

それだけならば太っ腹な申し出に見えるが、それはどうだろうか？

「費用は判りますが、価値観の差ですか？」

「連さまはそれほど驚かなかったところから、専用の肉牛を献上されて食べたことは多いのですよね？　しかし世間では鍛え上げた農耕用の牛の方が一般的です。どちらも貴重には違いないのに、二頭も出した牛が美味しくなかったらどうでしょうか？　料理というものは味付けを少し間違えれば不満が残りますからね」

何というか初めて食べた感動というのは特別だ。

それと同じ感動を与え続けるのは難しい上に相手の料理人の腕もある、せつかく二対一で交換して置いてマズかったらどうだろうか？

それに筋肉質に育ち切った牛を貰っても作業用にしかないし、相手の性格次第では死亡寸前の牛を渡される可能性もある。一頭に対して二頭も渡したのだから向こうの方が上だから黙れと言われたら言い返せないのである。何せ世間では労働用の方が上、肉牛は趣味と贅沢の範疇でしかないのである。

「別の例えをするとしましょうか。文官とし育った男に、明日から騎士として取り立てるから頑張れ。働き次第では荘園主や領主としてやろう。あるいはその逆で騎士見習いの従卒に、文官として書面を書けと言われても困るでしょう？」

「それは……そうですね。どちらも私は可能ですが、部下の中には致命的に向かない者も居ますから」

連さまはこの間の北上作戦で、後方の治安担当だった。

敵の居ない楽な任務と言われていたが、広範囲を効率的に回る必要があるので食料や飼料の手配が大変だったはずだ。ただでさえ前線に送り届けているわけだし、どこの領地に余剰があるとは容易には判らない。僕の所にも何度も『何処にあるんだ教えてくれ』と使者が訪れたこともある。

僕としては面倒なので後方の物資集積状況を教えて、どの辺りで回収すれば良いかを差配したのだが……その辺りで親近感でも持たれたのだろうか？ まあ親近感と言うよりも『楽ができる』と思っただけかもしれないが。

「ですのであの時は断るしかなかったのですよ。虎の子の力強い牛と、美味しい肉牛がどの程度で釣り合うか？ これは専門家でも呼んで来なければ難しい事ですから」

「なるほど。それで育て方や料理を教えるところから始めたのですね」

あの場では南商豪も居たが、彼の価値観は交易商人だ。

地元に根差した牛の価値管理は難しいだろう。それに市場の管理人だって基本は子牛のオークションである。都の大きなところの商人だったら……双方を金で買い取って、両者に均等な差分で売りつけるという事でもやったかもしれない。

その後は各種技術の報告会を経て、牧畜と同じように何を重視するかを決定。

基本的には前年通りとして、コンクリ製品やらプレハブ小屋に関して開拓地向けに出荷す余地があると修正したくらいで終わる。

● 一通り終われば後片付けだ。貴族たちも昨日の段階でほとんどが見切りを付けている。

大抵のものは朝の段階で帰途に付き、この段階でも残っているのは開拓地に関して関係している者くらいだろう。

要するにここからは開拓地に関する指示になり、基本方針を伝えるという事だ。

「まずは長期的に意味のある場所と予算確保し易い場所からになりま

す。紅家との境にある湿地帯を浚渫して水路を作り、他の場所でも街道の延長などになりますね。もちろん調査チームの報告次第ですが」「ふん、水路か。お前の所は儲かるらしいがな」

一部不満のある領主も居たが、それは予想通りだ。

どんなことでも全てが賛成されるなどありえない。それでも不満だけに留まるのは、そもそもその開拓権が僕にあることだからだ。彼らはその援助の見返りに、色々な物を受け取るだけに過ぎないのである。

その意味では真つ向から不満を述べるといふのは、中々に勇気が必要であり、同時にありがたい事だった。秘かにため込まれる不満の方が対処し難いのである。

「商人たちから要望と資金が渡されましたからね。開拓資金もおぼつかない現状では、彼らの意見も組まざるを得ません。とはいえ初期報告も含めて資料をどうぞ」

「どうだかな。資料の数字など幾らでも捏造できるだろう」

「それは言い過ぎだぞ」

実のところ、この流れは半分仕込みだ。

サクラとなる者を予め予定し、根回しして意見を率直に言ってもらおうようにしてある。何処まで不満を述べても良いのか、どの辺で抑えるつもりなのかを予め談合してあるという訳だ。

もちろん代わりの見返りもあり、領地の境界線やら別の開発計画などを約束してあった。

「……さて。これを見ると橋を架けるとあるが……本当に可能なのか!?!」

「先日見て頂いたクレーンがありますよね？ あの手の物を動員して柱を敷設します。その上で中間の柱と柱を架けるのであって、吊り橋ではありません」

「馬鹿な。……一体どうやって……」

サクラを頼んでいた領主だが、その報告書には驚いたようだ。

今回の目玉として用意した規格であり、今まではあり得なかった場所に橋を敷設できると、交易路やら何やらがまるで変わるのである。

生活の便利さやら関税などの問題で大きな変化が出る筈であった。

「あの辺りは川が急流だし、そもそも谷だぞ!」

「そうだ! 滑車で降ろし、滑車で組み上げるにしろ、そもそも荷物をどうやって組み立てるのだ?」

「紅家の近くに住む水棲種族と連絡が取れます。彼らの中で人足として雇える者を集め、下からやってもらうんですよ。僕らだと泳げない場所でも、彼らにとっては少し冷たい程度ですから」

これは考え方の差である。急斜面の谷と考えるから問題なのだ。

水中呼吸できる者を集め、下から上に登ってもらえば良い。もちろん登りに向かない場所もあるが、人間が降りるよりも安全な行き来ができる。絶壁を降りるのと、急斜面を登れる手段を構築するのでは大きな差である。

そして今まで不可能だったからこそ、そこに利益が集まるのだ。

「水棲種族……話には聞いたことがあるが……」

「確か頭が魚だが、魔物ではないと?」

「その通りです。ご自分の配下や、通りかかる行商人。後は御友人の領主にも伝えておいてください。水棲種族は魔物ではない、むしろ有益な味方だと」

この話をした段階で、彼らの反抗心は既に消えていた。

何しろ彼らの領地もまた開拓地に近く、その恩恵を受けるのだ。場合によっては、自分の領地にも敷設できると思っているに違いない。

架橋の実験：前編

交通網の一新。それを目標とした時点ですべきことが三つある。一つ目は計画の全容をハッキリと明示する事、二つ目は実験段階をスムーズに終える事、三つ目は水棲種族の周知をキツチリやりきる事だ。

どこまでやるか判らない壮大な計画では、成功を危ぶむ者が居るのは当然ながら、『もしかしたら自分の所も』なんて思う貴族は山のように出て来る。何人かはともかく希望の全てを叶えるのは無理なものだ。そして水棲種族を魔族に間違われるのだけは絶対にやってはいけない。

「まずは本当に可能なのかを実験してみましようか。浚渫までするかはともかく、最初は交通量の見込めるエリアで行います」

「あ、ああ。そうだな。試してみないと」

選んだ場所は開拓にはあまり関係ない場所だ。

ただしそこに橋を架けることが出来れば良い宣伝になる上、荷物を運びこんだり逆に不要な土を持ち出したりするのが簡単になる。運が良ければ献金を受けることも可能だろう。何しろ今まで道では無かった場所を通る事が出来れば、関税などを払わずに済むのだから。

今までの技術レベルではありえない架橋による混乱と、判り易い実験に対する納得が出来た所で畳みかけるべきだろう。新たに計画書を配った。

「架橋計画は五段階。実験を初動として可能かどうか、どの程度難しいのかを確かめます。本命の架橋は第三段階で、開拓へ協力する貴族への対応が五段階目ですね」

「その銀殿……貴殿の順番がかなり低いようなのだが？」

「必要ないでしょう？　うちの領地は陸路も水路も順調ですからね」

計画書に必要なのは妥当性だ。所詮は絵に描いた餅でしかない。

だから実験を最初に、その成果を確実に出すための本命を中盤に。余計な宣伝であったり開拓全体への関与は最終段階である。そこに

自分の領地もサンプルとして含めるのだが今のところ無理に必要な物では無かった。せいぜいが豚さんやら鶏が食べる木の実を収穫し易くなる程度である。

ではなぜ自分の領地を明記したかと言うと、僕が開拓長官の権限を無理には使用しないという事。それでいて協力的な貴族には、どの程度の順番で恩恵を与えるかを示す例としてである。自分を後回しにするが、キツチリ候補に入れてる辺りで判ってくれるだろう。

「必要もないのにうちの領地に計画してるのはサンプルにできるからですね。昨日みたいのうちを訪ねる人が沢山居れば、一目で判りますから。とはいえ積極的には要りませんので……」

「うむ。判った。それ以上は言わずとも良い。なあ？」

「そうだな。その先は我も理解しておるとも」

正確には『我々だけが理解して』いれば良いという事だろう。理由と代価によって順番を変更し、場合によっては自分の権利を譲っても良い。その全てを説明したら意味がないのだ。退屈な宴会に参加し、これまた退屈な儀式とやらに参加し、その上で今まで残っていた開拓メンバーのみが知って居ればいい情報。それらを売り買いつけることで彼らは発言権を得たり、ちよつとした余禄を得る訳である。

何か所ほどに橋を架ける予定であるのかその地域は何処か、無理を利かすために必要な材料などの代価は何であるのか……ソレを知っているのはこの場で情報を貰い、何か変更があれば教えてもらえる立場の自分たちだけが知って居れば良いという事であった。

（よし。これでこの場に居るメンバーは言う事を聞きそうだな。水棲種族たちも乗り気みたいだし、何とかかなりそうだ）

そもそも今回の話は、浚渫作業をスムーズ化するのに水棲種族が居たら便利かも？

そんな思い付きから来た物だった。ここは陸上なので昨日の宴会には無かったが、紅家の者に聞くことは出来た。何らかの方法で定期的に水に浸かることができるならば、彼らの力を借りることができるのか？ そう尋ねたら可能だろうという返事が貰えたのだ。

あくまで予想に過ぎないが、幸いにもそれなりに付き合いがある者だった（残念ながら見たことはないそうだ）ので、時間は掛かるかもしれないが陸上での行動が得意な者が派遣されてくるだろう。

● 橋を作るための土台やクレーンの土台をコンクリートで作り上げていく。

その後にはセメントで造ったのは箱型の……要するにプール状構造である。四面をコンクリートの板で覆ってから、それを継ぎ接ぎするように追加でセメントを流し込む。今のところ速乾性が弱く、保全能力でサポートしないと製造できないので僕しか造れない。

そしてこの目的は当然ながら水棲種族が休めるようにするための配慮だった。もちろん穴と蓋のセットを設け、水の入替えも可能にしてある（生活魔法の浄化で十分だったが）。

「何から何まで申し訳ありません、銀大人」

「いえいえ。こちらの都合もありますからね。可能な限りの援助を整えるのは当然ですよ」

こちらで動けるか確認するために、先行して水棲種族が何人かやって来た。

その中に旧知の蝦衛視が居た。鷹の目を持つ彼が来たのは役目に即したからか、それとも水棲種族では価値が低い位からか？ ひとまは水棲種族からの厚意とでも思っておこう。一から信頼関係を築くのも面倒だしね。

ともあれこの先行メンバーの役目は、河川で水棲種族がちゃんと動けるかと高低差のある場所で作業が出来るかと言う確認も兼ねている。

「これは今のところ僕しか作れませんが、水の巫女を教育できればそちらでも可能になるでしょう。水中にいる魔物から逃げる時とか、鮫が多いエリアの避難所くらいだろうけど」

「その辺りは急いでおりませんので、お互いに将来を楽しみたいしましょう」

丁度良い人材が居ないらしく、水棲種族からの巫女派遣は行われて

いない。

正確には彼らの種族ではなく島に居る人間たちのようだが、やはり急いでいないからこそノンビリと探しているのだろう。こちらも急いでいないし、来たら育てようというレベルでしかない。

その辺りの話を済ませた上で、さっそくやるべき事の話になる。

「ひとまずの目標はこの近くで行動し、足場を組んだり上流へ登る練習をしていただきます。どの程度ならば無理なのか、補助具があればどの程度は可能になるのか忌憚のない意見を聞かせて頂けると助かります」

「ということであれば、クレーンの先に持ち手や足場を付けた紐があると助かります。我々は多少の泥濘や滑りでは転びませんので」

「……というところはどう感じですか？」

蝦衛視は単刀直入に要望を上げて来た。

やはり翻訳魔法が勝手に丁寧語にしているだけで、実際には判り易い人物なのかもしれない。とはいえ第三者がいる状況だと、この翻訳魔法の柔らかい表現はありがたい。

そして僕は地面に棒でクレーンの絵を描き始める。まずは土台と滑車にロープ、そして先に平べったい板とその150cmくらい上にある手で掴むためのアームである。

「はい。このような仕掛けです。これがあれば行き来で余計に歩かずに済むかと。まったく素晴らしい。複数生産してただければ、予備を買い取りたいと思います」

「ではそのように。最初の幾つかは形状や耐久力テストを兼ねますのでお代は良いですよ。ただ持ち帰って使う時は、腐ってないかに気を付けてくださいね」

褒めてくれるのは嬉しいが実は元ネタがある。

ロボット物でコックピットに乗り込むための綱である。幾つかのロボット物で見たことがあったのだ。クレーンそのものも僕が設計したし、両者の機能を結びつけるのは難しくない。あえていうならば、言われるまでクレーンでやろうとは思わなかったことくらいだ。

前にも感じたことだが、僕の記憶は保持されてはいても自在に思い

出せるわけではない。あくまで『そういうえばこんなことあったな』と
思い出せるだけなのである。

「残る問題は食事くらいだけど、魚の方が良いんですっけ？」

「肉も食べられない訳ではありませんが、魚の方がなじみが深くて助
かります。龍学才殿のご助言では、人間たちの前ではその方が誤解さ
れずに済むとのお話も頂きました」

言われてみれば魚も肉も変わりはない。

しかし魚の方がなじみがあるのだろうし、人間から見ても魚しか食
べないとそういう種族に見え易い。しかし肉を貪り食つてたら魔族
ではないかと誤解も受けるだろう。食べるだけならば他でも食べら
れ訳だし、こっちに出稼ぎに来てる最中くらいは魚だけの方が良いと
いう事らしい。

こうして彼らが陸上メインの生活に慣れる訓練と建設の訓練を行
いつつ、徐々にこちらの人間へ文字通りの顔合わせをしていくのだっ
た。

架橋の実験：後編

●
うちの村である程度の練習を積んでから現地へゴー。

まずは水棲種族たちが谷底に降下し、足場近辺までの道のりを整えてから作業に入る。

大きな板の四方に取っ手を付けた……感じて言えば『井』状になった荷下ろし板を使ってクレーンで色々と降ろしていく。次はコンクリ製の足場を固定しこの上に橋脚用の木材を立てるか、硬い場所まで穴を掘ってから立てるかの差である。今回は穴を掘るのが難しい場所なので、足場を選択した。

「無問題。無問題。……静止静止」

「屹立！」

足場のコンクリ板が固定されると次は橋脚だ。

通常は三本の紐を使うが今回は手抜きで二つ目のクレーンを用意し、一つ目との間にロープを渡す。二つのクレーンを横の滑車で回転させると、ロープが力強く張られて巻きつけた木材が起き上がる仕組みだ。

そしてその木材には様々な穴・切れ込み・取っ手を彫り込んであり、まるで魚の骨の様だ。要するに凸凹を使ってロープを掛け易くしておき、後には軽技が得意な普通の人間が梯子代わりにして降りる為である。

「蝦衛視さん。向こうは順調ですか？」

「はい、銀大人。亀老師たちは上手くやってくれているようです」

鷹目の視力を持つ蝦衛視に尋ねると、下での作業は順調との事だ。何度か橋脚を立て、そこに橋げたを渡す作業は訓練しているので問題ないようである。真横へ二本目の橋脚を立て、相互に木材をロープで括ったり横木で固定すればある程度は安定し、上で同じような作業が出来るようになるだろう。

なお下で働いているのは亀老師と言う先生役の人と、彼に指導された見た目がマイルドな水棲種族たちである。頭以外は魚類ではない

ので、被り物をした人間にしかみえない。

「銀大人。二本目の屹立と相互固定が終わりました。上の処理を済ませたら、三本目と四本目に取り掛かります」

「急がなくていいから怪我しないようにね」

紐の上に輪を付けた紐を通し、それを引っ張って柱の近辺まで移動させる。

すると安全带と呼ばれる落下防止用の仕掛けになるので、柱に刻んだ即席梯子を登っても問題なくなる。後は上でも相互に固定すれば柱とロープだけで立ち続ける橋脚の出来上がりだ。三本目と四本目を丘との間に立ててしまえば長方形の固定状態。あとは橋脚同士・丘との間に柱を、ロープとロープの間に板を渡して行き来が可能になるのだ。

まだまだ骨組み段階だが、三本目と四本目を立てて横木を渡すだけで全体像が見え始める。もし向こう側に五本目・六本目を立てれば、身の軽い者ならば行き来だけならば可能になるだろう。

「お見事。まさかこんな短期間で橋が出来るとはなあ」

「まだまだだよ。此処は見せつける為と献金収集用だからね。開拓をやり易くさせる為には直接関係ないもの。関税を引き下げられる代わりに橋を立ててくれと言われて初めて、意味があるってところかな」

南商豪が金袋を握り締めて褒めてくれるが、ここは宣伝用に過ぎない。

彼が通行料代わりに献金するように、他所の領地で関税を払って通行するよりも遥かに良くなる場所に作っている。今までは谷を迂回して幾つもの領地を越えて居たわけで、関税やら護衛に払う費用やら、街中では宿代など大変だったろう。それをここを通れば随分と浮かせられるので、多少の金など支払っても損はないのだ。

特に彼は年間通行料で払うので、そういう商人は一回に払う料金を控えめに計算してある。この事は河川協同組合に支払っている者が何となく察しているレベルで、南商豪から助言を受けた者がまとめて払う感じになるだろう。

「関税引き下げねえ。お優しいこった」

「後で恨まれるのは僕だからね。かといって無意味にバラまくようなお金はないし」

別に楽市楽座を狙ってはいない。他の領主が全員納得するは思えないからだ。

しかしここに橋が完成し、開拓地を通る関税込みで橋の通行料を払う方が安いのであれば、みんな南商豪のようにこちらを通るだろう。何時までも関税を取り続けたら、その領地は金が入らないし行商人だってこなくなる。

だが僕に頭を下げて橋を作ったり、関税協定を組んでこの地域全体で融通し合う話し合いが出来たら別だ。ここで徴収するお金も他を通るところもまとめて徴収し、協定に参加する領主で分配という形を整えられるのである。意地を張るよりも手を組んで欲しい所だ。

「しかしよ、全員が頭を下げて来たらどうする気だ？ 全部は無理だろ？」

「プライドがあるから断るだろうけど……。その時は安価な吊り橋プランも用意しとくよ。要するに協定を結んで関税を平均的に下げただけだからね」

僕は緋家の開拓長官であると同時に、軍師格でもある。

勝手にするのが領主と言えど、放置して大赤字になる未来を放置できない。このままでは遠からず、開拓による交通網の改変で浮き沈みが出るだろう。その時に沈んでいく者を放置できないし、浮き過ぎる者もどうかと思う（主に僕だが）。

またこういうのは集団でこそ意義と力が持てるのだ。大きな集団の協定ならば他も見習うし、発言権やら見返りを期待しての献金額も変わって来るのである。

「吊り橋かあ。そういやそうだな。今まで無理だったといえ、別に本格的な橋を作らなくても良いって事か」

「そういうこと。コンクリを使った頑丈な橋も含めて三つプランを用意しとけば、代価込みで真ん中を選ぶ人が多くなるんじゃないかな」
人間は理由を求めるモノである。

安価なプランがあればそれで済ませる人も居るし、豪華で頑丈なプ

ランを選ぶ人も居る。それはそれとして松竹梅の三つがあれば、真ん中の竹を選ぶ無難な選択肢が多いのも事実であった。

今回の宣伝は開拓地やら橋で好景気を作り出す前提段階なのだ。ゆえに橋が出来上がり、目ざとい一部の商人が嗅ぎつけたというのはまだまだ目的には遠いと言う他はなかった。

● 情報と言う物は勝手に知れ渡るものだ。

開拓地に関わる領主の中には自分で宣伝してる者も居るし、気の早い商人の中には一回分の通行料だけ払って、どの程度のショートカットが出来るのかを試した者も居た。

僕はその間に計画の第二段階である、湿地帯の浚渫をしながらやって来る貴族やら商人と面会したり宴会したりしていた。

「思ったよりも土地がシャンとし始めておるのう」

「入り込んでる水を水路に誘導しましたからね。水棲種族の人たちのおかげで、ペースが早く進むのもありますよ五嵜さん」

人間だと泥だらけで働くのはノーサンキューだが、水棲種族にとってはそうでもない。

陸上に居続けると乾いて問題だが、泥だらけだったり水の中に居続けで風邪を引いたりなどはしないのだ。もちろん沐浴とかお湯で汚れを落とす順はしているが、彼らにとって水中で作業する時の問題は目に入るくらいである。

そこで思い切ってこの方面に入り込む水を手前で曲げて、片方を水路として分派し、もう片方を元の位置に戻すという方法で水量全体を減らした。護岸工事も同時にやったことでかなりのハイペースで工事が進んだのだ。

「後はこの土地が肥沃であってくれば良いというあたりか?」

「そうですね。山の水が入り込み続けていたので、それなりに肥沃だとは思いますが。とはいえそういう場所ばかりではないので、微妙な所ですが」

土地の開拓も上手く行けば、かなりの利益を見込むことができる。しかしながらあくまで交通の便を見込み、開墾地としてはそれなり

レベルであれば良いだろうと判断したのもある。三圃式農業と大規模農業を組み合わせ、少ない人数でそれなりの土地を一気に開拓するという訳だ。

最終的にそれなりは、それなりに過ぎない。しかし土地の管理と生産調整がし易い事で、緋家に必要な穀物や商品作物を集中的に生産する予定であった。

「では予定通りに労役をさせても良いのじやな？」

「ええ。困窮した貴族の農民を中心に受け入れて、代価として物資や報酬をお渡しします。さすがに橋の方は順番待ちをしていただかなければなりません。安価なつり橋で良ければ何とかしますよ」

緋五堀がやって来たのは、河川協同組合などの面識から仲間に頼まれたそうだ。

五堀老人の町だけならば困らないというか、商人が訪れやすくなることで儲けは見込める。しかし去年までの戦いで青色吐息である領主たちは、来年以降の出費がなくなるだけで困窮してるのは変わりないのだ。理由を付けて一時金を支給し、利子付きの借財は返済させたが、それは一時しのぎでしかない。

今回の開拓地に関して彼らは無関係である。だが彼らの力を借りるといい良い訳で、人手を借りて代価やら資金そのものを渡すことは可能なのだ。献金が無ければそんな金はなかったが、幸いにも橋の完成を見てかなりの金が動いたので何とかだったのである。無ければあくまで売れそうな代価を渡すしかなかったろう。

「これで元に戻るかのう？」

「調子に乗って関税を維持しなければ戻れるかと。まだまだ何かあると理由を付けて、高くなっている関税を下げなければ僕には保証できませんよ」

これまで戦闘状態が続き、青色吐息なのだから関税を引き上げてないわけがない。

あいつが上げるならば俺は下げて商人を呼ぼうなどとは言えない時期だ、自分も便乗してそこそこ……のつもりで緋家全体で怖ろしい程の関税を取っていたと思われる。

そういう訳で商人は新しい道での安価な、常識的な関税の場所を通って儲けようとするだろう。協力を求めて来たところには、交渉して色々な理由を付けて資金を渡し、関税を下げることを約束させている。ということは関税を上げたまま維持している場所には、行商人は通らなくなるだろう。

「身内には口を酸っぱくして言っておくわい。時流に乗り遅れるとな」

「そうしておいてください。後は中央が馬鹿なことを言い出さなければ、緋家も南領も安泰なんですけどね。……また出兵しろとか言い出さねば良いのですが」

食糧問題と資金問題が片付けば、一足先に片付けた南領は発展するはずだ。

仮に南方鎮台周辺の土地を貰えなくとも、開拓地やら潰れた貴族の土地を分配するだけでも何とかなるだろう。赤字続きで困っている貴族も、理由を付けて金を握らせれば文句は出なくなるはずだった。

しかしフラグというかなんというか、『厄介が無ければよいなあ』という願望を口にする、問題の方からやって来るものだ。

「邪神の徒を狩りだしている……ですか？」

中央で流行り始めたバカ騒ぎが伝わるのは、暫く後のことだった。

魔女狩り

● 最初にその話を聞いたのはその年の終わり。北上作戦の経過を一通り締めくくった時だ。

論功賞はいずれ行うにしても集計は必要だし、経理も担当した僕の報告と大地母神の司教に収まった青悟の報告を合わせなければならぬ。それぞれ単独ならば今までチャンスは幾らでもあったが、各団体での成果が落ち着くまで時間が掛かったのだ。

「まさか既に町が出来ているとはな」

「宿と倉庫だけです。収入が無いので移動可能な家屋をまとめて建ててみただけです」

開拓地を通した新しい街道に、幾つかの建物を建てた。

全て長屋造りで宿泊が可能、場合によっては倉庫遣いして良いとしている。前に貴族たちを接待に使ったプレハブ流用し、移築してまったのだ。開拓地は何もないが宿だけあれば商人は利用してくれる。露天形式でもよければ商人同士で売り買いできるし、倉庫として短期契約してしまっても良い。

そういった収入に献金を足したお金で赤字の貴族たちに補填をもたらし、北上作戦以前のマイナスをどうにかやり繰り可能な範囲で算段を付けたと報告を終わらせた。

「大地母神の教会はいかがかな？」

「経過自体は順調です。アンデッド湧きも収まりましたし、光の教団に資料共々引き継いで置きました。今のところ何とかなってるというべきなのかなあ」

そんな感じで僕の方は赤字縮小を報告し、青悟は順調な経過を報告して終わりのはずだった。

「青悟さん。なにかあったんですか？」

色々報告を負えたのに、青悟の顔色が微妙だった。

普段はそういうところを見せずにもったいぶってるのだが、こういうのは割りと珍しい。何というか自分の底は見せずに良い所だけ見

せようとしたり、お互いの利益になる時だけ面倒見は良い先輩風を吹かせるようなタイプだからだ。

彼は浄化儀式の件で司教か何か、こちら方面を統括する担当の司教になった筈だが……何かストレスの溜まることでもあったのだろうか？

「いやー。言う程の事か、それとも言わなくても良いような？ あるいは言ってしまった方が良いのか微妙な案件だね」

「それなら俺も知ってるぜ。お前さんもこいつも放っておくと困るんじゃないのか？」

青悟は最初は誤魔化そうとしていた。

案件があるとは言いつつも、それほど重要ではない。しかし口にして相談する程の事ではないと言おうとしたのだ。

ここで口を挟んだのは経理報告の妥当性を論拠する代わりに、ついでに南方鎮台の復旧に首を挟ませて欲しいと頼み込んできた南商豪だ。ある程度は知っているらしく、その事が青悟の態度を変えさせた。これまでの間柄では自分の不利な所を見せようとしなかったが、第三者が居ることで隠しても無駄だと思ったのかもしれない。

「あー。事情を知ってる人が居たかあ。ならボクの方から話すのが筋かねえ。……魔王や邪神に操られた者を糾弾し、将来の禍根を絶つかいいうくならない陰謀の芽が蔓延り始めてさ。これが厄介なんだよ」
(魔女狩りか……また面倒な)

結構深刻な問題だが、まだ燻り始めた段階ならば今のうちに判って行幸だと思えばきだらうか？

いわゆる魔女狩りは正義を味方に付けている事が厄介だ。無実を証明し難いどころか、逆に貶めて糾弾する方が簡単である。前世の魔女狩りは98%くらいは間違いだったらしい。正當な方も滅びた現地宗教の名残りじゃないかと聞かれたら怪しい所だろう。

そして何が問題かと言って、この行為はワザと間違って相手に嫌疑を掛ける事ができるのだ。挙句の果てに拷問や密告で嘘の証言を引き出し、証明を兼ねた拷問で死ねば無罪・死ななかつたら有罪なんて馬鹿な例もある。

「その件で重要なのは嘘の証言や勘違いで裁判に掛ける事が可能で、それを止める者が『邪悪な者の追及をどうして止めるのだ、お前自身が邪悪ではないのか?』と言えてしまう事ですね。気に入らない村人どころか、商人がライバルを蹴落としたりもできますから」

「そこなんだよねえ。問題だとは思うんだけど、正面から止め難くて」

こういう所を見ると青悟もおぼっちゃんであり、貴族の子弟というのが伺える。

彼はあちこちで出始めた、『魔物に協力した村人を捕まえろ』とか『俺の倉庫は燃えたのに、どうしてあいつの倉庫は無事だったんだ!』みたいな意見に振り回されているだけなのだろう。大地母神の教会は下々の者に関わる者が多く、早い段階で耳にしてもおかしくはない。

この様子だと青悟は偉くなったことで、そういった話を持ち込まれたのだろう。そして対処し難い問題の解決を迫られていると言う訳だ。『自分自身が対象にされる』と想像していない辺りが実にお坊ちゃんである。

「だろ? 俺らみんなに共通する問題だし、サッサと対策しちまおうぜ」

「ボクらも? 村人とか町人の話じゃなく?」

「ですね。東領や南領が無事なのは魔王と取引したからに違いないとかどうです? 勿論やろうと思えば西領出身者でも嘘の証拠と証言で罪をでっち上げられますよ。究極的には大地母神教団の一部は邪神に乗っ取られ、協力したうちの神様は使い魔だとか言われかねません。外の国から来た商人なんか良いですね」

南商豪がそういった方向にアンテナを立ててるのは被害に直面し易いからだろう。

彼は外の国の人間なので、逃げる場所こそあれどこの国の中では理由を付けて迫害され易いからだ。貴族の息子であり何かと守られ易い青悟と真逆の立場である。

ともあれ彼らのおかげで情報が早めに手に入って助かった。もし

理由を付けて中央に呼び出された後に、適当な密告で捕まえられたらどうしようも無かったからね。

「銀。今の話は本当なのか？」

「悌さま。可能性としては高いと言わざるを得ません。政敵を葬る方法としては非常に効果的な手段です。僕らは理由を付け易いですしね。それに戦場での流れ矢が一矢だけなら誤射の可能性がある様に……一回だけなら誰でも良いと思いませんか？」

言われるまでは気が付きもしなかったが、言われてしまえば前世の記憶を参照できる。

歴史でも物語の中でも魔女狩りと言うのは始まってしまえばどうしようもない。狂熱がバカ騒ぎを呼び起こし、いつしか発起人の足元にも火を点ける。何しろ財産を奪い商売の利権を奪い、復讐やら追い落としが簡単にできるのだ。雇われた事のある人間に金を持たせ、『あいつは邪悪な儀式をしていた』と偽の目撃証言をさせれば良いのだから。

そして確認の最中に攻め殺すことを目的として、『死ななかつたら有罪、死ねば無罪』と拷問を掛ける事ができる。恐ろしい事に『拷問しても生きていたので有罪だったが、罪を告白したので断罪した』と言って『聖なる力で処刑した』と言い張ることも可能なのだ。

(まあ前世の歴史とか物語の話もゴツチャゴチャに覚えてるからアヤフヤな部分もあるんだけど……。でも可能なのは確かだよな)

問題なのは、邪神の徒を狩り出す話が今までもあったという事だ。これまではそこまでやらなかったとしても、『使える』と思つた中央の貴族がそういう流れを作らないとは限らない。何しろ現時点では南領が一人勝ちと言うか、被害者枠から一抜けした所だ。川の多さで防御し易かった東領よりも、将来性だけなら上かもしれない。

ましてや辺境開拓という手段で、これまでの負債と傘下貴族の不平を別方向に反らせているのだから。

「でもどうかかな？ ボクらはアンデッドの被害を何とかしたじゃない」

「その辺は言い訳次第ですね。『浄化儀式が上手く行ったのではなく、

アンデッド召喚の儀式を中断したのだ。嘘だと思えば証拠を見せてみる』と、本来証明する側が、できるはずのない側に対して証明を要求したらどうしようありませんから。相手の長所を短所であると切り切るのがコツになります」

いわゆる悪魔の証明は覆しようがない。

この例の場合はアンデッド湧きが持続しているシステムがあるとして、打ち消す方法を僕は取った。この時に湧かせている儀式を誰かが中断した可能性はゼロではないのだが、そんな事を証明するのは本人以外は無理なのだ。仮に可能だとして儀式の実行者本人か、対戦経験が多い光の神殿くらいなものだろう。

「ではどうするのだ？ このままでは中央に赴くのは危険、理由を付けて行かないのも逆説的に肯定できてしまうが」

「幾つか案がありますが時間が掛かります。それと本当にそうなるとも限りませんので、積極的に動くと着想させてしまう事になります。暫くは対抗策を実行するために、方々へ連絡しつつ様子を見ましよう」

「悌さまが不安そうに尋ねて来るが、こればかりはどうしようもない。」

水棲種族の件を穿った目で見られても困るのだが、逆に言えば一番危険な時期では無くて良かったと考えるしかない。言い訳の弁論と、魔女狩りを起こさない為の方策を実行しながら様子を見る事にした。

だが燎原の火の如く、このバカ騒ぎは燃え広がっていったのである。むしろ騒動を計画したのが魔族ではないかと思うほどの勢いで……。

必要なのは消火方法ではなく、防火対策

● あれから南領にも邪神の徒狩りがやって来た。

その間に色々調べたのだが、ある意味で納得できる内容が判った。中心になつているのは西領の人々と、特にその管区を扱っていた光の神の教団ほか一部の神官である。要するに彼らは故郷を追い出され、あるいは故郷に親族を残して逃げ出さざるを得なかつた人々だ。

魔族にも恨みを抱いているだろうが今は反撃出来ないし、唆されて仲間を陥れた者を許せないのは当然だろう。ついでに言うとな神官たちは自分の教区を失つて権益も何も無いのである。

「なるほど。これでおおよその経緯と構成は掴めました」

「そうは言うけどねえ。逆に言えば引かないって事じゃない？ 君らが前に言つたことが本当に起こり始めて気が気じゃないんだけど」
いつもは澄ましている青悟が青い顔をしている。

彼は南領の教区担当だが……大地母神の教団なのでそれほど発言力が強い訳ではない。長くその地位にいたわけでもなく、北上作戦で浄化儀式を行ったからだ。邪神の徒狩りが南領にも飛び火すれば急に名声と地位を得た彼が嫌疑の対象になりかねないし、そうでなくともこちらでの問題を収めなければならぬ立場なのだ。

要するに疑いを向けられつつ、同時に中間管理職として彼らに協力をしなければならず、同様に教区の信者も守らねばならないのである。情報が固まり次第に僕の所にすつ飛んできた。

「いえいえ。この情報が無ければ面倒なことになって居ましたよ。これで対策は立てられます。対抗手段ではありませんが対処療法以上なのでひとまず安心できます」

「本当？ 双羽くん。信じるからね！」

男に抱き着かれても嬉しくないので適当にあしらつておこう。

彼には悪いがあくまでウイルスに対するワクチンのようなモノだ。魔女狩り状態になり難くする為の手段であり、捕まって嫌疑を掛けら

れてから何とかする手段ではないのだ。

急ぎ手紙を三通ほど書く準備を行い、同時に過去の資料から幾つか取り出して参照用に同封することにした。本当は冒険者ギルド用にするつもりだったがこの際、無償で提供するしかないだろう。

「悌さまを通して紅家から南領全体に話を通しましょう。同様に青悟さんも大地母神の神殿や、東領や中央のコネがある領主に手紙をお願いします。いいですか？ 彼らの目的を逆算すれば、邪神の徒狩りをいきなり止めるのは無理でも、これ以上の延焼を避けられます」

「……言いたかないけど、向こうは向こうで大変なんだよ？ で、どんな案なんだい？」

これから重要なのは『情報の共有』と『法秩序』である。

邪神や魔王にそののかされた者を探し出し、宗教裁判に掛けて処刑したいなどと言う者はそう多くないのだ。あくまで西領出身者の不満が爆発しているだけであり、西領奪還こそが大本なのだ。中央を牛耳る西大公とその部下たちにとっては、旧領回復に向けた声は自分を応援する声なので放置しているだけだ。

これに加えて一部の邪な連中が権勢や財貨を奪うために便乗しているだけで、西大公たちも都合が良いから黙認しているのである。

「彼らの勢力を三つに分割してやり過ぎします。一つ目は西領奪還派、これは作戦自体が軌道に乗れば自然と収まります。『そんな事よりも西に行こう！』と計画書や賛同者を集めれば勝手に味方になってくれるでしょう。問題なのは二つ目の、他人の権力や財産目当ての寄生虫ですね」

「西領奪還はまあ納得は出来るかな。でも二つ目は難しいよ？ みんな目の色変えてるからね」

今すぐ西領奪還しろと言われても困るが、面白い事に出来たら口にした方が困る。

何しろ南領に費用と兵を負担させて疲弊させたくとも、速攻で攻略したら領地を奪われるかもしれないと思うからだ。実際に北上作戦では速攻を掛けたし、位置関係的にもその根拠が十二分に保証されている。そして不満を上げている者たちにとっては『未来が見えないか

ら不満』なのである。

もし五年後くらいに確実に奪還可能な作戦を立てているとしたらどうだろうか？ もっと早くできないのかと言う者は居ても、その流れを止めようとする者はいないのだろう。だから重要なのは、欲深い篡奪者たちへの対策である。

「邪神の徒が魂を売り渡し、財産や権勢を築いている。だから奪い返すのは当然という、法に基づいていない行為が罷り通ってるのが問題なんです。盗賊団や敵対領主を倒した時の慣例が踏襲されているだけですからね。ですから全体に話を通して、没収できないようにしましょう。それで幾分は収まりますよ」

「あっ……」

魔女狩りで大商人や小貴族を潰したとしよう、その財産を奪って良い法律などはない。

ただ盗賊団や敵対する貴族を倒した時、その地域や財貨を奪う権利は打倒した者に与えられる慣例はある。もちろん何処かの固有財産と判明して居れば、返納することを求める慣例もあるわけだが……。この慣例を強引に適用し、同時に後継者をも処刑することで有耶無耶にして没収しているだけなのだ。

だから予め、それらを法令で定めておけば良い。貴族の土地と財産は国庫に、商人ならば商会なり組合に渡るといふ法律。後継者を拷問してはならないという法もかな。

「奪っても自分の物にならない。そんな法律があれば無理を通したりはしませんよ。有力者や聖職者個人による強引な裁判を禁止し、嘘の密告に対して厳しく当たれば尚の事です。その場で言っても言い訳と取られるだけです。南領全体であったり、東領も含めた全国区で話を通したらどうでしょうか？ もちろん光の教団や西領出身者も奪還戦の話で巻き込みます」

「その手があったか！」

下書き用に木の板を使って、そこに判り易く案を書いていく。

重要なのは『邪神の徒を狩りをやって良いルール』と『本当だった場合と冤罪だった場合の対処』を明文化することだ。それらを受け入

れるならばやって良いし、むしろ積極的に協力しても良いと告げる。もちろんそこには時間稼ぎや対象者隠蔽の内容なんか入れない。あくまで宗教裁判をやるルールであり、冤罪防止用でしかない。

例えば邪神の徒を狩り出す裁判を行う場合、異なる宗教教団複数からなる司教や神官数名が必要。裁判に寄らぬ拷問での自供強要と、密告や自供のみを証拠とした処刑の禁止。密告が本当で数々の証拠が上がれば報酬を得ても良いが、裁判の間は同席する事。そして嘘だらえの冤罪だった場合は逆に処罰されることを盛り込んでおく。

「でもさ、前に言っただけでなかった？ 相手の長所を短所であるかのようにいうのがコツだって。厳密なルールを口にするのは、お前たちが邪神に教えてもらった方法だと言われたらどうするのさ？」

「ですから先に明文化し、内容そのものは妥当な内容するんです。この法を持ち出しても対抗手段にはなりません。冤罪を掛けようとする者の絶対数は減りますからね。後は……そうですね。その時に口にした内容だけじゃなくて、『前後の行動』を参考にしてもらおうのほうでしようか？」

陥れる時は何でも理由が付けられる物だ。

例えば『泣いて馬謖を切る』という話があるが、コレを逆にすることも可能な訳だ。命令系統を糺すためにあえて非情に徹した行為を、自分の命令を聞かない者は愛弟子でも斬り捨てる権力欲の亡者と言うこともできる。だから冤罪そのものを一気に減らすわけではなく、あくまでワクチンであり、ウイルスの脅威を受け難くするだけである。

しかし彼らが来る前に明文化すれば、その場しのぎの言い訳ではないことになる。そして悪事を働いたとされる者が、本当に悪事を働いたかどうかは『行動の全容』で判断するしかないのだ。

「前後の行動？」

「そうです。これまでまったく悪事を働いたことのない商人や貴族が、僅かな期間だけ召し抱えた配下に密告されたとしましょう。現地を調べても対象者を良く言う者は居ても、悪く言う者は居ません。逆に密告者の記憶がない、あるいは怠け者だったら？ まあ冤罪を掛け

られた者の全員が全員そうではないでしょうし、本物のスパイなら情報だけを提供するでしょうけどね。例として青悟さんの場合は判り易いですよね」

無自覚に嫌われる人も居るが、おおよその冤罪はこれで防げる。

社員を薄給でこき使うブラック企業でも無ければ、そこまで現地で情報が悪くはないだろう。少なくとも、陥れる方はそう思う可能性は高い。ましてや冤罪を着せたら罰せられるならば、無理して冤罪を着せることはないだろう。

「青悟さんで言えば浄化儀式をしますし、光の教団にも成果を引き継いでるでしょ？ 邪神の徒からすれば、この国を困らせたいならアンデッドは放置すれば良いし、成り上がる手段ならば途中で光の教団に任せる訳はありません。同じことが僕らの様に、アンデッド退治で協力した諸卿にも言えますよね」

「そういえばそうかなあ……」

僅かな代価を求めて戦争する馬鹿は居るので一概には言えないが……。

物事には効率と言う物がある。金貨百枚を一時的に得るために、金貨一万枚を消費したり、これまでの商売を捨てる者は居ないだろう。青悟を例にする場合は、邪神の徒として絶対にありえない行為なのだ。それこそ勇者を今すぐ殺せるとか、滅ぼす寸前でもない限りはありえない。

そして積み上げと言う意味では事前に証拠を残して置けるし、これまでの行為そのものが重要なのである。

「僕や仲間たちは南領の安定、ひいてはこの国のために動いてきました。大地母神の教団を通して入植者を助け、アンデッドを浄化した青悟さんは尚の事。せっかくですから西領を奪還する作戦を幾つか用意しておきましょうか。その状態で僕らを処刑しようという連中は限られると思います」

「それもそうだねえ。……なるほど、だからこそ話を通しておくのが重要なわけか」

ようやく青悟も元の調子を取り戻し始めた。

目線は僕が引つ張り出した資料の方に注がれている。手紙の内容自体は伝達事項なので大したことはないが……。資料の方はアンデッド討伐や、精霊やら昆虫型の魔物対策のデータである。こういった物を用意し、周辺に配る者が魔物の手先であるわけがないのだ。

僕に関して言えば、緋雁原や南方鎮台で『迂闊に結界で塞いだら二次災害が起きる可能性がある』と発言し、思わぬ事故を防いだ発言がある。それだけならば時間稼ぎにとれるかもしれないが、その後にはちゃんと魔物は退治して居るし、南領からアンデッドの被害を終わらせたのだ。採算どころの話ではないだろう。

邪神の徒対策を整えたわけだが……。敵（仮）の方が一枚上手だったと言えよう。

南領の中で重要人物を処刑できないと判断し、叙勲という実体性のない罫で中央に呼び出しを受けたのだった。

嵌め手と対抗策

● 嵌め手と言う言葉がある。遊戯盤においては危険を伴う大掛かりな罠にかける事だ。

これが陰謀になると『クレバーな手段を取る限り、抜け出せない罠』と言う事になる。どの選択肢をとっても最終的に、指し手の意向に沿うようになつていくわけだ。

今回の一件で言うと『西領の奪還』がソレに当たるだろう。魔女狩り問題を誰が仕組んだかは別にして、最大級に利用している西の大公がソレを望んでいるからである。

「西領を奪還する事に異議はない。だがな、誰もが銀殿の様に懐が温かい訳ではないぞ」

「厳しいのは僕もですよ。ですので今回の肝はいかに準備時間を得るかです。我々は少しでも時間が欲しく、中央からすればさっさと攻めさせたいでしょうから」

武門の筆頭である緋二広ですら苦言を呈する現状。

僕らが所属する緋家はアンデッド湧きを食い止め続けて青色吐息であつた。過去形になつてはいるがようやく持ち直したばかりで、僕の領地が黒字なのはあくまで新興でそれまでの借財が無かつたからだ。肝心の人口からいえば、他の領主の半分以下である。

本当のことを言えば誰も出兵など口にしたくもない。しかし魔女狩り問題から確実に逃れる手段が西領奪還を口にする事なのだ。隣人を邪神の徒であると疑い自らも疑われるような状況になるよりも、西領を奪還する計画を建てる方が健全なのだから仕方があるまい。

「それは判る。しかし時間稼ぎなど認めぬだろう。銀殿が口にするように、西……中央としては一刻も早い旧領回復が目標なのだから」

「ですが成功度という点では如何でしょうか？ その点突いて五カ年計画を提唱します」

「五カ年計画？」

ここで僕は五本の指を立て、同時に簡単な計画書を全員に配る。

五年の計画を五つ組み合わせ、五年×五の二十五年を掛ける計画だ。もちろんこれを全部通せるなどとは思っても居ないのだが……冒頭に、『最大計画であり、これを少しでも縮ることが目標』と記載しておいた。要するに商人が最初に吹っ掛けるのと同じと言う訳だ。

同時にもっと短いペースでの作戦も立ててあり、こちらを通すための予備計画だと言えなくもない。

「準備に最大五年で、勝利にも五年か……。これなら悪くはなかろう」「はい、梯さま。兵と兵糧の準備、そして確実に勝てる様に偵察を行います。魔物の戦力から始まり、その構成や配置を調べて勝ち易きに勝利していきます。確実に勝てるだけの戦力と情報を用意するとして、兵糧や軍資金込みで五年もあれば十分でしょう」

懐が寂しいのが今だが、五年後ならば話は別だ。

利子付きの借財は返しているわけだし、領内経営も元に戻り始めているだろう。その状態で兵糧を集めつつ徴兵する予定の領民たちを鍛えておく。途中で費やす金込みで五年もあれば問題なく用意できるし、その期間を利用すれば情報だってそれなりに集められるだろう。

要するにこの計画は緋家を始めとした諸侯の立場に立った計画である。無理せず勝利をもぎ取り、代わりに西領奪還での功績を大きくは主張しない。主張するとしても十五年後から二十年後に掛けて回収するという、西領にとっても無理のないペースで行うと書いておいた。

「……我らとしてもこのペースならば何の異存も無いじやろう。むしろ功績に逸る者をいかに制するかを問題とするかのう。しかし、この計画は通るのかの？ 舌先に載せるのも躊躇われるが、この老骨が夢物語ではないかとあえて尋ねよう」

「五堀さんのおっしやることも当然です。中央が急ぎたいという気持ちに真っ向から反して居ますからね」

この五カ年計画が認められるのはあくまで諸侯だけだろう。

西の大公もだが、場合によっては彼らの面倒を見ている東の公爵も

文句を言う可能性がある。これまでのマイナスが清算出来たのはあくまで南領だけなのだ。西領は占領されたままで、東領は被害こそないが多大な出費を支払い続けているのだから。彼らからすれば最初の五年ですら長いだろう。

彼らの抗議を食い止め、説得するために本命の計画がある。しかしこのまま戦っても勝てるかどうかはともかく、損害と出費は天井知らずだ。これを食べ止めなければなるまい。

「奪還に向かうとして問題なのは勝てるかどうかです。出兵したは良いが五万も集まらず魔物に敗北。二度と立ち直れなかつたではすみませんからね。『戦う前から勝てないとぬかすな』と怒る將軍もおられましょうが、魔物が一万存在する場合は五万ほどでは怪しいでしょう。努力すれば五万以下に減らすことも可能かもしれませんが……決して三万を下る事はありません。まして同数では全滅しろと言うような物です」

この国が傷付いていない時ならば十万は集まるだろう。

しかし現在は穀倉地帯の西領から中央の諸侯が疲弊している。西領などは占領下であり、敗残兵が中央まで後退している有様なのだ。頑張っても出征用に五万、領地を守るのに数万というのが限界だろう。諸侯が賛同しなければもつと少ないままであった。

そしてこの数字は居並ぶ諸侯が漠然と感じている数字である。急な出兵で五万も集められれば上出来、場合によっては三万ほどで取り返せるだけ取り返せ。先方は比較的無事な南領から出させよう……その時の戦力は出兵なら一万が精々だろう。

「だ、だが相手も無事とは限るまい。魔王が倒され一万は居たとして精銳は既に居らぬはず。殆どが下級の魔物なのではないか？」

「その保証はありません。弱兵を突くとして、その為にも情報が何より重要なのです。相手がゴブリンばかりならば同数でも勝てるでしょう。しかしオーガが混ざればこれも怪しい。もし精霊やら死霊が千居たらどうします？ 千の為に我々はなす術なく倒されるでしょう。情報さえあれば勝てるのです」

「精霊……雁どもと同じ存在か」

判り易い例で精霊を持ち出した。

精霊は物理攻撃が通じないので、千も居たら一万どころか五万居たとしても死体にしかならない。そして何よりこの緋家がある緋雁原には炎の精霊が名物なのである。少し遠出すれば見かける事も出来るだろう。

結論から言えば出兵までに何より情報、その間に兵糧と軍資金の準備は絶対に必要だ。そして精霊やアンデッドを蹴散らして対処して来た僕の経歴を考えると、『精霊や死霊がそれだけ居る筈もない。居る筈もない魔物に覚えるとは愚の骨頂』というのは難しいだろう。

「言いたいことは判った。情報が重要として……どうやって集める？手段が無ければ上を説得も出来ぬが」

『戦闘よりも探索を得意とする冒険向きの傭兵を中心に送り出します。僕は冒険者と呼んでおりますが、それぞれの得意とする技能や魔法を示し合わせた分隊のようなものです。魔将の能力までは調べする必要はありません。重要なのは部隊の配置分布と、その性質なのですから』

ここで僕は思い付く限りの魔物の情報を伝えた。

この世界で見たことのある魔物は確実な情報として、見たことの無い魔物は噂として書類に一括記載してある。おおよその戦闘力を兵士換算して、ゴブリンで民兵一人分、オーガならば正規兵五人から民兵十人以上としたわけだ。もっとも精霊などは特殊能力が重要過ぎて、物理攻撃が効かないとか魔法主体と言う程度なのだが。

こうした会議を繰り返し、諸卿を説得して出来るだけ準備期間を取る。敵兵は侮らないという事で一致した。それ以上は中央の意向次第なのだ。

そして……大問題が僕を呼びつけるのはこの暫く後である。

「叙勲……ですか？」

「ああ。正式な男爵位に加えて低級ながら將軍並の参謀格を示す勲章。それと南方鎮台付きの軍師としての紹介を行うそうだ。嬉しいか？ 我が世の春に見えなくもない」

「空虚で無ければですね」

緋家の組下の寄子としての男爵格ではなく、正式な男爵。

千人隊長レベルの下級な将軍に匹敵する軍師としての称号。それらはこの国がまともだったら意味があるものだ。ガタガタなので意味はなく、南方鎮台に至っては再建中であり兵士など提供できもしないのだ。

こんな物を貰って嬉しいはずもなく、そのために中央へ呼び出されるとしたら迷惑と言う他はなかった。しかも断るわけにはいかないのが輪をかけている。

「ボヤくな。それでどう思う?」

「大公閣下の思惑は出兵論に火を点ける事でしょう。同時に南に居る者を叩いておきたいというところかと。悌さまや侯爵さまを叩くと後始末が大変ですが、僕ならば幾らでも理由をでっちあげられます。でっちあげない代わりに積極論に切り替えろと言う事でしょう」

今回の流れは西の大公が利用していた。

彼からすればこの国全体が西領を取り返しに向かい、自分の目の黒い内に故郷を奪還。そして元の豊かさを取り戻せば良いのだ。逆にいえば僕が何をしようと、最初から彼の掌から一步も出ていなかったと言える。何しろ魔女狩りを抑える一番の方法は、西領出身者が持つ帰郷の念に訴えかける事だったのだから。

断ったら魔女狩りを止めさせようとしたのは、僕が邪神の徒に他ならぬと断定する気だろう。悌さまは庇った罪で隠居、嫡子を弟の連さまに譲れと言うに違いない。そして僕を斬り捨てることで、その命令を撤回するということで妥協させるはずだ。

「ではどうする? どうやっても来年中に出征するのは無理だぞ。他ならぬ二羽自身が申しただろうか?」

「本命の作戦案を提出しますよ。海から攻めればあの計画は半分で済みますので」

前に少しだけ口にしたと思うが、西領もまた海に接している。

紅家と同じかそれより大きい程度だが、領土のある程度を海に面しているのだ。仮に水棲種族の協力を得て、陸路と同時に海から攻め込めばどうだろうか? 少なくとも主力を一方面に張り付けるのは不

可能だろう。他国の力を借りると後が大変だが、陸上が苦手な水棲種族ならばそう危険ではない。

そして彼らを説得できるコネがあり、同時に現時点で彼らに生じている問題に提案ができる人間はそれほど多くはなかった。もし処刑されそうになった場合でも、保険にはなるだろう。

同行者

● 呼び出されたので都に行く準備をしながら資料をまとめる。

到着した直後から強引に軟禁される可能性も考えられるので、紅梓は後から合流し剛盾は残留してもらおう形だ。捕まったら脱出するのに協力してもらったり、場合によってはエルフやドワーフと協力体制にあるという証言を貰う為である。

万が一に備えて指南車モドキを作る準備をしておき、対象を何にするかだけは決めておく。僕以外が捕まった時はその都度に決められるが、宮城に出仕した後に僕が捕まった場合はどうしようもない。その時に備えて指標は僕であり、おでかけ前に最大限の魔力を注ぐことになるだろう。

「どーして央都に行っちゃいけないの？」

「捕まる可能性があるからだよ。『お代官さま』も呼ばれてる可能性もあるし、できれば止めた方が良いと思うなあ」

親しき仲にもパンチあり、というのが外交の基本らしい。

お互いに牽制しながら一時的に手を結ぶというのが外交の在り方で、最初にむりを主張したり相手の弱みをチラ付かせてから交渉に入るらしい。これが親しい貴族同士ならば話は別だが、中央の貴族と仲が良いはずも無かった。なお『お代官さま』というのは故郷に居た時の代官だ。双葉が妾にされそうになり、一緒に逃げる事になった原因である。

なお都である央都は正式には夏都と呼び、この国の名前は第二王朝『夏』という事になっている。群雄割拠前にあつたらしい大きな王朝を春王朝と贈り名し、自分たちが継いでいると謡ったのだとか。もし今の貴族の中から次の王朝が勃興した場合、秋王朝にでもなるのだろうか。

「うっ嘘だ！ 騙されないもん！ 一人だけ美味しい物食べるのってズルイ！」

「騙してないってば。それに中央は光の教団の影響下だから基本的に

美味しくないよ。知ってるでしょ」

「あー」

前にも言ったかもしれないが、邪悪な力の影響を抜くために素材を煮込み過ぎなのだ。

産業革命直後のイギリス料理の様に、クタクタに煮込んで悪影響を乗り除く。これをスパイスで無理やり味付けしてる訳なので基本的に美味しくない。傭兵時代に双葉が怒った時、奮発してできるだけ高級（だけど一見さんを断らない程度の店）に行ったことがあるが、技巧に凝ったりスパイスの差を感じ取るような物であった。おそらくは宮廷料理でも同じだろう。

僕は元日本人だから薄味は大丈夫なのだが……旨味どころか素材の味がしない料理はできるだけ食べたくない。岩塩が採れるらしく塩だけは豊富なんだけど、しよっぱさで誤魔化すのにも限界があるからね。

「それなら我慢するけど……。こっちで誰かに作ってもらっていい？」

「別にいけど砂糖の使い過ぎには気を付けてね。カaramelは特別な理由が無い限り作成禁止。カリントウとコンペイトウはもってのほか」「ケチー」

そんなこんなで人質に取られ易い双葉は村で待機してもらおう事にした。

ここに居ればイザとなったらエルフの領域に逃げられるし、双葉が居れば僕の判断かどうか判り易いので、代官の黄三硯も他所の貴族に強気に出れるしね。

代わりに同行してもらおうというか、お互い様と言う感じで協力し合う予定なのが紅包さまだ。彼も先の北上戦で活躍したという理由で呼びつけられ、僕と同じように都行きを求められている。場合によっては南領からの人質扱いされかねないので、僕が西領奪還の話をする時に、彼の話を返して戻る為の道筋を作る予定だった。

（紅家の使節に、都にある緋家の屋敷、そして南領と仲の良い貴族たちへの挨拶と進物。……ここまで用意して置けば、いきなり拘束されな

いとは思うんだけどな)

一番困る事態と、一番されたくないことは違う。

されたくないのは拷問であり、双葉を捉えられて脅されることだ。しかし軟禁されて僕が人質になったり、作戦書だけ書かされるといってもできれば遠慮したいところだ。それさえ除けば勲章だの褒章自体は無くたって良い。

南領の諸侯押しでは戦争に駆り出されて赤字続きで人死にも出るというのは困りものだが、極論を言えば最悪の事態ではないので許容範囲だ。そういう訳で双葉が人質に取られたり、僕が軟禁されてもう会えないとかいう事態だけは最優先で対処しておいたのだ。

「剛盾さん。例の物は完成した？」

「二応は……というところかろう。ただのガラス板なら簡単なんじやが、それでは意味がないんじやろうしな。今のところは目が悪い奴が昔に見れた場所を、時間をかけて元の様に見える程度だの」

剛盾に残ってもらうのは協力関係を証言してもらう為だが、とある品が未完成だからだ。

透明度の高いガラス製品を作れるようになった時に考慮はしたが、優先度は低かったので手も付けてはいなかった。西領奪還作戦の話が出た辺りで研究し始めたものなので、完成して居なくても当然なのだ……。

作ってもらっているのはレンズである。万華鏡を綺麗に見せる程度にしか考慮して居なかったし、これは鏡の方がメインだったので技術レベルには大したことが無かったのだ。

「しかしレンズなんぞ研究して何をするんじや？ 文字を大きく見たいわけじゃあないじやろう」

「大きくしたいのは遠くの光景だよ。レンズを二枚作って万華鏡……覗き鏡みたいな筒に入れて遠くを眺めるんだ。そうすると相互に影響しあって遠くの物が近くに見える。冒険にも戦争にも航海にも使える便利な道具だよ」

要するに欲しいのは望遠鏡だった。

遠征する時に役立つが、それ以上に偵察の時に有益だ。相手の総数

とか魔族を調べたい時に、近寄って精査するのが一番だが危険性を考えるとそうもいかない。一人・二人ならば神の祝福で鷹の目だとか蛇の目などの加護を持つ者も居るだろうが、広範囲かつ安全な距離を考えるとどうしてもこうなるのだ。警備の方だって無能であるはずがない。簡単には覗けないし聞き取ることも難しいはずなのだから。

それゆえに何人もの人間が望遠鏡を持つことが有望なのである。隠密が得意な者が遠くから観察し、あるいは色々な建物に潜んで、相手の総数を確認しておくのである。

「誰もが蝦衛視くらい視力を持って、蝦衛視ならさらに遠くを見れる。そういうのができれば理想的だけど、遠い方は急がないから奪還戦に間に合う程度のペースでお願いします」

「まあそういう事なら任せて置け。ワシらとしては小さい物を見る方が面白いんじゃない」

ひとまず説得材料ではないので望遠鏡は急がない。

贈り物にするだけならば研究中のレンズで十分だ。どこの貴族の所領にも目が悪い人間は居るし、行った先で渡せば向こうで勝手に受け取り手を探すだろう。

こうして最低限の準備を整えた僕は、尋ねる先の分＋@の手紙と贈り物を用意して都に旅立つことになった。

● この旅は出掛ける前から暗鬱だったが、途中から頭を抱えなくなつた。

合流予定だった紅包さまに、余計な人物が二名ほど増えたのである。先に言っておくが大通連は最初から連れて来ていないし、ついて来られても困るので望遠鏡の試作品と一緒に大弓を渡して狙撃の練習をさせている。

簡単に言うると予定外の人物が都行きに同行したが、同時機にやって来た客人(?)が僕と同行を宣言してしまったのだ。

「これはどういう料理なのかしら? あなた説明してくださいさる?」

「料理など食べられれば十分。食物に感謝していただくべきですのに、なんたる不信心。異端者はこれだから……」

「ははは」

移動し始めて数日目、何日目かのやり取りが始まった。

余計な二人は勝手に同行して勝手に馬車に乗り、拳句の果てに勝手に宿に予約していた。そこで料理を食べるだけならまだしも、味やら料理法に文句を付け、じゃあ僕が料理するから野営しようと言えば……この有様である。

どちらも僕から見れば目上に近い相手であり、敵にも味方にもなる人物なので敵対する訳にはいかないという難しい相手だった。

「これは魚の身を磨り潰してそれを丸く固めた物です。それを煮込みだり燻したりして大地を呪った邪悪な力を抜き出し、もう一度煮込み煮込み直した物ですね。それと僕は光の神の信者ではありませんので、異端認定は止めてくださると助かります。 猯下」

「そういえばそのような事を言っておりましたか。本当に小神の徒であれば良いのですがな。それと私は一介の司教です。猯下などとは恐れ多いので止めていただきたい」

難しい相手の一人目、光の教団からやって来た司教である。

僕の異端審問を行うという命令に対し、都で待つのではなく南領までやって来た奇特な人である。厳格で謹厳実直、そして清貧を旨として僕の行動に一々文句を付けてくれる。

この人物と出逢ったことに対する良い面と悪い面は、交渉とか賄賂とかそういうちやちなモノは全く通じず、言いがかりも拷問もしないが四六時中見張り続けるという面倒な人であった。

（悪い人じゃないし都に入るなりと捕まるよりマシだけど……。どうみても窓際の人だよね。押し付けられた貧乏籤を真面目にやるし、しかもこの人を説得しても証言に価値無しとされたら一緒なんだよなあ）

名前を黄二志と言い、黄三硯の隣の町出身の司教である。

管区はとくになく大司教の補佐を務める無任所の司教であり、本来ならばついてきているはずのお供の司祭が同行していない。どう考えても派閥政治に負けた可哀そうな人なのだが、本人にまったくその認識がないのだ。

そしてもう一人だが……。

「あなた。私の質問に答えていただけませんか？ それは素材の段階でしよう？ 見たところ中間状態で二種、和え物らしき汁が複数あるのですが」

「見ての通り片方は煮込みで、片方は揚げ物ですね。添え汁で味を変え、甘味や塩気に苦さなどの違いを愉しむ料理ですよ麗さん。発展形として粥や鍋物に入れたり、もつと大きな料理の添え物としても利用可能な」

もう一人の女性は緋麗。来年には結婚する僕の奥さん予定の人だ。年齢としてはもう数年で三十、アラサーと言うべきだろうか？ いわゆる化粧美人でスッピンになると普通の顔であると思われる。もちろん戦いの才能や魔法の才能はなく、しかも貴族かつ人質暮らしだったので鍛える余地など全くない人物であった。

悪い面をあげるとしたら貴族の良識にドツブリと浸かり、招かれて都に行くことは名誉な事だと信じていることだろうか。ついでに言うとうと貴族の体面から宿の一番良い部屋を取ろうとし、最初の頃は紅包さんとばかりニコニコ話していた。もし貴族的恋愛譚だったら、僕は名ばかりの夫で紅包さんが愛人かなあ？

（あまりの落差に紅包さま逃げちゃったしな。正直、この性格は何とかして欲しい）

最初は紅包さまも合流していたのだが、彼にとっても年上で好みのタイプではない。

その為に所要を勝手に捏造し、早馬に乗って都へと駆けて行ってしまった。おかげでNTRな展開は免れたが、気難しい二人と面談し続けて胃の痛い道中となった。と言うかこの人も捕まったら人質になって助けねばならないのだろうか？

（とりあえず、適当な理由を付けて何処かに隔離しておかないとな。馬鹿じゃないのが幸いだから説得できる……と思うし）

最初こそツーンとしていたが、道中に色々と説明したら納得はしてくれた。

一番高い部屋の料金と道中の予算を説明したら、計算は出来るらし

く青い顔をした。ちゃんと予算と経済観念を緋家の現状込みで説明したら理解を示すのに、何も知らない時は一番高い宿を僕の許可も得ず取る辺りはお嬢様なのだろう。色々と教えていかねば何処かでやらかしそうである。

なお理解は示したが貴族らしい代案を要求された。代案があれば納得する当たり馬鹿では無いが、馬鹿では無いからこそ適当な良い訳だと納得しない。仕方ないのでテロ対策も兼ねて、中間の値段から低ランクの部屋を四部屋くらいぶち抜きで借りる事にしたのは良い思ひ出である。

ちなみにこの人は即落ちニコマ系の人で、都に着くなりお土産の眼鏡を友人知人に配ろうとするやらかしをしそうになった。

策士は策に溺れ、時に泳ぎ切るもの

● 都にある緋家の上屋敷に到着して、面倒くさい事実を通り越して恐ろしい内容を使用人に教えてもらった。なんと旅の途中で麗さんはお付きの者に手紙を出させて、勝手に宴の準備を始めていたのだ。しかも交流のある貴族やら世話になった人を集め、お土産とか面白い話をするとか触れ回らせたとか。

文句を言いたくなかったので遠慮なしに文句を言うつもりだが、苦笑するしかないのは善意ゆえということだ。貴族社会に無知な僕のために、上流貴族だったらやるべきことを代行してくれたそうだ。

「上流貴族たるもの広く社交を持ち、戦場や宮廷でお世話になった方にはそれなりのお礼をするべきですわ。あなたがご存じないから、私が間に合うように手配したまでです」

「それなら最初に注意して欲しかったな。村に……領地に産物を届けさせるとか出来たからね」

招待客の中には北上戦での軍監とか、司教さんの同僚なんかも呼んであるそうだ。

功績を挙げてでも軍監やら巡見使に粗相を働き、あらぬことを密告された例は多いとか、司教さんは賄賂とか通じない堅物だが同僚までそうではないと、上から目線で言い訳をされた。まあ嘘はないだろうし、自分の夫となるべき男に疵を付けない為と理解はできる。

しかし彼女の行動はお付きの者に指示を出しただけで完結しており、僕に相談も事後報告も無かったのだ。

「財政的に余裕があり、お土産にも余裕があるなら話は別なんだ。相談無いのは問題だけど、そこまで怒る気はないよ。でも無い袖は降れない。このままだと良かれと思って最悪の状況になるパターンかな」「終わったことを何時までもグチグチと。あなたは知恵者として名を売ったのでしょうか？　ご自慢の頭脳で何とかして見せなさいな」

あまりの理不尽さに腹が立つのを通り越し、一周回って冷静になって来た。

何と言いか生前で読んだフィクションにもよくあるけど、高飛車なお嬢様の話って正論も暴論も等しく腹が立つよね。自分の暴走がキツカケなのに、それに文句を言ったら男の愚痴はみっともないと返すとか苦笑する他はない。

ただこの手のタイプに下手に出るとか、いつか判つてくれるというのはダメだ。転生してからその事は良く判つたし、生前も流されてナアナアで終わらせたときは逆効果だった。

「まあ……何とかするしかないんだけどさ。実際にはお土産がなく資金も怪しい状況だけど、逆転の手を打つ代わりに約束してもらおう事が一つある。当然の事は以降、勝手に行動しない事。僕はその手の討論に成れてるからね。むしろ言われぬより、言われて相談する方が良い」

「……変わった方ですのね。普通は気が付く前にやっておけとか、逆に余計な事はするなとおっしゃるのに」

この世界の貴族は奥さんにそういうことを期待するらしい。

面倒な裏方作業を人知れずやっておけとか、何もするな自分の指図通りに動けと言うらしい。もつとも僕は転生者で常識が色々違うし、この世界でも傭兵暮らしが長かったから男女の区別なく討論はするんだけどさ。

ともあれ麗さんも僕の言う事は理解したようだ。あるいは無いない尽くしの状況をどうするのか様子見というところだろうか？

「ひとまず眼鏡の方はサンプルを並べて覗き込む体験会にしよう。その上で自分の視力に合う現物を後から贈る。予備や友人に欲しい場合は買ってもらうけどね。この方法ならば数は要らないし、手垢が着いた物は贈れないからね」

「なるほど。そう言えば旅の途中で使った時は中々合いませんでしたわね」

お土産である眼鏡の事を麗さんが知って居るのは僕が見せたからだった。

どうやら僕がこういうのを持っている事で『周知しておけと言われた』と思つたのだろう。どうしてその状況で『伝える』という指示の

可能性の方を優先したのか不明だが……。

確か王女様の侍女として行儀見習いしてたんだっけ？ どうみても人質なのだが、そういうことを叩き込まれたのかもしれない。

「その方法で縁者の方にお土産を『いずれ』用意するのは判りましたわ。肝心の軍監の方や司教さま方は？ あの方たちは是非とも味方になっていただきたいかしらね。そういう意味でもパーティーに予算を掛けたいんですけど……家に頼れないの？」

「緋家の実情は伝えたでしょ？ 借財は禁止。仕方ないので眼鏡を卸す権利でも売るよ。……あいつを呼ぶのはちよつと気にかかるけど」
まずお金の方だが南商豪にでも眼鏡を売る権利を渡そう。

緋家経由で僕らがばらまくのとは別に、彼にだけ独占的に売ることを許可する感じだね。もし彼が現時点で金を用意できないならば、友好的な商人に接近してもらおう事になるだろう。

その上で残り二人だけ……。

「軍監と司教さんには見せてない別のお土産を渡そう。麗さんには興味なさそうだし、西領奪還戦に関わる軍事物資だから見せない方が良いんだけどね」

「拝見したいところですけど……そういう事なら我慢しておきますわ」

教会の方には魔物の資料とか、浄化儀式とかでの段取りでも話すでしょう。

軍監の方は正直気は乗らないのだが……開発中の望遠鏡でも渡すしかないだろうか？ あるいは梯子さま以外には話していない海路での進軍の話伝えるとか？

いずれにせよこの両者にはハッキリとした方向性があるので、それなりの内容で納得してくれるだろう。土産は土産で現物をくれとか、袖の下を寄せせと言われたら面倒でしかないのであるが。

● お客さんを招待して眼鏡のセールスをしながら、ふと考えたことがある。
今回の事態を引き起こした麗さん自体ではなく、その流れに類似性

を覚えたのだ。これまでは何とかなっているがこれからもそうだと
は限らない。可能かどうかは別にして出来るだけ対処しておいた方
が良いだろう。

武芸者の大通連、商人の南商豪、貴族令嬢の麗さん。場合というか
趣味嗜好の延長上で双葉や剛盾も含まれるだろうか？ 一同がやら
かすのは何故か、水棲種族やエルフたちがやらかさず時として南商豪
も見える範囲に収めている基準は何だろうか？

「もしかして僕って舐められてる？ もしくは好き勝手にしても怒ら
ないと思われてるとか」

「何をいまさら。対処できる範囲というならあんたの魅力って事でい
いんじゃないか？」

「そういうものかな」

酒を片手に頷いたのは南商豪だ。

眼鏡の権利を売る話をするために呼んだら、他の商人や貴族を連れ
てグレーゾーンな技術給与の商談を持ってきやがった。おかげで懐
は温かいが、貴族から話を聞くと結構突っ込んだ内容までベラベラ
しゃべってくれて苦笑するしかなかった。

結果的に麗さんと同じ『僕の利益になる範囲』で留めてはいる。し
かし独断で動いたのは同じだし、もし僕が中央の貴族に捕まったら
承諾を待たずに売り払っていたような気もする。解放されたら提供
はしてくれたのだろうけれど。

「それよりも海路の話までして良かったのか？ あれはあんたの隠し
玉だったと思うんだが」

「君が察してる段階で頭の良い人にはバレてるから構わないんじゃない
い？ まあもう一枚切り札を思いついたし、時間も確実に稼げるから
困らなくなったというのが正しいかな」

軍監とか司教さんへ『貴方たちだから』ともったいを付けて海路の
計画を話した。

秘密にするとか言っていたけれど今ごろは上司たちへ喋ってるだ
ろう。南商豪が意外に思ったのが秘密を喋った事であり、海路を使う
ルートに関しては以外にも思っていない様に、中央の上層部も察して

いる可能性はあったから遠慮なく話したといふべきだろうか？ まあお土産が足りないってのが一番の理由なんだけどさ。

ともあれ陸路で十年掛け確実に西領を奪還する計画と、リスクも増えるが海路で五年の計画。この二つを軸に出兵案を練り、仄めかすところからスタートした感じである。

「新しい切り札ねえ……。そいつが何かは聞かないでおくが、取り返せそうか？ この際だが全部はいい。俺からすると港だけでも回収できれば良いんだ」

「あからさまだと呆れるべきか、それともその方が騙されなくて信用できると言うべきかな」

「そりやどうも。で、どっちなんだ？」

まず大前提になるのが水棲種族との協調だ。

彼らを作戦全体、特に上陸戦での主戦力として計上できるならば海路はアリになる。彼ら以上に海流や風向きを知って居る者はおらず、魔族が思っていないペースで進軍できるからだ。この交渉自体は実のところ難しい訳でもない。

何しろ水棲種族が団結力と伝達力を何より重視する程に、彼らの出生率やら生存性は低いのだ。大規模な赤潮やら海の魔物など陸の視点ではそう多い訳ではないが……彼らから見ればどうだろうか？ 常にどこかで起きている禍でしかない。西領にある居住地がゴツソリ使えないのは痛いだろう。

「水棲種族は動かせる。少なくとも今動くしかないと思わせることはできる。そういう意味で戦力と案内人に不安は無くなるんだ。むしろ大公閣下たち上層部が認めてくれるかの方が問題だね」

「それは判る。あんた以上に物判りの良い貴族はそう居ないからな」
水棲種族が持つ短所の一つは陸上拠点と交渉力を維持できない事だ。

外見に関しては気にすまい、有益ならばそういう事に目を瞑るのが人間と言う物だ。しかし陸上で長期の活動が難しいということが、単独での西側沿岸奪取が出来ていないことに繋がっている。また紅家のような有力者とコネを結んだとしても、彼らの事を理解して居ない

のでまともな話に合いには加わり難いのである。

その点、僕は彼らの長所と短所を一通り知っている。継続的に陸上で活動できない点は、彼らが僕らを裏切ったり陸地に領土を求めないという意味で長所だと言い切る事も出来る。彼らの活動時間を測り、上陸戦や哨戒のみに任務を充てるなど生態に応じた割り振りもできる。

(普通ならここまで追い込まれるとは思わないだろうな。この辺はスケール・メリットならぬデメリットかな)

水棲種族は大集団が基本であり、海の脅威があるので基本的に目先の事しか動かない。

その為に人間に警戒され易く、同時に自分たちの居住地の確保や安全圏の保証などに大きく左右される。この先何十年と不安を抱えるよりは今に賭けた方が良いのは判るだろう。

こういう理屈で水棲種族は動くし、動くことを保証もできる。仮に領かない場合は、協力してくれる範疇で彼らの協力を有効に使えば良いだけなのだ。少なくとも海路で偵察隊を送って、海路で回収するだけでも安全性が違うからね。

「……問題は港に防御力なんざないぞ? 向こうは陸路貿易の方が盛んだったからな。あんたご自慢の移設用の家屋だってそう運べない。いや、兵の数を送るなら天幕の方が良いはずだ」

「うん。だから僕の新しい切り札はそこなんだ。向こうで確実な方法で籠城して敵を引き付ける」

「はっ?」

南商豪は意味が分からないという表情を浮かべた。

まあ、そうだよな。籠城し難いと言ったのに自信満々に籠城が切り札だと言ったのだから理解は難しいだろう。難しくなきや相手の意表も突けないから意味が薄いのだが。

穀倉地帯である中央から西領のど真ん中までそのまま交易路だ。そこから地形が上下に延び、さらに西へ別の国が連なっている。西領の上下は海やら山を介して南領や北領と連なっていた。そんな地形なので城は沿岸部には少ないのである(北と南に面した所にはあるけ

れど)。

「どういうことだ?」

「街道から西進するより前に海路から進軍し、敵の一隊を引き付ける。魔物は一体一体が人間よりも強力だから、引き付けて分断する意味は大きい。ここまでは良いよね?」

「ああ……」

相手の戦力のみを分断するには、どちらかが囷である必要がある。

しかし中央から西へ向かう途中にある西方鎮台は魔族にとつて攻略されて久しい。前線拠点として既に修復されているだろうし、こちらに少数を派遣しても意味が薄い。かといって陸路で攻める方がオーソドックスなので、こちらの方が主力にならざるを得ないのだ。

そうなるとう然ながら海路で攻める方が囷にならざるを得ないが、敵が先にこちらを殲滅するために主力を割いた場合は何の防御手段も無いので各個撃破されるのはこちらだろう。やるならば主力が西方奪還に向けて動き出すよりも後、裏口を叩く程度にしか使えないと思うのが一般的である。

「もし囷として引き付けるならば、人間より強い魔物と一対一で戦えるように籠城戦をする必要がある。しかし防備に向いた港なんて存在しないし、守りに向いた場所は当然上陸もし難いし、物資も持ち込めない。普通は」

「じゃあどうするんだ? 水棲種族がバザーに用いてる舩を使うにしても限界があるぞ? 重要なのは水深と湾内の地形なんだ」

「……完成品を持ち込むならね」

いつもより食いつきが強いのが気になるが、何となく理解できた。

もしかしたらこいつ西領の出身者じゃないだろうか? 外国の間で南商豪と名乗りはしたが、故郷または奥さんの故郷が西領と言う事は普通にある。南の豪商人になる予定という言葉が、南で豪商人になるしかない……という意味かもしれない。

それはそれとして、彼が口にした舩を使うというのも考えた。あれを縦に繋いで水深の浅い場所にギリギリまで乗り付けるという方法だが、それだと重量物を持ち込み難いのだ。

「完成物じゃない？じゃあどうやって防御するんだ？板切れを持ち込んだって柵が精々だぞ」

「それで良いんだよ。柵を三重に築き、その後ろに壁を立てる。規格統一した木材なら、船に積める量も『水棲種族が持てる重さ』にも調整し易いからね。完成品は投石器や大型のクロスボウだけあれば良いんだ」

「あ……」

簡単に言うと『墨侯一夜城』と『長篠の戦』の複合技である。

奇襲で上陸地点だけを確保し、初期の作業用立地と攻城兵器の配置場所にしてしまう。重要なのは海が天然の堀となり、魔物の移動ルートが固定され進んで来るのが判るような地形である。移動経路が丸判りなら、投石器とアーバレストで撃ちまくればいいのだ。

なんだったら船を複数用意して一隻ほど座礁させてしまっても良い。本格的に撤退する時には困るが、舢に掴まり泳いで逃げるのも良いだろう。普通ならば死ぬだけの逃走ルートだが、水棲種族の協力があれば海は死地ではない。

「この方法を取るなら最初に獲るべきなのは中間地点にある島かな。そこに物資を運びこんでピストン輸送すれば良い。あ、ピストンってのはこういう感じで小さく動く輸送の事ね」

「あ……ああ」

思わずこちらでは使わない言葉を使用してしまったが、これが後で思わぬ収穫になる。

以外と言えば意外だし、思いつかなかった方がおかしいレベルで小さな気づきは声まで存在した。

要するに彼は西の大公に親しい人間であり、南領の情報を知り状況をコントロールする為に送り込まれたスパイの様なものだったのだろう。どうりで僕の出した案が早い段階で対策され、軌道修正した形でこちらに戻ってくるはずである。

南商豪という男

● 中央の反応で、以前から疑問に思っていたことがある。彼らの目論見は幾つかあって南領に関する事は優先度の上であっても、最優先ではない筈だ。だから少しづつ追い詰めるか、逆に直接的でブン殴って終わりと言う具合であるはずなのだ。

しかしながら彼らの対応策は実には的確で、即座でこそないものものこちらが嫌だと思う方策を打ち出して来た。

「スパイは居るとは思ったけど、南部方面の元締めか何か直ぐ傍に居るとは思わなかったな。どうりで対応が早いはずだよ」

都に来て来訪を告げ、出仕に関する手配を整えていた。

底に送られてきた書状は日時を告げ、具体的に何をするかの内容を記載してあったのだが……。そこに西方奪還における『ピストン輸送作戦とやらを説明せよ』と言った内容が含まれていたのだ。

西方奪還の話をしたのは数名で、その中でピストン輸送の話をしたのは一人だけだ。もちろん侍女とかが忍者ツポイ何か聞き耳を立てた可能性はゼロではないのだが。これが意味することは一つではない。

「……ピストン輸送？ なんですよコレ？」

「二つの拠点を短時間で行き来させる輸送法だよ。こんな感じだね」脇から書状を覗き込んだ麗さんだが意味が分からなかったらしい。

戦場にしても行政に関しても詳しくない事から、どんな行為かを想像できなかつたようだ。むしろエツちな方面を想像したらしく、昼間からそんな話をするなど赤面しながら注意されてしまった。

おそろくだが、この情報を持って帰った人物の話を上司もまた想像できなかつたのだろう。だからその部分を、地方か何処か他国で使われている文言だと思っただけのまま記載したと思われる。

（これはどういう事かな？ 『彼』にはちゃんと説明したはずだし、その場に忍者とか居たらやっぱり聞いているだろうし……意図的に説明を省いたとすると……）

これまでスパイの元締めが近くにして、ある程度の権限で修正していたのだろう。

その元締めに直接ピストン輸送の内容を説明したが、その説明がされているならば手紙に記載する内容も変わっているはずだ。こんな書状を寄せればバレるに決まって居るわけだが……『彼』がその事に気が付かないとも思えない。

つまりは気が付かせて、何らかの交渉をしたい。あるいは職業的に伝えはしたが『仕方ないからやっただけ、信用してくれ』と表明でもしているのだろうか？

（海路での奪還戦に乗り気だったし、内容に関する食い付きも凄かったしな。その辺を考えると是が非でも故郷の奪還に動いて欲しいから、スパイみたいなきことをしてると感じてなのかな？　そしてその事は本意ではないし、奪還してくれるなら西の大公じゃなくても良いと）

過信は禁物だが、ここで正体をバラす意味が他に思いつけない。

そう思わせて信じさせ、僕を死地に送り込むとか？　そこまでする必要があるとは思えないし、悋さまや侯爵さんに彼の正体を話してしまう事を考えたら割りに合わないだろう。

少なくとも彼……南商豪にそこまでする意味などないのだ。僕を殺したいなら暗殺者でも用意し、本人はスパイの頭目としての立場を守った方が賢いだろう。

（他に考えようがないし、ネタ晴らしのお陰で覚悟が出来たと思っておこう。しかし彼に話した事が筒抜けと言う事は、時間稼ぎは無駄だな。捨ててしまおう。全部の案を話さなくてよかった）

立場もあるのだろうが、基本的に全部話したと思うべきだ。

ならばこちらにも隠し事はせず、西方奪還が手早く行える海路案をさつさと切り出した方が良い。その方が裏表のない人間だと思われるかもしれないし、利用できると放置してくれる可能性は高かった。

そして……船を使い捨て、臨時の拠点にするアイデアを話さなくて良かったと思う。これを知られるかどうかで差があるのだ。もし背水の陣を敷かせるために船を壊す策を大公が採るとしたらどうだろ

うか？ 再利用を考えて居る僕の案を潰すために、火を放つくらいはするだろう。

● 西の大公に面会など出来なかった。そこに居たのは將軍と幕僚たちだ。

さすがに上手く行ったら自分たちの功績にするとは言わないが、僕がしゃしゃり出てくることに良い思いをして居そうにはない。

だったら呼びつけるなど言いたいが、彼らとしてもそうはいかないのだろう。

「この案を採用したとして、来年の今ごろには初期目標を達成できるのか？」

「彼らは僕の配下でも同盟者でもありません。今から使者として向かったとして、あちらの提示する条件を用意して赴かない限りは、要望を携えて戻ってくることになるでしょう。双方の進捗を合わせて出征準備を整えるのが精々かと」

「それでは遅い！」

將軍は挨拶程度に留め、代わりに幕僚たちが好き勝手なことを言うてくる。

もし身内だけの討論会で同じことを口にしたら、『お前は馬鹿か？』と返されたに違いない。子供の使いではないから色々用意するにせよ、大きな交渉を一介のメッセンジャーが全てこなせる訳はないのだ。

諸条件を予想して相手の望む答えをある程度呑むことが精々だろう。もしそこから大きな要求をされたら、絶対に手に余るのでトンボ返しをする羽目になるはずだ。少なくとも水棲種族の方が信用しないだろう。

「貴殿の部隊はあつという間に城を再建したそうだが？ 手を抜く気か？」

「建物と軍船の用意は別物です。この作戦案に記載した通り、陣地だけならば難しくはありません。しかし十分な数の軍船を建造するには時間が掛かりますよ。もちろんその間に使者として話は付けに行

くと仮定して、です」

「先ほど聞いたピストン輸送とやらで補えば良いではないか」

一夜城の話を知らないこともあり幕僚の数人は驚いていた。

そんな手法があるとは聞かされてないのだろうが、逆に聞いている者は平然と痛い所を突いてくる。こういうところが現地スパイによる情報収集の恐ろしい所だが、將軍の麾下にも派閥があるようで面白かった。

しかし將軍の方はまったく動じてない。どんな話も『そうか』と言う感じでスルーしている。もしかしたら部下が優秀なタイプなのか、あるいは複数人居る中で窓際の下級なのかもしれない。逆に身分だけは高い御坊ちゃん將軍と言う可能性もあるが。

「陸路ならばそれも可能でしょう。しかし場所は海、それも冬ですよ？　小さなボートを引つ張ってもらい人を運ぶにせよ、今度はその準備と交渉に時間が掛かります。少なくとも想定される要望以上の代価を要求されるでしょうね」

「その程度の条件、呑んでやればよいではないか！　所詮は沿岸部の話であろう！」

「……同じ言葉をオアシスや鉾山に置き換えてください。砂漠に人は少ないのだ、湖の一つや二つくれてやれば良いだろう。山なら鉾山は幾らでもあるだろう。故郷の方にそう説明できますか？」

面倒なのは西領出身者と中央出身者が混ざり合っている事だった。どちらも沿岸部に関しては関心が薄く、縄張りとか貴重な土地での利権などに無頓着な所がある。まあ西領の港に住む人々が全滅して居るとか、半減して居れば話は違うのかもしれないが……。少なくとも話の初動で南領の沿岸部を保障として渡せと言うだろう。西領を確保したら返すとも言うに違いない。

いずれにせよ僕の手には余る。一介の貴族、それも成り立てで名望などない男に務まるはずはなかった。個人的な仕事やら集団としての紹介ならともかく、国家と種族単位の取り決めなのである。

「陸路ならば五年は掛かる計画を、海路も使えば三年には短縮できます。ここから二年を目指すならば発言力があり、相手からも信用され

る地位の人間が交渉役に就く必要があります。僕に出来るのは、その御方に案を提示して情報を集めてくる位なものですよ」

もちろんこの話を引き受ける人間は侯爵さんではない。

南領の代表者たる彼ならば問題はないが、そんな人物を交渉の場に引き出せるはずがない。ましてや南領の領地や縄張りを担保に使って、水棲種族と交渉しろなんて提案したら僕の首は切り離されている可能性はあった。

ある程度は中央なり西領に地位か身分を持ち、水棲種族や南領との間を取り持てる人物である。侯爵さんと僕の間……紅包さまでも難しいだろう。彼は武芸者としてはともかく、將軍や政治家としては名前を馳せて居ないからだ。

「そういう事ならば打ってつけの人物がおるぞ。本人も望んでおるだろうから問題ない」

「閣下？ それは……？」

「末の弟だ。沿岸部を取り込んだ時にアレの母が嫁いできた」

ここにきて將軍が口を挟み、幕僚の一部が首を傾げた。

見たところ中央出身の幕僚が疑問を抱いているので、この人物は西領出身者なのだろう。……というか大公さんの息子か甥であろうと思われた。

そしてこの情報で一連の話が僕の頭の中でつながる。西大公の一族に沿岸部が併合され、お姫様か何かを要求された沿岸部の小国でもあったのだろう。そのお姫様は妾と成って子を産み、年齢的にも属国出身と言う事もあって、子供は放置気味に育ったと思われる。

「弟を正式な使者として条件を整えさせよう。銀双羽と申したな？ 貴様にはその副使の地位と……そうだな。見返りに海路側の監督官の地位もやろう。無理のないペースで構わんが、確実に軍を整えるのだ」

「……承知いたしました。非才の限りですが、全力を尽くします」
やられた……というのが正直な感想だった。

貴族のお坊ちゃん出身の將軍なのは間違いがないが、よりにもよって西領の上位者だったようだ。少なくとも末っ子で放置気味の弟よ

りも上の地位に居るのは間違いない。

そして副使はともかく監督官というのは罨だ。南領の軍師格のまま責任を負わせる為だろう。予定通りの進捗ができないならば、それはお前のせいだという為だ。他の人間に任せても良いはずだが、この方法を取れば正式に理由を付けて、僕を呼びつけられるのだから。

(しかし……あいつ、王子さまじゃないにしろ公子さまだったんだな) おそらくは南商豪と名乗る男が弟だろう。

併合した姫に産ませた子供なので地位が低くないがしろにされておき、彼としては故郷を取り戻したいのだろう。それも西領全体よりも、母親の故郷である沿岸都市だ。独立は無理にしても、自由都市としてある程度の裁量が任される展望も見えているのだろう。

何せこの將軍閣下が期待している、水棲種族に対する補償と言うのは予定されている領地であると思れた。既に放り出した土地ならば、幾らでも自分達の知らないところで切り貼りしてくれと言えるのだから。

西領の公子さま

● 南商豪という男は思えば最初から奇妙な所があった。

水棲種族の所で僕が作った商品を見て、河川協同組合を設立したという話を聞いてお近づきに成りたい……と最初だけは殊勝にしていたのだ。それでいて傲岸不遜で自主独立の気風がある事を隠しもしなかった。

それでいて僕の用意した技術で勝手にやるといふ風情は見せたが、不思議と自嘲はしていた。そして極めつけは橙家の縁者を探す件だ。探すだけなら低俗な候補が幾らでも居ように、まだ連れてきては居ない。

「思えば籠の鳥仲間を増やすのが嫌だったんだらうな。僕も領主生活を望まない人は紹介しなくて構わないって強要しなかったし」

南商豪の母親が西領に併合された独立領のお姫様だったとして……。

領土獲得のために担ぎ上げられ、領主に成れと言われる人間に感傷を抱いてもおかしくはない。もちろんそれなくして策謀が成り立たないならば、自分の代わりに差し出すかもしれないが……。橙家に關してはダメ元の話だったし、特に触る気はなかったのかもしれない。そんな風に自室おして駆りている部屋で考えて居た時、ノックする音と共に麗さんが部屋に入ってきた。

「あなた。白南終つて方をご存じ？ 面会を求められているそうなのだけ」

「……覚えはないけど、心当たりならあるかな。多分、大公閣下が妾に産ませた子供だよ。公子に付ける名前じゃないけどね……。見知った人の本名だと思うけどあんまり驚かないで欲しいかな」

おそらくはこれが南商豪の本名だろう。

白というのは大公家の御料地で、白紗という砂の台地にある都市の名前だと思う。オアシスを囲んだ総構えの城で、砂地から城壁を攻撃し難い事もあって鉄壁の守りだと昔は言われていた場所である。過

去形なのは魔族に攻め落とされたからだが。

その上で本来ならば貴族の子弟には付けない出身地の名前も、戦で奪った女の息子という意味ならば何となく理解できる。そして未っ子であり、これ以上は子供はいらないという意味で終と言う名前を付けられたのではないだろうか？

「よう。黙っていて悪かったな」

「キリー・ゲラルドだったっけ？ それとも南商豪の方が良かったかもしれないけど」

やはり南商豪が公子さまであった。

彼の名乗った名前を鑑みれば、偽名であると同時に本名を気に入って居ないことは判る。南と言うのは出身地なのでまだしも、終わるなごという単語を名前にされて嬉しかろうはずがない。

名乗り方に引つ掛けられたというべきだが、最初から疑う様なうさん臭さだったので不思議と腹が立ってはいない。彼の部下が潜むよりは、警戒心を強くして騙されることを計算に入れられたからだろう。

「覚えててくれたんだな、ソレ。一応はおふくろが付けてくれた故郷の名前だから結構気に入ってるんだぜ？」

「……それでキリーさんは何の用事で？ いや、まあ世間的には公使と副使の顔合わせなんだろうけどさ」

向こうが身分としてはありえないくらいにフランクなので、こっちも単刀直入に返す。

彼の立場はともかく、それが望みであろうと思われるからだ。僕の場合は転生者な上に悪代官から逃げ出した身なので、北領にはそれほど望郷の念はない。前世に関しても暮らし易かった当時の生活の方が懐かしいくらいである。

故郷を懐かしむ気持ちに共感は出来ないが、大切な場所と言うならば仲間や恋人と共に作り上げた村こそが第二の故郷だろうか。奪われたくないという気持ちであれば納得は出来る。

「話が早くて助かる。前にも言ったような気がするけどな。判ってるだろうが俺としちゃあ、おふくろの故郷であり俺が育った町を取り戻

したいわけさ。西領なんざ正直どうでも良いがね」

「ふくん。そう言い切れるなら余計な重みが無くて助かるけどね」

割り切った答えは助かるが、本当にそうだろうか？

義理人情と言うのは捨てがたいものだ。西領自体はともかくとして、彼を助けたり協力した部下たちや商人などを見捨てられるのだろうか？ 出来たとするならば本心で付き合いたい相手ではないし、出来ないのであれば今後が難しくなるのだけだ。

とはいえ建前でも言い切ってくれるならば判ったと言い返しておこう。作戦を考える上で、ある程度の余裕を持たせれば良いだけだ。「独立独歩を保つだけなら故郷の人々だけを助けて、何処かの島に移住することをお勧めするけどね。沿岸部とはいえ西領が本格的に復帰したら、何を言われるか判らないと思うけど」

「それが出来ないから苦勞してるのさ。全員が移住してくれるなら、とつくに助け出してる」

彼の言う故郷が住民のみならば話は早かっただろう。

助けるだけ助けて、水棲種族に頼って何処かの島を貰えばよい。彼らに氣を使って生きる必要はあるし、従属関係と言うのは変わらない。しかし陸上を得意としない彼らとならば良い関係が築けるはずだ。だが残念ながら土地を含めての物らしいので難しい選択肢を迫られる可能性はあった。

ただ、話の内容から少しだけ前向きな情報を伺えた。もしかして、西領の現在の状況をそれなりに知っているのだろうか？

「と言う事は現在進行形で移住には反対なんだ？ 飢餓で動けないとか以外でも」

「そういう事だ。連中は住民を奴隷にはしてるが皆殺しにしてる訳でもないし、いちいち交流を見張ってる訳でもないからな。俺が直接見たわけじゃないが、大回りしてセントール族の居る大平原から行けば商人も入り込めるらしい」

西領のもつと西!? 意外ではあるが納得のいく話だった。

西部域は地続きなので、西領よりも西に土地が広がっている。他の国と隣接しているわけだが、遊牧民とセントール族……所謂ケンタウ

ルスの国らしい。ケンタウルスは屈強な種族であり、魔族とも敵対していないそうなのである程度は交流があるのだろう。まあケンタウルスの移動力を考えたら、魔族でも倒しきれないと察しているだけだろうが。

しかしこのことで、現地の情報がある程度は確保できることが判った。既にそれなりの情報が知られているだろうし、現地を段階的に開放することで、もっと詳細な事情も判明するに違いない。

「なるほど、これでだいぶ読めて来た。大公閣下を中心として上層部も馬鹿揃いじゃない筈なのに、どうりで強硬策を進める筈だよ。現地の情報があるから今なら勝てるかと踏んだわけか」

「それはそれとして、南領やら東領の兵を使い倒したいんだろうけどな」

「死ぬのは他所の兵士なら都合が良いって事だろうね」

つまり情相手の手薄な場所を知って居るから、そこを突ければ勝てるかと判っている。

しかし全部を話せば敵にも知られるし、仮に自分達だけでもギリギリで勝てる兵数なら勝手にやれと言われそうだから黙っていたのだろう。逆に言えば南領や東領の兵が居れば楽ができるし、そこで死んでくれれば今の権勢も保ったままだから彼らからすれば『そうあるべき道』なのだ。

だから馬鹿は馬鹿役の人間にやらせておいて、上層部は状況を誘導していたに違いない。

「その情報を回してくれるなら時間も短縮できるし援護もできると思うよ。その上でだけど、最後まで君は信賴されてるの？ 妾の子供だからついでに処分しようとか言われたりはしないかな？」

「言ってくれるな。まあその心配がないとは言わんがね。下の兄はギリギリまでは信用できる」

一番困るのは南領の兵士共々、沿岸部から解放に向かったこいつを処分しようとする流れだ。

公子が居るから大丈夫と思って油断していると、何時まで経っても援軍は来ずボロボロになった敵軍を後ろから、それもこちらの生き残

りと一緒に殲滅なんて悪辣な事をしかねなかった。

その辺をこの男は承知しつつも、それなりの保証があると告げた。

「下の？」

「会ったろ？ 俺らを推薦した將軍閣下さ。一番上の長兄は出来過ぎで謀殺されてね。下の兄貴は子殺しに合わないように馬鹿を演じた上で、自分は中央の將軍になったんだ。他所に出たから実家の事は知りません、上級貴族だから全て部下に任せますってフリをしてる」

「……なるほど。そのお兄さんが大公閣下を追い出すまでは安全って事だね」

信長じゃないが馬鹿を演じて外から後継者の地位を狙っているらしい。

次男か三男ともども父親が一か所に居る時に、速攻で謀殺することで成り代わるつもりなのだろうか？ まあ後ろくらい陰謀を暴きたてて、兵を率いて正統性をもおめるというコースかもしれないけどね。

いずれにせよあの將軍閣下が大公閣下と争っている間は問題ないらしい。少なくとも援軍を求め、南領やらの支援を引き出すためにもこちらを処分することはないという見通しだ。全てを信じるわけにはいかないが、何とかかなりそうな雰囲気ではある。

「それで、だ。作戦そのものはこないだ聞いたから問題ないと保証しても良い。一足飛びに故郷を奪還しろとはいわれないが、段階的に解放するなら打ってつけの上陸地点がある。だが……」

「だが？ 何が懸念があるの？」

現地の地形も理解しているとあって、なんとかかなりそうなのは助かる。

信用しきるわけにはいかないが、自分も行くと言っている以上は大丈夫だろう。その上で問題があると口にした。

「そりゃあ海を掘に使えるならの話だろ？ 巨人はもういないが、空飛ぶ魔物どもが居るぞ。なんとかできる作戦がないと死ぬのは俺らだ」

「それなら問題ない。実は城壁と塔代わりに使えるモノに当てがある

んだ」

　　どうやら飛行する魔物の群れが居るらしい。

　　ドラゴンじゃないそうなので、むしろ安心した。巨人とドラゴンが束になって来たらどうしようもないけれど、相手がハーピーとかグリフォンなら何とかなるからね。流星にワイバーンの群れだと怪しいけれど。

無難な計画よりも、夢のある計画を

● 事の顛末を手紙としてしたためる最中、使者が金を持って訪れたのでサインを貰って受け取った。判り易い離間の計だったので、別の部屋で計画を練っていた白南終こと南商豪だった男にも見ってもらって水棲種族の元へ向かう公使としての支度金だと言い張って受領のサインを入れておく。

使者が顔を白黒させて驚いている間に、麗さんとか彼女の友人とかも一緒に呼んで食事をすることにした。要するに僕が貰ったのではなく、役人として資金を貰ったと言う事にしたのだ。

「素直に貰つとけばよかったのに。奴は後で『そんな事は知らん』と言われて詰め腹切らされるな」

「悪い事をしたとは思うけど、放っておくと僕が恨まれるからね。あと掛かった費用とか無視される可能性もあるし仕方ないよ」

離間の計なので中途半端な金額だった。

個人が受け取るには巨額で、公使や監督官が諸費用とするなら明らかに足りない。受け取ったという事実を隠せば南領や心ある中央の諸将から穿った目で見られる。対して受領証を発行し、数枚に分散して方々に保管すればそれは正式な記録になる訳だ。

なお使者の方は『計略の為に渡してこい』と言われているので渡すまでが仕事だ。サインを書いてもらうまでは受け取る気は無いと杓子定規に口にしたら書いていったまさか数枚分用意して、公文証にするとは思わなかっただろう。

「それはともかくこれからどうする気だ？」

「先触れの手紙を何枚か送って来年の準備かな？　うちはともかく他の領地に余裕はないし、ここで厚遇されたように見える事分だけ先に動かなきゃ駄目だろうね」

離間の計で良くありがちだが、待遇を偏重させる事がある。

南領の北上作戦から浄化計画までの間に關して、褒められたのは極少数。その中でも重用されたように見えるのは僕一人だけである。

異種族への交渉副使とか監督官という役職に何の意味があるのか分からないのだが。

しかしソレを判断するのは僕ではないし、判って居ても同じ判断をするとは限らない。何も知らない領主は僕だけ出世したと言うかも知れないし、敵対派閥は判って居ても非難する材料にするだろう。

「ピストン輸送に使う島や上陸地点は水棲種族にとつて好都合な場所を選ぶとして、他にも色々と提供。その上で彼らの戦力を主に使って第一目標の島を攻略するんだ。それ以外に各所が納得できる方法はないと思う」

「だろうな。まあ俺もお前さんの響みに倣って沿岸の一部を譲り渡すとするさ。故郷を取り返せないよりマシだ」

他人の禪で相撲を取る以上はかなりの出血を強いられる。

こちらが準備整ってない状態で動くには仕方がないが、その事について彼が覚悟を決めているのは良い材料だ。どうやら僕がエルフやドワーフに係争地にある森やら山を譲ったことを聞いて、ソレを例にしたようなのだが……。

不思議とそこが引掛かった。別に反故にするつもりはないだろうし、公子として自分が受け取る領地を切り売りするなら中央も止めないと思うのだが……。

（僕の場合はどうだったかな。確保できない人材やら技術、そして土地を確実に確保する為に確かにエルフやドワーフに譲りはしたんだけど……）

そもそも僕は領地なんか要らなかつたし、増やす気も無かつた。

だから拡張路線を捨てることで二つの種族から情報を引き出したのだ。そして色々したかつた事を完成させ、その技術と引き替えに……。

そこまで考えてようやく気が付いた。彼の意見には面白みが一つもないのだ。僕は村を和風の城として防御陣地みたいな構成にしつつ、色んな技術を試したりしたのである。これに対し彼の話には、身を切るつもりで妥協しかして居ない。

「ちよつと考え方を変えようよ。このままだと水棲種族にとつても僕

らにとつても旨味が少な過ぎる。今ある現状を何とかやり過ぐして、嵐が過ぎ去るのを期待する様なもんだからさ」

「言いたいことは判るが、親父たちが掌返したら領地自体イチャモン付けられて奪われかねんぞ？」

要するにこの計画が後ろ向きなのが悪い。

安全な避難先を確保したい水棲種族に恩を売り、居住権と避難権を保障する代わりに出兵してもらおう。色々と技術やら現物も提供するとはいえ、それでは上層部の計画と何処が違うのだろうか？

それこそ水棲種族の有力者の中に、反対意見が出たら成立が怪しいくらいの案件だ。実際に大公が失態だと言って、領地を渡すという話を反古にしかねないのだから。

「構図自体は変えないんだよ。変えるべきは計画の発展性と、実際に作り上げる町の構造さ。前に話し合つたじゃない？ 南方鎮台を一人から自分たちの作りたいうように作れたらって馬鹿話」

「まさか……あれをやるってのか!？」

そう、ギリギリ確保して右から左に提供するから面白くないのだ。

それだったら物凄く未来的な港湾都市を作り、水棲種族の一大拠点になるくらいの造りにしてしまつても良い。それを共に作り上げ、必要な技術も土地も提供するのには彼だ。もし取りあげたり反故にされた場合、彼と上層部のどちらを信用するだろうか？

そこまで共生関係を築いて、ようやく水棲種族と明るい未来が築けるのではないだろうか？ そしてそこまでするからこそ、本気度や計画性に保証ができるのだ。

「陸のど真ん中と沿岸じゃ必要な物はまるで違うけど、思い切つた物を作るならこっちの方が面白いよ。大型船を建造するドックだとか、艇を幾重にも繋いだ連環船だとか、そこを拠点に行き交うタグボート……牽引船とか面白いと思わない？」

「そりゃあそうだが……」

せつかつくなので軽く絵に描いてみよう。

下敷きとして木の板にペンで線を入れ、それなりに存在しそうな海岸線を描く。ソレを利用した守り易い土地に対し、以前に見た赤色港

以上の港湾都市を想像していく。

大型のクレーンを設置する建造ドックに、荷物積み下ろし専用の小さなクレーンを塔の上に配置。風雨を退ける防波ブロックに防風林と言う感じだ。

「概ねこんな感じの施設を用意して、できれば水棲種族が陸に上がったも潰かれる大きな水槽……プールがあると良いかな。普段は働く水棲種族の人たちが休むために使って、嵐が来たら子供たちにはそこに避難してもらおう」

「それなら陸路側には防風林ならぬ防砂壁が必要だな。ここまで都合の良い場所ってなると、砂漠に面した場所かねえぞ」

前に話し合った時もそうだが、こういう話になると彼も乗って来る。

陸路の側に壁を築き、その向こうに堀を掘って防御力を高める。その上に橋を架けて不要な時は閉ざせるようにしておくそう。まあ水棲種族なら堀を掘るのは水に浸かりながらできるしね。

もし砂浜だったら、穴を掘った後でコンクリ製の側溝を埋めても良いかもしれない。ひとまず硬い何かがあれば、砂浜も簡単には埋まらないだろう。

「どう？ 僕は十分にアリって思うんだけど」

「アリも大アリだ！ 詰まらねえ計画よりもよほど楽しいしな。問題は予算と時間の方だが……」

「そこは未来の計画で良いでしょ。別に上陸地点が二か所あっても良いしね」

今必要なのは中間拠点の島と、確実に守り切れる上陸地点だ。

夢のある計画は無理に同じ場所にする必要はない。上陸地点の近くにあれば話として出し易くはあるけれど。

そしてこの話に必要な物は資金以外は揃っているのである。時間は今である必要はないし、建設する為の技術はある。水棲種族にとつて僕ら以上にこの計画に乗り気な為政者などいないのだ。後は戦闘行動に関して、確実かつ安全策を練って居れば問題ないだろう。

こうして新しい計画書を携えた僕は、南領の諸将に大筋のみを書い

た手紙を早便で送り、急遽戻るのであった。

共生と共闘と

● 年末に水棲種族を説得する話だったのだが……。気が付いたら事業説明会になっていた。思い付きではあるが狙ってやってるので幻覚ではない。

緋家の領主たちには先行して手紙を送り、離間の計として監督役に指名されたり海路を併用するルートを命じられたが、この対策を伝えたと連絡してある。もちろん同時に水棲種族が列席することだ。「急な話で各領地の余裕がない上に、こちらを囿どころか使い潰す気かもしれないので第一段階は少数精鋭のみで行います。僕と希望者以外はギリギリまで参加を見合わせて構いません。そして第二段階初動までは確保した島での待機となるかと」

「いや、その……」

「言い方は悪いが……正気なのか？」

僕は簡略地図を置いて一気に説明した。

途中で口を挟まれると面倒な上、前提段階をいきなり論議し始めるからだ。こういうのは所定の方針として言い切った方が良くと最近の経験で判った。

その上で諸将の中にいきなり首を傾げるのが出るのも当然だ。何しろ無謀な試みに見えるのだから。

「もちろん採算はあります。僕だって死にたくありませんからね。まずは一つずつ説明いたしましょう。最初に少数精鋭で動くのは領内の疲弊と混乱を収めるのに時間が掛かるのに、中央はゴリ押しを行うという矛盾をクリアするためです」

当初案では五年後に西方奪還を行うはずだった。

しかし中央は穀倉地帯奪還における被害が少なく、予算も抑えられたことで前倒しを要求して来た。仕方がないので海路を使った二面作戦で何とかする訳だが、南領の別動隊を送り込み、陸路で西領を目指すのとは別ルートで魔族の目を引き付けるのが役目だった。そして安全にピストン輸送で上陸するのが第二段階と言う訳だ。

問題なのは海路は遠いので相互監視が出来ず、同時に作戦進行が出来ない事である。

「第一段階始動を中央が強く要求するのは間違いありません。そこで少々無謀に見える試みを行わなければならぬのです。ならば言い出しつぺの僕が行くのは当然でしょう」

中央は自分たちが安全に攻略を行うために、こちらを囷として使うだろう。

南領の行軍速度に文句を付けつつ、自分たちが動きを遅くしてもこちらの出馬要請を無視する気だろう。だから海路が先に動かざるを得ず、しかも見殺しにされる可能性を憂慮せねばならない。

ここで出る問題は早めに出る必要がある、それなのに引き返すことが難しい事だ。街道を通って動く筈の本隊がまるで動かずとも、こちらには判らない。場合によっては敵の精鋭部隊を丸々押し付けられ、少しでも減らすことが任務だと言われかねなかった。陸路ならば自分達も足を止める事もできるし引き返せるが、海路ではそうも行かないのだ。

「しかし、しかしだ銀殿。貴公は城ヶ崎を、姉妹島を僅かな塙で攻略するとしても言うのか？」

「それとも水棲種族の力を借り代価として与えると？ それはそれで禍根を残さんか？」

「その質問には戦力ではなく、情報を頂くとお答えしましょう」

諸将が無謀に思っているのは、彼らから見て絶好の地形が一つだけだ。

干潮になると地続きになる小さな島と、その向こうにある比較的大きな島。そこは西領の南部にあった沿岸都市を守るために古くから活躍した場所でもある。日本で言えば三浦半島の江ノ島、フランスならばモンサンミッシェルみたいな場所だと思ってくれば良い。

地続きになる小さい妹ヶ崎は砦一つあれば守り易く、もう片方の姉ヶ崎はそれなりの軍勢を伏せて置ける。この双子島に船を隠して置けるので、海路から沿岸都市を目指すならば必ず落とさねばならない場所であった。

(まあ、城ヶ崎なんか落とさないといいんだけどね。というかネームドの要塞島を落せとかムリゲー過ぎるし)

繰り返すが、第一段階は西領間近にある島を確保する事だ。

しかし別に難所を落とすとは一言も言っていない。『人間の常識的』にそこを落とすことが最も効率的だからそう思えるのである。そして口に出して否定しないのは、その常識を中央にも思わせておく為だった。

だって囮として使い潰すつもりならば、攻めるタイミングとか普通に通報するよね？ なら攻めない場所に敵戦力を集中されても構わないのだ。

(敵を騙すならばまず味方からと言うけど、宣戦布告して来ない自称味方だからね。この際だから利用させてもらおうか)

中央でも中間の島からピストン輸送で上陸戦を行うとしか伝えていない。

上陸戦を邪魔するいやらしい場所に要塞島があるから、常識的にはそこを落とすのが当然だから聞かれなかっただけである。南商豪と呼ぶべきか西小終と呼ぶべきか分からないが、彼にだけは伝えておく必要があるだろう。現地に潜り込んだ工作部隊とか、無駄死にされても困るからね。

しかし中央政府に出した案やこの段階での話し合いでは、詳細まで伝える必要はないし、口にしない方が後に安全まであった。

「龍学才さん。僕の予想ではあの近辺に千近い島があり、海流の変化も実は複雑と見ていますがいかがですか？」

「ふむ。……我々の視点で良ければそうですね。近くに潜んで敵の増援を報告したり、小数であれば討ち取る事も可能ですぞ」

「おおー」

今回、同席してもらったのは赤色港に居た龍学才さんだ。

彼は陸上での特使であり、外交官であると同時に色々な権限を持っている。流石に情報をいきなりはくれないが、イエス・ノーくらいを口にする事は無理ではないそうだ。

ちなみにこの辺の流れは前もって根回ししているので、いきなり駄

目だと言われる可能性は低かった。

「これならば行けるのではないか？ 十分に採算が……」

「お待ちください。そこまでの協力ならば幾らでも致しましょう。双方の益であり、これまでの信頼関係もありますからな。しかし、それ以上を求められるならば……何をいただけるかをこの龍字才にお教え願いたいのですのう」

「まあ、それはそうですね」

当然と言えば当然だが、他人の命を動かすならば相応の代価が必要になる。

小島に潜んで情報を伝えたり、敵の増援を邪魔したり少数ならば討ち取る。あるいは海流に載せて船を高速で運ぶ程度ならば問題ないと言ってくれる。だがそれ以上はどうだろうか？

当たり前だがこちらにも命を賭けるか、あるいは生息領域の拡大なり、生存権強化への援助が必要だろう。

「城ヶ崎の砦をお渡しするのは先ほど指摘されましたが、中央……というか西領の大公閣下がお許しにならないでしょう。そこでこんな計画を用意いたしました。これは後払いになります、前払いとして別のモノも用意しております」

「ホホウ……お見せいただきましようか」

ここで見せるのは普通の沿岸工事の援助と、この前に考えた水塞都市だ。

前者は妥当な話で魅力も薄いのが実行し易く、場所は何処でも良いので水棲種族だけが得をする事も出来る。後者は人間と協力し合い、大きな港町を作り上げそこに水棲種族が逃げ込めるように、あるいは過ごし難い時は休めるように設計したものである。

最初から水塞都市だけにして形状にこだわっても良かったのだが……、一人の視点での改良と言う物が必ずしも望まれていないので段階を分けて置いた。僕が村でやった改良も、多くは無駄であったり作った当時は意味が薄い物であったからだ。

「いやあ、何と魅力的な提案ですな。人と共生関係というのが実によろしい。この計画ならば捨てられることもありますまい」

「中央が提供する報酬みたいに口約束にはしたくありませんので」
「では改めてお尋ねしましょう。銀殿ならば嘘は吐かぬとして、前払いの報酬とは？」

後払いの都市計画だけでもかなり魅力的にはしていた。

もし戦争が起きないのであれば、是非も無しと領いてくれただろう。ただの都市計画で相互に材料やら資金を提供し合うならば、お互いの監視は出来るし利益の範疇で話し合えるからだ。

しかし、命の代価という点ではまるで変ってはいない。自分の利益のために他人の命を賭けるといふ行為は、まるで変って居ないのだ。これだけで領いたならば、龍学才さんは明日から特使の権限を剥奪されるだろう。

「千ある島の中に厄介な場所があると聞きました。先にその島を攻略しに行きたいと思えます。工事に必要な道具込みで、僕らを運んでいただければ助かりますね」

「なんと！あの島を、いや、あの魔物たちを討伐されると？」

「どうせ後で邪魔になりますからね。なら早い方が良いかと思いましたが」

西領の沿岸に、ちよつと面倒くさい魔物が棲んでいる。

奪還作戦の時に聞いた空飛ぶ魔物はそこにも棲んでいるらしいのだ。どうせ戦うならば先に倒して悪いという事はあるまい。僕らが先に命を賭け、危険な魔物を排除する事に意味はあった。また敵に知られたとしても、囮になるならば悪い事はない。というか生存圏拡大のために魔物退治をするのは当然のことだしね。

そしてもう一つ、僕らが退治に行くと同時にするべきことがあった。それは島がそこそこ広いので、中間拠点の一つにできることだ。複数に分散するのであればそこまた拠点の一部になるということである。

「しかし、しかしですぞ。この計画に必要な物資や技術を先行して運んでしまい、私たちが奪って使ってしまうとはお考えには？」

「これは異な事を。これまで水棲種族の方は一度も誤魔化された事はないでしょう？ ならば今回の取引もまた大丈夫だと判断しました」

別に水棲種族を全面的に信用しているわけでもない。

一回だけならば出し抜いて嘘を吐くこともあるからだ。それならば評判には傷が付かず、あくまで計略ということになるだろう。しかし今回は別の判断がある。この計画は人間と水棲種族が共に手を携えて、いつしよに同じ年に暮らさねば意味がないのである。不得意な仕事と得意な仕事をお互いに入れ替え、梨状での作業と水辺での作業を分担しているのだから。

要するに水棲種族がクレーンやらいろいろ盗んでも意味がないという事だ。そういうのを人間が扱い、大型船建造や小舟のメンテナン스에使用して初めて意味があるのだから。

「よろしいでしょう。そこまでおっしゃるならば私も一族の者を説得し易くなります。あの島を攻略されたならば、当方も腹をく括るとお約束しましょう」

こうして水棲種族を苦しめる魔物を退治することで、彼らの説得に替える事になった。

クレーンやら規格化した木材の手配が終わり次第、その島に向かう事になるだろう。

来年に向けて

● 緋家での会議を終えて領地への帰還。

これまでの道中で最も騒がしい事になった。戦時に向けて仮祝言を適当に済ませ、麗さんが同行することになったからだ。収穫祭に合わせて豪華な挙式をするという事で、予算をまとめるという事になった。

もし救いがあるとしたら双葉と麗さんの仲は良くないが、最悪では無かったことだろう。『挙式までに愛人は切っておけ!』とか『私の方が先!』みたいな争いではないのが幸いである。貴族だからと言って割り切ったというよりは、お互いが望むベクトルが別方向だからだろう。

「毎日毎日そんなに低俗なお菓子ばかり食べて。はしたないとはお思いませんか?」

「何よ! そつちこそあんなに甘過ぎるお菓子食べてさ! しかも苦くするためにカラメル作るとか意味わかんない!」

今日はお菓子に対する論議で喧嘩を始めた。

麗さんは自己主張が激しく、宮廷式の凝った技術で高価な調味料を強烈に利かせた料理を好む。双葉の方は面倒くさがりで、そのくせ毎日のオヤツは欲しがるタイプだ。表と裏を分担するというよりは、硬軟の方を分担するという感じだろうか?

興味のある分野では議論を始めると平行線で延々と自己主張を始めるのだが、どうでも良い分野にはまるで興味が無いという点では二人ともよく似ていた。服飾に関してだと麗さんは格式と格好良さ重視、双葉は着心地さえよければ後はどうでも良いという風に対立しないのだ。

(まあ対立構造にならないだけマシかな。冷戦になって馬鹿みたいに張り合っつて予算とか遣われても困るからなあ。二人とも馬鹿じゃないからその辺を見極めてるんだろうけど)

双葉は平民なので当然だが、麗さんも緋家の現状を伝えれば納得し

た。

今のところ二人とも金のかかる趣味はしてないし、僕が技術検証を試して失敗する方が無駄遣い気味なので、妥当なラインで争っていると言えるだろう。このまま仲良く喧嘩するレベルで収まって欲しいレベルである。

もつとも寝所での行為を引き合いに出し、マグロ女だの犬の様にワンワンだの言い始めた時は赤面するしかなかった。旅の恥はかき捨てというが、領地の中で口論されてなくて良かったと切に思う。

「……話は変わりますけれど、他人の処の問題を片付ける必要はありませんの?」

「その方が簡単だからね。それと詳しく話せないけど計画の予備案になるんだ。しかも一足先に始められるから、やっておかない手はないよ」

麗さんが文句をつけたのは西領にある島の確保の件だ。

海路の計画でピストン輸送の話をした時に、城ヶ崎なんて難所は欠片も口にしなかったが……そんな場所を最初から攻める気は無かった。西領の沿岸部にある場所で、水棲種族の協力があれば上陸作戦を組める島。そんな条件であればどこでも良かったのである。

その上で水棲種族が確保したい島をリストアップしてもらい、陸上が苦手な彼らの代わりに僕らが奪いに行くという提案をしたに過ぎない。命の代価は命で払うべきだし、彼らは……というか種族間の取引は誠意をもって対応し合う方がお互いのためになるのだから。

「それに去年、緋家で僕が名前を上げた手法と似てるんだ。緋雁原のヌシを倒すことで命を賭けてみせ、武名を上げたことで武門の人たちも納得してくれた。水棲種族の人たちにとって難しい場所だからこそ、僕や人間族が命かけて彼らの為に行動したって事を示せる訳だね」

「そういう意味では分かりますけれど……危険ではないかと申しあげて居るのですっ」

いちいち説明すると、そんな事は判っているとソツポを向いてしまった。

化粧美人で素顔はそれ程でもないのだが、ツーンとしている所は結構可愛いと思う。別にツンデレと言う訳でもないが、悪役令嬢系で自己主張が激しく極端から極端に走るタイプなのだろう。その辺が判って来たのと、前に僕は舐められ易いと言ったのである程度は許容範囲を見せる様にして来た。その範疇でなら何を言ってもいいけど、越えたらガツンと怒る姿勢を見せたら大人しくなってくれたのは嬉しい誤算である。

なお領地に帰ってから彼女の即落ちニコマ劇場はいかなく発揮される事になる。道中の苦労は何だったのかと思う程にあっけなくしおらしくなったのは苦笑するほかなかった。

「大将よう。今度こそ俺に出番はあるんだろうなあ？」

「勿論さ。戻り次第に準備するけど、それが終わったら化け物退治の旅になるね。向かって来る敵を薙ぎ倒すだけで良く、余計な事を考えなくて済むのはなお良いね。中でも相手が『逃げない』のは最高さ」
今回の件、幾つか候補はあった上で大通連好みの一番難易度が高そうな場所を選んだ。

実際にはもつと難しい場所もあったが、『可能な範囲で一番難しい』という場所になる。傭兵を雇えば済むような簡単な場所では水棲種族への貸しにならないのもある。しかし条件を並べた上で、『今うちで解決した方が良い場所』であるからこそ選定対象に選んだのである。

何しろ放っておくと西領奪還作戦に弊害を与えそうな魔物が棲んでいるのだ。もし魔族の中で操る能力をもつ者が居たり、そこまでいかずとも行先を餌か何かで操ることが出来たら面倒になるのだから。(そういう意味で一石二鳥なんだ。戦場に出てこられると敵の増援になる上、追い詰めても逃げられちゃう。でも巢にこっちから攻め入れれば向こうは逃げられないのが大きいんだよね)

空飛ぶ敵ほど対処に困る相手は居ない。

どれだけ居ようと強かろうと普通の敵なら、移動ルートを塞いで投石器なりアーバレストを撃てば勝ちようがある。山積みになった死体も壁に出来るので意外と戦い易いのだ。これに対して空飛ぶ敵は

攻撃し難い上に、危なく成ったら勝手に逃げるので確実に倒すことも出来なかった。もし投石器を破壊されたら、もつと酷いことになるだろう。

この点が対象の選定で最も大きなポイントだったと言い換えても良い。自分たちの巢を守ろうとするだろうし、もし逃げ散るならそこは巢として使えなくなる。別の場所に逃げ込み続け、いつか全滅させることもできるだろう。

「そいつは面白れえなあ。で、どんな奴が敵なんだ？」

「ハーピーの群れだよ。大型種で強いけど、賢くないのありがたいね。もしかしたら初歩的な魔法を使うかもしれないけれど、それだけだ」

この魔物は翼の生えた女の姿をしているのだが、幾つか種類がある。

速度タイプや魔法タイプなどが居るが、一番厄介なのは言語を喋るほど賢い奴だ。そいつらは亜人種的な種族みたいな者なので魔法を使える可能性がある上、魔族と交渉したり戦術を理解する知恵があるから別の意味で危険である。西領まで飛んで行かれて魔族に助けを求められたら面倒な事になるだろう。

ともあれ今回は純粹に強いだけの連中であり、単純に倒して蹴散らせばよいのがありがたかった。

● 領地に戻れば方針設定と麗さんの顔見せ。

これを同時にやっておくと置かないとでは激しく意味が変わってくる。何かあった時に麗さんが夫人としての権限で命令を変更できる可能性があるが、やっておけば代官である黄三硯も僕の命令の方が優先だと言い切れるからだ。

そして他の領主や魔物に攻められるとか、何かあったら麗さんが中心になって三硯が補佐する形で防衛戦を行えるだろう。

「ひとまずの方針は他所から調達した木材を適切なサイズ数種に加工して、それを他の領地の大工が同じことを出来るかどうかの指導。出来上がった素材で同じ物を、やはり他の領地の大工が牽引舟や柵に加

工できるかと言う所だね」

「承知しました。クレーンと投石器は我が領だけですな？」

「うん。そいつはうちの特産ってことにしよう。二・三造りはするけど、送るだけでいいよ」

規格化することで他の領地でも同じサイズの木材が加工できる。

陣地を守るための柵はまだしも、舟の方はピストン輸送に重要だからだ。外洋には向かない上陸への輸送専門なので本格的な船ではないが、それでもサイズがまちまちだと建造に時間が掛かってしまう。

逆にここで統一規格を設定できれば、同じ材料が発生するので何処の領地でも同じ物を作ることができるといふ訳だ。売り物としては微妙だが、軍事的に海辺だけで使用できれば十分なので問題はない。「質問ですけれど、そんなに上手く行きますの？ 女官の編み物一つとっても同じ物は一つもありませんわよ？ 以前にそれで苦勞したことがありますの」

「そうだね。普通は自分の作り易いサイズや、師匠が教えた通りにしか作らないから」

我儘なので意外と忘れそうになるのだが、麗さんは女官の経験があった。

といっても中央のお姫様付きの侍女であり、身元の十分な貴族しかなる事の出来ない女官と言うやつだ。その時の経験を思い出しているのだろうか……言ってはいけないけど、意外に物が見えていて驚いた。この辺は僕は北領で失敗したからなあ。

何しろこの世界に限らず徒弟制度というものはそういうものだ。経験則と前例でしか動かず、自分にとっての最適解こそが基本なのである。

「だったらどうやって徹底しますの？」

「協力してくれる大工には鋼の定規や小槌とかの工具を提供する。うちで覚えることになってるから渡すのにも丁度良いね。彼らにこのサイズを目安に釘を作ったり、木を切断してくれと覚えてもらうんだ。繰り返しすればそのうち標準が変わるよ」

普通の大工はあくまで鉄の工具を修復したり、鋳溶かして使い回

す。

しかし鋼の工具は今まで以上に損耗し難く、小槌はともかく定規などは目減りし難い。一度渡しておけばずっと使ってくれるだろう。何だったら現品と引き替えで新しいのを格安で提供するのも良いはずだ。

そして何より自主的な作り置きとしてのノルマではなく、適格サイズの素材を買い取る制度にしておけば、どうやってもそのサイズに合わせて来るといふ訳である。作り置きのフリーサイズを100%だが代価を基本、適格サイズならば120%の値段な上で金を直接と明確な差をつけるわけだ。

「さっきもいったけど大工たちは師匠から作り易さ優先で教えられたことを前提にやってるんだ。日常の釘なら指の大きさのどこまで、大きい建築用ならここまで……とかね。針やなんかも同じはずだよ。だってその方が簡単なもの」

「そこで目安として定規を提供する訳です。このサイズに合わせて作れ、長いならば削って落とせと」

同じような理屈で木材は最大級で測って、それを適当なサイズに切り直して物に合わせる。

それこそ柵なんて現地で似たようなサイズの木を使い、適当に紐で結わえれば良いのだ。普通ならばサイズを統一する必要などはない。

しかし今回は少し違う。柵であれば協力してくれる水棲種族たちが持ち易く、荷物を載せる上陸用の舟に積み込み易い方が良いのだ。「懸念としては御指示いただいた舟がちゃんと浮かぶかどうかですな。川と海では違うのでしょうか？」

「その辺も含めて本格的な生産は試験してからだね。ハーピーが棲んでる島の外観を調べてもらおう事になってるから、その時に一緒にデータも送ってもらおうか。ガレー船で引つ張れば上陸できる筈なんだからだね」

ハーピーがどんな場所に棲んでいるかで結構作戦が違ってくる。

洞窟なら楽勝だし、屋根になる大きな木の下で雨宿りするならば少し面倒だろう。しかし相手の本拠地がどこか判るか判らないかで、作

戦がまるで違ってくるのだ。情報収集が大前提と言えるだろう。

こうして来年の夏だか秋に掛けての冒険に向けて作戦を考えながら、改めて農業や畜産の指示を出していった。

第七章

新年と戦闘準備の幕開け

●
新年になったが、それで何かが大きく変わることなんかない。

とはいえそれでは寂しいので、年度末の整理で生じた備蓄食料や油を放出したり新たに届いた魚介類を振舞う事にした。

まずは粗削りな濾過器の元に赴き、昨年までの使用済み油を汲み上げた。ガラスの器を使う事で、中身が綺麗な事を判り易く説明して見せる。

「古い油を新しい油へ。これを使ってみんなで楽しく食べようか。残り滓は石鹼や肥料に替えちゃうけど、この油は欲しい人たちで分けても良いよ。新しい年に！」

「おお！ 新しい年に！」

上澄みだけを使って串揚げを用意する。

判り易い料理である上、備蓄から次の収穫までを引いた残りの食材を放出するので、減多に無い食べ放題が出来るといふ訳だ。油自体も貴重品であり、無料で新しい……実際にハリサイクルだけど手に入るならば庶民にはありがたいものである。

とはいえこの辺は実験の失敗というか、成功しなかった話でもあるので残念だ。植物油は商品作物になるほど量が採れず、石鹼はこの世界では普通に作られているので売れる程でもない。どちらも植物を改良しなければ、儲けにはならないだろう。

「早く早く！ こっちでも食べようよ」

「焦らないの双葉。みんな揃ってからね」

材料自体は同じだが、僕らの方は料理がもう二種類ある。

水棲種族の亀老師たちも居るので、彼らが食べ慣れない肉類を減らし、代わりに魚介類を多めにしたからだ。ちなみに増えた料理は魚貝シャブシャブとオデン。薄切りにした魚や貝を鍋に潜らせたり、練り物にしてから煮込んでいる。

ちなみに全員が揃ってないのは、よりにもよって領主夫人である麗さんが朝から出掛けてまだ戻ってないからだ。出掛けるところまでは僕と一緒にだったのだが、そのまま居残ったというか……。

「ふう……。お待ちせしました、あなた」

「御帰りになったようだね。ご苦労様」

艶々するほど上気した表情で戻って来る麗さん。

これで胸元とか乱れてたらNTRであるが、幸いなことにむしろ朝よりもピッチリしていた。そういう隙を見せないぞと言う気構えが見える程であり、かといって上位者である悌さまや侯爵さんが訪れていたわけではない。

まあウチで最上位の御方が来臨されていたので、そのお世話に行っていたというべきか。

「はい。娘々はそのうちにまた訪れるとの事でした。あなたにもよろしくと言伝を預かっております」

「それは良かった。ありがたい祭神さまなので、失礼のないようにね。まあ君に限ってそんな事はないと思うけれど」

接待していたのは我が神である九天玄女さまである。

年末にご来臨されたので麗さんも連れてご挨拶に赴いたのだが、何をどうしたのか麗さんはあちらに入り浸ってしまった。どうやら高貴な物が好きで上位者に仕えたいという、ある種のブランド欲求があったようだ。そういう意味で御姫様の侍女をした時は幸せだったと思われる。

そういえば封建制度と言う物が上手く機能するには一部のサディストと絶対多数のマゾヒストが必要だというが、本物の神さまに出逢った事で麗さんのM心が天元突破したのだろう。

（旦那よりも神さまを優先するとか宗教法人に嵌ったセレブっぽいけど、まあ愛人見つけてベツタリよりは余程マシかな。上流階級は子供生まれたら、お互いに愛人作るとか普通らしいし）

相手が九天玄女さままでは怒れないというか、奉仕してくれるのはありがたい気がする。

ついこの間まではツンケンする部分もあったのだが、今では娘々の

お言葉もあつてすっかりナリを潜めている。即落ちニコマと言う言葉があるが、麗さんはそつち系の人の人だろう。

今度、機会があつたらMな人が喜びそうなエツチな事を夜の営みで試してみようと思いつつ……今はそんなことを口にする時間帯ではないので、表向きのお話をしよう。

「今年の作戦の成功を祝って宴会と行こうか。亀老師さん。何か今のところ、判った事はある？」

「……あー。そうですね。舟の件で、少しあつたとかー？」

水棲種族の元へ蝦衛視を送り返し、ハーピーの事を調べてもらつている。

ついでに舟を建造する為の資材を持つて行つてもらい、現地でも問題なく浮かぶか牽引すれば問題ないかをチェックしてもらつていた。開拓地に橋と水路を作つて移動し易くしたため、その辺の情報伝達が早くなったのはありがたい。

本当はエルフ族の領域を通る方がよほど早いのだが、少なくとも吊り橋を幾つか建設してから交通許可が降りる事になつていた。おそらくは全ての吊り橋を作るころには、通行する部分を秘密にする必要がなくなるからだろう。

「うん？ あ、連環の計も試してみたのか。……言われてみれば確かに、向こうで縦横に組むなら専用の窪みもあつた方が良いよね」

此処で言う連環の計とは、上陸用の運搬舟と柵用の木材を繋いだ物だ。

簡易的な舢舨として固めて動かすことが可能で、途中まではガレー船で引つ張るのだが単独よりも安定する。それ以上は引けない重さや波の抵抗になつたら増やさない様にすればよいのである。

迂闊だったのはこの計略と向こうで組み立てる船・柵を自分で提案しておきながら、組み合わせ易くするための窪みを上陸舟の側に作つておかなかつたのである。舟は舟として完成しているので油断してしまつたらしい。

「せっかくみんな規格化に慣れて来たことだし、とりあえずは次のバージョンから試そうか。そういう意味でも亀老師さんたちが居て

くれて助かりました」

「いくえのう。ワシらも不慣れやん大工仕事を、教えてくださり、助かつとりますわ」

亀老師たちは本来人足であり、大工仕事も覚えて置いた方が楽に橋を建設できる。

そこで少しずつ覚えてもらっていたわけだが、彼らは職人たちの様に前例や師匠の教えを踏襲している訳ではない。最初は規格化にあまり納得が行っていないかった他の町の大工たちも、自分たちが教えたばかりの彼らが徐々に上手くなるコツが、規格化されたサイズであると知って徐々に考えを変えてくれたのであった。

最初に領主である僕が口にしても報酬を積んでもあまり良い顔をしなかったのに不思議なものである。自分たちが納得できる前例ができると考えを変えたいということだろうか？

「蝦衛視はそのままあちらに？」

「そうですね。ほくかの島にも居らんか、探しちくるーという話じゃて」

「なるほど。合流されたりしても困りますしね」

事前調査で頼んでいるのは、島の構造と生活サイクルである。

鳥目で夜に眠るのか、夜間でも全く問題ないのか、風や雨はどうなのかと行った情報を踏まえて相手の生活サイクルを掴めれば攻め易い。その上で島の構図が判明すれば、どこから攻め入ってどのよう制圧すればよいか判るのである。

逆にやってはマズイことは、適当に追い散らして魔族なり賢いハーピーと合流させてしまう事だ。ここが強いだけの雑軍と思つていたら、賢い同族や魔族に率いられて軍隊化されると非常に困る。そういう意味で、戦う時は殲滅させるつもりで行くべきだろう。

(どうせ他の島も落としておきたい所だし、丁度良いかな？ これで城ヶ崎を陥落させずに済むはずだ。後はあいつが連れて来る西の西の連中がどう出てくるか、かな?)

ピストン輸送作戦は何とかなるように思われてきた。

危険な要塞なんか無視して幾つかの島に分散して待機し、ガレー船

で一気に牽引すれば良い。上陸して陣地を築き、迎撃するところまでは何とかなるだろう。近代戦で上陸戦で最も危険な部分は何とかなる来そうなのだが、問題はこれが近代ではない中世レベルのファンタジーだということである。

魔族の精銳が待ち構えていたら、上陸だけ何とかなってもダメだろう。食料の手配はしておくにしても、精銳相手では勝手が違うのである。僅か千・二千と侮って、強力な魔物の集団だったらこちらが半壊しかねないのだから。

そういう意味で南商豪……キリー・グラントの連れて来る西領よりも西の連中の話が聞きたい所である。

西よりの使者

● 新年の行事を終えてからは対外交策や領内政治に関する進物攻勢である。

水棲種族との交渉副使として彼らが喜ぶ様々な物を送り、予算の範囲で収めて置く。この時にうちの領地で手に入る物は帳簿上だけ買ったことにして、マネーロンダリングしておいた。

そして緋家の領内における進物に悩んでいた所、丁度良い物が手に入るようになった。昨年から手を掛けていた砂糖と塩の精製が、ようやく上手く行くようになったのである。しかもオマケ付きで。

「精製塩や砂糖と引き替えに一部の通行許可か……。現金というか頃合いと言うか。まあ吊り橋も殆ど計画通りに進んでるしね」

「ともあれエルフの領域を通れるようになれば連絡も早く安全になります」

これまで通行を許可しなかったエルフ達が意向を変えた。

彼らの領域で生産できない塩や砂糖を交易することを前提に、通行許可を出したのである。もちろん行商人など一般人は無理だが、こちらや水棲種族の使者などにくっついて使節団がお土産付きで往来するのは構わないという事らしい。

水棲種族やうちの領地との共同開発でエルフの領域にも吊り橋が幾つも建設され、行き来が楽になったと同時に、職人の往来で隠しておく理由が無くなったのだらうと推測される。

「それで……。砂糖を贈り物にされますか？」

「それだと金持ちの領主は手に入れられるし、量を贈るとうちの産物ってバレるからね。ここはジャムの形にして贈らう。瓶詰にするけど、妹さん『達』にも贈って良いよ」

「格別なご配慮、ありがとうございます」

砂糖はあくまで侯爵領の向こう側で採れるので、この辺では高価である。

架橋や水路のおかげで昔よりも安価になったとはいえ高級品には

違いない。迂闊にこれを向こうに派遣したうちの人間が作れることを知られると、緋家領内の連中から色々強請られることになるだろう。推測はされるが面と向かって寄せと言われるのは面白くないし、付加価値の問題で直接送るのは止めておいた。

それはそれとして黄三硯の妹宛てに送るといふ話は、むしろ向こうの魔術学院だか魔術ギルドの研究者の関心を引く為である。ジャムなどの甘味やガラス瓶などの機材に興味ある者が居れば、うちの領地に関心を持ってくれるだろうという算段であった。

「そういえば求められている買い取りの件はいかがいたしますか？」
「産物を高く買って欲しくてやつだっけ？　うちも余裕がないし共同組合じゃあ必要としてないしなあ。無碍に断るのも気が引けるし、来年の出兵を考えたら何とかしてあげたいんだよね」

緋家の各領主に贈り物をするとして、その内の幾つかは赤字脱却中だった。

アンデッド対策で使い果たした懐を何とかしようという段階で、西領出兵の為にまた兵を出せと言ったら悲鳴を上げる連中と言える。他の領主も内心同じことを思っている者は居るだろうが、様子見を出来ないレベルの領主が僕に内々に連絡を入れて来たのである。

問題なのは彼らが売りに出したい産物も苦渋の決断で切り売りする物だということだ。食い物や薪は蓄えておくものだし、それこそ来年に出兵する場合は兵糧だって必要だ。赤字脱却のためとはいえ商人に売りたいくはないだろう。だからこそ身内に売って、将来の物資として預けたという言い訳をしたいのだと思われた。

「贈り物を砂糖にされるのはいかがですか？　アレならば現金に換えられると思いますが」

「昔の価格ならそれもアリだったけど、今となつては買い叩かれるだけだからなあ。それをやるなら『南商豪が新しい販路を手に入れた』という理由で中央辺りで売ってもらおう方がまだ良いと思うよ。後は他と違う贈り物だとスネるし」

プライドの問題は非常に面倒くさい。

領地の窮状を訴えたいわけでは無く『余剰物資があるから買えない

か?』と必要もない事を口にする事で、婉曲的に困ってるから資金が欲しいと伝えているのだ。それをぶち壊す上に、資金交換が可能な物資を渡したとなると怒り狂う可能性があった。

かといって南商豪ことキリー・グラントには親族から監視が付けられているだろう。砂糖の取引を始めてその資金で何をやる気なのかせつつかれても困るのだ。

「ひとまず開拓地に難民を雇うことで領内の治安回復を図り、翌年の生産を上げることを目標とする。という言い訳であつちで買い取ろう。向こうならまだ余裕はあるし、人手が欲しいのは確かだからね」「承知しました。手紙の草稿を用意しておきます」

緋家の軍師であり開拓長官であり、ついでに監督官でもある。

その辺の権限を混同するのは良くないが、今回に関しては西領奪還に向けての行為という言い訳が成り立つので目を瞑っておこう。少なくとも帳簿上は右から左に物資とか金が動くだけである。簿記原理による二重明記なんか他の連中はやって居ないので、これでも明朗会計な方だろう。

しかし転生してまで簿記をやらされるとは思いもしなかったよ。上層部からのツツコミ対策としてありがたく使わせてもらってるから文句は言えないけどね。

●
そうこうする内にキリー・グラントが白南終の名義で戻って来た。要するに交渉正使として赴いた帰りであり、この地に留まって物資やら手配している僕との顔合わせと情報交換と言う事だ。

そしてその使節団の一部と一緒に付いて来た水棲種族と、こちらでは見慣れない日に焼けた肌の男たちが居た。

「ラー・フー。こちら流に直すならば羅虎というところか」

「遊牧民の統領でしょうか? お目通り叶い恐悦し極です」

「世辞など必要ない。あの女の息子が会ってやれと言うから来ただけだ」

ひどくぶつきら棒に挨拶されたが、統領であることは否定しなかった。

おそらくは遊牧民の一集団を率いる頭で、副頭目に任せても困らない程度の格と信頼関係なのだろう。でなければ重要な密談のためとはいえ上位者が自ら来るとは思えないし、周囲が出させないはずだ。そしてこのやり取りから伺えるのはキリーの母親と親しい人間であり……。こういう物言いを止めない段階で、僕にも察しろと彼が配慮しているのだろう。

（沿岸部の独立都市まで来ていた遊牧民で、場合によっては婚約者だったってところかな？ 大公さまが姫を奪ったのはその辺の同盟関係を成立させない為つてのもあつたのかも）

都合の良い妄想でしかないが、そうだとするならば納得はできる。

自分の領地で独自の動きをする部族が居るのは気持ち良い物ではないし、都市規模とはいえ他勢力を組み込む余裕があれば狙いたくもなるだろう。一石二鳥のチャンスであると同時に、そのチャンスを逃せば遊牧民が沿岸部に居座って強大な戦力となる危険もあるのだ。もし大公にその気があるならば動いても不思議ではなかった。

そしてこういった背景を僕に教えるのは、そうだと思わせたい罠ではないのであれば、何らかの譲歩を引き出したいからだろう。それこそ大公の勢力と対抗させることができるぞ……と。

「単刀直入に要求を言おう。食い物が無い」

「はっ？」

「聞こえなかったのか？ こちらの要望は食料だ」

あまりの率直さに首を傾げた僕に羅虎は改めて要求を突き付けた。

こちらから何を要請するにしても、食料が必要だと明快に告げたのだ。とはいえ、はいそうですかで終わる話ではないし、食糧事情に余裕がないのはこちらと同じであった。

少なくともどうして必要なのか、どういう規模でどの程度の期間必要なのかを見極めなければなるまい。

「言葉もその意味も分かりますが、経緯を聞かせてください。統領自らと言う事は重要かつ規模が大きいという事ですよね？」

「お前が解放したという土地。あそこは穀倉地帯だったのは知って居るな？ それを買っていたのは我々も同じだ。後の意味は判るだろ

う」

「それは……」

相手も馬鹿ではないので全ての情報を開示したりはしない。

こちらでも知っている内容だけで概要を説明した。要するに穀倉地帯がアンデッド湧きによって塞がれてしまい、この国ではロクな食糧生産が出来なかったのだ。そして輸入によって食糧供給の補助を行っていた隣国も同様と言う事だろう。

西領の西、国よりも西部方面全体で食料が慢性的に不足しているという事だ。足りなくなる判ったら獣なども先に確保してしまうだろう。そしてそのサイクルが徐々に獣自体の数を減らしたに違いない。「聞いたかもしれませんが目下のところ我々にも目的があります。それと引き返えにするには、相応の取引ができると思って期待して良いのでしょうか？」

「ほう……。それが判って居て取引と来たか。なるほどお前が言うだけの事はある」

「でなきや連れて来てねえよ」

意味が分からないかもしれないが、食料消費の絶対数よりも用途の話だ。

これから西領奪還に向けて食料は多い方が良いのだし、他所に援助する様な余裕もない。しかも一年・二年ではなく暫くの間は続ける必要が出て来るだろう。

問題なのは彼らが西領の向こうに居る民族ということだ。他にもセントール族と言う半人半馬の種族も居るらしいが、彼らは戦力であると同時に消費者でもある。要するに『敵の敵は味方』とも言えるし、『敵の敵もまた敵』という理屈になるのだ。放っておけば西領を攻略して、そこにある食料を根こそぎ奪いに来るだろう。

(参ったな。大公閣下たちが急ぐはずだよ。今を逃したら、何時雪崩込んできてもおかしくない。上層部からすれば一刻も早く領地を取り戻して備える必要があるということか)

西領を占拠しているのは魔族というのが状況をおかしくさせている。

この夏王朝は魔族を駆逐する力が無いという事であり、そこを開放して土地を自分の物にしてもおかしくはないという理屈だ。仮に魔族への攻撃だけが容認されて土地を返すという事になったとしても、遊牧民たちは費やした以上の食料を持っていくだろう。そこに残る人々の事などおかまいなしだ。

もし遊牧民の中に土地を返さずに奴隷を使って耕作させよう……などという者が現れたらもっと厄介な事になる。何しろこちらは魔族と連戦して彼らと戦う余力などないのだから。

「我らは第三者だが潜在的な敵でもある。それでも食料を渡すと?」「可能性を論じてお客を敵に回したら、潜在的どころか民族的な戦争になってしまいますよ。ただ村一つ二つ分なら何とでもなりますが、それどころではない量を暫く提供するには双方に理由と利益が必要です。だからこそ取引ですぬ」

話が難しいのは彼らが言う様に潜在的な敵だからである。

下手に食料を渡してもそれはただの利敵行為だ。では魔族を攻めるために援軍を派遣する見返りだったとしても、そのまま居座る可能性があるので中央が領く筈がない。大丈夫だったとしても、そこそ僕らを処刑する良い言い訳でしかなかった。陸上が苦手で占拠できない水棲種族とは違うのである。

それゆえにちゃんとした取引を行い、双方にとって利益のある内容にせねばならないだろう。

オーグーン

● 唐突な食糧供給の要請があったのだが、そんな余裕はない。

穀倉地帯の解放は半ばであり、これから残りを奪還しようとする戦争をしようと言うのに渡してしまうと備蓄が無くなってしまふ。しかも潜在的な敵でもあるので、扱いが難しい。

とはいえ放置すれば確定で敵と成り、迂闊に渡すと利敵行為というレッテルが張られてしまふ為である。

「羅虎さん。今から接待名義で宴を開きますが、食べても良い物と駄目な物を教えてください。禁忌や習慣的な問題があるかもしれませんね。例えば魚や豚はどうですか？」

文化圏とか宗教の問題で食べられない物が存在するかもしれない。ゴボウを食べる習慣が無ければ木の根にしか見えないし、豚や牛を食べてはいけない地域では皮をかじる程度でも問題だろう。面倒くさいことに、もてなしを受けた時は礼儀として黙って食べるが、家に持ち帰っては絶対に食べない物もあるので注意が必要だ。

だからこのタイミングですべきことは、まず『何なら食べても良いのか』を確認し、文化的な問題をクリアする事である。その上でどうやって食料を集め、どうやって受け渡すかを後で考えれば良い。

「魚は大丈夫だ。川や海の近くで育ってない者は苦手かもしれないが。豚は育ててはいないが、出されれば食う。どちらも良く焼くか煮るかした物に限るが」

「それだけ聞ければひとまずは大丈夫です。せっかく調達したのに食べられない物も少ない物を寄こしたと言われては二度手間ですから」

「どうやら遊牧民としての習慣の問題だけで宗教的には大丈夫なようだ。」

これならばなんとかなるかもしれない。この場に無いだけで、他所から調達することはできるのだから。その上で手配だけこちらでやっておいて、供給するのは迂回ルートを通れば問題ないだろう。

まるで冷戦時代に東側へ物資を流すかの様な行為だが、まあ似た様

な事だし参考にしているので仕方がない。

「今の言葉をあえて伝えたのは、その説明をせよと言う事か？」

「察してくださいと助かります。羅虎さんほど物判りの良い方ばかりとは限りません。もし形状が気になるならば、回した食料の食べ方も一緒に研究しておいた方が良いかもしれませんね」

僕としても嫌味で行ったわけではない。後半は確かに忠告と実情を交えていた。

調達するのであつて手元から回すわけではないし、遊牧民に対して一般的ではない食事を提供するという事を先に言っておいたのだ。名目的には今回の宴会は正使であるキリーの帰還と、一緒に来た水棲種族相手なので試す分には丁度良い。

彼らも他人向けの食事で、食材が気に入らないから非礼だったとは言わないだろう。問題は今のうちに出しておくべきなのだ。

「……読めて来たぞ。貴様あの連中から食料を手に入れさせる気か。思いもしなかった手ではあるが、それだと幾らも報酬は渡せんぞ？」
「望んで宝を得たいわけではありませんしね。一方で困ってる人を助け、一方で商談を持ち込み、一方で敵対戦力が無くなる。何の問題があるでしょうか？ そんな三方一得とも言うべき状況に持ち込めればと思っています」

僕の案は水棲種族経由で食料を調達する方法だ。

彼らの元でなら魚介類が手に入り易いし、風と海流に乗ればかなりの速度で遠方からでも保存食を輸送できる。そういう意味で用意し易いのは第一に魚、そして保存がきく豚の塩漬けだろう。

その商談をまとめれば彼らには食料が、水棲種族には利益が、僕の元には平和が戻ってくるという事だ。目論見通りに進めばだが、身を切る三方一両損より良いかもしれない。

「聞いていた通り欲がないのだな。宝物や援軍を望むかと思つたが」
「羅虎さんは信用の出来る方とお見受けしますし、貴方が率いる一族もそうでしょう。しかし部族会議に出席する全ての氏族の長が同様でしょうか？」

「それを言われると頭が痛いな」

この男は硬骨漢のようだが全てがそうではないだろう。

他所の氏族から縄張りを奪えば良い、他国ならばもつと良いという者も居るに違いない。そして二進も三進も行かなくなったら、最初は同じ遊牧民から奪うべきではないと言っていた長も、食料が尽きればそうせざるを得なくなる。他所者ならばなおの事だろう。

だから食料はどうにかして渡しておくべきだし、様々な人間が居るのであればその対策もしておく必要がある。

「何を食わせる気なのか心配になって来たな」

「その辺は安心してください。他のメンバーは既に慣れてるくらいですから、外見上は問題ありませんよ。エルフから食べられる草木をもらうよりは抵抗感がないはずですよ」

ゴボウに偏見があるわけではないが、相手は遊牧民である。

羊と同じような物を食わせる気かと言われかねないのが面倒だった。それに加工するにしても魚の方が楽である。加工所は作らないといけないが、保存食を作らせることが可能ならば魚の方が用意しやすいのだし。

ともあれ宴席は始まりキリーと水棲種族を上座に置いて接待を開始した。僕はもちろん羅虎をメインに料理の解説役である。

「お手元の料理は少量ずつ二品参りますが、基本的にどちらも同じ物です。片方は元の形状を残した物、もう片方は磨り潰して柔らかくした物になります」

「これが同じ物？」

最初はまず揚げ物から入る。判り易く形状を残した物ばかりだ。

羅虎を始めとして慣れない者は驚くが、食べ慣れた者にはこやかな笑みで詳しく紹介している。豚や魚を荒く切って揚げた物と、摩り下ろして固めた物。ほぼ同じ形状になる様に加工して、専用の陶器の器に盛っている。

そういえば売れる物や贈答品を作ろうとして最終的にガラスの器に落ち着いたが、料理に盛る器としては陶器が一番適していた。今回だと右と左に分けた皿など、必要性に合わせて簡単に形状を決めて量産できるので。何だったら魚の形状とか、豚をデフォルメしても良い

だろう。数を作った場合によっては記念品として渡すならば、安価で量産し易い陶器の出番と言う事だ。

「そろそろ本格的に食べたい方もおられると思いますので、食べ易く串に刺した物を何品かお持ちして、その次は鍋になります」

「むむむ」

カツから串揚げに変えると、もう元の形が何であれ気にならない。

元の形状が残る方はブツ切りの姿が見て取れるし、練り物にする方はツクネになっている程度の事だ。最終的に鍋になると、ツクネからツミレに移行する訳だが……焦れた客は自分で欲しいサイズの分量を勝手に鍋に落としていった。

最初は驚いていた羅虎であるが、この頃には自分が部族の者に紹介するつもりで考えているのだろう。色々な形状の素材を思い出しながら、不思議な事に一番形状の残らないツミレに目を留めていた。

「確認するがコレを固めて置けるか？ 部族の保存食で羊をメインに、鳥や兎などその場で手に入る肉を混ぜて棒状に固めた物がある」
「なるほど。それを削ぎ切りにして鍋に入れるんですね？ 可能ですよ。ちよつと待ってください」

要するにキリタンポみたいなものだろう。

確か米のキリタンポが有名だが、兎の肉などで造ったキリタンポもあつたはずだ。ソレを思えば遊牧民の間で似たような料理があつたとしてもおかしくはない。そもそもソーセージだって腸の中に詰めるミンチであり、保存食の一種なのだから。魚肉ソーセージって手もあるよね。

そこで僕はソーセージの他にオデン用のタネを持ってきてもらった。今回は鍋に入れる肉としてツミレを優先したが、別にオデンのタネだって構わないのだ。水棲種族たちには、魚の調理法の一つとして説明していた。

「これは普通の腸詰ですが魚で似たような物を作ることも出来た筈です。そして、腸詰ではありませんが練った魚を固めたのがこちらになります。鍋に入れてみましょう」

「すまん」

オデンのタネで手ごろな物をそのまま投入し、一番大きいモノを削ぎ切りにする。

そしてソーセージも追加してしまい、それぞれ個別に小皿へ取ることにした。せっかくなのでディップとしてゴマダレや魚醤の他、チーズを溶かしてフォンデュ風のソースを用意する。

煮上がった端からそれを試食する羅虎はこれまでの中で最も真剣な表情だった。上座でキリーが一瞬だけ目端に止めたが、心配無いとアイコンタクトを送ると再び水棲種族たちと話し始める。

「少し柔らかいがこの食材をこちらの指定する形状にすればいけるはずだ。とはいえ大量に用意できるのか？」

「技術自体は僕が……僕の信奉する神さまに授かった物です。水棲種族たちに教えると独占できなくなります。神さまなら教えてやれとおっしゃるでしょう。加工場の設計で水棲種族たちからもそれなりにいただきますから、僕へのお代は気にしなくても大丈夫ですよ」

この際だが利益よりも信仰の方を取ろう。下手な報酬よりも彼らに感謝してもらった方がありがたい。

それに練り物を作ること自体は単純な物だ。隠匿して水棲種族が自分で発明する前に、『君たちなら自分で思いつくだろう?』とそしらぬ顔で、加工所を設計して彼らに量産させた方が最終的な利益は取れるかもしれない。

技術供与を無償で行い、加工場の設計料と機材の開発費だけをいただく。その上で水棲種族は各地で量産して売りさばき、食材のネームバリューが広がるまでは、遊牧民たちが主に引き受けるという訳だ。誰も損をしていないのが、良い。

「そういう訳にもいくまい。何をしたらこの借りを返せる?」

「遊牧民がこちらに攻め込んでこなければ構いませんよ。もし気になさるのであれば、個人的に動かせる人間を傭兵として僕の作った冒険者ギルドというのに参加させてくださいな」

「冒険者ギルド?」

せっかくなので冒険者ギルドのアピールもしておいた。

基本的には傭兵なので戦力を借りる言い訳にできるし、あちこちの

情報を集める仕事でもあるから問題はない。所属する時期次第では、ハーピーの島を攻める時に使えるだろう。

遊牧民の兵士がこちらに加わっても疑われるだけだが、この方法でならば疑われないのがあるがたい。

偽装情報

● 食べられる物が見つかったので、後は念の為に種類を増やしつづ詰めの作業だ。

暇な時に他の食材を試しつつ時間を遊牧民向け食材の開発に向けて。他には水棲種族と仲次をしてどんな代価で保存食を売るか、その加工所を僕が技術提供して可能な限り安く抑えられるようにしておく。

適正価格が決まればその範囲で彼ら自身による交易を行うだろう。

「羅虎さん。本当にこの味で良いの？ 固いし雑味が凄いんだけど」「贅沢は言えん。だいたい手間と予算を考えたらこれでも上等なくらいだ。疫病で羊が死ねばもつと酷い飯もよくあつたからな」

魚肉をすり下ろして塩と混ぜ、棒状に突き固めた保存食。

天日に干したり燻製にしたりと色々技法を試しながら何種類か作ってみた。今のところ皮や骨ごと強引に磨り潰し、塩を始めとした保存料用の香辛料（その地方で安い物）を入れて燻しながら乾燥させるという事になった。

とはいえマズイ物はマズイので気になって羅虎に相談してみたのだ。

「それは判るんだけど他の人は大丈夫ですか？ 我慢できる羅虎さん達以外の人たちも食べれなきゃ意味がないんだけど」

「鍋なら味が変わるから問題ない。それに漬け汁で味わいが変わると教えてくれたのはお前だ」

確かに鍋にするなら問題はない。出汁と漬け汁で味が変わるものね。

しかし誰もがそうするわけではなく、焙って食べることもあるそうなので少し気になるのだ。切り落として食べるだけなら仕方ないが、もうちよつと味の方を何とかしたい。キリタンポみたいな訳だし炉に刺して焙るのだろう。イメージ的にはケバブみたいな感じの料理には出来そうだ。

その上で味付けに関する美味しくするナニカを混ぜる。ケバブなら薄切り肉に付ける酸味のあるソースだし、肉自体の味付けだと香辛料以外に……。

「ああ、アレだ。あれがあったじゃないか」

「何だ？」

僕は味見用のサンプルを二本用意すると、一本をそのまま焙ることにした。

次に雑穀を摺り潰したガレットも焼き、削ぎ切りにした魚肉の保存食を載せていく。上に酢やら溶かしたチーズを載せ、一品目の料理を完成させた。まんまケバブである。

酸味の強い味付けと、チーズのまろやかさで包み込んでしまうので魚肉の味わいは気にならないだろう。もし遊牧民たちがヨーグルトみたいなものを持っていないならばそちらでも良い。

「ひとまずは焼き物でこういうのを用意してみました。簡単な方法としては漬け汁よりも強い味付けさえあれば焼き物でも問題ないかと。もう一つは時間が掛かるので、ちよつとお待ちください」

「ああ……っ？」

そういつて僕は『作ったけど使わなかった品』を取りに行く。

用意するのは注射器だ。筒状の穴が開いた針とガラス製の容れ物を組み合わせ、圧力で中身を押し出すアレである。ガラス製品が作れるようになり、ドワーフやら魔術師たち向けにアピールするため作った器具の一種なのだが……サツパリ興味なさそうでそのままにしていた。

その中でも穴の径口が大きく、全体的に出来の良くない試作品を使う事にした。食品用に試して汚れるのであれば、使い捨てる方が良いだろう。

「本当は作成段階で混ぜるべきなのですが、今からだと適正な比率で混ぜられないので味を強くしますね。強過ぎたら油を囲炉裏で焼き落としてください」

「何をやる気だ？」

羊の脂の方が良いのだが、無いので豚の脂で代用する。

要するに和牛偽装肉とか結着肉とか作る時に使う手法で、肉の中により質の高い肉から採った脂を注入する方法である。小さな容れ物で脂を速攻で溶かし、注射器で吸引すると魚肉の保存食に注入していく。

それを囲炉裏に掛けると豚の脂が少しずつ滲み出て、削りながら取り分けると豚の脂が付着した魚肉になるわけである。

「これは豚の味か？ 豚の味がする魚……」

「今回は後から注入しましたし豚の脂を使いましたが、実際に作る場合は羊の脂を最初から使うと思います。ただ本当に作る場合でも、魚に羊を少し混ぜているとちゃんと説明した方が良いでしょうね。最初から保存食としか言わない場合は、嘘だと判明した時に危険ですから」

「なるほど。騙されたと怒る者も居るだろうな」

そんな感じの工夫をしながらどうにか受け入れられる保存食を作り上げた。

ちょうど水棲種族が居るので彼らに概要だけを説明して作ってもらったところ、野球で使うバットの太い部分と細い部分の差くらいのサイズがあつて苦笑するしかなかった。しかしアイデア段階だけなら問題が解決されたのではないかと思う。

少なくともこれが普及すれば遊牧民が数年ほどは攻めてこなくなるだろう。その間にこちらも西領を奪還して態勢を立て直し、防御を固めつつ食料を生産すれば彼らとしても無駄に戦いを引き起こしはしないだろう。

● 水棲種族に話を通して、幾つかの場所で加工所を作ってもらふことになった。

ひとまず材料に関してのみ徹底してもらふ方向性で話はついている。加工場を設計し必要な器具を作ることも含めて提供することに關しては、適当に小さな便宜を測ってもらふだけだが、これで遊牧民が攻めてこないのであれば万々歳だ。直接支援したわけではなく、遊牧民が購入して自活するだけなので裏切者判定を受けないのもあり

がたい。

問題はその保証が何処にもなかったことなのだが……。

『銀や。そなたに言伝を受けておる。ありがたく聞くが良い』

「はい。娘々のお言葉しかと拝聴いたします」

直接その情報を聞いたわけではない。しかし間接的に教えてもらった。

こんな方法を取ったのはおそらく重要な情報であり、遊牧民から見れば部外者である僕に喋るわけには行かなかったに違いない。

要するに水棲種族と話を付けに行つた羅虎なりの礼なのだろう。

『国境沿いの草を刈っておけ、出来るならば木の新芽も無い方が良い。との事じゃ』

「草を？」

誰の伝言化は直ぐに判つたが、最初は何の事だか良く判らなかつた。

きつと彼の方でもそのつもりだろう。おそらくは情報を突き詰めて、あるいは西領を奪還する間際になつて思いつくと思つたに違いないまい。

直接に告げては直ぐに判るかもしれないし、僕の表情から他の者が彼の入れ知恵を察するかもしれない。それを避けるために徐々に理解が進むように、あえて他人を介して伝えたのだろう。

(……となると遊牧民にとっての意味が関わって来るのか)

しかし僕には前世の記憶が保存されている。

何でも思い出せはしないが、ある種のキーワードがあれば類推する事は可能だ。遊牧民について知っている事や、かつてのモンゴル帝国などの話を組み合わせると見得て来たモノがある。

「あの方も良く分からない事おっしゃいましたわね。畏れ多くも九天玄女さまに伝言をお願いするだなんて」

『良い良い。あの者はそなたならば判ると思つておつたようじゃな。随分と感謝しておつたようじゃぞ。既に察しておろ？』

「一応は納得の行く回答が得られました」

すっかり神さまに傾倒した麗さんは怒っているがありがたい助言

なので勘弁してあげて欲しい。

娘々の方は既に判っているようで、こちらの領きに微笑みながら返してくれた。とはいえここでそのまま答えるわけにはいかない。

遊牧民にとって重要な事であり、明確な裏切りでこそない物の……例えば侵攻作戦などがやり難くなる情報だとしたらどうだろうか？

余裕があっても食料供給をしたら僕が罪に問われかねない様に、彼もまた罪に問われる可能性があるはずだ。

「娘々にはお手数おかけしまして申し訳ありません。言伝確かに承りました。確認の為に得た答えを口にしたところですが、これは同盟関係者が漏らしてくれた重要時になります。麗さん？」

「貴族にとってソレを黙っておくのも、素知らぬ顔をするのも当然の事ですわ」

麗さんに目を向けると神妙な顔で頷き返した。

ならば問題なかというと情報を整理しながら説明していく。まずは穀倉地帯で食料が採れないことで、食料の流入が減った遊牧民の話を伝える。このままでは彼らが攻めてくる可能性がある事、その対策として保存食を手配したこと。

ソレを手持ちでやったら僕が罪に問われることや、逆に彼の情報がこの場で公開されたら彼も同罪だという事を順を追って説明していった。

『よろしい。では開陳いたすが良いぞ。どうして国境沿いの草を刈る事が遊牧民の侵攻を遠ざける事になるのじゃ？』

「それは彼らにとって家畜が財産だからです。家族どころか財産である家畜とともに移動する彼らは、補給をさほど気にせずとも大規模な侵攻が出来ます。しかしこれからあるかも判らない食料を奪いに行くのに、草木の生えていない地方を選ばないでしょう。そんなことをしたら大切な家畜がバタバタと死んでしまいますからね」

モンゴル帝国は補給線を気にせずには大侵攻が可能だった。

それは家族ぐるみ家畜ぐるみで一緒に移動したからである。温かい寝床も豊富な食料も矢を作る材料すら所持して延々と移動し続ける。それが遊牧民の有利性であり、同時に不利な部分でもある。

遊牧民の価値観からして、家畜の餌となる草木が生えていない場所に行こうとは思わないのだ。結果的に偵察もおぎなりになるし、進攻しようとする意欲も失われるだろう。

「餌が無くとも自分たちの食料が無ければ攻めることもあったでしょう。魔族に恨みがある者が所属して居れば唆されて攻めることもあるでしょう。しかし食料には解決の道が付き、彼らよりも西部奪還で魔族を攻めるとなれば義勇兵として向こうに逃げた人々も同流するかと」

「西領には何も無いから？ でも領土だって……っ！」

『そうじゃ。遊牧民にとって土地は縄張りに過ぎぬ。餌も食料も財貨もない土地には興味を示さぬであろうのう』

現在の西領には魔族が好き放題している。

目ぼしい金銀財宝は根こそぎ奪って本拠なりに移動させているか、既に交易で中立の種族と交換に使っているだろう。そして頼みの食料も奴隷に任せて適当な生産をしている以上はさほど効率も良くはない。食料が無いならそれでも奪いに行くが、無いのであれば攻める理由がないのだ。

その上で遊牧民も最初は偵察くらいはするはずだ。国境線付近でこちらの様子を伺うだろう。そんな時に僕らが国境沿いの草を刈ってしまえば、こちらに攻めて来るだけでも羊を食わせて行けるか分からなくなるのである。

「何しろ西領は暖かく、それゆえに穀倉地帯でもありますが砂漠もあるくらいですからね」

前にも行つたと思うが、沿岸部を始めとして砂漠に面した場所は幾つもある。

大公閣下の御料地である白紗などは砂漠に面している総構えだから無敗の城と呼ばれるくらいだ。良い土地は軒並み田畑にしているだろうし、そうでない場所は砂漠が多いのだろう。

こうして僕らは無駄な戦いを無くす努力を行い、目の前の敵に専念することになったのである。

大公の思惑と、対抗する思惑

● 遊牧民の統領は本当に余計な事は話さなかった。

報酬として要求すれば別だったのだろうが、要求しなかったのが向こうが勝手に満足できる範囲で他の報酬を押し付けて来た。だから西領における情報は今もって判らない。

だが推測自体が不可能な訳ではない。『どこの勢力も首脳陣は馬鹿ではない』という原則が通用するならば見えて来るものがある。

「中央との境全体に3、西領の中心である白紗に6、その他の巡回に1つてどこかな？ 人間の占領軍ならあり得ないけど奴らは魔族だからね」

「まあそんなところか」

駒のサイズは様々あるが、詳細な情報はないので千単位の大駒だけを配置していく。

人間なら千で大駒はあり得ないし、巡回やら各町を抑えるにはまるで足りないはずだ。しかし魔族は配下に魔物を抱えており、戦闘力から言っても恐怖で押さえつけられるという意味でもこれで十分なのだと思われる。

そして遊牧民というファクターを加えると、この状況が俄に推移していくのだ。

「羅虎さんが説得したとしても、いきなり侵攻案が頓挫する訳でもない。また食料の調達ルートを見つけると発言力が増したとしても、彼が表立って中止させることは無いと思う。チキンだと思われると、止めることも出来ないからね。だから国境線の調査は徹底的に行うと思う。なので……」

西領の更なる西に当たる場所に、駒をいくつか配置していく。

そうすると雑多な巡回部隊の1を連れて、白紗から1が動いて2の軍勢になった。結果的に中央に3、白紗に5、他国との境に2となる。この構図でもまだ戦力は厚い。少なくとも中央との境に援軍を派遣できないようにする必要はあるだろう。できるならば白紗を取り返

すために、そこから更に減らしたいところではある。

これに対して南領が沿岸部に到着すると、白紗から更に2、3ほど割り、確実に中央方面には援軍が送れないし白紗も手薄になる状況とするのが今回の作戦ではあった。

「君が生まれる頃まで独立していたという事は、白紗から結構離れてるんだよね？　なら先に沿岸部に到着すれば少し多めに来るかな。大公閣下も情報を流すだろうし中央に3、白紗に2、沿岸部に3、国境沿いに2。更に……こうするのが中央の大戦略だと思う」

「西部出身者で浸透突破。町を解放して回るって訳か」

国境線だけではなく沿岸部にも気を取られれば、流石に各町を警戒する余裕はない。

そうなれば巡回やら圧制している魔族は少ないだろうし、忍びこむことも説得して回ることも可能だろう。奴隷にされた民衆を地元出身が助け出し、民兵として徴用するのは話の筋としてあり得る話だ。僕らが行くよりも、よほど町の人に信用されるし地形だって知っているだろう。

何よりこの展開であれば、功績は中央や沿岸部で戦う他領の連中には渡らないのが良い。命を掛けさせておいて、自分たちは少ない出血で領地を取り戻すという訳だ。他領の兵には犠牲が出れば出る程に良いだろう。

「逆に中央から先に出兵してしまうと、援軍が集まる上に沿岸部から奪還されて彼らに発言権も功績もなくなってしまふ。こっちの方が確実だとは思うけれど、政治を考えたらこう動くだろうね」

「俺としてはこのタイミングで独立したいところだが。いや、それも含めて予想されてるのか」

成功率だけを問うのであれば、中央を先にして援軍を出させて拘束。

沿岸部に顔だけ出して様子見にきた偵察隊を撃破。そのまま白紗を目指しつつ、チャツカリ沿岸部の押しを制圧してしまう方が確実だ。戦力の減った白紗ならば、住民の援護をこちらに付ければ確実にする事が可能だろう。

だがその方法では南領だけが功績を得てしまう。仮に住民を味方に付ける工作をしたとしても、西領総軍としては功績が稼げず他領ばかり名をなさしめる。それは戦後統治にすら影響を与えそうなので受け入れる事は難しいと思われた。

「だがこのままじゃあこつちも旨くないぞ。いや、クソ親父の事だ。報酬を独り占めにしかねん。俺には約束していた領地を無かったことにして、あんたらも大量の兵に犠牲を出したのにタダ働きだ」

「まあそうだね。だから……筋書きを乗っ取る事にするよ」

この懸念自体は前から抱いていた事なので承知している。

中央貴族や官僚を抑え西領の亡命者を抱えている大公閣下の計画には反対し難い。東領や北領のメンツも全てに反対するわけではなく、例えば一足先に息を吹き返した南領が損耗する事自体には賛同するだろう。だから計画を正面切って反対するのも妨害するのも無理なのだ。

そこで大公閣下の計画（推定）の脇にその予備案と彼ら望み、こちらの望んでいる事と予備案を列記していった。

「乗っ取る？」

「うん。流れに則り、主導権を乗っ取る」

大公閣下の計画で第一は西領奪還、第二が遊牧民対策、南領損耗は第三以下でしかない。

他にも……もし宮廷での地位を今のまま望むというのものもあるが……、次席のまま据え置かれている東領の公爵を何とかするか、歴史に残るくらいの活躍をしなければならぬ。この国の掟では皇帝の外戚が大公として主導し、皇太子の外戚が公爵として次席につくのだから。

しかし東領の公爵や皇太子が愚かにも背中を晒すとは思えない、ゆえに大公の目標はその三つになる『はず』だ。一応は。

「大公閣下の圧力が一定方向に強力に流れているのは、今のところ彼の目的がその方向だからだね。一刻も早く本領を奪還し、攻めて来る可能性が高い遊牧民に備える。南領はその過程で使い潰し、もし損害少なく生き残ったら遊牧民にぶつけるという感じかな。全部上手く

行けば救国の英雄とはいかずとも、権勢を据え置きで遊牧民に備えることも可能かもしれない」

「そう上手くはいかないと思うが、それがクソ親父の理想形だろうな」
全ての労力がこの流れの為に費やされているので、対抗し難いように見える。

裏の陰謀も表の交渉も戦闘すらもその方向に誘導して居るから、これを全て覆すのは無理だ。しかし一つ一つを早回しにしたり遅くしたり、別方向から潰すこと自体は可能だろう。例えば遊牧民との抗争は、食糧問題さえ解決できれば問題がなくなるのだから。

だから遊牧民に関しては羅虎さんの教えてくれた方法を取りつつ、大公閣下が全てを掌握する前に国境線から偵察部隊を引かせればもう問題はないだろう。この時点で大公の政権維持の可能性は無くなると言っても良い。

「この流れを掌握して前後左右に色々と挟むんだ。例えば南領の損耗に関して消極的賛成な東の公爵閣下も、この流れで政権維持されるのは困るから話を持ち込めば協力してくれる。使いどころに困るから、まあ遊牧民との戦端を開かせないようにするってのがメインではあるけれどね」

「なるほど。南と東が手を組めばこっちから開戦は挑めないからな」
国境から遊牧民の偵察隊が居なくなれば、開戦の理由がなくなる。

地域住民やこちらの偵察隊に『魔族と協力していた』と証言させるにしても、国境に無ければ証言としては微妙だ。ここで東の公爵までが開戦反対に踏み切れば、まず戦争は起きないと思われた。彼の望みは『順番通り政権を受け継ぐこと』で『南領の損耗』はかなり低いので、ほぼ協力体制が維持可能だった。

そして遊牧民との戦争が起きなければ南領が心配すべきは、目の前の魔族だけになる。

「その辺は良いさ。じゃあ俺の領地とお前さんの利益の保証はどうなる？ まさか黙って我慢しようとか言わんよな？」

「そうだな。僕や緋家はともかく、君と紅家に関しては補足が必要かもね」

僕は貴族の初心者だし、今を乗り切って二群を充実させれば問題ない。

放っておいても様々な技術のどれかが実を結ぶだろうし、今回の戦いで南領の軍師として活躍すれば発言権だって何とでもなる。ソレを目的に商人も便宜を図ってくれと言うだろうから、今から断る方法を見つける方が難しいくらいである。緋家に関しては断絶した領主や開拓地の再統合によって、それなりに以前よりも発展するはずだった。

とはいえ紅家は先行して発展した為、これ以上は上があまりない。そしてキリー・グラントと言う名前の方を呼んでくれと言うほどに大公閣下と仲のよくないこの男から見ると、切り捨てられる可能性を払拭せねばならないだろう。

「そこは交易という手段を使おう。紅家の赤色港と君の領地になる沿岸部で『お互いの得になる交易を行うという約束』をする」

「何だど？」

放っておいても交易商人は活躍するだろう。

西領を奪還してその産物が手に入るようになるし、足りない機材は何処かで調達せざるを得ない。様々な文物が南領から西領に流れるだろうが、おそらくは沿岸部が主体になるだろう。もちろん中央からもドット流れ込むのは確かなのだが。

しかしそういった約束をお互いの領主が約束すれば、関税とか色々と優遇ができる。加えて文物だって今からジャンルを絞って開発しても良い。

「紅家から見れば何が起きてても現状維持しかないんだ。少なくとも皇太子殿下が即位するまではね。だからお互いに無い物を交易しつつ、場合によっては水棲種族も巻き込んで利益を確保する。そうだな。前に提案したあの港湾都市の話……東の公爵さまにも持ち掛けたらどうか？」

三角貿易でとにかく利益確保を目指す。

それで十分に紅家にもリターンができるはずだ。現時点で西領に伝手はないが、この男を後押しすれば縁ができる。いずれ再興する西

領との取引の窓口になってくれれば、旧来の姿勢をそれほど崩さずに交易が可能だろう。

そしてこの案の薄い部分である確証に関して、東領を巻き込むわけだ。

「水棲種族はともかく、東の公爵がどうして俺を支援する？ クソ親父の足を引っ張る以外で手を貸すとは思えんが」

「水棲種族が居るからさ。むしろ大河の多い向こうの方が複数の氏族がいる可能性があるだろうね。手を組んでる可能性もあれば、同時に反目している可能性がある。そこで港湾都市を作る時に得られた良い面や悪い面を教えて、向こうの問題があればこっちで可能な限り助言したり、引き受けると言うんだ。提案するチャンス自体はあるわけだし」

東領は川が多いのが特徴だ。それゆえに魔族の被害も少なく肥沃な大地も魅力である。

こういった地形である以上は水棲種族が居ないわけではない。その上で一つの氏族だけで繁栄している可能性もあれば、逆に小さな氏族が複数で一つの部族を構成している可能性もあった。どちらにせよ何かしらの縁が東領と出来ていると見るべきだ。

そこで良縁であればこちらの良い成果を提供し、悪縁であれば助言すると言えばよいのである。それこそ新機軸の港湾都市のデータなどは良い話になるだろう。

「まあどちらにせよ、何らかの手札を増やして面会しておくのが良いと思うよ。さっきの足を引っ張るって話だけど、向こうから見れば君の訴えを聞いて、独立するなら援助すると言うかもしれないね。大公閣下の前で君が領地を持つことを喜ぶフリくらいはしてくれろと思うよ」

「なるほど。敵の敵は味方と言う奴か」

公爵さんから見れば、大公が約束を守らないという事は攻撃材料になる。

水棲種族の件が使えなかったとしても、足を引っ張る証言としては使ってくれる可能性が高い。流石に交易相手としては微妙かもしれない。

ないが、少なくとも積極的に反対をしてくる相手とも思えなかったのだ。

雨天の進軍

● 各地における新年から春にかけての収穫に関する報告を聞くと、予想通りの結果だった。

良くも悪くも予定通りで、当然のことながら開拓地に関しては鳴かず飛ばす。あくまで通過地点の宿場町でしかない。本格的に収穫が見込めるのは秋以降だろう。

とはいえ現地で確認するとならないとは大違いであり、今年の秋の本収穫が楽しみだ。そして僕はもう一つの収穫に関して聞くことになる。

「これがあいつらに関する報告よ。お礼はタップリしてくれるんでしょうね?」

「助かりました、紅梓さん。領地に戻ったら新作のケーキを出しますよ。蝦衛視もありがとうございます」

「いえ。こちらの用事でもありますので」

西領のハーピー他に関する情報が出そろった。

占領予定の島とその周辺、そして島と西領そのものの上陸予定地点から見た光景など、思いつく限りの情報を頼んでいた。

これに海流と風向きを合わせた高炉の情報を組み合わせると、おおよその作戦日程が組めるだろう。

「洞窟が幾つかと、大きな樹を中心にした森か……」

「先に言っておくけど色んな意味で、樹を燃やしたり切り倒すのは無しにした方が良いわね。エルフだから言うんじゃないけど」

久しぶりに見た紅梓さんはフードを深くかぶっていた。

日差しがキツイのもあるが、島々に潜入中はハーピーの出す汚物のせいで習慣になってしまったそうだ。あちこちの樹からフンが落ちて来るのが日常だったらしい。

ともあれ汚物があるから問題と言って居る訳ではないだろう。

「もしかして西領から判ります?」

「はい。強襲するだけならまだしも、燃やしたり切り倒してしまうと

判ってしまうでしょう」

「どうやら距離感の問題らしい。」

当たり前と言えば当たり前だが、上陸の為に場所を確保する予定なのだ。ハーピーが居る島を選んだのは、水棲種族を狙う事もあるから利害が一致する事。そして上陸作戦中に操られて襲われては難儀するからである。

その辺りを考えれば異常を見掛ける可能性は高いと判断するべきだろう。魔物の住む島なので常に監視しているわけではないだろうが……。

「では作戦決行日は雨天を突いた方がよさそうですね。風雨の進軍は注意が必要ですが、メリットも大きいですし少数ならば体調のコントロールも可能ですから」

「ウゲ、面倒くさ」

「我らは雨天を難儀しませんので、お任せください」

雨天で攻め入ると、鳥類に近いハーピーは雨宿りをしているだろう。

視界も悪く音も聞き難いし、臭いも広がらず飛ぶだけでも難儀する。もちろんこちらにも風邪に掛かり易くなるとか足を滑らせ易くなるのもあるが、同レベルの問題ならば西領側から見えないというのが大きなポイントだった。仮に水棲種族が見張りに立ってくれるならば、かなりの可能性で隠匿してしまう事が可能だろう。

ついでに言うとも魔物を狙うならば巢を叩き潰すというのが鉄則だ。相手にイニシアティブを渡すとロクな事がないのだが、巢を狙う場合は可能な限り守ろうとしてくれる。

「というわけで作戦決行は姿や流血が海岸にまで達するなど、目撃を避けるために雨がずっと判っている時期に決行。できるだけ早い時期にしかけて途中で魔族が気が付いても、人間が目障りだから傭兵を送り込んだと思わせられる期間を空けます」

時間を空ければ空ける程にスケジュールがタイトになっていく。

発見されると防備を固められて面倒なので、可能な限り雨で血を流せる時が良いだろう。ハーピーのみならず発見されるのが第一の間

題だ。それに比べたら戦闘力とかは二の次だと言っても良い。

そして島の地図を眺めながら、おおよその作戦を組み立てて説明していく。

「第一陣はお任せします。こちらの少数精鋭を巢の中心部まで送り込むための前衛……と思っただけければ幸いです」

危険な巢への進軍は僕らが担当するが、上陸戦は水棲種族に任せらる。

人間同士の戦いなら水際が一番危険なのだが、水の中に住む天然の水兵たる彼らならば安心だ。精鋭の海兵ともいべき兵を投入して作戦初動を支えてくれるだろう。

「銀大人の仰せの通りに。どのみち、我らの女子供を狙う敵です。お気になさらず」

「そう言ってもらえば助かります。島は作戦終了と共に、貴方たち向けに改良いたしましょう。港湾計画の一端としてね」

今回、水棲種族の全面的な協力を得られたのはこの点だった。

ハーピーは空を飛んで目の良さを活かしながら獲物を狙う。その意味でまだ地上に慣れない子供や、油断している女たちの作業中に狙って来るとか。人間だったら考えられない距離であろうとも、風につけて飛べるのでつい油断することも多いそうだ。

そして上陸作戦に使った後は、駐留に使った島々をそのまま彼ら向きの島として施設を建築し、再利用するということで話が付いていたのだ。それこそ遊牧民に売り渡す保存食などは、その島で造ってしまった方が便利だろう。

「それはそれとして『ボーラー』の習熟度合いはいかがですか？」

「流石に紅小姐の弓には及びませんが、使える者は多くなりました。各隊に最低一人を配して今は徐々に増やしているところです」

「それで構いません。戦いは数ですのぞ」

ハーピー戦の切り札は普通にボーラーで攻めるといふものだ。

この武器は二つの錘を紐で繋いで振り回し、手足に絡めるといふ武器である。相手は翼もあるし数も居るので、何人かで投げつけられればどれかが当たるだろう。もちろんそれで倒せはしないし、減る数も少数

だ。

しかし水棲種族たちが一齐に投げつければかなりの数が落ちるし、ボーターは再利用できるのが大きい。投網の方が命中率は良くとも、再利用し難いのと対照的であった。

「後は強力な個体が居るかどうかだけど……紅梓さん、何か判った？」
「流石に探しきれないわよ。せいぜいが隠れながら島の外縁で歩き回っただけなもの。ボートをひっくり返して潜り込んだり、森の色をした上着とかは役に立ったけどね」

普通の人間ならば潜入すら無理だが、熟練のレンジャーである紅梓は入り込めたようだ。

だが残念ながら島の中心部には移動できず、潜水具代わりのアイデアとか迷彩服代わりのマントが役に立ったに過ぎない。

とはいえこの時点で理解出来る事がある。

「そうでもないよ。何日も見張って見かけられないって事は、居たとしても島の中心部から出てこないんだ。蟻や蜂の女王が動かないようにね。もしグリフォンとかを手懐かせていたら、何処かで見かけたと思うよ。だから危険があれば僕らのチームで対処すれば良いはずさ」

「それはまあ……そうなんだけどね」

島の構造とこれらの情報を組み合わせればおおよその事が判った。

空を飛ぶから兵の配置みたいなことは判らないけれど、空を飛んでる数を何割り増しかすれば予想はつく。もし大幅に多かつたとしても、目撃数の二倍というところだろう。

こうして基本計画を組み、計画書をかき上げて緋家や紅家に書状を送った。春にでも精銳を率いて出撃し、外国経由の大回りで西領近くの島へ移動することになるだろう。

「それにしても……遠回りだというのに物凄く早いですね。さすがに水棲種族の方が味方に居ると違います」

「今回は少数の兵を送り届けるだけというのも大きいかと。大船ですと目立ちますし、乗り継ぐと速力の利を活かせませぬ」

此処で重要になるのが海流と風力による加速だった。

大回りして遙か南にある外国の方まで行くのだが、それでもそれほど時間が掛からない。大航海時代前後の船を扱ったゲームをしたことがある人には判ると思うが、海流と風の両方に乗れると大違いなのである。

そしてこのコースを取る場合の注意点は嵐や急な浸水であったり、間違つて風のない風に乗らなかつて海流の弱い場所に取り残される危険性があるが、水棲種族が居れば幾らでもリカバリーが効くのが非常に大きかったと言えるだろう。イザとなれば脱出用のボートを引張ってもらえば、近くの島に上陸して難を逃れる事が可能という点で安心だった。

何が言いたいかと言うと、紅家の三男坊こと紅包さまが今回の出征では協力してくれるのである。

上陸作戦は将棋のように

● 水棲種族との交渉が上手く行って、近隣に住む紅家からも交流の使者が送られることになった。

対外的にはこれを理由として、武芸者でもある紅包さまが同行する。もちろん南領が海路で攻め込むための下準備という側面を見せる為でもある。

実際にはこの旅路が果たされると同時に条約締結が本決まりになっており、水棲種族を食らう魔物の島を討伐するという名目で出兵することになっていた。

「今回の旅で一番重要なのは敵味方にスケジュールを悟られない事です。大公閣下は確実に南領の出兵を漏らすでしょうしね。バレるのは構いませんが、できるだけこちらの任意でタイミングをコントロールしたいものです」

「身内に敵を抱えて戦争か。全く笑えないな」

「同感だ」

紅包さまと白南終ことキリー・グラントは割りと仲良くなった。

どちらも公子であり末っ子なのだが、親に恵まれ過ぎて身動きが取れない過保護な紅包さまと、むしろ親と犬猿の中であるキリーは対照的だった。しかし武芸と商売はベクトルがまったく別の才覚であり、無関心の延長で『悪くない』というところなのだろう。

今後二人の仲が進むかは別として今は良い相談相手になっていくようだ。

「そういえばアイツはどうした？ 今回の旅では前線で戦うんだろう？」

「青悟さん？ 実は船酔いする体質らしくて上でゲーゲー吐いてるよ。川が多い東領なのに変だよな。まあだからこそ伝道師になって飛び出たのかもしれないけれど」

キリーが目ざとくこの場に居ない青悟に触れた。

彼は東領の公爵さんとツテがあり、これまでも現地エージェントと

して行動していた。公爵さんと仲次をしてもらおう為もあり、今回の件で水棲種族と無事に条約が結ぶことを見せておきたいのだろう。

こちらの陣営が仲が良く情報や援助を引き出せるならば、東領の盟主としても悪い同盟相手ではない筈だ。水棲種族経由で連絡も取れるし、次の大公として公爵さんを押し上げるといふ既定路線を守れるのだから。

「そういえば君と彼は同じ聖職者と聞いたが、能力は異なるのかな？ 秘奥で無ければ教えて欲しいものなのだが」

「そうなりますね。……同じ武芸者でも紅包さまたち御三方の得意分野ほどの差があるでしょうか」

侯爵の息子である紅包さまと、緋家の将である緋二広、そして無頼漢の大通連。

彼らは面白いほどに得意分野が違うのだ。紅包さまはこの都市でジョブチェンジする余裕があり、軽戦士から魔法戦士へクラスチェンジしている途中だが基本的には槍技を極めんとしている。二広はあくまで武将であり前線を支える耐久型重戦士であり、最後に大通連は様々な武器のコレクターでもあり、その場に応じた多芸な戦闘法を持っている。

共通するのは同じ師に付き武芸を習った事だが、得意不得意や神の加護の差が大きいからだろう。

「青悟さんは伝道師で旅立つ者の行く末を守るのが役目であり能力の根幹です。僕が告げなくても航海の知識なんかも知って居ましたし、色んな根菜なんかも知っているでしょう。そしてその過程を守る為に、靈威を宿らせます」

伝道師専用の上級魔法はその過程に対する対象が広い。

悪霊から身を守り剣に魔を払う力を持たせるほか、病疫などからも守られたはずだ。試練に打ち勝つまでという制限はあるが、汎用性が高く影響範囲も広い能力と言える。

ゲーム的には『誓いに対する行為の最中、抵抗力+2。魔法の品扱』というところだろうか？ 欠点としては場所に掛けたりすることは出来ず命中やら威力は上がらないし、本人の認識やら司祭の認識な

ど、どちらの視点で終了条件が満たされても終わるといふ儚い部分もあるのだが。

「僕は神職ですので状況の維持、礎を守る能力ですね。例えばこの船に水が浸食しないという効果を一日、または酒樽へ一週間、書籍ならば一カ月ほど掛ける事が出来ます。秘奥というわけでもありませんが、いわゆる齋場であればもっと効率よく可能です。先ほどの例で言えば、伝える書籍を百年くらい守るとかですね」

「……言われてみれば本領の神殿には伝来の書があると聞いた覚えがあるな。我が師の教えを記した書と比べて驚いたものだ」

こんな感じで紅包さまと話をしたり、グツタリした青悟を看病しながら現地へと急ぐ。

途中で水棲種族の兵を拾い、水兵ではなく精鋭である海兵主体で集めてもらっているのちよつとした軍隊である。

そして彼らが付き添い、最悪の場合でも紅包さまだけは陸に連れ帰るといふ約束があるからこそ、腕利きとはいえ公子さまを連れ出すことが出来たのだ。もちろん身内が命を掛けたことを、水棲種族に見せる為ということもあるだろうけれど。

「銀大人。現地では今ごろ雨の予定です。止まないのを確認し次第に、鯨防人やバーレイ殿たちが先行して上陸作戦を開始する予定です」

「盾とボーラーは十分にあるんだよね？ 無茶は禁物だと言っておいで」

「承知しました」

蝦衛視が遠方に光る発光信号を読み上げると、領いて地図を取り出した。

予め作っておいた六分儀モドキを使い、おおよその角度を割り出してほしいの位置を特定する。人間の船乗りには聞いた話だと直通便でも早くて二十日以上掛かる行程なのだが、僅か一週間で目的地付近まで来た計算だ。途中で海流が緩くなるので誤差も入れて最終的に十日ほどで到着するだろう。

「二両日中に到着し、見つけやすいコースを取りますので比較的緩

い海流に乗ります。そこから彼らが牽引するボートに乗り換えて二日後に上陸可能になるでしょう」

「早いな。だがこの時を心待ちにして居たぞ。その意味では感謝を幾らしても足りぬ」

「どうも武芸を試したいのに閉じ込められている事が相当なストレスなようだ。」

紅包さまの立場を考えれば仕方がないのだろうが、過保護であると同時に他の武芸者からのヤツカミが大きいのだろう。実際にキリーあたりは『甘やかされて羨ましいこった』などと軽口を叩いて睨まれている。

ともあれここからは詰将棋である。水棲種族に任せておけば確実に上陸できるだろうが、魔族に見つからないように勝ち抜かねば何の意味も無いのである。

「蝦衛視。回収部隊は手配してある?」

「はい。空を飛んで逃げ出した魔物の死体のみならず、ご指示いただいた通り血の流れを止める網も用意いたしました。鮫除けも当然用意しております」

「結構」

こちらは水兵で十分なのだが、死体と血をできるだけ回収したい。

陸地へ大量に流れ着いては意味がないし、血は雨で流れるにしても、量次第では危険かもしれない。『かもしれない』『大丈夫』で済ませるわけにはいかないのです、オイルフェンスみたいな仕掛けを作っても上澄みだけでも減らす予定であった。嵐になれば意味はないが、その時は血も流れるので問題はない。

「ここまで順調ってどこか?」

「そうだね。魔族も雨の中でいつも見張りをしてるわけでもないし、大量の血に呼ばれて鮫が山ほど出て来るって事態にでもならない限りは大丈夫だと思う。問題は島の中心部にいる上位個体次第かな」

「上位個体か。悪いが私としては楽しみにしている」

「こういってはなんだが、同じ島で生息地域を分け合っているのはおかしいだろう。」

魔物もまた生き物である以上は、食料その他を確実に狩るために縄張りを持つものだ。それにしても生息している目撃数が多すぎるので、明らかに上位個体がボスとして統率している事が伺えた。できれば魔族が操っていい無ければよいのだが。

なおこの問題は杞憂であるが、半分くらいは当たることになった。厄介な能力を持つ上位個体が存在したのである。

「申し訳ありません銀大人。上陸部隊が撤退に失敗しました。損害は少ないのですが……」

「何があったの？ 対策を立てたいから出来る限りの情報を教えてくれると助かる」

「魅了されました。バーレイどのも帰還しておりません」

いわゆるチャームをつかえる個体が居たらしい。

困ったことに大通連という大駒を奪って持ち駒にしたようだ。魅了されると命令を聞くまで思考力が落ちるらしく、被害が少なかったのが不幸中の幸いだったという。

魅了する魔物：前編

● 第一陣は橋頭保の確保に成功したものの、奥深くに入る段階で失敗したらしい。

おかしいと気が付く前に魅了され一気に盤面をひっくり返されたそう。幸いだったのは意志や行動力が鈍るらしく、異常を感じて無事だった者が引き気味だったこともあり、即座には攻撃されなかっただけらしい。

「当初は快進撃であったそうです。外延部から中心部に移る段階で、それほど被害を受けなかったとか。しかしある程度の距離を進んだ段階で魅了されました」

「状況からして魅了と判断したのは判るけど、確証の理由は？」

「精神支配を無効化する加護の者たちが居りましたので」

蝦衛視の説明はある程度は納得がいくものだった。

精神操作系の魔法や特殊能力の類は結構あるが、その中で最も頻度が高く見受けられるのが魅了系だ。敵と味方の尺度や親愛度を入れ替えているだけで、『味方になったから攻撃しない』という行動は即座に判断できるが、『これまでの味方を攻撃しよう』とは命令されない限り即座には思わない物だ。

そういう意味でハーピーが喋れなくて良かったと思うべきだろう。もし言葉が存在したのならば、即座に命令されて攻撃行動に出たはずなのだから。

「上位個体が魅了の能力を持っているのは間違いないとして……。どう攻略したものか」

精神操作系の中でも魅了が突出して目撃例が多いのは単純だ。

生物にとって異性にアプローチするのは当然のことである。魔物が上位個体に成る段階で生来持っている能力を強化していくとして、肉体を強化するのではなく、アピール力を強化して居る個体が出てもおかしくないことではないだろう。その辺が魔法を学習するのとは違う所である。

だから能力を持っているのは当然とした上で、対処を考えていくことにする。まずはどう仕掛けていくのかを探り、そこから方法を考えるべきだろう。

「これから上陸するまでに時間があると思います。その間にできるだけその時の状況を調べてください。視界の暗さとか、音の伝達ですね。できれば部隊の中で魅了に掛かった者の進軍状況、男女の差や頭部装備などを調べて頂ければ」

「承知しました。銀大人。可及的速やかになされるでしょう」

海流が緩くなるので本来ならばすることがない。

しかし水棲種族は泳いで移動できるため、伝令役がドボンと飛び込めばさほど時間を変えずに伝達してくれるだろう。その時の返事次第である程度対策が変わって来る。

まず天候や地形の情報を調べるだけでもかなりの事が判る。見た者を魅了するのか、見られる事が魅了するのか、それとも声を聴かせる事で魅了するのかが判明するだろう。

「魔法は効果が一定ですが、魔物が持つ能力は個体によって違います。魔眼や容姿で発動するならば視界が関係してきますので、その時の天候や地形で大きく左右されるでしょう。音の方が可能性が高いと思います。その場合は反響度合が雨音や森での反響次第になるかと」
「なるほど。だとすると雨天を突いたのは幸いだったかもしれぬな」
「仔細を伝え、心利いたる者に調べさせます」

説明すると紅包さまや蝦衛視も方法を理解したようだ。

曇天になるほどの雨ならば相当に視界が遮られるし、そもそも森なので視界が通らない。それを考えれば音による魅了の方が可能性が高いだろう。とはいえ『一度見ただけで永続効果』みたいな状況もある。早合点せずに聞き取り調査をしておく。

そして紙を二枚ほど取り出して対処案を簡単に書き込むことにした。

「視界を塞ぎながら戦う場合は、色ガラスなり兜の庇。あるいは鏡の様な物を使用します。音の場合は耳を塞いだり鳴り物を使って戦う事になりますので、ハンドサインやドラムサインを決めて進軍する全

員が把握しておきます」

「より効果が高い方を対処し易いというのは苦笑するしかないな」
見ない訳にはいかないので魔眼や姿による魅了は防ぎにくいだが、遠くには届かない。

一方で音による魅了は遠方まで届く代わりに、耳栓だけで済むので対策自体はし易いのだ。今回は相手に魅了持ちがいる事なんか想定していなかったので大変なことになったが、もし判って居ればさして困らなかつただろう。現にメモに必要なサインをザッと書いて皆と相談できるほどだ。

進軍・停止・撤退。上位個体出現・増援要請・足止め……他にも色々あるが最低限必要なのはこの辺だろうか。ここから相談することで使用例から定めて行き、必要なら到着までに足せばいい。

「現時点で問題は大通連です。最低でも次の出撃では彼を取り戻すようにしましょう。紅包さまなら抑えられますよね？」

「それは難しくないが、どうやって取り戻す？ 何処にいるかも判るまい」

「場所に関しては相手の性質に掛けますよ。音の方は遮断するだけなら何とでも」

音は放射状に広がり反響で変わるので、魅了された部隊の形状から相手のおおよその位置が判る。

その上で手に入れた駒の位置は、基本的にその場を動かさないか外延部だろう。なにしろ魔物同士で縄張り争いをすることもあるのだ。仲間だと思わせるくらいでは、群れのボスを決める争いの延長で挑んでくることもあり得るだろう。だから自主的に何かできないほど意志が混濁するか、さもなければ敵対者を駆逐すべく外へ外へと移動させるに違いない。

言葉が通じないので、この辺はこちらのハンドサインとあまり変わりはない。警戒を示す警告音で外へと意識を向かわせるか、さもなければ最初から強力な魅了でその場を動かなくさせてしまうだろう。

「何よりあの大通連ですからね。所属がハーピーになっただけだと思つて敵を求めてうろつきまわるか、さもなければ自分と群れのボス

のどつちが強いか挑もうとして何もするなと言われてそうです」

「ハハハ。それは違いない。ともあれアイツだけなら任せておくが良
い」

こうして作戦を決めるとハンドサインを修正。

上陸までに徹底して作戦の第二段階を始めることになった。緩やかな海流にイライラするが、ここで上陸ボートを水棲種族に引いてもらうという戦術はとれない。もし魔族が見ていたら面倒な事になるからだ。

この段階では何もできないので、この島からボートで西領を目指すことは出来そうだなと思うくらいであった。



詳細の情報を仕入れると、やはり予想通りなのが判った。

剛盾に耳栓を作ってもらいながら、作戦の細部を詰めて決行する。まずは鳴り物を用意した兵がガンガン音を叩きながら進軍し、敵の目を引き付けると同時に音による魅了を妨害していく。

この後ろからロープを持った兵が隠れて追い掛け、魅了された兵が追いかけて来るのを待つことになっていた。

(銀大人。来ました)

(了解。予定通りに)

暫くすると音を聞きつけたのか、ハーピーと兵士たちがやって来るとサインを貰った。

見た感じ兵士たちは俯きがちだが、慣れない生活で疲労しているのかそれとも魅了で精神状態が悪いからなのかは判らない。ただ動きが単調なので罠に引っ掛ける事は難しくなさそうだった。

適当に戦って注意を引き付けている間に準備を終え、予定通りに部隊が引くとそれを追いかけて次々に罠にかかっていく。問題だったのは大通連との戦いの方だ。

「出て行け—」

「出て行け—」

「戦おうぜ—!」

兵たちが嫌々戦っているという風情なのに対し、大通連は喜色満面

で襲い掛かって来る。

食事内容も全く気にして居ないのか、生で鳥かなんかを食べたらしい。口元を真っ赤に染めているのが印象的だ。おそろしいことに体の動きは衰えていないようで、彼の代名詞である刃の付いた盾を投げつけて来る。

それを叩き落とすのは一本の魔法の槍だが、落としたのにフワリと浮いて持ち主の元に戻るのはあの盾『大通連』もまた魔法の武器だからだろう。

「こいつでどうだ!」

「来い!」

(……ワザと魅了されたフリしてるんじゃないだろうな)

ウキウキと勝負を挑む大通連からは違和感はない。

彼の本性が戦い好きだからだろうが、こちらの陣営に居た頃から戦闘と武器コレクションしか頭がないのでそれほどイメージの差がないのだ。もし彼が戦って楽しい相手が身内しかいなければ、アツサリ裏切りそうなところもあつたしね。

ともあれ動きを見る限り特に戦闘力自体は落ちてはいない。ただ基本的な動作だけならばともかく、創意工夫的な部分があまり感じられなかった。

「……途中で受け取って追撃か」

「そうさ! いいじゃねえか、いいじゃねえか! こういうのでいいんだよ!」

紅包さまが投げつけられた盾を跳ね上げ受け流すと、大通連は戻って来るところをキヤツチ。

疑似的な二刀流で手に持つ剣と疑似的な二刀流を仕掛けて来る。紅包さまは弾いた後で槍を半回転させ、剣も払うと同時に穂先を跳ね上げて対抗した。

流れるような動きは以前から大通連が得意としたコンボなのだろう。紅包さまに動揺した様子はなく、慣れた調子で攻撃を捌いている。

(……さて、いつまでも見てはいられないな。そろそろ音を遮断しな

いと)

周囲を見渡すと魅了された兵士たちの殆どが捕縛されていた。

僕はそこに行って軽い実験を行う。耳栓をすればそれで十分だとは思いますが、問題なのは動き回る格上の大通連の耳なんか塞げないという事だ。だから結界を使って誤魔化すことになる。

今回、作戦にあたって耳栓と一緒にドラムを叩いている。より強い音ならば耳栓をしても聞こえるし、魅了の音よりも聞き取り易いからだ。耳栓も万全ではないので、二重の対策をしている事になる。(この人に伝達する音を止める。例外なのは接触する振動音と、このドラムだ。可聴音なのか判らないからね)

結界は状態の保全、または変化の否定になる。

しかし強烈な音を防ぐとアツサリとエネルギーを消耗してしまうのだ。それゆえに大きな音であるドラムは防がないし、接触式の振動もまた変化が強いので防がないことにした。あくまでそれら消耗度の強い音以外の、その他の音を全てシャットアウトするだけである。そしてある程度経過した所で頬を叩き、縛り上げた体の一部をトンと指先で叩いて文字を描いていく。

(目が覚めた？ 状況は判る?)

意味することはこの二つだけだ。

その動作を何回か繰り返すとトンと叩く音に頷き、目が覚めたことに反応が返って来た。そして状況自体は判らないのか、首を振って可能な限りの反応を見せてくれることが判ったのだ。

ひとまずこの方法で正気に戻せることが判ったので、後は距離を取って大通連にも実行するだけである。ただ視界の端で何やらやっているのは見えているはずなので、畏そのものには掛かってくれないだろう。

(だから……引っかけるのは畏じゃない。沈黙する空間だけだ。そして……)

目に見えない結界を可能な限り遠くへ設置する。

紅包さまと大通連の戦っている空間の、可能な限り後ろの方。僕が戦いに巻き込まれないようにして、紅包さまに合図を出した。内容は

『後方●メートル』と言う感じの内容で、どこまで下がれば良いかを前後に見せている。

そして彼らが徐々に下がりながら戦うのを見つつ、同じ合図を見た後ろの連中がちよつとした魔法を放つのを待った。

(今だ！ 放て！)

「うわっぷ!? 水う? こいつは海水じゃねえか」

「目が覚めたか? 寝坊助には水が一番だという話だ」

やったのは水を移動させる魔法であった。

今も雨が降ってるが、それほど大量に浴びるわけではない。だからこそ水を大量に運び、放射すれば驚くだろう。それでダメージなんかないが、だからこそ目覚まし代わりに丁度良かったのだ。

その後は簡単にこっちに戻って、ハーピーから離れるとだけ伝えて、この日の戦いは何とか無事に終わった。

魅了する魔物：後編

●
上陸してみれば魅了された兵士たちの無事は結局はボーラーが起因していた。

最初にボーラーを投げろと言う命令があったからこそ、投げることで手が空くまでは人を攻撃しなかったのだ。またこちらもボーラーがあるので躊躇なく投げつけて、拘束を狙えるのが大きい。そのまま牽制攻撃を続けて後退して見せれば、罠にかかる事自体は難しくなかったと思われる。

もつとも相手の魅了速度が遅いのであれば、ボーラーを投げたり拾ったりしながらゆつくり進軍していたから掛かってしまったのかもしれないが。

「何だよコリヤア。布に蠟が秘密兵器だつて？」

「そうだよ。千切った布を耳に詰めて蠟をすり込めば簡易的な耳栓になるんだ。その上から布で巻けばそれなりの物になる。相手の声が魅了のキーみたいだから秘密兵器ってのは間違いじゃない」

さすがに今の技術レベルで完全な耳栓なんかつくれない。

だからこそ密封・多層・素材の差という三段階で妥協している。ドラを鳴らして補強したのもこの補助に過ぎないのだ。

魅了されていた大通連にその辺りを説明する。これから再進撃するために必要な事項だからだ。

「面倒臭えなあ。あの兄さんの魔法でどうにかできねえのか？ 耳ん中に何か入れるのなんざ気色悪いんだが」

「掛けてもらうけど青悟さんの魔法は『やり遂げた』と思ったら解除されるから同レベルの相手が居ると扱いが難しいんだ。他にも上位個体は居るだろうから難しいと思うね」

「他にも？」

抗議されてでも駄目なものは駄目だ。

ボーラーじゃなくていつもの武器を使いたいというレベルの我儘なら許せるけど、耳栓無しで上位個体と戦うのはいただけない。おそ

らくこれから他にもいるだろうタイプが出て来るのだから。

こういつてはなんだが一番最初に効果が現れるのが、音だからこそ広範囲に広がる魅了能力だったというだけだろう。

「ここに居るハーピーは大型種で上位個体は生態能力が強化される傾向のモノが多いんだ。それを考えたら魅了つてのはむしろレアだと思うね。普通に強い奴とか、魅了の歌じゃなくてブレスを吐く奴が居てもおかしくはない」

「そっちの方が楽しそうだなあ。オレはそっち倒し行くぜ」

「何を考えているんだ。魅了の声は遠くまで響くから危険なのだろうに」

話を聞かない大通連をすかさず紅包さまが止める。

修業中もこんな光景なのだろうなあと思われる一瞬である。それはそれとしてこれからの予測を立てて、次回で完了とはいかずとも計画的に攻略する必要があるだろう。

まずは上位個体の総数算定とその対策だ。ボスになり得る個体が居る限り、どこかに逃げてまた迷惑をかけるだろう。

「仮に番いで雄雌しかいないとしても、最低でもあと一体は居ると思う。仲の良い兄妹だしたらもう少し居る可能性はあるね。なのでひとまず計算の上では居ると仮定する」

終わってから見ると判り易いとよく言うが、ある程度逆算ができる。

もし頭が良くて作戦を立てられる奴がいるなら、今回みたいなことにはならない。おそらくはもう少し引き付けてまとめて魅了してしまうか、あるいは一番強い個体に追撃させるだろう。

それを考えたら作戦初動でいきなり躓いたのは誤算だったけれど、今思えば運が良かったのかもしれない。別の場所から上陸してそっちに強い個体が居た場合は、なし崩しのにまとめて魅了された可能性もあったのだから（偶然魅了個体を最初に倒す可能性もあるけど）。

「これが島の地図だけど魅了を使う個体の居る範囲は中心部から離れてるので、餌や居住地の好みがあるんじゃないかなければ、純粋に強い奴か風を操る奴が中心に居ると思う。おそらくは隔絶して強いから、魅了

が効かないんだと思うね」

「仕方ねえな。そいつと戦えるまで我慢してやるよ。……つていうか、上手く入らねえなあ」

「ごそごそやり始めた大通連には悪いが、グリフォン級だろうというのは黙っておこう。」

紅包さま曰く昔にお師匠さん達と一緒に討伐したらしく、そのレベルでは大通連は苦戦しなかったらしい。やはり投げて戻って来る魔法武具は、空飛ぶ相手には有益なのだろう。

ともあれこれで勝てる算段が付いたので、レアな上位個体が居たら気を付けないといけない。

「蝦衛視と紅梓さん。今回は監視に徹してくれる？ 厄介な奴が居て、二人の狙撃で落とせそうなら話は別だけど。具体的に言うと言以外の魅了とか、魅了以外の魔眼とかね」

「承知しました」

「それでいいなら楽だからいいわよ。あいつらが戦い始めても放っておけばいいんでしょ？」

目の良い二人を遊撃隊に据え、後ろから観察するが戦わせない。

兵士たちが混乱し始めたら、その状況の理由を特定するための存在だと言えば良いだろうか？ それこそ強い個体だろうが嵐を予防が放っておいて、状況を操作するタイプの上位個体に気を付けてもらうのだ。勝てるように作戦を組んで居る為、二人にはそれ以外に対処してもらおう算段である。

● それ以外は前回とあまり変わらない。ドラの音を響かせて魅了する上位個体の巣へ直行。護衛諸共に始末して、そこから余力次第でこの島のボス狙いとなるだろうか。

● その後は予測通りに行ったことと、行かないことが混ざり合っていた。

純粋に強い上位個体が群れのボスで島の中央に居たのだが、魅了する個体を助けに来たのだ。こちらの包囲網を外から食い破ろうと襲い掛かって来た。増援来襲を知らせるドラの音が、耳栓をしても

『ジャーンジャーンジャーン』と鳴り響くのが判った。

特殊な音は遮断しているので魅了で呼び寄せられたわけでもないだろう。今思えばやはり番いであり夫婦であったのかもしれない。

「来た来た来た！」

(……あいつやっぱりか。先に魅了する個体を倒して専念できるようにしろって言ったのに)

刃の付いた盾を投げていた大通連はキャッチと同時に外へと走った。

護衛の殆どを蹴散らしあとちよつとだったので、先に始末して欲しいと思わなくも無かった。とはいえ彼の性格を考えたら予想できなかった訳でもない。

アタツカーを大通連から紅包様に変える指示を出し、既に向かおうとしている彼の邪魔をしないように陣形を変える。

(本隊は包囲殲滅陣を維持。足止め部隊だけがヌシに牽制攻撃)

(承知)

逆にマニュアル型の水棲種族たちは指示通りに陣形を維持している。

ボーラーを使い果たしているので、回収しながら包囲網を狭めていった。飛んで逃げる相手じゃなければ、牽制用のボーラーなんかも要らないのだが……。

到着すると同時に紅包さまは、その辺りを理解して大上段からの攻撃を多用している。おそらくは安易に空へと逃がさない為だろう。

「ではそろそろ終幕と参るぞ！」

(……あれが紅包さまの能力か。確かにこういう時は便利そうだな)

エンピツやシャーペンを揺らしたら数本分に見える。

紅包さまが魔力を注ぐとあんな感じで槍の本数が増えていくのだ。視覚の錯覚ではなく実際に実体を持っているのが神の加護たるゆえんであろう。あの幻影とも陽炎ともつかぬアレを全て避け、あるいは防がねば防御したことにならないという有用な部類の加護である。

だがあの能力を使っても即座に倒せないのは、その能力の欠点や実情を示している。当たり判定は沢山あっても、あくまで本体の槍は一

本なのだ。ゲーム的にはフェイントの上位互換であつても、攻撃回数
は一回しかないというオチであつた。

『ケーー!』

(とはいえ時間の問題だな。……ちよつと前にも同じことを思つてこ
の有様だけど。まあもう増援は来ないだろ)

槍の幻影に実体がある為、飛び上がろうとして羽根に当たつてい
る。

おかげで空を飛ぶ前にバランスを崩し、魅了する個体は空を飛べな
いでいた。助けに来た強力な個体も大通連に阻まれているので援護
は出来ない。もう少しすれば槍がどこかに本格的に跳べなくなり、直
撃して地面に落ちる事になるだろう。

そうなれば普通に槍で突き刺すか、後はボーラを絡めて槍で突き刺
すかの差でしかない。

(警戒態勢。上位個体を討伐)

(承知)

ここで新たに指示を出し、状況の変化に備えさせる。

もう増援は居ないと思うが過信するのは馬鹿のすることである。
ありえないがいきなり魔法を使つたり魔族が乱入して、その隙に逃げ
出す事が皆無ではないのだ。周囲に注意を呼び掛け警戒を厚くする
ことで、紅包さまがトドメを刺すのを皆で援護することにした。

だからこそ最終局面での変化を大人しく見守る事が出来たのだ。

『ダー!!』

「ちっ! やはりこちらか!」

「おっ! やらせるかよ! 行け! 大通連、小通連!!」

ヌシは一度飛びあがると猛烈ない勢いでダイブして来た。

そのインパクトたるやもはやグリフォンと変わらない。しかしこ
うなることは既に予想済みではある。紅包さまは後ろから挟撃しよ
うとする敵に気が付き、大通連は横入りして飛び抜けようとするハー
ピーの主の投擲攻撃を続けた。

彼の代名詞たる魔法武器『大通連』、以前に渡した大型ブーメランの
改良版が次々にカツ飛んでいったのである。

「来ないか！ ……よし。これで、トドメだ！」

流石に魅了されても居ないのに、命がけで助けには飛び込まなかった。

投げられた武器が掠った段階でヌシは軌道を変えて飛び去ろうとし、魅了個体を逃がさない様にだけ注意していた紅包さまは改めてトドメに入る。ヌシの方は逃げられてしまいそうだが、既に傷ついているので問題ないだろう。

最後まで諦めずに逃げようとした魅了個体を槍で叩き、今度こそ胴を穂先で貫きトドメを刺したのである。その後、異常な生命力を發揮しはしたが、バタバタとあがいて動かなくなった。

「おし！ ……これでももうウザってえ耳栓は要らねえ……て。あいつ逃げやがった！」

「……どうして他にも魅了個体が居ると考えないのかな。まあ居ないようだから良いけどさ。傷ついてるし島の中心部に逃げたなら問題ないでしょ。時間は掛かるとしても明日には終わるよ」

大通連は勝手に耳栓を外してヌシを攻撃しようとした。

しかし魅了個体と心中する気はなつたようで、傷ついた体で己の巢まで飛び去って行った。そこまで戻ろうとする気力があるのは凄いが、島の外に逃げなかつた時点でもう終わりである。

僕の予想通りに翌日の内にヌシを倒し、この島の制圧に成功したのである。

後方拠点の設営

● 魔物の島を奪取したとはいえ、特に何かがいきなり変わるわけではない。

西領への上陸作戦はまだ先の話だし、森を焼き払ったら煙が見えるレベルの位置である。今から大改造しても魔族の軍隊に奪取されて沿岸の要塞化が進むだけだろう。まずはゆっくり周囲の観察と建築計画になる。

と言う訳でまずは魔物が居なくなったのを良い事に、この島の周辺地形を確かめつつキャンプ地を作ることになった。

「死体はまとめて風下側に埋めるけど、そこは暫く禁足地にするから。死体が病気を持っていても困るからね」

「こいつらのフンもまとめて構わないか？」

「二尾さんの判断に任せます」

まずは後片付けをするわけだが、戦える奴が残っているかもしれない。

直属の兵で一番強い橙二尾に任せておけば、彼は僕と同じように猟師出身で傭兵経験があるから問題ないだろう。紅梓と蝦衛視はしばらく休んでおいてもらい、集中力が回復した所で近隣の島に斥候に出そう。

次に拠点造りなので剛盾と亀老師を呼んで……あー。亀老師はまだ橋を掛けているんだったか。南領が平和な状況の演出とはいえ、大工仕事に慣れ始めた彼らの力に頼りたいところだ。

「周辺の木々は間伐して材料にするけど、拠点造りと上陸戦を優先して欲しいかな。目に見えて外から伐採が判るのは困るし、どうせ作るなら運ぶのに困る物をこっちで作ろうと思う」

「その辺りは任せて置け。こいつの怒鳴り声で慣れておるからの」

「あんたがボンボン切ろうとするからでしように」

剛盾と紅梓の相手をしながら計画を立てる。

ここの周辺の島々から上陸し、その後は後方の補給基地を兼ねた療

養所としながら戦い続ける予定だ。その後は水棲種族に渡して陸に近い拠点としつつ、近隣での商売をし易くするために使う。海の中にいる強力な魔物が出た場合は、過ぎ去るまで上陸して難を逃れるために使うはずだ。

それらを考えると陸側から見え難く、荷物を積んだり下ろしたりし易い方が良いだろう。

「それで何を作る？ いちおう工具の方は持ってきておるが」

「肝心の部品もあるかな？ 裏手の高台の中にクレーンを設置出来たら理想だと思う。船が接舷できなきや意味が無いから、海流とか水深の問題もあるけどね」

紙がもつたいないので地面に棒で絵を描いていく。

高台に設置することで木材の消費を抑えつつ、船から荷物を島の中心部に持ち込めるようにするのだ。できれば脇道を通って砂浜から登って来れるくらいの位置が良いだろう。もちろんそれらは理想形になるので、駄目ならば何かを諦めるしかない。

あるいは人の登り降りもクレーンまたは似たようなナニカで済ませてしまうか？ 水棲種族の避難用だと考えれば、魔物がよじ登って来れない方が良いわけだし。

「クレーンの他に巻き上げ機を使って板を持ち上げても良いかな。これはクレーンみみたいに横へは動かないけど、複数の支点で支えて安定させる。もちろん板じゃなくて箱でも良いけどね」

「ふむ。クレーンも悪くはないが、ワシとしては新しい方が興味をそえられるのう。余った時間でちよいと作ってみるか」

提案したのは簡単な昇降装置だ。

エレベーターというほどに複雑でも快適でもなく、板を平行に持ち上げて荷物でも人でも上下移動させるだけだ。クレーンみみたいに横移動での積み下ろしはできないが、支点を複数に分けているなど遥かに簡単で頑丈なため、鋼のパーツで補強する必要もない。

これらを高台に設置することで、海から直接に荷物を運べたら島の中心部への移動が楽になると思われた。

「そいつが役に立つのは判ってる。俺たちにも水棲種族たちにもな。

……肝心の作戦の方はどうなんだ？」

「大公閣下は間違いなくこちらの作戦をバラすだろうから、常識的に言って城ヶ崎に兵を少し増やして、増援を含めて沿岸都市に駐留させるって流れになると思う」

キリーの質問に対し、この島の位置と城ヶ崎の位置を簡単に描いてみる。

南領から直接海路で来る場合は、どうしても通る場所の二つの少し大きな島がある。この島からはずっと東な訳だが、そこは二つ目の島が干潮時に陸続きになる島で、二つ目の島も近いから守り易い城塞だった。

僕らは遙か南経由で既に西領側へ来ているわけだが、普通ならば海路で来ると聞かされれば城ヶ崎への兵を増やすだろう。とはいえ島の上にある要塞なので、基本的に補充するための戦力は沿岸都市に居ると言う訳だ。

「ひとまず千ほどの兵を城ヶ崎に置いて、沿岸都市に最大で二千。こちらの動きに合わせて都市から兵を送るし、嘘だったら引き揚げさせると言う算段だと思うよ。だから……僕らはその後方を遮断して増援第一波か第二波を撃破し、城ヶ崎の兵を孤立させることで優位に立つ」

「遊兵を作らせ、敵の後ろを取るってやつか」

敵の増援そのものは全て防がない。

城ヶ崎に集めるだけ集めてから無力化させれば良いわけだ。干潮時に陸続きになると言っても補充し易いというだけで、別に戦闘まで楽になるわけでもない。

もちろん陸側にも施設があるが、この場合は誘引する場所であり兵を閉じ込めて置く場所扱いだ。そこに駐留するために増援を派遣したところを、後方に回り込んで陣形が整ってない内に叩くという訳である。

「魔族率いる魔物の群れは強力で二千も居れば人間数千と互角以上だからね。南領が船をどうかき集めても八千人分というところだから、五千の兵を楽に倒せるだけの戦力を送り込めば十分過ぎる。だけど

逆に言えば、その自信が命取りだ」

「強兵だからこそそつてやつだな。千を無効化された連中の顔が見てみたいところだ」

おそらくこちらの内情込みで向こうは把握しているだろう。

中央から本隊が進軍する為、魔族が戦力を送り込めて三千程度だと思われる。それ以上は過分すぎるし、送り込み過ぎたら本隊の方が一気に迫って来るだろう。その上で一騎当千の兵力を、嘘かもしれないリーク情報だけで必要以上に城塞に送り込むだろうか？ まあそんなことはない。

まず効率的に配置できる最大数を送り込み、こちらの出方を待って追加するはずだ。時間を掛けて大回りする可能性自体は魔族だって考えているだろう。ソレを踏まえれば兵の殆どは沿岸都市に配置して、必要ならば増援を送り、不要ならば本拠地に行っている白紗に戻るといふところだろう。

「ふむ。言いたいことは判った。しかし果敢な判断をする将であればどうだ？ 全力を叩き付ければ良いという者は一定数存在するが」
「俺も知りたいな。見知った顔を味方に集めても無駄死になりかねん」

確かに脳筋でなくとも、攻撃的な武将ならば全力攻撃を選択することもあるだろう。

状況的にも使用できる戦力を一気に投入して、さっさと白紗へ戻って本隊に備えるという判断は間違ではないからだ。逐次投入する方が効率的だが、逐次投入する戦力を分断するのはやり易いものね。それを警戒するような将軍や、あるいは単純に部隊のドクトリン（得意戦術）として全力突撃を行う者は居るだろう。

こちらは各個撃破を狙っているので、ソレをされたら倒せないのだが……。

「その辺は問題ないですよ。僕らはそもそも勝つ必要はないですからね。命じられているのは海路で攻め込むことだけです」

「何？」

意外そうだったので幾つか地図を描いて説明することにした。

一つ目のパターンは全ての戦力が城ヶ崎とその手前の砦に集中する場合だ。この場合はこちらは予定通りに上陸し、ひたすら足止めしながら投石器でも使って居れば良い。敵兵は集中しているが、挟撃される可能性も無くなるのでやり易い。もう一つは中間地点に陣取ってこちらの上陸を待つて行動するのだが、この場合は籠る拠点がないのでゲリラ戦が可能になる。

いずれの場合も敵が全兵力を出すならば、守りながら沿岸都市を奪還する事が出来るのだ。

「要するに敵戦力の中で遊撃隊を足止めし、本隊の進軍を邪魔させるな。というのが海路に対する命令の趣旨になります。白紗に居るであろう五千の兵の内、三千を引き受けければ功績としては十分ですよ。どのみち敵は沿岸都市を維持できませんしね」

「そうなのか？」

「食料の豊富な場所じゃないからな。言われてみればそうなんだが……」

上陸戦を無事に成功させ、相手の大戦力を足止めする。

これが功績を挙げていない、何もしていないとしたらおかしいことになるだろう。魔物が三千も何処かに籠って居たら五千〜八千の間では倒すのはとても難しい。公称一万の兵が全て存在するとしても、かなりの損耗を要求されるだろう。

だが大した消耗も無しに三千の魔物を足止めしたのであれば、キルレシオからして功績足り得る。褒められた行為ではない！ という事にされたとしても少なくとも『何もしていない』ということにはならないのだ。作戦の当初案としては完遂しているのだから。

「どちらかと言えば困るのは沿岸都市からまるで動かずに籠城して、白紗の危機になったら都市を焼き払って逃げ帰られる方が問題ですね。追撃戦で一方的な攻撃を与えても、足止め失敗と言う事になりますから」

「それは最悪のパターンだな。俺としてはやられたら一番困る」

「僕もですよ。住民だけは絶対に助けないと」

三千の魔物が立て籠もったら倒すのは難しいので強攻は出来ない。

その上で敵が捨てるべき都市を焼き払ったら、その消火にあたらな
いといけないのでロクな追撃戦もできないだろう。騎兵も連れて来
ては居ないので、少数の快速部隊で僅かに蹴散らす程度であると思わ
れた。

もつとも魔族の性格と戦力を考えれば、無駄に都市に籠って居るか
と聞かれたら怪しい所ではあるが。

「都市への放火は他の連中も考えそうですので対策はしておきましょ
う。……いずれにせよ、こちらの利点は拠点があるので相手の
出方を見て動けることです。確実に足止めして国全体として勝ち抜
きたい物ですね」

「親父ならやりかねないな。いや、無駄に焼くとかは考えたくないが」
大公閣下ならば白紗を取り戻す一環で、立て籠もる魔族軍を焼き払
えるならやるだろう。

簡単に奪還できるのに無意味な焼き討ちはしないだろうが、白紗へ
と戻る兵が多数居るならばやりかねない。多少燃えた程度では都市
全体の価値は落ちないし、キリーの失敗ということにして領地を取り
上げれば元は十分に取れるのだから。

こうして僕らは西領奪還を見すえて準備を始め、この島を拠点にし
ながら南領の進軍計画を実行に移し始めた。

大公の謀略

● 測量と建設計画を立てた頃に裏手の方も完成する。

さすがに全てが都合の良い場所は無かったので、水深の方は妥協した。代わりに大型船が入れるところまで舢を並べて即席の栈橋を作る事で港代わりにできるようにしたのだ。

裏とはいえそんなことをすれば空から見つかり易くなるので、不要な時は舢は分解している。人間ならば無理だが水棲種族なら水中作業できるから問題が無かった。

「これ以上は作戦全体の進捗次第だね。僕は一度戻って開拓地の方に居るから。残りの実行は亀老師たちがこつちに来てからになるかな」「承知いたしました。この島はお任せください。沿岸偵察もやっております」

蝦衛視にこの地を任せて少数の兵と水棲種族のリーダーとしておく。

体面的にも両方の人が居るし、『人間の使い走りにされた』と思われない為にも、島の所有権は彼らに渡しておいて、作戦の間だけ租借するという形だ。

残す人間の兵に関しては順次送り付ける兵士への説明係と、人間視点での記録や陸の情報を残して置く為である。

「何人が先行で出しますが今のうちに伝えておくことはありますか？」

「えーっと戻ったら収穫前で、早便だと夏の間に着するくらいだけ？ 無理には良いかな。伝えるとしても『予定表の通りに行動する事』くらいだしね」

「ではそのように」

緩やかな海流なので戻るのは風次第になる。

しかし水棲種族だけなら海流の強い所まで移動できるので、そこから船を使えばかなり早いペースで戻れる。しかしこれから収穫する時期と言うのは忙しい時期で、特に何もできることはない。鍛冶や細

工の出来る剛盾が此処に居る以上は特に何もすることがないのだ。

とはいえ中央からの伝令が南領に寄るついでに『戦争のために早めに収穫して備えよ』と勝手な事を触れ回る可能性はあるので、その対策として『余計な命令は出してないので、従わないように』と伝えるくらいしかなかった。

「……うん。問題ないみたいだね。これなら上陸後も期待できそうだ。じゃあ剛盾さん後はお願ひします」

「任せておけい。投石器くらいならば幾つか用意しておいてやろう」

即席の栈橋で海の深い場所まで歩き大型船に搭乗する。

ここに残しておくメンバーに剛盾がいるので、他の兵士と共に建造に時間の掛かる投石器はこっちで用意して置く予定だ。この栈橋も上陸後に向こうに移動させることで、大型船がどの海岸でも接舷できるようになる予定だった。ここで使えないから仕方なく作ったのだが、思わぬ収穫である。

ちなみに紅梓はキリーの連れて来た現地民数名と共に上陸しており、自分のペースであちこちを調べて回るらしい。これらの功績……というか調査・作業成果を以て二人は冒険者ギルドのギルドマスターの資格を付与する予定である。

（開拓地はようやく軌道に乗ったばかりで収穫なんてほとんど出来ないだよ。種もみにしたり家畜を殖やしていかないの意味がないし。他の領主が居るから良いけど……もし誰も居なければ、勝手に収穫とか潰して肉にされたりする可能性があるからなあ）

船に乗りながら先ほど蝦衛視と行ったやり取りを思い出す。

開拓地は切り拓いて一部を耕し、一部に家畜を放しただけだ。三圃式農業と大規模開拓を組み合わせているので、家畜を草だけが生えている場所に移し、家畜が居た場所を開墾し休ませる土地には根菜や豆を植えて終了。次の年は根菜や豆を家畜に食べさせ、家畜を放した場所を開墾……というサイクルになる。

初年度は家畜にそこらに生えている草を食べさせるだけだし、それほど数が居ないから開墾する場所の地力もそれほどでもない。元は湿地帯だった場所もあるから、上流から良い土が流れてきている可能

性がある程度でしかなかった。

(ともあれ困ってる領主には仕事を斡旋できるし、領主間の領地問題も開拓地を渡すことで終了に出来たはずだ。できれば来年一杯まで領地経営に専念できれば南領は安定するんだけど……)

僕にとつては二回目、開拓地や万鹿柵付近の領主にとつては一回目。

青色吐息だった緋家の財政事情はようやく息を吐いたに過ぎない。これから赤字を取り返し、疲れ果てた兵を休ませる時期なのだ。今年はこのまま休むのは当然ながら、来年も領地経営に専念したいというのは当然だろう。日本の応仁の乱と違って、領地を増やしたわけでもないから、良いニュースで領地が潤っているとか無いものね。

しかし中央から見れば自分達だけ平和を謳歌してズルイという事らしい。しかし領地が奪われた西領出身者ともかくとして、夏都の兵で守られ続けた中央には言われたくない所である。

(南領の派遣戦力は公称一万、実戦力は誰から見ても五千〜八千というところだよ。どうやっても足止め以上の事は出来ないんだけど……大公閣下は何処までやらせる気やら)

大公閣下が領地である西領を取り戻すには十分だ。

魔物の三割を南領が引き受け、二割が国境沿いに張り付き、残りを白紗と陸地対策で分けねばならないから問題なく勝てるはずだった。しかしそれはあくまで『西領を回復し、予定に従って外戚としての権力を返上する』場合の話である。

魔物に追われて故郷を捨て、代わりに中央の貴族たちと癒着した彼が何を考えているかまでは判らないでいた……。

● 南の海域を大回りして南領までたどり着いた時。

事態はまた七面倒くさいことになっていった。中央の工作と言うか身内切りがエスカレートして、もはや利敵行為クラスになっていたのである。

何が起きたかと言うと無茶な手段でこちらの情報をすっぱ抜いて、これまた無茶な手段で大々的に公表したのである。

「はあ？ 大回りして城ヶ崎を無効化するんだから確実に沿岸都市を取り返せって？ 本当にそう公開で命令したの？」

「ああ。〴〵丁寧の名目上の総司令官である皇太子殿下の令旨付きで海路勢全体にだ。紅家の侯爵殿は頭ごなしの命令にカンカンだぞ」

水棲種族との同盟という表向きの成果を報告するため、キリーは先に帰国していた。

こともあろうにその報告を聞くや否や、即座に評議を開いて来年中の西領奪還作戦を発したらしい。今ごろは各地にその旨が達しているはずだが……この様子ではどんな内容になって居ることやら。

しかしこの話には『皇太子殿下』という無視できない要因が存在した。

「こちらの作戦を表沙汰にした上、東領の姫を母に持つ皇太子殿下の命令で？ これは参ったな。迂闊に出来ないと言うと東領の公爵さまのメンツが丸潰れになる。まさかこんな手で来るとは」

「それについてはすまん。俺の部下が家族に人質を取られたそうだ。おそらくは東領の方も同様だろうな」

外戚が権力を握り、たらい回しにするこの国の権力構造。

国の安定のために仕方ない方法であり、これまでは上手く機能していた。しかし大公閣下はこのシステムを利用すると同時に、伝統を破壊しかねない手で来たのだ。しかも息子の部下を人質で脅すという最悪の手段まで使って。

さすがのキリーもいつもの厚顔ぶりは発揮できていない。まさか父親と仲が悪いとはいえ、自分の国のエージェントにそこまでするのは思わなかったのだろう。

「それに関しては悔しいけどここで終わっておこうよ。人質とられたら誰にでもあり得る話だしね。むしろ善後策と、この後に同じことを起こさない為の対策を立てない」と

「そうだな。そうするしかあるまい。……見てろよクソ親父！」

こういふとなんだが、どんな世界にも一回だけはOKな卓袱台返しが存在するものだ。

身内から情報をすっぱ抜くとか、直接利用できないはずの皇太子殿

下を使った命令を行う事だ。その場の勢いやら権勢の強さで強引にやり遂げるわけだが、繰り返すと陳腐化するし警戒されたり反感も買うからそうそう繰り返せない。

だからこの件で情報を持っていかれたキリーや青悟（実際には東の公爵）と喧嘩する程の意味はないし、その時間も惜しかった。

「とりあえずこれから情報は段階的に分けて開示しよう。抜かれた情報で誰が何処で聞いたか、すぐに判るようにレベル分けするんだ。例えば国境対策（草）は僕らと、話さざるを得ない人だけ。あの島（元ハーピーの島）に関しては移動途中で話すっていう風にね」

「情報対策はそうしよう。それはそれとして、上陸計画はどうする？ 大幅に手直しが必要だと思うが」

事態が面倒くさいのは皇太子殿下経由ということだった。

この国は連合王朝みたいなもので、皇帝家の権力はそれほど強くない。強力な外戚がバックアップすることでその代わりを果たしているのだ。強権的な命令をやったら求心力が削がれてしまうだろう。

しかし皇太子の外戚は東領で、皇帝の外戚は西領というのが問題を生じさせている。無理やりだが皇太子殿下に命令を出させたことで、問題がそこでストップしてしまうのだ。

「どうやら大公閣下はついでに中央集権問題へ手を付けたいようだね。……公表された情報が大回りする事だけってのが幸いだけど、出征の時期も公表しそうだなあ。表向きの話にしておいて良かった」

今回の件に逆らうにしろ文句をつけるにしろ、下がるのは皇太子の権威である。

ひいてはその外戚である東領の求心力であり、現在権勢を欲しいままにしている大公率いる西領勢はそれほど困らない。むしろ皇帝の元に権力を集め、問題を起こしたという理由で東領の影響が強い皇太子を廃せば良い。何だったらキリーも同時に排除して『愛する息子すら泣く泣く罰した』という建前で言い繕う気だろう。

これに対してこちらは現時点では、南領の盟主である紅家の侯爵さんが系統違いの命令されたことを激怒しないよう宥めるくらいしか

打てる手がない。あとは東領の公爵さまと連絡を取って『大公が悪いから問題ない』と伝えるか、対抗すべく彼らを盛り上げるかどうかの差だ。

「千は押し込める計算だったけど……沿岸都市に二千を置いて城ヶ崎に五百、遊撃隊として五百つてとこかな？ 紅包さまが言つてた攻勢タイプの將軍の場合は沿岸都市に五百、城ヶ崎に三百、残りを手元つてとこだと思う。えーっとこれに対しては……」

こちらが何処に上陸するか判らない以上、向こうは遊撃主体にするだろう。

沿岸都市を拠点として本隊を置くか、拠点を作らずにどこかに陣所を作るかと言う差だろう。一応はそんな可能性も考えてはいたが、情報をつっぱ抜かれたことで余計な守備兵を割いてないのが痛い。倒さなければならぬ相手が多くなってしまったのだ。

こうなった場合はゲリラ作戦で行く予定であったが、遊撃隊が多いとその対策もされ易くなってしまふのだ。それこそ先に沿岸都市を全力で攻略する方が話が早くなってしまふ。

「せめてもの幸いは既に後方拠点を落してる事かな。向こうの動きに合わせて派遣戦力の一つを先制して倒そう。沿岸都市を落とせとまで言われたのは誤算だけど、君の事情を考えればまあ納得は出来る」
「重ねてすまん。あのクソ親父の所為で余計な苦勞をさせる」

敵戦力の使い方・分け方次第な所もあるが、こちらに対応して動くならまだ各個撃破できる。

問題は全軍をまとめてぶつけられた時だが、確実に沿岸都市まで攻略しろと言われているので防御に徹して時間稼ぎをする事は出来ない。どうにかして撃破した後、沿岸都市に撤退しないように追撃しないといけないだろう。

頭を痛めながら色々と健闘していた所に、思わぬ客人が突撃して来た。大公閣下による第二の矢であろう。

「申し訳ないが西南終公子と銀双羽殿に魔族との密通嫌疑が掛かっておる。この疑いを払拭するためにも沿岸都市を奪還するのは勿論の事、北上して白紗回復の為に兵を率いよとのことだぞ」

「それはそれは……。たいそうな激励の御言葉ですね」

やってきたのは以前に邪神の徒である嫌疑が掛かっていた時にやって来た光の教団の司教だ。

窓際族の彼はフットワーク軽くこの南領までやって来て、僕らの監視をすることになったらしい。どうやら皇太子経由での命令が東領の公爵さまに対策されたらしく、今度は宗教組織を使って追い立てるつもりのようなだった。

楽に勝てる戦いの筈だったのに、どうしてこうなったかと頭を抱えたかったものである。

人を呪わば穴二つ

●
気が付けば三つの難問が存在した。

小さくは魔族と密議を交わして人を裏切った罪、次に難易度が急上昇した上陸戦、最後に大公の中央集権化。今思えばこの『中央集権化』こそが原因だろう。最終的に自分に従う者以外を全て切り捨てるならば、どんな無茶でも通るのだから。

そして状況的に何とかし難い『嵌め手』であるというのが問題だった。

「普通は案件を個別に整理して解決策を模索するべきなんだけど、今回は違う。根本的な所を間違えると大変だからこう考えなきゃならない。大公閣下の本当の狙いはこうだ」

「この国を全て手に入れる……か。何とも壮大で判り易い」

横一本の線を引き、矢印の向こうに中央集権化を置く。

ただ単に国の首座であり続けるのではなく、これまでの権力体勢を見直し四人の侯爵が持ち回りで大公と公爵になって政権運営を支えるという構図を撤廃する事が最終目的なのだ。ただ一人の皇帝が上に立ち、全ての諸侯がその威光にひれ伏す体制である。

連合王朝やそれに由来する縁戚体制というのは安定し易いが、特段に権力が強いわけではない。中央政権は弱く大公と公爵の機嫌を伺わざるを得ず、それだつて体制を変更するような政策は他の諸侯が反対して頓挫するだろう。

「思えば大公閣下は基盤無く権勢第一の人であり続けるうちに、不満を覚えたんじゃないかな。魔族に攻められ本領はなくなりましたが、挙国一致体制の元に権勢は維持された。常に大公第一の貴族よと持ち上げられたけれど、責任だけ押しつけられて否定されるときは否定されてしまう。それは娘婿である皇帝陛下も同じようにね。そんな中でもう少して何もかも手に入りそうだと野心を抱いた」

「だからと言ってクソ親父に微塵も同情できねえけどな」

貴族も官僚も軍人も持ち上げこそすれ口ばかり。

イザと言う時の責任だけ追及して、まったく協力的ではない。西領を奪還せよといっても他領だから、時期尚早だからと後回しにされる。そして自分ばかりか同情的で助け舟を出した皇帝陛下まで敬して遠ざけられる始末。こんな状態で不満を抱かない訳はないだろう。それとは別に上手くやれば全ての権力を手に入れられそうな雰囲気があったのは確かだ。転生までの日本史で言うと、偶然に頂点へ立った藤原道長や徳川吉宗のように。

「問題なのは考えれば考えるほど放り出すわけにはいかない事なんだ。少なくとも先に解決してから大公閣下と対決することになるだろうね。まあそういう風に仕組んだらどうけどさ」

目の前に魔族が居て、これを倒さないなんてことはない。

これを否定するのはおかしなことだし、時間を置けば遊牧民が攻めてくる可能性が高いのだから猶更だ。おそらくは適当な所で大公も遊牧民の話をするだろう。ここで奪還すれば問題ないが、遊牧民たちがなだれ込んで来れば戦争が長期化するのには目に見えていた。そのようなになれば誰も軍を引き返そうとは思わないだろう。

お互いに魔族を倒してこの国を平和にするところまでは味方。そういう意識があるからこそ目の前にいる魔族を倒さないなんてルートはないのだ。

「ひとまずこれから起き得る色々な工作は、大公閣下の中央集権化という野望がある事を説明した方が良いね。『これは抵抗するけれど、そちらは知らない』とかやってたら僕らが各個撃破されちゃう。先に伝えておくことで、大公閣下の工作に注目してもらい信憑性を確保するしかないね」

「その挙句に暗殺と幽閉じゃあ世話ねえのにな……ただ、それはお前もだぞ？ どうして親父の排除を提案しない」

「明らかに時期尚早だよ」

見解が分かれるところだが、ここで強硬策を採るべきではないだろう。

やるとしてもまだ早い。少なくとも今やったら西領奪還のための話が空中分解してしまう。別に今すぐ出征したいわけではないが、十

年以上放置するわけにはいかないのだ。少なくとも諸侯を味方に付けた上で、状況証拠だけでも抑えなければこちらが悪役になってしまうだろう。

それに大公がどういう手段を取るつもりなのかおおよそわかって居るからだ。今焦って行動を起こすよりも一度に済ませてしまった方が良い。

「いいかい。大公閣下が用意する最後の切り札はおそらく『皇帝暗殺の疑いで皇太子の処刑』だよ。だからいつ行動を起こすか、どうするかも判ってるんだ」

「は？ そいつは幾ら何でも無理筋つてもんだろ。いや……可能なのか？」

常識的に考えて、次期皇帝である皇太子が現皇帝を暗殺しようとするわけがない。

しかし『企てていた事にしてしまう』ならば全ての解決ができてしまうのだ。東領の公爵ほか邪魔者は全て捕らえてまとめて処刑してしまえばよい。理由自体は皇太子であるという才能がないと断定したとか、その事から不仲であった事にすれば名目なんか後でも作れるからだ。ちようどキリーたち兄弟が親と不仲であるように、同じように考える者は居るだろう。

大公は嵌め手でこちらが絶対に選ぶしかないルートに誘導している。だが逆説的に言えば、どんな策を採るのか殆ど判っているのだ。古来より嵌め手という手段は、中身がバレたら手痛いダメージを受ける物である。

「間違いなくその方法が一番簡単で後腐れが無い。大公閣下としても何度も博打をしたくはないだろうしね。やるなら一気に、無理筋だろうが何だろうが勝てば官軍さ。でもここまでの手段を取る以上は、やれる機会は限られてくる。最低でも東と南は一気に仕留めないよね」
「そうだな。北はやる気が無いし、何なら唯一の大諸侯と口約束でいいか」

名目は最終戦の軍議でも、あるいは再編後第一回の朝議でも良い。理屈をつけて諸侯を呼び寄せ、少なくとも東の公爵さまと南の侯爵

さんたちを捕まえる。そして彼らの審議の為に弁明に来いと言って
おいて、集めたメンツをまとめて始末するなり幽閉すれば終了であ
る。

だがこの流れで行くなら一気に終わるが、できる流れは限られてく
る。その時まで諸侯のエージェントと話し合っておく必要がある
だろう。

● おおそよの流れが掴めたところで、目の前の問題を片付け無ければ
意味がない。

陰謀に関しては最終手段に踏み切れないでいるが、どのみち僕には
取るべき選択肢じゃない。やるとしても侯爵さんが動く時か、あるい
は悌さまが人質にでもされた時くらいだろう。

一応はカウンターではなく先制して何とかする手段も思いついた
けれど、キリーに教えたら勝手に実行しそうな仲の悪さなので教えて
いないだけだ。

(人を呪わば穴二つつてやつだよ。大公閣下に関しては最悪自分が
用意した手段で決着付けてもらうとして……魔族を倒せかあ)

こういつては何だが大公が一番確実にこの国を取れる手段が、諸侯
の皇帝暗殺計画を捏造する事だ。

しかしその過程は全て彼自身にも適用されるのである。まさか大
公も自分が用意した捏造を、自分に使われるとは思っても居まい。偽
の実行犯やら証言を大公に適用すればゲームセットだ。

だが将来的にその手段を取るにしても、こちらの味方になる諸侯が
必要なので今は動けない。目先に魔族が居る事から、先に上陸作戦を
組まなければならぬだろう。

「大公閣下の目論見自体は判り易いんだよな。要するに魔族が沿岸部
を捨てて白紗や中央との境で決戦を挑まないようにしろってこと。
僕の案だと確かに捨てて行く可能性はあったわけだし」

海路で進む南領は船の問題で最大八千。後方の維持も考えると戦
えるのは五千程度でしかない。

これに対して魔族は魔物を中心とした部隊なので、三千も居れば五

千を容易に倒せるだけの戦闘力を持っているのだ。だから僕としては彼らが最大の能力を発揮できないように封じ込めたかったのだが、大公によってバラされてしまった。

一応こうなった場合はゲリラ作戦で疲弊させると大筋で考えていたが、今のところ決定打が存在しなかった。

(出征タイミングまでは公開されてないけどそれも到着予定に合わせてばらされるはずだ。せめてもの救いはこつちが既に島を占拠しているとは大公閣下に知られていない事。水棲種族の力を借りた時の巡航速度と島の攻略時間も合わせて、余裕は一週間から十日ほど。ゲリラ作戦自体は可能な)

五千の兵で引き気味に戦い、守りながら残りの戦力でゲリラ戦。

被害は出るだろうが他行の注文通りの戦いは出来る筈だ。しかしソレでは彼の思惑通りになってしまいう上、もし魔族との戦いの後に戦う羽目になったらまず勝てないだろう。

だから当初案では防衛戦を進化させ、野戦築城で籠城するつもりだったのだ。しかし情報をばらされる上に北上しろと言明されていではどうしようもない。

(駄目だな。僕に現場指揮で名将に成れる自信なんかない。せいぜいが小競り合いだってのに……もつと根本的な所で優位に立たないと。水棲種族に頼んで数で勝つか後ろを取るか……駄目だな。そもそも彼らは上がり切ったらそれほどでもない)

小説に出てくる英雄ならば『我に続け!』で良いのだろうかそんな自信はない。

軍師格とは言え用兵とかの経験なんかないのである。兵站や立案はともかく、現場で勝てる指揮なんかやれる自信も保証もなかった。もちろん最終的には腹を括る必要があるのは判っているのだが……。

こういう悩むときは原点に戻るべきなのだが、籠城作戦は出来ないしゲリラ作戦だって感知されずに実行しきる事も……アレ?

(待てよ。籠城作戦やゲリラ戦……もしかして、バレてしまっても構わないのか? 普通は防衛主体で被害を抑えてから沿岸都市に向かうって思うよな。と言う事は……あえてこつちからバラす?)

先に籠城してバレバレの状態で防戦を行い、目に見えて判るようにゲリラ戦。

そうやっておいて、本命は別というのはどうだろうか？ 例えば三国志とかだつて時間を稼いで水攻めとか火攻めとかよくやるよね。

そして思うのだが……籠城するとして、兵は南領の兵で在る必要はない。ゲリラ戦もまた同様だ。それこそ水際で水棲種族に任せて、丸ごと逃走させても良いのではないだろうか？

（金蝉脱殻の計だっけ？ 数だけ出してもらつてダミーを並べて引き付け、僕は先制どころか布陣が終わつた後から出撃するのはどうだろうか？ そして全軍でゲリラ戦をやるんだ）

水棲種族ならば水際でも平気で脱出できる。

その上で魔族が攻撃態勢に入った所で、こちらは少数のゲリラ戦から全軍でのゲリラ戦を行う訳である。目指すは兵糧とか大将首だけで良いだろう。そして目的を果たしたら下がって、水棲種族が籠った陣地がもぬけの殻だと判つた所で改めて戦えばよいのである。

そして下がった水棲種族たちには、僕らが逃げ込む場所を用意してもらうとか、あるいは彼らにも水際でのゲリラ戦をやってもらうのも良いだろう。

こうして作戦案を考えたことで、僕は全体構図を修正することにした。

来たるべき提携

● ある程度の方針が決まり、何とか対策を立てられそうだった。しかし計画を立てる事と、実地で上手く活かせる事はべつだ。だからこそ作戦はシンプルの方が良いとまで言われてる。暫くはその辺りの調整しつつ、現地の地形や魔物の情報を揃えるべきだろう。

そして季節は秋。収穫期を迎えて幾つかの行事がまとめて待ち受けている。具体的に言うとな収穫祭と麗さんとの正式な結婚式、諸卿への公式な出征命令の伝達である。

「諸卿にも思う所はあるが、まずは目出度いと祝っておこう」
「頭は痛いですがまったくその通りですな」

「まったくまったく」

開拓地に諸卿を集め、悌さまが音頭を取る。

お声掛かりで始まった開拓事業の成功を発表し、得られた最初の収支をこれまでの戦いに対する褒章金として分配。特段に優れた者には土地を与えたのであった。僕に対しては開拓の成功も合わせて評され、一代限りながら三郡目の領地を貰う事になった。

何とか論功賞も終了し、収穫期を迎えたことで諸卿の懐も明るい見通しが見えたことで皆がホッと息を吐いたのは間違いない。

「それにしても運が無いな。銀殿の計画が通っておれば楽が出来たものを」

「代案を聞いた時は驚いた物だが……それを公表してしまうとは上も何を考えていることや。まっ。気を落さず」

「いえいえ。そう言っておくと幸いです」

大公の思惑に関しての情報は段階的に公表しておいた。

全てを伝えたのは悌さま（と侯爵）だけで、諸卿には大公がずっと権力を握りたがっているだけ伝えたのだ。まあ中央集権を狙っていると言ったら、怒り狂って先制攻撃を主張しかねないからだけだね。

その際に海路を使う際に難所である城ヶ崎を迂回する策を用意し

だが、大公が公表したために敵は布陣を変えるであろうことも説明した。僕の案通りなら敵は城ヶ崎に閉じ込められたはずで、楽が出来たのにと皆から同情を受けたという訳である。

「二羽よ。新婚早々で悪いが出征に関して説明してくれるか？」

「はい。兵糧と予算の関係もありますし、余裕のある領から集めた先遣隊で迂回路の先にある島を占拠。後方拠点として確実に上陸できる場所を確保する予定です。おそらくは南領全体で三千ほどになるかと」

「ほう……」

既に確保して居る島の事などおくびにも出さずに説明を開始。

敵の防御が薄い場所場所を選ぶということから特に反対もない。緋家だけではなく南領全体でなら三千は難しくないし、懐に余裕のある領地からという名目で兵を募り報奨金を前渡しすれば、実際には困窮した貴族が次々に手を挙げてくれるだろう。

前述の通り実際には島を既に確保しているので兵士は何人でも良いのだが、大々的に集めてみせることで大公のみならず魔族たちを欺けるといふ利点があった。

「銀殿。道中の危険は？」

「水棲種族を味方に付けましたので、嵐で転覆する危険はありません。万が一の場合は周辺海域で用意できる小舟をこちらの倍は集められるそうです」

「それは頼もしい」

海戦最大の危険は戦争ではない。大自然の驚異に荒らされれば一瞬で海の藻屑なのだ。

しかし今回は水棲種族が居ることで、そういった最大の脅威が存在しないのだと保証して見せた。防御の薄い場所へ攻めるのだから上陸戦までは価値切れる事が保証されてるので諸卿の方は良い気分である。

僕や悌さまとしては、その後に大公の悪巧みや最悪戦いが控えている可能性があるので樂觀視などできないのだが。

「その後に余裕を持って集め五千を追加。合計八千、現地で協力して

くれる西領の民兵も合わせて公称としては一万を確保したいと思っております。何分、相手は魔物が二千はおりましようから」

「そんなところであろうな」

僕と悌さまは領き合つて諸卿の士気を確認しておく。
最初から盛り下げても仕方ないので敵は少なく見積もっているし味方は多めに考えているが、実際にはそんなことはないだろう。魔物は三千くらいで、奴隷にされている現地民は良くて五百と思われた。むしろ情報提供や紅粹たちを匿ってくれる方がありがたいである。

まあこの辺の読みが諸卿にバレても問題はない。大公の事まで考えているのは僕らだけで、彼らからみれば被害を出そうとも敵を駆逐するのは当然のことだからなのだが。問題なのは元寇よろしく防衛戦で褒章が出ないので不満を抱くと今から判っていることだった。「二万の兵で敵二千を倒した後は、沿岸都市の奪還した後に西領中心部である白紗へ進軍します。場合によっては二千ほどを足止めに残して進軍することになるかと」

夢ばかり広がる計画だが、損耗率を考えなければ可能だろう。

無理に攻め立ててこちらの半数が負傷や死亡で戦えなくなり、残存兵力で四千ほど。その内の千を足止めに使って三千で挟撃に行くわけだ。主戦線でないから何とかなるだろうが、被害を考えたら敗北とどこが違うのか教えて欲しい比率になるのは間違いが無かった。

何が腹が立つって、その計算が妥当であり大公はそうなるかもっと手ひどくやられて功績なんか存在しないことを望んでいるという事だ。

(問題はなあ……。堅実に戦いあつて半数の被害が妥当なんであつて、どっちかが博打を賭けるともつと酷くなるんだよな)

こつちが博打を打つて失敗するか、魔族が博打で成功するか。

そのどちらかで残り三割を切る事は普通にあり得た。相手が派遣軍でしかないから良いが、精鋭だった場合は最悪、こちらが壊滅することも普通にあり得るだろう。というか精鋭でなくとも、向こうが都市の守りを捨て大攻勢を掛けたらそうなりかねない。

そういう意味で紅梓や現地民による偵察が行えている事が本当にありがたかった。先に待ち構えてあちこちの調査をしているため、魔族が妙な作戦を建てたらこちらが先に気が付けるからである。

(向こうの大博打は多分防げる。全軍での突撃されたら相手にせず逃げれば良いんだし。後はこつちが前提通りに動いてくれるのかな) 魔族率いる魔物は気性が荒く攻勢的なので攻めでは無類の強さを誇る。

もし全軍突撃なんて言う大博打を食らったら八千が本当に一万居ても勝ち目は薄いだろう。しかし横合いや裏手から攻め立てればそう恐ろしい程でもない。アンデッド浄化作戦の様に無傷で勝つとは言わないが、死亡者を抑えて程ほどの損耗で戦えるとは思うのだ。

あるいは水辺であり水棲種族がやる気であるならば、前後から挟撃という作戦でも良いのだし。もつともこの辺は相互連携が難しいので、シンプルな作戦にしたいのであれば相当苦勞することになるだろう。

●
その後は引き出物の鏡台を麗さんへ、手鏡と違い二つもあっても仕方ないので分割。

一つをうちの領地に持っていき、もう一つを緋家に献上する形で実家に遊びに行く時に使用するという事になった。悌さまの娘とかに受け継がれてしまうかもしれないが、その時は代わりの鏡を提供することにしよう。

領地に戻つてのパーティではお馴染みになったハンバーグ・薄切りに焼肉・ステーキといろいろ揃え、串焼きや串揚げなども用意した。中でも評判だったのはようやく完成した蒸留酒で、牛や鶏などで交換する為の注文が列をなしたというオマケつきである。

「ん？ あれは……」

「双羽。もう浮気？」

「違うよ双葉。見慣れない顔が居ると思ってさ」

開拓地での婚礼はともかく、領地での宴会では恋人である双葉も顔を出した。

正式に結婚したので妾となり、もし僕が上級貴族になったら第二夫人ということを決着したからである。その上で宴会好きなので料理を頼張り、この後で出るお菓子も楽しみにしている。

そして僕が気になった人物は、今まで見たことのない貴人であった。大人の貫禄がある悌さまには及ばないが、若武者である紅包さまくらいの気品はある。

「誰？」

「……むかし北でさ、町に出た時に僕と双葉で踊ったことない？」

「えー？ あの時つて双葉は……え？ そういう事なの？ あの人の」

僕が違和感を感じた貴人は姫騎士と言った風情の装束を着ている。

ファンタジーだからといって『姫騎士なんか居るか！』と言いたい人も居るだろうが少し待つて欲しい。お姫さまで騎士なんかおかしいだろうとか、僕もそう思うのだ。せいぜいが士気を鼓舞するために式典騎士団と言われる近衛隊でも花形のお飾り部隊くらいだろう。

もし、それが本当に女性であればの話だ。北領で踊った時は御遊びで僕は女装し双葉は男装し、二人で双子の真似をしたことがある。同じ村の出身者はどこかで血がつながっているから無理ではないしね。

「多分だけど本人は変装のつもりなんだと思うよ。世間知らず……純粋だからそれで良いと思ってるんだ、きつと」

「んー？ じゃあもしかしなくてもエライひと？ 皇太子殿下とか？」

「さすがにソレはないよ。でも近い人かもね」

僕らに近づくために変装する必要のある人間で、世間的に知られている人物。

そしてこちらが話をする必要があるから無視されることはないと確信しており、皇太子殿下は流石に無いにしても悌さまや紅包さまを知ってる双葉が、相当な身分の人物と思ってしまうような相手だ。人物リストかなり絞られるので、貴族社会には疎い僕でも想像することが出来た。

おそらくは東領の公爵さまの子弟なのだろう。その中で軍装を着ておいてもおかしくない人物と言う訳だ。

「東の緑青貴さまとお見受けします。お話よろしいですか？」

「妹の緑青姫ということにしておいてくれ。というか気が付いたなら
そうしておけ」

本名は緑貴。東領の公爵家の何人目かは知らない。

ただ武人で童顔、緑家と青家の血を引くサラブレッドで青悟の従兄弟であると聞いたことがある。とはいえ僕も聞いたことがある程度で人物名鑑かなにかを欲しいと思うくらいなので、唐突な来訪と言えるだろう。

察するに青悟が司教になったから目を付けられているので代わりに来たとか、大公に関する作戦に付いて聞きに来たという所だろうか？

「詳しくはここでは話せん。お前の部屋で仔細を詰めたいが、この酒を持って行っても良いか？」

「構いませんが男子の服に着替えてからにしていただけませんか？」

さすがに婚礼後に浮気と思われるのはいかがかと

「麗なら顔見知りだから知ってるぞ？」

「僕が周囲の目を気にするんです」

麗さんが知ってるから判るだろう、話さなくても問題ないだろうという気だったらしい。

しかし周囲に白い目で見られるのは僕なので止めて欲しい所だ。そしてこの短いやり取りで判るのは、大通連とは違うタイプの天然だということであろう。

なお酒好きな割りに酒に強いわけではないので、オモチカエリーに成りかけて真面目な作戦なんか話せなかったといっておこう。

覚悟を決める時

● 目を改めて東領の公子たる緑青貴と話し合う事になったが、やはり女装だった。

彼の趣味かと思っただが、どうも妹と麗さんが友人なので偽装になるそう。逆に武人である自分だと問題になるからとのこと。

仕方がないので僕が双葉に化け、双葉は僕に化けて執務室で食っちゃ寝することになった。洞府に作った僕の別室（秘密ノートを隠しておく為に新たに作った場所）に通したが、女装男子同士で部屋に籠って対談とか百合と言うより造花である。

「我が父、東領公爵たる緑碧令の言葉を告げるぞ？」 『大公の策略、誠に遺憾であり国家の重責を担うに値せずと断ずる。時あらばこれを討つにしかず。南領の勇士たちよ共にあるや否や？』。同じ言葉を妹が見合いの席で悌に告げる筈だ。そなたと悌で侯爵にも告げよ」

「それは……」

単刀直入な暴力行使の宣言である。

必要ならば暗殺も戦争も辞さない。しかし丁度良いタイミングが来るまでは雌伏するし、共に立てと言っているのだ。また見合いの席で悌さまに告げるといのが奮っている。要するに東領と南領で縁戚を結んで同盟しよう、何だったら緋家だけでも良いとまで口にしてるのである。

普通ならば思っただけでも最後まで黙っていると思われただが……。

「つまり態度を明確にしないと僕らが日和見するかもしれない。だがそれだけではなく、むしろここで宣言することで国家運営のイニシアティブを取るとおっしゃるのですか？」

「他に聞こえたか？ 我が家は謀略を滅多に行わぬが、別に出来ぬというわけではない。長い歴史ゆえにその必要を認める事があまりないだけでな」

東領の公爵とその親戚筋の貴族は歴史が深い。

この国は連合王朝に近い制度なので分国制度ではないが、東領と西領は独立王国に近い。中でも東はダントツに古い家が多いのだ。この緑青貴やその父親である緑碧令が貴族であるのにミドルネームを持つのは、その古い家系の二つの家から後押しを受けているというネーミングらしい。僕らの様に出身地でランドマークをミドルネームにしているわけではないそうなのだ。

そして今回はその長い歴史の産物で、陰謀に対して最も効果的な方法に直結したらしい。僕が抱いた考えをほぼそのままトレースしており、おそらくは大公の策略だけではなく僕が考えた対抗策も見抜いているのだろう。

「もしかして大公が考えた中央集権策をそのまま乗っ取る？」

「どちらでも良い。より国家の安定を確実に取れるのであればな。これまで通り外戚が支えるのも良いし、独裁でも構わぬ。それこそ合議であろうと……だ。ところでもそつと寄りさぬか？」

「お酒に弱いのでダメです。また話が飛んじやうじやないですか」

この緑青貴という男（少年というか少女にしか見えないが）は下戸ではないが酒に強くはない。

なのに下手の横好きと言おうか、蒸留酒をカパカパ空けるので手酌で呑ませる訳には居なかった。シラフの時はいつそ冷厳な感じがするのにも、何倍も飲むと酔っ払いの馬鹿さんになってしまうのだ。もし女の子だったら居酒屋に連れて行ってはいけない。あと同性愛者の男も傍においてはいけないと思う。

そういえば青悟はスキンシップが妙に多くて危ない奴だと思ったことがあるのだが、この従兄弟二人は大丈夫なのだろうか心配になって来る。

「返事は？」

「既に分かっただけでしょう？ 僕の一寸で答える訳にはいきません。また違ったとしても憐れさまに追従する事になるでしょう」

「では決まったも同然だな。憐れは皇太子殿下にベツタリであったゆえ」

この自信が何処に根拠があるのか分からないが、不思議と間違つて

いない気はした。

悌さまは人質暮らしが長かったし(麗さんは趣味)、皇太子殿下の外戚は公爵家だ。その家の公子が断言するのであれば二人の仲は良いのだろう。その上で利害が一致しないのであれば別として、共に大公から迷惑を掛けられており、手を取り合う可能性が高いのだから。

もつともこの男は天然気味なので、直感で言ってるだけだとは思う。ただ人間感情に関して意外とそういうのが馬鹿にならないので、そうなのかもしれない。

「旗幟は鮮明にすべし、でなくば信用し合う事は出来ぬ。ゆえにこの場で言質を取りたいところであるがそうもいかぬであろう。悌の言葉次第として、なんぞ質になる物はあるか？ この場合は大公に勝つ方法でも良い」

「あー……そうですね。ちよつと待つてください」

僕が頷くわけにはいかないが、悌さまに首を横に振らせる可能性のあるのは僕くらいだ。

本当に大公を除く気であり、協定する気ならば保証を寄せせと言うのも判る気はする。流石に『大公の策を大公自身に使う』というのは口にしない方が良さだろう。そういうのはギリギリまで喋っては駄目なやつだからだ。秘密とはどこから漏れるとも限らないのだから。三国志の漫画とかを見ると良い。女房だけなら良いかと思うと、女房が隠れて作った恋人に離してダダ漏れである。

とはいえ何らかの保証が必要な訳で、この部屋に通ってしまった以上はここにあるモノで終わらせるのが運命という物だろう。

「僕は今まで色々と考案してきましたが、人間相手に使用するには過剰な装備であり、魔物に使うには微妙な物がございます」

「攻城兵器の類か？」

「大仰さではそこまで及びませんが、被害はそのくらい出せますね」

以前に双葉が勝手に秘密ノートを持ち出し、中から料理のレシピを引っ張り出したことがある。

それだけならば問題なかったのだが、色系考案した武装を書き記したノートを剛盾と大通連が勝手に再現したのだ。それからこちらに

危険な内容の物を移し、執務室には問題のない物だけを置いてある。つまりはここにあるアイデアは、現在の技術レベルでは過剰な兵器ということになるだろう。

「名を銅張り鉄鋼馬車と申します。馬車を強化したのですが、兵を乗せると言うよりは銅堀を乗せて移動し、最前線で矢弾を跳ね返すモノになります。常駐させる武装は大型の石弓を」

「……そなたは何と戦う気なのだ？」

呆れた様な顔をしながらも良いと思うが、自分でも何となく自覚している。

これを数台連ねて壁にして、野戦築城どころか移動する城として使うのだ。移動する間は馬が弱点だが、設置さえすれば相手の攻撃はまらず通じず矢戦だろうが殴り合つての消耗戦でも勝てるだろう。

とはいえ説得力としては十分だったようで、今までの技術では作れなかったが、鋼のパーツや大型化で構造を強化した馬車なら可能であるとの補足を書いた紙も見せるとウンウンと頷いていた。

「国を割って戦うのは愚策ですが、少数精鋭で短期間に勝負を付けるなら丁度良いでしょう。これに随伴させる兵を輸送するための大型馬車は既にあります」

「……危険な奴。だが、この場合は良からう。今まで渋って居たという事は、本来は使う気などなかったのであらうしな」

「先も申し上げましたが過剰ですので」

もし、もしの話である。悋さまや侯爵も頷いて大公との抗争になった場合。

大公が動く前に片付けるつもりであるが、それでは済まずに戦う場合はこの銅張り鉄鋼馬車を使う事になるだろう。兵員輸送車両は既にあるし、大公が使ってる屋敷に押し込む分には鉄鋼馬車もあまり数は要らない。

それこそ現在は西の島で投石器を造ってる剛盾と入れ替わりでこちらに戻ってもらえば、白紗を全軍で囲むころまでには何台か仕上げで貰えるだろう。その後の論功賞までで良いなら確実なはずだ。出入り口に突っ込ませて封鎖すれば良い。後は隠された出入り口を探

すだけだ。

緑青貴は納得して酒瓶を取りあげると爆睡するまで飲み続けた。後で聞くとここまでタガが外れるのは珍しいそう、宮城や領地ではないから羽目を外しているのかもしれないとのことだ。まあ大公との戦いを決意したことで精神安定剤を求めているのかもしれないけれど。

「……何とか収める方法はないのでしょうか？」

『二羽や。そのような事が無理な事は判っておろう。一度動き出した時を押し留めることなど神にも不可能じゃ。大公とやらが決断し、東も南も対抗する事を決めたのであれば……もはや覆すことは不可能』
娘々が来臨されておられたので、つい弱気になってしまった。

元より都合の良い方法などあるはずはない。ここまで来たら謀殺で終わるか戦争で終わるかの差でしかなかった。もし内戦したくないのであれば、非常手段に手を染めるしかないし、それこそ大公は躊躇しないであろうから。

そして悌さま達が動かない筈はない。まずお家の存続あってこそ国家体制と考えるのが貴族と言う物であり、国家の秩序などはその後で考えるべきものだからである。中央集権の野心に駆られた大公などは止まる事など考えても居まい。

とはいえ目の前の魔族を倒さねばならぬのは間違いがない。まずは魔物たちを駆逐し、僕も大公に備えるべきだろう。

出兵計画の終了

● 出兵に際して先発組を選抜、戦いが長引いたら必ず早期に帰還させる事を約束しておいた。

既に橋頭保を確保しているが、普通ならば今から出発するのでどれだけ戦いが長期化するかどうか判らないからだ。こういうところも含めてやっておかないと中央のスパイが容易く見抜きかねない。

遠征時にはこちらが補給を用意するか現地調達なのだが……。経済状況的に問題がある貴族へ前渡しで資金を渡し、手弁当で自前の兵糧を持ってきてもらう。こうすれば彼らもプライドを刺激することなく資金が確保できるだろう。彼らに加えて戦意旺盛な者や功績を挙げたい者を編成することで無理なく戦力を揃える事がようやく可能になった。

「……帳簿は問題ないようですね。では正式に五堀さんへ組合長の引継ぎをさせていただきます」

「銀殿ではないが余禄の方がよほど大きいのに誤魔化しなどせぬよ」
河川協同組合の組み合長と金庫番は数年交代だが、僕は魔物の島確保で出ていた。

その間は業務を緋五堀老人に任せており、内容の監査を終えて問題ないことから正式に交代することにした。やがては緋家の誰かが名目上のトップに収まるだろう。

そして緋家から千名ほどの兵を先発で用意し、赤色港へ出発させる。途中で紅家が用意した先発組の千五百名と合わせて南領諸侯合わせて三千ほどが先行で出兵することになっていた。まあ既に島は落としているから、実際には合計で二千ほどになるはずだけどね。

「中央が援軍が必要だと言うかもしれませんが、本当にそんな時は所定の方法で連絡いたしますので信用しないでくださいね。各領の代官たちにも伝わっているかもしれませんが、その辺りの指導もお願いします」

「うむ。この老人は遠方への出兵には参加できぬゆえな。この程度は

任せておけ」

今回は移動経路と距離の問題があるので年寄りや、後継である悌さまは同行しない。

代わりに連さまが暫く紅領で待機し、後発組で参加することになっていた。経験を積む意味でも交流を深める意味でも妥当な配置であり晴れ舞台なのだ、連さま派の五嵬老人が裏切ることも誤魔化すこともないだろう。家臣団の留守居役として留まることになっていた。

こういったやり取りで向後の憂いを無くし、総兵力八千弱の部隊を順次送り出す。その予算と兵糧に道を付けた他、後は開戦まで規格化を広めた地域で作られる柵などの物資を送るくらいしかすることがない。先発組と一緒に向こうに渡ることになるだろう。

「エルフやドワーフも大々的に協力してくれるなら助かるんじゃないが」「そこは仕方ないですね。元が魔王が出現した時に対する古の協定でしたし、自由意思での参加を認めてくれただけでもありがたいですよ。集落ごとで協力するにしても、中央や西領は別の国という区分ですから」

魔族との戦いだが異種族が援軍を出したりはしない。

あくまで水棲種族とは同盟を結んだから協力してくれるだけで、それだって主戦線は人間が担うからだ。上陸作戦や囿役までなら良いが、それ以上は難しいとの返事をもらっている。またエルフやドワーフはもう少し引いた扱いである。

大昔に魔王が暴れまわったことがあり、その時の協定で『魔王が出たら損得抜きで協力する』という約束があった。また集落で親しい領主や国主と協力することがあっても、その場合でもこの近辺だと南領までである。

「冒険者ギルド経由で何人が加わってくれたのと、薬草師や錬金術師が販売面で協力してくれましたから、薬品の類が揃ったのはありがたいですね」

「まあ、それだけでも感謝する他ないのう」

紅梓や剛盾の影響もあるのだろう冒険者が増えた。

戦いたいわけではないので傭兵だったら参加しないが、見聞を広め

るという意味でなら協力するという連中が居たのだ。ほとんどは狩人などで魔法は使えても補助魔法や強化系くらいだが、それでも専門分野では人間以上の特化系なのでありがたい。

また特に安くなっているわけではないが、通常ならば少数しか出さないような効果の高い薬を売ってくれたのはありがたかった。ゲームみたいにその場で傷が治ったりはしないが、破傷風などの心配がないと言えどそれだけありがたいかが判るだろう。

「しかし……もう少し。もう少しだけ先延ばしにしたかったもんじゃない。いや、手を尽くしてくれた銀殿に文句があるわけではないが……。そういう意味では大公閣下に恨みの一つも言いたいわい」

「仕方ありませんね。どうやら西領よりも西の遊牧民がこちらを伺っているそうですから」

「何じゃと!？」

驚かしたくはないが、後で吹き込まれるのも厄介なのでここで喋っておく。

留守居役の彼くらいは知っておかないと、大公が大袈裟に発表した時に騙されるからだ。流石にここで遊牧民の侵攻に対して手を打っているとは口に出来ないが、僕が知っていて悌さまがデンと構えて居れば、後は五堀老人がなんとかしてくれるだろう。

青い顔をしてこちらを伺う彼に、僕は領いて問題ないのだと端的に示した。そこから先は落ちつくためと言うか、この会話を誰かにせねばならない時に対する打ち明け話だ。

「大丈夫なのか？ 奴らは動き出せば疾風の如くというでは無いか」
「西にも水棲種族が居て情報をくれています。今の季節は西からこちらに風が来ますので、船便なら馬よりも早く速報が届く筈ですよ。もちろんこちらも斥候を出します」

察知する術はあると教えるが、対処手段は教えない。

これだけで大公のスパイが居る問題で詳しくは喋らないのだと察してくれるだろう。もし大公が『遊牧民が攻めて来そうだから援軍出せ』と言いだした場合、動揺する火入れの諸候に『銀殿ならば対策を打っているそうじゃ。詳しくは聞かなかつたが』と伝えてくれるだろ

う。

もちろんタイミング的には既に魔族を駆逐して居るし、場合によっては大公との決戦時の筈だ。しかし向こうの出方が判らない以上は、迂闊に残存兵力への悪影響を与えられても困るのである。



五嵬老人にしたような話を、もう少し詳しく僕の領地でも行つた。もちろん正妻である麗さんと代官である黄三硯の二人だ。情報が錯綜する為、万が一の場合は行政に関しては三硯が優先で家督に関しては麗さんが優先とする。もちろん『反乱疑惑があるから、無実を証明するために正妻が人質に來い』なんて言われても無視するのは当然だ。

そこまでやる時は南領に攻め入る時に備えてだろうから、逆説的にいえばそこで行かない方が良い。

「万が一の時は洞府を崩してエルフの領域にでも逃げて。娘々の御力は順調に回復してるし、洞府自体は惜しいけどまだ作り直せばいい」「承知いたしましたわ。しかしこの私が居る限り、娘々の御座所に指一本ふれさせません」

「……」

前に三硯が口にしたことを今度は麗さんが言っている。

まあこの辺はオリジナリティーは関係ないし、神さまなんてモノに出逢った一般ピープルの反応なんてこんなものだろう。万が一の時もエルフ側とドワーフ側のどちらに逃げてても良いのだが、エルフの領域を通つて水棲種族の早便が来るので、やって来たエルフに連れられて逃げる方が早いだろう。ドワーフの方は守り易い山脈が広がっているが南領の他の貴族が居る領地の筈なので攻められ難い以上の意味がない。

そして双葉だけは一緒に連れて行く。世間的には正妻である麗さんの方が上なのだが、昔からの付き合いで考え方も能力も判っている……いや、一心同体の恋人であるからこそ何か問題があるならば一緒にいたいのである。

(もし大公に負けて一時的に逃げ出すとしたら、付いてきて欲しいの

はやっぱり双葉なんだよね。悪いけど麗さんとはお互いに家同士の付き合の方が大きいし。娘々に傾倒してるとか悪い子じゃないんだけど)

そこまで考えて後ろ向きに成って来た事を自覚する。

もし南領から外に出るとしても、逃げ出すよりは別の意味が良い。逃げるだけとかみじめ過ぎるし、双葉の為に何かするにしてもバカンスであるとか、面倒が嫌いな双葉の為に他人の目を気にせずに食っちゃ寝ができるリゾートを作る方が面白い。どうせなら神さまの信仰を広めるための場所であればなお良いだろう。

そんなことを考えて来たら、色々やりたいことが出てきた。貧すれば鈍するというが、やはり後ろ向きなのは面白くないのだ。ここは是非とも魔族も大公も蹴散らして、楽しい今後を考えるとしよう。

「……………？ 何か思いついた？」

「新しい御菓子とか、夏場に涼しい建物の研究して水棲種族に場所を見繕ってもらって遊びに行くのも良いかと思ってるさ」

「あなた。戦争は暇潰しに行くのではありませんわよ？ 勝利を前提にしているのはよろしいですけどね」

微妙にフラグになりかけたところで麗さんがツツコミを入れてくれた。

何だか後ろ向きだったことが馬鹿馬鹿しくなってきたが、それだけに無事に勝たねば意味がない。

ではひとまず魔族を倒しに行こうじゃないか！

第八部 西領上陸戦

● 再び訪れた島は既に以前とは比べ物にならない。

水棲種族が快速艇を泳いで則継ぐ早便を使い、時間差で一週間くらい前から既に大々的な工事を始めたからだ。剛盾は現場監督として自分が居なければ作れない物を建造しているそう。クレーンなどのパーツも持ってきているので、こちらの到着待ちかもしれない。

ともあれこの段階で『しておかねばならない事』と『やっておきたい事』が存在する。

「お疲れ様です。ありがとうございます。しかし、すっかり黒くなりましたね」

「木を切り倒して日差しが増えたからのう。日焼けしてしまおうたよ」
隠れ棲むように少しずつ開拓していったり、投石器を造って居た時とは違う。

僕らが緩やかな海流に乗って到着したころには、移動や開拓に邪魔な余分な樹は切り倒されて建物用の資材になっているのだろう。目の良い紅梓がこの島を見たら、怒ってすっ飛んでくるかもしれない。

現地で活躍したスタッフの功績を剛盾に紙面で貰ったら、最低限の引継ぎは終了だ。さて、この段階で『しておかねばならない事』というのは面通しになる。連れて来た兵士たちに水棲種族と面会して少しずつ慣れてもらわねばならないのだ。味方を敵だと思われても困るし、怯えて本来の任務に刺しつけ当たり情報共通を嫌がるとか困るからね。

「打ち合わせの通り自分の隊から数名ずつ選んでください。水棲種族との合同訓練を開始します。ある程度を熟したら順繰りにメンバーを入れ替えます」

「承知した」

「うむ」

サクラと言う訳ではないが、緋家の武将である緋二広や紅家の武将に根回しをしておいた。

発言力の強い彼らが真っ先に頷くことで、これからの訓練や上陸作戦を既定路線で終えることができる。彼らは前もって水棲種族と出逢った事がある為、問題なく進めることができるだろう。

そしてこれから行う合同訓練こそが『やっておきたい事』になる。面通しを行って水棲種族に馴れなければならぬというのは後ろ向きだが、そこでやる訓練は効果的な物だからだ。やればやるほどに意味が出る筈だ。

「訓練内容は？」

「上陸訓練です。この辺りにある幾つかある小島の中には、前もって調べた上陸地点と似たような場所が数か所あります。自分達だけで上陸する訓練を終えた後で、作業を終えた水棲種族たちと合同した場合の労力差を比較してください」

「なるほど。水棲種族の力を借りれるかどうかで随分と楽になるようだ」

当たり前だが水棲種族たちは泳ぐことも、水底を歩く事もできる。

以前に立てた作戦では、彼らに規格化した木材を持って上陸してもらう予定になっていた。自分たちが苦勞してボートを漕いでいる脇で、次々に柵が立てられて陣地が出来上がるわけだ。それだけでも十分に心強いだろう。

そして合同訓練では、ボートを引いたり押ししてもらおう形で上陸作戦をするなどのくらいのペースで上陸できるかを計算する。普段は不要でも、一刻を争う時には重要だろう。

(ついでに言うと、こういう感じで実地を模した訓練慣れしていると『色々』と楽になるんだよね。解放区が増えたら『屋敷』での戦いに備えてみるかな)

特殊部隊での訓練を参考にしたわけだが、ああいう部隊では事前に似た建物を使うらしい。

財政に余裕のある軍隊の特務だと、更に突っ込んでソックリの建物を建ててからやるらしいが……。今のところ、大公が使ってる王都の

屋敷や、西領での本拠地である白紗の城での本丸に対して使う可能性があるくらいだ。そこまで無理をする事もないし、以後を考えればやっておいた方が良くてもある。

しておかねばならない事だけだと何処か後ろ向きだが、やっておいた方が良く事に関しては今後の苦勞が減るのでやり甲斐があった。

「ここに居る二千の兵の内、上陸作戦へ赴く五百ほどが馴れることをまずは優先。その後以後発の部隊がやって来る時期に前後して、状況次第で先に上陸します。その時点で陣地を築くか、それとももう少し内陸の森か何かに隠れるかは魔族の動き次第ですが」

「そんなところだろうか」
「異存はない」

多少流動的だが仕方がない。

紅梓や現地民たちが情報を集めてくれる手はずになっているが、魔族の動きが分からないからだ。ないとは思うが全部隊で待ち構えているならばその場所から遠い方が良いし、個別に分散しているならば各個撃破できる位置に誘い出した方が良いからである。

これらの訓練と周辺の島々を開拓する事が冬の間に行うべき事だろう。春になって最初の農作業が終わり、暫くは問題ないと判つてから後発組が来ることになっていた。全てはそこから始まる。

● 何のかんのと忙しい冬が過ぎ、順調に作戦が始まったのだが馬鹿馬鹿しい前哨戦が起きてしまった。敵がある程度の戦力を分散させ、こちらのの上陸しそうな場所を固めて来たのだ。各個撃破のチャンスだったので出撃したのだが、運の悪い事に敵が早期に気が付いて泥仕合になってしまった。戦そのものは訓練のおおかげでスムーズに行ったわけだが……。

蓋を開けてみると『撤退して別の位置に移動すれば、有利にやり直せる段階だった』のに、戦意旺盛な部隊が強行して上陸戦を開始したとのことだ。

「やれやれ、何もかもは上手く行かないな」

「銀殿。そこは仕方ない。誰も彼もが上層部に忠実ではないし、やり

直すよりも強行する方が確実に判断する者もそれなりに居るものだ。ましてや一番槍の功績を得るチャンスとあつてはな」

「そこは判っているのですけれどね」

さすがに都合よくは行かせてもらえないらしい。

まだまだ先は長いというのに、功績争いの延長上でハッスルする者が出てしまった。彼らから見れば味方が多めで水棲種族が直ぐに援軍として来る状況である。手柄の立て放題だと思つてしまったのだろう。大公に備える必要性なんかしらないだろうし、よい気分であると思われた。

三国志や戦国時代の話で、混成軍を率いる時の苦労が少しだけでも判った気がする。直接の部下でも苦労するのに、一応は同格である諸卿を束ねるのは非常に難しい。

「ともあれ此処から巻き返していきましようか。命令系統の統一と言う意味では問題ですが、上陸成功と敵部隊の撃破は勝利ですしね」

「そうだな。魔族は強いから何とも言えんが、幸先は良い方だろう」騎士や貴族には裁量権と言う物が存在する。

与えられた任務の範疇でなら何をしても問題はないというやつだ。もちろん住民を虐殺とかしたら大問題になるが、それだって綱紀を乱し他の領主の財産を処分したことが問題なだけで、貴族ではない一般人の命は計算に入つてはいない。

そして何より、指揮官や軍師の命令を逸脱しようとも『成功すれば問題ない。功績を挙げて認められ、領地を貰う方が重要』だとなつてしまうのである。今回は国土奪回であつて功績争いはそこまで必死ではないのだが。

「上陸部隊は敵部隊を拘置。敵味方の増援を待つてそのまま防衛戦で相手の出血を誘います。迂闊に飛び出すことは禁止すると、その点だけ厳命してください」

「言いたいことは判るが、緒戦でそれは慎重過ぎぬか？ もっと積極的に……」

「いや、銀殿は臆病風に吹かれているわけではない。理由があるそうだ」

紅家の武将が苦言を呈しようとするが、二広が止めたことで一度話を切る。

僕は三人で目を合わせた後、ハンドサインで顔を近づけて内密の話をする事にした。ただここで大公の話はまだ出せない。備えるにしても極端なことになるし、スパイがそろそろ見え始めるからである。

だからここで、前後する予想の方を先に出しておく。大公が発表する前に国元で留守居役の緋五塀に話をしたのと同じ理屈だ。

「……実は国境線で遊牧民の動きがあります。対抗策を授けて分隊を送り出しましたが、ここは被害を抑えて一気に都市攻略を行う必要性があります」

「なんと……」

ただ遊牧民の話を伝えるわけにはいかない。

重要なのは対策を立てている事、ここで被害を出すわけにはいかない事、そして都市攻略のために仕込みをしている最中だと言う事だ。特に最後のはちゃんと伝えておかないと、『遊牧民が来る前に攻め落とさねば!』などと張り切ってしまうので逆効果であった。

ゆえにここは最初だけ時間を掛けて見せ、二戦目三戦目こそが重要だと強調しているのである。

「避けられる損害を出したのは痛いですが、相手に悟られぬように水際に誘い込みました。その意味ではまだリカバリーは効くでしょう。敵がこちらを包囲した所で、別口に回った部隊を使って逆包囲を掛けます」

「水棲種族の戦いぶりは見させてもらった。挟撃どころか四方八方より攻め立ててくれよう」

ある程度をはなせば即座に戦闘方法を理解してくれる。

水際で戦い別動隊が後ろを突く。それだけならばオーソドックスな戦いなのだが、水際でも戦闘力が落ちないどころか水底に潜める彼らは天然の海兵隊だ。半島の様な場所に誘い込めば、平気で水辺から強襲し、しかも自分達だけは逃げ帰られる。これが詐欺だと言わずに何と言おう。

そして思わぬ損害を出したものの、逆包囲戦で勝利をもぎ取りつ、国境沿いや都市部への潜入を誤魔化すことに成功したのである。

南蜃砂の戦い：前編

● 本土から来る後続が来たことで南領総軍が本格的な進撃を開始。

途中でペースを調整して、予め探っておいた場所で魔族の軍隊と会敵した。有利な地形とはいえガツプリ四つに組んでの戦いなので負傷者が続出、後方基地に送り返して療養するという日々が続いていた。

こうなることが判っていたので無理をしないように言っていた僕や紅家の将軍はまだマシだが、他の諸卿は苦い顔をしていた。

「二広殿、義兄上。それほどに魔族は強いのですか？」

「ここは銀殿から説明した方が早いかと」

「承知しました。失礼して……」

本隊と共に訪れた連さまが副将格として質問したので、こちらでも説明を始める。

説明用に用意した大きな木の板に、簡単な数字を書き込んだ小さい板を置いていった。数字は1〜6、これはレベルと脅威度を表すと言えばゲームをやった者には判り易いと思う。

要するに今相対している敵の戦闘力を簡単に表したものである。

「この数字は魔物の強さを単純に示した物です。10で魔王とお考え下さると判り易いですが、問題なのは一般的な人間との比較の方です。1が民兵相当ですがゴボルトは若干素早く、2は兵卒相当ですがやはりゴブリンの方が強いです。3・4はそれらの頭目、5・6となれば部族の長やオーガで体力・脅威に優れるとお考え下さい」

「なるほど。相手の方が五割増しくらい強いんですね。それと正面から戦った、と」

「ぐむむ……」

こちらの方が人数多いので騎士たちは自分の部下を率い躊躇なく殴り合った。

しかし単純な数字で比較すると、純戦力は同じくらいか相手の方が多いくらいなのである。予め優位地形に陣取り、色々と手配して居な

ければ今ごろボロボロだったかもしれない。しかしまあこれも仕方がないのだ。何しろ諸卿は僕の分析をそれ程信じては居なかったのだから。

ゲームとかで屈強な魔物と弱い人間と言う凶式を知らなければ、僕だって人数多くて地形が優位なら勝てると思うだろう。

「とはいえ將軍の御采配で出血は最低限に収まっております。本隊の到着で問題なく街道までは突破できるかと」

「それは当然の話です。とはいえ敵戦力が判っているのにこれで終わっては義兄上の指導不足と言う事になります。何か策があるので
は？」

ロクに諸卿が従わない状況で責任問題を問われても困るが……。

実際に策を実行中なので仕方がない。南領の総大将である紅家の侯爵さんから強力な采配を委ねられていたわけで、策の為に『あえて強引な指示を行わなかった』ということになるだろうか？ それにしても言い方が気になるが、連さまが笑って聞いているのが救いである。

おそらくは大公の使者か何かに僕を突くようにキツク言われたに違いない。連さまとしても波風を立てたくないから、こうして冗談めかして居るのだと推測された。

「ここで明かすのもどうかと思つたのですが、別口の情報が入りましたので仕方ありませんね。情報は二つ。現在の状況は大公殿が今後
もこの国の首座に立つべく、こちらの情報を漏らしていたそうです。次に遊牧民の同行が確認されました。まもなく中央からの発表も追
い付いて来る頃かと」

「なんだと!?! 遊牧民が!」

「それにしても大公めが、返す返すもいやらしい!」

肩をすくめた連さまにならつて僕も肩をすくめて話し始める。

その上で緋二広や紅家の将に目配せをしておき、適当な所で雑談を打ち切る準備をもらった。その間に僕は魔物のレベルを示した木の板を片付け、別の板を用意しておく。

青の板が南領を含む我が夏朝の軍隊。赤が魔族の軍隊。そして黄

色が遊牧民である。

「西群鎮台を抜いたはずの国軍本隊は足踏みして居ます。おそらくはこちらを消耗させつつ、一気に白紗を陥落させることで遊牧民たちを威圧するつもりでしょうね。我々が被害を抑えながら殴り合っていたのは、同様の策だと思ってください。沿岸都市である南蜃砂を落とした後で即座に白紗へ向かいます」

「なるほど。その為に無理な攻めはするなと」

「意図は判ったが、本当に可能なのか？ 我々は少数の魔族にすら苦戦していたのだぞ？」

二広と将軍が交代で是非両方の言葉を繋ぐ。

ここから重要なのだと理解して、諸卿たちも押し黙った。もしこの場で代わりに提案しろと言われても無理なので、黙るしかないのもあるが。

僕は諸卿が静かにするのを待って、少しずつ駒を動かしていく。まずは黄色の遊牧民たちを一定距離で停止、そのままUターンさせた。「遊牧民たちは勝てそうだから来ているのと、あくまで魔族を我々が退治できないという大義名分で動いています。ですので南蜃砂や白紗を落とせば引き返す可能性は高いでしょう。もちろん策は打って居ますが、重要なのは都市の方なのでこちらを先に説明します」

彼らは生存のために動いているので、イザとなれば大義名分など無視するだろう。

しかしこちらが勝つ可能性もある間は無理には動かない筈だ。食料問題はあれから何とかなったと報告を受けているし、そもそも現在の彼らに強力な指導者がいないのである。だからこそ統領の一人である羅虎がこちらで呑気に交渉できたというのもあるだろう。

裏を返せば強力な指導者が現れたら大義名分など気にもしないのが遊牧民なので、これはあくまで諸卿の説得用なだけだね。

「南蜃砂は沿岸都市と呼ばれる通り、水際なので水棲種族の力が借られます。それとは別に以前の戦いで城壁が万全ではない為、事前に工作班を送り込めば裏側から城門を開ける事が出来ます。もちろん次の戦いで魔族が逃げ遅れたら、我々も同時に雪崩込むのですが」

「それは判った。次の戦い次第と言う訳だな？　では肝心の戦いの方を尋ねよう」

「うむ」

大公の指示で沿岸都市くらいは落とせと言ったのを覚えているだろうか？

あれは要するに詳しく知らない上層部からみれば『城壁に不備がある城』など強攻すれば落ちるだろう。せいぜい犠牲を出して落としてこいということなのだ。これら城壁や遊牧民の情報を聞いていたらもつと楽だったし、諸侯も少しは大公に協力的だったのではないかと思う。

それはそれとして、これらの情報から急拵えで直した部分だけを強攻する。万全な状態の城門には裏工作で当たると言う訳だ。諸卿の手前、敵軍と一緒に侵入するといっているが、実のところ冒険者や傭兵出身の連中であつたり、現地民の中で有望な者を集めて既に送り込んで居たりする。ここまで足踏みしていたのは、この時間を稼ぐためだ。

「策は三つ。地形を利用するのは同じですが、第一に攻城兵器を投入して倒す意味の薄い雑兵たちを間引きます。第二に後方で療養していた者たちで構成する部隊を伏兵に充てます。知つての通り緒戦で傷ついた者たちは既に治療が終わつておりますので」

これまでは城攻めに使うというお題目で置いて行かれた剛盾製の投石器。

戦線が膠着したことで追い付けたこと、そして諸卿が相手の強さを理解したことでようやくお披露目できる。とはいえ剛盾を本土に戻ってしまったため、用意できたのは数台でありバラバラではそれほど役に立たない。あくまで援護射撃を行う程度でしかないだろう。

だから地形を利用してまとめて使用し、濃密な弾幕で主力のコボルトやゴブリンの数を減らしておく。

「アンデッド戦で使ったという作戦ですね？　では改めて質問を。オーガ以上に限っては下手な騎士より強いと思いますが、耐久力と膂力で突破してしまうのではないのでしょうか」

「それに関しては第三の策を。こちらで一番強い豪傑たちをまとめて投入します」

連さまが口にしたのが騎士たちに投石器が置いて行かれた主な理由だ。

上陸戦では組み立てる時間が無かったとはいえ、相手の動きを待つても良かったはずである。しかし水辺であった為に水棲種族たちに協力してもらい、四方八方から攻め立てたことから使う事が出来なかった。その後は優位地形にあった事と数がこちらの方が多かったので、余計なことはせずに沿岸都市まで取っておけと言うことになったのである。

まあこの辺は『無理な攻めをせずに戦ってくれ』としか言わなかった僕も悪い。先に言った通り、相手の強さを知らなければ、優位地形で数が勝って居れば普通なら勝てるからだ。

「我らをか？」

「その通りです。紅包さまならオーガなど一捻りでしょう。遊戯盤では最強の札同士をぶつけ合うよりも、最強の手札で相手の強い札を損害なく下す方が確実ですから」

「なるほどな。不満はあるがどうせこの辺りには相手になる者もおるまい」

これまでは紅包・二広・大通連の三名は個別に戦っていた。

紅包さまは上級貴族の子弟だし、二広は緋家の武將。そして大通連は好き勝手に戦うタイプで普段は適当に暴れている。そこで今回はコントロールして相手の動きをシャットアウトするために使うのだ。トランプで言えば絵札で数字の9や10を潰すような物である。

こちらの強い騎士とオーガを数値化すると共に5であるとするならば、例え勝ったとしても負傷するような戦いになるだろう。だが紅包さま達なら数値は7と8、特に紅包さまの命中精度だけならば9に及ぶ。急所狙いなり大振りな技を使ったとしても見切られることはないの、サクサクと倒してくれるに違いあるまい。

「戦としての流れはこうです。優位地形で待ち構えて投石器を放ち、それでも乗り越えて来る部隊を迎え討ちます。そして相手がオーガ

達をまとめて突撃させたらこちらも三名で、個別に来るのであれば交代しながら戦っていただきます。復帰する部隊はその後に追撃用ですぬ」

「良いのではないでしょうか。騎士たちにも主力として戦うという役目がありますしね」

この作戦のミソは豪傑たちはあくまで遊撃隊ということだ。

騎士たちを蔑ろにしては作戦に従ってくれないし、敵も優位地形の中で一番通り易い場所を抜けて来るのだが、それ以外からも回って来れないわけではない。その辺りを考えれば最初から豪傑たちに頼るわけにはいかない。ロボットのアニメと違って、敵軍のエースを倒したら終わりではないのだから。あくまで彼らの出番は、戦線が膠着して敵味方の様子が判ってからである。

作戦的には投石器の使用や豪傑の集団投入以外は常識的な物であり、特に反対も無く連さまが賛同したことで決定した。仮に大公のスパイが何か手を打って来るとしても、このタイミングでは本隊の動きと連動しているので悪さをし難いのだ。投石器を燃やされたり沿岸都市ごと僕らを焼き払われないように注意は必要だが、それ以外は手を出してこないだろう。

南蜃砂の戦い：後編

● 沿岸都市である南蜃砂は地形に恵まれた街だ。

海とオアシスが程ほどの位置にあり、基本的には平坦な中にも山が幾つかあって飛び飛びながら影を伝えれば砂漠を越えてき易いのである。名前はこういった地形から、蜃気楼が出来易いことから付けられたらしい。

とはいえ恵まれた地形ゆえに狙われ続け、遂には併合されてしまつたらしいのだが。

「山の稜線に投石器を隠し、見ただけでは山を使って守っているように見えます。柵を立てて反対側と山の一部を防御してください。山の兵は相手が来たら駆け下りて攻撃するくらいのつもりで」

「心得た」

できれば谷を挟むとか森に隠れるとかしたかったのだが、そんな物はない。

小川くらいはあったが防御には全く意味が無かったレベルなのと、水棲種族を援軍に呼べる位置でもなかったので諦めておく。山の方も全軍で登り傾斜を利用して戦いたかったがそこまでの山は遠かったので妥協した結果である。

五千の兵が山を盾に隠れ、弱兵を守って精鋭を用いて前面を固めているように見せるのが意図だった。

「再編した部隊は山の後ろで完全に隠れていてください。敵が崩壊した場合の追撃、あるいは方が一にもこちらが破れそうな時に投入して崩壊を防ぎます」

「了解した。その時は任されたい」

上陸戦以後の戦いで負傷し療養の終わった兵をまとめて後ろに配置。

必要に合わせフリーハンドで投入予定とする。これまで五千ほどを維持しながら早めに交代で戦っていたため、療養が終わった兵だけで五百を超えていた。

魔族は南蠻砂に残した兵を除けば二千強、相手の方が強いのでこちらが五千では勝ちきれない可能性もある。そこで伏兵とした彼らを山の裏手に潜ませ、こちらが負けそうなら直線距離で、こちらが勝ちそうなら山を迂回させて投入するつもりだった。

「義兄上。先の戦いで負傷した兵の一部がまだ戦えると言ってるのですが、どうしましょう?」

「……現地志願兵と共に南蠻砂付近へ潜ませましょう。彼らを守って都市の解放を手伝ってもらいます。その条件で良ければ参加を認めるとお伝えください」

本隊到着後の戦いで負傷した兵士たちに関しては体力・気力のアンバランスが問題だった。

ここで下がると本格的な戦いには間に合わない。だが治療魔法で直してもらって即復帰できる傷でもないという塩梅のはずだ。主に彼ら自身ではなく、連れて来た主人の騎士が納得してないというのが厄介である。

そこで都市攻略戦への先兵と言う事で理屈をつける。ここに至るまでの街で解放したり都市から逃げて来て、志願した民はゼロではないのでその護衛役だ。連れて来た兵は活躍し、その騎士は面目を施したという言い訳が可能になる。

「ただ大公の手勢が勝手に火をかける可能性があるのです、町の住民に手を掛ける者は人間に見えても容赦するなと伝えておいてください。略奪の許可は出せませんが、代わりに褒章を用意しておきますとも」

「その辺はみんな疑って居ませんよ。きつとね」

古来、戦争に連れ出される時の役得は略奪である。

近代戦争では禁じられるようになっていたが、勝者の傲慢は常に見逃されているものだ。ゆえに報奨金と酒を用意してこれを収める用意をすると同時に、町の住民に手を出すなと言う命令は誰もが見える所で厳罰だと言っておかねばならない。連さまはともかく、その部下が『そんなことは聞いてない』とナアナアで済ませる可能性もあるからだ。

もつともこんな建前が通じるのは補給が順調な事と……貧困に喘

いでいた西領の女たちの一部が、『人類最古の職業』に手を染め自主的に協力を申し出ていたこともあるだろう。彼女たちには補助金と軍医のケアを付けて、もし残り難いならば戦後は別地域で暮らせるように手配すると話を付けていた訳だ。

●
さて色々であったがイザ開戦である。できれば最後の戦闘にした
いものだ。

魔族の指揮で突撃して来る魔物を退けながら、まずは戦いを膠着させておく。投石器を放ってないのはまだ早いからで別に命令無視されてるとかスパイに壊されたからではない。

あまりに早く投石器を使ってしまうと、かなりの数を山越えに使ってきかねないし迂回されて後方が突かれる可能性もある。相手の方が強いので、僅か数十でも混乱しかねないからね。

「二時間後に射撃開始。騎兵またはオーガが投入された場合は予定を短縮します。諸卿にはその事に付いて注意しておいてください」

「心配せんでも突撃などせぬわ」
「頭の上に食らいたくはないからな」

決まり切ったことを繰り返しているようだが、徹底しないと無視される可能性がある。

前にも言ったが騎士たちには裁量権があるので、敵前逃亡や密通などの直接的な罪にならない場合は処断し難いからだ。先に功績を立ててしまえば後は知らぬという者も多く、こちらも時間設定で勝手に石を降らせると告げておかねば責任問題なるのだ。

問題は動きが判り易いオーガよりも、足の速い騎兵……コボルトライダーやゴブリンライダー等がいる場合だった。

「しかしこの辺りで狼など居るのか？」
「斥候によると割りと居るようですよ。問題なのは魔族は平然と他の地域から連れて来て使い潰しかねないことです。仮に馬になる狼が死んでも、彼らは天然の軽歩兵であるのが厄介ですから」

魔族が主に騎乗生物として使っているのは狼だった。

砂漠狼がどれだけいるのか、ゴブリンたちがどれだけ飼いならせる

時間があつたかは分からない。他所の地方の狼を連れて来たら返つて弱体化するだろう。しかし居ないと断言して良いのは前線指揮官の騎士だけで、軍師である僕や司令官クラスが勝手に推測するのは厳禁だ。

輸送の問題でこちらには騎兵も居なければ長槍の予備もあまりないので、油断するわけにはいかない。

「それよりも始まりましたよ。なにかあれば手当をしなければ」

「そういう所は年相応だな。戦の始まりと言う物はまるで変わらないか、最初から劇的であるものだ。そなたが投石器を最大に活かす為、最初から使わぬようにな」

「……失礼しました」

やってくる魔物はゴブリン主体の雑軍だ。

こちらは土地持ちの上級騎士に率いられた小隊一つが対応しており、副官である騎士引きいる分隊と呼応している。今ごろは分隊を連れている腕利きの騎士や専門の兵士を中心として戦っているところだろう。彼らが健在なうちは動員された民兵も問題なく戦える。

転機が訪れるとしたら、やはりオーガか同等クラスの魔物をまとめ投入してきた時だろう。ゴブリンは狼を騎乗用として飼いならすこともあるが、大型化した狼を魔獣として投入することも知られていた。

「うむ。今のところは順調な様だ。やはり相手が焦れて来る数時間後が山場だな。交代要員は待機させておるのだろうか？」

「はい。山の裏手から外側へ、車輪が回るように追加して順次休息を行います」

「では暫くそのまま見ておれ」

今のところは騎士や専門の兵士が多く優勢だが、それでも疲労をすめるのが戦場である。

そこで流用したのがいわゆる『車掛かりの陣』であるが、この陣形は攻撃用として考えるのが一般的なので、机上の空論として創作の産物と呼ばれている。しかし防御用として解釈し直せば休息しつつ、相手の攻勢を支える役には立つのだ。もちろん相手と常に圧迫し続け

るような戦いでは使えないのだが。

改良したのは伝承通りに回転し続けたりはしない。正面に立つ部隊は疲弊したところで外向きに移動。同じ位置を別部隊に任せ、脇を守る形で休息を取る。万が一があれば突出して脇を突くが、何も無ければ再編する予定であった。後方を厚くした斜線が、いつのまにか三角形となつていくというわけだ。戦場で余計な移動をする余裕なんかないのでこうなったとも言える（というか、迂闊に移動すると敗北したと思つて逃げる雑兵も居るので）。

「む……もう時間が経つたのか？ いや、敵が主力を投入したのに応じたのか。焦れおつたな」

「魔族は短気な者も多いと聞きますしね。近隣の兵を殆ど動員したことから、攻撃型の司令官なのでしょう」

まだ二時間経過して居ないのに既に投石器が放たれ始めた。

本陣からは良く見えないが、山の上に配置した見張りにはおそらく複数体のオーガ見えたのだろう。前衛の前を空けてこちらの部隊と豪傑たちが入れ替わり易いようにしたのだと思われる。

今ごろは大通連あたりが走つて獲物を追い求めているだろう。迂闊に飛び出て敵陣を指さないかだけが心配だった。

「銀殿。少し早いが手はず通りに」

「はい。狼煙をあげて第二段階を告げましょう。敵将が突撃するタイプならばいつ決着がついてもおかしくはありません」

現時点では攻撃の要であるオーガたちが前に出て来ただけだろう。しかし僕らが想定しておかねばならないのは、このまま状況が推移した後や逆に上手く行かなかつた場合だ。状況が動いてから手配しても遅いので、山の後ろに潜んでいる部隊や南蠻砂への突入を目指す部隊に用意をさせねばならない。共に移動準備を整え、次の命令次第で攻撃を掛けるか逃げるために行動するはずだ。

本来であれば開戦して数時間で決着がつくなどありえない。現に上陸後は膠着する戦いが続いたのだ。しかし将軍が自ら指揮して前線に出るタイプだと、突撃時にこちらの陣形が粉碎されたり、逆に豪傑が討ち取つてスムーズに決着がついたりする事も無くはない。

(別に決着自体は何日掛かって良いんだよ。……問題なのは大公が余計な事をする前に都市を奪還しないと)

大公としてはこちらを白紗に援軍として向かわせつつ、失態を記録しておきたいはずだ。

だから奪還中の都市を焼き払う事は十分にありえだし、城壁近辺で火攻めを行う事は普通なので話を通してなければ自軍が率先して行ってもあり得る話である。問題なのは都市全体を燃やされては明らかに失態だし、生き残った民衆からそっぽを向かれて大変なことになるだろう。

そんな事がありえるのか、可能なのか疑問に思う者もいるかもしれない。しかし考えて欲しい、僕らの出した斥候や現地民の協力者が既に都市の中に潜んでいるのだ。西領の主であった大公が同じことを出来てもおかしくはないだろう。

「いかな。悪い予感はあるものだ。あの黒雲と雷光……知恵あるトロールか何かが出張っておるぞ」

「将軍クラスのトロールですか。考えたくはないですが最悪の状況を想像するのでしょうか。全軍総掛かりの準備もします」

どうやら相手の指揮官は攻撃型どころか最前線で戦うタイプのようだ。

トロールは魔族の中でも好戦的な種族で、大抵は異常な回復力があるだけでオーガと似たり寄ったりである。しかしこの世界にダークエルフの類がない反動なのか、代わりに知恵のあるトロールがパワーも魔力もいかして暴れまわることがあるのだ。前世の日本で言えば、酒吞童子とか茨城童子が稲妻を放ちテレポートすらした伝承を思い浮かべると良いだろう。

これがどういふことかと言うと、豪傑たちと全力戦闘して即座に決着がつく物と思われた。魔王率いていた敵将でも四天王クラスは既に戦死しているのです、こちらが勝つのは間違いがない。しかしあれだけの稲妻を落とす敵である。こちらの豪傑たちも無事とは思えなかった。

(あーもう！ 白兵戦が強いタイプなら紅包さまが楽に勝てるのに

……どうして一番面倒な相手が来るんだ!?)

純戦闘型ならば同じランクの相手でも急所を突けば一瞬だし、紅包さまはそれが得意だ。

仮に持久戦になったとしても、豪傑を三人まとめて投入する以上は粘り勝ちするだろう。しかしあのクラスの上級魔法を後先考えずに連射されると、こちらも豪傑のみならず援護しようとした兵士たちに負傷者が続出するのは間違いがない。

ゆえにここは決着がつき次第、フォローと敵軍殲滅を兼ねて猛攻を掛けねばならないのである。

なお、この日の戦いは豪傑たちの決戦以外は殆ど予定内に終わった。大公の手の者が余計な事をしようとしたのを含めて、都市奪還やら消火活動やらで大変だったと記しておこう。

速攻か、遅攻か

● 何事にも予想外の事は起きる物で、僕らから見ると紅包さま豪傑たちが負傷したことだった。

これで今後に一騎打ちで強引に突破するという選択肢が使えなくなってしまう事になる。少なくとも紅家の者たちが紅包さまだけは出撃させないだろう。

仕方ないのでその辺りも踏まえて計画を練り直す。今のところ白紗でいきなり大公を刺し殺すとかやるつもりはないので問題はない。やるとしたら廟堂で排除できないと判明する前後だ。そのタイミングならば強硬策になったとしても間に合う……と思われる。

「遊牧民対策もありますし、本営を南蠻砂の北まで前進させましょう。都市入りさせないのは、例の付け火は魔族がやったものだから警戒が必要だという事にします」

攻めてくるかもしれない遊牧民対策の名目で南領軍本営を部隊代わりにする。

都市の占領は終わり、いつでも出撃できるという態勢を演出するためだ。その前の戦いで南領の兵士たちは傷ついているし、治療も終わっていないのに無事な兵だけを抽出するのは不可能だ。そんなことは前世の軍隊でも不可能だし、転生後だと功績の管理やら負傷度合いの管理で大忙しどころではないだろう。

もし、強引にやるとしたら戦闘に参加せず無事な部隊を中心に、傷の少ない舞台を集中的に治療して千かそこらをでっちあげる程度だろうか。

「それならばいつそ国軍の旗印を立てさせるか？ 中央から長駆してやって来たと思ってくれるやもしれんぞ？」

「いえ、それだと大公閣下の方で吸収する妙分が立ってしまいます。

……合流したのだから早く来い。白紗攻めに対して先陣を申し付けると言われても困りますから」

「返す返すも大公閣下の意向には頭が痛いな」

中央からの先遣隊であれば後続が居ると思わせられ、傷ついた部隊であろうと問題ない。

しかしここで問題になるのは遊牧民対策というのは名目と言う事だ。大公に使い潰されることが重要なので、却って相手の思惑に嵌ることになる。寄らば大樹の陰と言うか、養分として吸収されたくはないのだ。

ともあれ予備兵であり本陣警護に使っている兵があれば、二千弱ほどの軍勢をでっち上げる事ができる。これに傷の応急手当てを終え、編成を整え直した部隊を合わせれば三千から四千を見込める筈だ。当初の半数とはいえ、形だけは整ったことになる。

「ひとまずコレで急場をしのげます。中央からの国軍には『沿岸都市奪還中。急行軍で南蜃砂を落としたばかりに付き、編成を終え次第向かう』とでも報告しておきましょう」

「嘘では無いな。予定としては早い方といえる」

「戦場から逃げ戻った兵と共に追いつけねば、今ごろはまだ攻略の真つ最中だ。文句は言うまいよ」

緋二広や紅家の将と相談しつつ、用意しておいた草稿をまとめる。

既に何パターンか文面を書いておいたので、二人に見せて了承された物を選んで清書していく。概ね内容には間違いがなく、日にちやら兵数の見込みが違うだけなのだが。

後はここからどう進軍するかのペースとルートで白紗への到着がずれるというところか。

「報告書の大半はしたためてありますので、決定稿を文として書き起こしますね」

「聞いている通りだ。攻略成功の速報とのみ告げて通れば良い。急げと言って来たら、出来ぬものは出来ぬと言っておけ」

「はっ！」

中央からせかさされているのは確かなので速報として送っておく。

当たり前だが軍隊の編成が瞬時に終わったら苦労はしない。転生前の知識やら計算とかで数字には強いが、人事面での苦労などしたことがない。特に説明はしていなかったが自営業だった身としては、将

軍たちが平気で中央の使者に強く出れるのが羨ましいくらいだ。

何しろ生前は『安くできるよな?』とか『手伝つてくれるよな?』と言われたら領くしかないのが小心の身の悲しさである。

「基本的には軍を整え、南領として挟み撃ちをできる体勢を最低限の目標とします。先遣隊を斥候代わりに向かわせるのはアリですが、半端な陣容では遊牧民に侮られますし、先に申した通り吸収されて使い潰されてしまいますから」

「その辺りは軍師殿に任せる」

「銀殿の方がこういった管理には軽い。我々が口を挟む義理ではないよ」

封をした羊皮紙を伝令に渡すと、今度は次の目標を紙に書き込みながら表向きのお話をします。

もし中央が『良いから来い! 厳命だぞ!』と頭ごなしに入ってきたら遊牧民対策の話を持ち出すまでだ。遊牧民対策で西回りのルートを通りつつ整然として進軍するなら文句は付けようがない。中央の国軍から情報が全く入らないわけではなく、遊牧民の話は既に出ていると判って居るのだから。

その上で紙には実質的な数字を書き記した。遊牧民対策は既に出上がっているという話をここで彼らにしたのだ。

「おそらく遊牧民は食糧問題が起きているのでしよう。農作物ではなく牧畜方面での飢饉かもしれません。そういう意味で我々が既に守りを固め、西領を奪還したことで食料輸出が再開できると判れば攻めてこないかもしれません」

「なるほどな。そういうことであれば国境沿いを伺いつつ……ということになるか」

「部隊の一部を派遣しておくのもよいかもしれませんがな」

口ではこんなことを言っているが、『食料を売っても良いと交渉を終えている』と紙面にだけ書き記した。

二人は目を見張るが、口ではなく秘密裡に二人だけに伝えている意味を瞬時に理解した。僕にそんな余力はないと知っているのです、事前にこの話は解決したのだと理解したのだ。その上で『念のために備え

る体勢は重要』であるとか『大公に素直に従わない為』と納得したのだ。

そして最後に、最も重要な事を周囲から誰も窺って居ないことを確認して書き記した。

「大公閣下としてはせっかく西領を奪還するのだから我々を使い潰しつつ、遊牧民に備えたいのでしよう。この国を守るという意味では協力すべきですが、使い潰される必要はないはずです」

「……左様。我々は大公閣下の臣ではないのだからな」

「……なんという、いや、なんというか。戦うは武人の本懐ですが、無用な戦いは避けるべきでしょう」

それは大公が王国を再編し、中央集権国家を作るために全員を処分するという事。

東の公爵すらその対象とし、当然ながら南を率いる紅家の侯爵さんも同様であると書き込んだのだ。流石の二人も驚いた物の薄々は大公の強引さから察していたのではないだろうか。この国の首座は持ち周りであつたのを、ずっと権力を持ち続けようとする……と言う話までは今までしていたのだから。

そして書き記した紙を特殊な薬剤に放り込んで溶かし、別のことを書いたメモ用紙を茶を沸かす為の火の中に放り込んで証拠を隠蔽しておく。これでもし誰かが魔法か何かで紙を復元したとしても、ただのメモが蘇るだろう。

(これで二人も僕がやってる対策が、大公への対策だと理解したはずだ。既に送り出してる部隊に気が付いたとしても、その辺りの工作だと納得してくれるだろう)

今回の都市攻略戦では、敗残兵と共に雪崩込んで勝利したことになる。

実際には既に街中に工作班を忍び込ませていたし、周辺の情報も紅梓たち経由でしっていたのだ。それらで稼いだ時間と兵士の余力を、既に白紗方面に派遣して道中の調査に当てている。

もし暗殺者の類が居れば見逃さないし、白紗攻めでも同様の工作を行うつもりであった。ただし……それは白紗を落す時に使うのでは

ない。白紗を拠点に大公が速攻を掛けようとした時に、先に潜んだこちらが向こうの工作兵を捕捉する為だ。

そして稼いだ時間で負傷兵を搬送する為と称し、銅張り鉄甲馬車を組み立てる準備を始め、最終戦に備える。

謀略における巴戦

● 軍の再編成に時間を掛けているフリをして、白紗奪還戦から続く抗争への備えをしておく。

大公は馬鹿ではないしむしろ恐ろしい程に悪賢いので、さすがに軍を率いて皆殺しと言う事は狙わないだろう。動員された一般兵はともかく、諸将が『奴らは裏切った、皆殺しにしろ』なんて命令を素直に聞くとは思えないからだ。

しかし勝手に想像するのはいかにもマズイ。よく策士がパワーで殴り倒されて酷い目に合うのは、相手が暴力に訴えて来ないと過信しているからだ。それに奪還戦自体は行うので、情報収集や潜入工作に意味はあるしね。

（大公だけならともかく、何人か居る息子とか側近とかは注意しないとなあ）

これらの配置で重要なのは、絶対多数の心理だろう。

大公はともかく側近や直属の將軍たちはどうだろうか？ 大公が公爵たちだけで良いと言っても、自分が成り上がるために僕ら害してしまうかもしれない。そうでなくとも攻撃し易い状況だったら思わずやりかねないのだ。同じことが遊牧民にも言える。

友人である君を信頼している、疑わしくとも最後まで信じる……なんて綺麗ごとを許されるのは宮廷で握手しあっている将官たちだけだろう。上で差配する僕らが無防備でいてはならないのだ。遊牧民だつての前線部隊を構成する部族の統領が『チャンスだから』と勝手に攻め入る可能性だつてゼロでは無いのだから。

（地形情報を見極めてまずは白紗戦の対策。次に殲滅し易い地形を避けて布陣つてとこかな。それが終われば白紗内部の構造だ）

ここでの判断ポイントは遊牧民対策である。

中央の国軍に『なんでそんな場所に布陣したのだ？』と問われておかしい場所ではいけない。別にこちらから軍隊を率いて戦う必要はないのだし、向こうの奇襲を避けられる場所ならば何処でも良い。そ

の上で理由としては『遊牧民が動いたら即座に動ける体勢』を維持しているのだと思える場所が良いだろう。

大多数が広く浅く駐留する場所と、それとは別に遊牧民に対して備えている後ろ備え。そんな構図が当て嵌る場所でありさえすれば良かった。

（城の方で怪しいのは王族専用の通路だったエリアかな。『貴人はここを通るのです』と昔ながらの慣習で言われたら断るのも変だし。警備もし易いつて事は、兵を伏せて置けるってことでもあるもんね）

西領は元は夏朝が成立する前は独立王国だったので、色々風習がある。

現時点で怪しいと睨んでいるのは、キリーが教えてくれた王族時代の通路だ。居住区格から他人の目に触れずに通る場所と、民衆を鼓舞するために手を振りながら通る場所があるとのこと。周辺は兵と堀に囲まれて安全ということだが、門扉を閉ざされたら孤立してしまう。あるいは矢で打ち殺すのもありだろう。

この通路は奥まった場所にはあるが、城の防衛上あまり意味がないので奪還戦で壊れている可能性は低い。何気なく観光を兼ねた案内されて、閉じ込められて密殺というのが可能性としてはあり得た。

（ここを使う場合は門を閉められないように気を付けるか、周辺に誰か潜んでもらうしか手が無いな。暗殺するだけなら謁見の間だろうがどこだろうが出来るし、ホント頭が痛い）

大公がその気になったら暗殺できる場所はあまりにも多い。

ゆえにその都度のタイミングで気を付けるか、あるいはこうやって危険地帯というべき場所を先に潰すしかないのだ。もちろん先に工作するわけではなく、『工作しようとする何者か』を見張るのが重要だ。

迂闊に何かするとバレる可能性が高いので、『大公が何処を有力ポイントにしているか』を見定めて重点的に対処するしかない。直前まで魔族が奪っている事もあり、こちらが潜入する痕跡は消せるだろうし、大公も利用するならば確認くらいはさせるはずだった。

そういった事前情報を掴みつつ、稼いだ時間を有効利用。

国境沿いで草刈りすること自体はだいぶ前から自然にやらせているので、工作のお時間と言う訳だ。こればかりは剛盾がないのが残念だ。

そういう意味で規格化がここでも生きて来ることになる。予めどんな具合になるのか判って居るし、中には別の使い道をして置いて再利用可能な物もあった。

「馬車を作る準備が出来ました。これ……本当に組み上がるんですか？」

「うん。十台分の木材があると思うけど、肝心のパーツが足りてないから五・六台ほど完成させて置いて。まずはその半分ほどで怪我人を後方基地のある島まで輸送するから」

規格化の良い所は設計通りなら何処でだろうと組み上げられること。

アンデッド浄化作戦でも利用した大型馬車による兵員輸送車両。あれを組みあげて後方基地である島まで輸送する。要するにちよつとした病院車両であり、白紗での戦いでも同行させる。もし大公が何処かに閉じ込めそうな時は、こいつを何台か突っ込ませて最低限の護衛を確保する予定だった。

もちろん使い道は一つではなく、東領の公爵さま辺りを護衛するのにも使えるだろう。できれば皇太子殿下を守らなきゃならないようなピンチにならなければ良いのだが。

(問題は銅張り鉄鋼馬車かな。銅板はこつちでも作らせることができただけど……鋼のパーツがなければ本体はともかく各部が持たないんだよな……)

大型化と規格化でその辺の馬車どころではない本隊はできた。

これに銅板を張りつけければちよつとした装甲車にはなる。問題なのはそんな重量物を載せて車軸やら何やらが保つ訳はない。車輪だけなら太い物を作らせれば問題ないが、負荷が適当に掛かったところへし折れる姿が目に見えよう。

そしてこの状況を何とかするためにこそ、剛盾に鋼の車軸やら各部

パーツを製造してもらおうために本土へ帰還してもらったのだ。完成し次第に水棲種族の特急便で送ってもらおう手はずになっていた。

（海流を無視して泳いで送る手法は普通なら使えない。……でも今回は上陸艇で試してるから大丈夫だ。人間や完成品の大型馬車ならまだしも、各部のパーツだけならボートで輸送してもらえろ）

ボートを引いたり押ししたりして、緩い海流や風のない場所をショートカット。

中型の高速船に載せて輸送してもらえば何とか間に合うはずである。日程的にはそろそろ届くはずなので、大型馬車を何台か組み上げずに置いているのだ。

これが数台だけでも完成して居たら、最悪の場合だが白紗を奪還後に本城の入り口をこれで封鎖ということになるだろう。そして兵員輸送車両数台に搭乗した十数名だけで、数十名は居るであろう大公の私兵と戦う事になる。

（そういう意味でも、白紗の情報が欲しいんだよな。魔力は無駄遣いできないからさ）

もし精鋭十数名だけで数十名を討ち取る場合、部屋を封鎖するのはこちらの作業だ。

大公が封鎖する予定の区画を『こちらの方が人数が多い時点』で封鎖し、相手には全力を出させずに倒さねばならない。そしてそんな事が出来るとしたら、僕が状態を保持して少しでも長く扉を固定しなければならぬだろう。戦闘には殆ど役に立たない保全能力ではあるが、閉じている状態を保つだけなら一点集中で何とかできると思う。

だがそれには正確な情報が必要であり、魔力を注ぎ込む場所を絞らないとならないのだ。その意味でも事前に確認できる情報は重要だった。キリー・グラントは不遇だったこともあり、それほど白紗の情報知らないそうだしね。

（後はこっち側の思惑がバレてないかどうかが重要な。紅家でも中央集権の話さえ喋ってないようだし、僕も双葉にすら話してはいない。……あとは緑青貴さまがウツカリお酒呑んで口にしてなければ大丈夫か。でも油断は禁物だな）

遊牧民対策の話ですら必要最低限にしか話してはいない。

大公が中央集権を狙って居るだろうという予想はもう少し狭く、彼が狙っているであろう暗殺への暗殺返しで対処する事は匂わせただけで口にもしてない。だがこうしたことは、ふとした拍子で漏れる物だ。場合によっては直感とか情報整理しただけで見えて来る時もある。

それこそ大公が中央集権化を狙って居る事だって、僕は前世の知識込みで判別した。東領の緑家に関してはほぼ政争の歴史だけで判定している。大公が気がついて居る可能性はゼロではないだろう。

(もし大公が気が付いたとして、どこで再介入を掛けて来るかな？)

遊牧民対策はスルーして良いはずだ。だから気が付いたとしても無視して、こつちを油断させる)

僕が暗殺への流れを利用して、暗殺返しを考えたように向こうも同じ手を考えたなら？

遊牧民へ食糧を供給し戦いを不要とすることは止めても意味がない。これに関しては西側国境の草木を刈ったり、こちらが備えることで遊牧民の中で尻の軽い連中がやって来ない対策を行っているのも同様だ。南蠻砂や白紗の奪還に関しても同様だろう。邪魔する理由がないとも言える。

大公からしてみれば遊牧民や魔族対策と言うのは、自分の為にもなるから放置しても問題ない。対策を対策ではなく密通の証拠だと言いたい張れば良いのだから。

(確証なんか残してないし、思考誘導もやった。でも、そういうのは必要ないんだ。『自分が考えることは、相手もやってるはず』つてのは基本だからさ……。考える。もし大公が気が付いたら……。そう思っていたら、何を狙ってくる？ 何を見張るなり始末すれば良い？)

基本的に可能性が多過ぎて特定のしようなが無いように見える。

しかし似たような状況で白紗近辺での野営地はある程度だが絞る事が出来た。遊牧民対策と言うキーさえ思いつけば、同じことを大公だつて予想はしていただろう。何らかのファクターがあれば彼のキーとなる思考をトレースできるかもしれない。大公だつて無限に

ある可能性を一つずつ検証なんかしないはずだ。

例えば人物。最有力の東領関係者だと緑家や青悟あたりを張って居れば流れが掴めるかもしれない。その流れで南領だと僕と緋家……か、アンデッド浄化作戦で相当に名前を上げたそうだからね。最後にキリーや名前は聞かなかつたけど将軍になつた大公の息子たちというところか。

（考えたくないけど何人か重点的に見張る対象に僕も含まれていると見るべきかな？　僕は弱いから単独行動なんかしないけど、見張るだけなら簡単だ。後は機会を見て双葉を攫ってしまえば脅す事だつて可能だ。キリーあたりなら同じような手段が使えるかもしれない）

以前に僕は自己評価が低いと言われたことがある。もつと自信を持ってとも。

もし大公が重要人物とは言わずとも、最終リストに選んでいたらどうだろうか？　緑青貴さまと特定したかどうかは別として、緑家の使者と説得したのは確かだ。元から青悟と親しいし、キリーが西領の間だと知つても別段に仲が悪くなつたわけでもない。こう考えてみると確かにリスト入りしてもおかしくはないだろう。

こう考えてみると、色々判つてくることがあつた。例えばキリーの部下が掴まって情報を抜き取られた事。それほど権限の高くない部下だつたらしいけれど、その時に僕の情報やキリーの人間関係も聞いていた可能性はある。一度の情報では大公ほどの人物が注目する可能性は低くても、何度も目にすればリストの上に来てもおかしくはないだろう。

（まずやるべきは絶対に双葉が攫われないようにすること。双葉が無事なら僕は他の国でやり直しても良い。……その上でキリーが僕にとっての双葉みたいな子の人質に取られて、情報を何もかも渡してる可能性は考慮しないと駄目だよな）

そこまで考えて、注目されていた場合のことを検算していった。

遊牧民関連は、前述の利益共有で無視しても良い。次に、暗殺返しは口に出してはない。これに関しては向こうが『当然、暗殺して来る』と思うかどうかの問題だ。白紗への工作員潜入に関しては、指示して

向かわせた所までは気が付かれる可能性はある。大公側の工作員が何をするか、見張ることが重要だとまでは気が付かれないだろう。

問題なのは兵員輸送車両と銅張り鉄甲馬車だろう。前者は既に完成させているし、後方へ送り出すために待機している状態だ。後者はまだ完成しても居ないので、銅板さえ盾として使って見せれば誤魔化すことはできるだろう。

(ということとは大公が考えている僕の作戦は館への強襲戦かな？ 兵員輸送車両で運べるだけの人数を送り込む……と考えてるのかも)

本命を見抜かれているわけではないが、次善の策を予想されているかもしれない。

となると大公が作戦を実行するにあたり、兵員輸送車両を燃やしてくるとかは考えられた。あるいは乗り込む兵士たちに毒なり動けなくなる薬でも良いだろう。それだけで強襲作戦は失敗するのだから。

こう考えてみると、大公の掌で踊るところだったのが判る。そして緑家が僕に何をさせたいのか、どうして悌さまでも侯爵さんでもなく、僕に接触して来たかも……だ。こうなるようにあえて誘導して、ワザと使者を送ったのではないだろうか？

(となると今のところ成功の確率が高いのは……大化の改新でもやるしかないのかな)

残された手段であり、不確実に見えて一番可能性の高い手段。

それは大公を僕とその場にいる上流階級数名で片を付けるといふ暗殺劇だ。こうなると紅包さまが負傷したことが惜しまれるが、逆に言えば可能性が低くなつたと向こうが油断している可能性がある。

仕方なく僕も覚悟を決めると、魔族との最終戦を終えた後の抗争に向けて段取りを整え直すことにした。

そして最終局面へ

●
暗殺というものは殺すだけなら、意外と成功し易いのを知っているだろうか？

ならば何故やる者が少ないかという大きな問題が二つある。第一に影武者ではなく本人を確実に暗殺する必要がある、第二に実行犯と黒幕が生きのびる必要があるからだ。写真も無い時代に顔見知りでもない暗殺者が間違える可能性は大きいし、知人が実行する場合は当人や派閥の者がまとめて処刑されてしまう。

だからこそ実行犯は間違えることなく対象を暗殺した後、捕まることなく逃げねばならない。

「ほ、本当にそんなことが可能なのか？」

「可能です。魔族と遊牧民対策を兼ねて当日はこんな陣形を築きま
す。まず包囲網の一部に穴を開けてそれを表向きには隠し……」

白紗奪還戦を口にしながら、書面で大公への対策を会議。

言葉とは裏腹に『大化の改新』をモデルにした暗殺計画を簡単に記していく。他にも歴史的な暗殺は数ある中で、この話を流用したのは状況が似ているからだ。日本の歴史の中で大きな転換期の一つである大化の改新。諸説はあるのだが……これは連合王朝から中央集権に移る過渡期の事件だと思えば判り易い。

古代の日本では大王家と四つの王家があり、筆頭である物部氏や大王家の有力な分家である聖徳太子の上宮王家は既に滅びている。ここで新しい筆頭である蘇我氏を滅ぼすことで中央集権が完成する。今回は逆で、中央集権を企む大公を僕ら諸侯が暗殺するのだが。

「つまり魔族に『自分だけは気が付いた穴』だと思わせて、そこを突いて油断した所を狙うと」

「むむむ……」

「古典的なカウンターです。陳腐ですがそれだけに有効かと」

魔族に関してはもう包囲して徐々に削るくらいしかすること無いので簡単なものだ。

しかし複雑極まる宮廷事情の方は面倒くさい。緋二広は専門外なので軍事面以外はさっさと放棄したが、紅家の将は話について来ている。困難な状況で大公を狙うリスクを訴えたいようだが、大公が中央集権を実行する場合は確実に侯爵以上の貴族は生き残れないだろう。暗殺の必要性を認めたようだった。

そして大公が中央集権を狙って強硬策に走るとするのは、僕が妄想を抱いているという訳ではない。権力に執着している姿勢は以前からであるし、僕と同じ結論を東領の緑家も出しているからだ。

(思えば緑青貴さまが直接明言したのが大きいよな。あれで悋さま達も腹を括ったし。後はやり切るだけだ)

大化の改新とはある種の意味で、有力者が示し合わせた暗殺手段の正当化である。

暗殺で一番難しいとされる犯人の逃亡・生存を考慮しなくても良くなるのが大きい。次に護衛も制限されるのが当然の状況であり、本人が参加しないと政治問題が起きるタイミングで暗殺を行うから後腐れがない。

この状況を作るのに一番厄介な、誰が首謀者で誰が全責任を負うのかが明確になったという点で緑家の決断は大きかった。あれがなければみんな決断で来たか怪しい。

●
そして白紗攻めが始まり、最低限の確認事項をこの間にやっておく。

緑家の公爵さまや東領の諸候は当然ながら、陸路で駆けつけた南領の諸上層部も合流。相変わらずやる気のない北領が西群鎮台で残敵掃討を行っていると聞いた時は苦笑すらしめたものだ。

公称では夏朝総勢五万というが、海路組を合わせてもその半分居るかどうかどうかであった。だが魔族の生き残りは五千どころか四千を切っている。被害さえ気にしなければまず勝てるだろう。

「既に書面で報告いたしました。遊牧民対策で布陣を終えております。また僭越ながら、現地の状況も確認しております。戦後に何らかの支援が必要かと」

「その辺りは大公殿が判断されるであろうよ。ご苦勞であった」

まずは悌さまに報告書を渡し、それを侯爵さんに送っておく。

もちろんここで暗号なんてやり取りはしない。軽く視線を合わせて意向が変わってないことを確かめただけだ。侯爵さんも傍目には勞う言葉に頷いたようだが、非常手段を行う事に覚悟を決めたのだと思われる。普段の温厚な様子とは違い、厳しい顔で頷いていた。

真面目な話をする、ワザワザここで伝えたり聞いたりしなくても、紅包さま経由で幾らでも直の話ができるからだ。詳しい確認をするとしても、親子である紅包さまの方がよほど深い話ができるだろう。

「率直に聞く。勝てると思うか？」

「総合すればこちらの方が数は多いですから。加えて言う、城というものは防御機能こそ高いですが、逆に言えば分断され易いという欠点を備えていますので」

悌さまの質問へ僕は即返答した。

ちなみにこれは二広や紅家の将とやっていた、文面での秘密会話ほどではないが、二重の意味を持っている。判り易く言う、と魔族・遊牧民という単語を、大公とその勢力と言い換えれば意外と通るかもしれない。

要するに、大公が地元ゆえに諸侯の数倍の護衛を引き連れ、居城に無数の兵を置いたとしても……。こちらの諸侯が引き連れた護衛の総数の方が多いのである。朝議に兵を引き連れたまま参加できない以上は、城と言う構造に分断される訳だ。

「おそらくは戦い始めて幾らもしないうちに、兵力分散に気が付いて脱出を敢行するでしょう。追撃する準備は整えています」

「なるほどな。国境沿いに兵を伏せたのか」

この作戦も既に伝えた内容なので繰り返す意味はない。

大公の使う脱出経路をこちらのメンバーが確認し、暗殺時にはそこを通らせないよう、に待機させるという意味になる。これに関しては白紗に潜入させたが、特に工作させずに見守ってもらった甲斐があるという物だ。

大公の手の者が入り込み、イザと言う時に使用できるか確かめていたそうである。

(まあ非常口が一つとは思えないし、この通路って大公自身が暗殺に使う場合に備えて確認させたんだろうな)

当然の事ながら大公が城そのものから脱出するための通路は見つかって居ない。

何処かの部屋から城の外に落ちのびる通路など調べようがないし、大公の手の者に教える筈もないだろう。諸侯がまったく手を貸さずに独力で攻略する必要があれば別だが、今回判つたのはそういう場所では無かった。そうそう都合が良くは進まないという事だろう。

大公の手勢が確認したのは、謁見の間の周辺に兵を伏せたり別の場所に移動するための通路である。こちらの暗殺に備えつつ、同時に機会があれば暗殺用に兵を伏せる場所と思われた。

「イザとなれば室に優れた部隊で攻め入る必要があるが、二広は大丈夫として、お前のところの豪傑は？」

「大通連は残念ながら負傷している上に、目立つので警戒されているでしょう。最悪、僕が突入部隊の指揮を取り二広殿に戦っていただくことになるかと」

「お前がか？」
豪傑三人のうち飛び道具の得意な大通連は、だからこそ連れていけない。

タフだから怪我をしても実務に耐えられる緋二広は、能力面が偏るからこそ遅滞戦闘向きで速攻は期待できない。もつとも強くて確実な紅包さまが怪我して居て家臣たちが過保護というのが最大の問題だった。二人とも無理して連れていけなくもないが、どちらかといえれば『封じられることで、大公に安心させる為の見せ札』にしかならないだろう。

だがここで僕が居る意味が出て来る。記憶力が保持され前世の記憶もあるので、僕ならその場で『白紙の訴状』で罪を問うことも不可能ではない。まさしく大化の改新と言う訳だ。鎌足を気取れるような才能があるかと聞かれたら自身はないけどね。

「いずれにせよ遊牧民に対する備えもあります。時間との勝負ともあれば多少の無理をせざるを得ないでしょう。場合によつては紅包さまも戦線に復帰されるでしょうし」

「委細はすべてそなたに任せる。これは私だけの言葉ではないぞ」「御意に」

どのみちここで動かねば後はない。

そのまま僕らを遊牧民なり魔族への密通疑惑で捉え、対策を対策ではなく協力だったと行って処刑する。もし白紗でやらなくとも夏都でやるだろう。ここまでなら大公の権力の方が遥か上であり、対抗できる東領の公爵さまをその場で拘束すれば良いのだから簡単だ。

僕もここまで果断に動くつもりはなかった。場合によつては夏都で仕掛ける手もあったからだ。しかし大公の工作員に兵員輸送車両を燃やされたり、事故に見せかけて壊されて定数を減らされてしまった。向こうがやる気ならば応じるまでだ。

そして大公に例えた魔族が、僕らの作戦通りに動き始めたのは会見の暫く後であった。

戦争は終りぬ

● 全軍の到着を待つて攻撃開始。白紗奪還戦が始まった。

戦況とダメージ交換レートはあまりよろしくない。当たり前だが魔物の方が圧倒的に強いからだ。相手が籠っている場所へ突入すればこうなろう。

出撃前に八千居た海路側の兵は現在その半分である。もちろん負傷兵はサツサと療養に下げたからではあるが、散々手を尽くして有利だったのにこの有様。他の部隊がどうなるかは想像に難くはない。

「国軍……下がりませんね」

「攻め立てたまま疲弊させようというのだろう。どちらを苦しませる為か知らぬが」

夏朝総軍二万予は激しく攻め立てて下がっては来ない。

戦闘力の高い魔物に対して持久戦ではなく一步も引かないのは愚策な気もするのだが……。紅家の将から見ても妥当な戦術ではあるようだ。後で聞くと強力な魔族に率いられた魔物は集団行動が可能なので、個の強さを活かした少数突撃で突き抜けて来る時があるらしい。そのまま城の内外で連携し始めると厄介だとのこと。

前世の歴史で近いのは三国志で呂布が採用しなかったとされる戦術だろうか。これは城を使って相手を受け止めて、外から強力な騎兵がひっかきまわす掎角の計というものだ。鹿を捕まえるのに角を持って足を払うから付けた名前らしいが、確かに今の僕らを苦しめるには最適だろう。

「いずれにせよ、西領勢まで出て居ますのでこちらも下がるわけにはいきませんね。このままでは侯爵さまや悌さまも危険になってしまいます」

「うむ。こちらからも少し回すとしよう。包囲網に穴を空けてしまいうえ、本来ならばせぬ事だが……」

大公はここに来て他領の兵を使い潰そうとする行為をやめた。

手元の西領兵や協力する中央の兵も含めて前面に出し、本陣もそれ

なりの位置へ前進。全軍に攻撃させ続けられれば、おのずと他領の兵も消耗するし、批判を受けずに戦えるという訳だ。持久戦も打撃戦も危険度は変わらないということであれば、極端な強攻だけは避けてこのままジリジリと敵味方を削ろうとするつもりに違いない。諸侯も遊牧民の危険性を聞いており、仕方ないと判断するのだから。

そして国軍全体が攻勢に出て下がらないのであれば、別動隊である我々が連動しない訳にはいかない。南領の陸路方面は人数が少ない事もあり、危険性も増しているのが何より大きい理由であった。

「急な陣形変更は混乱の元だ。前衛は固定し、後衛を少しずつ東側に寄せて援護するでしょう。どこが危ういのか銀殿ならば承知であろう?」

「問題になるのは昼よりも夜から朝にかけて。相対的に手薄になる西側ですね。待機している遊撃隊に伝令を出します。本来であれば、こちらを手当に使うべきなのでしょうけどね」

フリーに投入する為の予備隊を侯爵さんや悌さまの援護に投入すべきだが、今回は出番がある。

だが手持ちの部隊から割いて移動させると時間が掛かる上、まんべんなく薄くなるので何処に突撃して来るか判らない。かといって放置すると悌さま達が危なくなるので、どちらにしても動くべきだ。それに陸路組がうちの直ぐ東に布陣している事を考えると、大公も僕の報告くらいは読んでいるらしい。

そう。遊撃隊を温存するのは、まさに手薄になる場所を魔族が急襲し、突破しようとするところを横から追撃する為なのだから。

「魔族は夜目が効きますし、中には空から見ている者も居るかもしれませんが。こちらが陣容を変更したのに何処かで気が付くでしょう。中央の兵は東からきておりますし、薄い部分の連結を保とうとするのは不自然ではないと思います」

「追い出せれば十分と言えなくもない。それは向こうも知っているだろうが……」

「だが大公の事だ。追撃戦で全滅させられなかったら、不満を申す気であろうな」

真面目な話、僕ら南領勢からすると魔族を殲滅する必要はない。

国軍からみても本来、遊牧民との戦いを控えていると考えれば無理する必要は無いと考える筈だ。しかし今後魔族の脅威を感じており、かつ、僕らの失敗を探している大公からすればソレは不手際だと映るだろう。他の貴族は流動的なので平均的であるが……大公はここで少し失敗をした。どうせ最後の戦いであると無理に戦い続けているのだ。

そこで生じる反感は名目上の司令官である皇太子殿下に押し付けて、何処かで処刑するつもりだから気にもしていないのだと思われる。実際に大公が中央集権を確定したら、諸侯の不満は仕方なくとはいえそこに落ち着くのだから間違っではない。

(だけど僕らにとっては都合だ。大公から見ればベストであっても、ここはベターで流すべきだった)

良くある話だがベストを追い求めることは理念でしかない。

大公からみるとやらないのが嘘なくらいの選択かもしれないが、諸侯からみれば無理に攻める必要はなかったのだ。強襲こそしてないものの戦い続けては被害が甚大になるし、こちらの方が五倍以上なのだから無理せず持久戦で魔族の強さを封じ込めるべきだと思うだろう。

とはいえ遊牧民の件と、その後の政変を考えれば大公からすればベスト。暗殺を行い、カウンタークーデターで政権を取り換えず僕らからみれば悪手にしか写らなかった。

●
そしてその日の夜は特に何もなく、三日後に変化が訪れた。

戦闘そのものは昼のみながら交代で延々と戦い続けている。こちらが夜を徹して篝火を焚き牽制と警戒を続けていたのだが、三日も変化が無ければ段々と弛緩する。しかも昼間は戦っているので猶更であらう。

そしてこちらが馴れた頃に、戦力を集中して西側を突破して来たのである。

「夜襲です！ しかも……殿は巨人族とのこと!!」

「まだ残っておったのか。おのれ、この機会を狙っておったな！」
(演技が上手いな。知ってたくせに)

先行して潜り込んでいる者たちから、最後の巨人族が残っている事だけは知っていた。

ただし一族が全滅してからはやる気を持っておらず、魔王軍の宿老としてご意見番の様な事だけをしていたらしい。しかし白紗での戦いがあと幾らも保たぬと判って打って出る事にしたと思われる。

そしてこのことが敵の判断を如実に表していた。おそらくは動きの鈍い巨人族が最後の御奉公とばかりに足止め、残りは一部を残して全力で脱出するものと思われたのだ。

「即座に遊撃隊を動かせ！」

「既に大通連殿を先頭に追いかけておられます！ 許可は後で求めると……」

「んもー！ あいつはこんな時にまで！ 伝令には死ぬなどだけ伝えておいて！」

まあこれも判って居たことだと諦める事にした。

三人の豪傑の中で遠距離戦が得意であるがゆえに一番負傷の少なかったあの男。あいつが一番暗殺向きではあるのだが、性格的にはまったく向いていない。ここでカードを切ってみせ、こちらの手札が減ったのだと大公に思わせておくことにした。

それに巨人族は最後の一体とは言え強敵には違いない。こちらが全力を出したという証拠に大通連が相手をして、残りの者で追撃することに意味はあるだろう。損害だってそれが一番少なくなるだろうしね。

「将軍は残って前衛を取りまとめ侯爵さまたちとの合流をお願いします。きますか？ 僕と二広は後陣を連れて遊撃隊の元に向かいます」

「任せて置け！ 隠れている者がおつても行かせはせんよ！」

何度も言っているが編成なんかしている余裕はない。

全力出撃とも行かないので、混乱した前衛の取りまとめに紅家の将を残しておく。そもそも彼は侯爵さんの一族だし(叔父の中で一番若い人)、危険な事はさせられないしね。

そして後陣を構成する部隊に声をかけ僕が即座に動ける者を直卒、二広が残りをまとめながら追撃戦に移る。ここからは時間との勝負であろう。

「ねえねえ双羽。馬車はいいの？」

「残念ながら混乱してる状況で馬は駄目かな？ 使える馬は『騎兵』が抑えちやってるしね」

面倒くさがりな双葉が尋ねるが諦めておくことにする。

おそらくは大公の手の者が適当な理由で破壊するなり徴発するだろう。言葉通り一度混乱すると馬は怯えて戦場に連れ出せないのもある。即座に落ち着ける馬は……銅張り鉄甲馬車の為に白昼砂に置いて来たのだ。そもそも海路側で抑えられた馬なんてたかが知れるので仕方がない。

いずれにせよこれで僕の手持ちの手札は、『偶然』にも失われたことになる。

（僕は普通に判断して普通に守っていた。ソレを『偶然』を利用して大公が強制的に排除する。向こうからすれば努力の結果で勝ち上がったことになる。……たぶん行けると思うんだよな）

南領の手勢が護衛を可能な限り連れて行っても二十名くらい。

西領の主である大公の護衛がその場に百名は居るとして、まあ普通に勝つのは無理だ。ただし僕らが暗殺を行うのは謁見の間。大公の護衛は分散している。もちろん普通の兵はもつといえるが、どう考えても謁見の間には連れては入れないから問題はない。そして何より、東領やその協力者たちの護衛を含めれば問題なく大公だけは暗殺できる。

後は……地力の勝負だ！

第九部

訴状のイニシアティブ

●
昨晚、逃走する魔族の追撃戦を行った。

少し考えて欲しいのだが、魔族は愚かだろうか？ そんなことはない。もし頭が悪いだけの連中ならば人間はここまで苦勞して居ないだろう。

魔族は四千で白紗に立て籠り、無理だと判った段階で逃走を計画していたはずだ。殿に最後の巨人族が残った他、制御し難い魔獣を放し飼いにして混乱を謀ってさえいた。

「壊滅はさせたが流石に全滅は無理だったか」

「それは仕方ありません。重要なのは知恵ある魔族をどれだけ討ち取れたかです。大公閣下におかれては何をやっても評価していただけないでしょうしね」

緋二広は残念そうだが、これ以上は贅沢と言う物だろう。

少なくとも千以上が突撃しながら逃走し、こちらも千ちよつとの追撃部隊。後続の出足は鈍くなっているので、自分たちより強い相手を被害を少なくして討ち取るのが精々であった。

その上で問題なのは様々な儀式魔法を使える者や、指導者タイプの魔族など頭の良い者をどれだけ討ち取れたかである。突撃するしか能の無い下っ端は極論どれだけ居ても問題ないのだ。

「やはり……避けられんか」

「賽は投げられました。後は人事を尽くして天命を待つだけです」

調べてみると案の定だった。

放置された魔獣が混乱を引き起こし、南領の後陣や他の追撃隊の近くやらであちこちで暴れたそう。国軍はそれらを圧迫して南領の兵にぶつけるように追い込み、そのどきどきで兵員輸送車両や投石器の一部が破壊されてしまっている。全てではないが定数が無ければ役には立つまい。

大公からすれば転ばぬ先の杖なのであろうが、我々からすれば迷惑以上のものではない。加えて自分たちがやった混乱の助長も、全てこちらの不手際にするつもりであろう。

（要するに話の見方、情報の扱い方と切り口なんだろうな。……：そういえば青悟も交渉ではどっちが先に言ったかどうかで変わるとかいつてたな）

面倒くさい話で出来るだけ関わりたくない話だが……。

この手の問題は切り出し方と順番次第なのだそう。例えばズタバロな西領の援助一つにとつても、大公がお願いするのかそれとも命じるのかで意味が変わって来る。また同じ援助するにしても、西領から切り出すのと周囲が言い出すのでは大きく違う。

そして大公が目論んでいる中央集権の話もそう。追い詰められて『奴こそ邪悪』と言い出しても苦し紛れにしかならない。

（ということは、僕の方が先に発言しないといけないんだよな。……：上位者相手に？）

こちらから声をかけるとか論外で、やったら処刑されても文句を言えない。

では道中でいきなり？ もちろんそんなのは警護役に止められて終わりである。やはり朝議の場で行う必要があるだろう。その上で途中で僕が処刑されずに、大公の目の前とは言わずとも護衛が間に合わない程度の近くまで寄る必要があるだろう。

要するにまだ利用価値があると思わせておく必要がある。もし僕が強襲を『今回は諦める』としたら、命乞いに見えるような政策を提言してもおかしくはないのだし。

「銀さま。白南終公子の先触れがお見えになられております」

「……：本人が来たら陣幕に通すと言っておいて。こっちの様子でも見に来たんじゃないかな」

考え事をしている間に伝令がやって来たが、いかにも怪しい。

これまで幾らでもチャンスがあったのに、以前の頻繁さが嘘のように訪ねて来なかった。これらを総合するとキリーの身近な人間が捕らわれているのは間違いがないだろう。情報を聞いたら渡すように

強要されているかスパイでも護衛として付けられえ居るのだと思われた。

そして今回、急に訪れたことだが……。おそらくは僕の様子はどうなのかを見て来いと言われたのだと思う。

「聞いている通り後で公子がお見えになるそうです。言うまでもありませんが、失礼のないようにしていただければ」

「……心得た」

「私は軍の取りまとめに残っておこう」

いつも通りならば言うはずのない事を口にしてみた。

それだけで詳細はともかく、何かあるくらいは話は通じた模様である。もし誰かが今様子を伺っていたとしても問題なく対応できるだろう。

少々露骨だが、こちらが工作しきれない内に確認する辺りは目の付け所が良い。ここは今の時間で間に合う物、これまでに集めた情報で賄える物を用意するしかないかな。

「これはこれは白南終公子に置かれては御機嫌麗しく」

「……麗しいも何もない。やっと白紗を取り戻せたが魔族に逃げられたからな。ところでその書類は何だ？」

今まで丁寧語など水棲種族の前でしか使った事はないが、キリーはスルーした。

その上で魔族に逃げられた件や不機嫌だと口にしたことは、一定の含みを伺わせる。そして話す前に一拍置いて机の上に広げていた巻物について尋ねるが、彼自身ではなく護衛の一人の視線が動いて話を出したのは、そういう事だろう。

その質問に答えるべく、僕は書きかけの巻物を手にして恭しく差し出して見せる。

「今回の戦闘報告と共に、南蜃砂ほかで確認した西領の被害報告です。かなりの被害でありましたでしょう？ 各領からそれなりの支援物資を送った方が良いのではないかと思います」

「殊勝な事だ。しかしこの程度の報告にまで同じ文面を保存している

とは、相変わらずマメだな」

「軍の被害報告や会計報告で、万が一にも報告に間違いがあつてはなりませんからね」

内容はこの間の会見で悌さまの前で口にした、表向きの言葉の内容である。

被害甚大な西領を支援して、早い段階で国益になるように復帰させるべき。そのような内容を奏上するべきだと言う話だ。この巻物自体が何通の予備があつて誰かに送っているとか、以前の資料を索引として利用する棟がしやすいように、冒頭に数字が振つてある。数字の辺りを護衛に見せながらしゃべっているのは……。

おそらく護衛のフリをしたスパイに会計監査では横領の罪を問えないと教えつつ、その実、僕にこいつがスパイで間違いないと教えてくれているのだろう。

（本当はキリーが大切にしている人を教えてくれたら、紅梓たちを潜ませているから救出に行けると伝えたいんだけどな。流星にこの場じゃ思いつけないや。大公の気を引く文章だけで精一杯だ）

さすがに家族を人質にとるのは風聞が悪いし、乳母か乳兄弟の類が掴まっているのだとは思う。

しかし確実に救出できるとは限らず、相手が誰かという確証も無ければ勝手な事は出来ない。せいぜいがこの二人を紅梓あたりが偶然見かけて追つてくれれば別だが、彼女の役目はどっちかといえば白紗の本城に潜つたまま罫の類を探す事なので贅沢は言えなかった。

要するにこの場では迂闊に声をかけることも出来ず、何が起きているか察していると態度で示す他はない。

「とりあえずコレを一通貫つていっても良いか？」

「構いませんが同じ文面の物で、乾いている物がありますか？」

「コレで良い。そちらも見せては貰うが偽装しているわけでもないのだろうしな」

通し番号が違うだけの、既に乾いている文章を念の為に渡す。

キリーは読んでいた文面を護衛に手渡すと広げさせ、自分が受け取った文章と比較して頷いていた。自分が読むと見せかけてスパイ

に確認させつつ、僕らがその様子で状況を再確認。

おそらくはコレでこちらが強襲を諦めて歩み寄った、少なくともこの場で仕切り直したようには見えるだろう。納得したのか、その後は特に何もなく引き上げていくようだった。

「大公閣下の周囲はお忙しいようだな。取り返したは良いが領地も相
当に荒れておるようだし」

「そうですね。僕の用意した文章を読んでもくださるとお役に立てると
思うのですが」

キリー達を見送った後も念の為に主題は伏せて会話。

といつても内容は渡した文章を信じるかとか、僕らが害意を待たなくなつたなどと思うかどうかではない。僕にあの文章の内容を発表させたいかと思うかどうかである。もちろん個別に合つてくれるとかはありえないし、お互いにとつてまるで意味がない。

重要なのはあの文章を巡り、『西領支援を誰が言い出すか』という流れである。

(どのみち僕を糾弾することで、間接的に南領の力を削ぐとする流れのはず。もちろん褒め称えて引き抜くというのも無くはないけど……。その辺りを兼ねて皆の前で吊るし上げようとするんじゃないかな)

大公個人は僕に関心などないだろう。部下に提案されて利用するだけだ。

中央集権が成って全てを手に入れた後ならば幾らでも命じる事ができるが、現段階では確定した未来じゃない。だから前述した『誰が言い出すか』という点で僕を利用した方が都合が良くなる。それこそ
圧迫面接でボロを出させるための位打ちを兼ねて実行できるからだ。
強襲計画の指揮官が僕だとしたら人質にとる事も可能だろう。

謁見の間の地図は手に入れてるが、臣下が近寄つて良いギリギリのラインに一人立たせて晒し者にする可能性は高かった。

(近い事は近い、けれど剣だと絶対に無理な間合い。……そこからなら行けるはずだ)

武装は持ち込めるかもしれないが、発表の場に呼ばれるなら少なく

とも僕からは確実に取り上げられるだろう。その上で周囲に用意した罠があるというのがポイントだ。昔から『これだけ接近できれば暗殺できるはず』と考えた先人は多い事だろうし、ソレに何度も対処してきたはずだ。大公が……正確にはその側近が罠の確認を怠っていないとは思えない。

そして、だからこそ僕にとってチャンスだと言えた。

最期の手札

● バタバタした数日が過ぎ去り、戦後処理の第一便を終えてから白紗入城。

全軍を外郭の城壁内に入れる訳にもいかないので、殆どの部隊は外で待機だ。重要人物が率いる手持ち部隊と、負傷者のみが都市の中で待機することになった。

地元出身の西領兵が治安担当を行い、三々五々に駆けずり回って居る。そんな中で南領勢の宿舎として充てられた屋敷で準備しているところだ。

「もう必要ないと思うけれど、例の車両は外の本陣へ。イザとなったら門の固定用に使うから」

「了解です。初めて見ましたが……その、あれならば非常時でも問題なく抑えられるかと。数日前に巨人族と相對した時にアレがあればと思いましたが」

泳ぎが苦手な剛盾はともかく、パーツは早便で届いたので銅張り鉄甲馬車が完成。

その威容を見た者の中で、純粋な兵士は無骨さを頼もしく思っているらしい。残念ながら巨人族と戦ったら棍棒で潰されたんじゃないかなと思う。緒戦でゴブリンの群れを無視して突入は出来たと思うけれどね。

そんな感じでこの数日で起きたことをまとめ、清書した書類を二枚。今回の暗殺用に用意した。一通はこの間キリーに見せた西領各地を確認して支援物資が必要だという提案書である。

「……ねえ。本当にそんな物で戦う気？」

「うん。軍師であり行政指導者というのが僕の立ち位置だから、剣よりもむしろこちらの方が僕の武器とか……。もう少し重量が欲しいかな。うん、これを付けるか」

清書して表装した提案書を高価な木で綴り完成。

嵌め込み式の木材は見た目より重かった。冗談で言ってるわけ

はなく、この巻物そのものが暗器というか仕込み武器なのである。表装自体も鋼糸を仕込んで補強してあるしね。木材の上下に鋼で出来た留め具を固定に使えば立派な鈍器になる。

子供のころに即席武器で遊んだことはないだろうか？ 傘を順手や逆手で構えて『●●流！』とか必殺技の名前を連呼し、あるいは縄跳びやボイスカウトで使うロープを鎖鎌の様に振り回すのだ。もっとも今回は里見八犬伝（映画版）の巻物アタックなのだが、後世にこの時代のゲームが出たら僕は巻物で戦う軍師キャラになってしまいかもしれない。

「宮廷では治療魔法の影響で打撃兵器は軽視されるから暗器にし易いんだよ。……って冗談冗談。メインは紅梓さんの持ち帰ってくれた情報だからね。これは念のため」

「それならいいけど」
鈍器は手に入り易い武装ながら、戦場はともかく宮廷では軽視され易い。

短剣での刺し傷は致命傷になるし出血でも死にかねないが、打撲は死ぬまでに時間が掛かるので、治療魔法の使い手が控えていると簡単に治せてしまう。だから大男でも居ない限りはそれほど警戒されない武器であるし、これは組み立て式なので宮中で待たされている間に再構築できるのがウリだった。

もっともその大男である大通連が目新しい武装を欲しがった時に、流星錘のバリエーションとして設計し、あいつの鎧に飾りとして持たせただけなんだけどね。何はともあれ念の為の武装であり、剣の一撃を止めることができれば十分と言えた。僕は口を開いて相手の言動にトドメを刺すのが仕事である。

「でも情報といっても隠し通路と罠の位置を特定しただけよ？ 気付かれないようにしろって話だったから、止め方とかまるで判んないし」

「それで十分だよ。周囲がその気になれば、この情報だけで大公を失脚させるには十分。もちろん最高権力者自身が弁護人だから、普通なら無理なんだけどね。……大公は自滅した」

紅梓はこの戦いの間、白紗に潜んで大公の工作員を付け回しただけだ。

それも気が付かれないことを前提に距離を空けたので、望遠鏡モドキを使っても精密な情報を調べるには無理がある。ただ魔族が右往左往する中では地元出身工作員たちも移動に苦労したので、逆説的に見つかり難いルートを特定し易かったのが幸いしたと言えるだろう。

最終的に持ち返れた最深部の情報は、謁見の間にある隠し通路が何処に出るか、そこにある罠がどの位置にあるかを確認しただけである。だが重要なのはその位置であり、そして話の持つて行き方だったのだ。話の持つて行き方が重要だからこそ、僕は即死してはいけないのである。

「銀殿。それほどの情報なのか？」

「二広さん。そこにある兵議の駒を持つてきていただけですか？ そう、それです」

緋二広が首を傾げたので、実際に示して見せる。

彼が持つて来る間に謁見の前の地図を書き、用意された駒を並べていくわけだ。これは表は白で裏は黒というオセロみたいな色をしており、形状で大将や將軍などの種類を示す簡単な物であった。

そして最初は白一色で並べ立てていく。

「良いですか？ 王さまの駒は大公で、將軍は皇太子殿下だと思ってください。普通は逆ですけどね……。さて隠し通路がここで、罠はここからここです。そして東領と南領の諸侯以外をひっくり返すと……」

「これは?! 皇太子殿下が包囲されている？ しかもこの位置は……：場合によっては殿下を捉える事が可能なのか」

あくまで発表された予定位置だが、今回は上座が二つある微妙な配置なのでおそらく大丈夫だ。

本来、大公が居るべき玉座を守るために罠も隠し通路も存在する。だが玉座に殿下を座らせてしまうと大公が座れるのが廷臣首座、旧王国時代の大臣の席になってしまうのだ。自分を守り難いし場合によっては罠に護衛が巻き込まれてしまう。だから位置を変更し、上座

の位置を七・三で分割すると、隠し通路の兵で殿下を暗殺できるかのように『見える』位置になってしまうのだ。

もちろん常識を發揮して大公が廷臣首座の位置に来てくれれば、何の問題も無く全員でボコれば済むから問題ない。

「これが重要なのですが、昔から『暗殺可能だから』と重臣が罰せられた例は多いのです。多くは力をつけ過ぎた臣を捉え、領地を取り上げる為の言い訳なのですがね」

「確かにそういう例は多いな。あ、いや……銀殿は大丈夫だ。安心なされよ」

「そこは心配してませんよ。僕も出しゃばらないようにしてますし」

屋敷や城を改築して、謀反の疑いありとされた例は実に多い。

徳川の時代にも重臣である本多の殿さまがそれで改易を食らっている。城だけ改築して兵を集めても居ないのに馬鹿馬鹿しいと言っしかないが、あくまででっちあげの理由造りなのだからそんなものだろう。マッチポンプだから『上さまをお泊めする為に』と勧めたのが陥れる同僚だったりするので闇が深い。

もつとも今回は完全に濡れ衣と言う訳ではなく、可能だったら殿下を暗殺するつもりだったし、出来なくても夏都に戻ってから大公の方で濡れ衣事件を起こすつもりなのでどっちもどっちだろう。

「しかし、あくまで疑いなのだろうか？ やられる前にやるなどと言う事で問題が出ないのだろうか？」

「どうして紅梓さんが罨の位置を特定できたと思います？ 予行演習はしておかないとイザと言う時に困るからですよ。罨の調子を調べたいだけなら、少なくとも全軍が引き揚げてからにすべきでした。紅梓さん、緑青貴公子にお伝えできました？」

「うん。あそこには別の氏族だけどエルフが居るから話を通し易いよね。水棲種族も居るけど」

これが僕らの自衛策なら、暗殺しない可能性もあった。

しかし緑家とも連携しており、あちらはあちらで信頼できる同盟者を増やしているだろう。廟堂での勝利は根回しの結果なのだから。そして『何時でも暗殺できるように準備している』というこは謀反に

他ならない。使う気が無ければ今調べる必要などなかったのだから。まあ魔族の大物が偶然その位置に居たら罠で殺すとか、自分を襲う暗殺者を罠で殺す気だったかもしれないけれどね。でも、緑家の方で『クロ』だと判断した以上はもう止まらないだろう。九天玄女さまではないが、まさしく『動き出した時は止まらない』である。

●
かくして運命の日が始まった。論功賞は夏都だが幾つかの発表があると集められたのだ。

当然ながら僕も呼び出されており、例の報告書を持ってこいと言われている。西領支援の話を切り出せと言う事と、同時に失態であると脅すためだろう。場合によっては埋め合わせとして領地没収と国境警備任務くらいはあるかもしれない。

そして臨検を通り抜ける際、諸卿の装備はともかく僕を始めとした何らかの発表がある者は武装を預けると言われる。これは普通の事なので不満は無い、他の者もそうだろう。

「これが銀双羽だ。こちらの媛が緑青祭。私の妻になる予定の方になる」

「そのようなものだ。悌よ、この者に渡す物があるが妬くなよ」

「あれか？ あんな物騒な物はさっさと見せたら焼き払ってしまえ」

緑青貴の妹は外見は目元以外よく似ていた。

目じりが釣り目がちで、あちらは垂れ目がちだったこともあり、もし男装したらこちらの方が兄だと思ってくらいの印象差がある。おそらくは性格もそんな感じだろう。どこか九天玄女さまを思わせる浮世離れた高貴さがあつた。

そして懐から取り出した物とはただの文に見えるが、連判状として今回の件に関して協力を約束した上級貴族の名前が連ねてある。焼き捨てる為の予備なのだろうが、確かに恐ろしい内容だ。

「確かに拝見しました。必要ならばこの場で薬品消却を行います」

「そうせよ。我としてはそなたの妹背の君に渡しても良かったのであるがな」

「そのお言葉だけで十分です」

ちなみにこの場合の妹背の君とは、家族ではなく恋人や妻の如き相手を挿す。

要するに僕からみて最も愛しい相手である双葉に渡し、今後を保証すると言う事だ。ただしこのレベルの権力者ならば適当に罪をでっち上げられるので、真の意味で補償にはならない。むしろプライドを刺激して処刑しないように持つていく方が良いだろう。

それに今回の件で最善は尽くしたが、この後で普通に兵力差で負ける可能性はある。色んな意味で大公は自滅しているのだが、そうは思っていない諸侯も居るのだから。

「しかし黒家の御老人まで領くとは意外であったな」

「なんの老大はことなかれ主義よ。北の者はおおむねそうだ。そのの利け者が例外であろう」

「返す言葉もありませんね」

北領の主宰である黒家は何年も同じ人物が務めている。

抜け目のない老人として名高いが、基本的には勝つ方に付くだけでバックアップ以外に何もしないのが特徴だ。安全策とは言うが勝つか負けるか怪しい段階でも保障だけはするし、このご老人が認めただけで大丈夫だと思える者が居るくらいだから相当なものだろう。

今回はどちらに転んでも判らないのだが、中央集権化が進むと黒家も排除されかねない事、そして北領も同盟関係に入れば大勢は決するからだろう。もつともこの後で我々が敗北したら、同じような文面の誓詞が大公の手元から出てきてもおかしくはないのだけれど。

「そういえば武器は足りておるか？ 足りておらねば我のをくれてやるが？」

「遠慮はいらんで。祭は魔法もなかなかだ」

「いえ。僕の武器はこの舌でございます。口先で刺して見せましょう。もつとも剣の腕前はサッパリだからというのもあります」

「どうやら緑青公女は魔法で武器を作るタイプらしい。」

火系と地系の魔法にそういうのがあるが、おそらくは地系の水晶武器だと思う。あれは強い武器じゃないけれど魔法の武具なのと、他人に貸せるのが大きいんだよね。とはいえ借りてる余裕はないので

遠慮しておくことにした。

理想を言えば大公をその場で殺し、小競り合い以上にはならない事なのだ。

(臣下が行う壇上から玉座は十歩、今回に限っては七歩つてとこかな？ この巻物が二歩分としても……もう数歩を何とかしたいな)

そして時間が来れば、いよいよ謁見の前に通された。

さっきの手紙に関しては当然ながら歓談しつつ、手元から薬を出して手紙を消却しておいた。

もちろん二人の目の前で行い、薬品自体は処分しておいた。紙の結合を解くだけの薬品なので見つかったても問題はないが、万全を期した方が良いだろう。

(そういう意味ではあの連判状が最期の武器だ。この内容が一番大公に効くんじやないかな。何しろ……大公は相当な理想主義者だ)

そんなことを思いながら大公の顔と現場を確認する。

遠目にしか見たことはないが、悴さまたちの反応を見れば本人だろう。影武者なら影武者で欠礼を理由に斬り捨てれば良いから楽なのだけれど。そして隠し通路と罠の位置を思い出せば盤面は完全に把握した。

隠し通路の方は使用目的から、玉座の左右で何かあれば咄嗟に王を守る配置になっている。逆に言えば二つに分けられた上座の後方と言う訳で、見方を変えれば暗殺に打ってつけなのだ。

(罠はまずあそこか……落とし穴だもんな。普通は隠すよね)

壇上は二か所あり、臣下が揃う下座の位置の目の前に段がある。

そこが諸卿を代表して軽く上がる一步の位置であり、その更に上座があつて玉座の手前で更に一段高くなっているという訳だ。この二段で下々と王を隔てており、その途中に落とし穴が数か所あつた。一つは臣下の壇上そのものであり猜疑心の強さに笑うしかない。

まあそれは王さまと護衛達から見れば仕方のないことかもしれないが……問題なのは皇帝殿下がその上を通ってるんだよね。上座を二つ作ってしまった弊害なのだろうが、意図して居ないならば迂闊と
言うほかないだろう。

いや、おそらくは迂闊なのではなく担当者の問題なのかもしれない。式典担当の官僚が罨の位置なんか知らないし、知っていたとしても構造上は仕方がないので配慮なんかできまい。知らないとしたら罨が稼働するかどうかの確認をしたことを知らされていないだけなのだろう。

勝負のコール！

● 西領を奪還したばかりで豊かな食材などはない。

これから始まるのはあくまで軍議や朝議の延長上に過ぎなかつた。それでも本来であれば初陣を勝利で華々しい飾った皇太子殿下を褒め称える宴でもあっただろう。しかしそれすらもなく、行われることも現状の報告会に近い物であつた。

そんな中で僕もまた発表を行う事になっているのは、情報収集の量と『西領の為』になる内容があるからだ。

「銀双羽。皇太子殿下の御前で発言を許す」

「もつたいなくもこの機会を授けられましたことを感謝いたします。用意いたしましたのは西領における問題点、食糧事情や遊牧民などの情報でございます」

「ほう……」

基本的には大公も諸侯を動かす材料として遊牧民を扱っている。

だから国境付近に現われている規模が多かったり移動せずに滞在している異常性を伝えはしたが、それ以上の情報は渡してないのとだ。ゆえに諸侯としては詳しい話を聞きたいという者も多かったに違いない。場合によってはこの後にも戦わねばならないのだから。

とはいえそれを馬鹿正直に口にすることは大公も望んで居ないし、こちらも前振りでも重要な情報を渡せない。だからあくまで遊牧民の話は中レベル、重要性としてはさらに下がる。

「まずは西領の民がどう扱われたか、国境沿いの街を含めてどのような物であつたかを説明せねばなりません。暫しお付き合いください。民は奴隷とされ食料は魔物を増やすために取り上げられ、町を修復するための資材は夏朝に対する砦の為に使用され……」

感受性が高く善良な貴族や騎士は悲しんでるがそれだけだ。

自分の領地でなければ同じ方面の民衆でも基本的のノータッチなのだから仕方がない。頭のおめでたい貴族に限っては、大公たちに恩

を売れるかもしれないと思つて居るくらいだろう。

僕は用意した巻物型の資料を少しずつ広げながら説明を続けていく。

「……以上で西領そのものに関する報告は終わりますが、ここで重要なのが遊牧民の問題です。夏朝に取り戻した西領に関して、諸賢ならば具体策を思いつかれるでしょうが、その前に遊牧民の情報と合わせて判断せねばならないでしょう。まず彼らは食料問題を抱えております」

「そういう事が」

「なるほどな」

既に何人かが遊牧民の目的だけではなく、大公がどうして僕なんかに発言させているのかに気が付いた。地位としては水棲種族を動かす為の副使だとか、南領の兵を監督する軍師格とかその辺でしかない。しかしその過程で集めた情報があれば、僕が諸侯を動かして西領を支援させられると気が付いたのだ。ここまでの前振りでも僕が入念な情報収集を行つて先行していることは皆判つて居るし、その有益性にも気がついて居るに違いない。

それと同時に誰が言い出しても揉める支援物資の問題を、低位の貴族に押し付けることができるのだから。足りない発言力を大公が利用したという形になるだろう。……それこそ『形』だけは間違いがない。

「遊牧民は現在、大王が居ない時期ですので複数の統領が合議を来ないます。このために個人の善良さよりも民族としての総意がしばしば優先されるとか。そして問題となるのが、『力を貴ぶ風潮』と『食料が足りていない』という現状、そして『西領で夏朝の問題がある』ということです。つまり個人として信用できる相手であっても、民族全体が『今は攻めるべき』と思つている間は注意が必要となります」

ここまで来れば大抵の者にも意図は伝わって来る。

西領を可及的速やかに元に戻し、豊かとはいえずとも十分に戦えるように、また生産性も向上させなければならぬ。それらの出費は西領に賄えるはずがなく、各領から膨大な資金と物資を送り込まねばな

らないだろう。中には僕に対して『余計な事を吹き込みやがって』でも言わんばかりに睨みつけている者も居た。

おそらくはここまでは大公の予定通りだろう。僕にヘイトが向いたところで魔族殲滅に失敗した事や、勝手に遊牧民と交渉しようとした件で叱責。南領に財源と国境警備でも押し付ける気だろう。それで諸侯はいくらか落ち着く……という算段だ。

「つまりは強き国として夏朝が立ち直り、遊牧民も食料を手に入れるためには和平でなければならぬと思わせる必要があるという訳だな？ よろしい」

もう用済みと判断したのか、大公が立ち上がって結論を述べた。

西領の長としてではなく『夏朝の最高権力者として』西領復旧に力を注げと言う為だ。形の上では疑問形だが、自分で答えを言う気なのでもはや僕には問うていない。

呉越同舟の共同路線、西領と遊牧民問題に関しては終わったという事だろう。

「概ねその通りでございます。残る西領で起きている夏朝における陰謀をくじけば平和がもたらされるかと」

「陰謀？」

「魔族ではなく？」

「ここで僕は先ほどの『西領で夏朝の問題がある』ではなく『陰謀』だと言ひ換えた。

よく見れば巻物はまだ六割ほど、明らかに重要な続きがあるとでも言わんばかりである。だがしかし、大公が結論を出そうとした様に報告書ではそこまでしか書いてはいない。ここから先は白紙を使ったハツタリで、弁慶の勸進帳の様なものである。後で問題になった時は、悌さまと緑青貴公子に渡した紙を使う事になっていた。

そして大公は僅かに首を曲げ、側近たちや官僚の方に目を向ける。僕から話を聞いているか……いや、むしろ『新しい問題が見つかったのか？』という推論の方が正しいだろうか？ 即座に話を終わらせず、僕に口を挟む余地を残したことになる。

「手前はこの西領を奪還する際に海路より先行せよと命を受け、予め

斥候を派遣しておりました。そこで夏朝を揺るがす大いなる陰謀とその証拠を発見してしまったのです」

「……あやつは何を申しとおるのだ？ 何か聞いておるか？」

「そんな報告など……」

一応は嘘ではない滑り出しだが、この時点でもはや遅い。

海路から攻める話も先行して囿に成れという話も向こうが勝手に押し付けたことで、任務ではないのだが、まあ完全な嘘ではない。だからこそ留める事が出来ないし、夏朝を揺るがす陰謀を掴んだというのに止めたら逆効果である。

大公は口を開かず代わりに側近が官僚を締めあげているが……大公が馬鹿とは思えない。既に察し始めているのではないだろうか？ どこまで自分の陰謀を掴まれたか、そして僕の背後に悴さま以外の誰が居るのか……を全てだ。

「そのような奏上など予定にないぞ。在りもせぬ詮議は……」

「良い。予、自らあえて尋ねよう。その陰謀とは？」

「おそれ多くも皇太子殿下を捕らえ、謀反の濡れ衣を着せてから処刑することでありませぬ。噴飯物の戯言にしか聞こえぬでしょうが、皇帝陛下を暗殺しようとしたという名目であれば可能となります。そして……捉えて斬り捨ててしまえば、濡れ衣を着せることも難しくありませんから」

ここからは出来レースで、話をスムーズにするために誰かが出て来るはずだった。

筋書きと違うのは皇太子殿下自ら下問されたことで、本来ならば僕程度の下級貴族では口を利くことも許されない筈だ。だが皇太子が許したことを官僚やそこらの貴族程度の存在が止められるはずもない。この段階で半分ほどは成功したと言えるだろう。

大公自身はともかく側近たちは慌てふためき、キリーやそのお兄さんとかが苦笑しつつも面白そうなのが対照的であった。まあキリー達には教えられないけど、彼らは彼らで針の筵だった筈だしね。

「ホウ、この夏朝においてそのような邪悪な企みがあるうとはな」

「世迷言でございませぬ！ 誰か、誰か止め……」

「ウワーハッハハ！面白い。面白いぞ。……殿下には失礼ながらワシが問おう。何者が西領でそのような企みを考えておるのだ？ 事と次第によっては無礼を許せぬが」

後は大公の罪であると問おうとした時だ。

慌て蓋めく側近と違つて、大公自身はふてぶてしく笑い飛ばした。まったく大した胆力であり機転である。笑い話にしつつプレッシャーを掛けて来ることで、流れを引き戻したのだ。もし僕が証拠を掴み切れていない場合は、文字通り反論しつつ切つて捨てるつもりだろう。

上級貴族には椅子が用意されていたが、立ち上がって小姓から宝刀を受け取つて見せる。

（上手いな。流れを引き戻した上に、警備兵を動かす口実を得たのか。もはや公爵さまたちが何人かの上流貴族を抱き込んだことに気付きながら、少しでも味方を増やしつつ、稼いだ時間で兵を増やして押し潰す気か。もしかしてこの人、逆境の中の方がキレル人なんじゃないかな）

大公が狙つたのはイニシアティブを握り直しながら、同時に大義名分を得る事だ。

ちやんと論戦で勝てば『これは陰謀だ』と諸侯を納得させることができるかもしれない。その上で公爵さまたちを捕えれば、どつちつかずの貴族や、当主を抑えられた兵たちが全力を發揮出来無いのは確かなのだ。

しかし大公をここで暗殺し、出来るだけ被害を出さずに終わるためには、むしろこちらにとつても都合な展開と言えるだろう。

「どうなのだ？ ワシに遠慮はいらん。申してみよ」

「証拠も証言もありますし『真偽判断』の魔法を証言者に使用されても構いません。しかしこれが正しいのか、証言者も騙されたのか？ 陰謀とそこに至る最初は純粹であった理想について語った方がよろしいかと思われます」

「理想だと？ 陰謀に？」

「素晴らしい理想を抱いている方こそ、理想通りにならぬと手段を選

ばぬものかと」

ズイ！ と、にじり寄って抜刀する仕草すらしてみせる大公。

役者としては十分以上だし、茶目つ気を考えればキリーによく似ていると思う。妾の子供でロクに接したこともないと聞いていたが、親に子は似るといふことだろう。

しかしこれで大公自ら一歩分、対決姿勢を見せる事でこちらも一歩。合わせて二歩の距離が縮まり暗殺し易くなったので結果オーライだ。

「その人物は最初、諸侯の力が強すぎ皇帝陛下の意見すら通らぬことに憤りを持っておいででした。正論を正論として口に出さず、場合によつてはなかった事にされる。この事を問題視した方は諸侯の力を排除し、より強い国家を目指して中央集権国家を目指そうとされたのです。しかし、純粋な思いもいつかは歪むモノ。途中で自らの権力を押し通し、この国を我が物とする事へと変遷してしまったのですよね？ 大公閣下」

「……………」

調べてみると状況証拠のみながら、おおむねこんな事情が推測出来た。

この国の体質は昔からだし、西領が魔族に奪われた時は外戚である大公を心配して皇帝陛下もかなり奮闘されたらしい。しかしいつしか敬して遠ざけられ、『出来もしないことをおっしゃらないでください』みたいな論で打ち消されたようなのだ。自分の力になろうとしたばかりに、かえって発言力すら無くした陛下を見て大公はどう思っただろうか？

そして大公に残されたのは、残り僅かな権力者としての時と、理想が今にも叶いそうなこのタイミングだけであった。正直な話、ここで逃れても次に中央集権国家を狙えるタイミングはもはやあるまい。

「このことが判明して、改めて一部の諸侯に確認を取りました。『同じ思いをしたがゆえに判る。正直に話してくれば協力しても良かった。だが…………』、というご意見が多数。今の大公閣下は私利私欲に走られているがゆえに、協力できないと皆様おっしゃられておいでし

た。閣下、貴方は道を間違えられました!!」

最後の詰めとして大公の心をへし折る事にした。

彼には彼の野望と、その根底に中央集権国家という理想があるのだ。ゆえに最後の機会であり、陰謀の露見したこのタイミングを逃すはずがない。僕は巻き物の最後の段まで白紙を進め、まるでそこに大公の意見に半分だけは納得している者の名前があるかのように装ったのだ。

そして……。

「ふ、ふ、フハハハ！ 何故だ！ 何故このような時になって現れる！

もっと早く貴様のような奴が増えて居れば……だがもはやこれまで！ 反乱軍を捕らえよ！ 逆らう者は切り殺しても構わぬ！」

大公は最後の最後まで僕を否定はしなかった。

貴様さえ居なければ……ではなく、僕や意見交換に応じる諸侯が居れば話は早かったのにと落胆するだけだ。その上で野心を微塵も隠すことなく、ここで味方しない者を全て殺すつもりなのだろう。

もちろんこちらとしても大人しく殺される気は無い。ではここからが反撃の時だ！

大団円

● 大公の指示でドつと兵士たちが動き出した。

こちらと同じようにハンドサインか何かを事前に取り決めていたのだろう。やや遅れて隠し通路からも兵士が現れ、その間に皇太子殿下は緑家を始めとした東領勢が保護に成功した。

大公はこの期に及んで誤魔化したりはしないが、そのかわりに反意を口にはしない。あくまで悪いのはこちらで、正義を正そうという姿勢である。

「奸臣どもに誑かされておる殿下をお救い参らせよ！」

(しらじらしいけど、国家の私物化ではあるけど反乱計画じゃないものね。それに……まだ旗幟を鮮明にしていけない有象無象を味方に付けないといけないのは同じか)

大公の城ではあるが万全ではないし、その後に夏朝全てを敵に勝てるはずもない。

だからこの場に居る諸侯を形の上だけでも味方に付け、悪いのは公爵たちだと強弁せねばならないのだ。中には丸で判って居ない者も居るし、どちらに正義があるとも思えず勝った方に協力する者も間違いない存在するだろう。少なくともちよつと前までは、そちらの方が大多数であったはずだ。

この点に関しても大公は自滅している。城攻めを続け兵士たちを平均的に磨り潰しておいて、しかも中央集権化で諸侯の権力を制限すると言われて誰が素直に従うだろうか？

「大したものだ。何も知らぬ者どもを詭弁で瞬く間に味方に付けおつた。次は何を目指す気だ？ 将軍か？ 大臣か？ いつそ貴様が四大侯爵の一人にでも成りおおせる気かな？」

「まさか。自分には身に余ります」

だからこそ大公はこちらを切り崩しに掛かった。

一步も引くことなくこちらを圧迫し、僕を皮切りに野心が見えたら皇太子派の諸侯も自分と大したことが無いと言い切る気だろう。そ

れこそ中央集権化はこちらが考えたことで、旧体制派を一掃するための言い訳だと口にするつもりには違いない。

もし僕がそういう野心家であれば、戸惑うなり、あるいは自分の理想を口にして付け込まれるに違いない。例え転生者であろうとも、何十年も権力者をやっていた大公に勝てる筈もないのだから。

「僕は箱庭のような村を完璧に。いえ、それ以上に仕上げる方が好みます。むしろ広過ぎる領地など不要、例え世界の半分をくれてやると言われても迷惑でしかありませんね」

「っ青いな！ そんなことを口にできるのは今だけだ！ いずれ何もかもが欲しくなる!!」

大公は一瞬だけあつけにとられた後、むしろ怒りを込めて語り掛けて来た。おそらくは彼自身の経験だろう。仲間達だけで語り合う理想は楽しいのに、それを実現しようと目指せば目指すほどに濁って行くものだ。

しかし三十以上は歳の離れたオッサンと、何が嬉しくてロボットアニメの様な哲学戦闘をせねばならんのか……。

「何もかもが煩わしくなるの間違いでは？ 広ければ広い程に、権力が高まるほどに自由も仲間も減っていく。それはご自身が十分に理解されておられると思いますがいかに！ 遙か昔に語らった友人や淑女たちは今どこに!?!」

そろそろ面倒になって来たし、味方劣勢だ。大公を捕まえるか殺して決着をつけねば危険である。

とはいえ謁見の間に弓など持ち込めず数が多いからこそ、大公は奥へと下がっていないのだ。加えて目の前に罠があるからこそ安心しており、短慮を起こして僕や兵士たちが攻め掛かるのを待っているとも言える。迂闊に飛び込めば大公の目の前で落とし穴がパツクリと開くだろう。

そこで彼の背景をある程度は推測して、言われたくないことを試してみた。ここから罠を覚悟して攻撃するにしても、まだ足りないのだ。

「貴様！ 言うに事欠いて我が友を侮辱するか！ そこになおれ！」

「おおっと、そうは参りません。我、汝に変動を禁ず。我が目にありて不変の盾と成れ!!」

この期に及んで大公は冷静さを欠いてはいない。

激昂して剣を振りかざすフリはするが、切り込んで着たりはしない。こちらの様子を伺いつつ兵士たちに罨を迂回させて来るだけだ。僕は攻撃呪文の類を持つておらず、防御呪文を使えるような素振りを見せてしまったことになる。兵士たちから見れば多少の防壁ならば取り囲めば済むと思うだろう。

もし僕が変動を禁じた対象が、巻物であつたららの話である。これは流星錘であり縄瓢であるので変動を禁じたら物の役に立たないのだ。

「そやつだけは確実に殺せ！ 生きていても余計ことを口にしかねん！ 王朝の為にならぬぞ！」

「そうは参りませんね。こうなつたら先に閣下を討たせていただきます！」

兵士たちが来るより先に前に出て、その際に巻物を綴じている木材に手を掛けて見せれば仕込みは十分だ。大公はニヤリと笑つて剣を持たぬ方の腕を上げた。この部分に穴を作つて短剣を忍ばせるという手段は良くある話である。胴には念の為に軽鎧を付けているだろうし、頭と首を隠せば短剣を投げたくらいで死にはしなないと思つていいのだらう。そもそも僕が飛び出せば、落とし穴の中に真つ逆さまなのだしね。

ただし、それは落とし穴が稼働すればの話だ!! 僕は一步、二歩と踏み込んで振り被る！

「貫つた。天誅!!」

「馬鹿め間合いが遠いわ……だが何故だ、何故落ちぬ?!!」

先ほど形状を固定し、状態を保全したのは巻物ではない。

罨がある場所の床と、その下にある可動物がありそうな半径である。おそらくは門か何かを、機構を使って少ない労力により引き抜く物のはずだ。ソレらを止めることで一瞬なりとも時間を稼げば、大公を攻撃するには十分過ぎる。鋼線で補強した巻き物を振りかざし、十分なスイングを持つて大公の頭に錘を叩き付ける事に成功した。

大公が武人であるとか、こちらの武装が剣ではないと気がついて居たら無理だったかもしれない。彼が防御に使った剣を迂回して、彼の頭にぶつかったのだ。

「こ、れ、で、本当に終わりだ!」

「うぬ!」

「降伏せよ、見ての通り大公は捕らえた! 白將軍閣下! 白南終公子! 外の西領勢の説得は終わりましたか?」

輪は起動しなかったが、保全するための力は不自然な状態だと魔力を一気に消費する。

僕は穴が落ちる前に大公の元に飛び込み、そのまま彼の首を締めつつ手に持つ剣を奪った。奪えなければ短剣でも持つているフリをするところだが、もつと効く言葉がある。西領勢にとって味方だと思っ

ているふたりに声を掛けたのだ。
実際に外に居る兵士を説得していたかは別にして、そうなたら勝ち目は無くなる。大公が捕らえられたこともあつて続々と降伏し始めたのである。

● その後は割りど簡単に話が付いた。

キリーに対して人質を取って情報を抜き取っていたことを、西領幹部の何人かが知っていたのだ。その証言を吐かせた後でこちらの諸侯も彼を認め、キリーの大切な人を救助しつつ、ひとまずの名代として管理させた。

その後は話し合いの結果と言う事になっているのだが……実のところ將軍の方と話しがついて居るらしかった。家を出て分家となつた筈の將軍を本家とし、キリーを分家として逆転。元独立都市だった幾つかの場所を自由都市にすることで白家への処罰と言う事になる。

「銀殿。他に何か案でもあるかな?」

「せっかくです。白南終公子の名前を秋と変えていただき、自由都市のひとつを秋都とするのはいかがでしょうか?」

「王朝革命など我らは狙って居ないと? それは妙案だな」

こんな他愛のない案が僕らの西領仕置きに関する最後のネタにな

る。

このアイデアも誰となく言い出した話だったが、最終的に僕が提言するのがワザとらしくないだろうという話になった。それこそ緑青貴公子あたりが口にするのと怪しき大爆発だからだ。

ちなみに自由都市になるのは南蜃砂と国境沿いの城塞都市、そして新たに水棲種族に渡す場所の三つ。国境沿いの城塞都市は皇家が代官と防衛戦力を派遣し、南蜃砂に子供が生まれたら分領することになっていった。もはやこの国で一・二を競っていた白家の権勢はないだろう。

「そうだ双羽。お前さん、せっかくの開拓長官の地位を辞するって言ってたよな？」

「元が大公閣下のお声掛かりで南領に不和を撒く為だからね。慣例からいっても僕が続けない方が良いと思ってさ」

「なら丁度良い」

緋家に所属する貴族は基本的に二領である。

それを利用して不和を撒くために、表向きは信賞必罰を示す為と称して僕に領地を渡せと肝入りで命令がくだったのだ。もちろん中央が南群あたり土地を渡す話もあった筈だが、当然のようにくれるはずがない。そこで開拓地を僕が自分で拓き、その殆どを寄子たちに渡すという形でバランスを取ったのである。

その命令を出した大公は捕縛され、頭部強打の影響で重傷なので撤回しても問題ないだろう。

「何が丁度良いのさ？」

「さっきの話なんだがな、秋都にする場所はお前さんに任せようかと思っただけ。同じ何もなければ、畑の予定地だろうが都市だろうが同じだろう？ 水棲種族だって領くだろうさ」

「大間違いだよ！ まあ面白そうってことは認めるけどね」

僕のものではない開拓地を返上し、代わりに何も無い都市を貰う。

帳簿上はきつと大赤字だろうが、建前の上では信賞必罰がなされていく。沢山の土地を貰っても仕方がないし迷惑だが、自分の気ままにして良い都市であり、水棲種族が暮らしやすく王国民と並び立てる街

というのは面白そうだった。大公の質問の件と違ってそこが大きい。とはいえ譲れぬ線もある。というかこれを怠ってはならぬ法的な問題だ。

「というところらしいですが、悌さま。構いませんか？流石に僕の一存では問題になります」

「構わん。面白そうな文物が出来たら送ってくれ。それを税の代わりにでもしよう」

「そういうことなら俺らにも頼むぜ」

寄り親である悌さまの許可を得て、侯爵さんたちの元で正式な契約となる。

これでキリーは度を越える税を要求できないし、制度上の問題もクリアされた。後は水棲種族たちの交易やら作成できる文物次第で豊かさが変わるだろう。

しかしここで思わぬ話が飛び出した。

「そうだ。おい、銀の嫁」

「なに？」

「お前さん、俺の娘ってことにならないか？ そうすりや貴族の娘だ。目に見えて養子ってことになるから格は高くねえが、二羽に嫁いでも問題ない」

「ちよっ?! 僕の頭越しにいきなり何さ?!」

と言う感じであれよあれよと養子縁組と婚礼の話が進み、妙な方向に決着がついた。

正式な縁戚関係というわけではないが、形式的にはつながりが出来たことになるし、自由都市を任せる相手が信用できるという形式上の形にはなる。

僕としてはいきなりではあるが問題はないし、隠すことなく表で行われた話なので悌さまたちも問題とはしなかったのだ。

「面倒なのはヤだけど、これで麗にも負けてないし？」

「そうだね。こたわることないとは思うけど、双葉がいいならそれでいいよ」

と言う訳で八方丸く片が付き、西領での事件はこれで終わりを告げ

たのである。

やがて、おとぎ話になる

● あれから何年かが経過し、夏朝は順調に国力を回復していった。

制度体制は緩やかに中央集権化が進んだが、別に大公の理想に共鳴したわけでもない。単純に一部の諸侯が皇帝を支える体制に限界が来ただけだ。

領地に関しても支給する土地に限界が来ている事もあり、最初に俸給を与えて慣らした後に開拓地を渡すかこのまま俸給とするかを選ばせることで徐々に封建体制を脱却していった。

「水を抜いて、ゆっくりゆっくり！ よし！ 後は適当な所で殻落としを始めて」

「へいー」

新しい沿岸都市がようやく建設できた。

秋都と名付けられたその場所は沿岸都市の中でも水棲種族との共同生活を前提に作っており、目新しい産業は大型船関連である。閘門を利用して高い位置に船を固定し、水を抜いて殻を落したり色を塗って保全することも可能になっている。ここまでの施設は紅家や緑家の港にもないだろう。

他にも大型クレーンで荷物を移動させたり、大型の倉庫に様々な産物を預かって荷揚げや荷卸しを簡便にしていた。まあ他に凄い事は出来なかつたともいうが。

「よう双羽。真珠の方はどうだ？」

「養殖はまだまだだね。海苔とか牡蠣の方は何とかなったけど。キリーが必要ななら水棲種族に調達を頼んで、ドワーフに加工をしてもらうけどさ」

大規模な筏を作ったり、修理が簡単なので養殖事業に手を出してみた。

前世でも似たような文化を持つが養殖技術の弱かった半島地域に、なんとかという学者一族出身の技術者が広めた事があった。戦後もその養殖は活かされて産業は存在しているそうだ。この世界でも西

領には海苔の生産とか牡蠣取りこそあったが、養殖技術は無かったのでせつかなので導入してみた形になる。

流石に椎茸とか陸の産物の養殖にまで手を出すと失敗すると大変だが、このレベルならまだ何とかなる。特に水棲種族が協力してくれば水質管理は簡単なので順調だ。

「そこまでじゃねえな。産業になるならありがてえが」

「それならガラス盃を持って行きなよ。こっちは色ガラスの量産に特化することにしたんだ」

そうそう都合の良い産物などはない。

僕が持つてこれる技術の中で、地域に合わせて生産していくことにした。もちろん領地の方では別系統に特化させていて、向こうは透明度の高い高級品特化。こっちは色を付けて手に入れ易さ重視と言う訳だ。まあ素材に使う砂の関係上、混ぜ物をしないと駄目なものもあるけれど。

ともあれ産業自体は立ちあげ始めたばかりで微妙なので、先に行つた通り大物を扱う貿易港としてスタートしたという塩梅である。

「それよりも遊牧民はどうなった？ ラー・フーとかあれから見ねえが」

「水棲種族経由で聞いたんだけど、向こうは僭王が立ったそうだよ。明らかに資格の足りてない奴が、古老や一部の統領を抱き込んで大王を名乗ったんだってさ。今ごろは反発する部族をまとめて戦つてるんじゃないかな」

「どつちが勝つにしてもこっちに飛び火しないで欲しいもんだが……」

遊牧民たちは大王の居ない時期が圧倒的に多い。

基本は縄張りを周遊する生活なので、よほどの理由があり指導力がなければ代表者なんて生まれたりはしないという訳だ。この間の食糧危機でその理由が出来はしたが、羅虎ことラー・フーは交易の結果であるからと辞退。他にも略奪や生産で何とかした人物が焦点になったそうだ。

それらの中から強引に大王を名乗つたのだと思われる。いずれに

せよ、こちらの国に攻めて来るかが重要だろう。

「そこまで判ってるなら協力しないのか？」

「援助を求めて来たら交易の範囲で協力するし、それがラー・フリーさんなら少し手心を加える程度だね。異なる民族で異なる文化のある相手に余計な口出しをするのは良くないと思う」

「違いねえ。協力して恨まれたんじゃ世話ねえしな」

良質な武器を輸出したり兵糧を安価に出しても良い。

しかし露骨に首を突っ込むと返って相手の迷惑になることもあるだろう。プライドを刺激したり、ラー・フリーさんとはかくその部下が反発することもあり得る。また背後を推測された場合、外国の援助を受け入れたと問題なることもあり得た。

積極的に介入してもしなくても、どう転ぶか判らないのであれば判断材料が異なる。世話になったし知ってる顔に頼まれたら協力するのも良い。しかし頼まれても無いのに手を出すのは藪蛇だろう。

「こつちとしてはあれから魔族がどうなったかが気になるけどね」

「知つての通り追撃戦じゃ知恵ある魔族を中心に倒していった。残る魔物の類だが国境付近の都市を中心に討伐を行つてるといのが現状だ。お前さんのアイデア通り、大々的に報酬を出して討伐任務を出したことでスムーズに魔犬の類は狩れてるぜ」

「それは良かった」

軍隊に向いている事と、向いていない事がある。

例えば知恵ある魔族を倒すために組織的に陣形を組んで主力を温存し、首魁である魔族を倒すなんてのは利害関係があると難しい。だが国境を越えて動くとなれば軍隊には逆にハードルが高くなってしまふのだ。そこで広く『民衆』から勇者や傭兵を募集し、食料や金と引き替えに魔物の討伐を凶った。

結果として遊牧民の部族が魔獣を狩って討伐報酬を得ることで食料を確保。こちらは国境を越えずに何とかなったという訳である。

「とはいえ金は無限じゃないからな。報奨金は馬鹿にならないのが難点だ」

「戦争と比べたら安い部類だし、その後には交易で取り返せば良いじゃ

ん。下手に軍隊に国境を越えさせると向こうとモメて戦争になりかねないし、対魔族協定を結ぶのも時間が掛かるしね」

「お互いが納得する条件なんざ難しいからな。それに手を組んだら手を組んだらで中央が睨むか」

アイデアとしては冒険者ギルドを設営しただけだ。

国と一定距離を置く組織であり、援助は受け取るが意見は聞かない。あくまで依頼として受け、その範疇で行うという態度を表に出すことで、遊牧民たちも彼らは頭を下げずに済んだのが大きかった。もしこれが西領と遊牧民の一部族との協定だと問題が起きるし、国と向こう全体だと凄まじい時間が掛かって魔物を取り逃がした可能性は高い。

とはいえ問題が全くなかったわけでは無かった。そんな都合の良い訳はないとも言う。

「後は最初から白紗に居なかった魔族？」

「そうだな。魔王亡き後に仲互いして、さっさと脱出していた奴らも居る。そもそも向こうからこつちに来なかった連中もいるだろうさ。そいつらがそのままか、遊牧民が適当に狩って持ち込むか、それとも僭王とやらと組むかどうか次第だな」

人間二人いれば対立し、三人居れば派閥ができるという。

要するに西領奪還戦以前の段階で、魔族の方もバラバラの勢力だった可能性があるのだ。考えてみれば魔王が討ち取られる前には容易く西領を奪った相手が、王が不在とはいえあっけなく駆逐できたのもその辺の理由かもしれない。

それに水棲種族やエルフだってあちこちに氏族がある以上は、他の地域にも存在する可能性はあるだろう。そう簡単に平和になつてくれるとは思えなかった。

「藪を突いて蛇を出すのもどうかと思うし、今はこのまま賞金を出す程度にするしかないね。その上で有益な情報を取りこぼさないようにするしかないと思う。その上で国力回復と同時に兵力を何時でも動かせるようにするしかないかな」

要するに現在は待ちの姿勢であり、富国強兵に努めるしか手はな

い。

常備軍なんて贅沢な事は出来ないので、極力動員は避けて少数精鋭を鍛えるしかないだろう。この点で一番役立ったのは兵員輸送車両である。重装歩兵を数名か、軽装歩兵をそれなりに輸送できる。使える加護持ちの騎士や魔術師数名と共に運用することで打撃部隊として活躍していた。

この案と共に国力回復を考えると打てる手は限られてくる。

「やっぱり街道の整備が妥当だと思うよ。一定距離に休憩所となる『駅』を敷設してキャラバンの行き来も部隊の輸送も簡便にするんだ」「そいつは判るが敵対した時に逆用されないか？」

「ルートが特定できると思おうよ」

こう言つては何だが、現時点で心配しているのは遊牧民関連だ。

戦争が起きるとしたら向うだし、交易路を縄張りにはしているのもあちらである。戦争が起きようが平和であろうが無視できない相手なのだ。前にも言ったが彼らは強さが重要なので、こちらが強ければ攻めてはこないし、友好的だからと無防備であれば攻め掛かって来てもおかしくはなかった。

ついでに予算もないので打てる手は限られているのだ。要塞都市なんか国境にある一つだけで、砦すら増やすこともままならないのだ。町に関してもそれは同様である。

「何処に居るか分からない騎兵を相手にしてたら兵が幾らあっても足りないからね。それに表立って戦闘の準備をすると返って刺激すると思うよ。少なくともこっちは対策だけあればいい」

「そうするしかないか」

街道と駅を敷設する一番のメリットは『目安』である。

荷物を載せず駿馬で移動する伝令を基準とし、キャラバンで何日掛かり行商なら何日と即座に理解できる。この時代の地図は軍事物資なので位置も曖昧であり、街道を設けることでこちらの戦力と相手の戦力がぶつかる日にちなどを逆算し易いのである。

遊牧民は移動力が高いが戦闘力は魔族ほどではない……と考えれば日程とルートを絞ることで戦い易くなるだろう。そして何より街

道や駅だと戦闘目的と思われなのが良い。

「しかし何時もすまんな」

「他に手助けできないしね。知恵なら出すのはタダだから」

お互いに直接は手を貸さないが、かゆい所に手が届く程度の立ち位置。

それがキリーと僕の関係性だと言えるだろう。僕はあくまで南領に所属する領主であり、秋都の長とはいえ基本的には水棲種族の為の街だ。この辺のアイデアを提供するくらいが関の山である。手持ちの資金も小遣い銭を除けばこの都市の為に使う物だしね。

責任もないが利益も存在しないからこそ、中央から目を付けられないという程よい間柄なのかもしれない。

● 単身赴任気味に秋都へ赴任する事もあるが、前述の通り僕の本拠は南領だ。

最初のころは双葉も麗さんとの対抗から付いてくることも多かったが、最近は面倒くささが先に立ち、一度子供を産んでからはずっと村に居残っている。

収穫祭に合わせて出戻り、新婚さん達を皆で祝った後はお祭り騒ぎというというのが定番の日程であった。

「二羽二羽！ 見て見て、かんせー！」

「……随分と巨大なの作ったね」

その日のケーキはブツシュ・ド・ノエルどころか大木であった。

どうしてロールケーキを直立させてしまうのか小一時間ほど問い糺したい。高価ではなくなったとはいえ砂糖と生クリームをふんだんに使って、この樹なんの樹バオバブの樹とかやられても困るわけだ。始末の悪いことにもっと高価な材料をぶち込んでいるのが気になる。

なんとということだろう、このロールケーキ製の大木は茶色いのだ！

「ねえ麗さん。どうして輸入と加工を始めたばかりのカカオがこんなに使ってあるのさ？」

「仕方ありませんわ。この子たちが生まれた時に作ったお菓子の家が

あるでしょう？ あれをもっと巨大な形で真似されたのです。負けてはいられませんわ！」

「そーそー！ 絶対負けたら駄目だもんね！」

麗さんはブランド主義者なので対抗意識が強い。

どうやら他所の貴族がやった祝賀会に刺激されたらしいく、双葉に丸め込まれてしまったようである。第一夫人と第二夫人の仲が良いのは助かるが、こんな馬鹿な出費をしなくても良いと思うのだ。まあ流行のドレスで金が飛ぶよりは建設的でみんなが愉しめるとでも思うしかあるまい。

既に資金は使われてしまったし、どこかで回収して領地の財政事情を元に戻すのが旦那の甲斐性と言う物であろう。

「三硯。妹さんを経由してカカオとコーヒーを意識覚醒をもたらす眠気冷ましの飲料として都に持ち込んで。確かどこかのお姫さまが魔術師になったって聞いたけど」

「正確には復興を断った橙家の息女と同じ時期に東群……いえ、もう東領ですな。そちらの子弟が何名か志されたとのことですよ」

「ああ、公子だったか。まあいいや」

以前に探しはしたが見つからなかった色々な香辛料とかお茶の類。それらがようやく手に入るようになり、移動専用的高速船を設計することで少量なら狙って手に入ることも可能になった。現時点では大量に輸入しても割りが合わないので、薬品の類として売り出す他はない。覚醒作用や興奮作用というのは研究職には重要だし、金持ちならば高価なお茶として売れるかもしれないと思ったのだ。

そうやって販路を広げておけば、ここでの出費も研究費用や宣伝と考えることも可能だろう。

『ほほほ。何時も賑やかな事よな』

「娘々。御出ででしたか」

洞府の機能は微妙に拡張し、サイズは領主館の一部から全域まで拡大した。

おかげで九天玄女さまが降臨されている時は何時でも会えるようになったし、忒の村に作っている迎賓館へも時々なら出張することも

可能である。偶に幽霊かと勘違いする失礼なメイドも出るが、そのうち完全なお姿になってそんな事も無くなるだろう。

水の巫女や火の巫女といった新メンバーも増えたが、そちらは木の巫女である青柳に教導を任せている。特に教義は押し付けてないこともあり、緩やかに信仰は増えていくだろう。

「本当に秋都の方へ分社は作らなくとも良かったのですか？」

『それでは信仰が混ざりおうてしまう。急激な成長と言う物は何に付けてもよろしくないものよ』

「娘々がそうお望みなら僕に言う事はありません」

最初は秋都に分社を作り九天玄女さまの信仰を集めようとした。

しかし僕が居ない時はちゃんとした管理ができず、また情報の歪みなどによって信仰が曲がってしまう事もあるらしい。ひとまずは南領で広まり始めた今の地盤を固めて置き、様々な資料を洞府のみに置くことで、西遊記よろしくこちらまで尋ねてもらおう方が良いのだとか。下手にやると土着の信仰や魔族の情報と混ざり合い、レジスタンスやら裏切者のダークプリンセスになりかねないので警戒しているとのことである。

そうやってある程度の理解者が増えて、情報などの解釈が固まってから改めて勧進して分社することになるだろう。

『すまぬのう。わらわが大神の格まで登ればそなたにも力をもそつと授けてやれように』

「その御言葉があれば他にはなにも。今の暮らしもひとえに娘々の御導きがあればこそですから。術の使い方など工夫次第ですし、その意味では娘々の見識を御聞かせ願える方が何倍も心強く思います」

別に追従しているわけではなく、あれから色々習った。

信仰の方も基礎的な部分が強化され、他の巫女たちを介して木火土金水の力を程ほどに得ている。物理的な領地ではなく、魔術的な領地という意味で初級魔法ならば殆ど魔力を使わないことも出来た。それらは大した効果はないのだが、冷蔵庫や暖房設備として流用することで快適な生活が望めたのである。魔王と戦いもしないのに、急いで魔法のアイテムとか作らなくてもいいしね。

異世界に転生して前世ほどではないにしろ、近代並の生活が送れているのだ。家族に恵まれたこともあって文句のつけようなどは無かった。

『そなたは謙虚よのう。わらわとしても選んだ甲斐があると言うものじゃ。そなた以上に冴えておつても迂闊さで身を亡ぼす者もおろうし、下手な事をすれば力を得ようと怪しげな経典を広めておつたかもしれぬ』

「娘々に御恩をお返しできていれば幸いにございます」

性格や性質を九天玄女さまに見定められ、この世界で僕は転生した。

これからも人生が続く限りやっていくと思うが、願わくば大過や騒乱などなくていいから地道に幸せな人生を家族と共に送りたいものである。

そして僕の物語に記す最後の言葉は、既に決めてあるのだ。どんな人生を送る事になろうとも、おとぎ話の様にこう締めくくるのだ。

めでたし、めでたし。